岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 111

西大沢古墳群
畑ノ平古墳群
虫尾遺跡
黒土中世墓
茂平古墓
茂平城

新勝央中核工業団地
建設に伴う発掘調査

1996

地域振興整備公団
岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 111

西大沢古墳群
畑ノ平古墳群
虫尾遺跡
黒土中世墓
茂平古墓
茂平城

新勝央中核工業団地
建設に伴う発掘調査

1996

地域振興整備公団
岡山県教育委員会

畑ノ平古墳群出土土器

巻頭カラー図版 2

畑ノ平 6 号墳遺物出土状況

茂平城全景（航空写真）

序

地域振興整備公団は、大都市から人口及び産業を地方へ分散し地域の開発、発展を図るため、地方において大規模な工業団地を造成し、企業を誘致することにより地域の活性化と地域住民の福祉の向上を図っております。

既存の勝央工業団地は、進出企業17社の工場群とコミュニティ施設、緑地、スポーツ公園などの施設が融合されており、雇用の安定ばかりでなく地域住民とのふれ合いの場として広く親しまれています。

新勝央中核工業団地は、既存の勝央中核工業団地と一体となって岡山県が目指す県北東部地域における内陸工業基地の中核的な工業団地として位置づけられておりこの度、勝央中核工業団地の隣接地に団地造成を建設する運びとなりました。

当地域は、茂平古墳をはじめ多くの貴重な埋蔵文化財が確認されていることから新勝央中核工業団地の造成に先立ち、これらの文化財の発掘調査を実施しました。

発掘調査は、岡山県教育委員会に委託し平成４・５年度の２年間にわたり埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。その結果、古くは縄文時代の落し穴から、数多くの古墳や戦国時代から江戸時代にかけての居館と墓地などの様々な遺跡が発掘され、多くの出土品をみました。これはこの地が古代より重要な人間活動の場であったことを雄弁に物語っています。

今回の発掘調査の成果がより多くの共有の財産となりますことと、本書が学術及び文化の振興に寄与することを期待します。

最後でありますが、発掘調査ならびに報告書の作成にあたられた岡山県教育委員会を始めとする関係各位に対し、心から感謝の意を表します。

平成８年３月

地域振興整備公団勝央開発所
所長　八　塚　利　博

序

美作地方は、県南に劣らず埋蔵文化財の分布密度が高い地域であり、畿内と山陰を結ぶ旧出雲街道沿いの市町村には、とくに古墳や歴史時代の遺跡が数多く知られています。昭和58年中国縦貫道が全線開通して以来、周辺の市町村では各種の開発事業が増え、それに伴う埋蔵文化財の発掘調査も数多く行われてきました。

勝田郡勝央町も例外ではなく、このたび、勝央中核工業団地に隣接して、あらたに新勝央中核工業団地が建設される運びとなり、岡山県教育委員会は地域振興整備公団と遺跡の取り扱いについて協議を重ねてまいりました。その結果、遺跡の多くについては記録による保存措置を講じることとなりましたが、関係各位のご尽力によって、設計変更を行い、遺跡の一部を現状保存することができました。

調査の結果、古くは縄文時代の狩猟に関係する落し穴遺構、そして古墳時代後期の群集墳や中世の塚、さらに中世末から近世初頭にかけての墓地遺跡や城跡など、多種多様な遺構・遺物が発見されています。とりわけ群集墳については一つの群すべてを発掘することとなり、横穴式石室と墓道を中心とした各古墳相互の関係はもとより、多くの出土遺物とあわせて古墳時代後期における社会構成のあり方を解明するうえでの貴重な資料を得ることができました。

このたびの発掘調査の成果が、文化財の保護・保存や研究の一助として活用され、また、地元において地域の歴史を学習する資料として大いに活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査および報告書の作成にあたり、新勝央中核工業団地建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員の先生方には数多くのご指導とご助言を賜り、また地域振興整備公団、勝央町教育委員会をはじめ関係各位からも多大なご協力をいただきました。記して厚くお礼申し上げます。

平成８年３月

岡山県教育委員会
教育長　森　崎　岩之助

例　　言

1．本報告書は新勝央中核工業団地建設に伴い、地域開発整備公団の委託を受けて岡山県教育委員会が発掘調査を行った畑ノ平古墳群・茂平城ほかの発掘調査報告書である。

2．調査を行った各遺跡の所在は主に勝田郡勝央町大字植月中に在り、一部が大字平地内にまたがっている。

3．発掘調査は岡山県古代吉備文化財センターが平成4年4月から平成6年3月まで実施した。

4．発掘調査及び報告書の作成にあたっては、新勝央中核工業団地建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を設け、下記の方々に委員を委嘱した。対策委員各位からは終始有益なご指導とご助言を頂いた。記して深く感謝の意を表す次第である。

近藤義郎	岡山大学名誉教授	土居　徹	元津山市立北小学校校長
	岡山県文化財保護審議会委員	船津昭雄	元久米町立中正小学校校長
白石　純	岡山理科大学自然科学研究所職員	宗森英之	県立津山高校教諭
角田　茂	元岡山市立岡輝中学校教諭	（五十音順、敬称略）	

5．報告書の作成は、岡山県古代吉備文化財センター職員の弘田和司が担当し、平成6年4月から7年9月にかけて行った。

6．本報告書の編集は平井勝（調査第三課課長補佐）の指導の下に弘田が行った。執筆は調査担当者である植月康雅・氏平昭則と弘田で分担執筆しており、文責は目次に記している。また、写真撮影には米戸典子、江尻英幸の協力を得た。

7．本報告書に係わる自然遺物のうちいくつかについて鑑定・同定・分析を下記の方々及び機関に依頼し、有益な教示を得るとともに、そのうちいくつかについては報文を頂いた。記して厚く御礼申し上げる次第である。

鉄滓の金属学的調査	大澤正己
須恵器の胎土分析	白石　純（岡山理科大学自然科学研究所）
赤色顔料の同定	本田光子（福岡市埋蔵文化財センター）
陶磁器類の鑑定	大橋康二（九州陶磁文化館）

8．出土遺物および図面・写真類は岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325－3）において保管している。

凡　　例

1．本報告書に用いた方位は磁北で、第２図のみ真北を指す。なお遺跡付近の磁北は西偏６度42分である。また高度はすべて海抜高である。

2．本報告書の遺構・遺物の略称および縮尺率は次の通りであるが例外については縮尺率を明記している。

建物→建　土壙→土　柱列→柱

遺構

墳丘測量・地形測量１/200、石室実測１/40、建物・土層断面１/80、土壙・土壙墓・遺物出土状況・石室床面状況１/30

遺物

土器１/３、玉・耳環１/１、鉄器１/２、石器１/１、石臼１/６

3．土器実測図のうち中軸線の左右に白抜きのあるものは、小破片のため口径推定が困難なものである。また土器断面中にドットのあるものは土師器を表している。

4．本報告書に使用した地図のうち、第２図に使用したものは国土地理院発行の１/25000地形図「津山東部」と「真加部」を縮小、複製し加筆したものである。

5．遺物番号は遺跡毎に、材質に関わりなく通し番号でつけている。第３章の古墳群については基本的に１古墳を１遺跡扱いとし各項毎に番号を付した。その際、写真図版で実測番号の頭に数字が付く場合は各古墳の番号を表す。

6．時期の表現は引用文献がある場合、基本的にそれに従っているが、第３章の古墳群のまとめではとくに断らない限り本書で行った須恵器編年（１～９期）を用いている。

目　　次

第１章　地理的・歴史的環境 …… 1
　第１節　地理的環境 …… （植月康雅） 1
　第２節　歴史的環境 …… （植月） 2
第２章　調査と報告書作成の経緯 …… 6
　第１節　調査に至る経緯 …… （氏平昭則） 6
　第２節　調査と報告書作成の体制 …… （弘田和司） 8
　第３節　調査と報告書作成の経過 …… （弘田） 10
第３章　古墳群の調査 …… （弘田） 13
　第１節　Ａ　支　群
　　(1)　西大沢１・２号墳 …… （弘田） 14
　　(2)　畑ノ平11号墳 …… （弘田） 19
　　(3)　Ａ支群のまとめ …… （弘田） 23
　第２節　Ｂ　支　群
　　(1)　畑ノ平５号墳 …… （弘田） 24
　　(2)　畑ノ平10号墳 …… （弘田） 45
　　(3)　畑ノ平７号墳 …… （弘田） 53
　　(4)　畑ノ平８号墳 …… （弘田） 70
　　(5)　畑ノ平９号墳 …… （弘田） 75
　第３節　Ｃ　支　群
　　(1)　畑ノ平１号墳 …… （弘田） 87
　　(2)　畑ノ平６号墳 …… （弘田） 107
　　(3)　畑ノ平２号墳 …… （弘田） 115
　　(4)　畑ノ平３号墳 …… （弘田） 123
　　(5)　畑ノ平４号墳 …… （植月） 130
　第４節　ま　と　め
　　(1)　古墳群の立地と群構成 …… （弘田） 134
　　(2)　須恵器について …… （弘田） 135
　　(3)　古墳群の変遷と年代 …… （弘田） 139
　　(4)　副葬品からみた被葬者の性格 …… （弘田） 145
　　(5)　お わ り に …… （弘田） 148
付　載
　付載１　畑ノ平古墳群出土鉄滓の金属学的調査 …… （大澤正己） 152
　付載２　畑ノ平古墳群出土須恵器の胎土分析 …… （白石　純） 159

第4章　虫尾遺跡
第1節　第1地点
(1)　調査の概要 …… (弘田) 164
(2)　建物・土壙 …… (弘田) 165
(3)　出土遺物 …… (弘田) 168
第2節　第2地点
(1)　調査の概要 …… (弘田) 172
(2)　土　　壙 …… (弘田) 173
(3)　柱穴・表土中の遺物 …… (弘田) 177
第3節　まとめ …… (弘田) 178
第5章　黒土中世墓
(1)　調査の概要 …… (弘田) 181
(2)　土塁と土盛 …… (弘田) 182
(3)　土　　壙 …… (弘田) 185
(4)　まとめ …… (弘田) 198
第6章　茂平古墓 …… (氏平) 201
第7章　茂平城
第1節　調査の概要 …… (氏平) 205
第2節　郭　　1 …… (氏平) 207
(1)　建　　物 …… (氏平) 208
(2)　貯蔵穴 …… (氏平) 216
(3)　墓　　壙 …… (氏平) 226
(4)　その他の土壙 …… (氏平) 230
第3節　郭　　2
(1)　建　　物 …… (氏平) 234
(2)　土　　壙 …… (氏平) 235
第4節　郭　　3
(1)　建　　物 …… (氏平) 237
(2)　土　　壙 …… (氏平) 240
第5節　郭4～6ほか
(1)　郭4・6 …… (氏平) 248
(2)　郭　　5 …… (氏平) 248
(3)　表土中の遺物他 …… (氏平) 249
第6節　まとめ …… (氏平) 250

図　目　次

第１図　遺跡位置図（Ｓ＝1：200,000）…… 1
第２図　周辺遺跡分布図（Ｓ＝1：30,000）…… 3
第３図　勝央中核工業団地内遺跡分布図（Ｓ＝1:7,000）…… 5
第４図　新勝央中核工業団地計画図（Ｓ＝1:6,000）…… 7
第５図　調査地位置（Ｓ＝1：60,000）…… 12
第６図　古墳群位置（Ｓ＝1：2,000）…… 13
第７図　調査前地形測量（Ｓ＝1：250）…… 14
第８図　墳丘測量（Ｓ＝1：250）…… 15
第９図　周堀遺物出土状況 …… 15
第10図　墳丘土層断面 …… 16
第11図　石室実測（Ｓ＝1：30）…… 17
第12図　遺物実測（２はS=1：6）…… 18
第13図　調査前地形測量 …… 19
第14図　墳丘測量 …… 19
第15図　墳丘土層断面 …… 20
第16図　周堀遺物出土状況 …… 20
第17図　石室実測（Ｓ＝1：30）…… 21
第18図　遺物実測（１）…… 22
第19図　遺物実測（２）…… 23
第20図　調査前地形測量 …… 24
第21図　墳丘測量 …… 25
第22図　墳丘土層断面 …… 26
第23図　石室実測（Ｓ＝1：50）…… 27
第24図　床面土層断面（Ｓ＝1：30）…… 28
第25図　床面上層遺物出土状況 …… 29
第26図　床面中層遺物出土状況 …… 30
第27図　床面下層遺物出土状況 …… 31
第28図　遺物実測（１）…… 32
第29図　遺物実測（２）…… 33
第30図　遺物実測（３）…… 34
第31図　遺物実測（４）…… 35
第32図　遺物実測（５）…… 36
第33図　遺物実測（６）…… 37
第34図　遺物実測（７）…… 38
第35図　遺物実測（８）…… 39
第36図　遺物実測（９）…… 41
第37図　遺物実測（10）（S=1：4.刀）…… 42
第38図　遺物実測（11）…… 43
第39図　周辺土壙（Ｓ＝1：40）…… 44
第40図　周辺出土石鏃 …… 44
第41図　調査前地形測量 …… 45
第42図　墳丘測量 …… 45
第43図　墳丘土層断面 …… 46
第44図　石室実測（Ｓ＝1：40）…… 47
第45図　床面遺物出土状況 …… 48
第46図　遺物実測（１）…… 49
第47図　遺物実測（２）…… 50
第48図　遺物実測（３）…… 51
第49図　遺物実測（４）…… 52
第50図　調査前地形測量 …… 53
第51図　墳丘測量 …… 54
第52図　墳丘土層断面 …… 55
第53図　石室実測（Ｓ＝1：40）…… 56
第54図　床面遺物出土状況 …… 57
第55図　陶棺下・周辺遺物出土状況 …… 58
第56図　前庭部遺物出土状況 …… 58
第57図　陶棺・棺内遺物出土状況 …… 59
第58図　陶棺実測（Ｓ＝1：20）…… 60
第59図　遺物実測（１）…… 62
第60図　遺物実測（２）…… 63
第61図　遺物実測（３）…… 64
第62図　遺物実測（４）（Ｓ＝1：6.甕）…… 65
第63図　遺物実測（５）…… 66
第64図　遺物実測（６）…… 67
第65図　遺物実測（７）…… 67
第66図　遺物実測（８）…… 68
第67図　周辺土壙墓・遺物実測 …… 69
第68図　調査前地形測量 …… 70
第69図　墳丘測量 …… 70
第70図　墳丘土層断面 …… 71
第71図　石室実測 …… 72
第72図　床面遺物出土状況 …… 73
第73図　遺物実測（１）…… 74
第74図　調査前地形測量 …… 75
第75図　墳丘測量 …… 75
第76図　外護列石（Ｓ＝1：40）…… 75
第77図　墳丘土層断面 …… 76
第78図　石室実測（Ｓ＝1：40）…… 77
第79図　床面遺物出土状況 …… 78
第80図　床面下層遺物出土状況 …… 79
第81図　遺物実測（１）…… 81
第82図　遺物実測（２）…… 82
第83図　遺物実測（３）…… 83
第84図　遺物実測（４）…… 84

第85図　遺物実測（5）…… 84
第86図　埋葬位置復元（S＝1：30）…… 86
第87図　調査前地形測量 …… 87
第88図　墳丘測量 …… 88
第89図　墳丘土層断面 …… 89
第90図　石室内土層断面 …… 89
第91図　石室実測（S＝1：50）…… 90
第92図　床面土器出土状況 …… 92
第93図　床面鉄器出土状況 …… 93
第94図　遺物実測（1）…… 95
第95図　遺物実測（2）…… 96
第96図　遺物実測（3）…… 97
第97図　遺物実測（4）…… 98
第98図　遺物実測（5）…… 99
第99図　遺物実測（6）（S＝1：6.刀）…… 100
第100図　遺物実測（7）…… 102
第101図　遺物実測（8）…… 102
第102図　土 壙 1 …… 103
第103図　土 壙 2 …… 103
第104図　土壙3・出土遺物 …… 103
第105図　周辺遺物 …… 103
第106図　土 壙 4 …… 104
第107図　土 壙 5 …… 105
第108図　土 壙 6 …… 105
第109図　石室埋土内遺物（1）…… 105
第110図　石室埋土内遺物（2）…… 106
第111図　C 2 支群調査前地形測量 …… 107
（S＝1：400）
第112図　墳丘測量 …… 107
第113図　石室実測・墳丘土層断面 …… 108
第114図　床面遺物出土状況 …… 110
第115図　遺物実測（1）…… 111
第116図　遺物実測（2）（S＝1：6）…… 112
第117図　遺物実測（3）（S＝1：4）…… 113
第118図　遺物実測（4）…… 114
第119図　墳丘測量 …… 115
第120図　墳丘土層断面 …… 116
第121図　墳丘外護列石（S＝1：40）…… 117
第122図　石室実測・床面遺物出土状況 …… 118
（S＝1：40）
第123図　陶棺実測（S＝1：15）…… 119
第124図　遺物実測（1）…… 120
第125図　遺物実測（2）…… 121
第126図　遺物実測（3）…… 122
第127図　墳丘測量 …… 123
第128図　石室実測（S＝1：40）…… 124
第129図　墳丘土層断面 …… 125
第130図　床面遺物出土状況 …… 126
第131図　遺物実測（1）…… 127
第132図　遺物実測（2）（S＝1：6）…… 128
第133図　遺物実測（3）…… 129
第134図　墳丘測量 …… 130
第135図　墳丘土層断面 …… 130
第136図　石室実測（S＝1：30）…… 131
第137図　床面遺物出土状況 …… 132
第138図　遺物実測 …… 132
第139図　墓道復元図 …… 135
第140図　蓋杯分類（S＝1：8）…… 136
第141図　須恵器蓋杯径口指数 …… 137～138
第142図　平瓶に付いた杯 …… 139
第143図　須恵器編年案 …… 140～141
第144図　岡山県下副葬土師器煮沸具 …… 147
第145図　虫尾遺跡調査範囲（S＝1：4,000）…… 164
第146図　虫尾遺跡第1地点遺構配置
（S＝1：200）…… 165
第147図　建物1実測（S＝1：40）…… 166
第148図　土 壙 1 …… 166
第149図　土壙1遺物実測（S＝1：6.石臼）…… 167
第150図　土壙2・遺物実測 …… 167
第151図　包含層遺物（1）…… 169
第152図　包含層遺物（2）…… 170
第153図　包含層遺物（3）…… 171
第154図　虫尾遺跡第2地点遺構配置 …… 172
（S＝1：200）
第155図　土壙3・出土遺物 …… 173
第156図　土 壙 4 …… 173
第157図　土壙4遺物 …… 173
第158図　土壙5・遺物 …… 174
第159図　土 壙 6 …… 174
第160図　土 壙 7 …… 174
第161図　土 壙 8 …… 175
第162図　土 壙 9 …… 175
第163図　土 壙 10 …… 175
第164図　土 壙 11 …… 175
第165図　土 壙 12 …… 175
第166図　土 壙 13 …… 175
第167図　土 壙 14 …… 176
第168図　土 壙 15 …… 176
第169図　土 壙 16 …… 176
第170図　土 壙 17 …… 176

第171図　土 壙 18 …… 176
第172図　土 壙 19 …… 176
第173図　土 壙 20 …… 177
第174図　土 壙 21 …… 177
第175図　土 壙 22 …… 177
第176図　土 壙 23 …… 178
第177図　土 壙 24 …… 178
第178図　土 壙 25 …… 179
第179図　柱穴遺物 …… 179
第180図　包含層遺物 …… 179
第181図　調査前地形測量（S＝1：150) …… 181
第182図　遺構配置（S＝1：150) …… 182
第183図　土層断面 …… 183
第184図　土盛1石材出土状況（S＝1：40) …… 183
第185図　土盛2土層断面 …… 183
第186図　宝筐印塔実測 …… 184
第187図　土盛1五輪塔 …… 185
第188図　土 壙 1 …… 185
第189図　土壙1土器 …… 186
第190図　出 土 釘 …… 186
第191図　土壙1出土銭（S＝2/3） …… 187
第192図　土 壙 2 …… 188
第193図　土壙3・遺物 …… 188
第194図　土 壙 4 …… 188
第195図　土 壙 5 …… 188
第196図　土 壙 6 …… 189
第197図　土 壙 7 …… 189
第198図　土 壙 8 …… 189
第199図　土 壙 9 …… 189
第200図　土 壙 10 …… 189
第201図　土 壙 11 …… 189
第202図　土 壙 12 …… 189
第203図　集 石 1 …… 189
第204図　集 石 2 …… 189
第205図　土壙13・遺物 …… 190
第206図　土 壙 14 …… 191
第207図　土 壙 15 …… 191
第208図　土 壙 16 …… 191
第209図　土 壙 17 …… 191
第210図　土壙18・遺物 …… 192
第211図　土壙19・遺物 …… 192
第212図　土 壙 20 …… 192
第213図　土 壙 21 …… 192
第214図　土壙22・遺物 …… 193
第215図　土 壙 23 …… 193
第216図　土壙23出土銭（S＝2/3） …… 193
第217図　土 壙 24 …… 194
第218図　土 壙 25 …… 194
第219図　土 壙 26 …… 194
第220図　土 壙 27 …… 194
第221図　土 壙 28 …… 194
第222図　土 壙 29 …… 194
第223図　土 壙 30 …… 195
第224図　土 壙 31 …… 195
第225図　土 壙 32 …… 195
第226図　土 壙 33 …… 195
第227図　土 壙 34 …… 196
第228図　土 壙 35 …… 196
第229図　土 壙 36 …… 196
第230図　土壙37・38 …… 196
第231図　土 壙 39 …… 196
第232図　包含層出土土器 …… 197
第233図　包含層出土鉄器 …… 197
第234図　包含層出土銭（S＝2/3） …… 198
第235図　調査前地形測量 …… 201
第236図　墳丘地形測量 …… 201
第237図　墳丘土層断面 …… 202
第238図　墳頂部土壙実測 …… 203
第239図　遺物実測（S＝1：6.甕） …… 204
第240図　茂平城全体図（S＝1：500) …… 206
第241図　郭1遺構配置（S＝1：200) …… 207
第242図　建 物 1 …… 208
第243図　建 物 2 …… 208
第244図　建 物 3 …… 209
第245図　建 物 4 …… 210
第246図　建 物 5 …… 210
第247図　建 物 6 …… 211
第248図　建 物 7 …… 211
第249図　建 物 8 …… 212
第250図　建 物 9 …… 213
第251図　建 物 10 …… 214
第252図　建物10柱穴内石臼・石臼名称 …… 215
第253図　柱列1・柱穴・表土遺物 …… 215
第254図　土 壙 1 …… 216
第255図　土壙1遺物 …… 217
第256図　土 壙 2 …… 217
第257図　土 壙 3 …… 218
第258図　土壙3遺物（1） …… 219
第259図　土壙3遺物（2） …… 220

第260図　土壙４・５ …… 221
第261図　土壙４遺物 …… 222
第262図　土壙５遺物 …… 222
第263図　土 壙 6 …… 223
第264図　土壙６遺物 …… 224
第265図　土壙7・遺物 …… 225
第266図　土 壙 8 …… 226
第267図　土 壙 9 …… 227
第268図　土壙10・遺物 …… 228
第269図　土壙11・12 …… 229
第270図　土 壙 13 …… 229
第271図　土壙14・遺物 …… 229
第272図　土壙15・遺物 …… 230
第273図　土壙16・遺物 …… 231
第274図　土壙17・遺物 …… 231
第275図　土壙18・遺物 …… 232
第276図　土壙19・遺物 …… 232
第277図　土壙20・遺物 …… 232
第278図　土壙21・遺物 …… 233
第279図　土 壙 22 …… 233
第280図　郭２遺構配置（Ｓ＝1:200) …… 234
第281図　建 物 11 …… 234
第282図　土 壙 23 …… 235
第283図　土 壙 24 …… 235
第284図　土 壙 25 …… 236
第285図　土壙26・遺物 …… 236
第286図　郭３遺構配置（Ｓ＝1:200) …… 237
第287図　建 物 12 …… 238
第288図　建 物 13 …… 239
第289図　柱穴出土遺物 …… 239
第290図　柱穴列２ …… 239
第291図　柱穴列３ …… 239
第292図　土壙27・遺物 …… 240
第293図　土 壙 28 …… 241
第294図　土壙28遺物 …… 242
第295図　土 壙 29 …… 242
第296図　土 壙 30 …… 242
第297図　土壙31・遺物 …… 243
第298図　土壙32・33 …… 244
第299図　土壙34・遺物 …… 245
第300図　土壙35・石臼 …… 246
第301図　土壙36・遺物 …… 246
第302図　土壙37・遺物 …… 247
第303図　土 壙 38 …… 247
第304図　土 壙 39 …… 247
第305図　土 壙 40 …… 247
第306図　土 壙 41 …… 247
第307図　土 壙 42 …… 247
第308図　郭４遺構配置（S＝1:200)・遺物 …… 248
第309図　郭６表採石臼 …… 248
第310図　表土中他の鉄器 …… 249
第311図　郭２・３間古道出土石臼 …… 249

表　目　次

表 1　周辺遺跡 …… 4
表 2　工業団地内遺跡 …… 5
表 3　新勝央中核工業団地調査一覧 …… 11
表 4　西大沢古墳群土器観察表 …… 18
表 5　畑ノ平11号墳土器観察表 …… 23
表 6　畑ノ平 5 号墳土器観察表 …… 40
表 7　畑ノ平10号墳土器観察表 …… 50
表 8　畑ノ平 7 号墳土器観察表 …… 64
表 9　畑ノ平 7 号墳耳環観察表 …… 67
表10　畑ノ平 7 号墳玉類観察表 …… 68
表11　畑ノ平 8 号墳土器観察表 …… 74
表12　畑ノ平 9 号墳土器観察表 …… 85
表13　畑ノ平 1 号墳土器観察表 …… 99
表14　畑ノ平 1 号墳耳環観察表 …… 102
表15　畑ノ平 6 号墳土器観察表 …… 112
表16　畑ノ平 6 号墳玉類観察表 …… 114
表17　畑ノ平 2 号墳土器観察表 …… 122
表18　畑ノ平 3 号墳土器観察表 …… 129
表19　畑ノ平 4 号墳土器観察表 …… 132
表20　調査古墳一覧 …… 134
表21　岡山県北部主要古墳一覧 …… 144
表22　岡山県古墳玄室指数 …… 145
表23　黒土中世墓土壙 1 土器観察表 …… 186
表24　黒土中世墓土壙13土器観察表 …… 190
表25　黒土中世墓土壙19土器観察表 …… 192
表26　黒土中世墓表土層土器観察表 …… 197
表27　黒土中世墓銭貨一覧表 …… 199
表28　茂平古墓土器観察表 …… 204
表29　茂平城郭 1 表土・柱穴土器観察表 …… 215
表30　茂平城郭 1 土壙 1 土器観察表 …… 217
表31　茂平城郭 1 土壙 3 土器観察表 …… 219
表32　茂平城郭 1 土壙 4 土器観察表 …… 222
表33　茂平城郭 1 土壙 5 土器観察表 …… 222
表34　茂平城郭 1 土壙 6 土器観察表 …… 224
表35　茂平城郭 1 土壙 7 土器観察表 …… 225
表36　茂平城郭 1 土壙10土器観察表 …… 228
表37　茂平城郭 1 土壙14土器観察表 …… 229
表38　茂平城郭 1 土壙15土器観察表 …… 230
表39　茂平城郭 1 土壙18土器観察表 …… 232
表40　茂平城郭 1 土壙19土器観察表 …… 232
表41　茂平城郭 1 土壙20土器観察表 …… 232
表42　茂平城郭 1 土壙21土器観察表 …… 233
表43　茂平城郭 3 柱穴土器観察表 …… 239
表44　茂平城郭 3 土壙27土器観察表 …… 240
表45　茂平城郭 3 土壙28土器観察表 …… 242
表46　茂平城郭 3 土壙31土器観察表 …… 243
表47　茂平城郭 3 土壙34土器観察表 …… 245
表48　茂平城郭 3 土壙36土器観察表 …… 246
表49　茂平城郭 3 土壙37土器観察表 …… 247
表50　茂平城郭 4 表土中土器観察表 …… 248
表51　茂平城石臼観察表 …… 249

図 版 目 次

図版１　１.西大沢古墳群調査前（北東から）
２.西大沢古墳群全景（南西から）
３.西大沢２号墳石室（北から）
図版２　１.畑ノ平11号墳調査前（西から）
２.畑ノ平11号墳全景（南から）
３.畑ノ平11号墳石室（北から）
４.周堀遺物出土状況（西から）
図版３　１.畑ノ平５号墳調査前（南から）
２.畑ノ平５号墳石室（北西から）
３.畑ノ平５号墳遺物出土状況（南から）
図版４　４.畑ノ平５号墳棺台（北から）
５.畑ノ平５号墳墳丘（西から）
６.畑ノ平５号墳周辺土壙（南から）
図版５　１.畑ノ平10号墳墳丘（西から）
２.畑ノ平10号墳奥壁付近（西から）
３.畑ノ平10号墳石室（西から）
図版６　１.畑ノ平７号墳墳丘（南から）
２.畑ノ平７号墳陶棺（南から）
３.畑ノ平７号墳陶棺内遺物出土状況（南から）
４.畑ノ平７号墳陶棺内遺物出土状況（北から）
図版７　１.畑ノ平７号墳遺物出土状況（南から）
２.畑ノ平７号墳遺物出土状況（北から）
３.土壙墓（西から）
図版８　１.畑ノ平８号墳調査前（北西から）
２.畑ノ平８号墳墳丘（東から）
３.畑ノ平８号墳石室（南から）
図版９　１.畑ノ平９号墳墳丘（南から）
２.畑ノ平９号墳奥壁遺物出土状況
３.畑ノ平９号墳遺物出土状況
図版10　１.畑ノ平１号墳遺物出土状況（北から）
２.畑ノ平１号墳墳丘（東から）
図版11　１.畑ノ平６号墳墳丘（南から）
２.畑ノ平６号墳遺物出土状況（東から）
３.畑ノ平６号墳石室（南から）
図版12　１.畑ノ平２号墳調査前（南から）
２.畑ノ平２号墳墳丘（南から）
３.畑ノ平２号墳外護列石（西から）
４.畑ノ平２号墳外護列石（東から）
図版13　１.Ｃ支群航空写真
２.畑ノ平３号墳墳丘（南から）
３.畑ノ平３号墳遺物出土状況（南から）
図版14　１.畑ノ平４号墳墳丘（南から）
２.畑ノ平４号墳石室（南から）
３.畑ノ平４号墳遺物出土状況（南から）
図版15　１.西大沢古墳群出土土器
２.畑ノ平11号墳出土土器
図版16　１.畑ノ平11号墳出土土器
２.土壙墓出土土器
図版17　１.畑ノ平５号墳出土土器
図版18　１.畑ノ平５号墳出土土器
図版19　１.畑ノ平５号墳出土土器
図版20　１.畑ノ平５号墳出土土器
図版21　１.畑ノ平５号墳出土土器
図版22　１.畑ノ平10号墳出土土器
図版23　１.畑ノ平７号墳出土土器
図版24　１.畑ノ平７号墳出土土器
図版25　１.畑ノ平８号墳出土土器
図版26　１.畑ノ平９号墳出土土器
図版27　１.畑ノ平９号墳出土土器
図版28　１.畑ノ平１号墳出土土器
図版29　１.畑ノ平１号墳出土土器
図版30　１.畑ノ平６号墳出土土器
図版31　１.畑ノ平６号墳出土土器
図版32　１.畑ノ平２号墳出土土器
図版33　１.畑ノ平３号墳出土土器
図版34　１.畑ノ平３号墳出土土器
２.畑ノ平４号墳出土土器
図版35　１.畑ノ平７号墳陶棺
２.畑ノ平２号墳陶棺
図版36　１.須恵器蓋杯細部
図版37　１.畑ノ平５号墳出土鉄鏃・刀
図版38　１.畑ノ平５号墳出土釘
２.畑ノ平５号墳出土刀柄
３.畑ノ平５号墳出土鎌
４.畑ノ平５号墳出土耳環
５.畑ノ平５号墳出土刀子
図版39　１.畑ノ平５号墳出土馬具

2.畑ノ平10号墳出土鉄器
図版40　1.畑ノ平1号墳出土鉄鏃・刀
図版41　1.畑ノ平1号墳出土刀子
2.畑ノ平1号墳出土耳環
3.畑ノ平7号墳出土鉄滓
図版42　1.畑ノ平7号墳出土刀・鉋・鉄鏃
2.畑ノ平7号墳出土耳環
3.畑ノ平7号墳出土玉
図版43　1.畑ノ平9号墳出土釘
2.畑ノ平9号墳出土耳環
3.畑ノ平10号墳出土耳環
4.畑ノ平6号墳出土鉋・耳環
5.畑ノ平8号墳出土耳環
6.畑ノ平2号墳出土耳環
7.畑ノ平6号墳出土玉
8.畑ノ平3号墳出土鉄器
図版44　1.虫尾遺跡第1地点全景（南から）
1.虫尾遺跡第2地点遠景（南から）
図版45　1.虫尾遺跡第1地点土壙1・2（西から）
2.虫尾遺跡第1地点建物1（西から）
3.虫尾遺跡第2地点土壙20（南から）
図版46　1.虫尾遺跡第1地点出土遺物
2.虫尾遺跡第1地点土壙1遺物
3.虫尾遺跡第1地点出土土師器
・黒色土器（外・内面）
図版47　1.虫尾遺跡第1地点出土遺物
2.虫尾遺跡第2地点出土遺物
図版48　1.茂平古墓列石（東から）
2.茂平古墓墳丘（東から）
図版49　1.茂平古墓出土土器外・内面
2.茂平古墓出土備前焼甕
図版50　1.黒土中世墓土塁（南から）
2.黒土中世墓土壙群全景（南から）
図版51　1.黒土中世墓土盛1
2.黒土中世墓土壙22
3.黒土中世墓土壙31
図版52　1.黒土中世墓出土土器
2.黒土中世墓出土宝筐印塔
図版53　1.黒土中世墓出土銭貨
2.黒土中世墓出土鉄器
図版54　1.茂平城遠景（南西から）
2.郭1建物6・10（西から）
図版55　1.郭1建物5・7・9（東から）
2.郭1土壙4・5・6（北から）
図版56　1.郭2全景（西から）
2.郭3中心部分（北から）
図版57　1.茂平城出土備前焼鉢外面
2.茂平城出土備前焼鉢内面
図版58　1.茂平城出土石臼
2.茂平城出土鉄器
図版59　1.茂平城出土陶磁器類

第１章　地理的・歴史的環境

第１節　地 理 的 環 境

今回の調査地は岡山県勝田郡勝央町植月中・平地内に所在し、岡山県の北東部、津山盆地の東端に位置する。

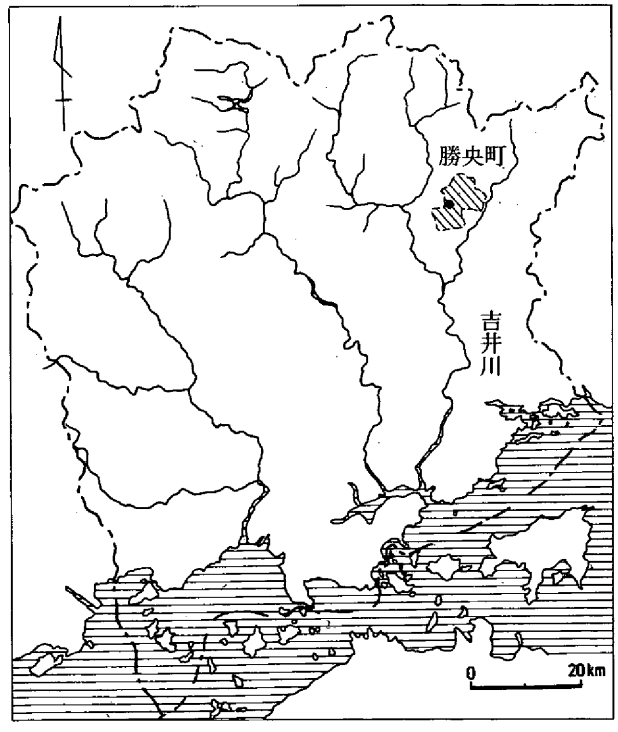
町の北方には、安山岩類による滝山、那岐山などの標高1200ｍ級の高峰が連なる中国山地がそびえる。町の北部にはその山麓の平坦な日本原台地南端に位置し、標高150～200ｍ程度の高根丘陵、鳥羽野台地、植月台地が広がる。それらの台地や丘陵の表面には日本原礫層が堆積し、その上部をローム層や黒ボク層が覆う。

また、町中央部には間山山系が突出し、南には七十連山があり、美作町との境界を成している。

さらに、町の中央部には南北に吉井川水系の吉野川の支流であり滝山に水源を有する滝川が流れる。この滝川は沖積層の低位部である北部の石生・植月・田井の低地と南部の勝間田盆地を貫流して美作町で梶並川に合流している。この梶並川の流域には豊国低地が広がり、その東岸には楢原の段丘がある。また、勝央町に隣接する勝北町には同じく吉井川の支流である広戸川が流れ、その流域には勝北低地が国道53号線の北まで広がる。このように、勝央町を中心とした旧勝田郡に相当する地域には吉井川水系の支流が作り出す低地部が広がり、生活するうえでの好条件を備えている。

新勝央中核工業団地の予定地である大沢丘陵は、第３紀層の起伏の少ないなだらかな丘陵で日本原台地の浸食の進んだ地域と考えられる。その丘陵は勝間田低地の北西の滝川の西岸にあり、その丘陵の南東部にはこの地域では珍しい玄武岩の隆起による牛岩山(200ｍ)がある。その南半は1970年代後半の勝央中核工業団地の造成により、大きく地形が改変されている。

また、大沢丘陵の東には石生・田井低地と勝間田低地を繋ぐ形で長良・平の谷が入り込み、その谷に面した丘陵部に虫尾遺跡が確認された。



第１図　遺跡位置図（S=1：200,000）

〈参考文献〉

・岡山県編『土地分類基本調査　津山東部　国土調査』1980年
・勝央町編『勝央町誌』1984年

第2節　歴史的環境

勝央町では古くから人々の生活が営まれ、各時代の多くの遺跡が町内各所に存在しているものの、これまで充分な調査が行われておらず遺跡の実体が明らかなものは少ない。

勝央町内で最も古い遺跡・遺物としては、縄文時代早期の遺物が金鶏塚遺跡で採集されたと言われるが出土遺物は不明である。その後、同所に近い塚原古墳付近で押型文土器１片が採集されている他には小中遺跡（表１－14）から晩期の石鏃１点が採集されたのみである。美作地域では鏡野町の竹田遺跡、津山市の大田西奥田遺跡を始めとしてこれまで津山市以西で縄文時代の遺跡が確認されている。

弥生時代の遺跡は、美作地域では、作東町の高本遺跡、津山市の西吉田遺跡、押入西遺跡など中期以降の遺跡が主であり、勝央町内でも同様に丘陵部及びその縁辺部に中期以降の多くの遺跡が広がっている。特に小中遺跡では、住居址30軒以上と建物20棟あまりが確認され、弥平治遺跡（３）でも住居址が数軒確認された。これらは同地域一帯の生活を推測する上での好資料となっている。また植月念仏塚遺跡（５）からは高さ30cmの袈裟襷文銅鐸が出土している。

古墳時代の前期には、この地域の多くの首長墓が前方後方墳の形態をとるといった特徴がある。北部の石生・植月・田井の低地を望む丘陵には全長91.5ｍの植月寺山古墳（４）を始めとして、美野高塚古墳（58ｍ）（８）、美野中塚古墳（52.5ｍ）、田井高塚古墳（41.5ｍ）（９）の４基の前方後方墳がある。南部の勝間田盆地を望む丘陵にも前方後方墳の岡高塚古墳（50.5ｍ）（10）を中心に前方後円墳の岡琴平山古墳（48ｍ）、岡殿塚古墳（48ｍ）がある。さらに間山の東方の豊国原低地を望む美作町楢原には楢原寺山古墳（46ｍ）があり、中小首長墳の系譜が当地域（美作地域東部）の盆地単位でおえるのである。ただ、中期以降には首長墳の系譜は途絶えるようであり、わずかに箱式石棺を主体とする落山古墳（17）の存在が知られるのみである。これが後期に入ると、勝間田盆地南の谷沿いに七十古墳群を中心とした横穴式石室を埋葬施設とする多くの群集墳が展開する。これらはそれ以前の首長墓の墓域とは異なる所に位置しており、中小首長層の没落と相まって、鉄・窯業などに裏付けられた有力家父長層の台頭が窺えるのである。勝間田盆地北部丘陵上に位置する前方後円墳を含む４基からなるよつみ山古墳群も露出している石材から横穴式石室の可能性がある。また、横穴式石室導入以前の古墳群についても鳥羽野台地の狐塚古墳群（６）、小中古墳群（15）や前方後円墳を含む美作町の大年古墳群（16）などが発掘によって明らかとなっている。ただし、集落については勝央中核工業団地の発掘においてカマドをもつ住居が調査されたのみで不明な点が多い。

古代の遺跡としては、平遺跡（12）と勝間田遺跡がある。これらの遺跡からは「郡」字の押印土器、「勝」のヘラ書き土器、墨書土器、各種の硯や平城宮6333形式の瓦が出土すると供に磁北に方位を統一した建物が検出され、勝田郡衙ではないかと考えられている。また、小中遺跡では平安時代の古道も発見されており、この地が勝田郡の政治の中心、交通の要衝であったことを物語っている。

また、瓦経が間山の高福寺の近くの谷間より出土している。これは、伯耆の大日寺の瓦経に酷似していることから、11世紀後半のものと考えられる。

さらに中世以降の遺跡も町内に多く存在している。備前焼や亀山焼に並ぶ勝間田焼の窯跡も多く存在しており、古代末から中世にかけての窯業生産地としての同地の活気溢れる姿を物語っている。特に発掘調査が行われたものとして進上谷窯跡（18）や戸岩窯跡（７）がある。また室町から戦国時代

第２図　周辺遺跡分布図（1：30,000）

表１　周辺遺跡

NO	遺跡名	性格	時期	NO	遺跡名	性格	時期
1	新勝央中核工業団内遺跡群	古墳ほか		11	勝央中学校内古墳群	横穴式石室墳ほか２基	古墳時代後期
2	勝央中核工業団地内遺跡群	古墳ほか		12	平遺跡	郡衙？	奈良～平安
3	弥平地遺跡	集落	弥生時代中期	13	よつみだわ古墳群	前方後円墳ほか３基	古墳時代後期
4	植月寺山古墳	前方後方墳	古墳時代前期	14	小中遺跡	集落	弥生時代
5	念仏塚遺跡	散布地・銅鐸出土	弥生～古墳	15	小中古墳群	円墳７基	古墳時代後期
6	狐塚古墳群	円墳７基　粘土床	古墳時代後期	16	大年古墳群	前方後円墳他３基	古墳時代後期
7	戸岩古墳・窯	横穴式石室・勝間田焼窯	古墳～平安	17	落山古墳	箱式棺	古墳時代中
8	美野高塚古墳	前方後方墳	古墳時代前期	18	進上谷窯	勝間田焼窯	鎌倉時代
9	田井高塚古墳	前方後方墳		19	七十古墳群ほか	横穴式石室墳	古墳時代後期
10	岡高塚古墳	前方後方墳	古墳時代前期				

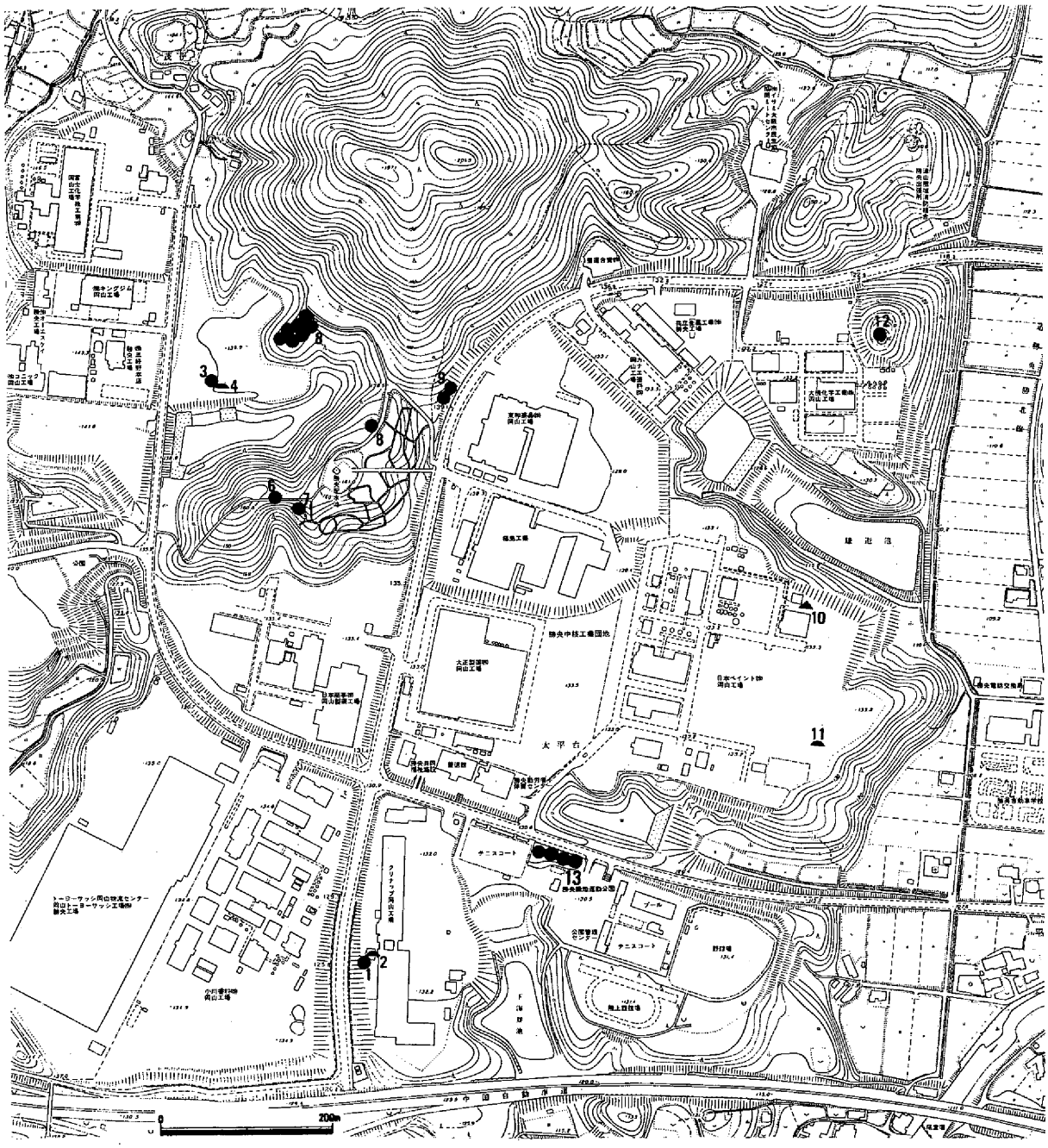
の城や構の跡と言われる遺跡も町内各所に点在している。

江戸時代以降も、勝間田は出雲街道の宿場町として発展し、現在の町並みにも当時の面影を残すものがある。

なお、先の工業団地の発掘においても弥生時代中期から古墳時代後期までの竪穴住居、全長28ｍの愛宕山古墳や古墳時代後期の円墳や炭窯、鉄滓包含層が確認・調査され、そのうちのいくつかは現状で保存されている。

《参考文献》

・土居徹「竹田遺跡」『岡山県史』考古資料　1986
・岡本寛久「縄文時代早期の竪穴住居の発掘－津山市太田遺跡－」『所報吉備』15号　1993
・勝央町編『勝央町誌』　1984
・栗野克己，高畑知功「小中遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』４　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告７　1975
・井上弘他「平遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』５　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告８　1975
・行田裕美『西吉田遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告書17　1985
・河本清他「押入西遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』１　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告３　1974
・中野雅美『弥平治・能部遺跡』1983
・近藤義郎「美作の国植月の銅鐸」『吉備考古』第83号　1951
・光永真一「植月寺山古墳」『岡山県史』考古資料　1986
・葛原克人「第５章　古墳時代前期」『岡山県の考古学』　1987
・山磨康平他『勝央中核工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』　1976
・今井堯,鷲田重郎「美作勝央町狐塚第２号墳発掘調査報告」『古代吉備』第1集　1985
・今井堯「美作の前方後方墳四題」『古代吉備』第９集　1987
・今井堯,渡辺健治「美作勝央町琴平山古墳」『古代吉備』第５集　1976
・安川豊史「古墳時代における美作の特質－群小墳の動向と評価－」『吉備の考古学的研究』（下）　1992
・岡田博「落山古墳」『岡山県埋蔵文化財報告』13　1983
・近藤義郎編『前方後円墳集成』中国・四国編　1991
・田仲満雄,井上弘「平遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』５　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告８　1974
・井上弘「勝間田遺跡緊急発掘調査概要」『岡山県埋蔵文化財報告』４　1974
・安川豊史『美作国府』津山市埋蔵文化財発掘調査報告書50　1994
・橋本惣司「宮尾遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告５　1974
・岡田博「宮尾遺跡の緊急調査」『岡山県埋蔵文化財報告』５　1975
・石田茂作『仏教考古学論攷』経典編　1977
・岡田博「戸岩窯跡・古墳群」『岡山県埋蔵文化財報告』14　1984
・伊藤晃「窯業」『岡山県の考古学』　1987



第３図　勝央中核工業団地内遺跡分布図（S＝1：7,500）

表２　工業団地内遺跡

NO	調査区	遺構名		時期	備考	NO	調査区	遺構名		時期	備考
1	第１調査区	NO３古墳	横穴式石室	古墳時代後期				NO11-６古墳			保存
2	第１調査区		竪穴住居	弥生時代中期				NO11-７古墳			茂平２号墳　保存
3	第２調査区	NO10古墳	横穴式石室	古墳時代後期	茂平１号墳	9	第４調査区	NO12-１古墳	横穴式石室	古墳時代後期	
4	第２調査区		竪穴住居	古墳時代後期				NO12-２古墳	横穴式石室	古墳時代後期	
5		NO６古墳	横穴式石室		保存	10	第６調査区		炭窯		
6		NO７古墳	横穴式石室		保存	11	第７調査区		竪穴住居	古墳時代前期	
7		NO８古墳	横穴式石室		保存	12		NO13古墳	前方後円墳		保存
8		NO11-１古墳			保存	13		NO４古墳			保存
		NO12-２古墳			保存			NO５古墳			保存
		NO11-３古墳			茂平５号墳　保存			NO14古墳			保存
		NO11-４古墳			茂平３号墳　保存			NO15古墳			保存
		NO11-５古墳			茂平４号墳　保存						

第２章　調査と報告書作成の経過

第１節　調査に到る経緯

昭和53年に完成した勝央中核工業団地は、人口の多い津山市にほど近く交通の便もよいことから、全分譲区画が完売しなお多くの企業の立地が望まれる状況となった。このことを受けて、勝央中核工業団地を造成・分譲した地域振興整備公団は、昭和63年に現在の工業団地の北側に隣接して新勝央中核工業団地を造成することを計画し、全体面積約51.7ha、分譲開始を平成７年の予定で土地取得などを開始した。

新工業団地内の埋蔵文化財に対しては、地域振興整備公団（以下公団と略）は平成３年７月12日付けで文化財保護法第57条の３第１項の規定による埋蔵文化財発掘調査の通知を文化庁長官あてに提出した。これに対し、岡山県教育委員会は公団に平成３年７月22日付けで周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）を行い、県教委文化課を窓口として公団と折衝に入った。

公団と県教育委員会文化課との協議の結果、当初計画として平成３年８月から４年１月までを埋蔵文化財の発掘調査に当て、対象遺跡は遺跡分布図に記載のある茂平城・茂平古墳（調査によって古代以降の塚と判明したため以下茂平古墓と表記する）の２遺跡の予定であり、これまでの実績と照らし合わせた結果、調査は平成３年６月１日から11月30日の間で、調査員２名を当てることとした。対象面積は茂平城全面調査3,100㎡、トレンチ調査150㎡計3,250㎡、茂平古墓225㎡である。

工業団地の土地取得が予定よりも進んだ結果、茂平城は一部を除いて調査が可能な状況となり、４月13日から調査を開始した。調査は岡山県古代吉備文化財センター（以下文化財センターと略）が調査員２名を配し、茂平城のトレンチ調査、茂平城・茂平古墓の全面調査を行った。文化財センターでは、両遺跡の調査は一部を除いて11月初めで終了し、年度末までに報告書を作成する見込みであった。工業団地予定地の面積があまりにも広大なため、２遺跡以外にも遺跡が存在する可能性があり、分布調査を随時行った。しかし、予定地はまだ未伐開のため下草の繁茂により見通しがきかず、遺跡発見は困難な状況にあった。

ところが、全面調査がほぼ終了した10月26日、まず工業団地予定地Ｇ区の低丘陵上に方形の土盛りのある中世墳墓が発見された。また、茂平城の東の丘陵上に横穴式石室墳が１基見つかり、改めて分布調査を行ったところ、周辺でいくつかの散布地も確認された（虫尾・大沢散布地）。

この事態を受けて、文化課では来年度以降の調査を含めて公団と再協議を行った。その結果、新発見の中世墳墓と古墳１基については今年度内で調査を行うこと、散布地については未買収の所もあったため来年度調査とすることとした。中世墳墓は溝逧中世墓地、古墳は茂平２号墳と命名した（後に黒土中世墓地、畑ノ平１号墳と改称）。また、黒土中世墓地調査中にも周辺で古墳が見つかった（西大沢１・２号墳、畑ノ平２・３・６号墳）。

このように、平成４年度の調査は茂平城、茂平古墓、黒土中世墓地、茂平２号墳計5,506㎡の調査を行い終了したが、翌年に多数の遺跡の調査を持ち越すという事態となった。

第４図　新勝央中核工業団地計画図（S=1：6,000）

第２節　調査と報告書の体制

発掘調査は、岡山県教育委員会が地域開発整備公団から依託を受け、平成４・５年度に発掘調査を行い、６年度から７年度の９月まで報告書の作成を行った。

発掘調査と報告書の作成にあたっては、遺跡の保護・保存ならびに調査の専門的な意見を頂くために岡山県遺跡保護調査団の推薦を受けた方々に「新勝央中核工業団地建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」の委員を委嘱している。

新勝央中核工業団地建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会委員

近藤義郎	岡山大学名誉教授	土居　徹	元津山市立北小学校校長
	岡山県文化財保護審議会委員	船津昭雄	元久米町立中正小学校校長
白石　純	岡山理科大学自然科学研究所職員	宗森英之	県立津山高校教諭
角田　茂	元岡山市立岡輝中学校教諭	（五十音順、敬称略）	

発掘調査

平成４年度

岡山県教育委員会

教育長	竹内康夫
教育次長	岸本憲二
岡山県教育庁文化課	
課長	渡辺淳平
課長代理	松井新一
課長補佐（埋蔵文化財係長事務取扱）	柳瀬昭彦
主査	時長　勇
岡山県古代吉備文化財センター	
所長	横山常實
次長	河本　清
文化財保護参事	葛原克人
総務課	
課長	北原　求
課長補佐（総務係長事務取扱）	小西親男
主査	石井　茂
主査	石井善晴
主任	三宅秀吉
調査課	
第二課長	正岡睦夫
課長補佐（第三係長）	山磨康平
文化財保護主事	牧　良二
主事	氏平昭則

平成５年度

岡山県教育委員会

教育長	森崎岩之助
教育次長	岸本憲二
岡山県教育庁文化課	
課長	渡辺淳平
課長代理	松井新一
課長補佐（埋蔵文化財係長事務取扱）	高畑知功
主査	時長　勇
岡山県古代吉備文化財センター	
所長	横山常實
次長	葛原克人
総務課	
課長	北原　求

課長補佐（総務係長事務取扱）　小西親男
主査　石井　茂
主査　石井善晴
主任　三宅秀吉
調査課
第三課長　柳瀬昭彦
第一係長　平井　勝
文化財保護主査　渡辺武仁
文化財保護主任　山田明信
文化財保護主事　植月康雅
文化財保護主事　弘田和司

報告書作成

平成６年度

岡山県教育委員会

教育長　森崎岩之助
教育次長　岸本憲二
岡山県教育庁文化課
課長　大場　淳
課長代理　松井新一
課長補佐（埋蔵文化財係長事務取扱）高畑知功
主任　若林一憲
岡山県古代吉備文化財センター
所長　河本　清
次長　葛原克人
総務課
課長　丸尾洋幸
課長補佐（総務係長事務取扱）　杉田卓美
主査　石井善晴
主任　三宅秀吉
調査課
第三課長　柳瀬昭彦
課長補佐（第一係長）　山磨康平
文化財保護主事　弘田和司

平成７年度

岡山県教育委員会

教育長　森崎岩之助
教育次長　黒瀬定生
岡山県教育庁文化課
課長　大場　淳
課長代理　樋本俊二
参事　葛原克人
課長補佐（埋蔵文化財係長事務取扱）高畑知功
主任　若林一憲
岡山県古代吉備文化財センター
所長　河本　清
次長　高塚惠明
総務課
課長　丸尾洋幸
課長補佐（総務係長事務取扱）　井戸丈二
主査　石井善晴
調査課
第三課長　柳瀬昭彦
課長補佐（第一係長）　平井　勝
文化財保護主事　弘田和司

（報告書作成協力者）　江尻英幸・遠藤七都子・斉藤直子・坂本康子・川上陽子・田中淑子・米戸典子

第３節　調査・報告書作成の経過

新勝央中核工業団地予定地内では、周知の遺跡として茂平城と茂平古墓が知られるのみであり、当初計画では10月までに調査を終了し、その年度内に報告書の作成までを行うことになっていた。

４月始めには茂平城の調査に入った。まず、城の中心部分である郭１から着手し、ついで郭２・３の順に進めてゆき、郭３の中央部分は宅地であったため家の移転作業を待つことになったため、９月には茂平古墓の調査へと移っていった。10月末には予定通りに撤収へと進んでいたところが、調査も後半を過ぎて後の周辺部の踏査によって、いくつかの遺跡（黒土中世墓・畑ノ平１～４号墳・虫尾散布地）が発見されることになり、公団との協議の結果、10月以降も期間を延長して調査を継続することとなった。

11月からは中世墓地の調査に着手し、多くの土壙墓・集石墓の検出をみたものの、１月末には終了した。１月以降は茂平城郭３の中央部分の調査を行い、２月からは茂平城の東にある近世墓の調査に入ったが、そこでは新たに横穴式石室（畑ノ平１号墳）が発見された。

勝央町内や周辺地域は既存の工業団地によって安定した雇用があるため、発掘調査の人材確保の面に苦労し、とりわけ女性の確保に困難を極めた。また、70才以上の高齢者の方も多く、丘陵斜面での調査には慎重を要した。

なお、５月29日と10月５日には現地において対策委員会が開かれ、委員各位からご指導を賜った。

平成５年度は、調査員が２名とも交代となった。年度当初の計画としては古墳３基と散布地１ヶ所で12月までの予定になっていたものの、前年度末には２基の古墳（西大沢１・２号墳）が新たに発見されており、協議後には調査に入ることが織り込み済みであった。

４月はじめに虫尾散布地の確認調査に入ったが、古墳については数がさらに増加することを想定し、既に新緑の季節となっていたが確認調査と並行して改めて全域を踏査した。その結果、１ヶ所の散布地（虫尾遺跡第２地点）と３ヶ所の古墳状隆起（畑ノ平５・７・11号墳）が認められた。６月15日には公団と文化課・センターが現地において、今後の工事・調査計画についての協議を行った。その後も古墳は相次いで発見されることになり（畑ノ平８・９・10号墳）、７月20日に公団勝央開発所において、センターとの協議が行われたほか、公団と文化課の協議もその都度行われ、新規発見の遺跡についても本年度中に調査を終えること、それにむけての体制と条件の整備が図られることになった。

９月１日より、調査第三課から調査員２名の来援を受けて虫尾遺跡第２地点の調査と、引き続いて畑ノ平・西大沢古墳群の調査に入った。虫尾遺跡第２地点の調査は顕著な遺構も少なく９月半ばで終了し、本年度調査の中心となる古墳群の調査へと移動した。全ての古墳は乱掘を被っており、横穴式石室の天井石は皆無であったが、かえってそれが調査をスムーズに進行させたとも言える。

現地において、対策委員会は７月29日・11月26日・２月21日の三回が開催され、委員各位よりご指導、ご助言を得ている。

調査中に次々と調査対象が増えるという事態の中で、防災上の観点から伐採が調査終了間際まで進まず、さらに工事計画が結果的に遺跡の少なかった建設予定地の東半分から造成に入ることになっていたため、調査計画は難しいものであった。

報告書の作成は、調査が終了した翌年（平成６年度）に調査員１名が入ることになった。遺物の主

体は畑ノ平古墳群出土の土器や金属製品であり、このうち土器類については大半が現地において洗浄・注記から接合までを完了しており、実測・トレースを４月より行った。古墳の遺物は基本的に全てを図化し掲載するため、古墳群のみで530点の実測が必要であった。その中では陶棺の復元や実測の作業もかなり労力を要すものであった。また、鉄器類は極めて遺存状況が悪く、錆落としから接合・脱塩・含浸にかなり時間を要しながら元の形に復元し図化できるものが少なかった。このようにして西大沢・畑ノ平古墳群、虫尾遺跡と黒土中世墓、茂平古墓の遺物・遺構の実測とトレースおよび写真撮影を終了した。古墳群に関しては遺物の整理収納と簡単な編集割付作業まで行った。

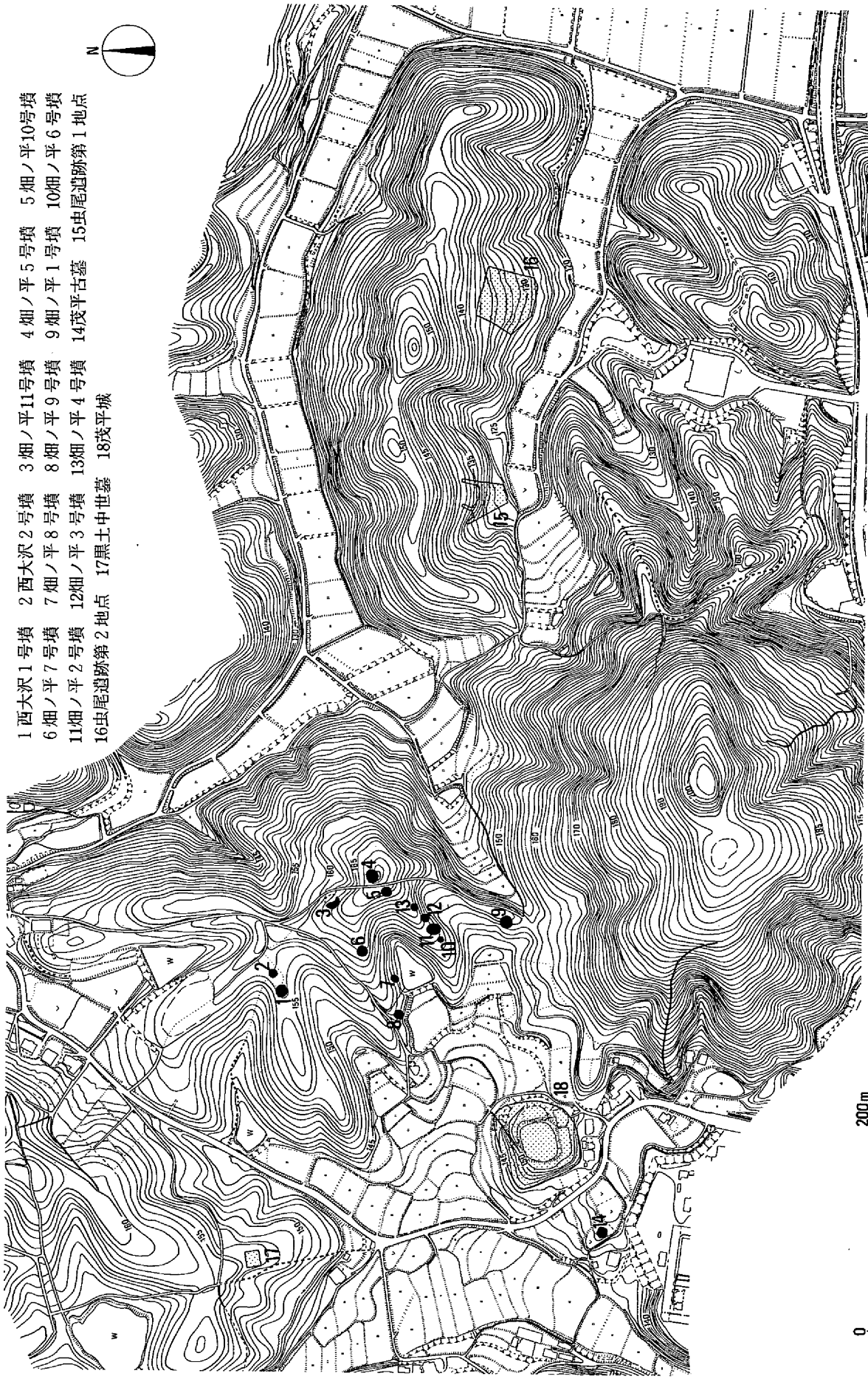
平成７年度は前年度と同じく調査員１名が、茂平城の遺構トレース、遺物の実測・トレースと写真撮影にあたった。その後は編集と原稿の執筆にかかり、９月末の整理期間終了とともに全ての作業を終了した。

表３　新勝央中核工業団地調査一覧

遺　跡　名	担 当 者	期　　間	面　　積	遺物箱数
茂平城	牧・氏平	平成４.４.１～５.２.28	3,800㎡	19
茂平古墓	牧・氏平	平成４.９.１～10.31	200㎡	2
黒土中世墓	牧・氏平	平成４.11.１～５.１.31	1,000㎡	10
虫尾遺跡	植田・弘田 渡辺・山田	平成５.４.１～５.31 平成５.６.17～６.24、８.12～９.14	3,680㎡	6
西大沢古墳群	植月・弘田 渡辺・山田	平成５.11.29～６.３.31	625㎡	2
畑ノ平古墳群	植月・弘田 渡辺・山田 牧・氏平	平成５.２.１～３.31 平成５.７.19～８.11 平成５.９.15～平成６.３.31	2,980㎡	80 陶棺　2基

なお、調査ならびに報告書作成期間中、下記の方々から有益な指導・助言を頂いた。記して感謝の意を表す。（敬称略、五十音順）

小郷利幸　高橋伸二　亀田修一　武田恭彰　新納泉　乗岡実　安川豊史　山本雅和　横田美香



第５図　調査地位置（S=1：5,000）

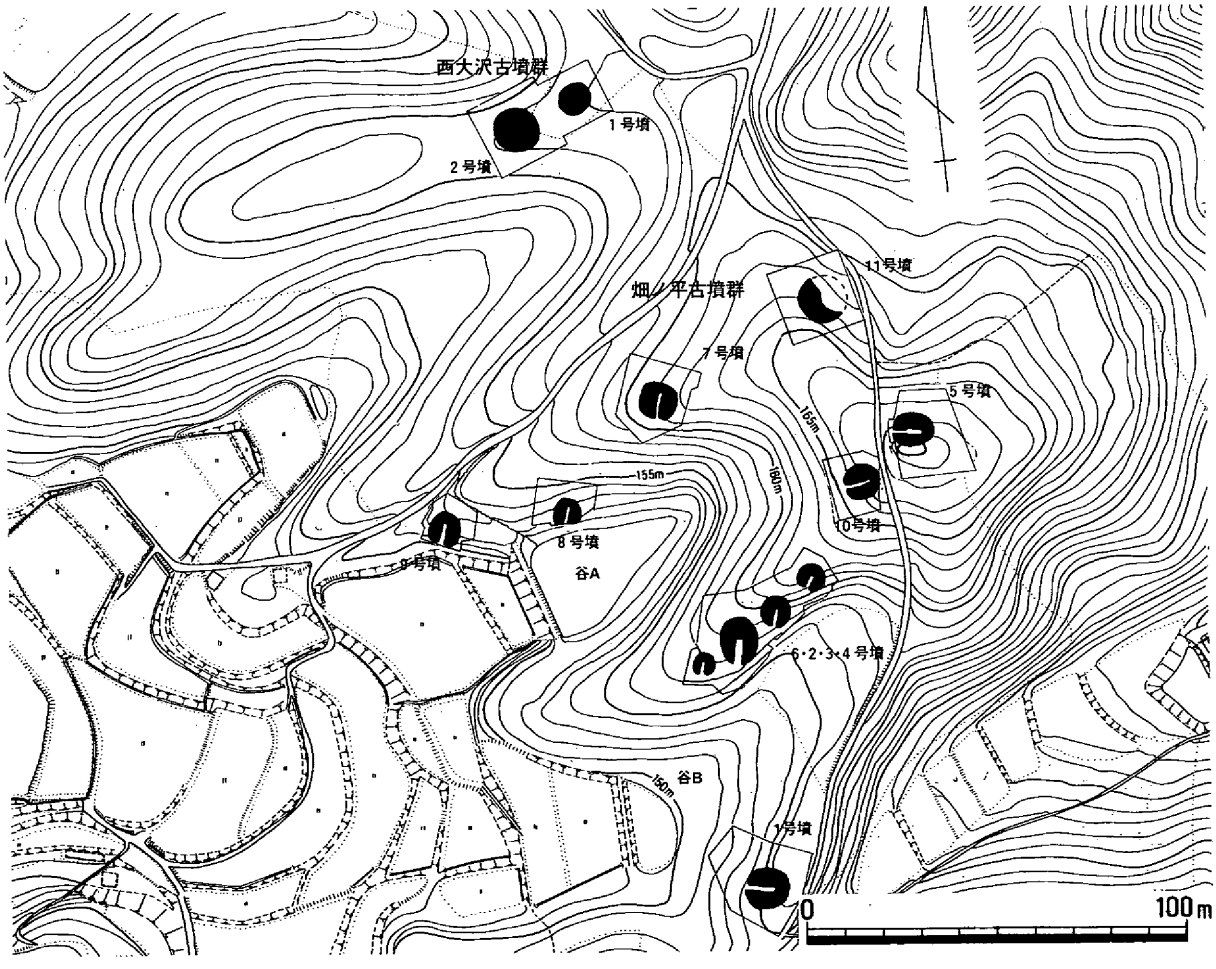
第３章　古墳群の調査

先に調査の経緯や調査経過でふれたように、西大沢・畑ノ平古墳群はすべて新規に発見されたものであった。古墳の所在地は勝央町植月中字茂平であるが、茂平古墳群は別地点に所在している古墳に付けられており、古墳群の名称は旧植月中村茂平の中の小字名をとって付けることにした。従って各古墳の番号も発見順（発掘届順）であり、本報告もこれを踏襲する。但し、これらの古墳は本来歴史的に意味のあるまとまりをもっているはずである。そこで、各古墳の立地条件ないし埋葬施設に着目してグルーピングを行い、その順に従って記述を行う。

まず埋葬施設が横穴式石室でない古墳が３基ある（西大沢１・２号墳・畑ノ平11号墳）。いずれも、比較的平坦な尾根の頂部に築かれており、横穴式石室に先行するとみられる。これをＡ支群とする。

次に、Ａ支群東側の谷Aに向かって開口する横穴式石室墳が５基存在する。これをＢ支群とし、さらに、谷奥から山頂にかけて所在する２基（畑ノ平５・10号墳）をＢ１支群、谷の西側斜面に立地する３基をＢ２支群（畑ノ平７・８・９号墳）とした。

Ｃ支群は、Ｂ支群のさらに東の谷Bの両斜面に立地する５基である。谷の東斜面に位置する畑ノ平１号墳をＣ１支群とし、谷の西斜面に位置する畑ノ平２・３・４・６号墳をＣ２支群とする。



第６図　古墳群位置（S=1：2,000）

第１節　A　支　群

（１）西大沢１・２号墳

調査前の状況（第７図）

西大沢１・２号墳は、茂平城の北東から派生するいくつかの尾根のうち頂部が比較的平坦な尾根の中央に位置する。１号墳は８～8.5ｍ、２号墳は12～13ｍ程の円形で、ともに部分的に周堀の存在が看取できた。調査前は低雑木が覆い茂っていたが、この場所はかって牧草地として利用されており、その際に墳丘を削って周堀を埋めたようである。

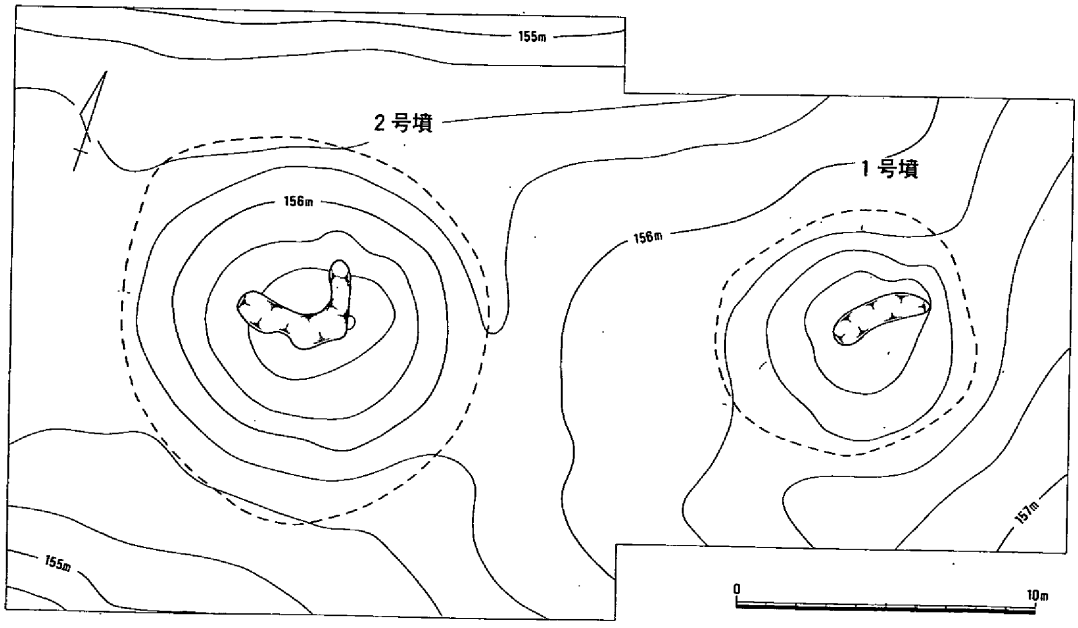
また２古墳ともに墳頂部には乱掘壙がみられ、なかでも１号墳の中心部分には長さ２ｍ、幅0.7ｍ、深さ0.3ｍの乱掘壙が存在し、その掘り出した土を墳丘北側に掻き出しているようであった。

１・２号墳は周堀間の距離が５ｍと近接し、両者の密接な関係を窺わせるものの、この間を含めこの尾根上ではこの２基の古墳以外の遺構はいっさい確認できなかった。

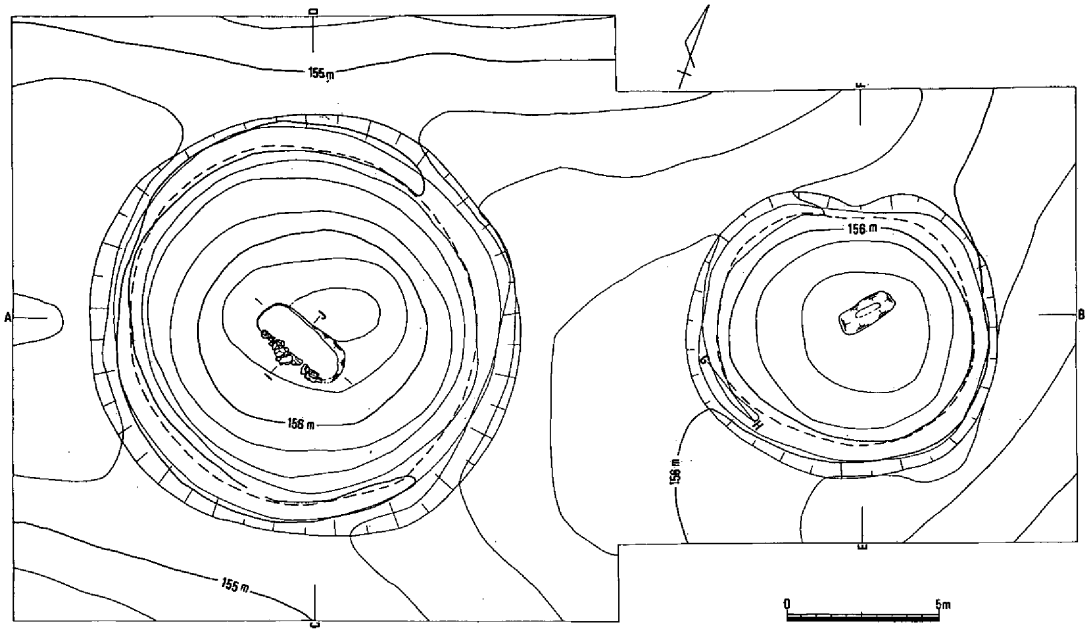
墳丘と周堀（第８・10図）

１号墳は、直径7.5～８ｍのややいびつな円形を呈する。浅い周堀が墳丘全体をめぐるが、それを含めた墳丘径は９～10ｍとなる。周堀は断面Ｕ字形で、幅は約１ｍ、深さは墳丘外肩から測ると20～30㎝である。周堀底から墳丘頂までの高さは約1.2ｍである。墳丘は旧表土層である暗褐色土層の上に盛土である褐色砂質土層が認められた。厚さは約20㎝である。墳丘の削平を考えると本来の墳丘はもう少し高かったであろう。

２号墳は径11.5ｍの円墳で、墳丘を全周する周堀がある。周堀を含めた墳丘規模は14ｍを測る。周堀は断面Ｕ字形で幅は約1.5ｍで、深さは墳丘外の肩から測り約25㎝である。墳丘高は周堀底から測って1.7ｍである。周堀によって墳丘を高くみせているが、墳頂部はかなり削平を受けているようであり本来の墳丘高は２ｍ以上ではなかったかと考えられる。埋土の上面は非常に硬く締まった土で炭



第７図　調査前地形測量（S＝1：250）



第8図　墳丘測量（S=1：250）

を含んでいたことから、牧草地として開墾する際に墳丘を削平して周堀を丁寧に埋め立てたと考えられよう。

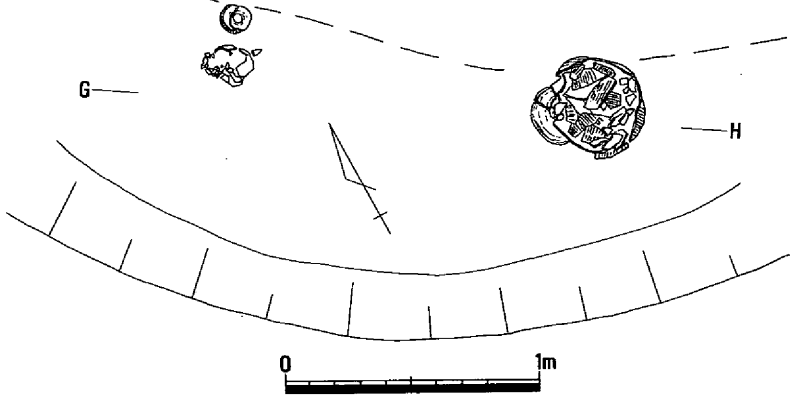
盛土は旧表土（暗褐色土層）上から10～20cmの単位で水平に積まれており、約70cmの厚さを測る。この旧表土と思われる第11層（暗褐色砂質土）は1・2号墳の周辺部には見られないことから周辺部の地形の整形を行った後、周堀掘削部分の土とあわせて墳丘盛土として利用していたと思われる。

1・2号墳ともに埴輪や葺石といった外表施設は存在しなかった。

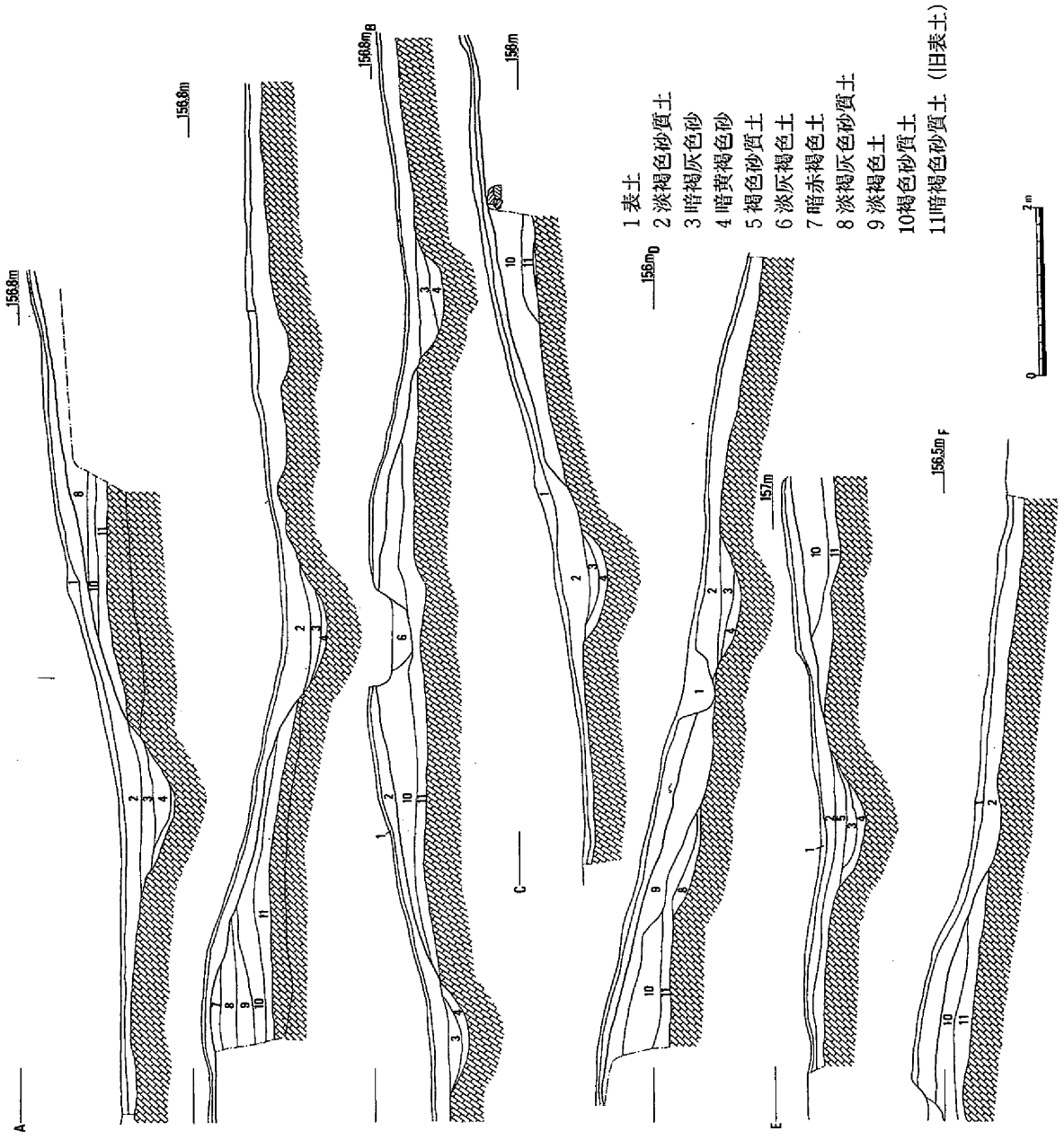
遺物出土状況（第9図）

1号墳では乱掘壙内および、そこからかき出した土の中からは遺物は見つかっていないが、墳丘南側の周堀内において須恵器の甕・瑳と土師器の壷の3個体がまとまって出土している。遺物の出土した箇所は周堀底でも周囲より若干低く凹んだようになっており、壷と瑳はその周堀底に接して出土した。これら2点の土器はほぼ現位置を保っている可能性が高い。甕はそこから1mあまり離れ、かつ周堀底からはわずかに上で検出されたが、完形品が横転した状態でその場で土圧により押しつぶされたような状態であった。これらの遺物は墳頂部や埋葬施設からの転落とも考えられるが、墳頂部の乱掘状況をみると周堀内での祭祀に使用された可能性が高いと思われる。

2号墳からはわずかに周堀内埋土から須恵器の杯身が一点出土しただけであり、これ



第9図　周堀遺物出土状況



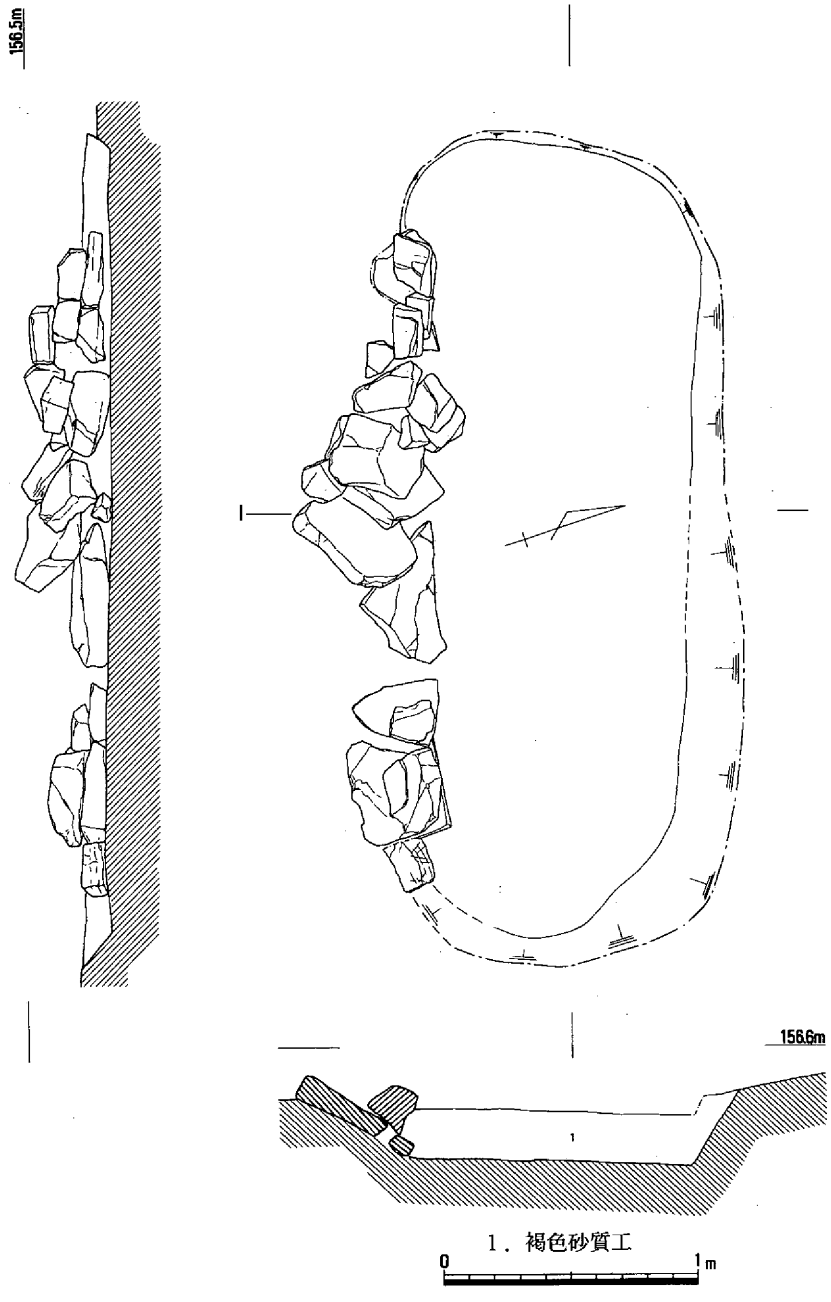
第10図　墳丘土層断面

は石室内の乱掘時に転落してきたと思われる。

埋葬施設（第11図）

１号墳は大きく乱掘を受けていたためか、平面的にも墳丘の立ち割りからも埋葬施設は検出できなかった。ただし表土を除去後の盛土上面において拳大の石を２点検出しており、これ以外には盛土や旧表土中には石は含まれないことから、これが棺の小口や側面を押さえるのに用いられたとみることはできよう。埋葬施設の底部まで削平を受けているような状況ではあるが、墳丘が直径８ｍ程とかなり小規模であることや石室石材が周辺にも存在しなかったことなどから、１号墳の埋葬施設は木棺直葬であった可能性が強い。

２号墳の埋葬施設としては、破壊された竪穴式石室を検出した。この石室は墳頂中心部からはやや



第11図　石室実測（S＝1：30）

南側にずれた位置にあることから複数の埋葬施設が予測できたが、これ以外には埋葬施設は認められなかった。

検出できたのは竪穴式石室の片側側壁部のみであり石室の規模は不明である。石材は残存部分についてもわずかに基底部および一部で２～３段目の石までが残るだけであるが、この残存部から長さは2.5ｍ以上の竪穴式石室であったことが考えられる。この側壁のラインから復元して石室の主軸はほぼ東西方向（N-70°-E）である。

石室の石材は厚さ10cm程の玄武岩の角礫で、横長方向に積み上げていたようである。

石室の掘り形は確認できなかったことから盛土と石室は並行して構築されたと考えられる。石室内に副葬品は存在していなかった。

出土遺物（第12図）

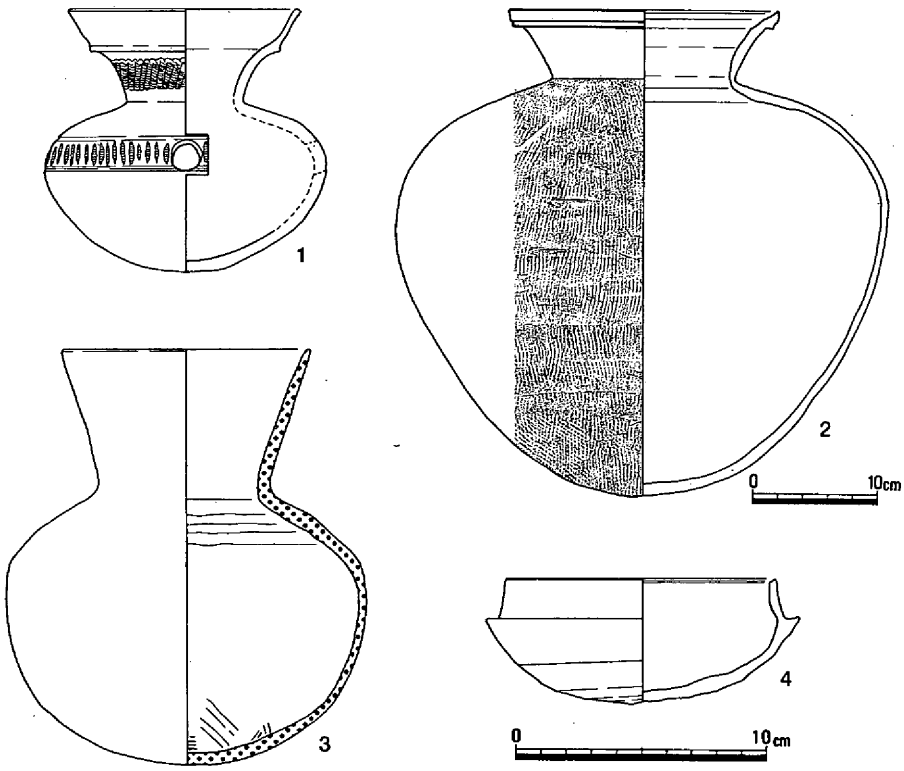
出土遺物は１・２号墳あわせて須恵器・土師器のわずか４点のみである。このうち１～３が２号墳の周堀から出土している。この他に図化していないが１号墳から須恵器壷の細片、中世と思われる土師質の羽釜片がある。

１は𤭖である。タマネギ形の体部に短い頸部を持つ。口縁部を波状紋、体部を刺突紋で飾り、口縁端部に平坦な面を持つ。

２は甕である。口縁端部は上方につまみ上げ、また直下にシャープな稜線をめぐらす。外面は平行タタキ、内面は丁寧にナデて仕上げる。

３は土師器の壷である。器表は磨滅が激しく調整は観察不可能に近いが、底部内面は工具によるケズリを施す。

２号墳の遺物としては、墳頂部から転落したと考えられる須恵器の杯身４が、周掘内埋土から出土している。口径は10.8㎝、器高は5.0㎝である。口縁部は真っ直ぐ立ち上がり、口縁端部は内傾する面を持つ。体部の約1/2を回転ヘラケズリ（右回り）を施す。胎土は密で0.5～３㎜の白色粒を少し含む。色調は青灰色を呈す。



第12図　遺物実測（２はS＝1：6）

表４　西大沢古墳群土器観察表

	器形	口径	器高	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	𤭖	9.3	10.5	体部は回転ヘラケズリ、底部はナデ	0.5～３㎜の白多、黒多	硬	暗灰色	
2	甕	21.4	38.7	外面：タタキ、内面：ナデ	0.2～５㎜の白多	硬	灰白色	
3	土師壷	9.9	16.6	外面：ハケ、内面：ナデ、底部はケズリ	0.1～１㎜の長・石少、雲多	不良	明黄褐色	
4	杯	10.9	5	害：ヨコナデ、回転ヘラケズリ（左回り）、内：ヨコナデ	0.5～３㎜の白少	良		

（２）畑ノ平11号墳

調査前の状況（第13図）

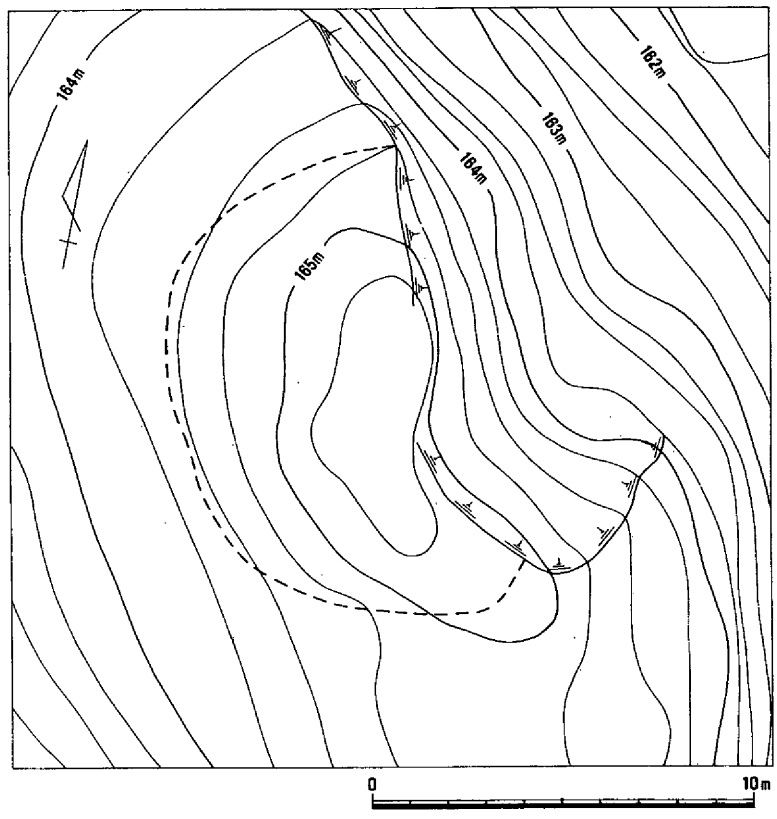
畑ノ平11号墳は、５号墳の位置する山頂から西大沢１号墳にかけてのびる尾根上に位置し、調査前は雑木林であった。この尾根筋は山道によって東側を大きく削られており、さらにそこから墳丘にかけては壁土取りを行っていたらしく、墳丘はすでに半壊状態であった。11号墳は調査の全行程終了間近の伐採後に存在が判明したものであり調査前は墳形や周堀の存在すらもわからなかった。

墳丘と周堀（第14・15図）

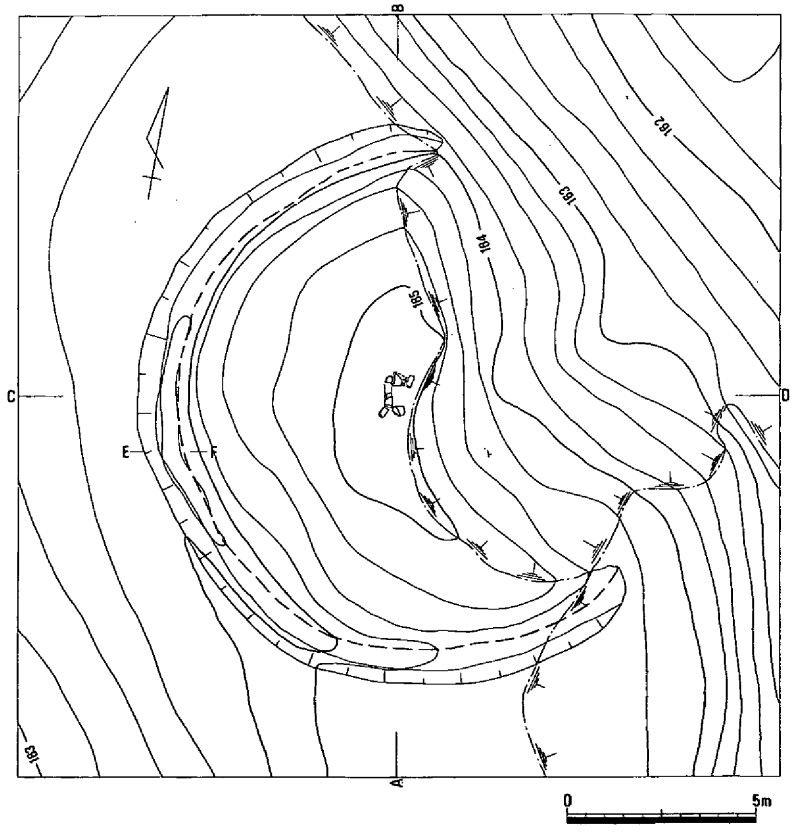
墳丘東側を欠くが推定で直径13ｍの円墳となり、残存部には周堀がめぐっていた。この周堀は先の西大沢１・２号墳と同様で墳丘を全周していたと思われる。周堀を含めて現存部で測った墳丘規模は13～14.5ｍである。

周堀の断面はＵ字状で深さは墳丘外の肩から測り0.25ｍ、幅は１ｍである。また周堀から墳頂までの現存高は1.2ｍを測るが、これはかなり削平を受けた結果といえる。

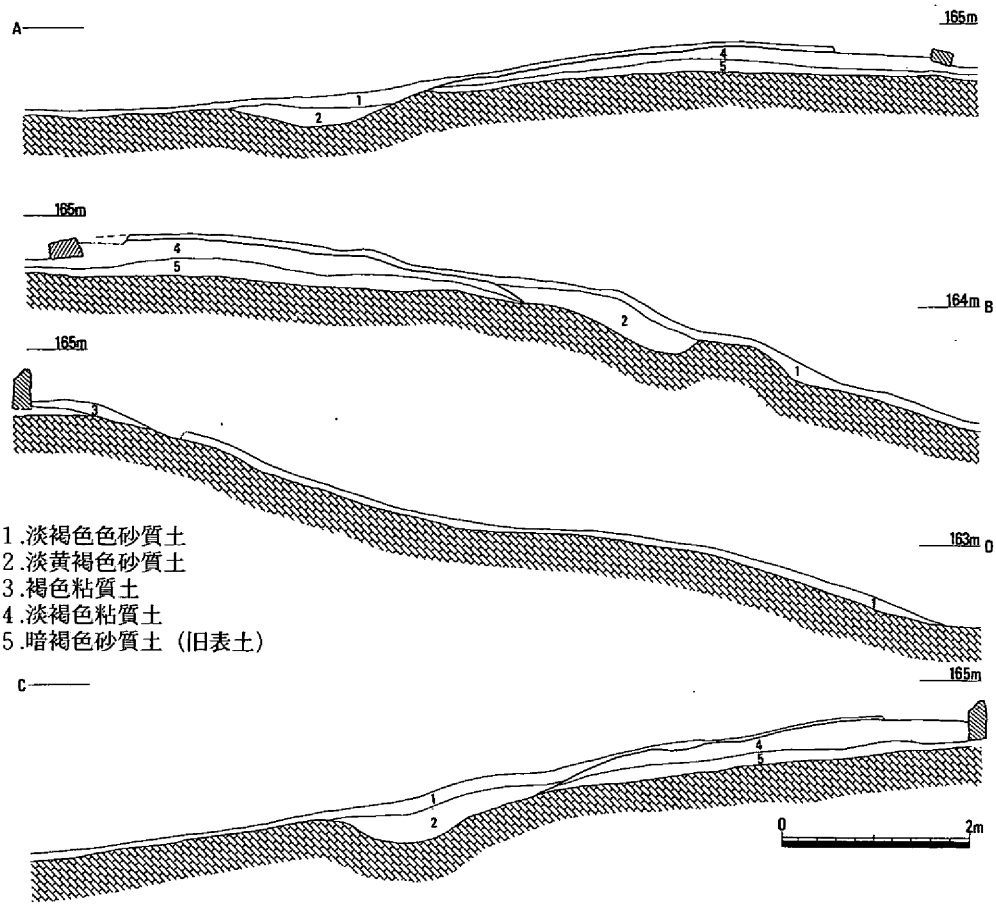
盛土は旧表土である淡褐色粘質土の上に厚さわずか20cmほど認められた。また、墳頂部のほぼ中央において小型の竪穴式石室が検出できたが葺



第13図　調査前地形測量



第14図　墳丘測量



第15図　墳丘土層断面

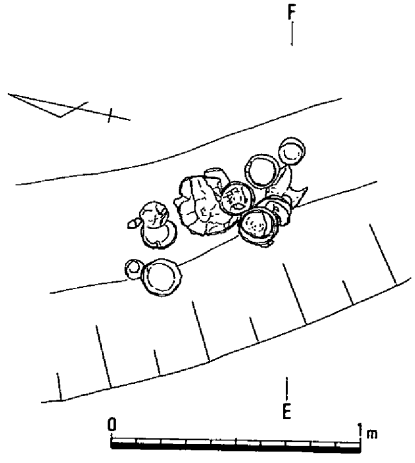
石や埴輪といった外表施設も存在していなかった。

遺物の出土状況（第16図）

石室内及び墳頂部からは遺物は出土していないものの、墳丘斜面からは須恵器の甕片が十数点出土していた。これは本来墳頂部に置かれていたものが破砕されて転落したと考えられる。また、墳丘西側の周掘内からは、高杯を主体に小形の壷を含んで15点あまりの土師器群が出土している。

この土器群は周堀底に接して検出されており、１ヶ所に集積されたような出土状況であった。なかでも高坏は概ね杯部を上に向けて立てられたような状況であり、かつ壷や高坏のうち何個体かの杯部が入れ子状に重ねられた状態で置かれていた。

この土器群のあった箇所は先の西大沢１号墳の場合と同様で周堀底が周囲と比べると若干深くなっていた。これらのことからこの土師器群は現位置を保っていると考えられる。墳丘のいずれの場所かは不明であるが葬送祭祀に用いられた後に周堀内に供献されたと考えることができよう。



第16図　周堀遺物出土状況

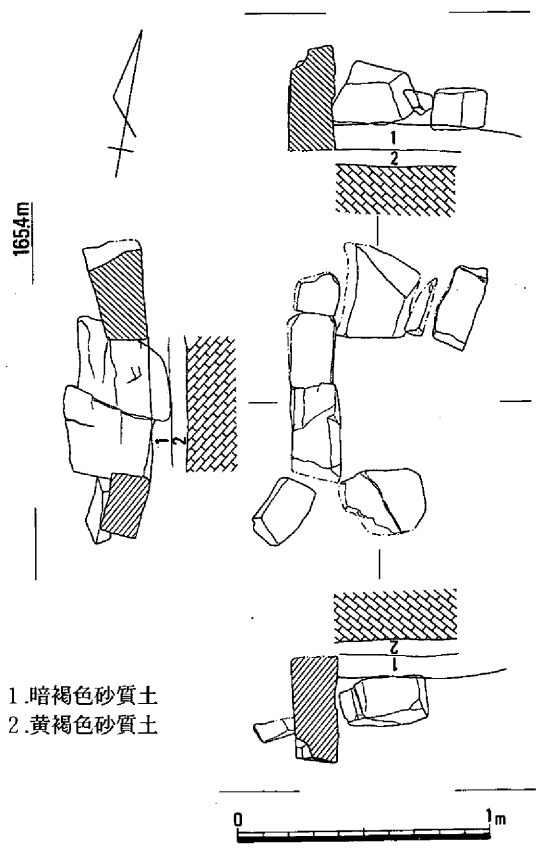
埋葬施設（第17図）

小型の竪穴式石室である。大半が破壊されており伐採後には一部が地表に露出している状態であった。残存したのは一方の小口部と両側壁の一部であり、残存部の規模は長さが50cm、幅が55cmで、残存高は30cmを測る。石室内には副葬品等の遺物はいっさい存在しなかった。

両側壁は北側に２石、南側に１石でいずれも基底部１段目のみが残り、厚さ10cm程の玄武岩の角礫の小口部分を内側に用いて壁面としている。

石室小口部分には側壁の石より大きな板石１石を立てて用いている。ほぼこの小口部の高さですぐ上に蓋石がくると考えられるとしても側壁は２段以上の石積みがあったとみられ、箱式石棺に近い大きさと形態をとるものの本来的には竪穴式石室と呼べるものである。

この石室には墓壙が存在しなかったことから盛土と並行して石を積み上げていったようである。石室の主軸はN-80°-Eでほぼ東西主軸である。また、この石室より他には埋葬施設は確認できなかった。



第17図　石室実測（S＝1：30）

出土遺物（第18・19図）

出土した遺物には須恵器と土師器がある。

土師器（１～14）

高杯１～11と小型の壷13･14がある。

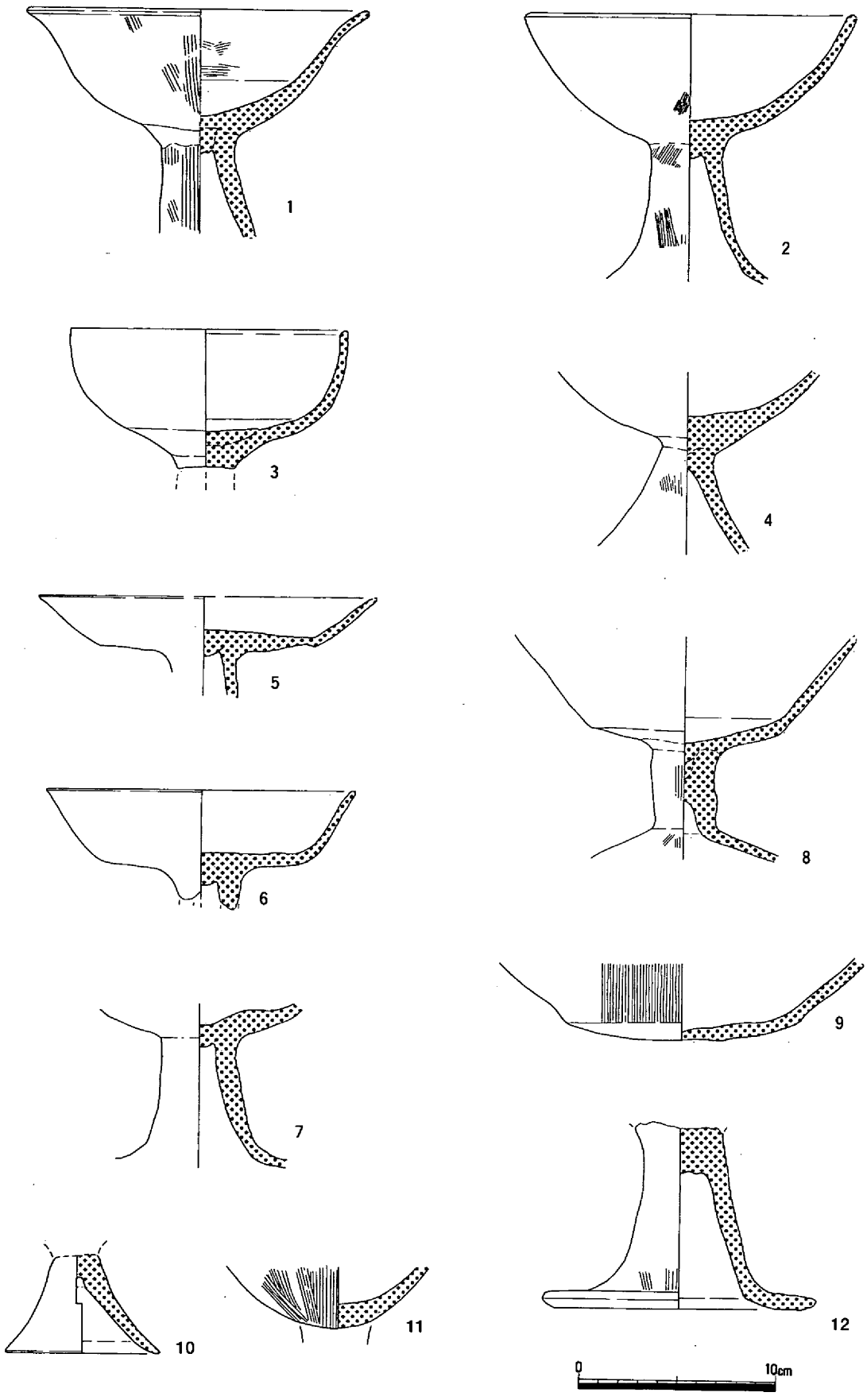
高杯には杯部の口縁と体部の境に稜を持たず杯部が椀状となるもの（１～４）と、口縁部と杯底部との境に稜を持つもの（５・６・８・９）がある。後者には大形で杯部の深い８・９と小形で杯部の浅い５・６がある。また脚部の形態にはラッパ状に広がる（１・２・７・12）もの、杯部との接合部から緩やかに拡がる（４・10）もの、短い脚柱部から脚端にかけて大きく開くもの（８）がある。

壷は13･14ともに小形で丸底である。14は外面にカキメがみられる直口壷ではないかと思われる。15は端部がやや欠けるようであるが、短く外反して終わる短頸壷であろう。

いずれの個体も出土した時点で既に非常にもろく土塊状になっており、正確な個体数や器種構成についてはわからなかった。また表面は磨滅が激しく観察が不可能に近い状態であったが、胎土は非常に精良である。器面の調整は外面には主にハケメが用いられ、内面は主にナデ仕上げで、一部で杯内面にハケメが認められる。

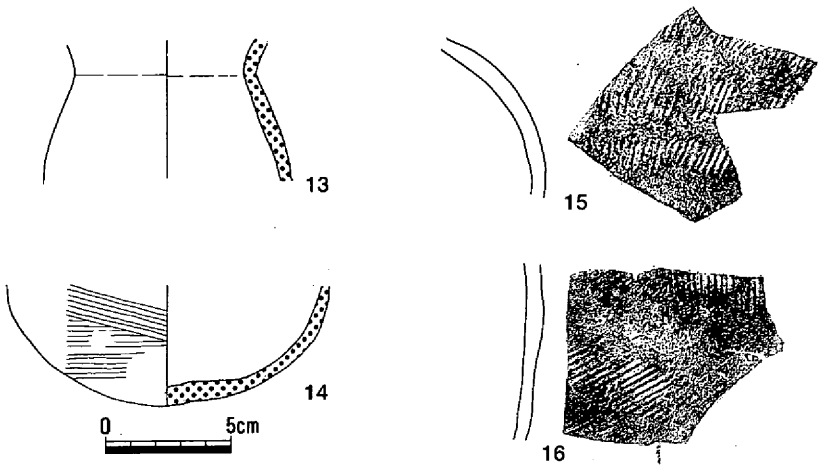
須恵器（15・16）

15･16は須恵器の甕片であり、15は肩部あたりの破片と思われる。図示したほかに10点あまりの破片があるが、胎土や色調・焼成の具合からみて全て同一個体の可能性がある。



第18図　遺物実測(1)

調整は外面が主に平行タタキで一部にカキメがみられる。内面は丁寧なナデによって仕上げられており、同心円文の当て具痕は認められない。



第19図　遺物実測(2)

表５　畑ノ平11号墳土器観察表

No	器種	口径	器高	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	高杯	16.1		外：タテハケ、内：ヨコハケ、脚部ナデ	砂粒僅少	不良	にぶい橙色	
2	高杯	16		外：ハケメ、内：ナデ		不良	にぶい橙色	
3	高杯			外：ハケメ？	砂粒僅少	不良	橙色	
4	高杯			外：ハケメ、内：ナデ、杯部ナデ？		不良	にぶい橙色	
5	高杯	16.6				不良	橙色	
6	高杯	15.1				不良	黄橙色	
7	高杯					不良	にぶい橙色	
8	高杯			外：ハケメ、内：胸部ナデ、杯部ハケ		不良	にぶい橙色	
9	高杯			外：タテハケ		不良	明黄褐色	
10	高杯			外：ハケメ		不良	橙色	
11	高杯			外・内：ハケメ	0.2㎜程の砂粒僅少	不良	にぶい橙色	
12	高杯			外：ハケメ、内：ナデ	0.2㎜程の砂粒僅少	不良	にぶい橙色	
13	壺					不良	橙色	
14	壺			外：ハケメ	砂粒僅少	不良	にぶい橙色	
15	甕			外：平行タタキ、内：ナデ	2㎜以下の白色粒僅少	良	明緑灰色	須恵器
16	甕			外：平行タタキ、内：ナデ	2㎜以下の白色粒僅少	良	明緑灰色	16と同一個体

（３）Ａ支群のまとめ

まず、Ａ支群の３基の古墳の時間的な位置づけであるが、各古墳ともいくらか須恵器が出土しており、周辺地域の古墳との先後関係は知ることが可能である。

西大沢１号墳は須恵器の杯類は出土していないが甕は、形態や装飾が美作地域の須恵器編年のなかでⅢ期の標識に挙げられている長畝山北４・８号墳のものに最も近い、甕についても内面が丁寧にナデで仕上げられるのはⅢ期までの特徴で、それ以降は同心円文の当て具痕が明瞭に認められるようになる。

西大沢２号墳では杯身が１点出土しており、形態や技法からやはり長畝山４・８号墳に最も近い。

平坦な尾根の頂部に位置する立地は津山市長畝山北古墳群、大開古墳群、門の山古墳群など横穴式石室導入以前の古墳群に特徴的な立地を示す。聞き取りによると西大沢１・２号墳の西側の尾根にもかって古墳が存在しており、鉄剣が出土したようである。しかし、かなり開墾の手が加わっており現在では一切確認できていない。

次に周溝内の土器祭祀であるが、同じ例として長畝山北２・７号墳において須恵器の甕が確認されているもののこの時期は土器が副葬品として持ち込まれるのが通常である。ただその点以外では特異なものではない。供献土器の構成は５世紀末の段階では長畝山北古墳群のように須恵器杯・甕・甕の３点セットが典型で、６世紀前葉から中葉には瓶や壺類が加わる。また土師器についても川辺上原２号墳において墓壙内の棺外において壺・高杯がみられる。

第２節　B　　支　　群

（１）畑の平５号墳

調査前の状況（第20図）

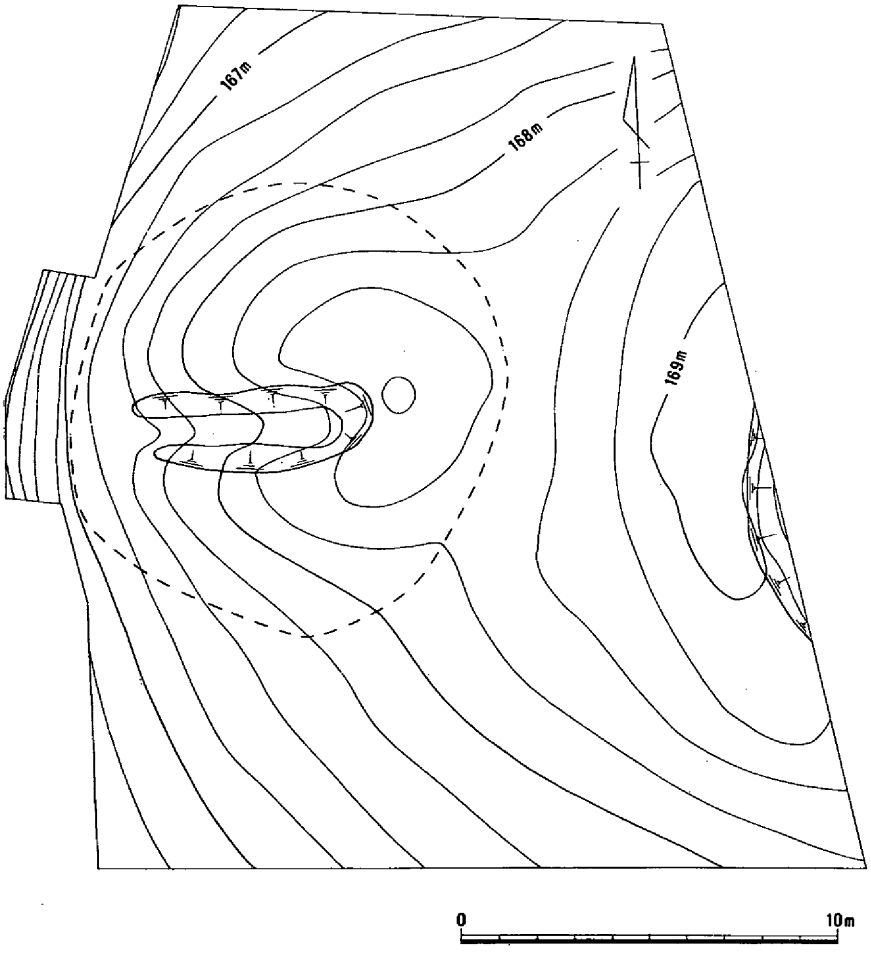
畑ノ平５号墳は、今回調査した古墳群が立地する丘陵の最高所にあたる標高169ｍの地点から若干西に下がった所、緩斜面と古墳の西北方向から入り込んでくる谷に向かって急に下る傾斜変換点あたりに位置する。

調査前は古墳の周囲は檜の植林地となっており、また墳端の西側をかすめる山道によって墳丘の一部が削平を受けているが古墳群中でも墳丘の遺存状況は良い方で、踏査時に一見して古墳とわかったものである。直径は12ｍ、高さ１.5ｍ程の円墳状を呈し、墳丘の背面には周堀が明瞭に認められた

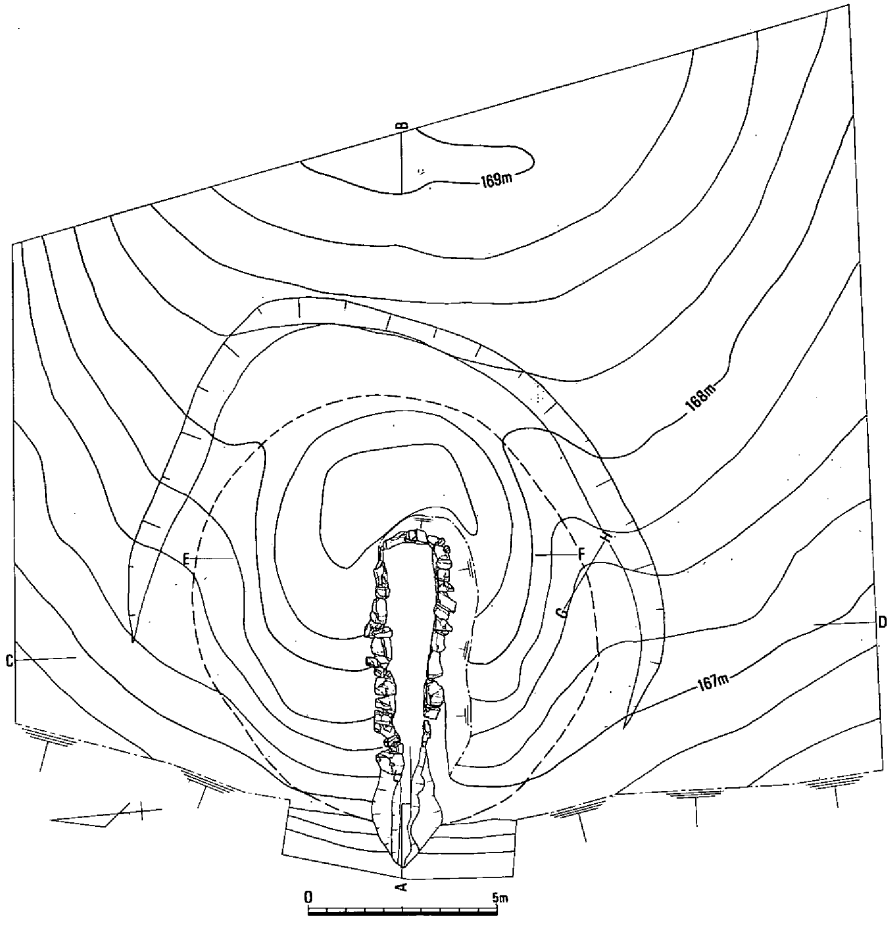
墳頂中心には東西方向に長さ６ｍ、幅２ｍにわたって大きな落ち込みがあったことから埋葬施設が乱掘されていることが予測された。

墳丘（第21・22図）

直径11ｍの円墳で、墳丘の中心には横穴式石室があり、そこから西に向かう墓道も検出されている。



第20図　調査前地形測量



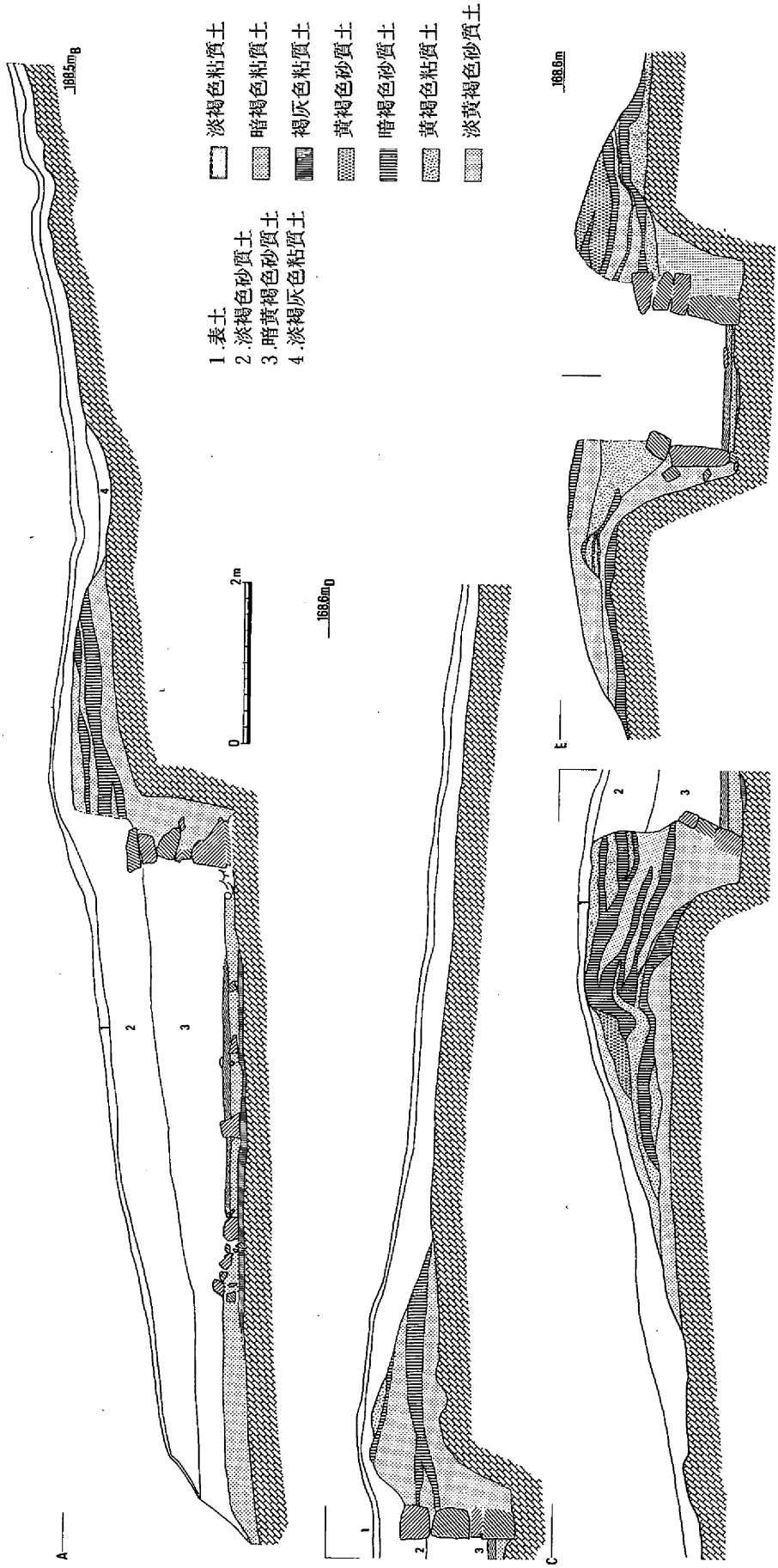
第21図　墳丘測量

傾斜面に位置しているため墳丘高は斜面下方から測ると2.25ｍであるが、斜面上方からはわずか0.5ｍほどしかない。墳丘から周堀にかけての覆土中から須恵器が数点出土しているが石室内から掻き出されたものと思われる。この他に、葺石や埴輪などの外表施設は存在しない。

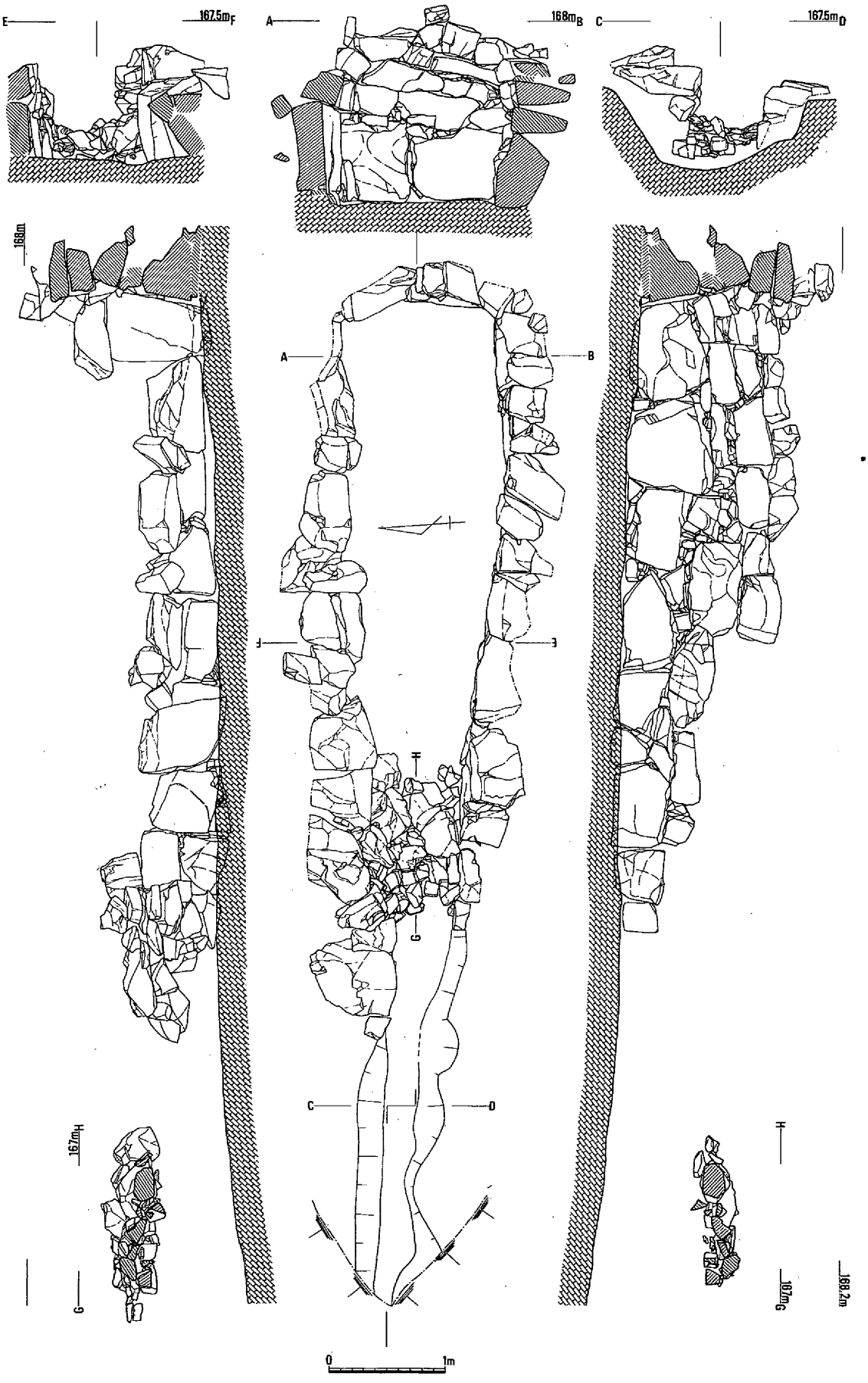
周堀は墳丘後背部分を半円形の取り巻き、斜面下方にあたる墳丘西側には無い。断面がＵ字状を呈した浅く緩やかな傾斜の掘り込みで、幅は２～３ｍで、深さは最も深いところでも墳丘外の肩から測って0.4ｍである。

盛土は旧表土層や基盤層を周堀や石室掘り方の掘削によって盛り上げており、基本的には黄褐色土と暗褐色土との互層となっている。各層は10㎝前後の厚さで全体に丁寧に積み上げられていた。この盛土は石室掘り方の上面から盛り上げ始められており、石室石材の構築と並行して盛土が行われていることが窺い知れるが、横断面Ｃ－Ｄラインの左や、Ｅ－Ｆラインの右では墓壙端の外側に一端は土手状の土盛りをした後に壁石の裏込め状に土を充填することが明瞭な箇所がある。Ｃ－Ｄ断面の右側ではそれが二単位は確認できる。

墳丘各所にあけたトレンチによって墓壙を確認している。この墓壙は旧地形から掘り込まれるため石室奥が深くなり1.4ｍを測るが、石室開口部側に向けて徐々に浅くなっている。墓壙上面での最大幅は2.1ｍ、基底部での最大幅1.3ｍ、平面形が「コの字状」となっているとおもわれる。墓壙の埋土は淡黄褐色砂質土の一層で埋められており、上面の盛土とは様相を異にしている。


淡褐色粘質土
暗褐色粘質土
褐灰色粘質土
黄褐色砂質土
暗褐色砂質土
黄褐色粘質土
淡黄褐色砂質土
1.表土
2.淡褐色砂質土
3.暗黄褐色砂質土
4.淡褐灰色粘質土
188.5m
168.6m
168.6m
0
2m
A
B
C
D
E

第22図　墳丘土層断面



第23図　石室実測（S＝１：50）

横穴式石室は主軸がＮ-85°-Ｅで、ほぼ西に開口する。石室は奥から向かって右に袖石のある右片袖式である。天井石はすべて失われていたうえに、土圧によって右側壁の３段分の石がかなり石室内側にせり出してきていたため、それらを除去して調査を行った。

石室規模は全長が5.7ｍで、玄室長3.6ｍ、奥壁幅1.35ｍ、玄室最大幅1.7ｍ、袖部幅1.2ｍ、羨道長2.1ｍ、同幅0.1ｍである。石室の平面形体は、やや胴張り気味の玄室に対して短い羨道がとりつく形になっている。

奥壁はかなり残りがよく５段の石積みが残り、現存高は1.7ｍである。基底部は大きめの石を二石並びに用いるが、二段目以上の石は次第に小ぶりとなり、いずれも横長に積み上げられている。奥壁と両側壁の接する部分では、両壁に渡しかけるように積まれている。

左側壁は玄室内で４段分が残り、横目地がよく通るが、羨道部は崩落と抜き取りによって１～２段しかない。基底石をみると奥から羨道に向けて次第に小さくなる傾向がある。右側壁では奥壁に接する部分に縦長の石を用いる。これ以外は基底石を含めて石室内側にせり出していた。袖石は他の基底石と大きさの差はなく、袖石と接する玄室側の基底石を石室内に斜めに配すことで袖部を広くしている。右側壁も羨道部では小型の石が用いられている。

羨道部の床面上においては長さ１ｍにわたって両側壁間に隙間無く角礫の集積がみられ、閉塞施設と考えられる。

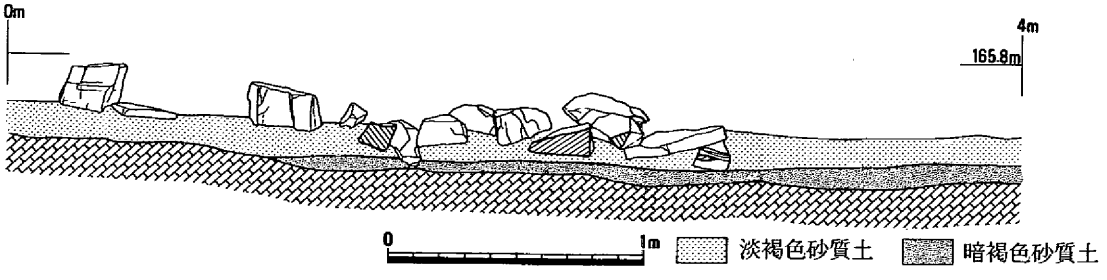
墓道は山道の切り通し断面から石室内の閉塞部の間にかけて検出した。断面は逆台形状ないしＶ字状を呈す。石室主軸や墓道の延長方向からみて、西側の谷から古墳へと続いていたと思われる。

床面および遺物出土状況（第24～27図）

古墳築造時の床面は基盤層上にあり、床面は奥壁部から羨道部にかけて緩やかな下り傾斜となっている（第１面）。この第１面と石室流入土との間の二つの層が、奥壁付近から閉塞部にかけてみられた。多くの遺物と供に棺（屍床）台が存在したことから埋葬面としてとらえられる。三面ともに遺物が出土しているが、奥壁部あたりでは各層が明確でなかったうえに追葬時の片付け以外にも後世の乱掘による遺物の移動も考えられる状況であるため、必ずしも層位と遺物の型式は一致しないと思われる。

最も上層の第３面では玄室奥左壁側に棺台がみられる（棺釘や棺痕跡ははみられず、屍床の場合も考えられるが、広い意味で棺・棺台と呼称する）。第３面で明らかな埋葬箇所はこの一ヶ所で、須恵器や鉄鏃もその周囲にはあるもののまとまりは無く、下層の遺物も含んでいる。

中層では玄室中央から羨門部にかけて石材がみられる。そのそばには釘118・119・120もあること

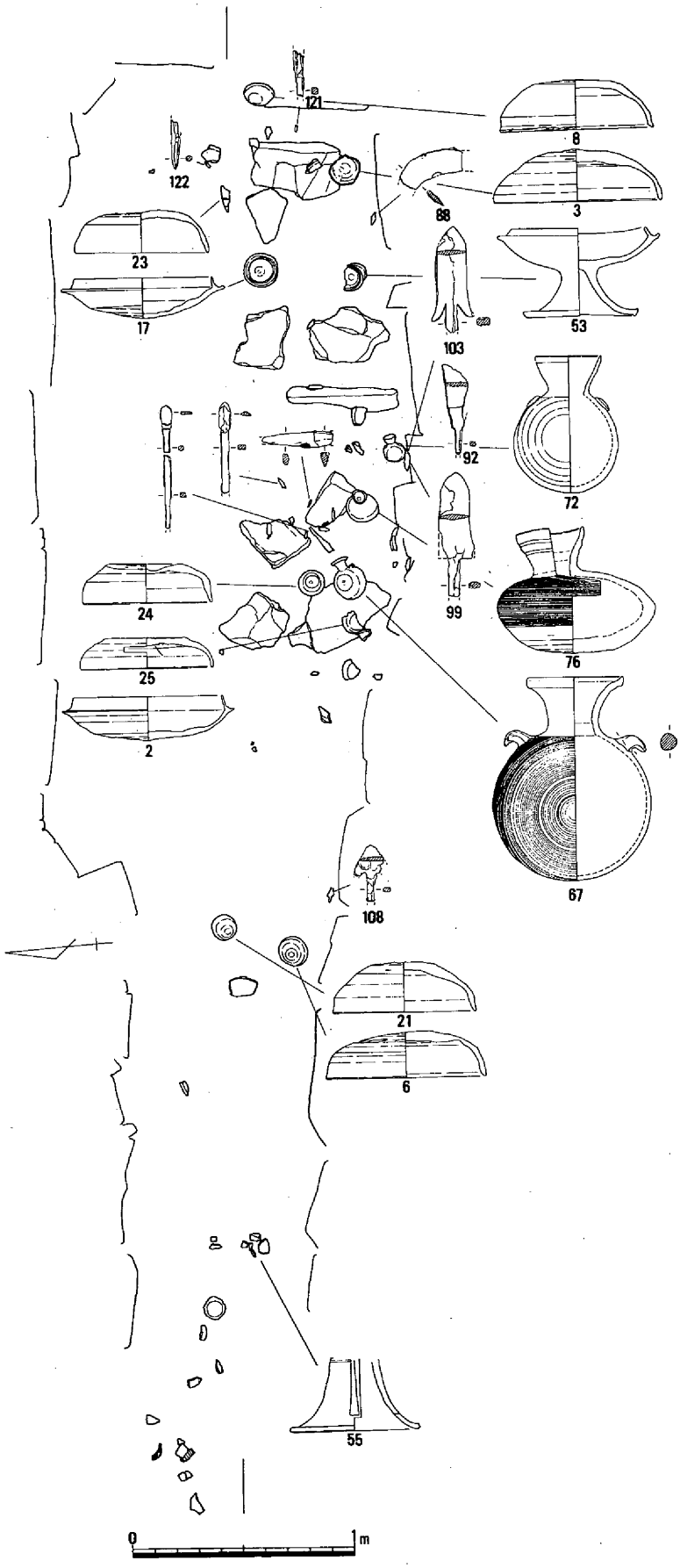


第24図　床面土層断面（S＝1：30）

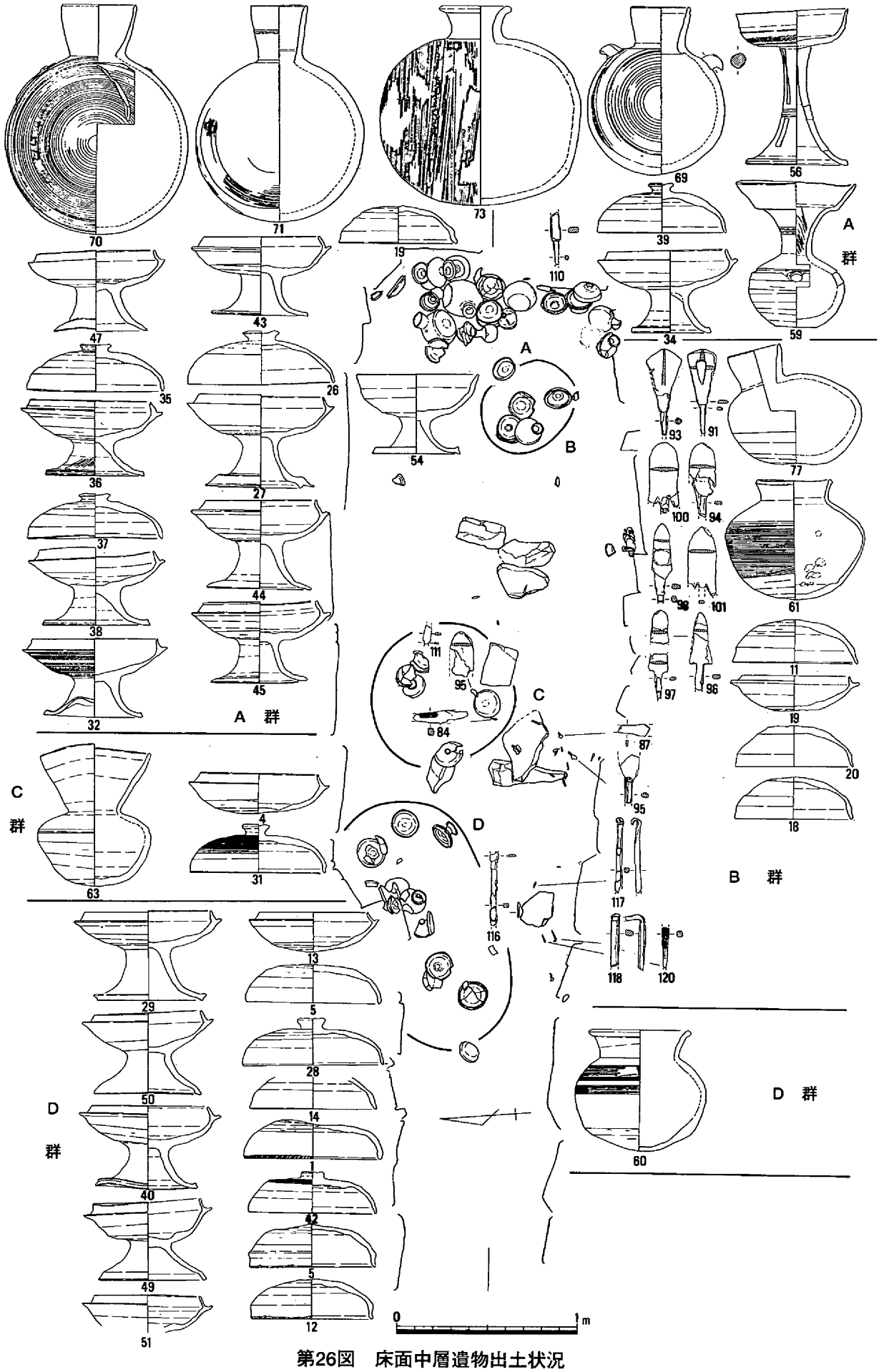
からこれを棺台の一部とみて、ほぼこの辺りにも木棺が想定できる。奥壁沿いには２０点余りの須恵器が集積する（A群）がある。これは第３面の造成時とそれ以前の遺物を片付けたのであり第１面（初葬時）の遺物を含むであろう。A群よりわずかに石室手前側のものをB群とし、棺台周囲をC群、袖部周辺にあるものをD群とする。この内A群とD群では高杯が主体となっていた。この他に、玄室中央の左壁沿いで鉄鏃８点以上がまとまって出土している（F群）。

石室構築時の第１面に残る遺物は少ない。玄室中央より若干右寄りに耳環が一対と直刀及び鍔がある。刀は切先を西に向けて置かれており、茎の辺りには鍔があった。この辺りは周囲と比べ若干凹んでおり、木棺の存在が想定でき、耳環と刀は棺内遺物として埋葬時の現位置を保っていると考えられる。それ以外の遺物は追葬時に取り片付けられたようである。この他に奥壁に接してある馬具類も片付けられたもので、座金具１点は第２面の須恵器73の中から出土している。土器はほとんど無く、75の平瓶は周囲にピット状の輪郭があり、上からの落ち込みと思われる。

以上、棺台や遺物の配置と層位からみて最低３回の埋葬行為が行われたことは明らかである



第25図　床面上層遺物出土状況



第26図　床面中層遺物出土状況

が、石室の床面に自然に土砂が堆積した後に埋葬面を造ったものではなく、追葬の際に奥壁際や袖部に遺物の片付けが行われていることからも人為的に埋め立てられたものとみることができよう。

出土遺物（第28～38図）

石室及び墳丘上から出土した遺物には須恵器、耳環、馬具、鉄刀、鉄鏃、刀子鎌および釘がある。このうち鉄製品は残片も含め百数十点あるものの破損と錆の進行による剥離が著しく元の形が判別できないものが大半である。

須恵器

蓋杯（第28図１～25）

法量と技法によって以下の４類に分類できる。

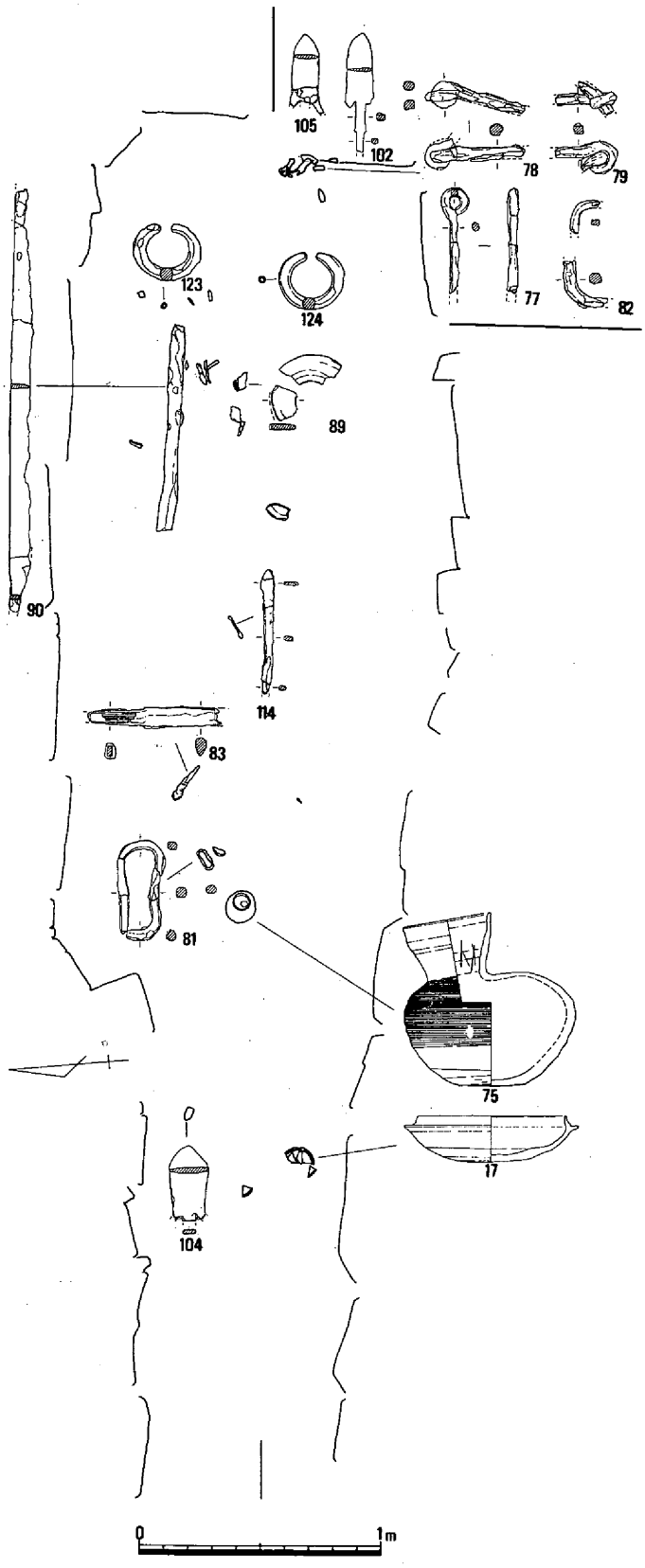
杯蓋１類（１・３・５・６）　口径は14cm以上、器高は4.5cm前後である。体部の約１／３は丁寧なヘラケズリによって仕上げられている。

杯蓋２類（８～12）　天井部およびその周辺を丁寧にヘラケズリしているが、１類より口径が小さく13cm前後にある。

杯蓋３類（18～21）　口径は12.6～18.7cmを図るものである。回転ヘラケズリが天井部周辺に認められるものの天井部にまでおよばず、ヘラ切り後に顕著な調整を行わないか、あるいはナデによる仕上げを行うものである。胎土・焼成・色調がいずれも良く似た一群である。

杯蓋４類（23）　天井部全体を丁寧にヘラで削るが、口径が３類より小さい。

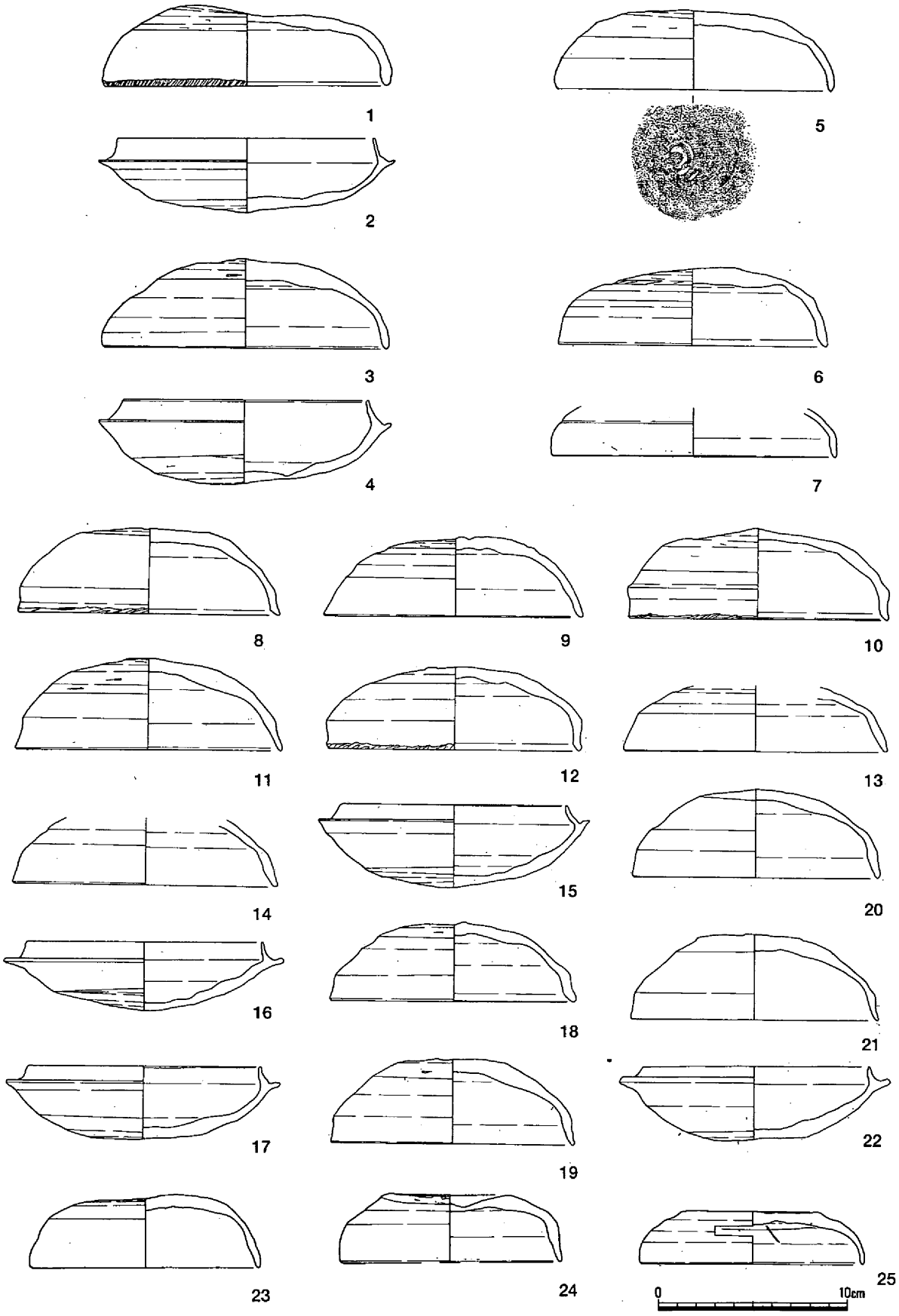
杯蓋５類（24･25）　口径は12cm以下である。24は天井部の周辺にヘラケズリが認められる。25はヘラ切り後に顕著な調整が認められない。



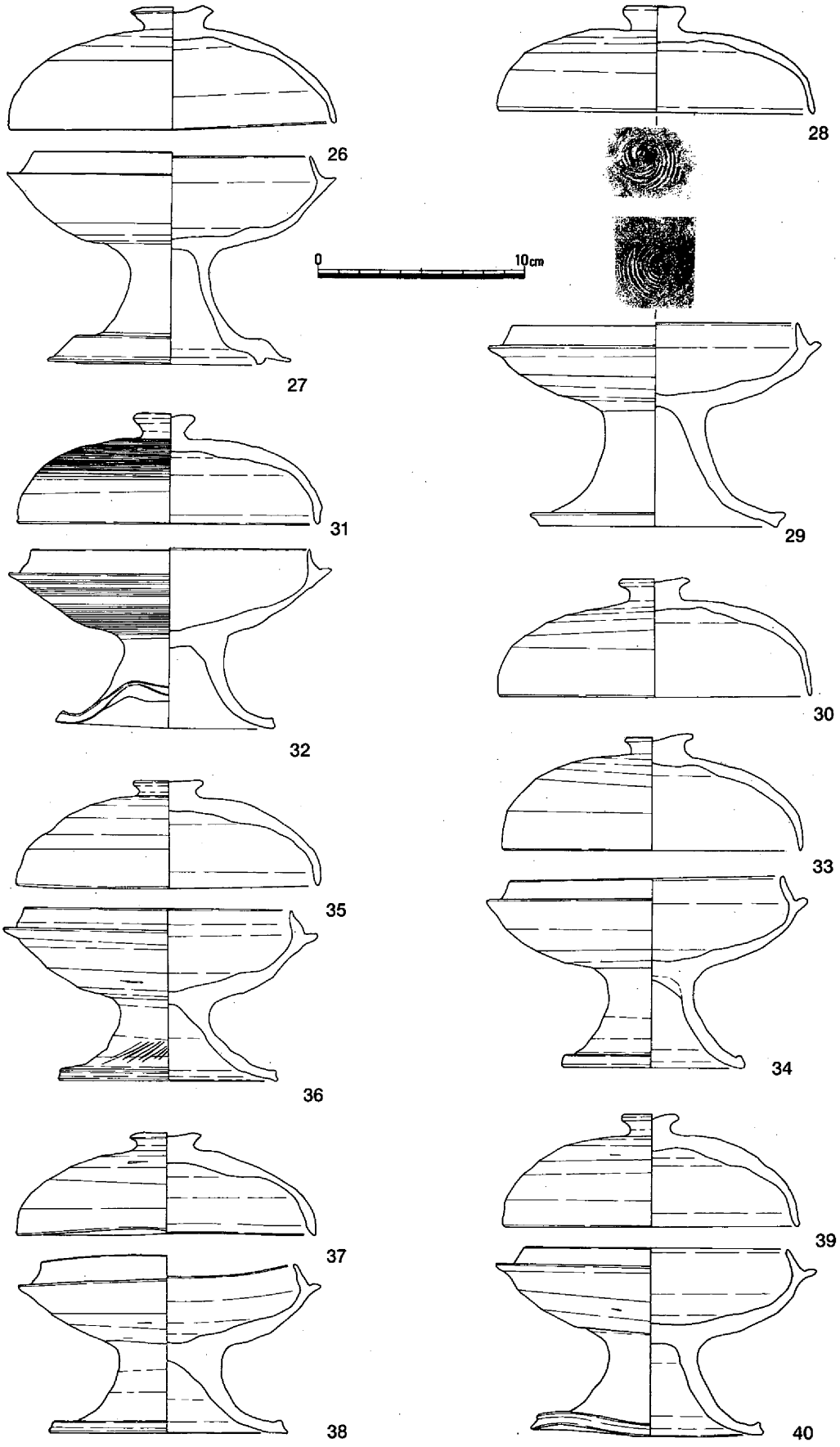
第27図　床面下層遺物出土状況

杯身１類（２・４）　口縁部径は13cm前後で、底部全体を丁寧にヘラケズリするものである。

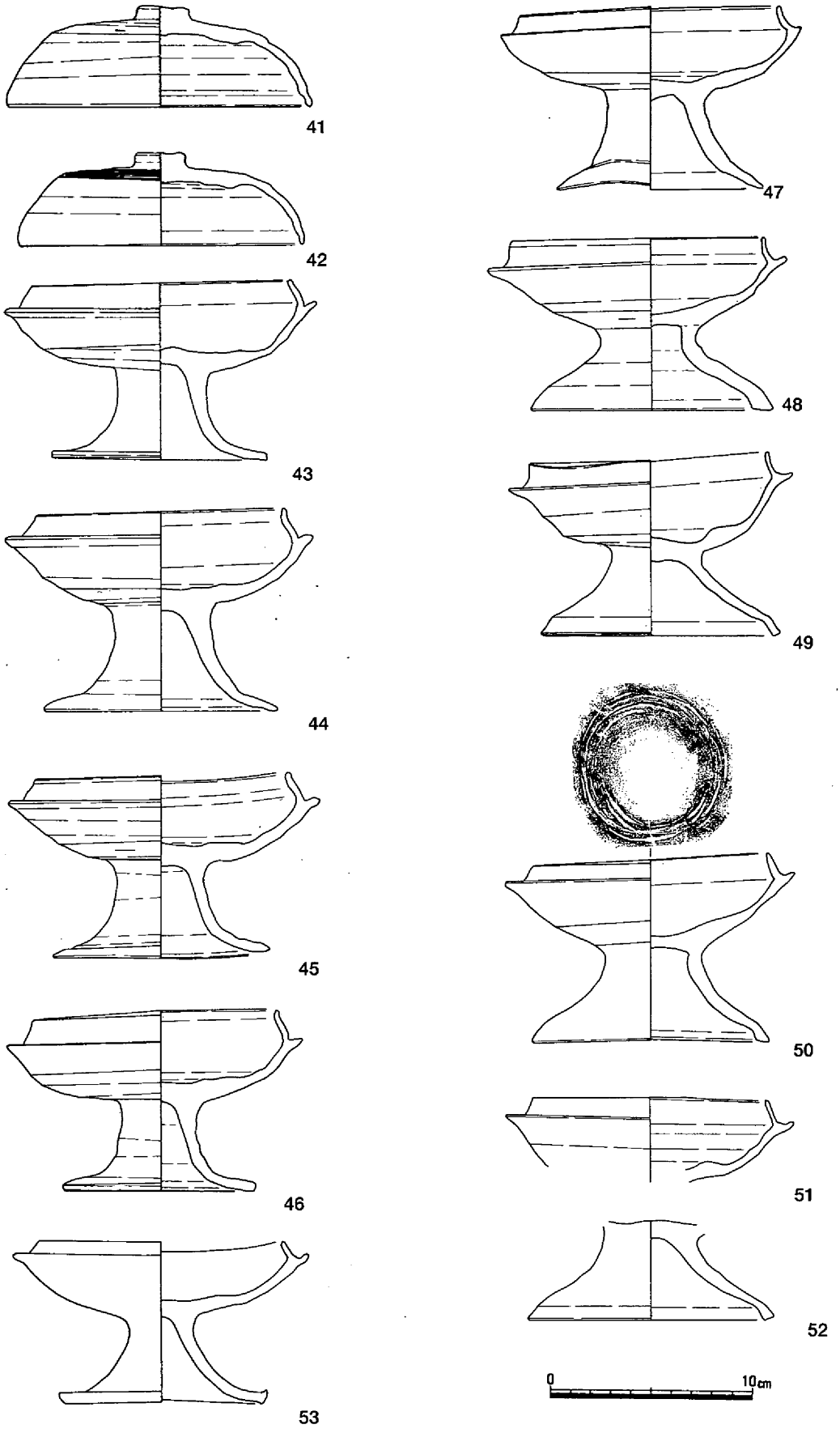
杯身２類（15）　口縁部径は12cm前後にある。底部は全体をヘラケズリによって仕上げる。



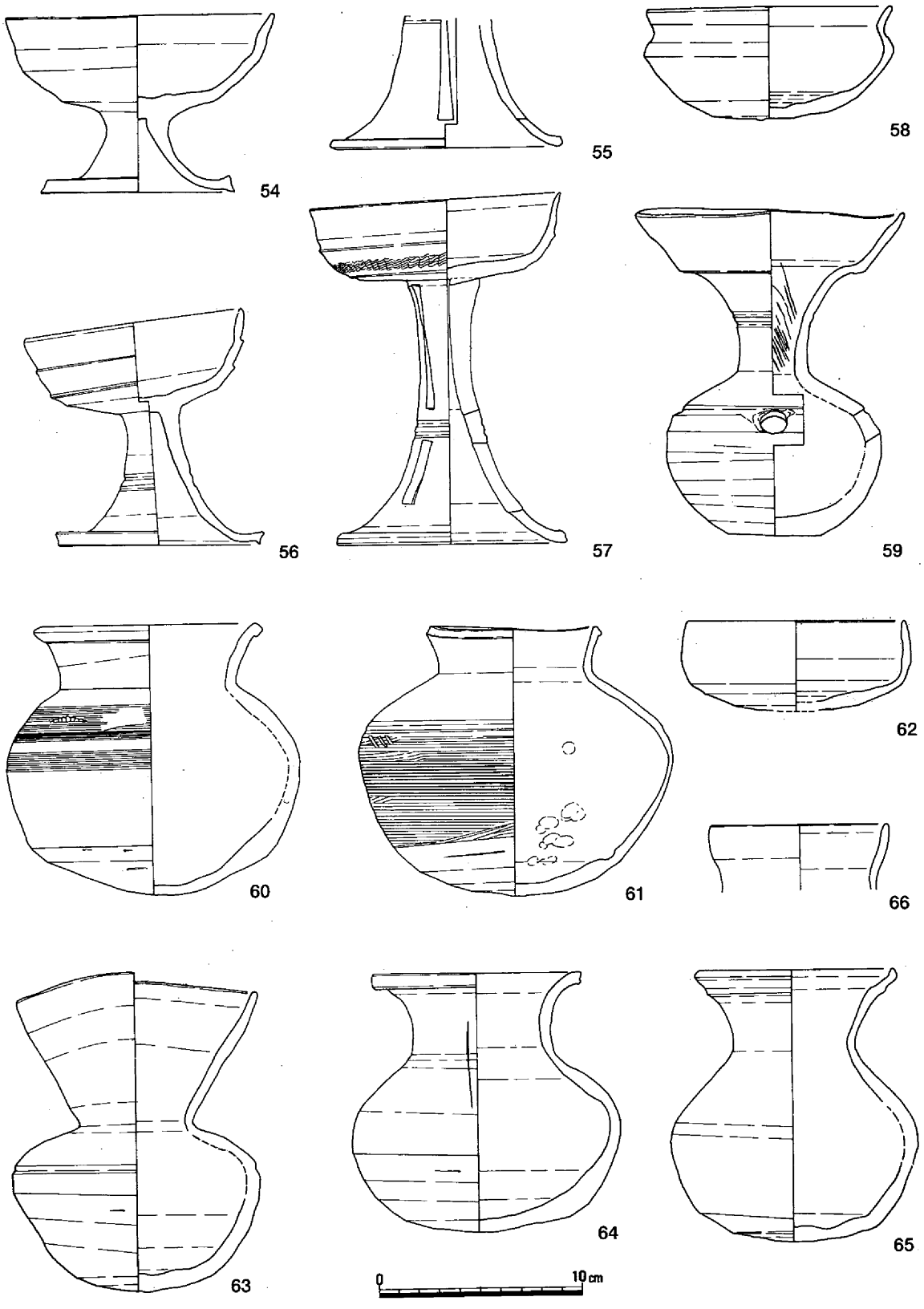
第28図　遺物実測（１）



第29図　遺物実測（2）



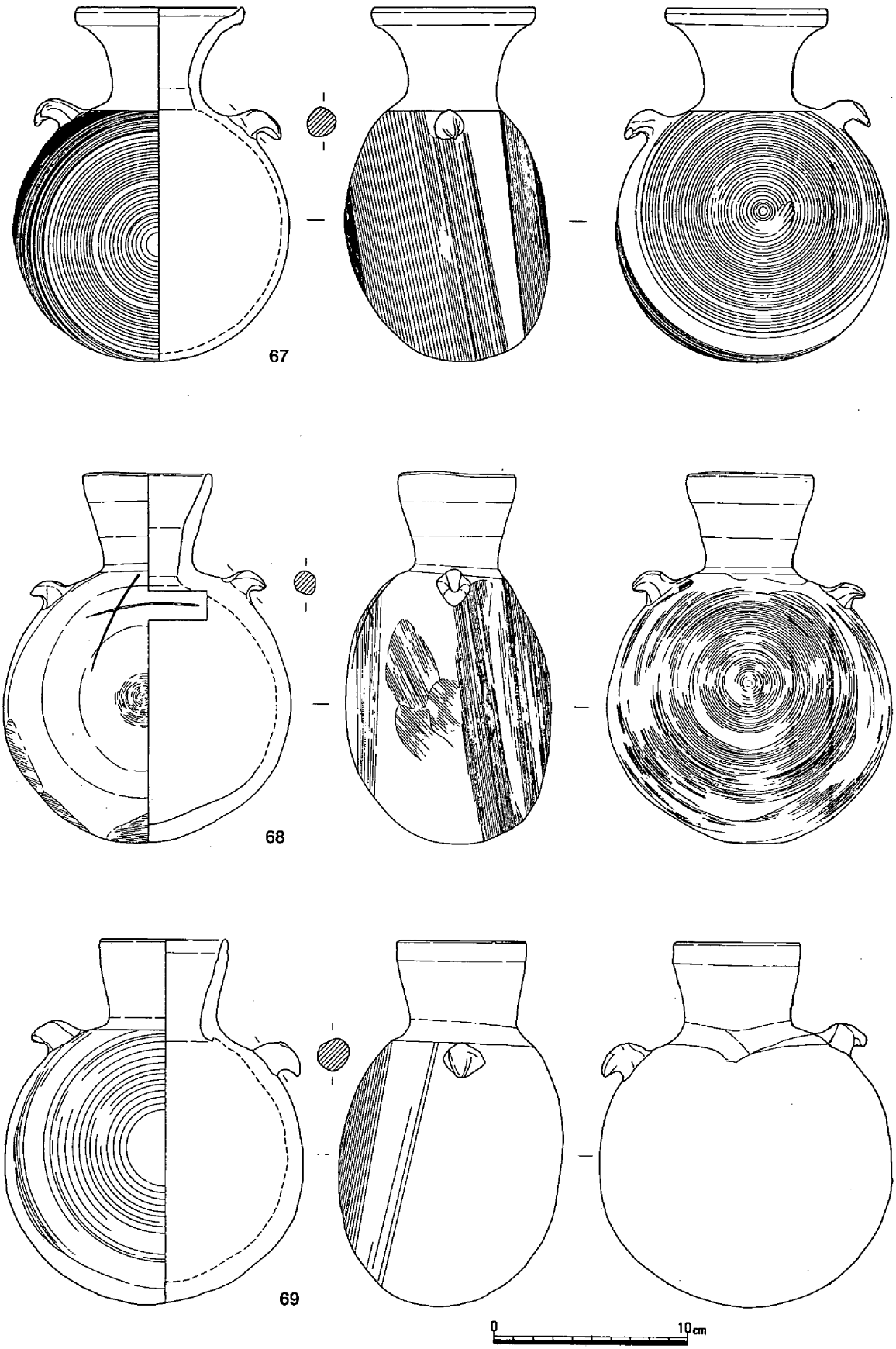
第30図　遺物実測（３）



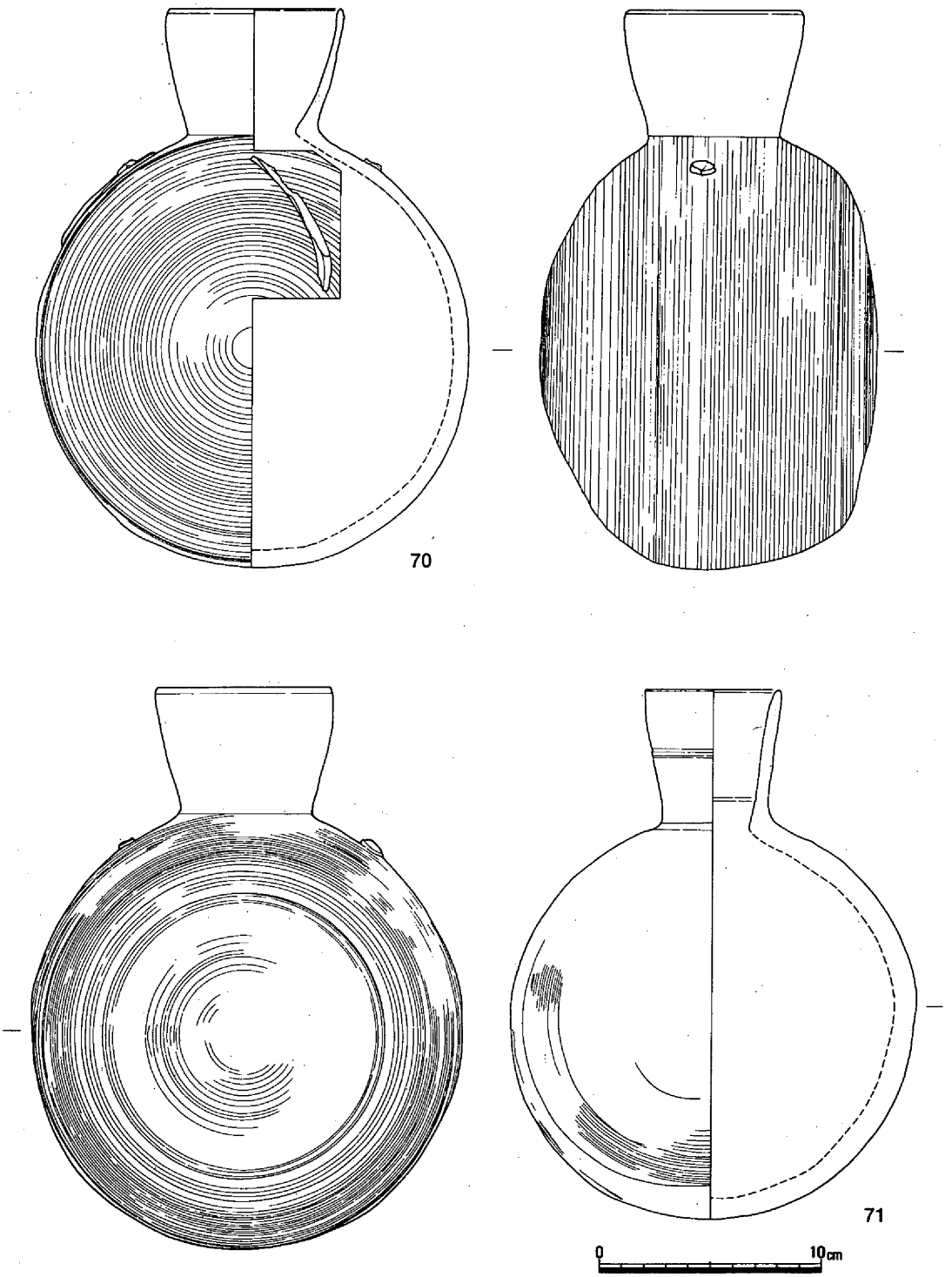
第31図　遺物実測（４）

杯身３類（16・17）　２類と比べやや器高が低く、口縁部の立ち上がりも低い。

杯身４類（22）　底部周辺にケズリが認められるものの底部はヘラ切り後未調整である。胎土・焼



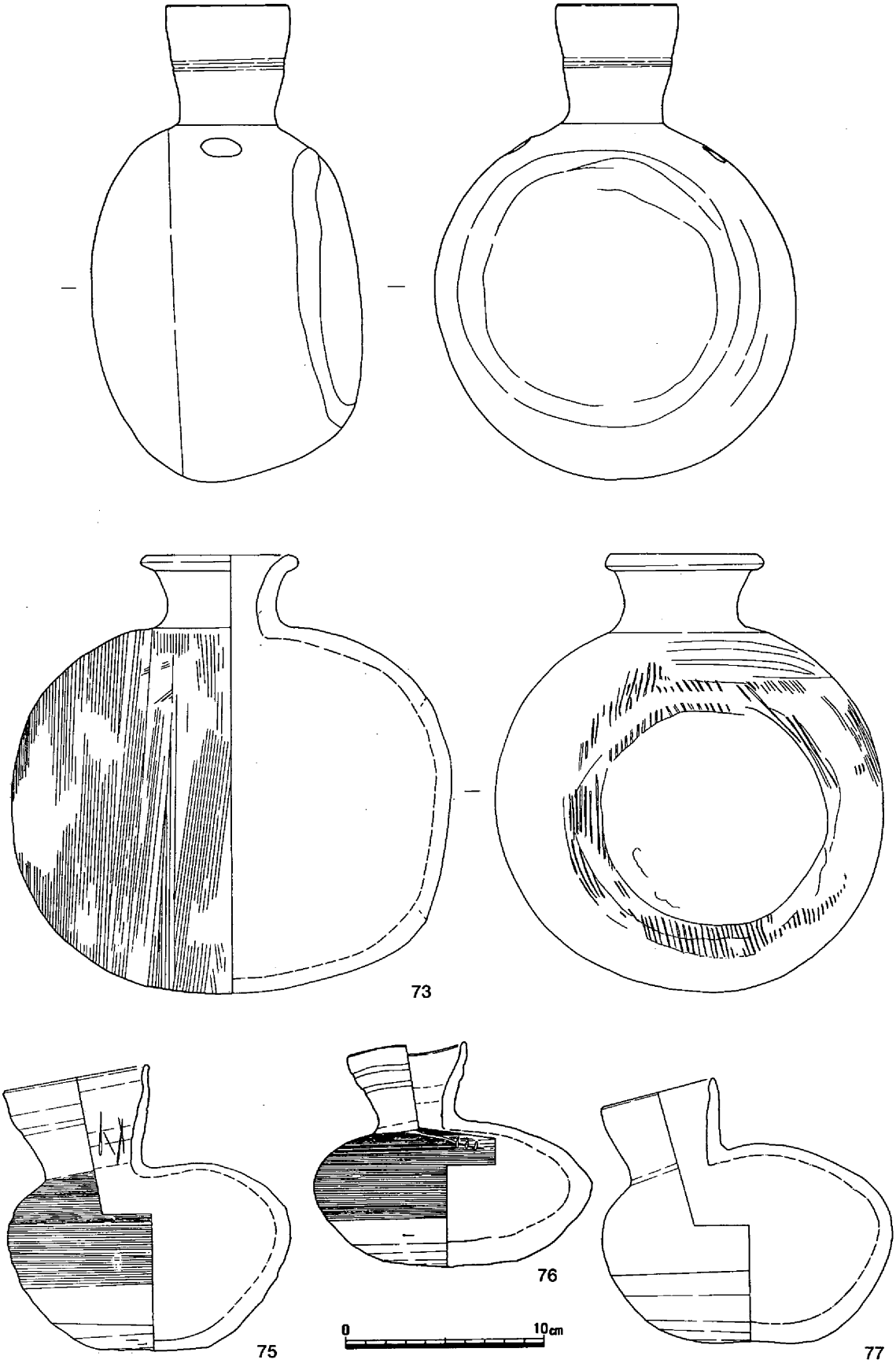
第32図　遺物実測（５）



第33図　遺物実測（6）

成・色調が蓋3類と共通する。

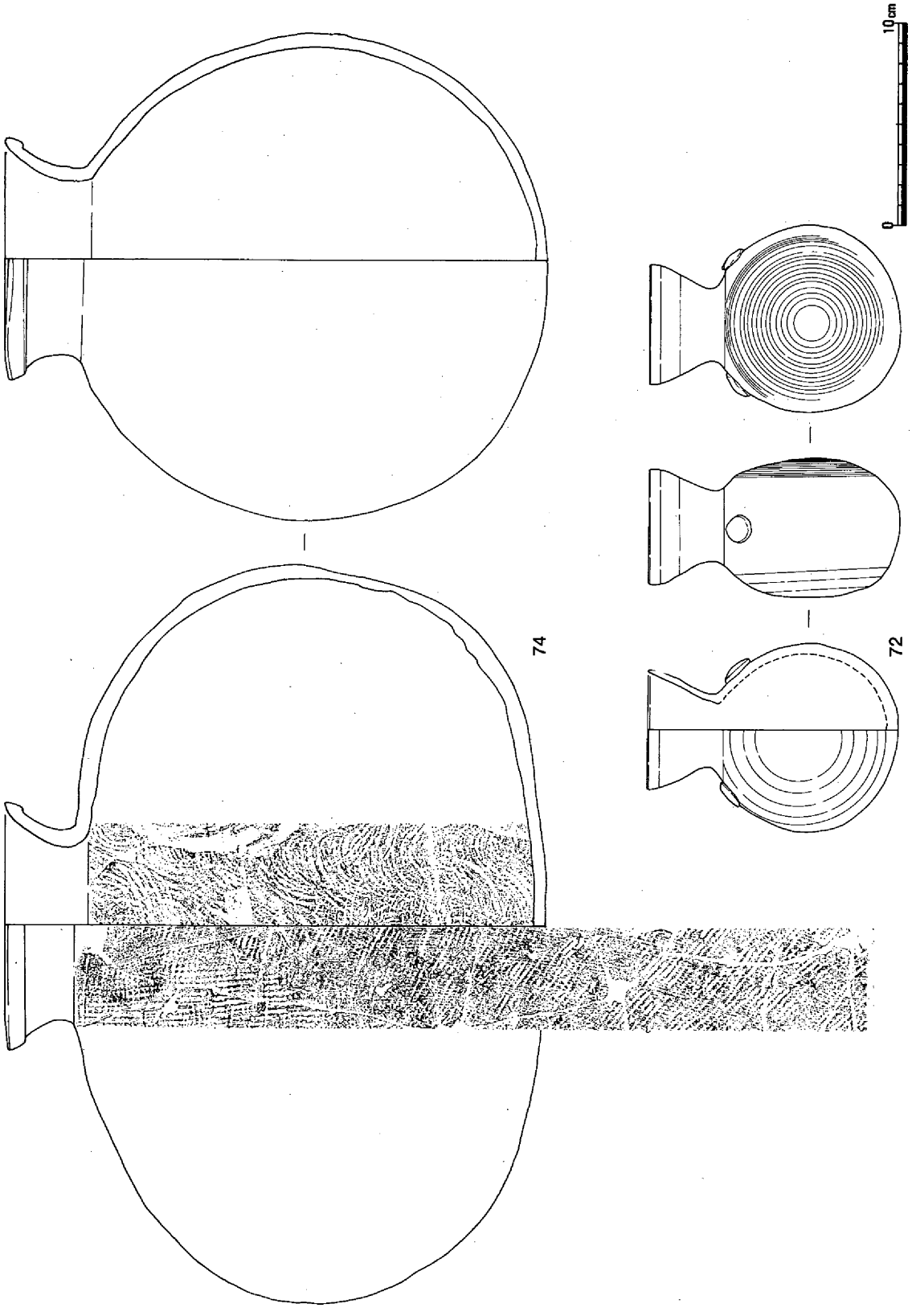
以上の蓋杯類は口径と技法などから、杯蓋1類と杯身1類、杯蓋2類と杯身2・3類が杯蓋3類と杯身4類が対応関係にあり、両者がセットとして副葬されていたと考えられる。杯蓋4類と5類は対応する杯身が認められないが、後世に持ち出されたものか、あるいは石室に副葬された段階で既に杯身として使用されたことも考えられる。



第34図　遺物実測（７）

有蓋短脚高杯（第29・30図26～53）

出土位置の他に法量、胎土や焼成の特徴から杯部と蓋のセットが明らかであり、以下の５類に分けられる。



第35図　遺物実測（８）

表６　畑ノ平５号墳土器観察表

NO	器種	口径	器高	手法の特徴	胎土	焼成	色調
1	杯蓋	14.8	4.4	外：回転ヘラケズリ（右）内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～3㎜の白色粒多	良	灰色
2	杯身	13.4	4	外：回転ヘラケズリ（右）内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～4㎜の白色粒少	良好	青灰色
3	杯蓋	14.2	4.8	外：回転ヘラケズリ（右）内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～5㎜の黒・白色粒極めて多	良好	灰白色
4	杯身	12.8	4.5	外：回転ヘラケズリ（右）内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～3㎜の白色粒多	硬	青灰色
5	杯蓋	14.4	4.3	外：回転ヘラケズリ（右）内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～5㎜の白色粒極めて多	硬	青灰色
6	杯蓋	14.2	4.2	外：回転ヘラケズリ（右）	0.5～3㎜の白色粒少,黒色斑少	良	灰白色
7	杯蓋	14.9		外・内：ヨコナデ	0.5～4㎜の白色粒多	不良	灰白色
8	杯蓋	13.6	5	外：回転ヘラケズリ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～5㎜の黒色斑僅少	良	暗灰色
9	杯蓋	14.8	4.5	外：回転ヘラケズリ（右）内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～3㎜の砂粒	良	灰色
10	杯蓋	13.5	4.9	外：回転ヘラケズリ（右）内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～1.5㎜の白色粒僅少	良好	灰～灰白色
11	杯蓋	13.5	4.3	外：ヘラケズリ内：ヨコナデ	0.5～4㎜の大きな白色粒多	良	灰白色
12	杯蓋	13.1	4.4	外：回転ヘラケズリ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	黒色粒僅少	良	灰～灰白色
13	杯蓋	13.8		外・内：ヨコナデ	0.5～1㎜の白色粒多	不良	灰白色
14	杯蓋	13.8		外・内：ヨコナデ	0.5～1.5㎜の白色粒多	不良	灰白色
15	杯身	12.3	3.7	外：回転ヘラケズリ（右）内：ヨコナデ	0.5～3㎜の白色粒多,黒色粒僅少	良	灰白色
16	杯身	12.6	4.5	外：周辺ケズリ（左）内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～3㎜の白色粒多	良	灰白色
17	杯身	12.2	3.9	外：回転ヘラケズリ（右）内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～4㎜の白色粒多	不良	緑灰色
18	杯蓋	13.7	4.9	外：周辺ケズリ（左),ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～3㎜の白色粒極めて多,黒色斑少	良	灰白色
19	杯蓋	13.2	4.6	外：周辺ケズリ（左）内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～4.5㎜の白色粒多	良	灰白色
20	杯蓋	13.1	4.7	外：周辺ケズリ（左),ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～4㎜の白色粒多	良	灰白色
21	杯蓋	2.8	4.2	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～4㎜の砂粒多	良	暗青灰色
22	杯身	14.3	3.9	外：周辺ケズリ（左）内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～3㎜の白色粒多	良	灰白色
23	杯蓋	12.1	3.9	外：回転ヘラケズリ（右）内：ヨコナデ	0.5～4㎜の白色粒	良	青灰色
24	杯蓋	11.9	3.6	外：周辺ケズリ,ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～2㎜の白色粒僅少	良	灰白色
25	杯蓋	11.7	2.8	外：ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～6㎜の砂粒少	良	灰色
26	高坏蓋	15.6	6	外：回転ヘラケズリ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.2㎜程の黒色粒やや多,白色粒僅少	硬	青灰色
27	短脚高杯	13.8	10.4	外：回転ヘラケズリ（左）内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.2㎜程の黒色粒やや多,白色粒僅少	硬	青灰色
28	高坏蓋	15.4	5.2	外：回転ヘラケズリ,カキメ　内：ヨコ･仕上げナデ,同心円当て具痕	0.2㎜の黒・白色粒極めて多	硬	青灰色
29	短脚高杯	14	9.9	外：回転ヘラケズリ　内：ヨコナデ,仕上げナデ(同心円文当て具痕)	0.2㎜の黒・白色粒極めて多	硬	浅黄色
30	高坏蓋	15.2	5.8	外：回転ヘラケズリ（右）内：ヨコナデ,仕上げナデ	1㎜の黒・白色粒多	硬	明青灰色
31	高坏蓋	14.7	5.4	外：カキメ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.2～1㎜の白・黒色粒やや多	硬	灰白色
32	短脚高杯	13.7	8.8	外：カキメ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～1㎜の白色粒やや多	硬	青灰色
33	蓋	14.8	5.7	外：回転ヘラケズリ（右）内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～2㎜の黒色斑極めて多	硬	灰色
34	短脚高杯	13.1	9.4	外：回転ヘラケズリ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～2㎜の黒色斑多	硬	灰色
35	蓋	14.5	5	外：回転ヘラケズリ（右）後カキメ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.2～4㎜の白色粒極めて多	硬	灰白色
36	短脚高杯	13.1	8.5	外：回転ヘラケズリ（右）内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.2～4㎜の白色粒極めて多,黒色粒少	硬	灰白色
37	蓋	14.6	8.2	外：回転ヘラケズリ（右）内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.2～5㎜の白色粒多,黒色粒少	硬	灰色
38	短脚高杯	12.4	8.7	外：回転ヘラケズリ（右）内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～5㎜の白色粒多	硬	灰白色
39	蓋	14.1	5.5	外：回転ヘラケズリ（右）内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.2～3.5㎜の黒色粒多	硬	灰白色
40	短脚高杯	13	9.3	外：回転ヘラケズリ（右）内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.2～2㎜の白・黒色粒やや多	良	灰白色
41	高坏蓋	14.7	5	外：回転ヘラケズリ（右）内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.2～3㎜の白やや多	良	暗青灰色
42	高坏蓋	13.7	4.6	外：ヘラケズリ（右）後カキメ　内：ヨコナデ	0.2～3㎜僅少	良	灰色
43	短脚高杯	12.8	8.9	外：回転ヘラケズリ（右）内：ヨコナデ	1㎜以下の白・黒色粒やや多	硬	灰色
44	短脚高杯	12	10	外：回転ヘラケズリ（右）内：ヨコナデ	0.2～3㎜の白・黒色粒僅少	硬	灰色
45	短脚高杯	12.3	9.2	外：回転ヘラケズリ（右）内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.2～5㎜の白・黒色やや多	硬	灰色
46	短脚高杯	11.9	9.2	外：回転ヘラケズリ　内：ヨコナデ	0.2～2㎜僅少	硬	灰色
47	短脚高杯	12.6	9.2	外：ヘラケズリ（左）内：ヨコナデ,仕上げナデ（指押さえ）	0.1～2㎜の黒・白色粒極めて多	良	灰色
48	短脚高杯	12.4	8.7	外：回転ヘラケズリ（右）後ナデ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.2～1.5㎜の白色粒多	不良	灰色
49	短脚高杯	12.4	9.1	外：ヘラケズリ　内：ヨコナデ	0.5㎜以下の白・黒色粒僅少	良	暗オリーブ灰色
50	短脚高杯	11.8	9.3	外：ヘラケズリ（左）内：ヨコナデ（同心円当て具）	0.2～1㎜の黒色粒極めて多,白色粒多	硬	灰白色
51	短脚高杯	14.2		外：回転ヘラケズリ　内：ヨコナデ	0.1㎜以下の白色粒僅少	硬	灰色
52	短脚高杯			外・内：ヨコナデ	0.1㎜以下の白色粒僅少	硬	灰白色
53	短脚高杯	12.2	8	外：回転ヘラケズリ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.2～2㎜の白・黒色粒多	不良	灰白色
54	無蓋短脚	13.3	8.9	外・内：ヨコナデ	0.2～3㎜の白色粒極めて多,黒色粒少	不良	淡灰褐色
55	長脚高杯	11.5		外・内：ヨコナデ	0.2～0.5㎜の白色粒少	不良	灰白色
56	長脚高杯	12.4	17.4	外・内：ヨコナデ	0.2～3㎜多	硬	灰白色
57	長脚高杯	10.8	11.8	外・内：ヨコナデ	0.2～2㎜の白色粒極めて多	硬	灰褐色
58	鉢	12.2	5.7	外：ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ	0.2～4㎜の白色粒多	硬	青灰色
59	甕	13.2	16.4	外：体下半ヘラケズリ（右）内：ヨコナデ	0.5～1.5㎜の白色粒やや多	硬	灰色
60	広口壺	11.6	13.4	外：体：カキメ,体下1／3ヘラケズリ（右）内：ヨコナデ,仕上げナデ	1㎜以下の砂粒僅少	硬	明青灰色
61	広口壺	8	13.4	外：体：カキメ,下1／3ヘラケズリ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.2～3㎜の白色粒僅少	硬	暗オリーブ灰色
62	壺蓋	10.6	4.5	外：回転ヘラケズリ（右）内：ヨコナデ	0.5～3㎜の白色粒極めて多	硬	灰色
63	直口壺	10	15.9	外：体下半2／3ヘラケズリ（右）内：ヨコナデ	0.5～3㎜の白色粒多	良	オリーブ黒色
64	直口壺	10.2	12.9	外：体1／2ヘラケズリ(左)後カキメ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.2～1㎜の白色粒少	良	灰色
65	直口壺	9.6	13.2	外：ヘラケズリ（左）内：ヨコナデ	0.2～2㎜の白・黒色僅少	硬	明青灰色
66	瓶	8.5		外・内：ヨコナデ	0.2～0.5㎜の白色粒少	硬	灰色
67	提瓶	7.2	14.5	外：カキメ　内：ヨコナデ	1㎜以下の白色粒少	硬	灰白色
68	提瓶	6.1	19.2	外：ケズリ後ナデ,カキメ　内：ナデ	0.5～3㎜の白色粒やや多	硬	暗オリーブ灰色
69	提瓶	6.6	18.7	外：ケズリ後ナデ,カキメ　内：ナデ	0.1～4㎜の白色粒やや多	硬	灰色
70	提瓶	8.1	25.6	外：ヘラケズリ（右）後カキメ　内：ナデ	0.5～5㎜以下の白色粒極めて多	硬	灰色
71	提瓶	6.2	24.3	外：ヘラケズリ（左),カキメ　内：ヨコナデ		硬	灰色
72	提瓶	6	12.4	外：ヘラケズリ,カキメ　内：ヨコナデ	3㎜以下の黒・白色粒やや多	硬	灰白色
73	横瓶	22	22.3	外：ヘラケズリ（右）後ナデ一部カキメ	0.2～2㎜の白色粒多	硬	緑灰色
74	横瓶	12.2	27	外：タタキ,一部ナデ	0.5㎜以下の白色粒僅少	不良	灰色
75	平瓶	7.2	14.5	外：カキメ,回転ヘラケズリ　内：ヨコナデ	0.5㎜以下の白色粒僅少	硬	灰色
76	平瓶	6.4	11.4	外：ヘラケズリ（右）内：ヨコナデ	0.2～1㎜の白色粒僅少	硬	灰白色
77	平瓶	6.6	13.5	外：ヘラケズリ　内：ヨコナデ	0.2～1㎜の白色粒少	良	青灰色

１類（26～30）　蓋の口径は15cm以上で、杯部は14cm前後を図り、器高も最も高い一群である。蓋部のつまみは上面が皿状にくぼむ。

２類（31～40）　１類と同じ特徴を持つが、１類と比べて口径・器高が縮小し、口径が蓋は14cm台、杯部は13cmほどのものである。

３類（41～46）　口径が12cmと小さい割に杯部の立ち上がりが比較的高い一群である。極めて精良な胎土が特徴的な一群である。蓋のつまみはボタン状を呈する。杯身３類と胎土・焼成・色調が類似する。精良・堅緻で特徴的な１群である。

４類（47～52）　３類と法量的には変わらないが、脚部が「くの字状」に屈曲するのが特徴的なものである。

５類（53）　杯部のヘラケズリは省略され、口縁部の立ち上がりも小さいものである。

長脚高杯（第31図55～57）　55･57は２段３方透かし。56は杯部に２条の稜線が入り、脚部中央にも２条の沈線がみられる。長脚高杯の退化形式と思われる。

短脚無蓋高杯（第31図54）　杯蓋を逆にしたかのような椀状の杯部をもつ。

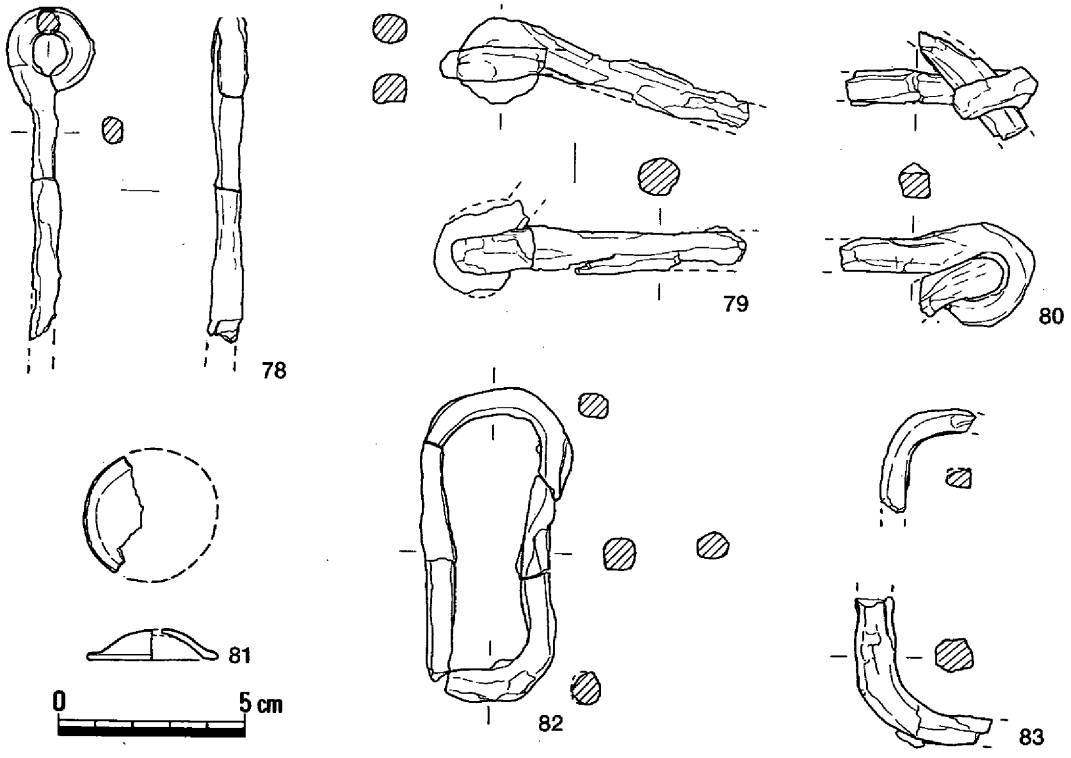
椀（第31図58）　頸部から緩やかに外形する口縁部をもち、鉢状を呈する。

瓻（第31図59）　底部は平底で、肩部や頸部に沈線がめぐる。

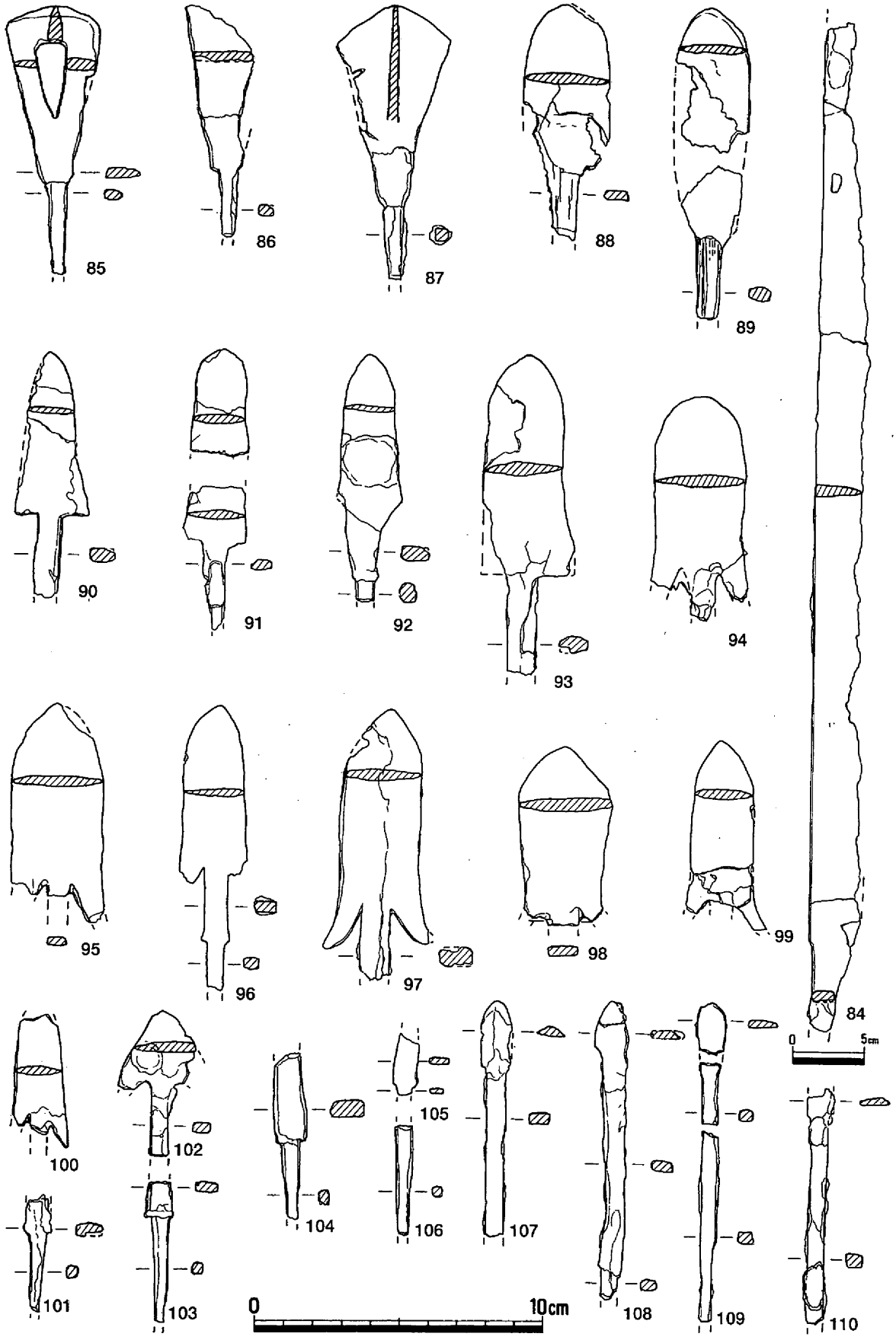
壷類（第31図60～65）　広口壷60・61、長頸壷63、長頸広口壷64・65がある。

提瓶（第32～35図67～72）　大形70・71、中形67～69、小形72がある。67～69は肩部に鈎状の把手がつき、67は受け口状の口縁部をなす。70～72は肩部にボタン状の装飾がある。72はミニチュアと呼べるものである。

平瓶（第34図75～77）　75・76は体部下半に回転ヘラケズリを施し、それより上はカキメで充足す



第36図　遺物実測（９）



第37図　遺物実測（10）（S＝1：4.刀）

る。口縁部に１～２条の沈線をめぐらす。77は体部上半はヨコナデによって仕上げるが、底部にヘラケズリはみられない。

横瓶（第34図73・第35図74）　体部が樽状の73と断面が長円形になる74の２種類がある。

鉄製品（78～123）

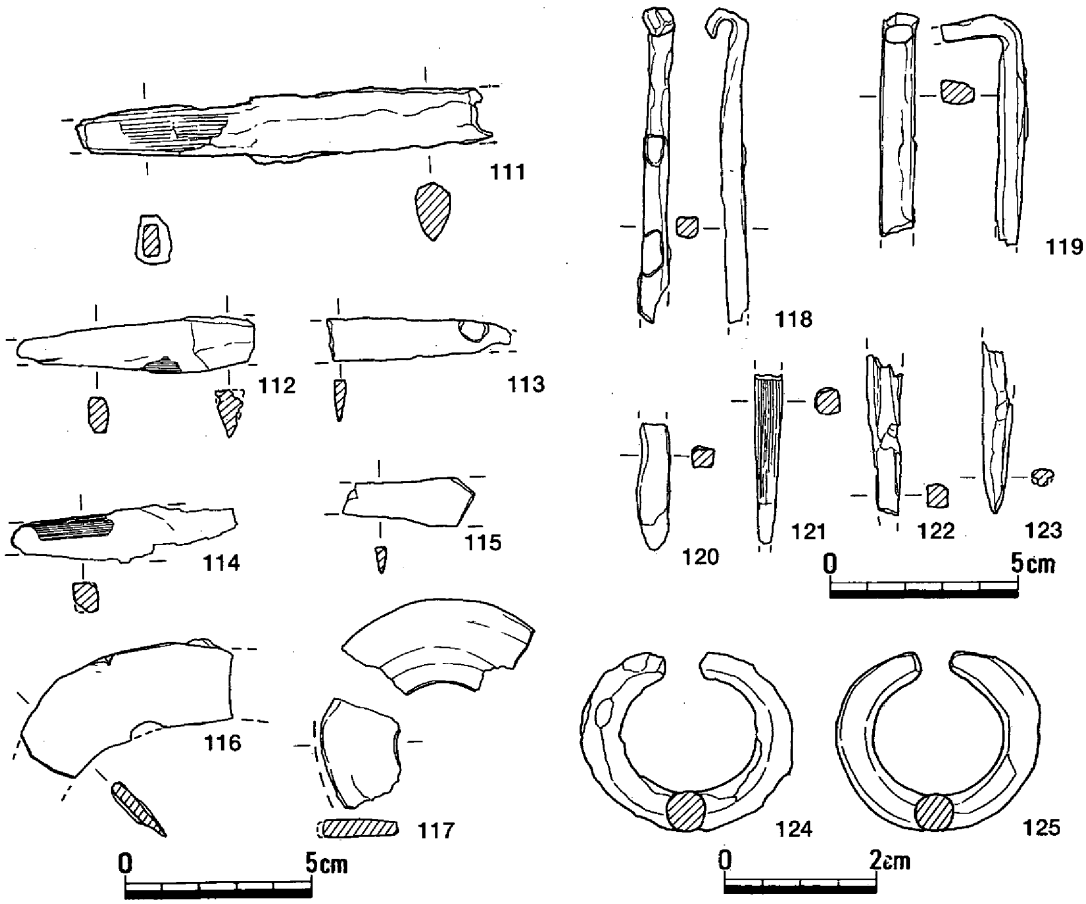
馬具（第36図78～83）　いずれも鉄製である。78～80・83は素環の鏡板付き轡の部品である。78は引手金具であり、79は鐙の部分である。80は鐙端環ないし引手端環と素環の鏡板との連結する箇所である。82は鉸具で刺金をもたない。81は円形の座金具である。83は環体を曲げて立聞部を造りだす瓢形鏡板の破片ではないかと思われる。

刀（第37図84・第38図117）　84は平造りの直刀である。切先と茎部を欠き刃部もかなり破損する。関部は両関である。117は84に伴う円形の鍔である。

鉄鏃（第37図85～110）　鉄鏃は広根式（85～104）と尖根式（106～110）があり、約3／4が広根式であり鏃身部の形態によってさらに次の６類がある。85・86は方頭式で、85は鏃身部中央に逆三角形の透かしがある。それ以外としては圭頭式（87）、柳葉式（88～92）、長三角式（93）、逆刺柳葉式（94～100）、逆刺三角式（102）がある。96は関部に棘状突起が、103の関は台形状をなす。尖根式では鏃身が柳葉形の107と三角形の108がある。

刀子・鎌（第38図111～116）　５点あるが全容のわかるものはない。111・112・114は柄に木質が残る。うち85は墳丘盛土内から出土した。116は鎌であろう。

釘（第38図118～123）　木棺の棺釘と思われるが、これ以外に明らかに釘と断定できる数は少ない。



第38図　遺物実測（11）

頭部の形にはあらかじめ打ち出した頭部を湾曲するように折り曲げる118と棒状の鉄を直角に折り曲げた長い頭部の119がある。

耳環（第38図124・125）

銀環であるが銀層は大半が剥離し、銅芯も錆によって暗緑色を呈す。

小結

５号墳は古墳群中で唯一の片袖式石室で平面形が胴張りという特徴があった。副葬品についても馬具・刀・鉄鏃がみられること、古墳の位置が丘陵の最高所にあることなど、群中での優位性を示しており、古墳群形成の契機となる古墳である。

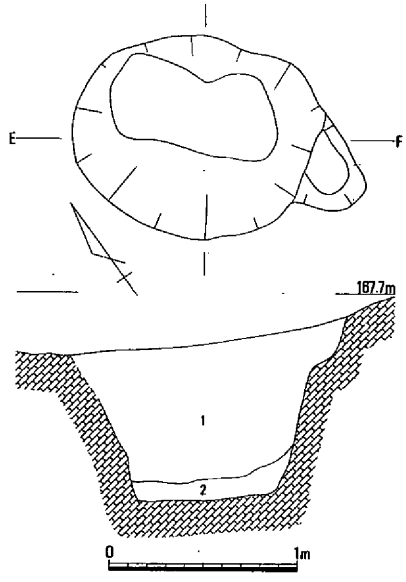
出土遺物は鉄製品が錆化と破損によって全容がわからないが、須恵器は80点余りがあり良好な資料が得られた。蓋杯類と高杯の比率は１：１と、高杯類が占める割合が高いが、その大半が短脚高杯であること、器台・台付壷の欠落も１つの特徴である。

石室の床面は３層に分かれ、棺台や遺物の配置状況から最低３回の埋葬が想定できる。これは須恵器の蓋杯類が３～４型式に別れることから、ある程度の時間を経過しての追葬が行われている。埋葬面・位置と須恵器の蓋杯類・高杯の出土位置との関係については、第３面（最上層）には１類の蓋杯もあるが４・５類の蓋と５類の高杯が棺台周囲にあることからこの埋葬が最も新しく位置づけられる。第２面ではＡ群に高杯１～３類、Ｂ群に胎土等の共通する蓋杯18～20、袖部は１・２類の蓋杯と高杯では１・２類はあるが４類が多く、石室内は乱掘を被っているが、ある程度の傾向は指摘できる。

古墳に伴わない遺構・遺物（第39・40図）

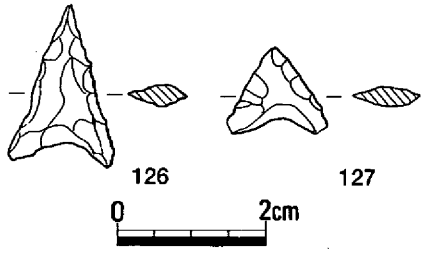
５号墳の南周堀部分で土壙を１基検出した。平面形は長さ130×110cmの楕円形で、深さ100cmを測る。土壙内からは遺物は出土していないが、土壙の一部が古墳盛土直下にもぐり込んでいることから古墳築造以前のものと考えられる。土壙の埋土はいわゆる黒ボク層である。この土は古墳群の立地する尾根上ではここ以外には確認できていない。ただし、この土壙と関連する可能性のある遺物として、５号墳と近接する７号墳や10号墳の周囲から出土している石鏃がある。２点とも縄文時代のものと考えられる。さらに、今回の工業団地造成に伴う発掘調査では虫尾遺跡、黒土中世墓において縄文土器ならびに落とし穴状遺構が検出されており、古墳群の立地するこの丘陵も縄文人の狩猟場であった可能性は十分にあるといえよう。

これらのことから、この土壙も縄文時代の落とし穴あるいは貯蔵穴である可能性が考えられる。



1.黒褐色粘質土
2.黒褐色粘質土（黄白色土混じり）

第39図　周辺土壙（S=1：40）



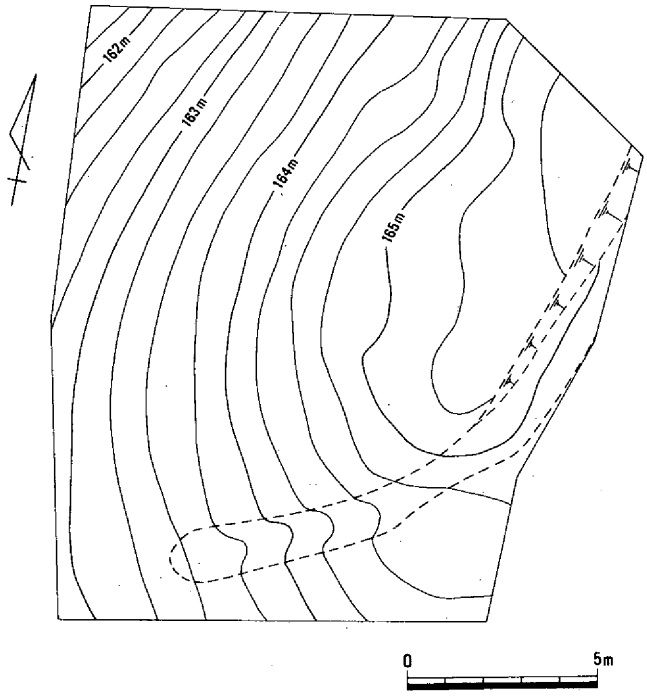
第40図　周辺出土石鏃

（２） 畑ノ平10号墳

調査前の状況（第41図）

10号墳はＣ２支群の２～４・６号墳と同じ尾根の付け根部分に位置し、山頂にある５号墳に近接する。４基が裾を接するように密集するＣ２支群からは多少距離が離れており、また尾根の東斜面に位置するＣ２支群に比べ尾根上の西側斜面寄りに位置することから10号墳は５号墳と２基で一支群を形成していると思われる。

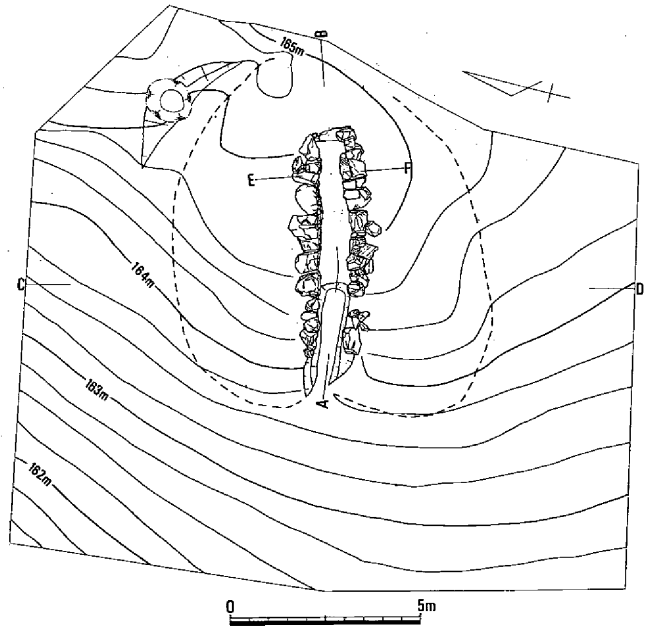
古墳の踏査時の状況は、低灌木が激しく生いしげっていたうえに墳丘自体も５号墳との間が山道の切り通しによって周堀と墳丘の一部を大きくえぐり取られているなど、その存在は判然としなかった。ただ墳丘らしきわずかな高まりが存在していたため、トレンチを入れたところ石室石材が確認できたため10号墳として調査を行った。



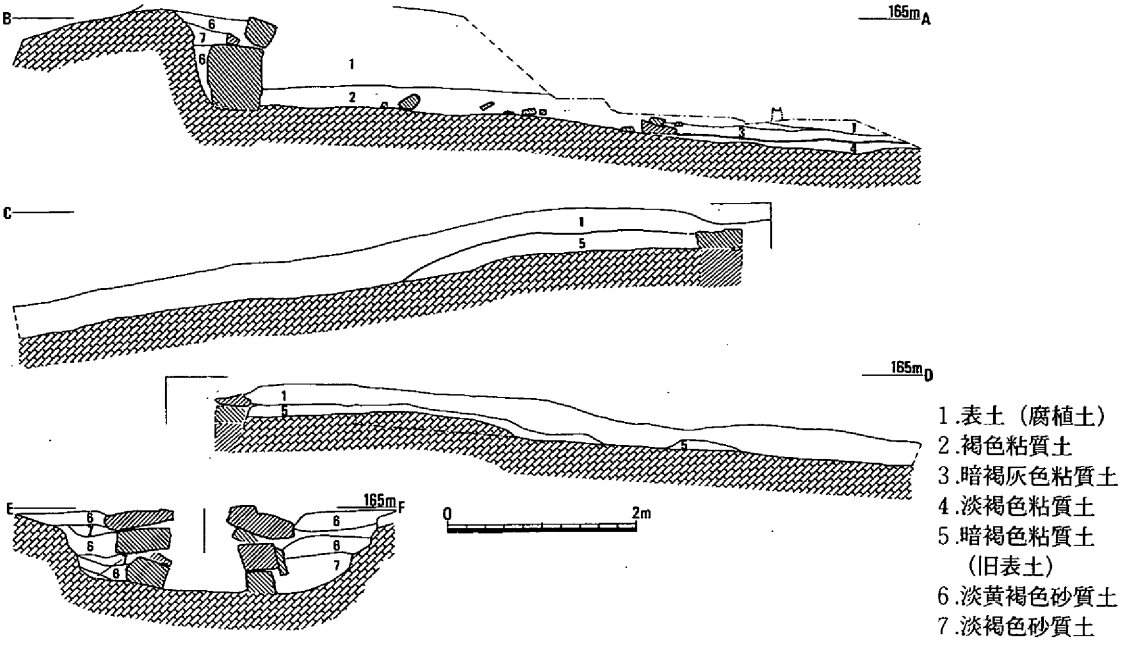
第41図　調査前地形測量

墳丘と周堀（第42･43図）

10号墳は横穴式石室を埋葬施設とする古墳である。墳丘は盛土の流失や削平によって大きく損なわれており、とりわけ谷側の墳丘は流失によって墳端ラインはかなり不明瞭であった。周堀は、わずかに墳丘北東部分に存在する。幅は1.5ｍ、さ0.2ｍを測る。この周堀は墳丘南側では平面的には検出できなかったが土層断面では幅約１ｍ、深さ0.1ｍが認められた。また調査前の墳丘に沿って小道が存在し、またその箇所が傾斜変換点にあたることから、小道が墳端や周堀を踏襲していたと考えられる。以上から墳丘規模は石室の主軸ラインが長い楕円形で、長径9.5ｍ、短径8.5ｍに復元できる。墳丘高は石室開口床面から約1.5ｍを測るが、墳丘南裾からは高さ0.7ｍに満たない。石室は天井石や側壁の一部が失われているところから本来の高さは不明である。



第42図　墳丘測量



第43図　墳丘土層断面

墳丘盛土は旧表土である暗褐色砂質土上にわずか10cmほどがみられるだけであった。

横穴式石室（第44図）

石室は天井石及び側壁の一部が持ち去られており、石室は流入した土砂によって完全に埋まり切っていた。石室は無袖の横穴式石室で全長5.7ｍ、奥壁幅0.85ｍ、石室最大幅0.9ｍを測る。石室の平面形体は特徴的で、奥壁から開口部方向に向けて3.5ｍの付近で屈曲し「逆くの字状」を呈しており、石室の主軸は石室奥ではＮ-71.5°-Ｅであるが、開口部付近ではさらに西に振れる。

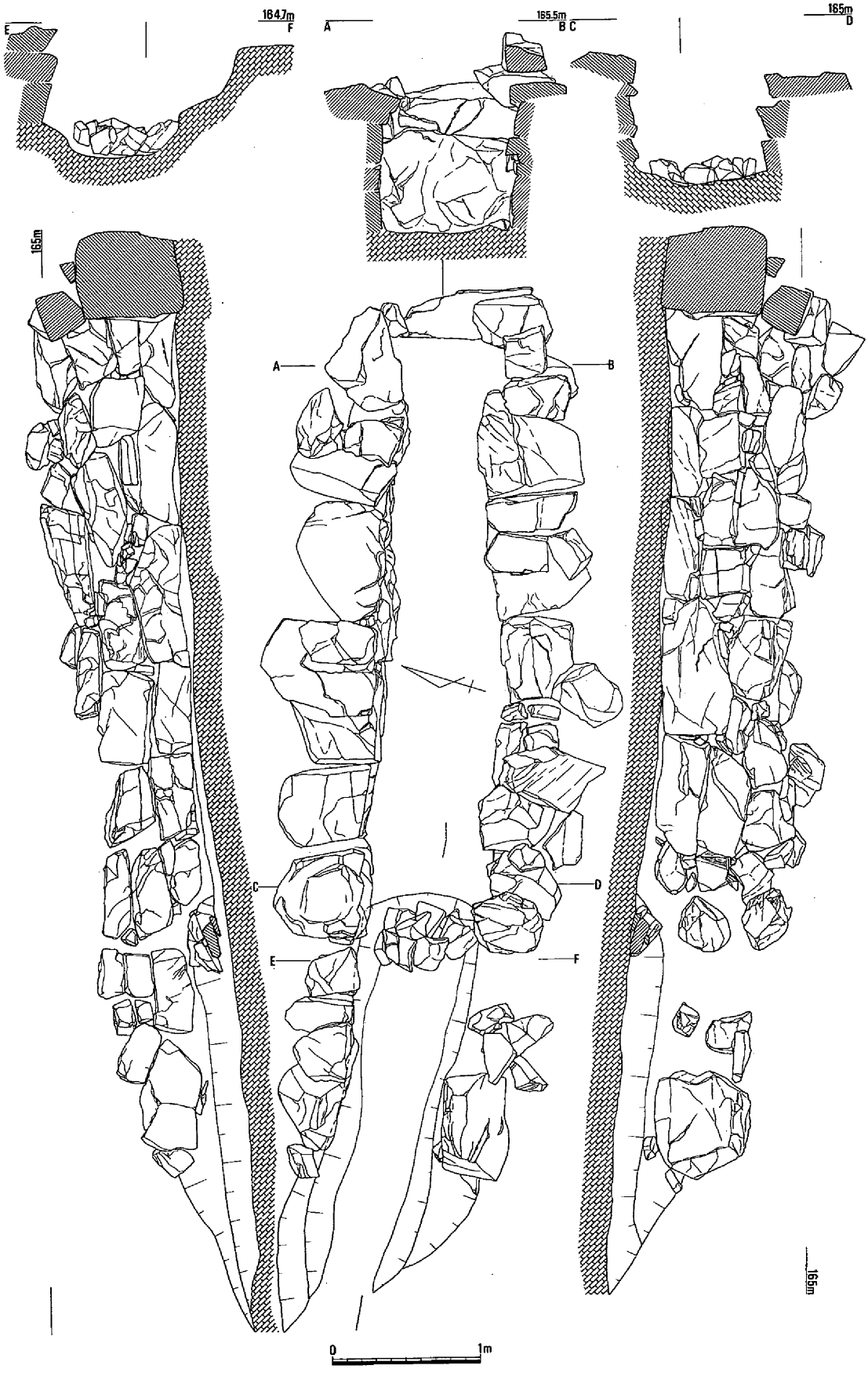
石室床面は奥壁付近ではほぼ水平な面となっているが、奥壁から３ｍの辺りから外に向けて緩やかに下りはじめる。また、石室奥壁から手前に４ｍの地点から石室外にかけて溝状の墓道が存在した。石室外へ１ｍの辺りで不明瞭になるが本来は西側の谷に下っていたと思われる。墓道の断面形状はＵ字状を呈し幅0.8ｍ、深さ0.2ｍを測る。この墓道の終点には、２段に積まれた小石材の集積がみられ、上部は無いものの閉塞施設の一部と考えられる。

奥壁は現存で２段を数え、高さは約１ｍである。基底に幅約0.7ｍの横長の石を立てて使い、その上に幅0.3ｍの横長の石を用いる。

両側壁では奥壁部分の遺存状況がよく４～５段が残り、現存高は1.3ｍである。左側壁では石室の屈折点にあたる箇所にもっとも大きい石を使うが、全体に石の大小のばらつきが大きく、積み方がやや乱雑であるのに対し、右側壁では比較的横目地が通っている。また、墓道部の両側の石材は奥側と比べるとかなり崩落しており、石の大きさも小ぶりといえる。

石室に使用された石材は大小取り混ぜていずれも玄武岩の角礫が使用されている。

石室掘り方は全掘できず、数カ所のトレンチで確認したにとどまる。平面形は「コの字状」になると思われ、その深さは地山の傾斜に沿って石室前面ほど浅くなっており、また掘り込みの角度も石室前側が緩やかとなっている。奥壁部での深さ１ｍ、上面での最大幅は2.8ｍである。掘り方の埋土は６・７層の互層であり、さらに掘り方上では石室の構築と墳丘の盛土が並行して行われていることが確認できた。



第44図　石室実測（S＝1：40）

遺物の出土状況(第45図)

遺物は石室内及び墓道部分にみられた。このうち石室内での遺物のあり方にはいくつかのまとまりが認められる。特に奥壁付近では須恵器１～４・21の他に鉄製品23～26・30・31と大部分があり（Ａ群)、また奥壁から開口部に向かって２～３ｍ離れた地点の石室右壁沿いにも須恵器６～９・14・16・17・22がまとまって存在していた（Ｃ群)。この２つの群は現位置にある可能性が非常に高く、埋葬位置が奥壁沿いとＣ群の左側に復元できる。そうすると耳環30も原位置を保っているといえる。

次に、Ａ群とＣ群の間にある須恵器５・15・19をＢ群とする。鉄鏃26・27もこの群に含まれる可能性がある。さらに、Ｃ群と閉塞石との間にある須恵器13・20をＤ群とする。Ｂ群の左側やＣ群の左側から閉塞石のあたりにかけての床面上には棺台とみられる石材があり、この２群が各々の埋葬に伴っていたと考えられよう。そうなると耳環31も原位置を保っている可能性が強く、Ｄ群に含まれる。

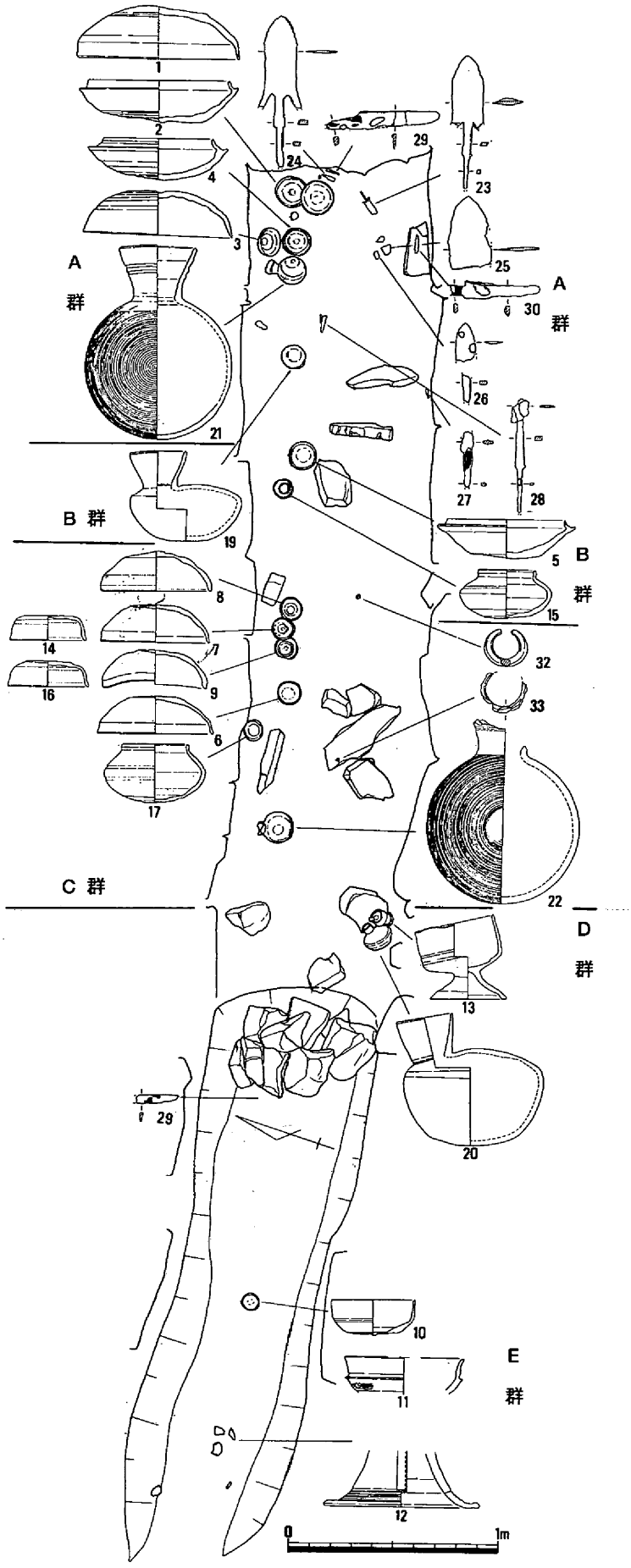
墓道部では、墓道底に接して出土した11・12は初葬時に伴う可能性が高いが、10は墓道が埋まった後の堆積土中にあり本来石室内にあったものか、最終追葬の際に置かれたと考えられる。

出土遺物

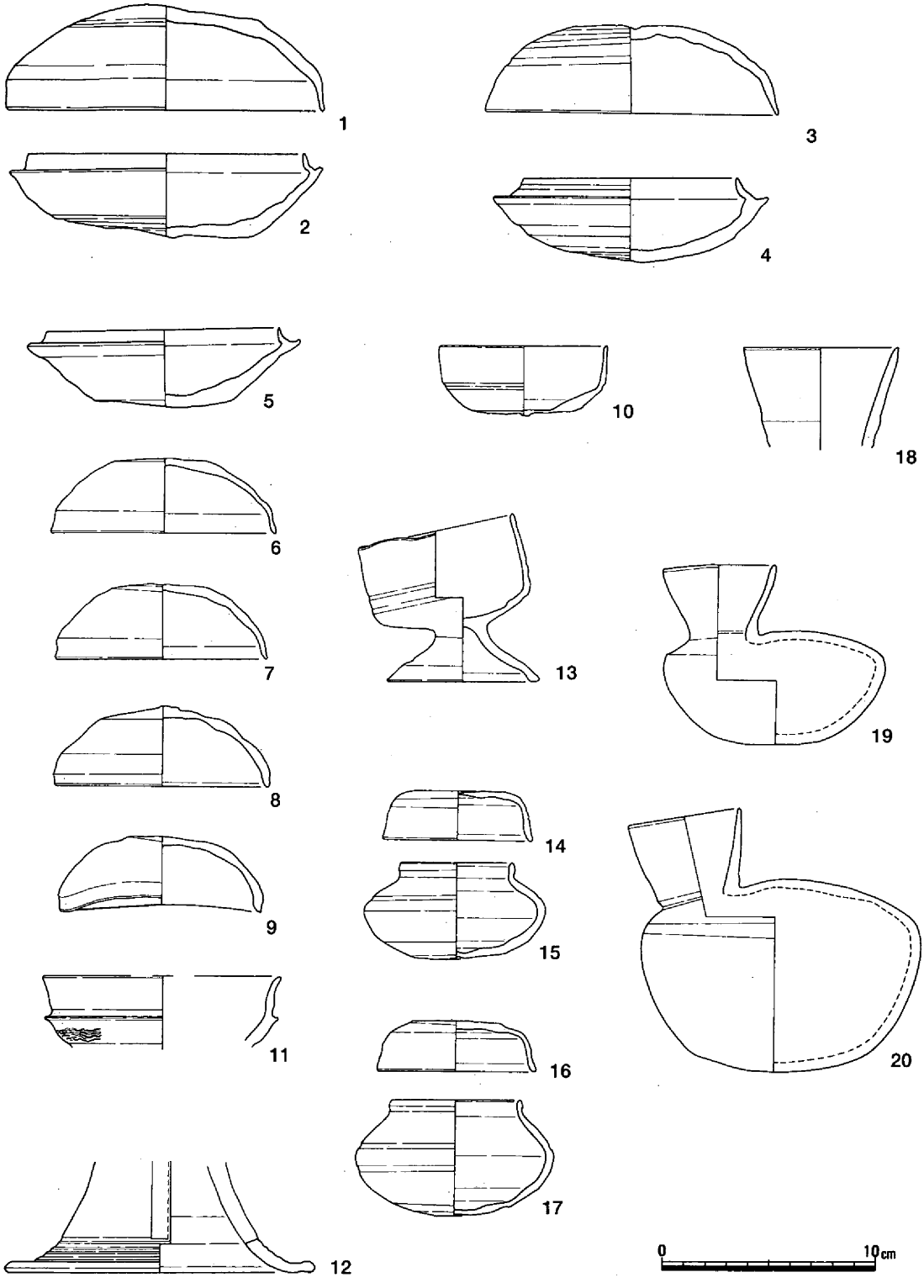
出土した遺物には須恵器、鉄鏃、刀子および耳環がある。

須恵器（第46･47図１～22)

蓋杯（１～10)



第45図　床面遺物出土状況

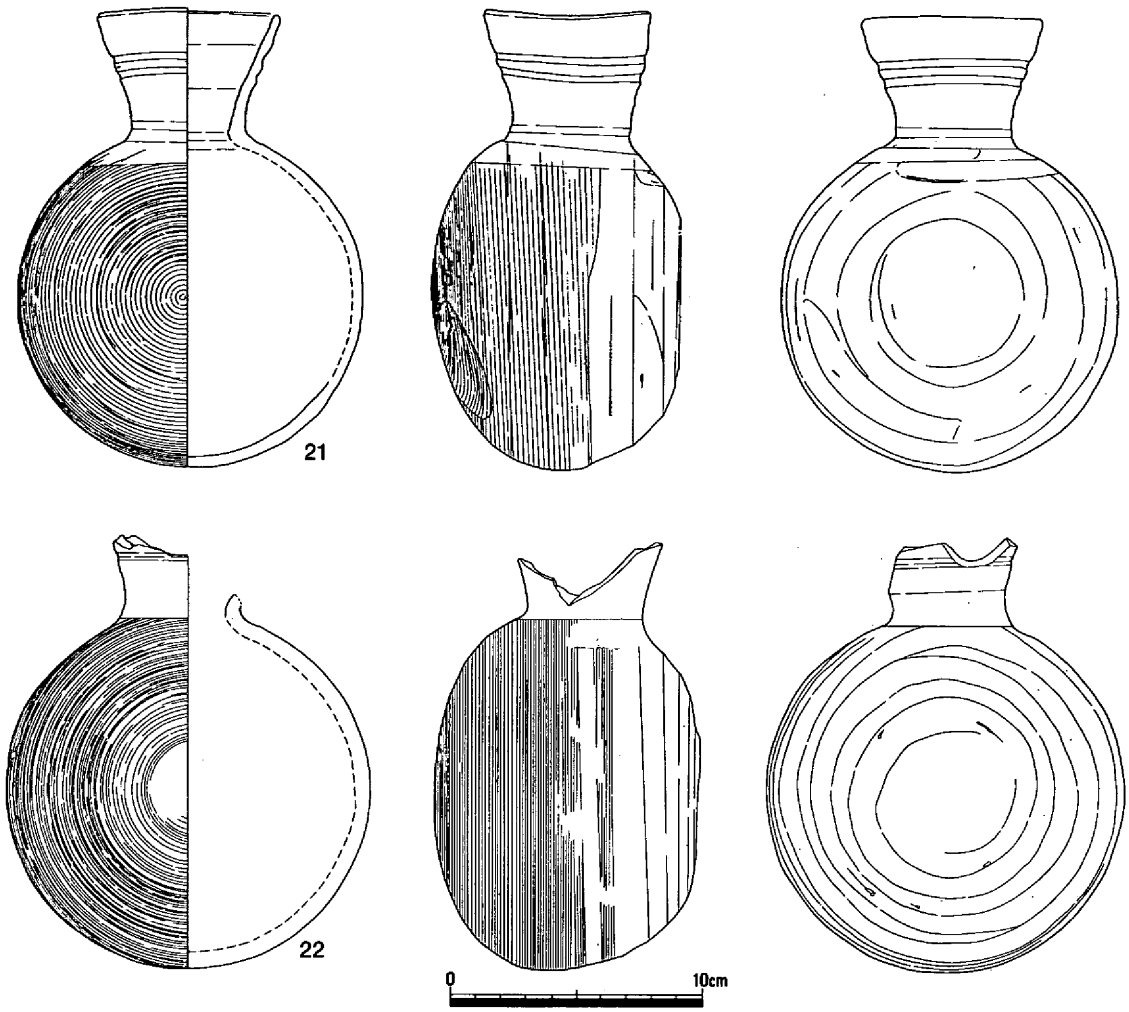


第46図　遺物実測（１）

法量・手法などから次の５類に分類できる。

１類（１・２）　１・２は出土位置からセット関係にある。法量は最も大きいが天井部および底部の調整はヘラケズリを省略しており、ヘラ切り後ナデによって仕上げられる。

２類（３・４）　１類に対して胎土、焼成とも良好なものである。底部および天井部は丁寧にヘラケ



第47図　遺物実測（２）

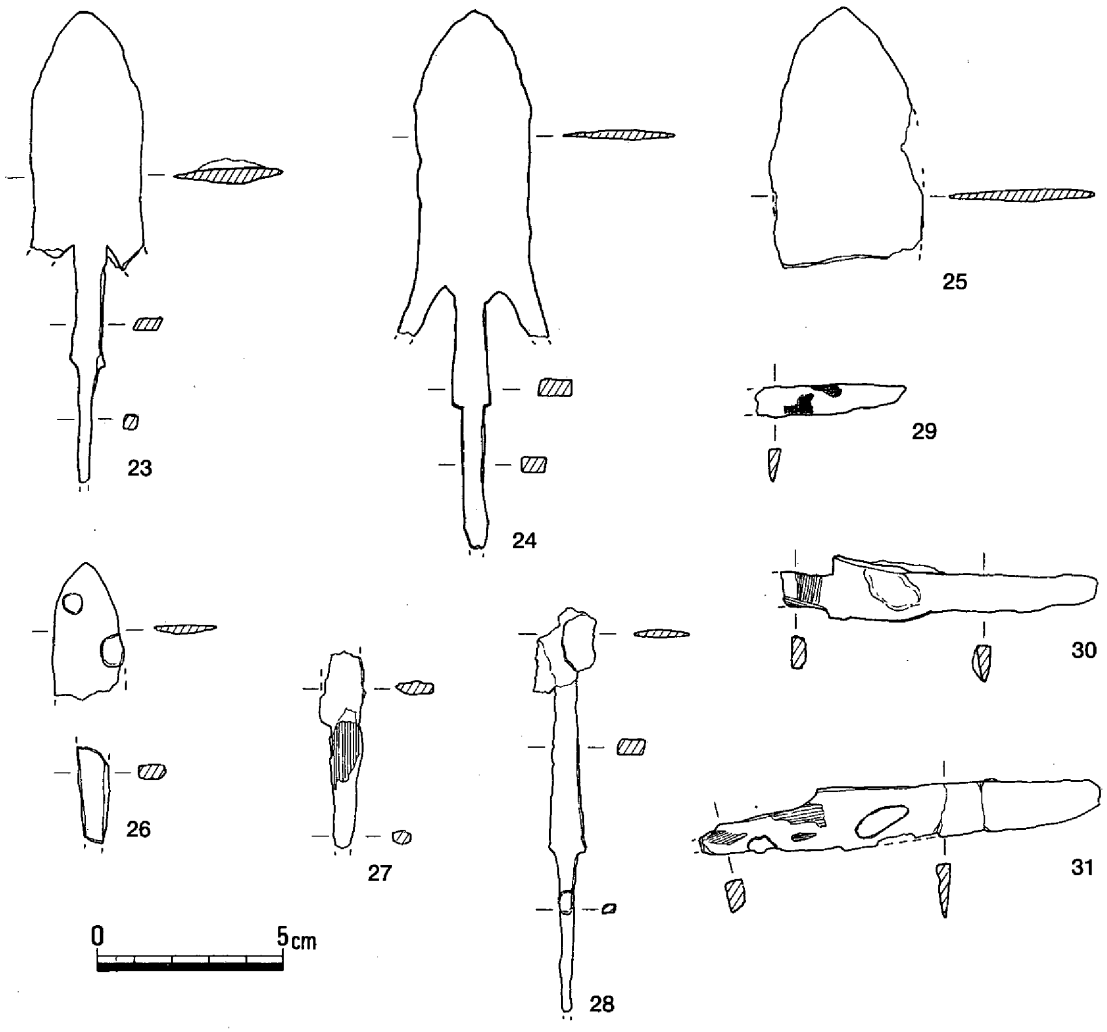
表７　畑ノ平10号墳土器観察表

NO	器形	口径	器高	手法の特徴	土　胎	焼成	色調	備　考
1	杯蓋	15	5	外：周辺ケズリ（左）,ヘラ切り後ナデ　内：仕上げナデ	0.1～0.5㎜の黒色粒多,白色粒少	不良	灰白色	
2	杯	13	4	外：周辺ケズリ（左）,ヘラ切り後ナデ　内：仕上げナデ	0.1～0.5㎜の黒色粒多,白色粒少	不良	灰白色	
3	蓋	13.7	4.1	外：回転ヘラケズリ（右）　内：仕上げナデ	0.1～8㎜の砂粒少	硬	灰褐色	
4	杯	10.5	4	外：回転ヘラケズリ（右）　内：仕上げナデ	0.1～3㎜の砂粒少	硬	灰褐色	
5	杯	9.1	3.7	外：周辺ケズリ,ヘラ切り後ナデ　内：仕上げナデ	1㎜以下の白色粒少	硬	灰褐色	
6	杯蓋	10.6	3.6	外：ヘラ切り後ナデ	1㎜以下の黒色粒やや多,白色粒少	硬	灰褐色	
7	杯蓋	10.7	3.6	外：周辺ケズリ,ヘラ切り後ナデ	1㎜以下の黒・白粒多い	硬	灰色	
8	杯蓋	10.3	3.8	外：周辺ケズリ　内：仕上げナデ	0.5㎜以下の白色粒僅少	硬	明緑灰色	
9	杯蓋	10.2	3.6	外：ヘラ切り後未調整	0.5㎜以下の白色粒僅少	硬	灰色	
10	杯G	8	3.4	外：ヘラ切り後ナデ　内：仕上げナデ	0.5㎜以下の黒色粒多,白少	硬	青灰色	2段3方透かし
11	高杯	11.2		杯部外面：波状文	0.2～1.5㎜の黒・白色粒やや多	良	灰色	
12	台付碗	6.8	8	外・内：ヨコナデ	0.5㎜程の黒・白粒少	硬	灰色	
13	壷蓋	7	2.4	外：ヘラ切り後ナデ	0.5～1㎜の白色粒多,黒色粒少	良	灰白色	
14	短頸壷	5.2	4.6	外：ヘラ切り後未調整	0.5㎜以下の黒・白粒やや多	良	灰色	
15	壷蓋	7.4	2.4	外：ヘラ切り後ナデ	0.5㎜以下の黒・白色粒少	良	灰色	
16	短頸壷	6.1	5.5	外：ヘラ切り後ナデ	0.5㎜以下の黒・白色粒少	良	灰色	
17	瓶	7.3		外・内：ヨコナデ	0.5㎜以下の黒・白色粒少	良	灰白色	
18	平瓶	5.4	8.5	外：ヘラ切り後未調整	0.2～2㎜の黒色粒多,白色粒少	硬	青灰色	
19	平瓶	5.5	12.5	外：ヘラ切り後ナデ	0.1㎜の白色粒少	硬	灰色	
20	提瓶	6.5	18	外：カキメ,回転ヘラケズリ（右）	0.5～2㎜の白色粒少	良	灰色	
21	提瓶		13.3	外：カキメ,回転ヘラケズリ（右）	0.1～3㎜の白色粒多	良	灰白色	

ズリを施している。

３類（５）　底部はヘラケズリが省略されヘラ切り後、未調整である。

４類（６～９）　口径は10㎝台で、ヘラケズリは認められずヘラ切り後、未調整である。



第48図　遺物実測（３）

５類（10）　杯Ｇである。体部に１条の沈線をめぐらす。口径は約８㎝。

その他の器種（11～22）

11と12は長脚二段透かしの高杯片で胎土・色調などから同一個体と考えられる。13は台付椀である。14～17は短頸壷と蓋のセットである。平瓶は小形の19と大形の20がある。19は体部に対して直ぐ上方にのびる口縁部をもち、底部のヘラケズリは省略されている。20は体部に対して斜め上に立ち上がる口縁部をもち、底部は回転ヘラケズリを施す。21・22は提瓶である。この他に図示していないが瓶も出土している。

金属製品

鉄鏃（第48図23～29）

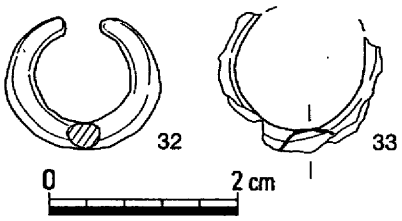
有茎の平根式23～27と有茎の尖根式28があるが、錆と表面剥離によって本来の形が計り知れないものになっている。鏃身の形態は23・24が腸抉柳葉式である。箆被関部に棘状突起はない。25・26は鏃身関部が欠ける。27も平根鏃の関部で矢柄木質が残存している。28は鏃身部が腸抉柳葉形であろう。鏃身の現存幅1.6㎝、頸部長4.9㎝、茎長4.3㎝。箆被関部には棘状突起が認められる。

刀子（第48図29～31）

29は刀身の一部しかないが、布が付着している。30・31はほぼ全容がわかるものの、刀身先と茎部の一部を欠く。関部は両関で、ともに茎部に木質が遺存する。30には刀身部に布が付着している。

耳環（第49図30・31）

２個体ありともに銀環である。30は中実である。銅芯・銀箔とも風化・剥離が著しい。径は縦1.8㎝、横が2.05㎝、厚さは縦で0.4㎝、横が0.45㎝、重量は3.14ｇである。31は芯のない中空耳環で、破損が著しい。31は30より径がやや大きいものであることから本来は２対の耳環が存在していたと思われる。



第49図　遺物実測（４）

小結

10号墳は墳丘の遺存状況があまり良くなく、墳形や規模を正確に知るための材料には乏しかったものの、石室及び床面の遺物に関しては良好な資料であるといえる。

横穴式石室は先の５号墳と同様に西に向いて開口している。また石室の平面形状が「逆くの字状」に屈曲し、石室主軸は手前側が奥側よりさらに西に振れており、さらに石室前半部分に墓道が入り込んでいる。これは一部で確認された墓道が西側の谷から古墳に通じていたことによるものであろうが、石室の構築自体がかなり墓道を意識した結果と思われる。このような無袖式石室においても、築造当初は石室内の空間においても埋葬スペースと道としての部分とに分化していた。天井石はすべて失われていたが本来閉塞部分までであったかもしれない。

次に遺物を出土位置からＡ～Ｄの４群に分け、２～４の埋葬位置を想定した。この４群について須恵器の蓋杯を中心にさらに検討を加えると、Ａ群では蓋杯１・２類と広根鏃があり、Ｂ群では３類の杯身に尖根鏃が伴う可能性がある。Ｃ群では蓋杯４類のみである。この他の器種では、ヘラケズリの省略されたＢ群の平瓶19はＤ群の20より新しい傾向にある。またＢ群の短頸壺15は蓋14がＣ群にあり、Ｂ群自体が現位置を遊離していることも考えられる。ただし、Ｃ群には立ち上がりのある杯身を伴わないことから杯類６～９はいずれも身として使用されていたと考えられ、またＢ群の３類の杯身は２類や４類のものとは法量や技法からも組み合わないことから、Ａ群とＣ群との間に１回の埋葬を想定してもよいと思われる。

Ａ群からＤ群の副葬を伴う４回の埋葬行為は、蓋杯の法量の矮小化と調整の粗雑化といった１類から５類への変化とも対応し、石室奥から順次埋葬が行われていったことが窺い知れる。

（３）畑ノ平７号墳

調査前の状況（第50図）

５号墳のある山頂から茂平城の方向に向けて派生する尾根上にＢ２支群とした３基の古墳があった。この尾根は、中央部を山道の切り通しによってえぐり取らていたものの、古墳はいずれもこの山道より南の斜面部に位置していた。

７号墳は、このＢ２支群の中ではもっとも高所にあり、なだらかな丘陵頂部と斜面との傾斜変換点に位置する。調査前の状況は松林で、その間を灌木が激しく生い茂っていた。

墳丘は径12ｍ程の円形ないしは隅丸方形状を呈していたが、周堀は明確でなく、墳丘高は斜面下方から高さ1.8ｍを測るものの、顕著な墳丘とは言い難いものであった。そのためトレンチ調査を行ったところ、陶棺片を確認したため、７号墳として調査を行った。

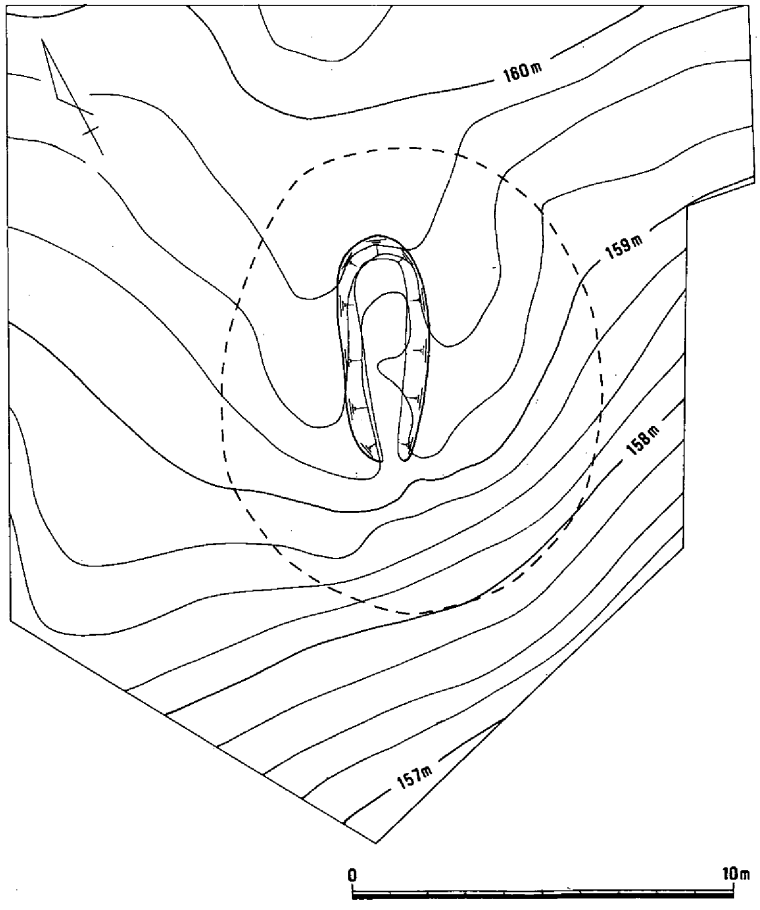
墳丘の中心部には石室石材を抜き取った時にできたと思われる長さ６ｍ、幅2.5ｍ、深さ０.5ｍの大きな落ち込みがみられた。

墳丘と周堀（第51・52図）

墳形は、東側斜面部での流出が著しく、かつ葺石や埴輪といった顕著な外表施設もないために確実性には乏しいもの、墳端ラインを追いかけてゆくと隅丸方形状となることから、円墳ではなく本来は一辺10ｍの方墳であった可能性がある。墳丘高は現存高で石室前面から墳丘最高点までを測ると1.25ｍあり、石室奥床面からは1.5ｍを測るが、墳丘背後からはわずか20㎝程しかない。

周堀は墳丘背後がもっとも明確で幅は２ｍ、墳丘外の肩からの深さが0.5ｍを測る。そこから墳丘西辺の中央付近にかけてはしだいに不明瞭になり終わってゆき、東辺は流出したためか周堀は存在しなかったため、周堀の形状から墳形は判断できなかった。

墓壙は全面は調査せず、数カ所のトレンチによって確認したにとどまる。平面形が「コの字状」を呈し、長さは約7.3ｍ、墓壙上面での最大幅は3.4ｍほどで、地山と旧地表層である暗褐色砂質土を掘り込み、石材を据えた後に黄褐色粘質土によっ

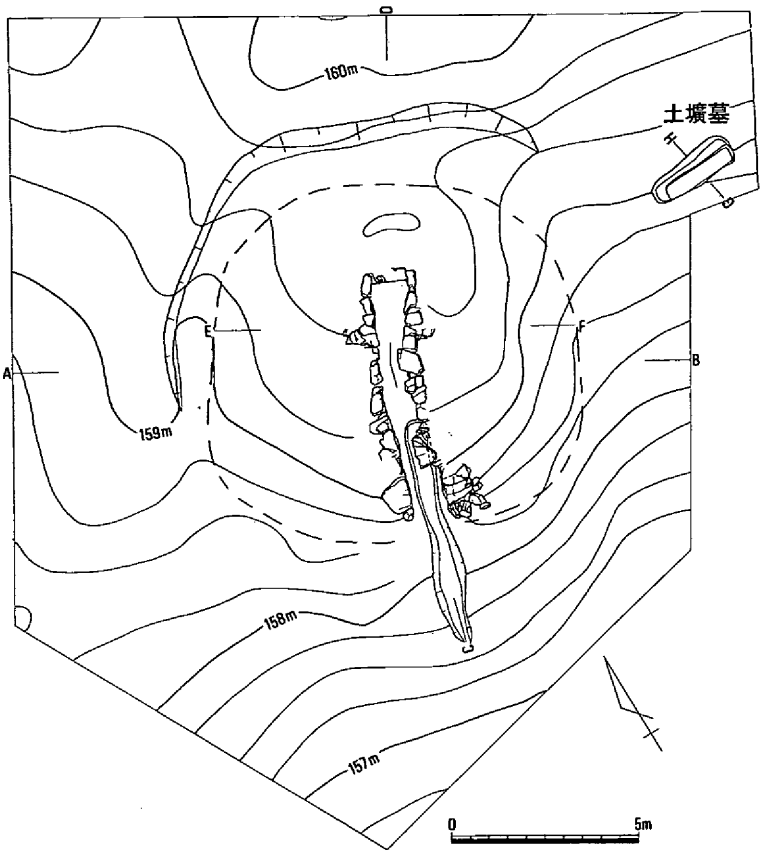


第50図　調査前地形測量

て裏込めを行っている。奥壁部では周堀底から階段状にして深さ1.5ｍを掘り込んでいるが、墳丘中央では深さは0.9ｍとなり、石室前側に向かうにつれその深さを減じている。

盛土は、墓壙が埋められた後にその上面から石室石材の構築と同時に盛り上げられたと考えられる。基本的には淡黄褐色粘質土と暗褐色粘質土の互層で水平に積まれていた。盛土の単位はトレンチを入れた箇所によって様相が大きく異なり10～40㎝の厚さでまた墳丘上部ほど厚く、そのためか石材が大きく石室内側にせり出している箇所があった。

墳丘の中心には横穴式石室があり、その中には陶棺が１基存在していた。



第51図　墳丘測量

横穴式石室（第53図）

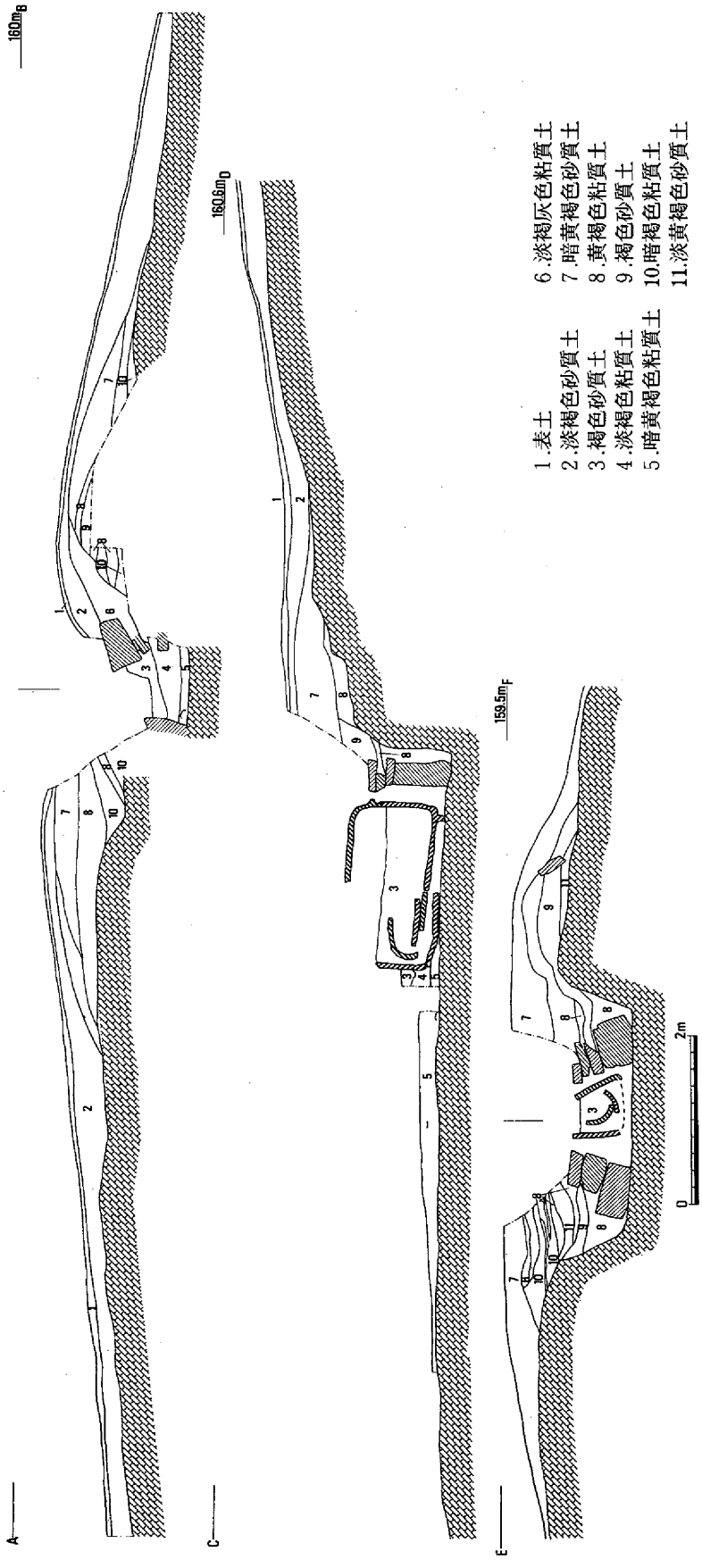
無袖の横穴式石室である。石室は側壁の一部と天井石がすべて持ち去られており、流入土によって石室内と陶棺内は完全に土砂で埋まっていた。

石室平面形はほぼ長方形を呈するが、奥壁から３ｍ辺りの陶棺の前面を境にして「くの字状」に東に屈曲している。そのため石室主軸は石室奥側がＮ－30°－Ｅであるのに対し、陶棺の前から石室開口部にかけては主軸は東に振っており、Ｎ－17°－Ｅとなる。ほぼ南に開口する横穴式石室である。

石室規模は全長が７ｍ、幅は奥壁部で1.25ｍであり石室開口部付近で1.1ｍを測る。陶棺の置かれた位置が多少幅広に取られていたようである。

奥壁では４段の石積みが残る。基底石はほぼ１石で構成され、長さ90㎝、高さ50㎝の石を横長方向にして、小口部分を上下にし立てて用いており、両側壁との間の隙間に小形の石を充足する程度である。２段目以上はかなり小形で扁平な石を横長にして、石の小口部分をもって壁面を構成している。

両側壁は奥壁近くや開口部付近で３～４段の石積みが残るが、石室中央部辺りが石材の抜き取りによってか１～２段分しかない。石の用い方は奥壁と同様であるが、２段目以上の石は側壁の方が大形の石を使い、特に開口部辺りには基底部と同等の大きさのものを使っている。また基底石の大きさは奥壁部から石室中央にかけて石材の大きさを減じてゆき、再び開口部にかけて石材が大きくなってゆく。その中央部分はちょうど石室の平面プランの屈曲部にあたり、小形の石材を選択的に利用するこ



第52図　墳丘土層断面

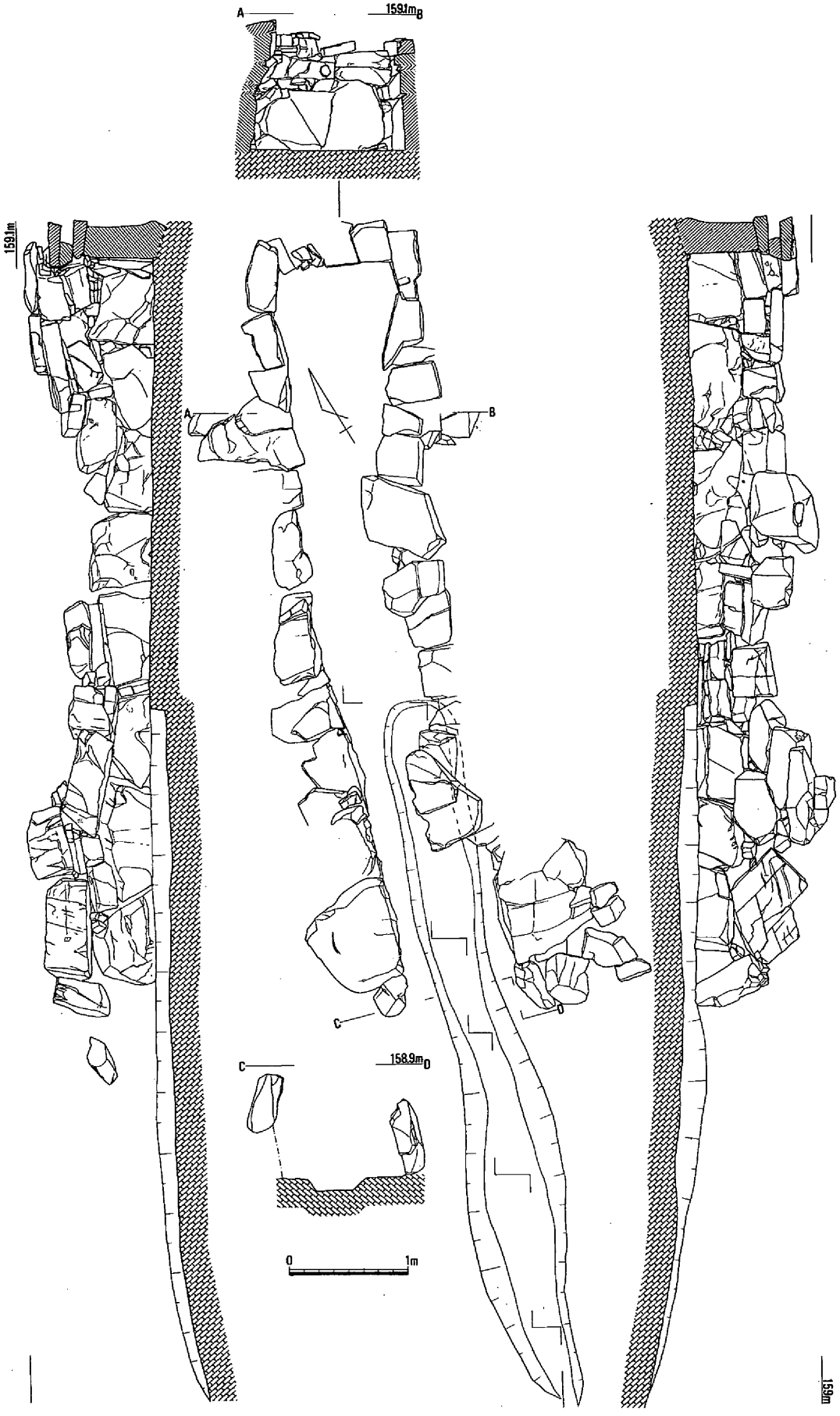
とによって石室を屈曲させやすくしていたと思われる。

石室開口部の両側では側壁の端と接して幅が20㎝、高さ50～60㎝の方柱状の石を立てていた。墳丘に向かって右側は基盤層上にあるが左側のものは壁面の２段目に相当する高さにあったが、開口部外から見ると門柱状となっていた。

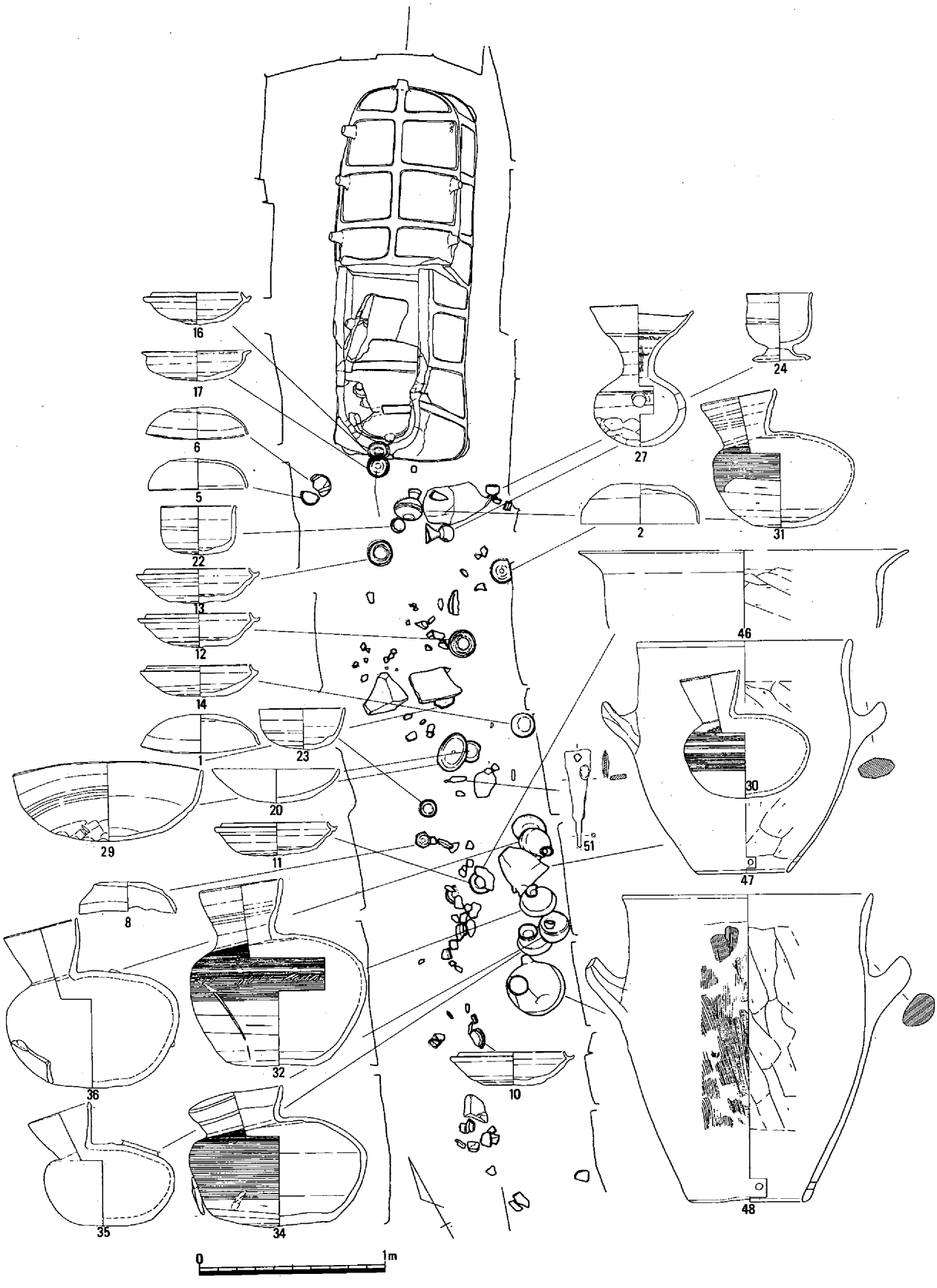
石室石材は全て玄武岩の角礫を使用している。

墓道は石室開口部から奥へ2.5ｍの地点まで入り込んでおり、石室外へは3.5ｍのところまでが確認できた。断面形は「逆台形状」を呈し幅は50～70㎝、深さ約10㎝を測る。この墓道は「くの字状」に折れ曲がった石室手前側の主軸の延長方向に向かって下っており、本来は谷に向かって続いていたと考えられよう。

石室床面は墓壙掘削時の基盤層上にあり、奥壁から墓道の端部まではほぼ水平な面をなしていた。



第53図　石室実測（S＝1：40）



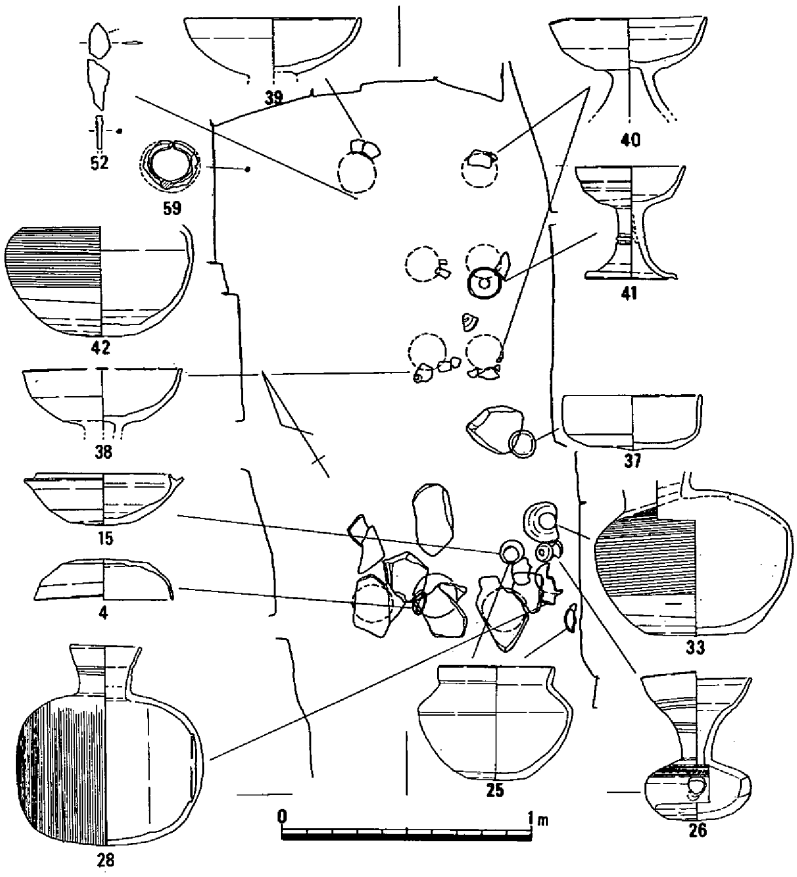
第54図　床面遺物出土状況

遺物の出土位置は大きく分けると、石室内のうち陶棺と陶棺内、陶棺下や側面、陶棺前から石室開口部にかけてと前庭部に分けられる。

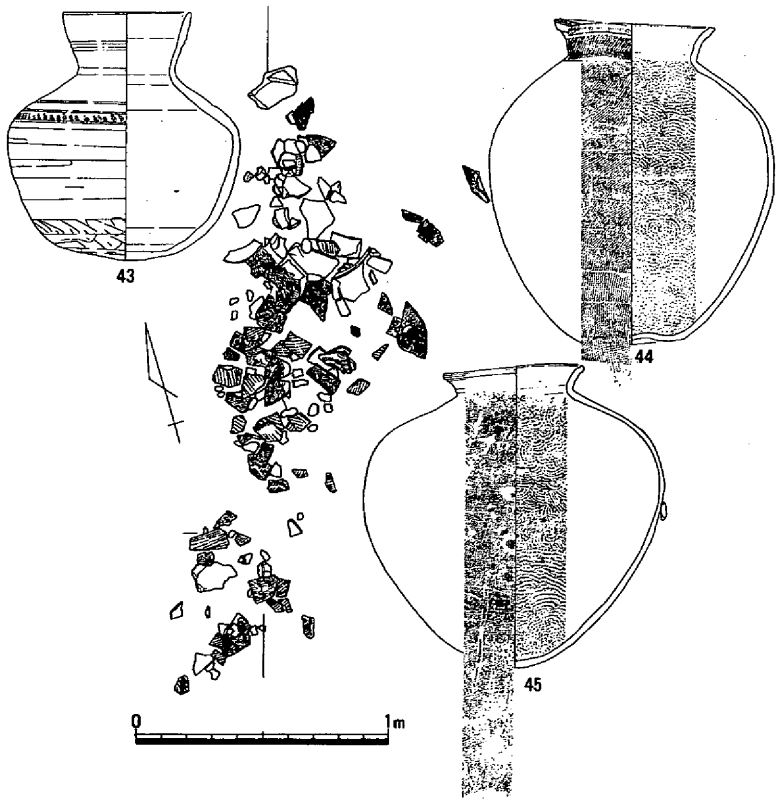
陶棺は奥壁に接してあり、石室主軸より左側壁寄りに位置する。陶棺の前から開口部にかけては遺物は全体に散漫な分布状況であるが開口部から１～２ｍ付近の左側壁沿いで土師器の甑(47･48)、鍋(46)と平瓶（30・32・34～36）がまとまって存在した。甑48は倒立状態で置かれていた。47は横倒しとなっており、その中に平瓶30が入れられていた。

また、陶棺と左側壁の間のわずかなスペースでは短頸壷(25)、平瓶（33)、横瓶（28）瓻（26）がみられる。これらは追葬の際の片づけとみることができるが、陶棺下で出土したものの中でも高杯（38～41)、平瓶（42）は破砕されて陶棺脚を安定させるための下敷きとして利用されていた。また陶棺と右側壁との間のスペースでは、耳環が１個出土しているおり、この部分も埋葬空間として利用された可能性が高い。

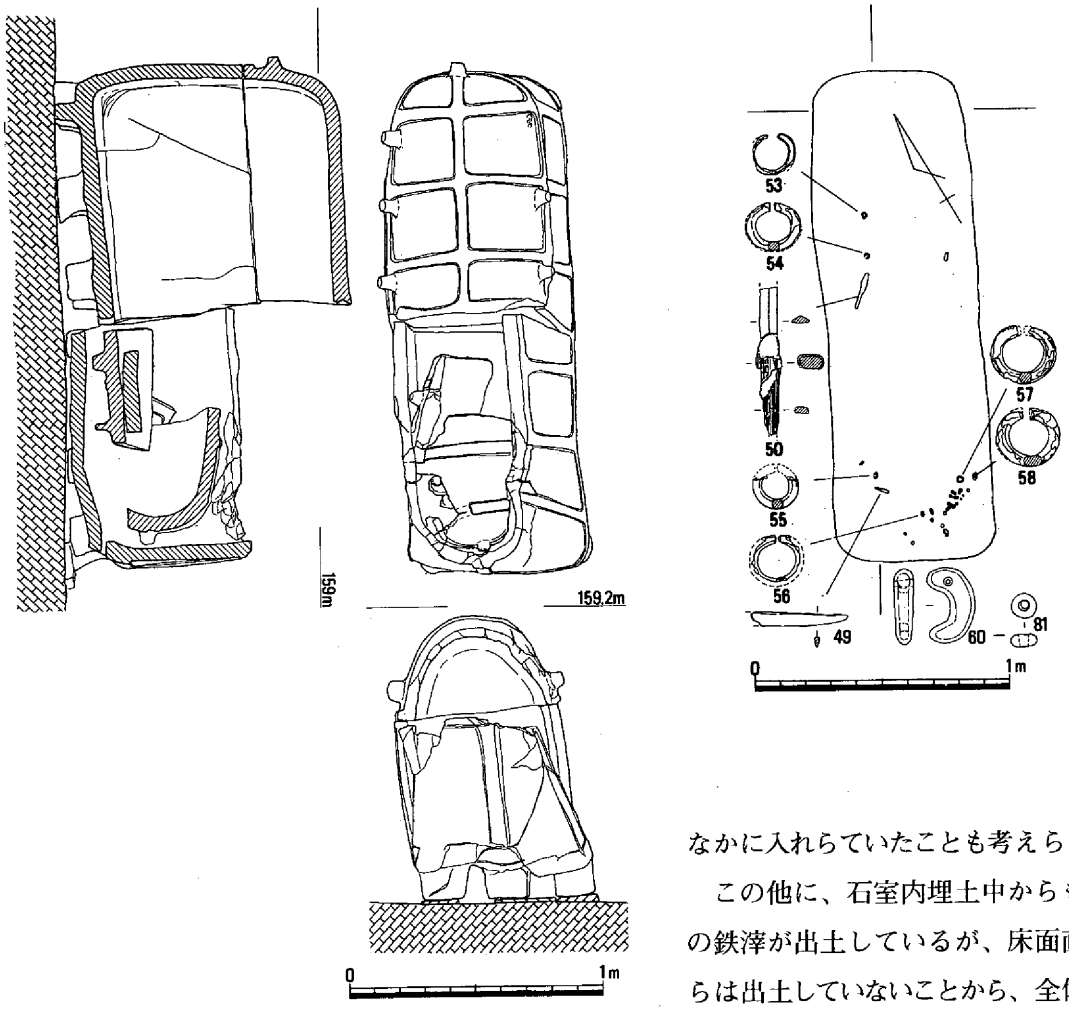
前庭部では壷(43)、甕(44・45）が１カ所で集中していた。この破片の間や下から総重量１.89kgの鉄滓が出土していることから、甕などの



第55図　陶棺下・周辺遺物出土状況



第56図　前庭部遺物出土状況



第57図　陶棺・棺内遺物出土状況

なかに入れらていたことも考えられる。

この他に、石室内埋土中からも多くの鉄滓が出土しているが、床面直上からは出土していないことから、全体で2.67kgの鉄滓が墓前祭祀として前庭部に据えられた壷や甕と供に供献されていたと考えられる。

陶棺及び陶棺内の遺物出土状況（第57・58）

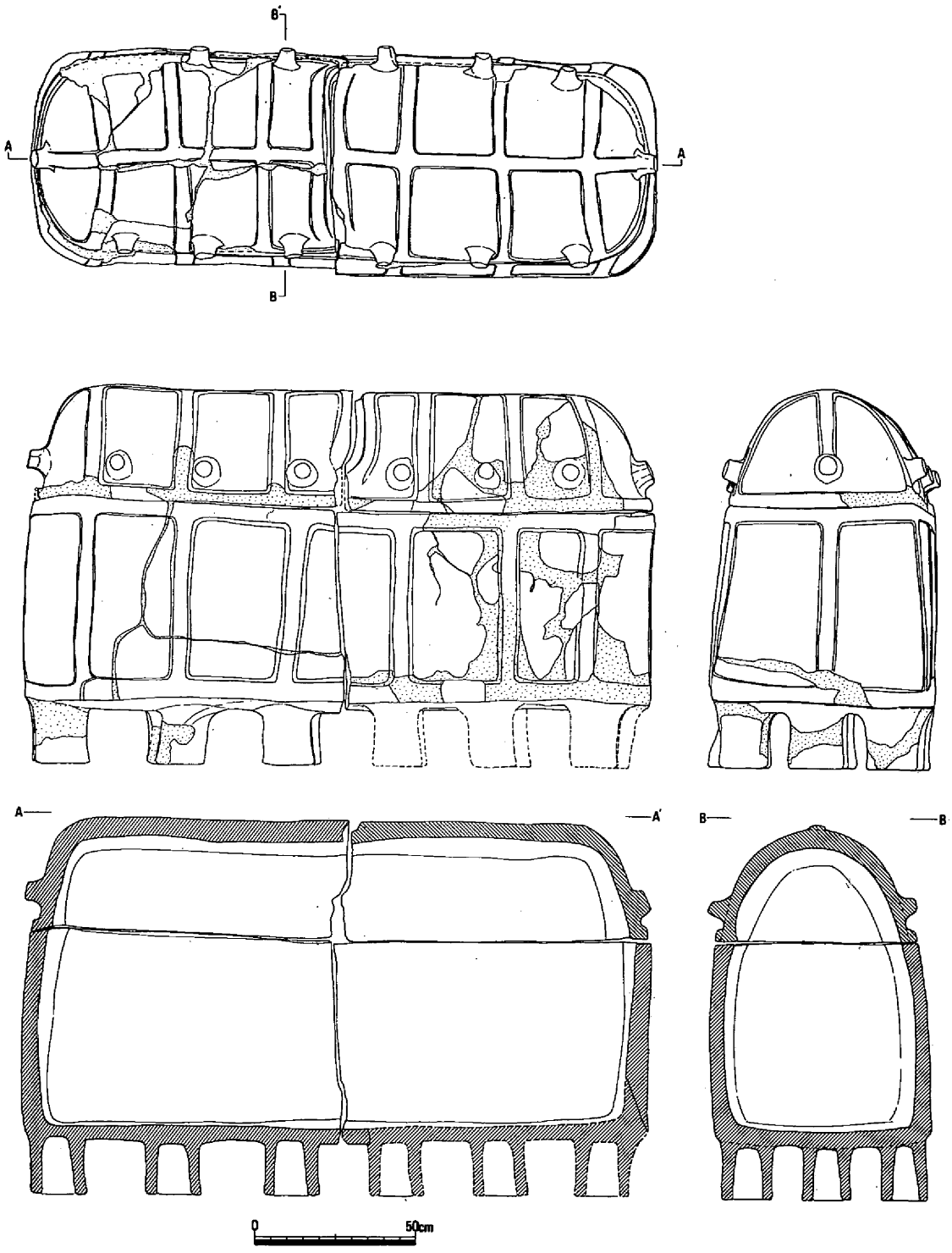
土師質亀甲形の陶棺が１基ある。大きさは長辺長が１.95ｍ、短辺幅０.67ｍ、高さ１.18ｍ、脚部高0.18ｍである。分割面を境に石室奥側では身の上に蓋が重なった状態で完全な状態で検出できたが、石室前側では蓋が身部内に落ち込んでいた。また焼成は極めて悪く、身の底部や側板の一部と脚部は土圧や風化で復元が不可能な状態となっていた。器面の調整は内外面ともナデによて仕上げられている。

陶棺下の床面は奥側が掘り込まれて低くなっており、これは脚部の高さを調整するためと考えられる。また前側の脚部でも板石を敷いて安定を図っていた。

蓋部の突起の数は全部で14あり、形状は短い瘤状で断面はほぼ円形である。これら突起と突帯は短辺部以外は交わらない。さらに蓋部には受け部と重ね部に沿ってそれぞれ突帯がみられる。これは蓋下端の突帯とは交差しない。

脚部は３列で合計18本を数える。非常にもろくなっており、調整は不明瞭である。

陶棺内では耳環６、鉇１、刀子１、勾玉３、丸玉30以上が出土している。このうち耳環２と鉇１は棺内奥側にあった。棺内南側半分では耳環４と刀子１と玉類が多数出土しているが、このうち耳環２



第58図　陶棺実測（S＝１：20）

個体と玉類は陶棺中軸ラインより東にあった。耳環は大きさと位置からみて（55）と（56）が組みになり、刀子（49）が伴うと思われる。また、耳環（57）と（58）が組みとなり、それに玉類が伴うと考えられる。

つまり陶棺内の被葬者は棺奥を頭位にして１体、棺前を頭位にして２体が並んで埋葬されていたと考えられる。

出土遺物（第59～66）

出土した遺物には陶棺以外に、須恵器、土師器、耳環、鉄鏃、刀子、ガラス玉と鉄滓がある。石室内の副葬された土器、陶棺の下敷きに使われた土器、前庭部の土器、土器以外のその他の遺物に分けて記述する。

須恵器（１～45）

蓋杯（第59図１～19）

法量、形態、技法から次の６群に分類できる。

１類（１～３）　杯蓋で口径は12cm、器高は４cm以上のものである。いずれもヘラ切り後に顕著な調整は認められないが、２・３は底部の周辺にのみヘラケズリが認められ、天井部は比較的平坦であることが特徴的である。

２類（４～９）　杯蓋でいずれもヘラ切り後未調整である。口径は11cm以下、器高は４cm以下である。焼け歪んでいるのが特徴である。

３類（11～13）　杯身である。口径は11cm以上である。底部は平底に近い。底部の調整はヘラ切り後をナデによって仕上げている。

４類（14･15）　口径は10cm台の杯身である。底部は若干丸みを帯びる。15の底部はヘラ切り後未調整である。

５類（16）　口径が10cm以下の杯身である。

６類（17～19）　立ち上がりのない杯身といえるような形態をとる。ヘラ切り後未調整であるが、周辺部にはヘラケズリが認められる。

法量や技法の点から、蓋１類と杯３類、蓋２類と杯４類がセット関係にあると考えられる。６類については最大径で比較すると５類とほぼ一致することから、５類と同時期のものと考えられるかもしれない。

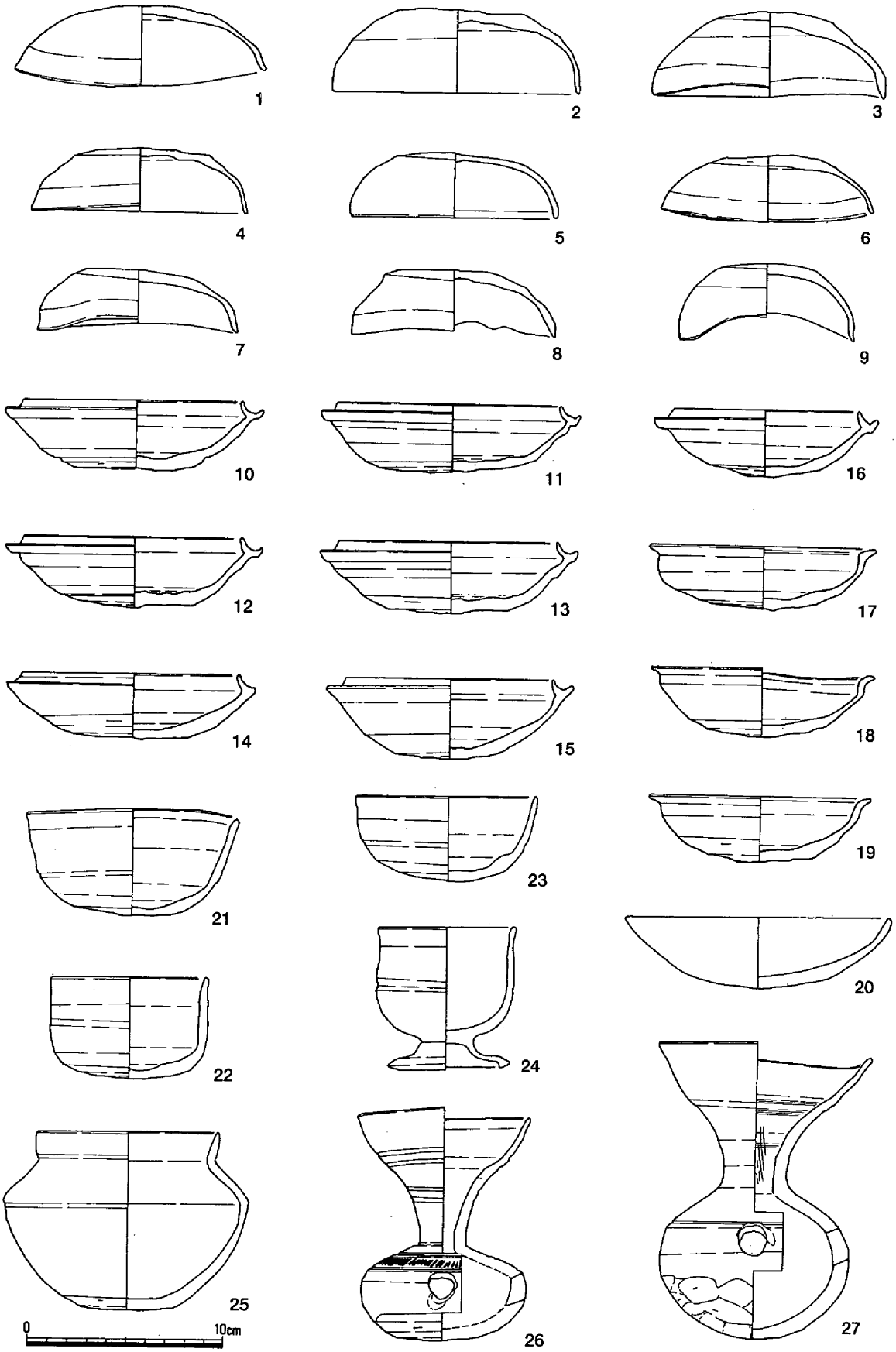
椀（第59図21～24）　21～24は口径に対して器高が高い椀である。体部外面に浅い凹線状のくぼみがめぐる。24は短い台付きの椀である。

壷・瓶・提瓶・鉢（第59図25～27、第60図28・29）　25は短頸壷で底部の調整は回転ヘラケズリである。26・27は瓶で、26はやや小形品で肩部の２条の沈線の間を刺突文で飾る。27の底部の調整は不整方向のケズリを施している。26・27とも頸部と口縁部の境は不明瞭となっている。28は提瓶であり、樽状の体部を全面にカキメを施す。29は口縁部にかなり歪みのある鉢である。底部周辺に不整方向のケズリを施した後、底部はヘラ切り後ナデて仕上げている。

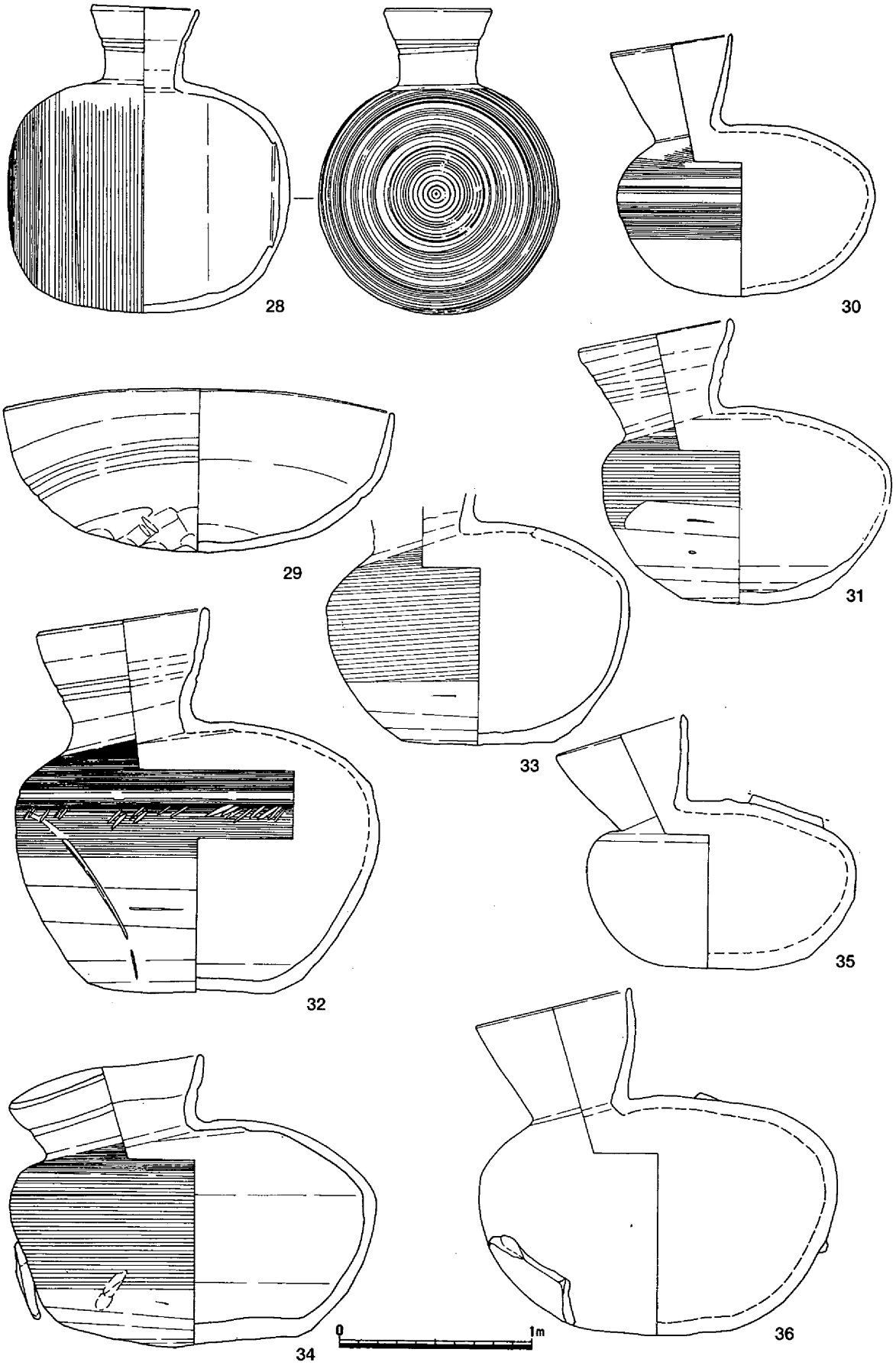
平瓶（第60図30～36）　体部にカキメを施す30～34と体部をナデ仕上げする35・36がある。前者は底部の調整は回転ヘラケズリを施すが、後者はヘラ切り後ナデによって仕上げられている。また32・34～36には蓋杯類の破片が溶着、あるいは30・32のように窯内で焼成時に蓋杯類の形が影のようになって着いている。

陶棺下の土器（第62図37～42）

37は椀であるが、口径に対し器高は低い。38～41は高杯である。38～40は短い脚部に椀状の杯部がつくものである。41は脚柱に２条の沈線がめぐり、杯部にも２条の沈線があり、透かし孔や杯部の文様の消失した長脚高杯の退化型式であろう。42は体部にカキメを施し底部の調整は回転ヘラケズリを施しており、平瓶の体部と思われる。37・41は完形品であるがそれ以外は破砕された状態で石室内に


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
16
12
13
17
14
15
18
21
23
19
20
22
24
25
26
27
0
10cm

第59図　遺物実測（１）



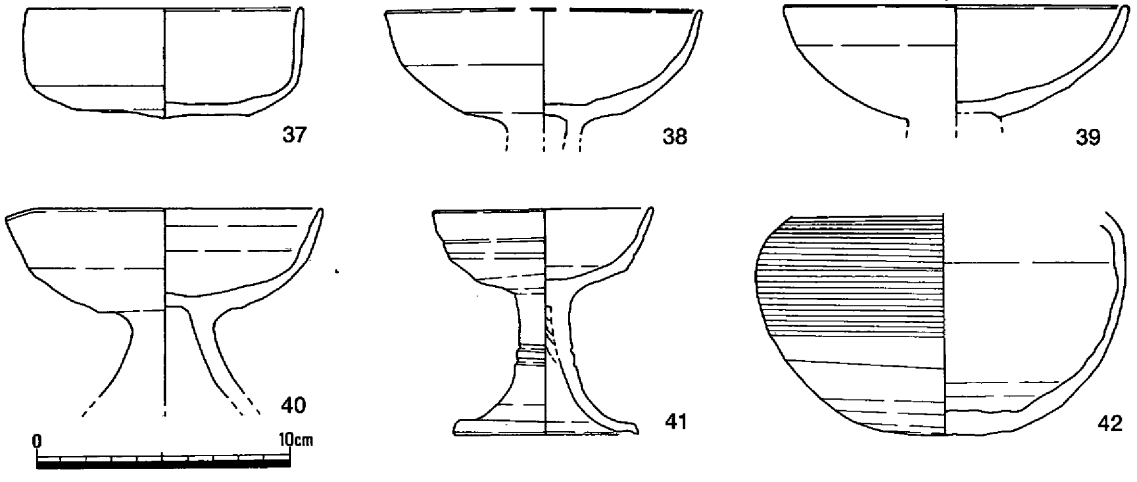
第60図　遺物実測（２）

ち込まれたと考えられよう。

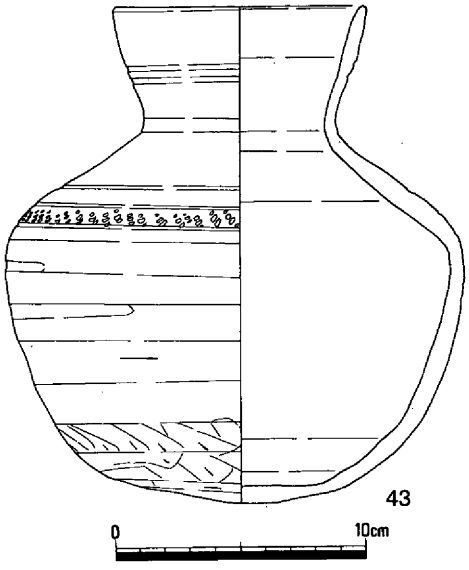
前庭部の遺物（第63図43～45）

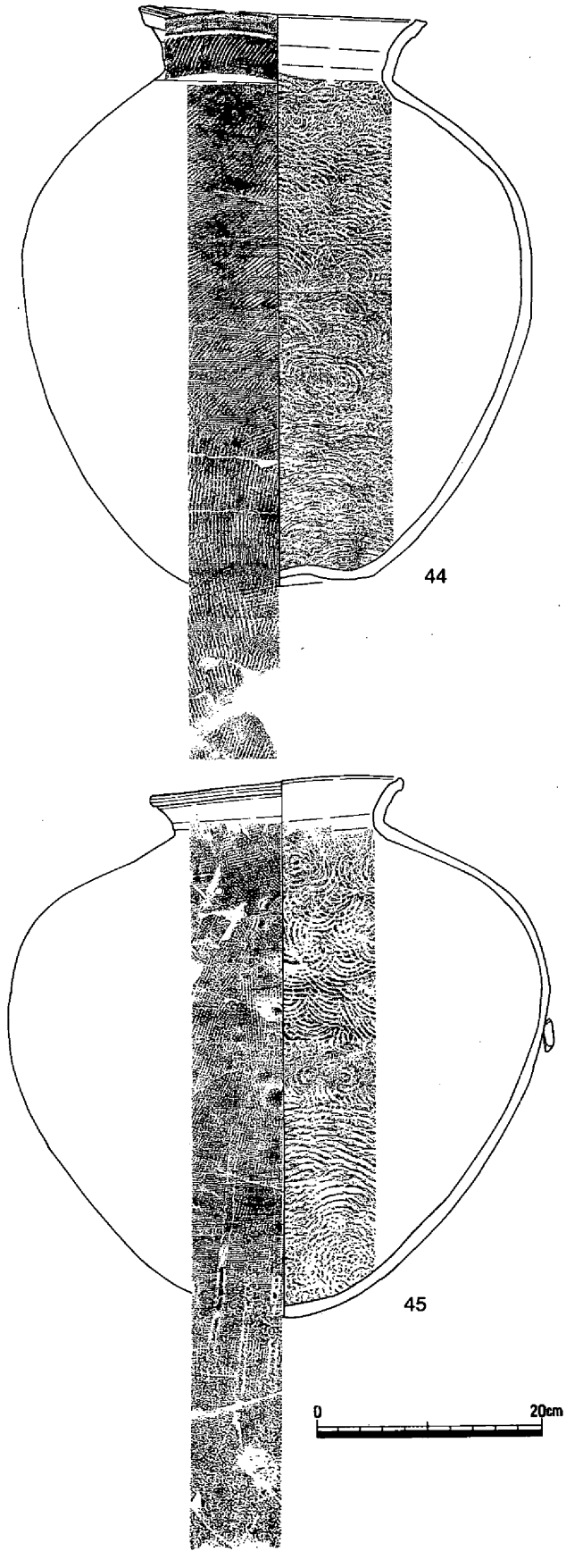
表８　畑ノ平７号墳土器観察表

NO	器種	口径	器高	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	蓋	12	4.1	外：ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ	0.5～1㎜の白,黒色粒多	やや不良	灰色	
2	蓋	12.6	4.3	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.5㎜以下の白,黒色粒極めて多	不良	灰白色	
3	蓋	12	4.4	外：ヘラ切り後未調整　内：	0.5～1㎜の白色粒少	硬	青灰色	
4	蓋	10.4	3.4	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.5㎜以下の白色粒少	やや不良	灰白色	
5	蓋	10.6	3.4	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～1.5㎜の白色粒多	やや不良	青灰色	
6	蓋	10.9	3.5	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～1.5㎜の白色砂粒多	良	灰白色	
7	蓋	10.9	3.3	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～1.5㎜の白色砂粒多	良	灰白色	
8	蓋	11.1	3.4	外：ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ	0.5㎜以下の白色粒僅少	硬	灰色	
9	蓋	10.6	4	外：ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ	0.5㎜以下の白色粒僅少	硬	青灰色	
10	杯身	11.1	3.6	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.2～1.5㎜の白色砂粒やや多	やや不良	灰白色	
11	杯身	11.4	3.5	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.2～3㎜の白色砂粒やや多	やや不良	灰白色	
12	杯身	11	3.7	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.2～3㎜の白色砂粒やや多	やや不良	灰色	
13	杯身	11.1	3.7	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.5～2㎜の白色砂粒やや多	やや不良	灰色	
14	杯身	10.9	3.4	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～7㎜の白色砂粒極めて多	良	緑灰色	
15	杯身	10.5	4.2	外：ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～2㎜の白色砂粒やや多	硬	青灰色	
16	杯身	9.5	3.5	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.2～4㎜の白色砂粒僅少	硬	灰色	
17	杯	11.3	3.4	外：ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～3㎜の砂粒多	良	青灰色	
18	杯	11.5	3.6	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～2㎜の砂粒多	良	灰色	
19	杯	11.5	3.3	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～2㎜の砂粒多	不良	暗オリーブ灰色	
20	杯身	13.66	3.7	不明	0.5～4㎜の白色赤色粒やや多	不良	灰白色	
21	椀	9.7	5.49	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.2～0.5㎜の白色砂粒僅少	良	青灰色	
22	椀	8.3	5.23	外：ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ	0.5～2㎜の黒・白色砂粒多	やや不良	灰白色	
23	椀	9.1	4.35	外：ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～1㎜の白色砂粒僅少	やや不良	灰白色	
24	椀	7.31	7.3	外・内：ヨコナデ	0.5㎜以下の白・黒色粒僅少	良	緑灰色	
25	短頸壺	9.3	9.15	外：回転ヘラケズリ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5㎜程の白色粒多	硬	明青灰色	
26	瓶	11.9	8.7	外：ヘラケズリ　内：ヨコナデ	0.2～2㎜の白・黒色粒多	硬	灰白色	
27	瓶	11	14.2	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.5～3㎜の白・黒色粒多	硬	灰白色	
28	横瓶	5.4	16	外：カキメ　内：ヨコナデ	0.5～3㎜の白・黒色粒少	やや不良	灰白色	
29	鉢	14.95	8.55	外：底周辺不整方向ケズリ,ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.5～2㎜の白・黒色砂粒やや多	硬	灰白色	
30	平瓶	6.4	13.7	外：カキメ,回転ヘラケズリ（右方向）　内：ヨコナデ	0.5㎜以下の白・黒色粒僅少	硬	灰色	
31	平瓶	8	14.9	外：カキメ,回転ヘラケズリ（右方向）　内：ヨコナデ	0.5～10㎜の白色粒極めて多	硬	明オリーブ灰色	
32	平瓶	8.8	19.9	外：カキメ,回転ヘラケズリ（右方向）　内：ヨコナデ	0.5～1.5㎜の白色粒少	硬	灰色	
33	平瓶			外：カキメ,回転ヘラケズリ　内：ヨコナデ	0.5～1㎜の白色粒少	不良	明オリーブ灰色	
34	平瓶	9.85	15.2	外：カキメ,回転ヘラケズリ　内：ヨコナデ	0.5～1.5㎜の白色粒僅少	良	灰白色	
35	平瓶	6.5	13.3	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.5～5㎜の白・黒色粒多	硬	灰色	
36	平瓶		18.08	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.5～1.5㎜の白色粒少	硬	灰白色	
37	椀	11.07	4.4	外：ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ	0.5㎜程の白色粒多	良	暗灰色	
38	高杯	12.5	4.5	外・内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5㎜以下の白色粒僅少	やや不良	青灰色	
39	高杯	13.78		外・内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5㎜以下の白色粒僅少	やや不良	明緑灰色	
40	高杯	12.59	7.9	外・内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5㎜以下の白色粒僅少	やや不良	オリーブ灰色	
41	高杯	8.7	9	外・内：ヨコナデ	0.5㎜以下の白色粒多	良	灰褐色	
42	瓶			外：カキメ,回転ヘラケズリ　内：ヨコナデ	0.5～1㎜の白色粒僅少	やや不良	灰白色	
43	壺	9.9	19.8	外：ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ	0.5～4㎜の白色粒極めて多	良	灰白色	
44	甕			口縁部に刺突文（クシメ）		良	灰色	
45	甕			外：カタキ，カキメ　内：同心円文当て具痕		良	灰色	
46	土師鍋	3.5		外：ナデ　内：ケズリ		やや良	淡橙色	
47	土師甑	22.76	24.85	外：ナデ　内：ケズリ		やや良	鈍い黄橙色	
48	土師甑	26.45	32.85	外：ハケ　内：ケズリ		やや良	浅黄橙色	



第61図　遺物実測（３）





第62図　遺物実測（４）（S＝１：６.甕）

直口壺43は肩部に１列刺突文がめぐる。調整は、底部周辺には不整方向のヘラ削りがみられ、底部はヘラ切り後ナデによって仕上げられている。

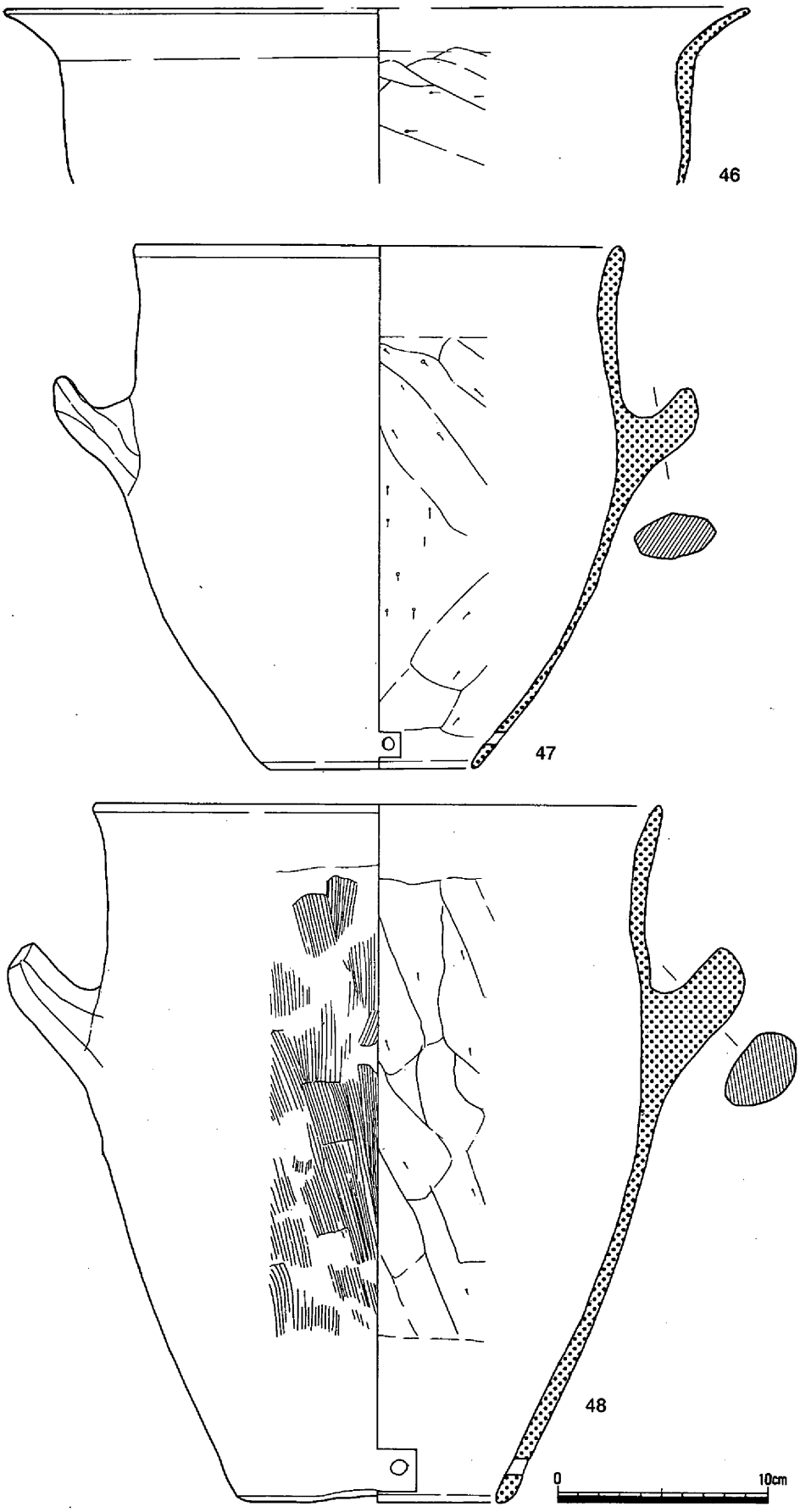
甕は２個体（44・45）あるが、44は口縁部を刺突文で飾り、口縁端部は低い帯状の突帯がめぐる。45は44と比べ体部のかなり上で肩が張り、短く外反する口縁部には文様はなく端部は上につまみ上げるように終わる。

鉄滓は大は10㎝、小で１㎝位の小片となっていた。肉眼観察でも２種類に分けられるがいずれも緑灰色を呈しており、中にはすさ入り炉壁片も含まれている。

土師器（46～48）

46は小破片であるが「くの字」に外反する口縁を持ち、体部の形状からすると鍋と考えられる。

47･48は甑である。わずかに外反気味に上方に伸びる口縁部と、筒状で１対の把手が着く体部である。底部は無く、端部外面から内面に向けては47が４孔、48が２孔の穿孔がある。いずれも焼成不良で軟質であるが、内面の調整はヘラケズリ



第63図　遺物実測（５）

で、外面は48によるとハケメが施されている。

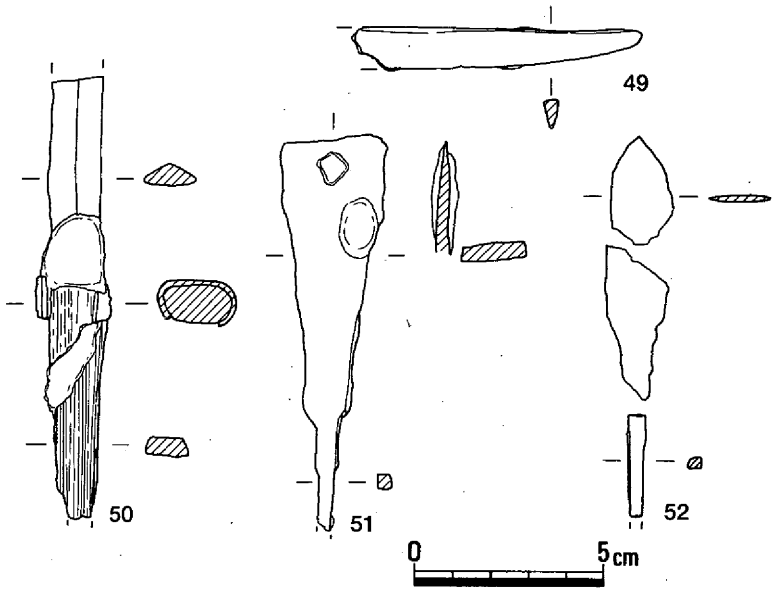
鉄製品（第64図49～52）

49は刀子片と思われるが、茎部が欠けている。

50は鉈で切先が欠けるが、断面台形の茎部に断面三角形の刀身がつく。鉈は断面が楕円形を呈するように取り巻いている。茎部には柄の木質がよく遺存している。

51・52は鉄鏃である。51は広根式鏃で鏃身の形から方頭形鏃である。刃は頭部にのみ付き、両刃である。

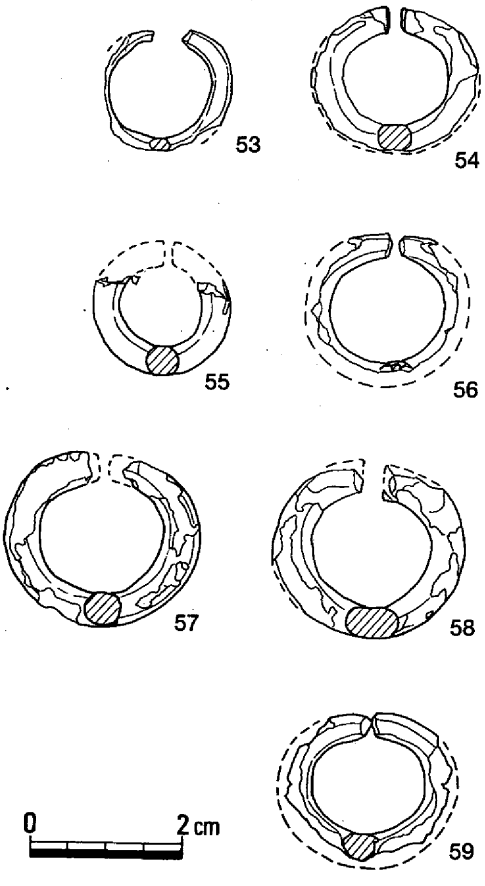
52は陶棺の下から出土しており、３片に分かれているがおそらく同一個体であろう。広根式であり、柳葉形鏃と思われる。



第64図　遺物実測（６）

耳環（第65図53～59）

59が陶棺の西側で出土した他はいずれも陶棺内にあった。銅芯に銀張りの中実耳環であるが、いずれの個体も破損とともにかなり表面の銀箔が剥離しており銅芯の錆が進行している状態であった。



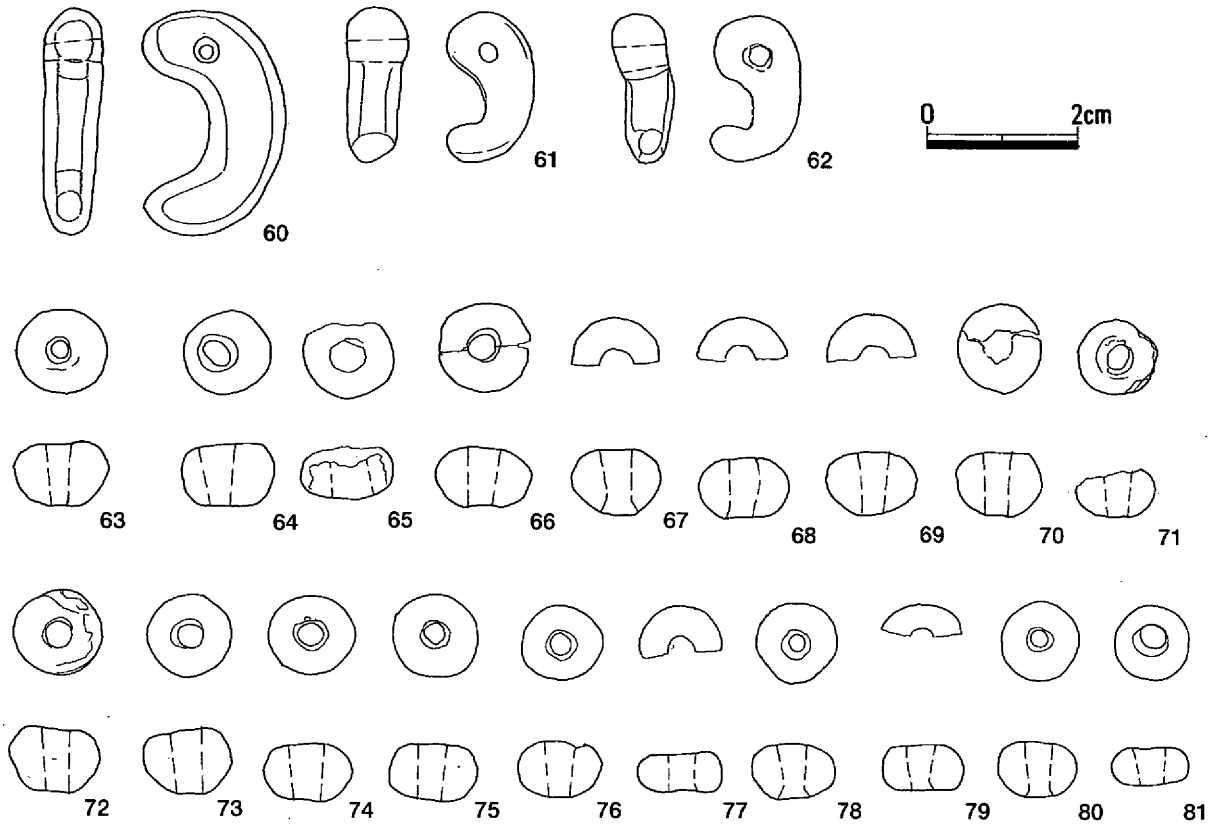
第65図　遺物実測（７）

表９　畑ノ平７号墳耳環観察表

番号	形式	材質	直径(cm)		厚さ(cm)		重量	その他
			上下	左右	上下	左右	(g)	
53	中実	銅芯銀張り					1.35	陶棺内
54	中実	銅芯銀張り	1.95	2.1	0.35	0.45	5.18	陶棺内
56	中実	銅芯銀張り					0.95	陶棺内
58	中実	銅芯銀張り	2.2	2.5	0.55	0.7	5.87	陶棺内
57	中実	銅芯銀張り	2.3	2.55	0.45	0.5	5.09	陶棺内
55	中実	銅芯銀張り		1.8	0.4	0.45	1.27	陶棺内
59	中実	銅芯銀張り	1.95	2.15	0.4	0.45	2.13	陶棺内

玉類（第66図60～81）

材質にメノウ製とガラス製の２種類がある。60はメノウ製の勾玉である。61・62はガラス製の勾玉で、63～81はガラス製の丸玉である。ガラスはかなり風化が進み濁った黄白色を呈していたが、粉末



第66図　遺物実測（８）

状となった破片をみるとガラス質であったことから、おそらく鉛ガラスであろう。丸玉はかなりもろくなっており、半分近く以上が遺存している19個体を実測したが、それによると直径は1.1～1.2cmとほぼそろう。

ただし、正確な個体数や丸玉より径の小さい小玉の存在については不明である。

小結

７号墳は一辺10ｍ程の方墳であったと考えられるが墳丘自体は削平を勘案したとしてもそれほど顕著なものではなかったと思われる。ただし横穴式石室は平面形が「くの字」に屈曲するという特徴を持っており、また石室内奥には土師質亀甲形陶棺があり、石室外から石室途中まで続く墓道の存在も明らかとなった。

表10　畑ノ平７号墳玉類観察表

番号	種類	色調	直径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	その他
60	勾玉	淡褐色	3	0.76	5.37	メノウ	
61	勾玉	灰淡黄色	2.03	0.8	0.83	ガラス	
62	勾玉	淡黄褐色	1.95	0.75	0.52	ガラス	
63	丸玉	灰淡黄色	1.2	0.83	0.45	ガラス	
64	丸玉	乳白色	1.2	0.85	0.58	ガラス	
65	丸玉	淡黄褐色	1.2	0.7	0.21	ガラス	
66	勾玉	淡茶褐色	1.2	0.8	0.56	ガラス	
67	丸玉	淡黄褐色	1.18	0.9	0.32	ガラス	
68	丸玉	茶褐色	1.18	0.8	0.28	ガラス	
69	丸玉	淡灰褐色	1.15	0.85	0.31	ガラス	
70	丸玉	淡灰褐色	1.1	0.85	0.52	ガラス	
71	丸玉	淡黄褐色	1.05		0.23	ガラス	
72	勾玉	淡黄褐色	1.1	0.85	0.56	ガラス	
73	丸玉	灰褐色	1.1	0.9	0.44	ガラス	
74	丸玉	灰褐色	1.1	0.78	0.41	ガラス	
75	丸玉	灰淡黄色	1.1	0.76	0.44	ガラス	
76	丸玉	灰茶褐色	1.1	0.7	0.37	ガラス	
77	丸玉	灰淡黄色	1.1	0.55	0.13	ガラス	
78	丸玉	灰黄褐色	1.05	0.75	0.46	ガラス	
79	丸玉	茶褐色	1.05	0.6	0.12	ガラス	
80	丸玉	淡灰褐色	1.0	0.75	0.35	ガラス	
81	丸玉	淡黄褐色	1.0	0.5	0.17	ガラス	

陶棺は脚が３列と割と大形のもので幅が最大で70cmもあり、１ｍ～1.2ｍの石室幅からすると陶棺の搬入は容易ではなく、おそらく陶棺の設置が石室構築に先行したと考えられよう。屈曲している石室の前半部分は谷筋から上がってきたと思われる墓道が入り込んでおり、石室の奥と手前で埋葬空奥間としての機能と道としての機能の２つに分化しており、奥は陶棺の主軸つまり埋葬頭位が優先された

結果として石室の屈曲という結果になったと考えられるのである。

陶棺内には石室奥側を頭位として１人、前側を頭位として２人の被葬者が想定でき前側の２人はおそらく追葬であると考えられるが、陶棺の大きさもある程度埋葬する人数を反映しているのではないだろうか。

副葬されていた特徴的な遺物としては、石室開口部付近で出土した鍋・甑といった煮沸形態の土師器がある。使用された痕跡はないもののミニチュアではなく実用品であった。もうひとつ前庭部において須恵器の甕とその中に入れられていたと考えられる鉄滓がある。鉄滓の量は本古墳群で最も多く、この２つの遺物は被葬者の性格を知る上で重要な意味を持つと思われる。

土壙墓１（第67図）

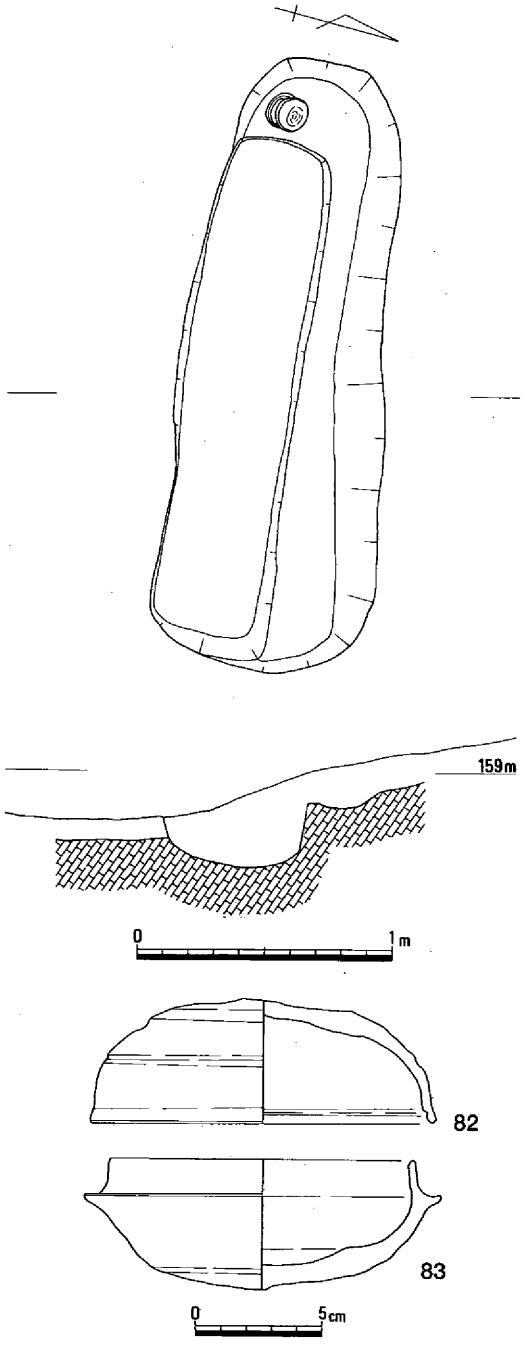
７号墳の裾から北東方向に３ｍ離れた所、尾根の傾斜変換点付近に位置する。斜面下方はすでに流出していると考えられるが上方では２段に墓壙が掘られていた。墓壙の規模は外側の輪郭で測ると、長軸が2.5m、最大幅は0.85m、深さが0.3mである。下の土壙は長軸が2.2mで、幅が0.5mである。

土壙の主軸はＮ-84°-Ｅで、ほぼ東西主軸である。棺の西側小口部分に相当する所の外側に須恵器の蓋杯のセットが置かれていたため土壙墓と判断したものである。

出土した遺物は、１が天井部の1/3を回転ヘラケズリ（右回り）を施し、体部と口縁部の境に凹線がめぐる。口縁端部内面に段を持つ。口径は13.6㎝、器高は5.0㎝を測る。２は底部の約1/4を回転ヘラケズリ（右回り）する。口縁部はまっすぐ立ち上がり端部は丸く納める。底部内面には仕上げナデが見られる。口径は11.9㎝、器高は5.2㎝である。ともに0.1～1㎜の白色粒を極めて多く含み、色調は青灰色を呈する。

この須恵器の特徴から、法量は若干大きいものの津山市中宮１号墳出土の蓋杯類の一部に類似すると考えられる。

以上の点から近接する7号墳とは直接関係が無く、明らかに土壙墓が先行する。時期的にはＡ支群の３基の古墳とＢ・Ｃ支群の横穴式石室墳との間に位置づけられる。



第67図　周辺土壙墓・遺物実測

（４）畑ノ平８号墳

調査前の状況（第68図）

８号墳はＢ２支群のうち、７号墳と９号墳の中間にある。今回調査を行った古墳群中では尾根斜面の最も低いところ、標高154ｍあたりに位置する。古墳の前面にはため池があり、そのために古墳の前面部分は削りとられ、現状での古墳の裾と池の水面がほぼ接するような所に位置していた。

調査前の状況ではすぐに古墳と判断はできなかったが、径７ｍ程の円墳状を呈する極めて低いマンドがあり、さらに中央が埋葬施設の落ち込みと思える窪みとなっていたために、確認トレンチをいれたころ石室石材が認められたため、８号墳として調査を行った。

墳丘と周堀（第69・70図）

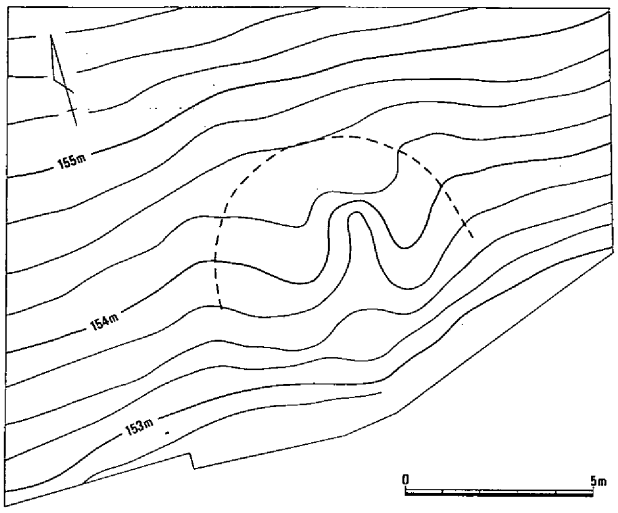
墳丘は調査の結果、前面の辺が長く斜面上側の辺が短い台形状を呈する方墳と判明した。墳丘の中心部分には横穴式石室が存在する。石室前面の辺長は７ｍ、丘陵上方の辺長は５ｍで、石室主軸ラインでの長さは７ｍである。

周堀は、調査前にはその存在が判然としなかったが、丘陵斜面上側の隅にコーナーを有しており、斜面下方向けて裾広がりの「コの字状」を呈する。周堀幅は1.1ｍで断面は逆台形状を呈し、深さは墳丘外の肩から30㎝を測る。

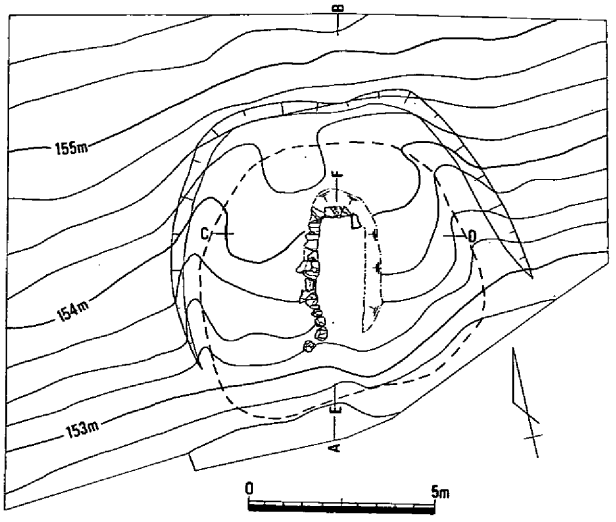
墳丘高は、石室前面の墳裾から墳頂までが1.1ｍ、石室床面から墳丘最高点までの高さは1.3ｍを測る。墳丘は石室の遺存状況から見て、上部がかなり削平を受けていると思われる。

石室の墓壙は全掘していないが、地山および旧地表層を掘り込んでいる。墓壙の規模は奥壁部では深さが１.1ｍを測り、急な掘り込み角度をなすが、石室前面では旧表土層を掘り込んだ緩やかに傾斜する墓道部分に連結し、平面形は「コの字状」を呈する。掘り方上面での幅は2.6ｍを測る。掘り方内の埋土は褐灰色砂質土と淡褐灰色砂質土との互層となっている。

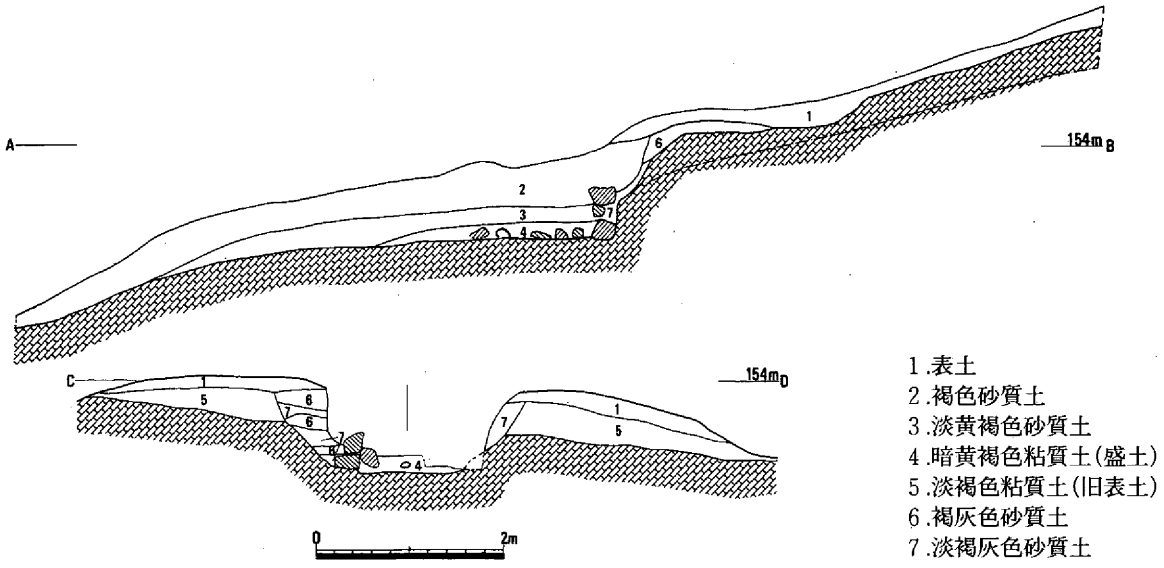
墳丘の土層は、掘り方の上面から始まり、旧表土である褐色砂質土の上に20㎝ほどの盛土（淡褐色砂質土）が存在する。この墳丘盛土はおそらく石室構築と並行して行わ



第68図　調査前地形測量



第69図　墳丘測量



第70図　墳丘土層断面

れたと考えられる。

横穴式石室（第71図）

石室の遺存状態は極めて悪い。天井石は全て存在せず、左側壁も奥壁に接する基底石を除いた全てが持ち去られており、乱掘後の土砂の流入によって石室内は完全に埋まりきっていた。残存する右側壁から石室主軸はおおよそN-15°-Eとなり、ほぼ南に開口する無袖式石室であった。

石室の規模は奥壁部で幅が0.8ｍ、右側壁部で石室長を測ると3.3ｍ、石室の現存高は0.7ｍである。これは今回調査した横穴式石室の中で最も小さい。また、石室の平面プランは右側壁の形状からしてやや胴張りの長方形になると思われる。

使用されている石材は角に丸みのある玄武岩の角礫である。

石室壁面は奥壁部では３段分が残る。基底部には長さ60㎝、高さ30㎝程の横長の石と長さ25㎝、幅35㎝の縦長の２石で構成し、２・３段目の石は基底の石よりやや小ぶりの石を横長に用いている。

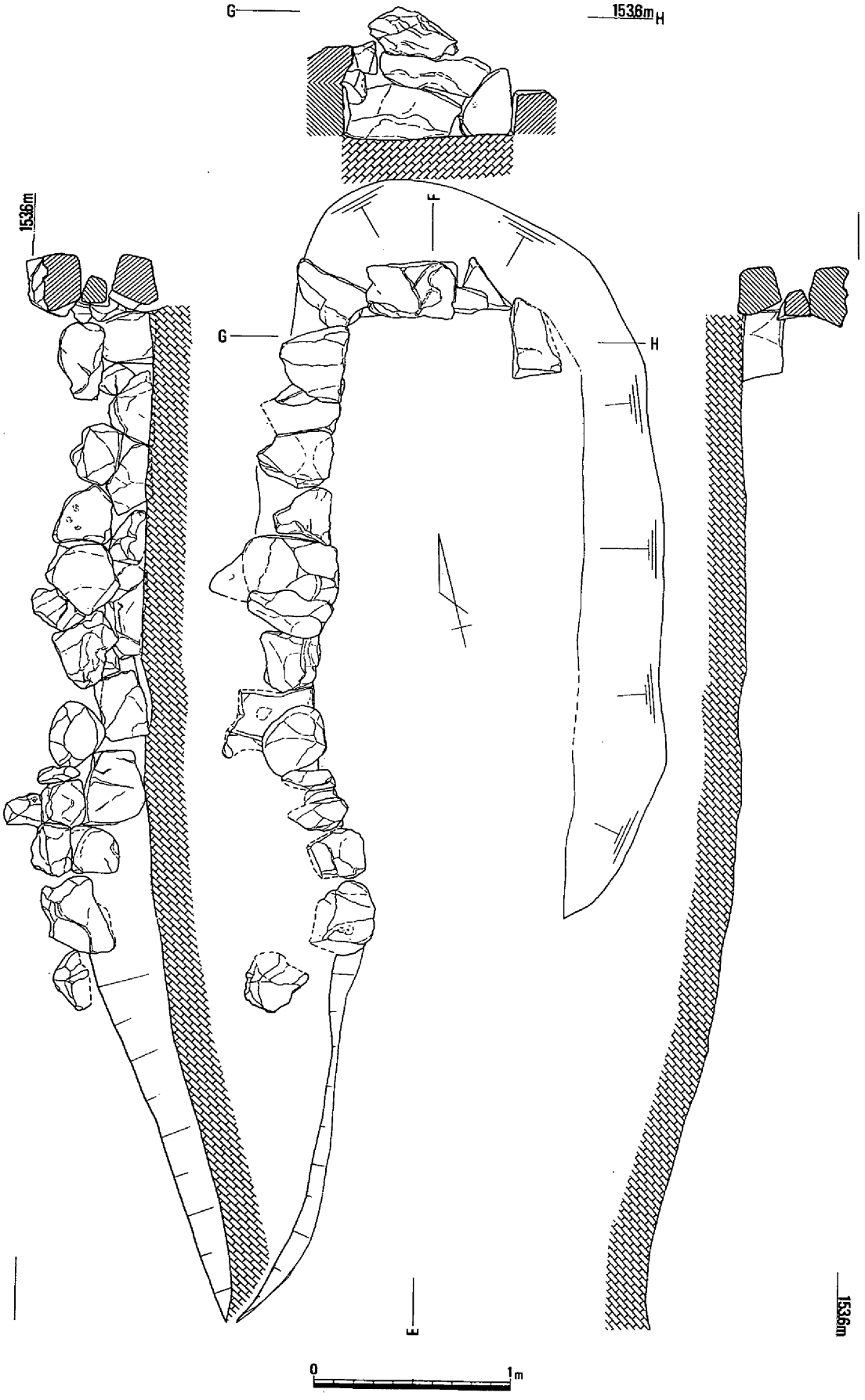
右側壁は２段の石積みが残る。基底部および２段目とも幅20㎝程の石の小口部で壁面をなす。このさらに右側壁では、石室開口部付近において、基盤層が下降するのに反して壁石のレベルが上昇してゆく。ちょうど土壁状となっている旧表土層上に壁石を積み上げるといった形をとる。

墳丘前面に向かって左側の旧表土上に、壁石とほぼ同大の石が１つ置かれており、外護列石の一部であった可能性がある。

石室床面の状況（第72図）

墓壙底の地山面を床面としており、床面は１面である。床面は石室内ではほぼ水平であるが、石室開口部から外にかけては緩やかに下り、断面Ｕ字形の墓道に連結する。床面上には遺物の他に棺台と考えられる石があった。

棺台は石室の中央より奥側に一部が遺存するが、この棺台と奥壁との間には椀４と平瓶７、棺台上に椀５と、棺台石間に平瓶８があった。また石室中央より開口部側には乱掘によるとみられる落ち込みがあり、棺台も続きがこの辺りにあったと思われるが消失していた。またこの掘り込みの周囲や中に土器４点があった。１は出土状況から口縁部を上に向けており杯としたものである。２・３は短頸



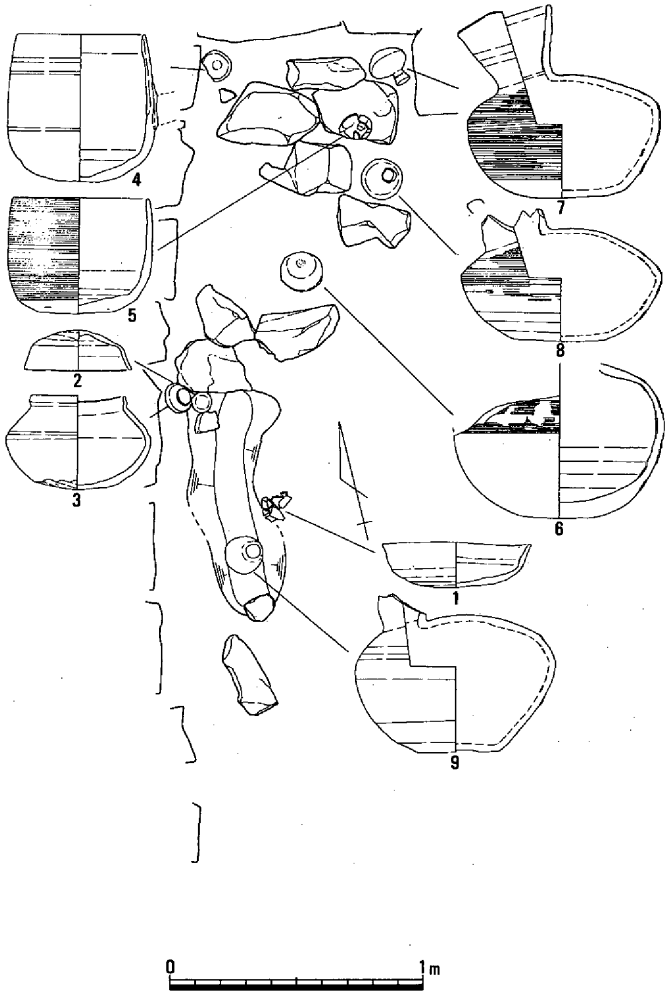
第71図　石室実測

壷と蓋が重なるようにあった。これら４点の土器は現位置から移動している可能性はあるが、奥壁沿いの土器とは別の一群と考えられる。

出土遺物（第73図）

わずかに須恵器が８点、耳環１点が出土している。

蓋杯は１の一点のみである。杯としたのは、口縁部と体部の境を強くナデ、口縁部がやや外反することによる。底部はヘラ切り後ナデによって仕上げられる。２・３は短頸壷と蓋のセットである。底部はヘラ切り後未調整である。４･５は体部がジョッキ形の椀である。４は把手の痕跡が付き体部には３条の沈線がめぐる。５は体部全体にカキメを施す。６～９は平瓶である。６・７は体部上半にカキメを施し、下半はヘラケズリで仕上げる。７は体部のほぼ全面にカキメを施し、底部はヘラケズリで仕上げる。これに対して８・９は底部にはヘラケズリがみられないものの、ヘラ切り後はナデて仕上げられている。



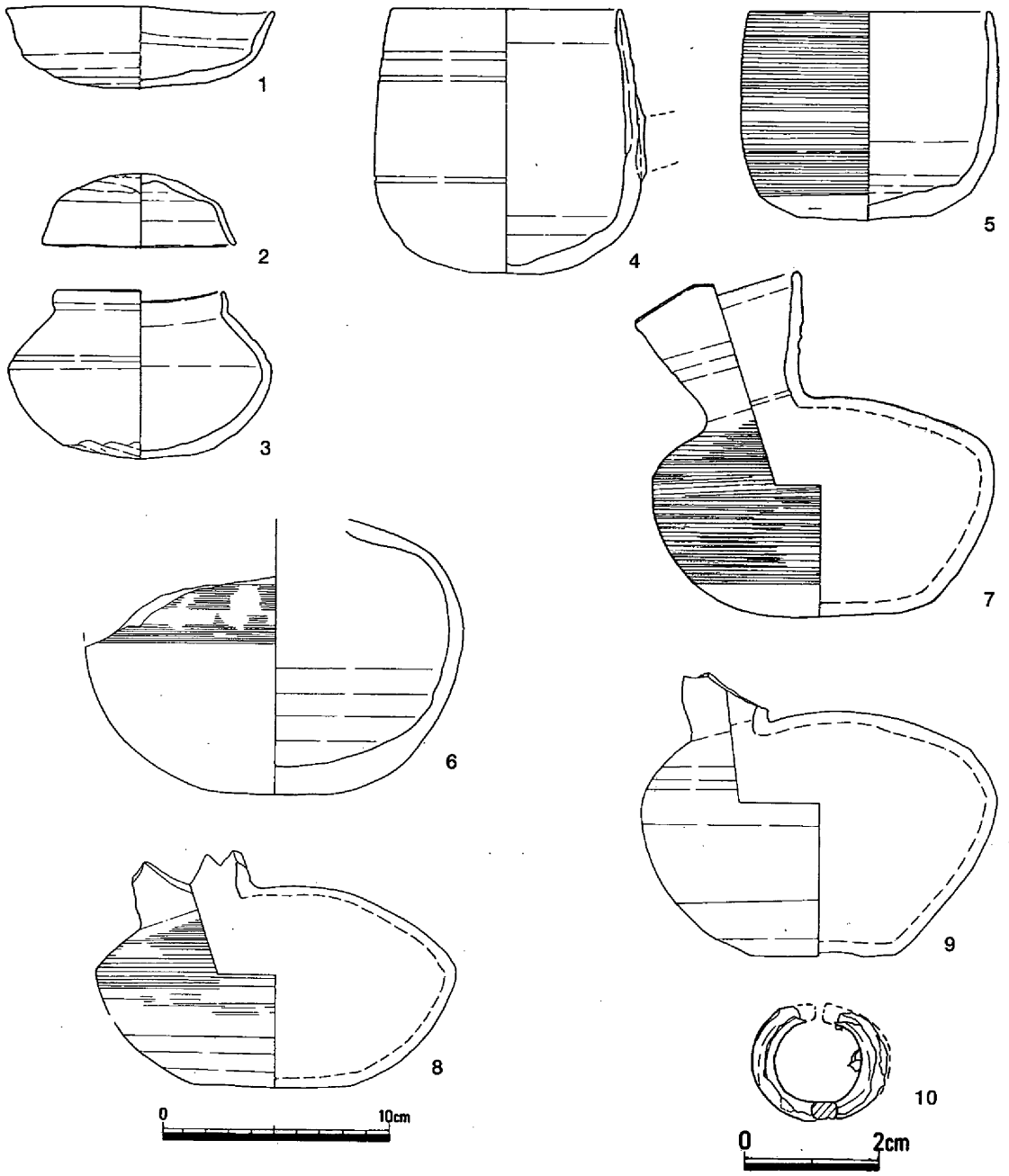
第72図　床面遺物出土状況

耳環は石室覆土中から１点だけが出土している。中実の銀環であるが銀箔がほとんど剥離し、銅芯も錆化が著しい。重量は4.12ｇを測る。

小結

８号墳は今回調査した横穴式石室墳のうち周堀の形態からみて確実に方墳といえる古墳であった。墳丘規模は一辺が約７ｍであり、横穴式石室の規模も長さが３ｍ、幅は0.8ｍと当古墳群中で最小であった。それに応じてか出土遺物も少なく、また使用する石室石材の大きさも最も小さいものであった。

石室内では棺痕跡や棺釘などは認められなっかたものの棺台上には木棺かそれに近いものが存在したことは間違いない。石室の規模からみて棺を複数置くことは不可能である。そこで、単葬であるか追葬が行われたかについてを石室内の遺物の出土状況と須恵器の形式を検討するなら、石室前側から出土した９はカキメがみられず、底部は周辺をヘラケズリするものの底部はヘラ切り後ナデによって仕上げるもので、回転ヘラケズリを施す石室奥側の６・７と比べると後出する要素である。こうしたことから石室前側の遺物は、現位置を動いている可能性が考えられるものの、追葬に伴う遺物であると思われる。



第73図　遺物実測（１）

表11　畑ノ平８号墳土器観察表

NO	器形	口径	器高	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	杯	11.6	3.7	外：ヘラケズリ（左),ヘラ切り後ナデ	0.5～1㎜の白・黒粒僅少	硬	青灰色	
2	壺蓋	3.3	8.4	外：周辺ケズリ,ヘラ切り後ナデ	0.2～0.5㎜の白色粒やや多	良	灰色	
3	短頸壺	7.3	7.5	外：周辺ケズリ,ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.2～0.5㎜の白色粒やや多	硬	灰色	
4	椀	10	11.8	外：下半不整ナデ　内：仕上げナデ	0.2～1㎜の白色粒少	不良	灰白色	
5	椀	10.5	9.3	外：カキメ,周辺ケズリ,ヘラ切り後未調整　内：仕上げナデ	0.2～3㎜の白色粒少	不良	灰白色	
6	平瓶			外：カキメ,ヘラケズリ　内：ヨコナデ	0.5～3㎜の白色粒少	不良	灰白色	
7	平瓶	7.7	15.4	外：カキメ,ヘラケズリ（右）　内：ヨコナデ	1～7㎜の白色粒多,黒色粒少	硬	灰白色	
8	平瓶			外：カキメ,周辺ケズリ（右）　内：ヨコナデ	0.5㎜以下の白・黒色粒少	不良	青灰色	
9	平瓶			外：周辺ケズリ（左),ヘラ切り後ナデ	1㎜以下の白色粒やや多	硬	灰白色	

（５）畑ノ平９号墳

調査前の状況（第74図）

９号墳はＣ２支群のうちで最も丘陵先端部分近くの南斜面に位置している。調査前は雑木林となっていたが、古墳のすぐ南側にまで水田が造られており、丘陵の端に段状に加工されており、墳丘のすぐ南側は大きな崖状となっていた。また古墳の東側に存在する池に水を引く水路があり、その水路の両側は堤を何回かかさ上げが行われていたため墳丘自体は目立たない状況であった。

踏査中に直径８ｍほどのわずかな高まりが確認できた。ちょうど中央部に凹みがあり埋葬施設の落ち込みではないかと思われ、トレンチ調査を行ったところ、石室石材が確認できたため９号墳として本調査にはいることになった。

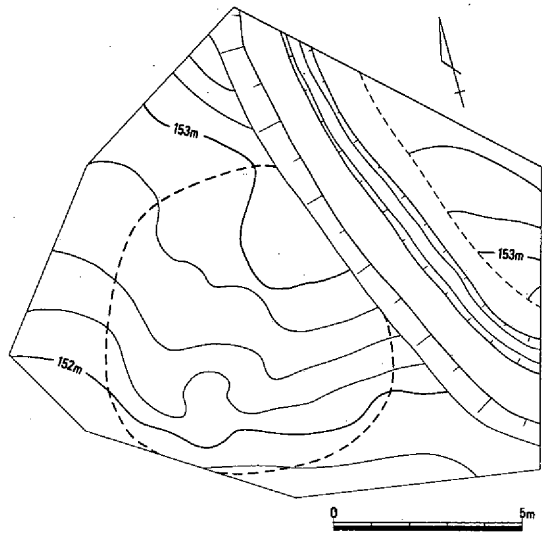
墳丘（第75・77図）

直径９ｍの円墳で、高さは墳丘南裾から2.25ｍを測るが、墳丘背後からは0.25ｍしかなく、傾斜のある丘陵斜面に墓壙を掘り込み石室を構築することから、前面観は重視されるものの尾根部とは浅い周堀によって分離されるのみである。

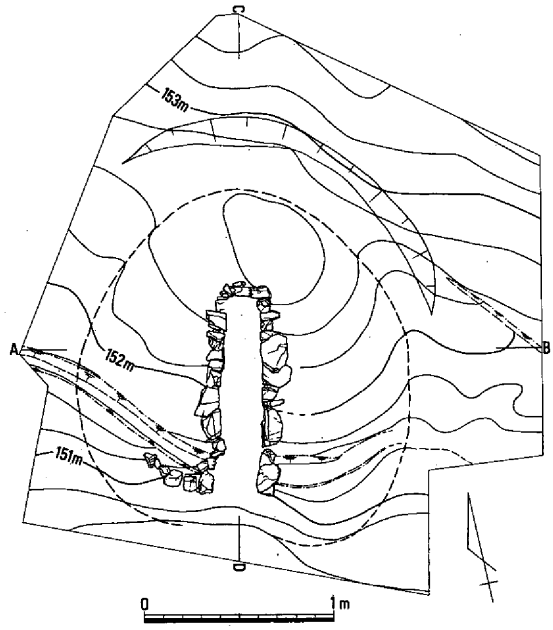
周堀は墳丘背後を半円弧状に取り巻く。断面が逆台形状を呈し、幅は最大で1.9ｍ、深さは墳丘外の肩から測って0.4ｍである。

墓壙は全掘せず、トレンチによる確認にとどまるが、基盤層より掘り込まれるため地形の傾斜に即しており、平面形は斜面下に抜ける「コの字状」を呈する。墓壙の規模は最大幅が3.5ｍで、奥壁部では深さは1.2ｍを測るが石室中央では0.5ｍ程しかない。墓壙の埋土は厚さ0.1～0.2ｍの暗褐色砂質土と暗黄褐色砂質土である。

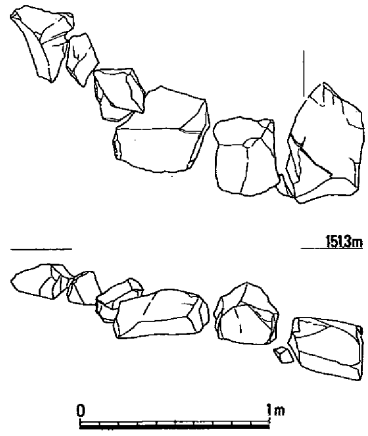
墳丘盛土は墓壙の埋土から連続して、石室の構築と並行して盛り上げられている。盛土の単位は墓壙埋土と比べると厚く、0.2～0.4ｍ程で



第74図　調査前地形測量



第75図　墳丘測量

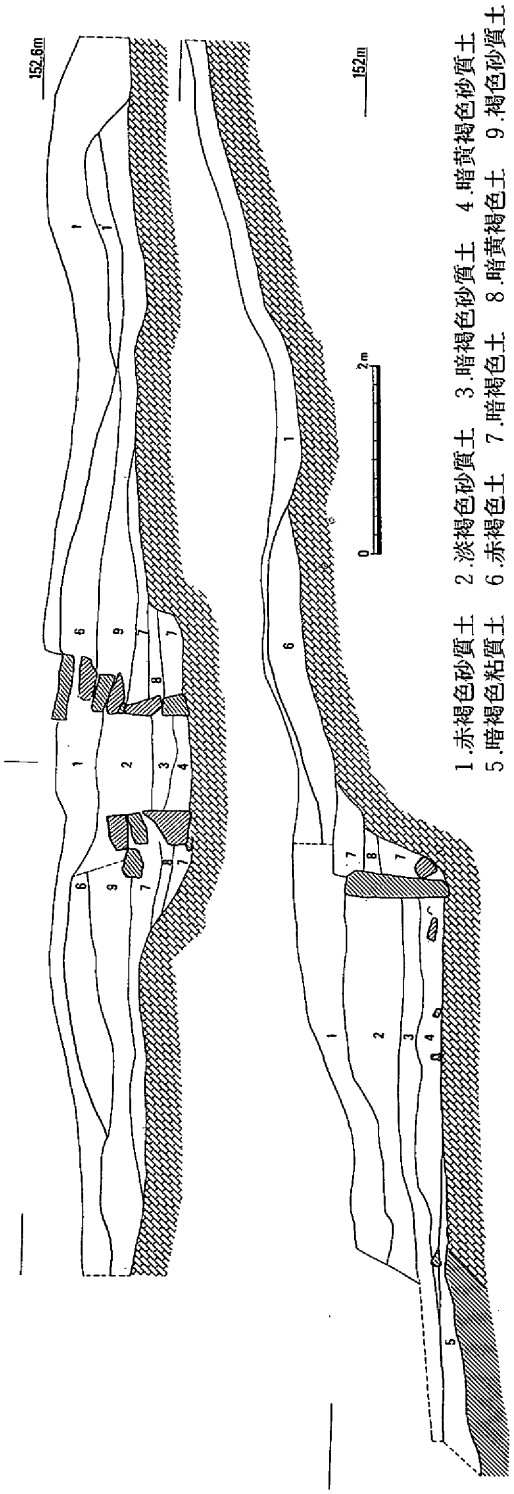


第76図　外護列石（S＝１：40）

１層が壁石２つ分に対応している。

墳丘の中央部分には横穴式石室が存在した。

外護列石（第76図）は石室に向かって左側にある。石室右側壁の端にあたる石の背後より始まり側壁と直交する位置から墳丘ラインに沿うように弧状にのびる。表土除去時には側壁に接した石のみ露出しており、いわゆる埋め殺しの状態であった。



第77図　墳丘土層断面

横穴式石室（第78図）

石室は無袖式の横穴式石室で、主軸はＮ－17.5°－Ｅとほぼ南に開口する。

石室規模は長さが5.5ｍあり、奥壁での幅は1.1ｍであるが開口部では1.3ｍと、平面形は末広がりの長方形となる。高さは最も残りの良いところで1.5ｍを測るが、石室は天井石全部と側壁の一部が既に抜き取られていたために本来の高さは不明である。また石室内は流入した土砂によって完全に埋まりきっていた。

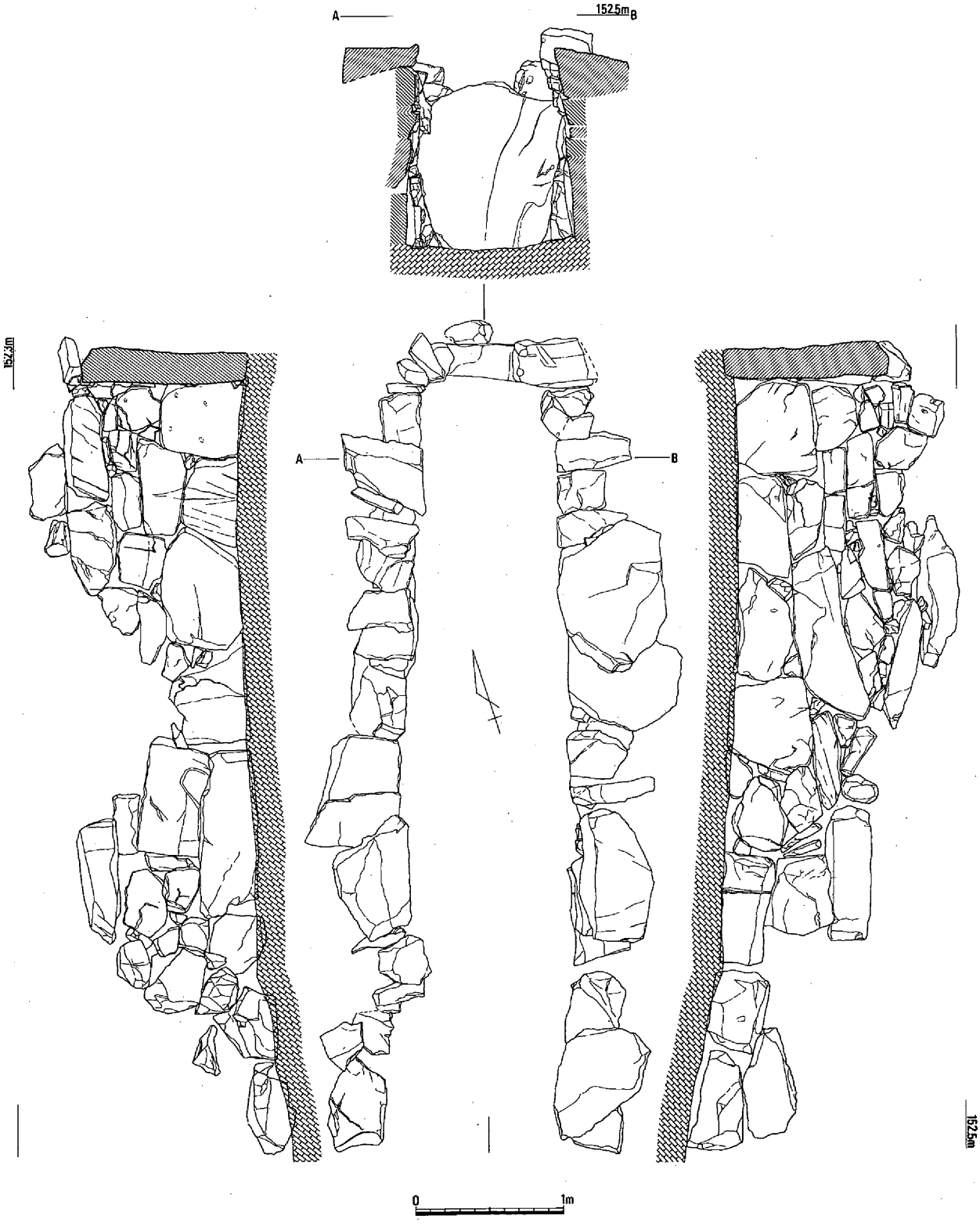
奥壁では基底石に当古墳群の石室石材中で最も大きさ石材が使われていた。厚さ0.2～0.3ｍもの板石の小口部を上下方向にして立てて用いており、その高さは1.1ｍを測る。この石の上にかなり小形の石が１つあり、２段分の石積みが現存した。石室高が現存の1.5ｍとした場合に、奥壁は３段積みであったと考えられる。

両側壁の基底石は石の大きさこそ異なるが奥壁と同様の石の使い方をしており、２段目以上では石を横長にして小口部で壁面を構成している。

右側壁では中央部分がかなり崩落していたものの、最も残りの良いところでは５段分の石積みがあった。基底石は石室開口部に近くなるにつれ小型化し、開口部付近では２段目以上の石積みは小形で不整形のもので積み方も乱雑である。

左側壁では最高で６段の石積みが残るが、３段目以上には不定形でかなり小形の石を使った後再び大形の石を５・６段目に構架する。

石室石材はいずれも玄武岩の角礫を使用し

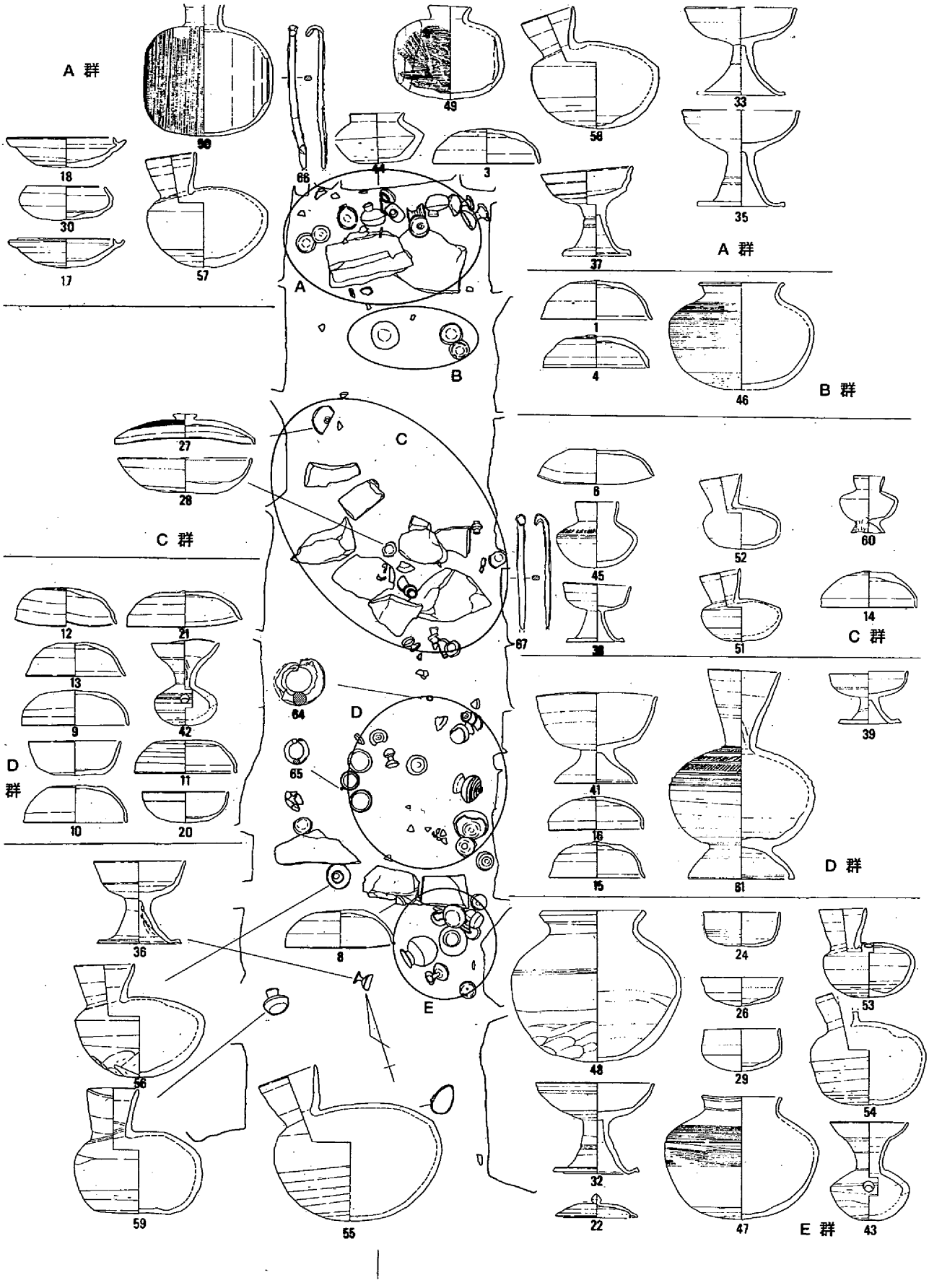


第78図　石室実測（S＝１：40）

ている。

床面・遺物の出土状況（第79・80図）

石室床面は奥壁から2.5ｍの辺りまでがほぼ水平な面となっており、墓壙を掘削した後の基盤層上をそのまま床面としている。そこから石室開口部にかけては旧地形も緩やかな下りの傾斜となっており

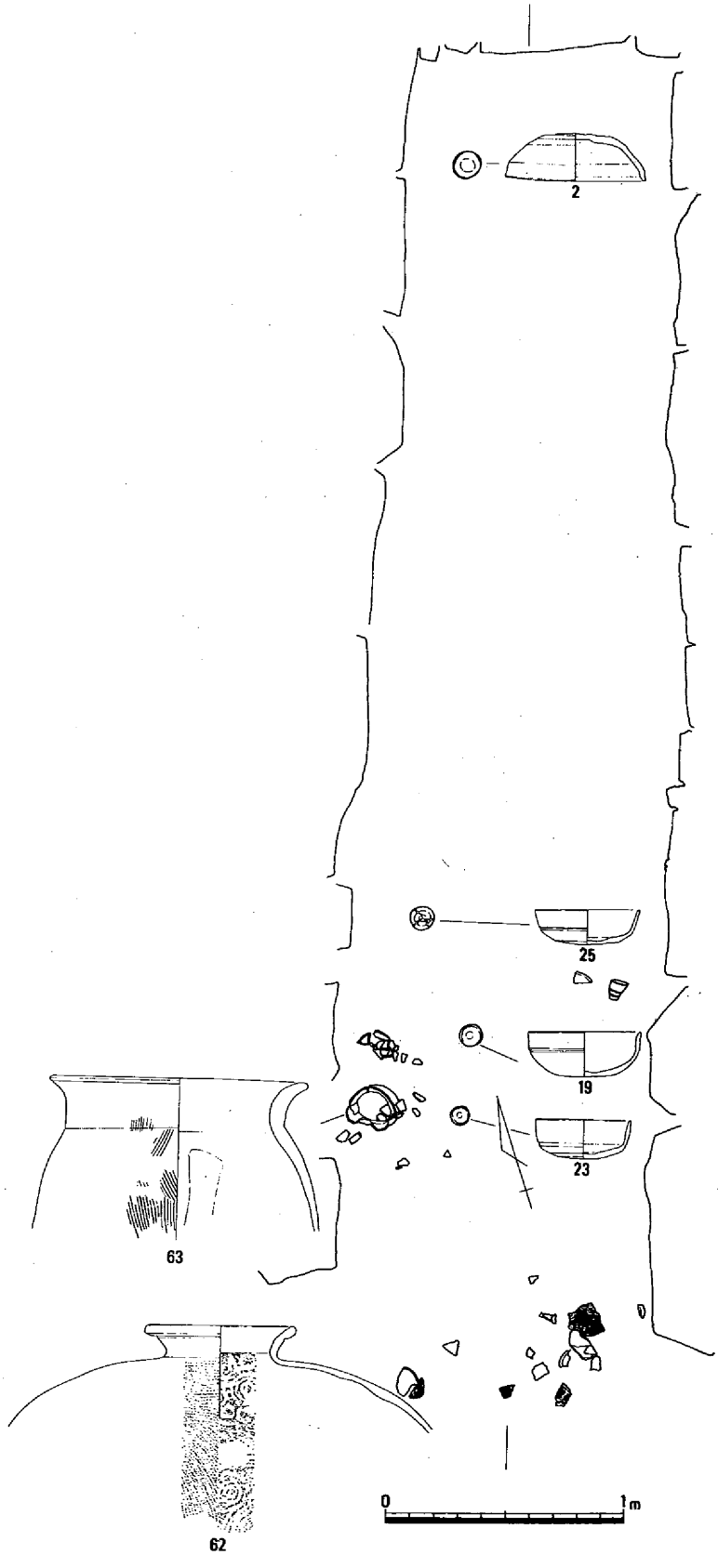


第79図　床面遺物出土状況

床面は基盤層上の旧表土層の上にある。この部分ではさらに床面を開口部にかけて水平にするように広げて整地しもう１面の埋葬面を造りだしていた。この部分のみを下層としているが、石室奥側については１面しかなく本来は下層と連続して考えるべきであるが床面の最終的な状況を示すものとして上層として図示している。この２つの面から多くの遺物と棺台が検出されている。

上層では棺台として使用されたと思われる板石が、奥壁沿い・石室中央・開口部近くの３カ所にあった。奥壁に接して１ヶ所とその手前部分とで縦２列に配置されたと思われる。また開口部近くのものは左側壁側に２石が並んであり、これと位置を違えて右側壁側にもう１石があることから石室手前側では２棺横並びにあったと考えられる。棺釘は66・67のみであり、ちょうど石室中軸ライン上の奥壁に接して66が、中央部の棺台上に67があり、石室最奥の棺のものである。ただしその位置から棺が左右どちらかに動かされたことが考えられ、奥側でも複数の埋葬があった可能性がある。

出土遺物のほとんどが上層にあり、その位置からいくつかの群として捉えることができる。まず奥壁沿い（A群）には杯20・21がある。石室最も手前の棺台石と左側壁に接して（E群）は杯Gが多くみられた。この２群が最も明らかなまとまりをなす。この他にややまとまりとし



第80図　床面下層遺物出土状況

ての根拠に乏しいがＡ群と奥の棺台石を挟んでＢ群がある。中央の棺台石の間やその周囲をＣ群とし、その他にも図示できていないが金環65と組となる金環がもう１点あった。中央と開口部側の棺台間をＤ群とする。

下層では６点の土器がある。土師器甕63は口縁部を下にして置かれており、その周囲に杯蓋19と杯23がある。前庭部には甕もしくは横瓶の62がある。2･25は棺台の下にあったもので上層との区分は難しい。

出土遺物（第81～85図）

出土した遺物には、須恵器、土師器、耳環、釘がある。

須恵器（１～63）

杯蓋（第81図１～26）

法量、形態や技法から次の７類に分類できる。

１類（１～３）　杯蓋で口径は11.5～12cm、器高は４cm以上である。天井部はヘラ切り後未調整である。

２類（４～12）　杯蓋で口径は11～12cmで、器高は４cm前後にある。天井部の調整はヘラ切り後未調整である。

３類（13～16）　口径が10～11cm、器高は3.6～４cmの杯蓋である。天井部の調整にはヘラケズリは認められない。

４類（17）　口径は10cm、器高が４cmほどの杯Ｇである。底部は平坦で、口縁部との境を強くナデる。調整はヘラケズリでなく、ヘラ切り後未調整である。

５類（18・19）　口径は９cmほどで、器高が３～４cmの間にある。底部は椀状をなし、調整はヘラ切り後未調整である。杯Ｈの蓋と同様の形態・技法を採る。体部外面には26以外は浅い１条の沈線がめぐる。

６類（20・21）　立ち上がりの最も低い杯身である。口径は10.5cmを測る。ヘラケズリは認められず、底部はヘラ切り後未調整である。19・20は同一の胎土、焼成、色調である。

７類（22～28）　杯Ｇと蓋である。蓋22は宝珠つまみが付くもので、内面には短いかえりが付く。杯部は口径は８cm程である。口縁部は比較的平坦な底部から真っ直ぐ上方にのびる。体部に浅い凹線がめぐる。

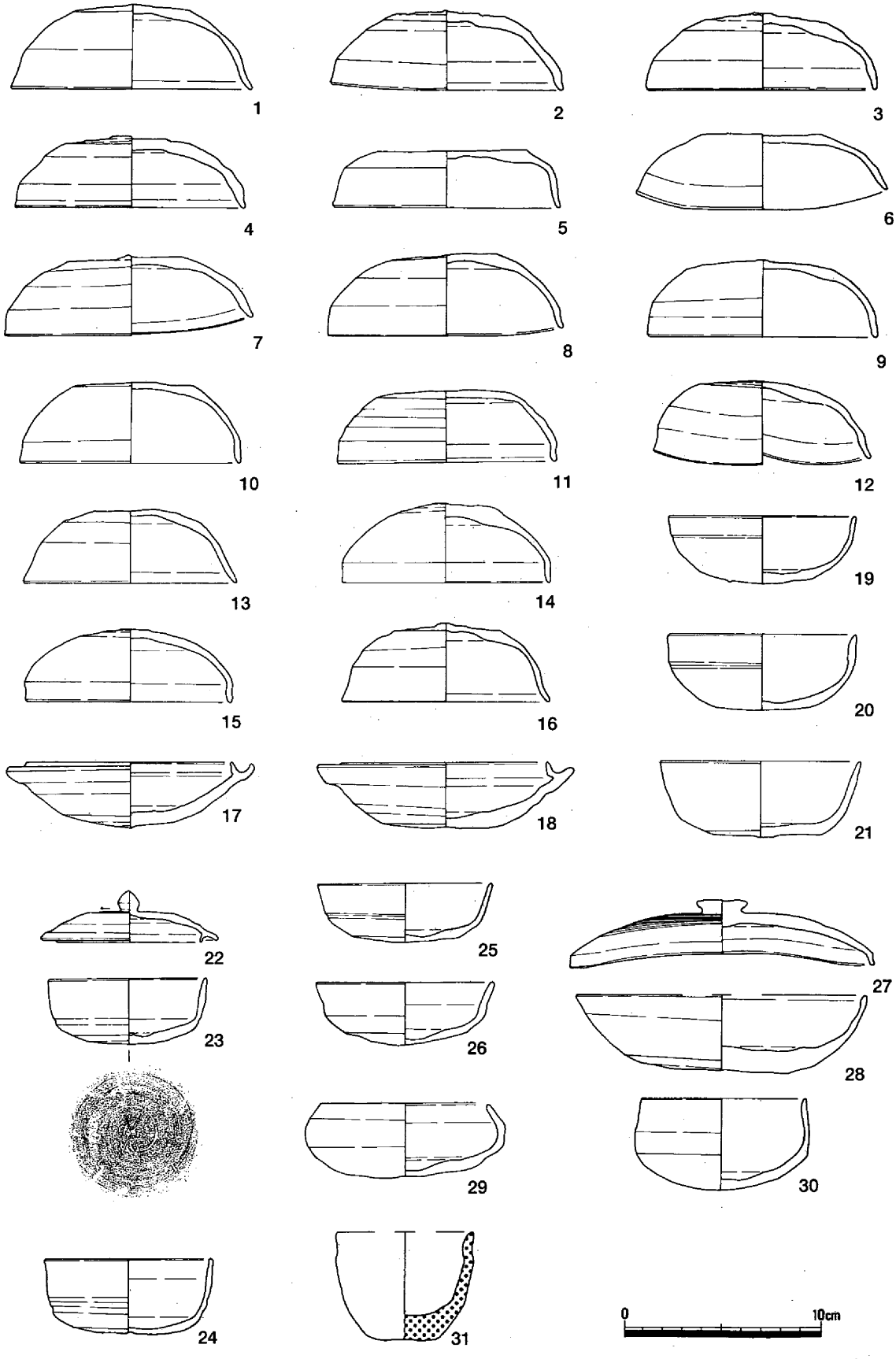
８類（29･30）　杯Ｇと蓋である。蓋27は扁平なつまみが付き、外面はカキメを施す。内面のかえりはすでに消失し、口径も６類と比べ大きい。

杯５類は蓋１類に対応すると思われるが、杯は２点のみで出土したのは圧倒的に蓋が多い。蓋としたものの中には使用の際には杯として利用されたものがあると考えられる。

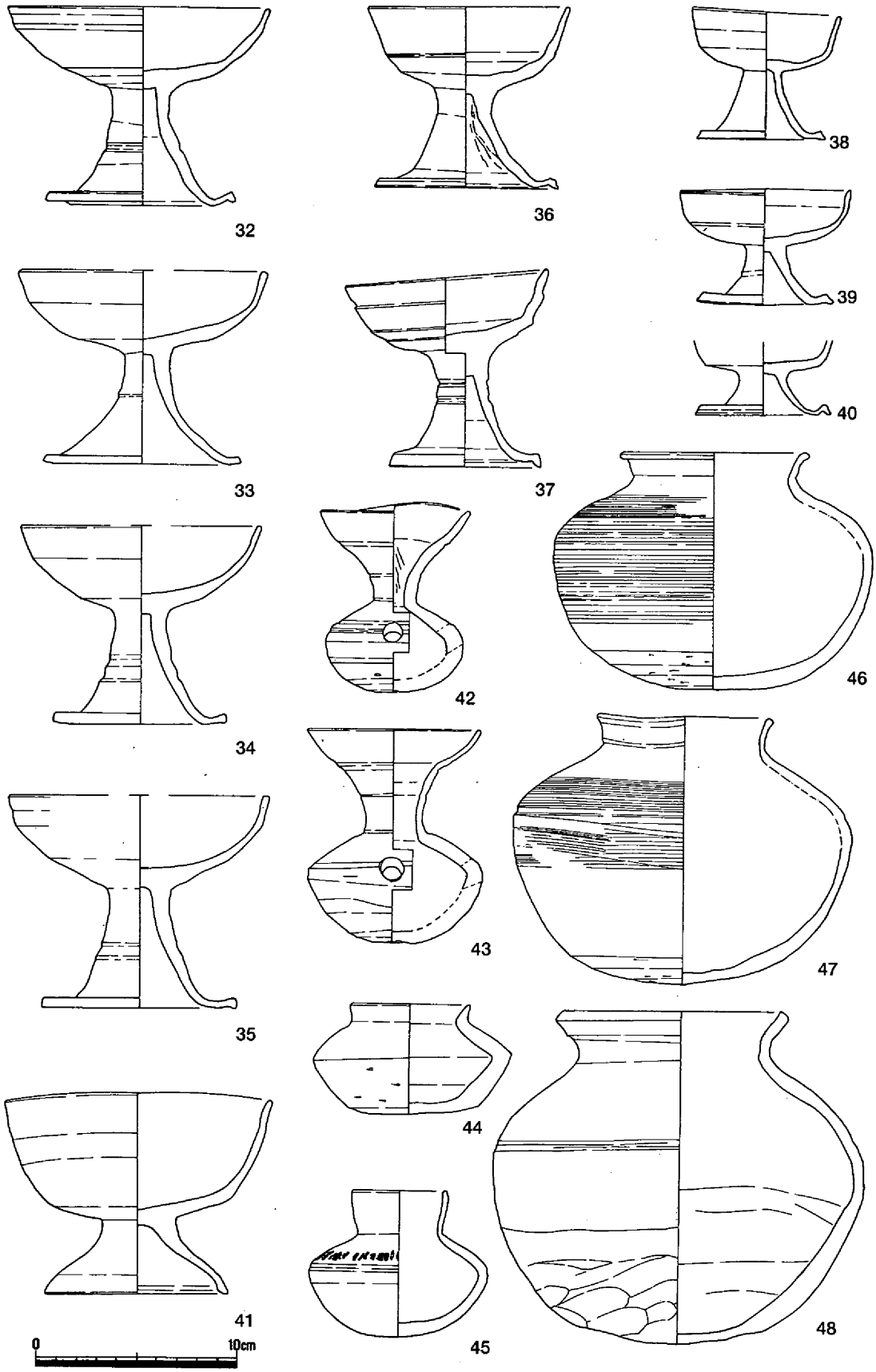
椀（第81図29・30・41）　30は内傾する口縁部を持ち、比較的浅いもの。29は30に比べ深く、底部が丸底である。41は台付きの椀である。

高杯（第82図32～40）　32～36は長い脚に椀状の杯部が付くもので焼成が悪く土師器に近い。胎土・色調も共通する一群である。37は杯部に２～３つの段があり脚部には２条の沈線がめぐり長脚高杯の退化型式と思われる。38～39はいずれも小形品である。33と35を除くといずれも脚端を下方に強く引っ張る特徴がみられる。

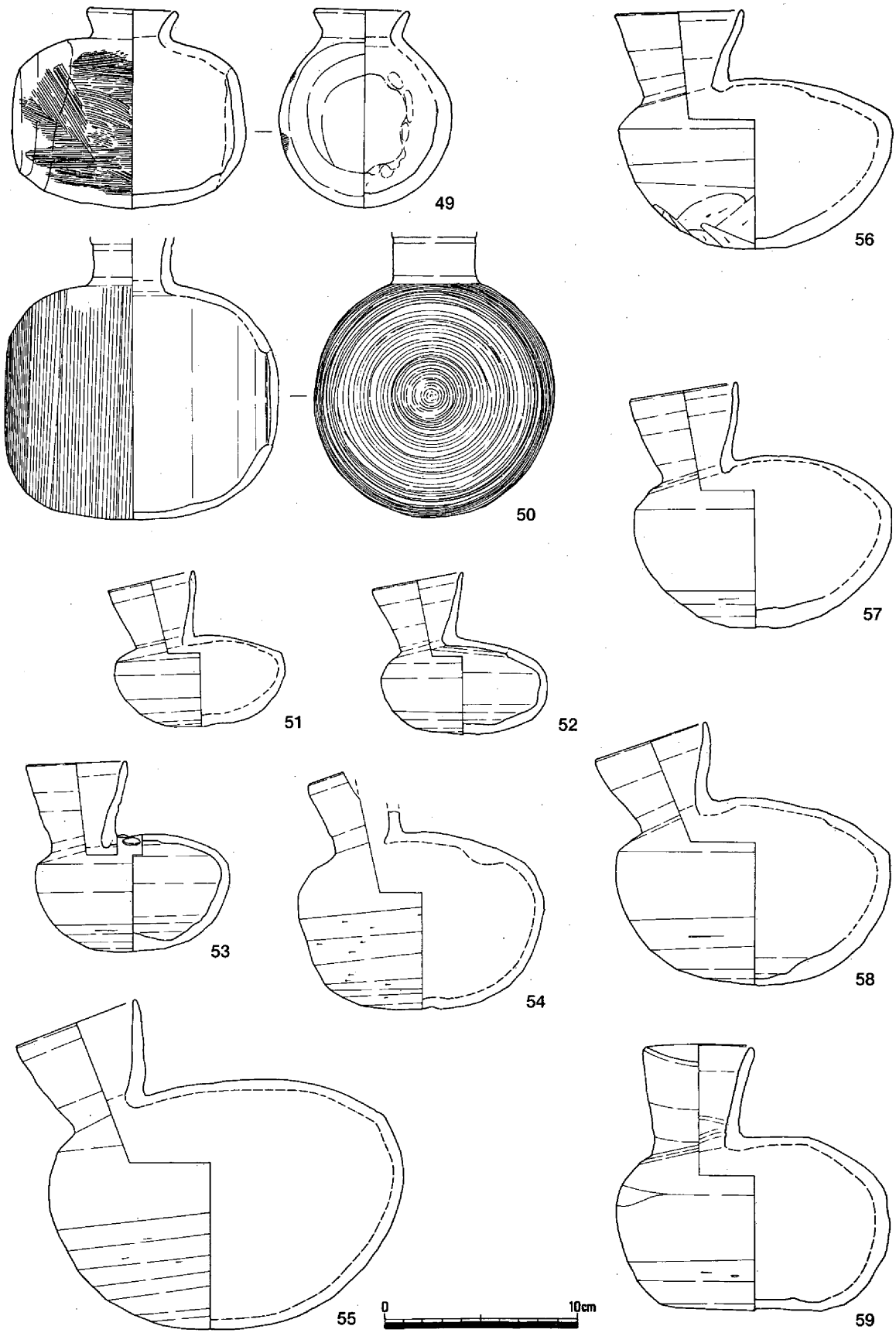
甕・壷・横瓶（第82図42～48、第83図49・50、第84図60～62）　42・43はともに小形の甕である。壷類は小形の短頸壷44と直口壷45、大形の広口壷46～48があるが、46・47が体部にカキメを底部にはヘ


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
19
15
16
20
17
18
21
22
25
27
23
26
28
29
30
24
31
0
10cm

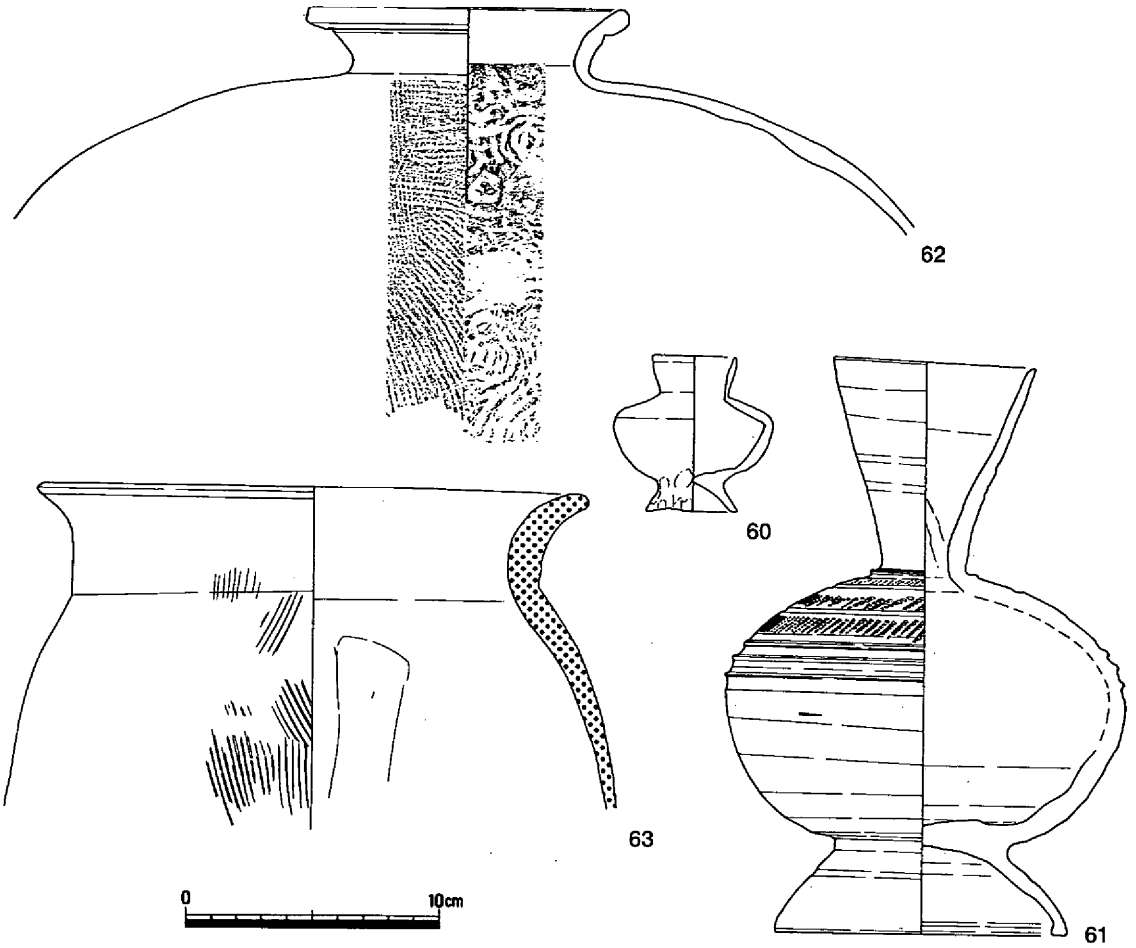
第81図　遺物実測（１）



第82図　遺物実測（２）



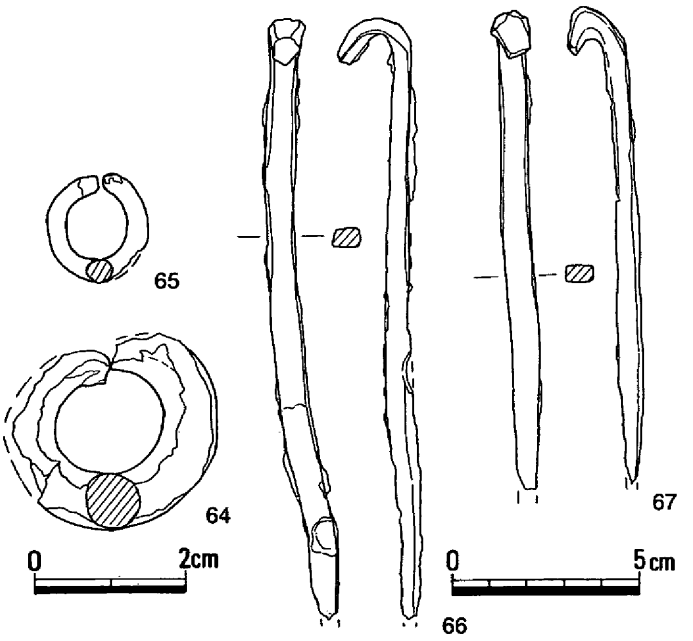
第83図　遺物実測（３）



第84図　遺物実測（４）

ラケズリを施すのに対し、48は底部の周辺部には不整方向のケズリを行い底部はヘラ切り後ナデて終わる。60・61は大小の台付き長頸壷である。61は体部に３条の突線があり、肩部には３列の刺突文がめぐる。49・50は俵状の体部を持つ横瓶で体部を49が不整方向のハケメ、50はカキメを施す。49は小形で、色調がにぶい黄橙色を呈し、外面には不整方向にハケメがみられる。須恵器を模倣した土師器の可能性がある。62は扁円形の大形の体部で外面にはタタキ、内面には同心円文の当て具痕が残る。

平瓶（第83図51～59）　大形の



第85図　遺物実測（５）

54～59と小形品の51～53があり、53は肩部に豆状の飾りが付く。52・56・57・59は底部の周辺にはヘラケズリがみられるが底部の回転ヘラケズリは省略され、ヘラ切り後ナデないし未調整である（１類）。それら以外のものは底部に回転ヘラケズリを施している（２類）。

土師器（第81図31・第84図63）

31は手づくねで、甑あるいは甕や鉢の模倣であろう。63は体部下半を欠くが、やや長胴になる甕である。外面にはハケメ、内面には縦方向のヘラケズリがみられる。

耳環（第85図64・65）　大小の別があり、65は金環で銅芯に巻き付けた金箔がよく残っている。64は

表12　畑ノ平９号墳土器観察表

NO	器種	口径	器高	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	杯蓋	12.2	4.3	外：ヘラ切り後未調整　ヨコナデ,仕上げナデ	1㎜以下の白色粒少	硬	青灰色	
2	杯蓋	11.7	4.1	外：ヘラ切り後未調整　ヨコナデ,仕上げナデ	0.2～5㎜の白・黒色粒やや多	良	灰白色	
3	杯蓋	11.5	4	外：ヘラ切り　内：ヨコナデ	0.5～1.5㎜の白色粒やや多	硬	灰色	
4	杯蓋	11.6	3.7	外：ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.2～4㎜の白色粒僅少	良	灰色	
5	杯蓋	11.5	3	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～1.5㎜の白色粒極めて多	良	青灰色	
6	杯蓋	11.8	4.1	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.5㎜程度の白色粒多	不良	灰白色	
7	杯蓋	11.8	4.1	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	6.5～7㎜の白色粒やや多	硬	緑灰色	
8	杯蓋	11.9	4.2	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.2～5㎜の白色粒多	不良	灰白色	
9	杯蓋	11.6	3.7	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～3㎜の白色粒多	不良	灰白色	
10	杯蓋	11.8	4.1	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～2㎜の白色粒極めて多	不良	灰白色	
11	杯蓋	10.9	3.7	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.2～2㎜の白色粒やや多	不良	灰白色	
12	杯蓋	11	4.3	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.2～2㎜の白・黒色粒少	良	灰白色	
13	杯蓋	10.7	3.7	外：ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ	0.5～2㎜の白・赤色粒少	不良	浅黄色	
14	杯蓋	10.4	4	外：ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ	0.2～2㎜の白色粒少	硬	灰色	
15	杯蓋	10.5	4	外：ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ,仕上げナデ	1㎜以下の白色粒僅少	硬	青灰色	
16	杯蓋	10.4	3.7	外：ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ	0.2～2㎜の白色粒やや多	硬	灰色	
17	杯蓋	10.1	3.8	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	1㎜程の白色粒極めて多	良	青灰色	
18	杯蓋	9.4	3.4	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.5㎜以下の白色粒僅少	良	青灰色	
19	杯蓋	9.6	3.8	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～2㎜の白色粒極めて多	良	灰白色	
20	杯身	10.4	3.3	外：ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.2～2㎜の白色粒僅少	良	灰白色	
21	杯身	10.5	3.3	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.2～2㎜の白色粒僅少	良	灰白色	
22	G蓋	9	2.6	外・内：ヨコナデ	0.2～2㎜の白色粒僅少	良	灰色	
23	杯G	7.9	3.4	外：回転ヘラケズリ　内：ヨコナデ	0.2～1.5㎜の白色粒多	良	灰白色	
24	杯G	8.4	3.8	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～2㎜の白色粒やや多	良	オリーブ灰色	
25	杯G	8.8	3	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～1㎜の白色粒やや多	良	青灰色	
26	杯G	9	3.2	外：ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ	0.2～1.5㎜の白色粒やや多	良	青灰色	
27	G蓋	15.3	3.4	外：カキメ　内：ヨコナデ	0.5～2㎜の白色粒極めて多	良	灰色	
28	杯G	14.6	4	外：ヘラ切り　内：ヨコナデ	0.5～3㎜の白・黒色粒やや多	不良	鈍い浅黄色	
29	椀	8.9	4.6	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.5～2㎜の白色粒多	不良	青灰色	
30	椀	8.6	3.8	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.5～2㎜の白色粒多	良	灰白色	
31	土師壺	6.8	5.3	外：ハケメ　内：ナデ	0.2㎜の白色粒多	不良	浅黄橙色	
32	高杯	13	9.9	外・内：ヨコナデ	1㎜程度の白・赤色斑少	不良	灰白色	
33	高杯	12.4	9.7	外・内：ヨコナデ	1㎜以下の白・黒・赤色斑やや多	不良	灰色	
34	高杯	13	10.6	外・内：ヨコナデ	0.5㎜以下の白色粒少	不良	暗灰色	
35	高杯	12	9.9	外・内：ヨコナデ	0.5㎜以下の白色粒少	不良	灰色	
36	高杯	10.1	9.1	外・内：ヨコナデ	0.5～4㎜の白色粒極めて多	良	灰褐色	
37	高杯	10.1	9.9	外・内：ヨコナデ	1㎜以下の白・黒色粒多	硬	淡灰褐色	
38	高杯	7.5	6.6	外・内：ヨコナデ	1㎜以下の白・黒色粒多	良	暗オリーブ灰色	
39	高杯	8.6	5.9	外・内：ヨコナデ	0.5～2㎜の白・黒色粒少	良	灰白色	
40	高杯			外・内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～1.5㎜の白色粒少	良	灰色	
41	台付椀	11.5	10	外・内：ヨコナ	2㎜程の白色粒極めて多	良	暗緑灰色	
42	甕	7.2	9.5	外：ヘラケズリ（右）内：ヨコナデ	0.5～3㎜の白色粒多	硬	灰色	
43	甕	8.6	10.7	外：周辺ケズリ後ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ	0.2～1㎜の白色粒少	硬	灰色	
44	短頸壺	6	5.5	外：周辺ケズリ（左回り）,ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.5～3㎜の白・黒色粒やや多	不良	灰白色	
45	短頸壺	4.8	7.3	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.5～1㎜の白・黒色粒極めて多	硬	灰色	
46	広口壺	9.5	11.9	外：体：カキメ,下半ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～3㎜の白色粒極めて多	良	灰色	
47	広口壺	9	17.1	外：体：カキメ,下半ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～2㎜の白・色斑少	硬	灰色	
48	広口壺	11.8	16.7	外：周辺ケズリ,ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ,仕上げナデ	0.5～1.5㎜の白色粒少	不良	灰白色	
49	横瓶	4.8	10.4	外：カキメ　内：ナデ	0.2㎜の白色粒僅少	不良	鈍い黄橙色	
50	横瓶			外・内：ヨコナデ　体：カキメ	0.5～5㎜の白色粒多	不良	灰白色	
51	平瓶	4.5	8	外：ヘラケズリ　内：ヨコナデ	0.5～1㎜の白色粒少	良	灰白色	
52	平瓶	4.7	8.4	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.5㎜程の白色粒僅少	良	青灰色	
53	平瓶	5	9.7	外：ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ	0.5～2㎜の白・黒色粒やや多	良	灰色	
54	平瓶			外：ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ	0.5～2㎜の白色粒極めて多	良	灰白色	
55	平瓶	6.9	16.9	外：ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ	0.5～1.5㎜の白色粒多	硬	青灰色	
56	平瓶	6.4	12.4	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	1㎜以下の白色粒多	良	灰白色	
57	平瓶	5.4	12.7	外：周辺ケズリ（左回り）内：ヨコナデ	0.2～1㎜の白色粒少	良	灰白色	
58	平瓶	5.9	13.5	外：ヘラケズリ　内：ヨコナデ	0.5～1㎜の白色粒少	良	灰白色	
59	平瓶	5.3	13.7	外：周辺ケズリ,ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデい	1㎜以下の白色粒	良	灰白色	
60	台付壺	3.4	6.3	外：ナデ　内：ナデ	1㎜以下の白色粒多	硬	青灰色	
61	台付壺	8	23.1	外：ヘラケズリ　内：ヨコナデ	0.2～1㎜の白色粒僅少	硬	灰色	
62	甕	12.7		外：タタキ　内：タタキ		不良	明オリーブ灰色	
63	土師甕	21.3		外：ハケ　内：ケズリ（下-上）	0.2～5㎜やや多	不良	橙色	

銀環と思われるが銀箔の剥離が著しく、また銅も錆化が激しかった。図示できなかったが65と組になると思われる金環があり、本来２組以上の耳環が存在していたと考えられる。

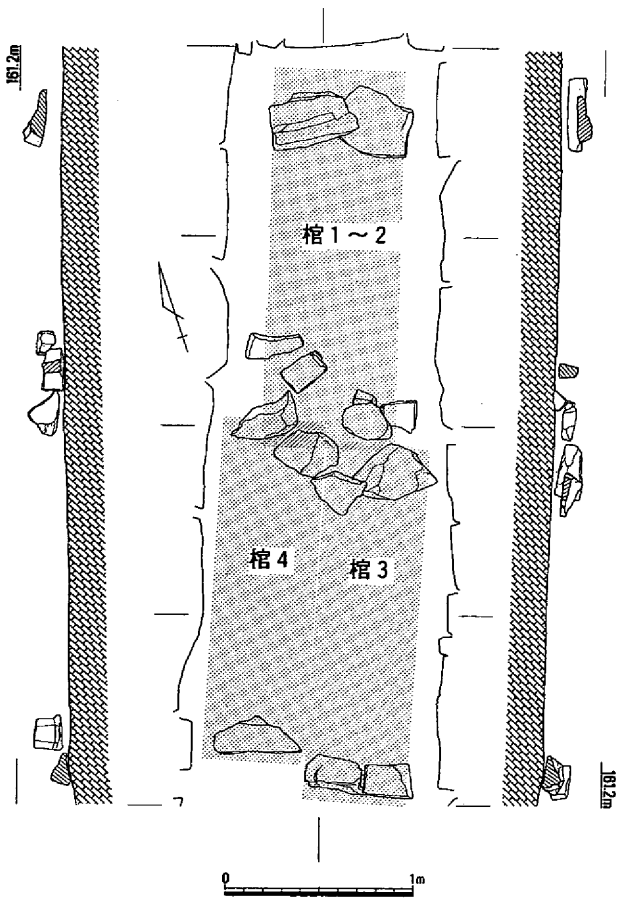
釘（第85図66・67）　木棺の釘と思われるが、これら２点以外には出土していない。ともに頭部が体部から湾曲するように折り曲げて造りだしている。長さは66が現存長で16cmを測り、当該期としてはかなり長いものである。

小結

９号墳の石室は当古墳群中でも石室規模が決して大きい方ではないものの（石室最大幅で比較しても４番目）、石室石材とりわけ奥壁の基底石については、奥壁石材の大型化が遅延する傾向が強い当古墳群中においては特異な存在といえよう。

また、石室床面は良好な遺存状況を示しているにも関わらず副葬品は耳環３点以外は、60点ほどの土器のみであった。このうち須恵器の特徴として杯Ｈと蓋の関係をみると、杯２点に対し圧倒的に蓋が多いことが言える。その２点の杯は杯Ｈの最終形態に近い形を採る。蓋が多いことの理由としては使用の際に杯として用いられたことが考えられよう。

次に遺物の出土状況と棺台の位置、須恵器杯類の型式から埋葬回数や順序について考えてみる。先ず石室開口部付近は追葬に際して整地されており、それ以前の床面を下層と呼んだ。土師器の長胴甕と須恵器は蓋はみられないものの杯Ｇが３点ある（４類）。これらを埋めた追葬行為を示すものとして、左側壁沿いに石室中央から開口部にかけて存在する棺台とそれに伴う可能性の強い土器群Ｅ群がある。Ｅ群には典型的な杯Ｇと蓋のセットがみられるのである。この杯のセットが最も小型化する段階のものであり、４類より新しい傾向を持つ。そこでその他の土器群や棺台との関係はどうか。Ａ群には杯Ｈと１類の蓋がみられることから初葬時のものと考えられる。１類の蓋２が棺台下にあったことから奥の棺台は追葬時とみれる。Ｂ群は３個体しかなくＡ群と分離しない方がよいかもしれない。蓋１・２類がある。Ｃ群には２・３類がある。土器を棺台の前に置いたとすると奥の棺台とＣ群が伴う可能性がある。Ｄ群には１～４類があり、そのうち３類が多い。Ｃ・Ｄ群はややまとまりを欠く。さらに石室手前右壁沿いに棺台らしき石と遺物の空白がある。この位置にあった土器を左壁側に押しのけたのだろう。これが最も新しい埋葬であり、27・28などが伴う。つまり奥から順に（第86図）4回前後の遺物を伴う埋葬が考えられる。



第86図　埋葬位置復元（S=１：30）

第３節　C　　支　　群

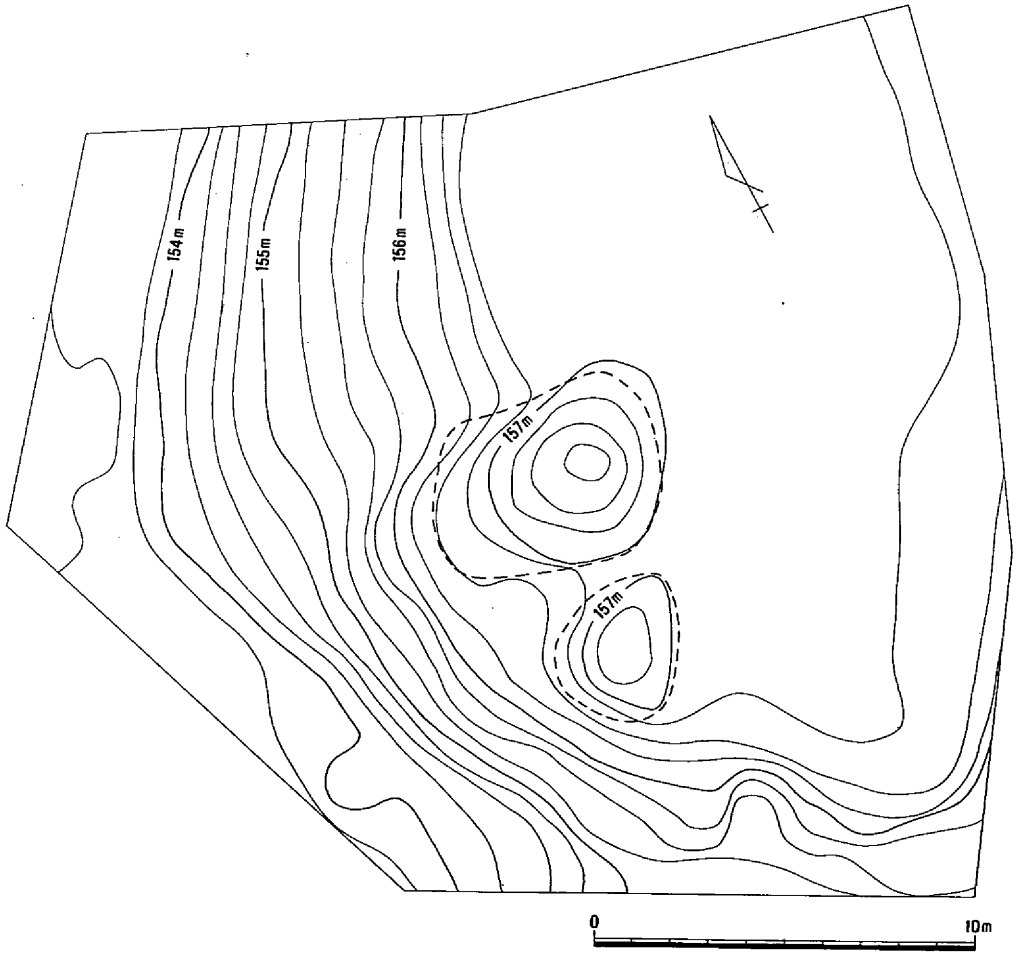
（１）畑ノ平１号墳

調査前の状況（第87図）

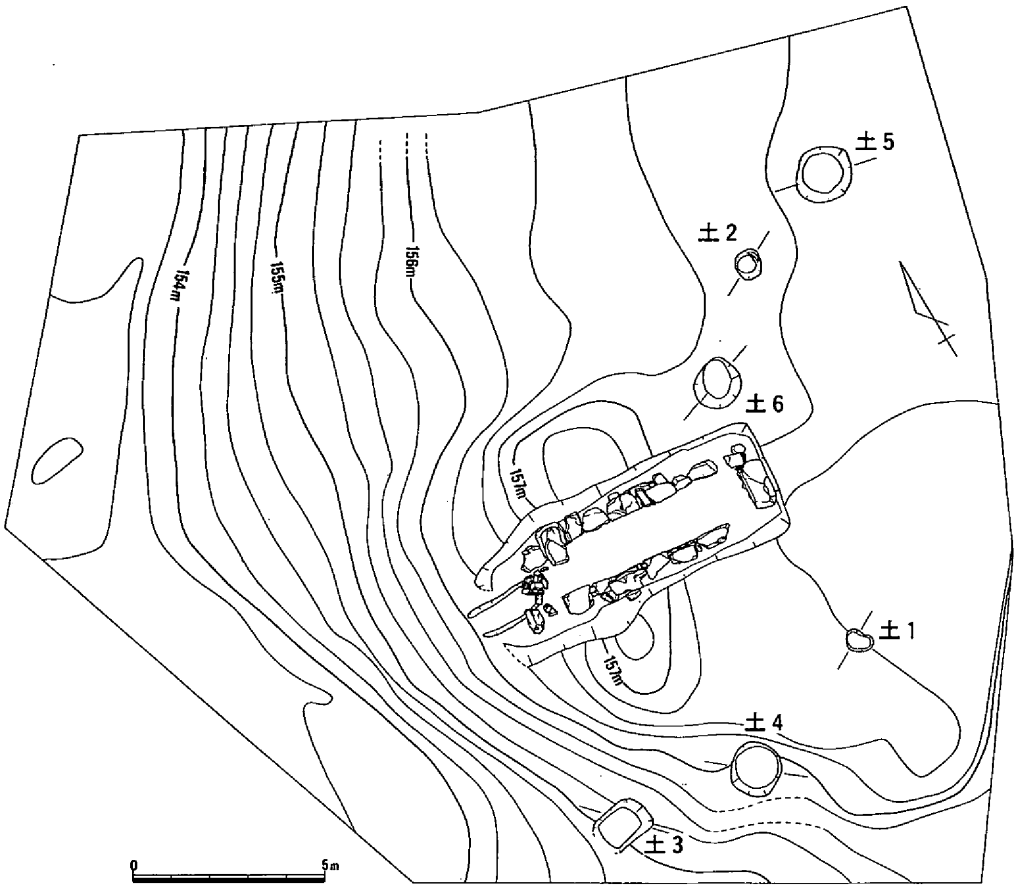
調査地の北に江戸時代末、文久の年号の入った竿墓が２基存在しており、その南には墓と思われる直径4.5ｍと4ｍの土饅頭が２基存在していることから中世ないし近世の墓地遺跡として調査に入ったところ土壙墓群とは別に新たに横穴式石室を主体とする古墳１基が確認されたためこれについても畑ノ平１号墳として調査を行った。

１号墳は今回調査した古墳群の中で西南の端に位置する。古墳群の所在する丘陵とその南の牛岩山とを結ぶような頂部が平坦な渡り土手状の地形があり、１号墳はその西側斜面に位置していた。これより西へは茂平城の方向に広がる谷が、東へは勝北町から勝間田盆地に向けて開ける谷につながる支谷が入り込んでいる。

古墳の周囲には荒廃した水田がみられたが調査区は雑木林に覆われ土地利用はされていないようである。１号墳はＣ２支群とは谷を挟んで単独で存在していたが、１基のみでＣ１支群としたのはこの



第87図　調査前地形測量



第88図　墳 丘 測 量

南側を地元では塚畑と称しており他にも古墳が存在した可能性があることによる。

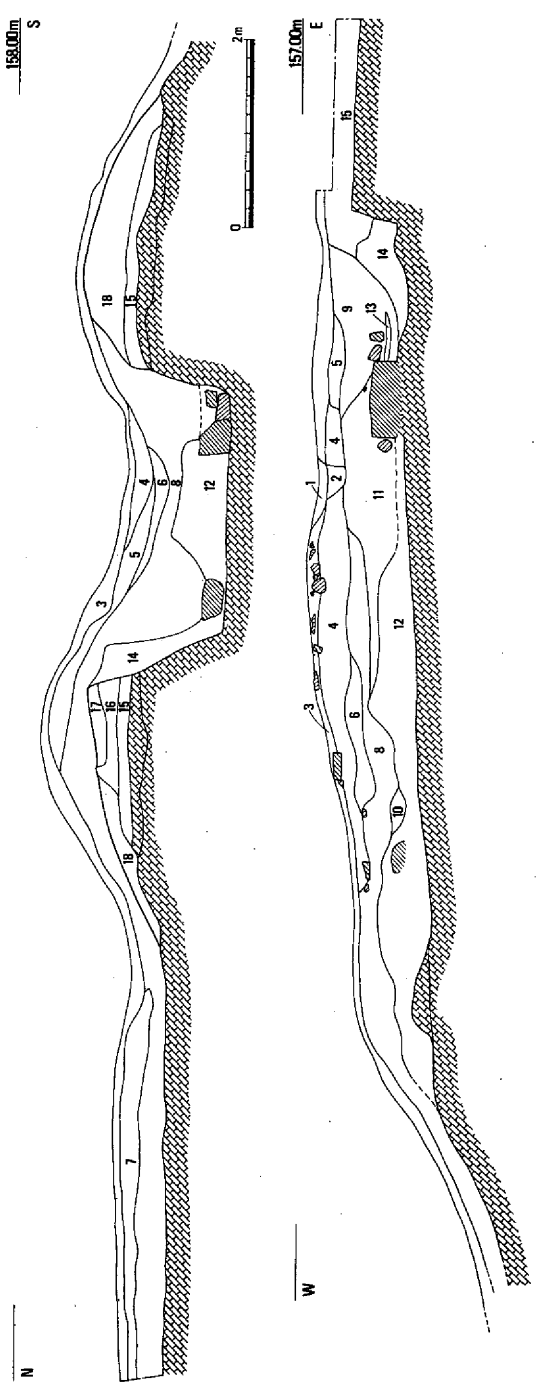
墳丘と周堀（第88・89図）

墳丘及び周堀は墓地造成の際にかなり削平を受けたと思われるが、当初に近世墓の土饅頭とみられた円丘２基が古墳の盛土であることが判明し、その円丘の間にトレンチを入れたところ横穴式石室の基底部が残存していた。墳丘の現存部高を石室床面から測ると1.9ｍである。

墳形と墳丘規模については、石室前面の斜面部は基盤層を整形して墳丘を形造っており、その箇所は西側への張り出しとして残っている。それと墳丘の南側では標高155.25ｍの等高線が地形の変換点となっており墓地造成を考慮するとしても本来の墳端をある程度は反映していると思われる。さらに墳丘の北東方向には周堀の痕跡らしきものが等高線より看取できることから、推定で直径12ｍ程の円墳であったと考えられよう。

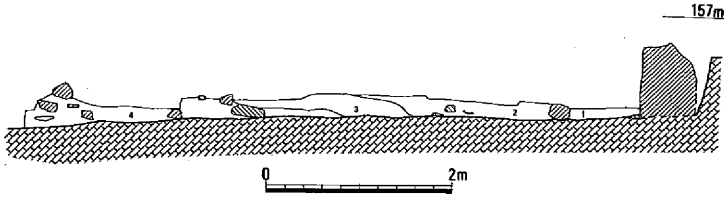
盛土は先の小円丘の箇所のみで、旧表土と思われる15層の上にわずか45cm程が残る。盛土は墓壙上から積み上げていた。基盤層と旧表土を利用したと思われる黄褐色土と褐色土を厚さ20cm程で互層に積んでいた。

石室の墓壙は旧表土上から掘られ、地形の傾斜に沿う形で西側の斜面部に抜ける平面形が「コの字状」を呈している。規模は長さが8.5ｍ、最大幅は3.9ｍである。深さは奥壁部で検出面から0.7ｍを測り、最も残りの良い所で１ｍを測る。墓壙の掘り込みの角度は石室奥ほど急で約75°であるが開口部に近づくにつれその角度も緩やかとなってゆき石室の外に向けて１ｍ足らずの所で内側に巻き込むよ



1．暗茶褐色土　2．暗茶色土　3．暗灰黄色土　5．淡茶褐色土　6．暗褐色土
7．黄褐色土　8．淡灰褐色土　9．淡黄灰褐色土　10．淡褐色土　11．淡黄灰褐色土（地山ブロック多く含む）
12．淡茶褐色土　13．黒褐色土　14．黄褐色砂質土　15．茶褐色土　16．黄褐色土　17．淡黄褐色土　18．16と同

第89図　墳丘土層断面



１淡灰褐色　２淡茶褐色土　３淡褐色土
４淡茶褐色土（地山ブロック多い）

第90図　石室内土層断面

うにして終わっている。

横穴式石室（第90・91図）

無袖の横穴式石室で、石室主軸はＮ－85°－Ｅとほぼ東西方向で西側の谷部に向かって開口する。規模は全長で6.2ｍ、奥壁部付近での幅1.4ｍ、最大幅1.45ｍ、開口部での幅１ｍと開口部が締まった平面形となっている。

石室も墳丘同様に墓地造成や石材の抜き取りによって破壊されており基底部ないし２段目を残すのみで、流入土によって墓壙とともに完全に埋まっていた。

奥壁部では基底石のみが残っていた。石室に使用された石材中で最も大きな石で、高さが0.75ｍ、幅は1.35ｍを測る。これを床面に対して横長方向にし、小口部を上下方向にし立てて用いる。両側壁が奥壁に接する箇所は基底部も含め石が抜き取られていた。

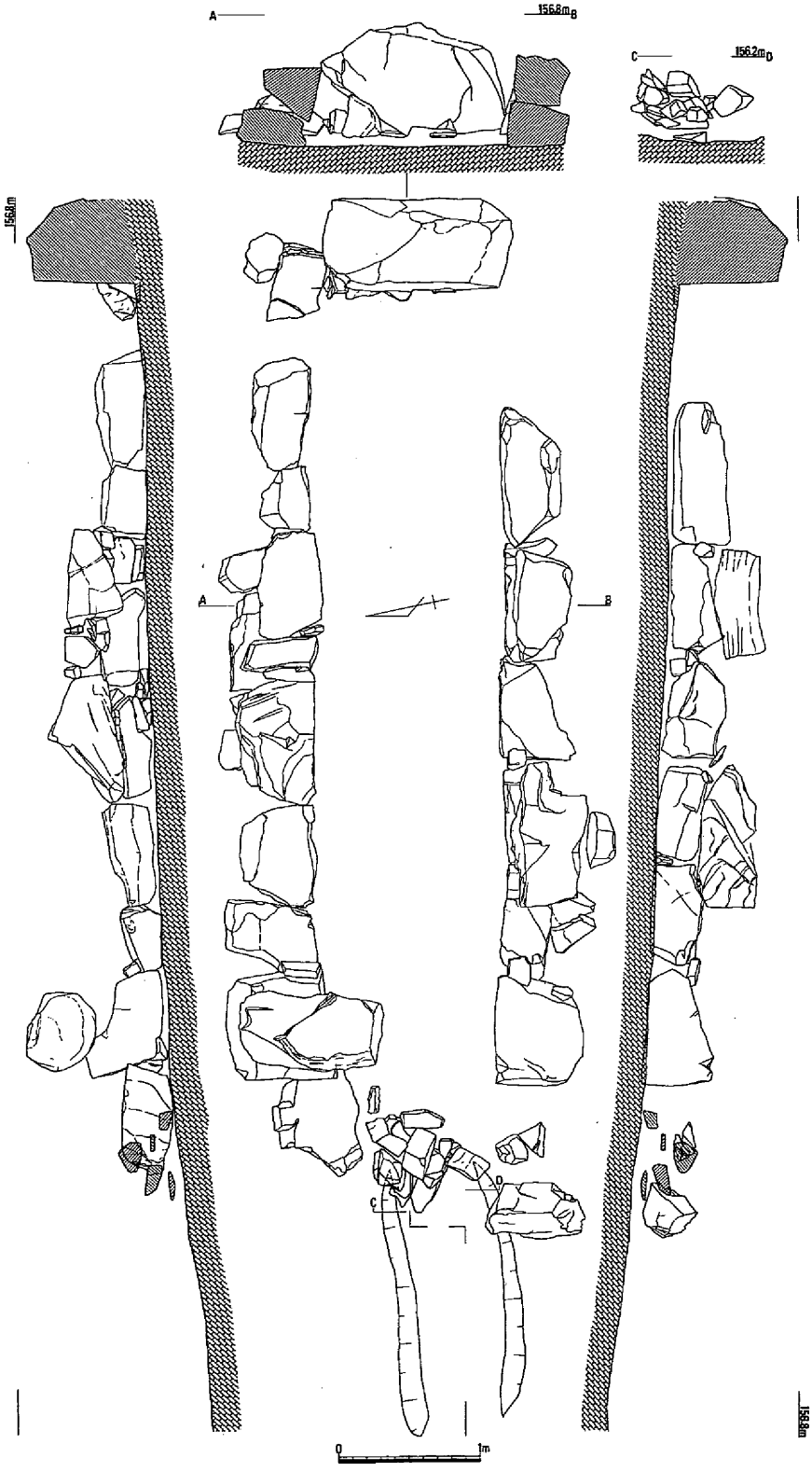
右側壁は部分的に２段の石積みが残る。平面的には開口部から奥に２ｍの所から左側石側にわずかに折れ曲がる。

左側壁も右側壁と同様で一部に２段目の石が残る程度である。また基底石も右側壁と同様に角礫を横長方向に用いるが奥壁部とは異なり小口部で壁面を構成する。

石室のちょうど開口部から外に向けて２ｍの範囲で幅0.9ｍ、深さ0.1ｍの浅い溝状の墓道が検出できた。斜面部は流出しているようであるが、おそらく茂平城の方向から谷を上ってきていたものと思われる。この墓道の終点の石室床面上において

長さ20～30㎝、幅10㎝程の小型の角礫の集積がみられた。位置からして閉塞施設と考えられるが、石のみで積み上げるのではなく石と石の間に土を入れていた。

石室に使用されている石材は全て玄武岩の角礫である。



第91図　石室実測（S=1：50）

床面の状況（第92・93図）

墓壙底の基盤層上を床面としており、追葬などによる面は存在しない。この床面は奥壁から開口部に向かって1.7ｍまでほぼ水平な面をなすが、それより開口部に向けては緩やかな下り傾斜になっていた。

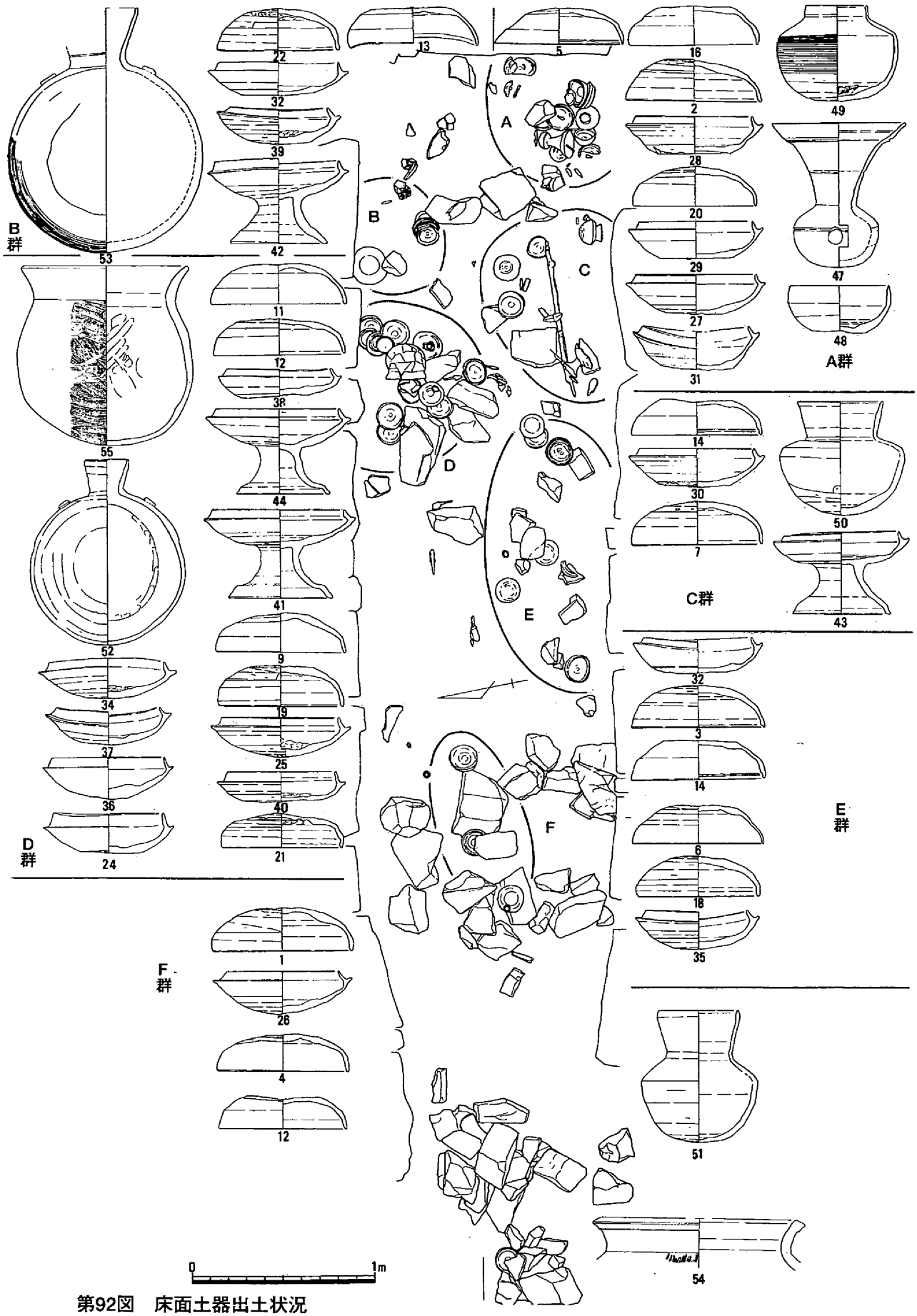
石室床面上からは多数の土器や金属器類が出土しており、棺痕跡や棺釘といった埋葬を直接示すものは無いが、遺物の床面上における位置関係はいくつかのまとまりをなしているとみられることから、複数回の埋葬を復元することは可能である。

先ず土器類の出土状況についてみると、石室奥壁部の東南隅（Ａ群）と奥壁から1.5～2ｍ辺りの右側壁（Ｄ群）に多くの個体がまとまってみられた。Ａ群では杯類、短頸壺、甕や椀がある。このうち蓋杯は３個体程づつが重ねられていた。Ｄ群においても土師器の甕を中心に杯類や提瓶がある。ここでもやはり杯類が数個体づつ重ねられており、これらは追葬の際に片づけられたとみることができよう。この他の遺物は多少散在したような出土状況であるものの、Ａ群とＤ群の間においては提瓶と４点の杯類が重ねられていたＢ群と、鉄刀の周囲にあり杯類や壺などのＣ群がある。これらＡ群・Ｂ群・Ｃ群・Ｄ群によって囲まれたところには完存はしていないものの棺台かと思われる石材が認められる。さらにＤ群よりも開口部よりの左側壁沿いの１群をかなりまばらであるがＥ群とし、奥壁から４～５ｍ辺りにあり転落石と思われる石の周囲のものをＦ群とする。また石室開口部より外でも甕と壺が出土している。甕などは畑ノ平３・６・７号墳など他の古墳でもみられるが墓前祭祀に用いられたものであろう。

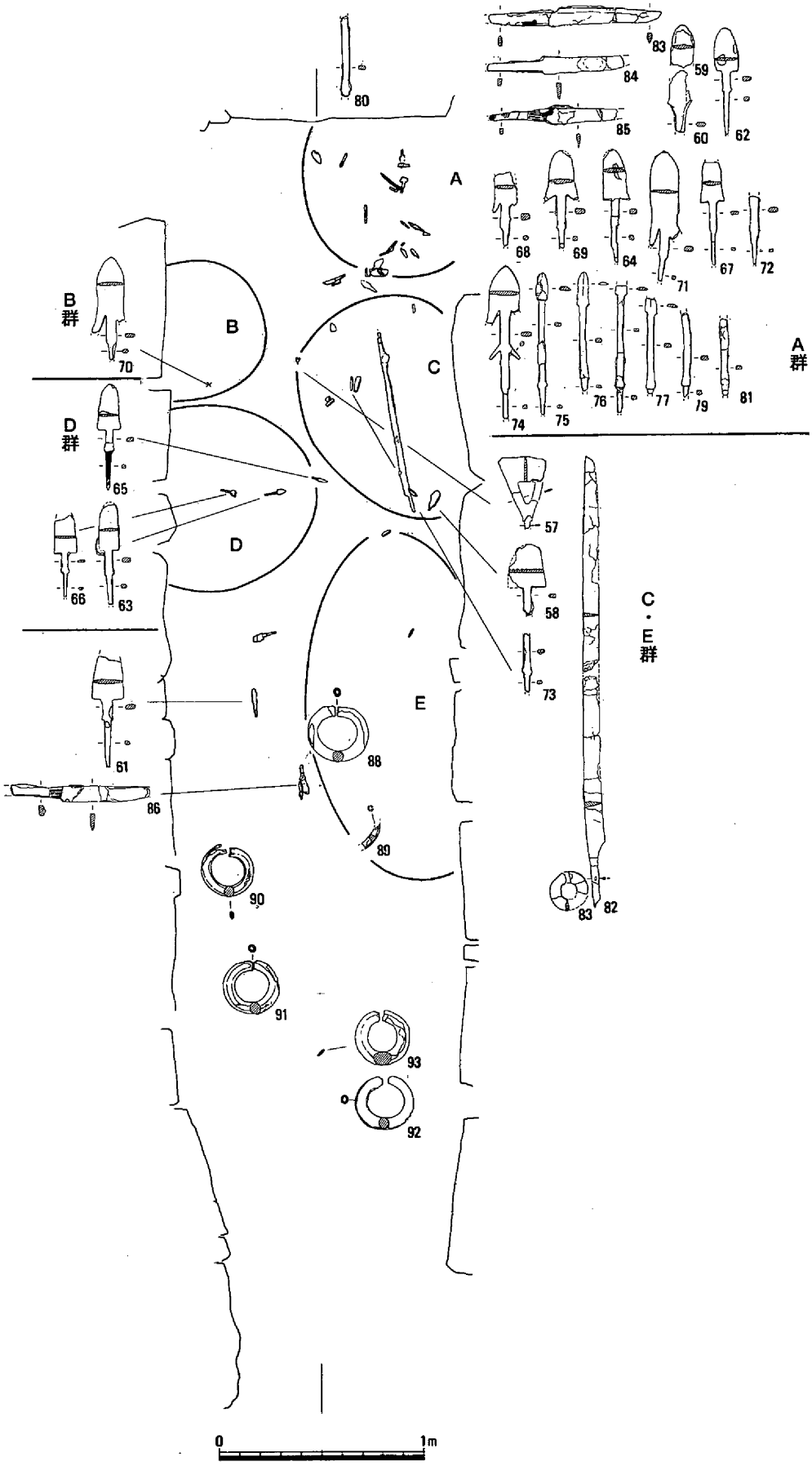
次に金属器類についてであるが、多くが先のＡ群に集中しており、刀子が３点、広根鏃が８点以上で、尖根鏃も７点以上がある。さらに土器群のＣ群とＤ群にも同一範囲に数点の鉄鏃がある。Ｃ群では鉄刀の他に鉄鏃が３点あり、このうち刀は切先を石室奥に向けて置かれていたが茎部付近には鍔も存在していたことから現位置を保っていると思われる。Ｄ群では広根鏃のみ４点がある。またＤ・Ｅ・Ｆの土器群に囲まれた範囲は広い面積の中に土器はみられず刀子86と広根の鉄鏃61の各一点であった。この部分には棺を想定して良いかもしれない。

また耳環は６点が出土しているが、出土位置からは88と89、90と91、92と93が組になる可能性が強いものの、ただし90と93が金環で91と92が銀環であることから考えると、本来は91と92、90と93といった組み合わせであったかもしれない。その場合は91から93のいずれかが多少現位置を遊離しているといえよう。いずれにしても耳環は石室中央より開口部側にあり、鉄製品や土器類の多くが石室中央より奥側にあるのとは対照的といえる。追葬や乱掘の際に耳環のみを選択的に移動していないとするとやはりこれら床面上の遺物は埋葬の最終段階での現位置を保っていると考えられよう。その際、奥壁付近の被葬者は耳環を持たなかったか、あるいは奥側の被葬者を追葬の段階で石室手前に引き出してきたことも考えられる。そこで88・89が土器群のＥ群中にあり、90～93がＦ群と対応するとみるならば石室奥の被葬者は耳環を持たなかったと考えるべきであろう。Ｅ群やＦ群の遺物についての検討は後に触れる。

これらの各群が１回の埋葬行為を直ちに示すとは考えにくいが、石室手前では耳環の数と出土位置から３体の埋葬が行われたと思われる。また石室奥では鉄刀のそばに１体が想定でき、さらにＡ群やＤ群の遺物からも最低一回の埋葬があったするなら、最低６回は遺物を伴う埋葬が行われたとみることができよう。



第92図　床面土器出土状況



第93図　床面鉄器出土状況

出土遺物（第94～101図）

石室内より出土した遺物には須恵器、土師器、直刀、刀子、耳環がある。

須恵器（１～54）

提瓶の破片１点を除きほぼすべてを図化しているが、大半が蓋杯で占められている。

蓋杯（第94～96図１～40）　蓋杯類には法量や技法などからから各々、次の４類に分けられる。

杯蓋１類（１～10）　口径が14～15cm、器高が４cm以上のものである。天井部は回転ヘラケズリを右回りに施す。口縁端部には３・５・７・８のように、より古相を示すような内傾する面をもつものがある

杯蓋２類（11～15）　法量は１類とほぼ等しいが、天井部は回転ヘラケズリを省略しており、変わってタタキないし板状工具による押圧がみられるなど半裁円錐台形状を呈する一群である。口縁端部も１類と同じく内傾する面を持つ11・13・14がある。さらに11・14・15は内面に同心円文の当て具痕がみられる。

杯蓋３類（16・17）　１・２類と法量的には等しいが、天井部はヘラ切り後に回転ヘラケズリを行わない。16は天井部をヘラ切り後に丁寧にナデている。17はヘラ切り後に顕著な調整がみられないものである。

杯蓋４類（18～21）　口径が13cmから14cmの間にあり１～３類と比べると一回り小さいものである。器高は１類とほぼ同等であり、口径に対し器高が高い。このうちで21はやや口径と器高が小さく別類としてよいものである。

杯身１類（23・24）　多の類と比べ口縁部の立ち上がりが強い。口径は12.2～12.4cmと小さいものの底部には回転ヘラケズリがみられる。

杯身２類（25～27）　口径は12～13.5cmにあり、器高は４cm台である。底部には回転ヘラケズリがみられる。口縁部はいったん強く内傾したのちに屈曲し内上方に立ち上がる。

杯身３類（28～33）　形態が杯蓋２類に似る。天井部にはタタキまたは板による押圧がみられ、内面には同心円文の当て具痕がつく。

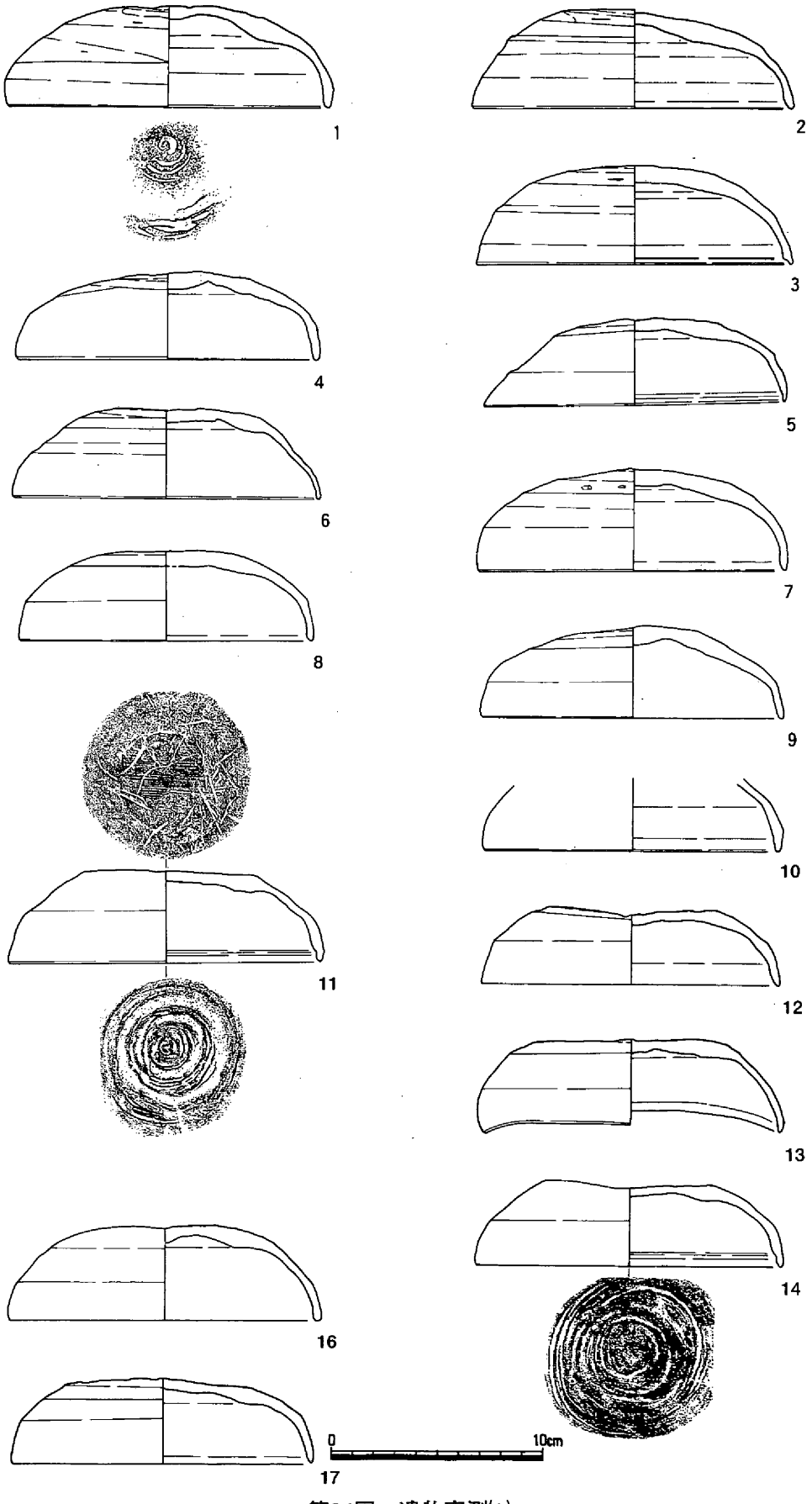
杯身４類（34～37）　口径が12cm台であり、器高は4.2～4.7cmを測る。底部には回転ヘラケズリを行い、口縁部は短く内傾して立ち上がり端部は丸く終わる。

杯身５類（38～40）　口径が11cm台で、器高3.4～4.2cmである。その他の特徴は杯身４類に似る。焼け歪みが顕著である。

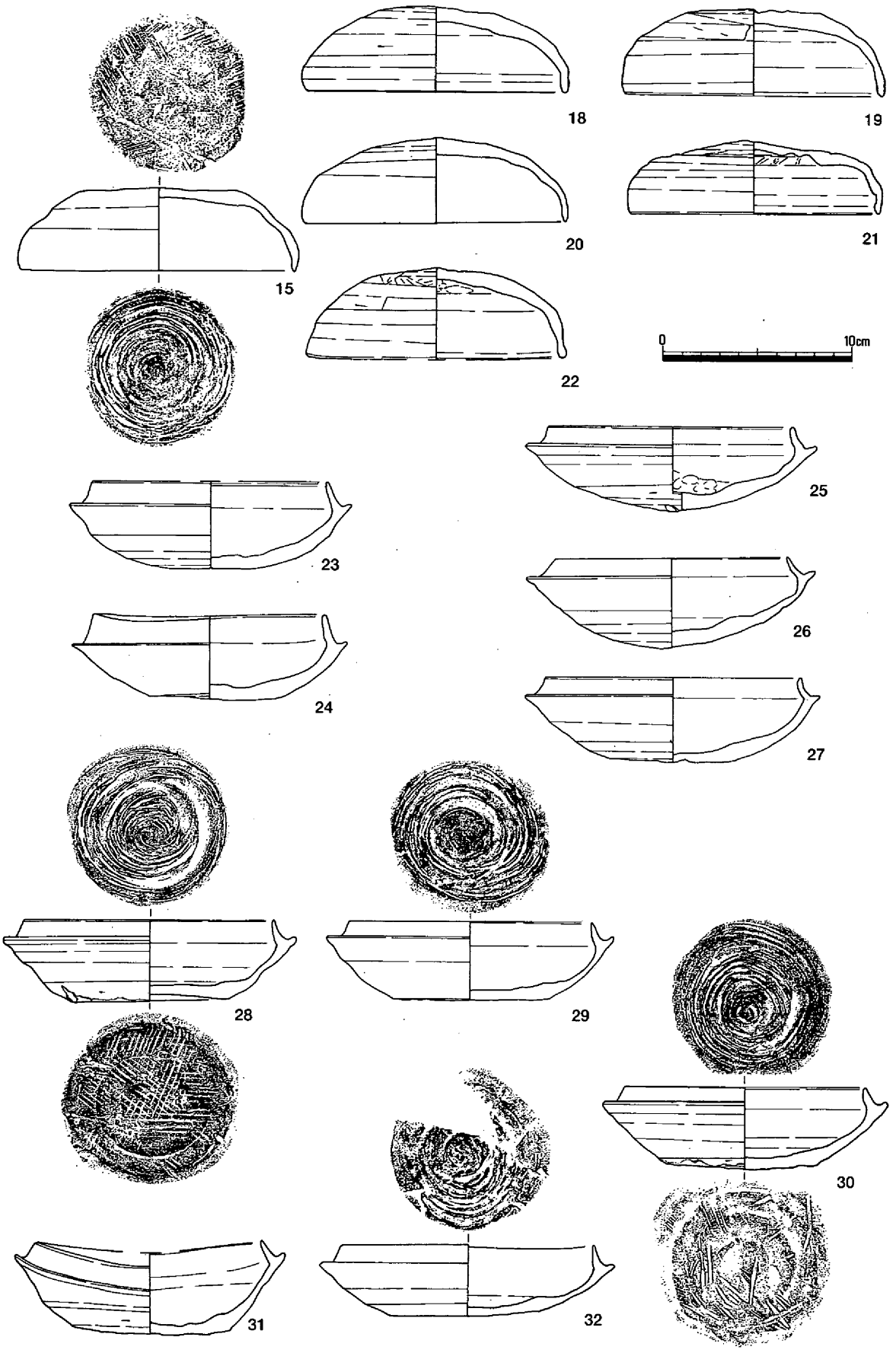
これらは法量・技法や形態からみて杯蓋１類と杯身２類、杯蓋２類と杯身３類、杯蓋４類と杯身４・５類がセットと考えられる。杯蓋３類は杯身底部に同様の技法は無いが、法量から１～３類のいずれかとセットで副葬されたと思われる。杯身１類も同じく法量からは杯蓋１・３類のいずれかとセットになり用いられたと思われる。

高杯（第96図41～46）　41～44は有蓋の短脚高杯である。脚部はいずれも特徴的な形を示しており、脚下半が強く外側に屈曲する42・43とハの字状に開く41がある。43の内面には同心円文の当て具痕がある。45・46は長脚２段透かしの無蓋高杯でおそらく同一個体と思われる。杯部外面は刺突文で飾り、脚の透かしは２方透かしである。

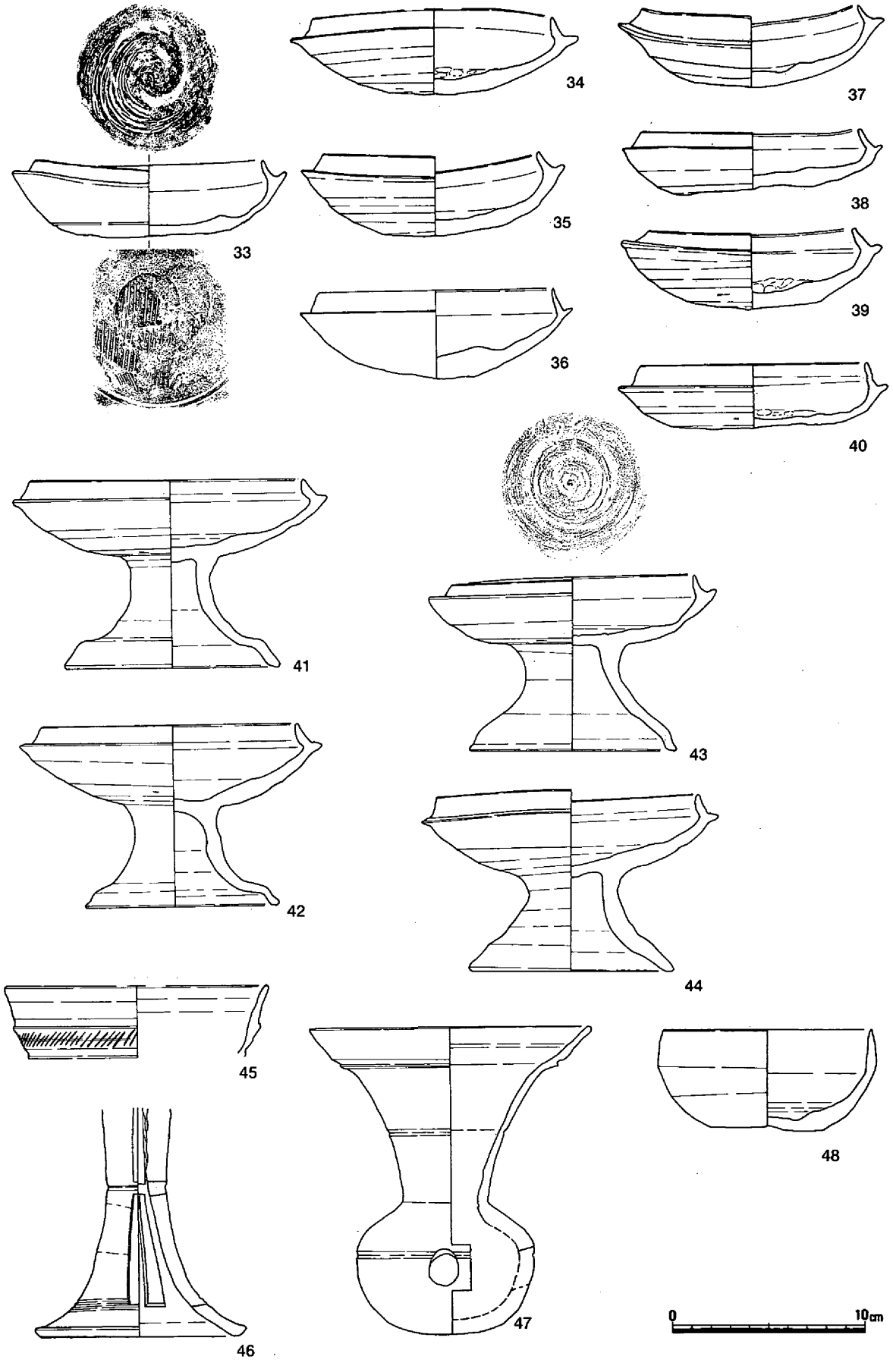
壷・甕・椀（第96図47～51）　壷は３個体あるが短頸壷47、直口壷48・49いずれも異なる形態をとる。49は底部内面を円盤状の当て具によって叩いた後に板状工具によって掻き取っている。甕はかなり焼



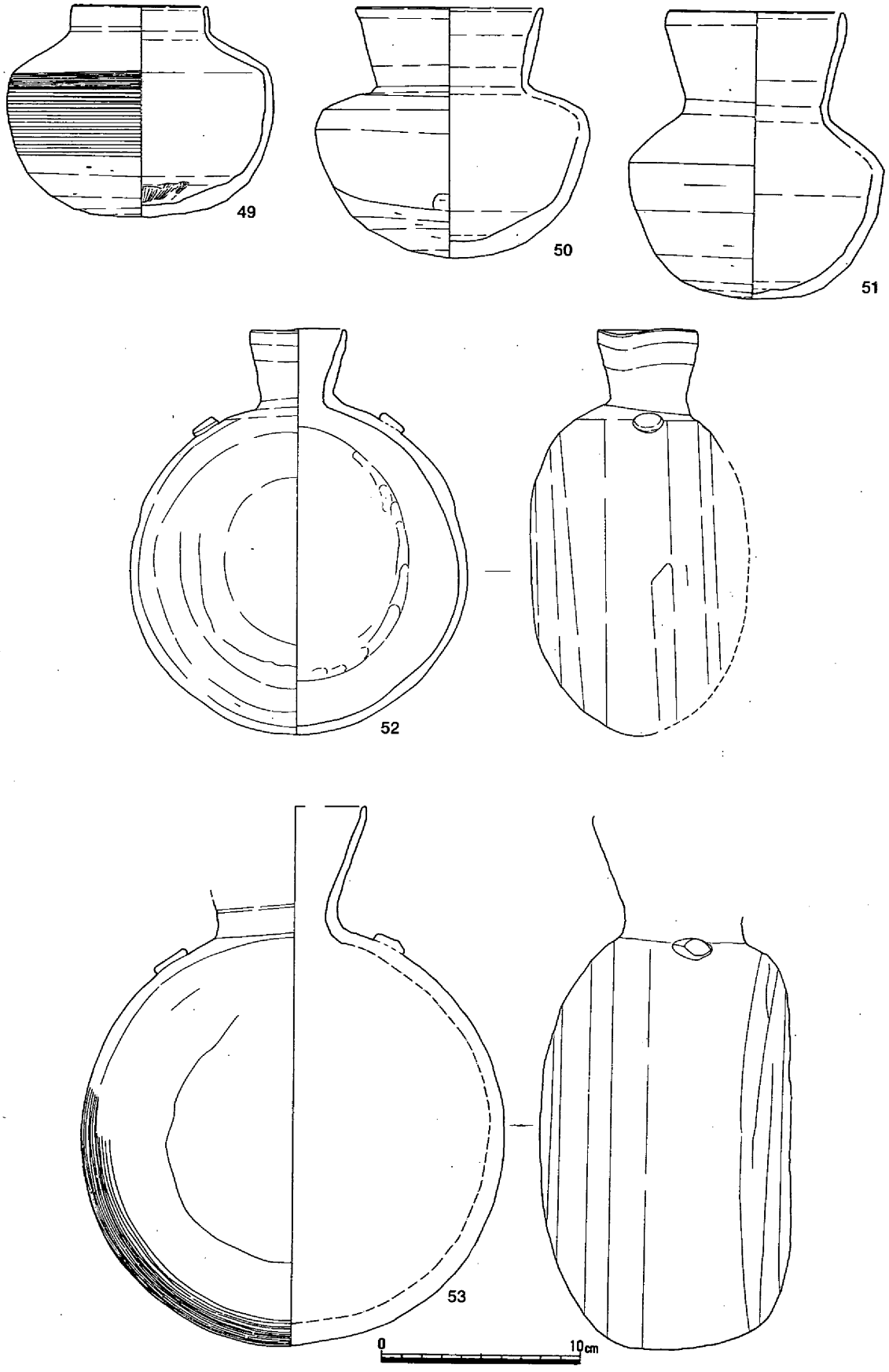
第94図　遺物実測(1)



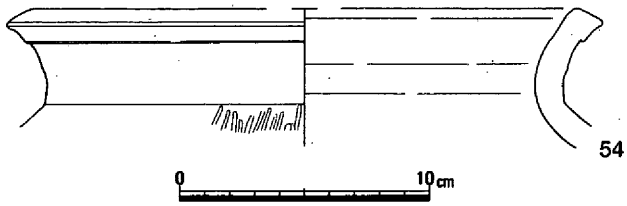
第95図　遺物実測(2)



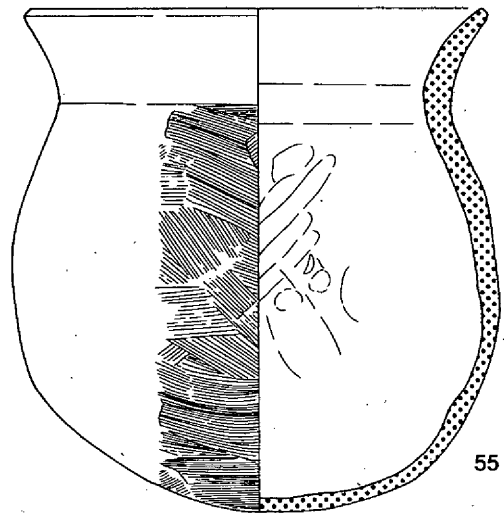
第96図　遺物実測(3)



第97図　遺物実測(4)



第98図　遺物実測(5)



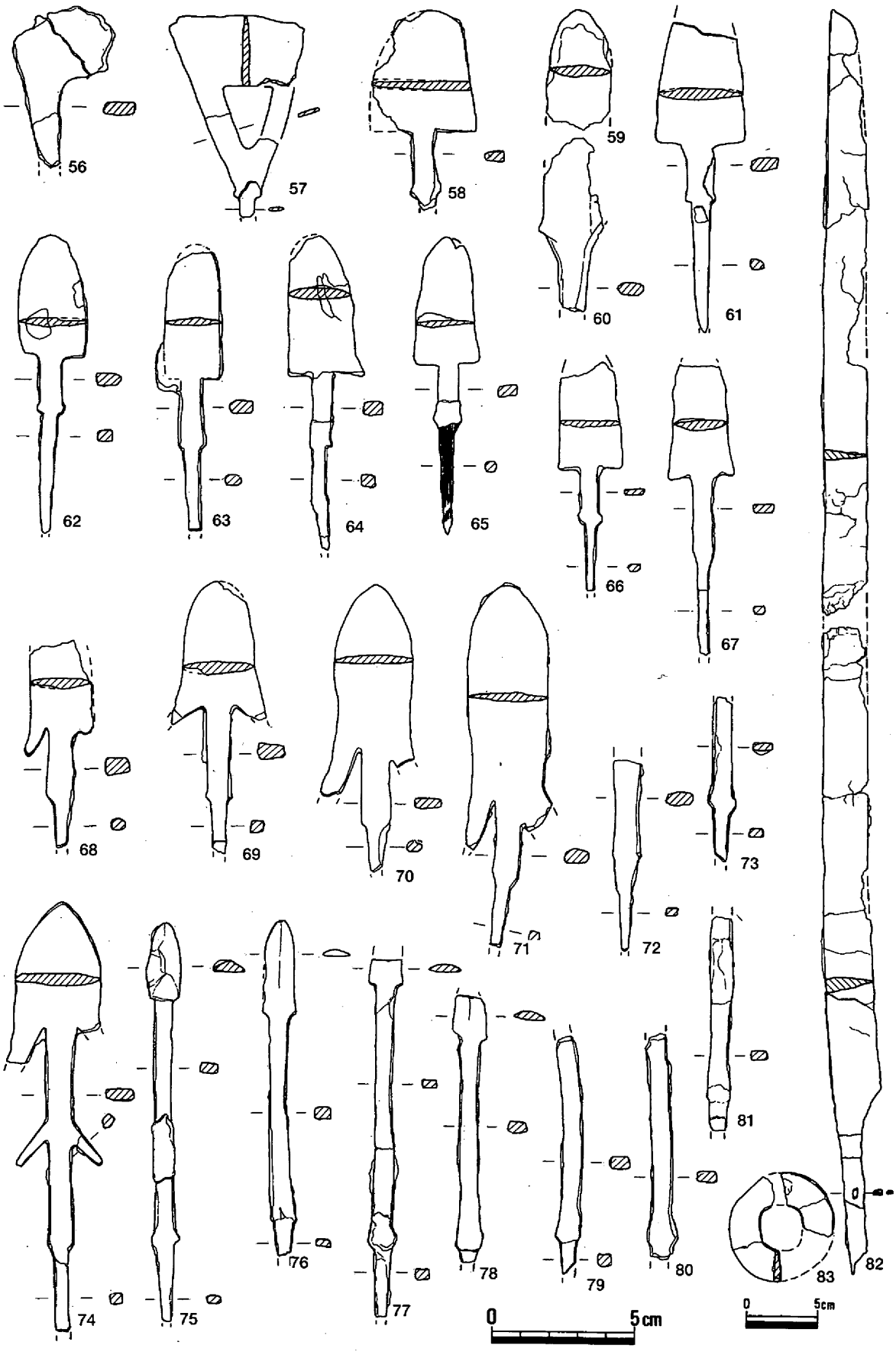
成が悪い。球形に近い体部は下半に回転ヘラケズリを施し、頸部から口縁部にかけてが大きく外方に開く。

椀は底部がヘラ切り後未調整のものである。

提瓶（第97図52・53）　52は体部に対して小さく短い

表13　畑ノ平１号墳土器観察表

No	器種	口径	器高	手法の特徴	胎土	焼成
1	杯蓋	15.2	4.8	外：回転ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ、仕上げナデ、同心円文当て具痕	0.5～5mmの白色粒極めて多	不良
2	杯蓋	14.9	4.7	外：回転ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.5～3.5mmの白色粒	良
3	杯蓋	14.7	4.7	外：回転ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.5～3mmの白色粒僅少	良
4	杯蓋	14.2	4.2	外：回転ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.1～1mmの白色粒	
5	杯蓋	14.1	4.1	外：回転ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.1～1mmの黒・白色粒多	
6	杯蓋	14.6	4.3	外：回転ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.5～2mmの白色粒少	良
7	杯蓋	14.3	4.9	外：回転ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ	0.5～3mmの白色粒やや多	不良
8	杯蓋	14	4.3	外：回転ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.5～0.7mmの白色粒少	
9	杯蓋	14.2	4.4	外：回転ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.5～5mmの白色粒多	
10	杯蓋	14.1		外・内：ヨコデナデ	0.5mm以下やや多	
11	杯蓋	14.9	4.4	外：ヘラ切り後押圧　内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.5～3.5mmの白色粒やや多	
12	杯蓋	14	3.7	外：回転ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ	0.5～4mmの白色粒多	
13	杯蓋	14.9	4.4	外：周辺ケズリ（左回り）、ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.5mm以下の白色粒少	やや不良
14	杯蓋	14.5	4	外：ヘラ切り後押圧　内：ヨコナデ、仕上げナデ、同心円文当て具痕	0.5～3mmの砂粒少	やや良
15	杯蓋	14.4	4.4	外：周辺ケズリ(左回り)、ヘラ切り後押圧　内：ヨコナデ、仕上げナデ、同心円当て具後	0.5～2mmの白色粒少、黒色粒多	
16	杯蓋	14.9	4.5	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.5～5mmの白色粒多	やや不良
17	杯蓋	14.3	4	外：ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.5～8mmの白色砂粒少	良
18	杯蓋	13.4	4.5	外：回転ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.5～2mmの白色粒僅少	良
19	杯蓋	13.5	4.7	外：回転ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ	0.5～6mmの白色砂粒少やや多	
20	杯蓋	13.7	4.5	外：回転ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.5～2mmの白色粒多、黒色粒少	
21	杯蓋	13	3.9	外：回転ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ	0.5～4mmの白色粒多	
22	杯蓋	12.9	4.8	外：回転ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ	0.5～4mmの白色粒多	
23	杯身	12.2	4.6	外：回転ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.5～3mmの白色粒少	
24	杯身	12.4	4.5	外：回転ヘラケズリ　内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.5～3mmの黒色粒多、白色粒少	
25	杯身	12.8	4.5	外：回転ヘラケズリ　内：ヨコナデ、仕上げナデ	1～6mmの白色砂極めて多、黒色砂粒少	
26	杯身	12.3	4.8	外：回転ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.5～3mmの白色粒やや多	
27	杯身	13.5	4.5	外：ケズリ（左回り）、ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.5～3mmの黒・白色粒やや多	
28	杯身	12.9	4.4	外：ヘラ切り後押圧　内：ヨコナデ、仕上げナデ、同心円文当て具	0.5～1.5mmの白色砂粒多	
29	杯身	12.6	4.1	外：ヘラ切り後押圧　内：ヨコナデ、仕上げナデ、同心円文当て具	0.5～2.5mmの黒・白色粒多	
30	杯身	12.7	4.3	外：ヘラ切り後押圧　内：ヨコナデ、仕上げナデ、同心円文当て具	0.5～1mmの白色砂粒やや多	
31	杯身	13.3	5	外：周辺ケズリ（左回り）、ヘラ切り後押圧　内：ヨコナデ、仕上げナデ、同心円文当て具痕	0.5～4mmの白色砂粒僅少	
32	杯身	13.3	3.7	外：ヘラ切り　内：ヨコナデ、仕上げナデ、同心円文当て具	0.2～2mmの白色粒やや多、黒色粒少	
33	杯身	12.7	4	外：ヘラ切り後押圧、ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.2～3mmの白色粒やや多、黒色粒少	
34	杯身	12	4.6	外：回転ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.5～9mmの白・黒色砂粒やや多	
35	杯身	12.1	4.4	外：回転ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.2～2mmの白色砂粒極めて多	
36	杯身	12.2	4.7	外・内：観察不可	0.5～3.5mmの黒色粒多、白色粒少	
37	杯身	12.2	4.2	外：回転ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.5～3mmの黒・白色砂粒極めて多	
38	杯身	11.5	3.4	外：回転ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ	0.5～6mmの黒・白色砂粒多	
39	杯身	11.4	4.2	外：回転ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.5～4mmの黒・白色粒多	
40	杯身	11.8	3.4	外：回転ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.2～2mmの白色砂粒僅少	良
41	短脚高杯	13.4	9.5	外：回転ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.5～5mmの黒・白色砂粒多	やや不良
42	短脚高杯	11.4	8.9	外：回転ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.2～1mmの白色砂やや多	良
43	短脚高杯	12.6	9.2	外：回転ヘラケズリ（右回り）内：ヨコナデ	0.5～2mmの白色粒多	やや不良
44	短脚高杯	13.7	9.5	外：回転ヘラケズリ　内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.2～2.5mmの黒・白色砂粒多	良
45						
46	長脚高杯	10.4		外・内：ナデ	0.5～1mmの白色砂粒多、黒色粒少	やや不良
47	甕	14.8	16.1	外：ヘラケズリ、底部下1/4　内：ヨコナデ	0.5～3mmの黒色粒多、白色粒少	不良
48	椀	10.9	5.3	外：底部ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ	1mm以下の砂粒少	硬
49	広口壺	6.6	10.8	外：体カキメ、下1/3ヘラケズリ（右回り）　内：ヨコデナデ、底部は押圧後工具によるカキ取り	0.5～2mmの白色砂粒多、黒色粒少	硬
50	広口壺	9.3	12.7	外：下1/3強ヘラケズリ（右回り）　内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.2～1.5mmの砂粒やや多	硬
51	広口壺	8.8	14.6	外：体2/3ヘラケズリ（右回り）　内：ヨコナデ	0.2～1.5mmの黒・白色砂粒少	硬
52	提瓶	4.8	10.7	外：体部両面ヘラケズリ後ナデ　内：ナデ	0.2～1mmの白色砂粒少	硬
53	提瓶	21.3	27.4	外：カキメ、回転ヘラケズリ　内：ナデ		硬
54	甕	21.8			0.2～2mmの砂粒やや多	硬
55	土師甕	17.8	20.1		0.5～6mmの砂粒多、石英多、長石やや多	やや不良



第99図　遺物実測(6)（S＝1：6．刀）

口縁部がつく。52・53とも体部外面は両面ともヘラケズリの後を丁寧にナデる。53ではさらに体部側面にキメを施す。ともに肩部にはボタン状の飾りがつく。

甕（第98図54）　頸部より上の破片で体部はほとんど欠けるが外面にはタタキがみられる。口径が約22cmと甕としては小型である。

土師器

甕（第98図55）　短く外反する口縁部にやや胴長の体部が付く。最大径が胴部下位にありやや下膨れの形状となっている。調整は外面はハケメ、内面は上半がナデ、下半はヘラケズリを行う。

金属製品（56～94）

武器類として鉄鏃・刀・刀子があり、装身具としては耳環が６点ある。鉄器類は全体に錆化や破損が著しく全体の形状や個体数についての詳細はわからない。

鉄鏃・刀（第99図56～83）

鉄鏃には平根式（56～72）と尖根式（73～81）の両方がある。ともに有茎である。

56は圭頭形、57は方頭形の鏃身で、57の関は台形となっている。ともに鏃身部の中央には逆三角形状の透かしがある。

60～66は鏃身が三角形を呈する。60は鏃身がやや長い三角形のもので短い茎部が付く。関には棘状の突起がある。59・60は破損が著しく切先と関部の破片に分かれるが同一個体と思われ、大形の長三角形鏃と思われる。61～67は鏃身の形態が長三角形で、茎部長の短いものである。61・62・63～66は関部に棘状の突起があり、65には矢柄の木質が残っていた。67はこれらの中では茎部の長いものであり棘状突起は無い。

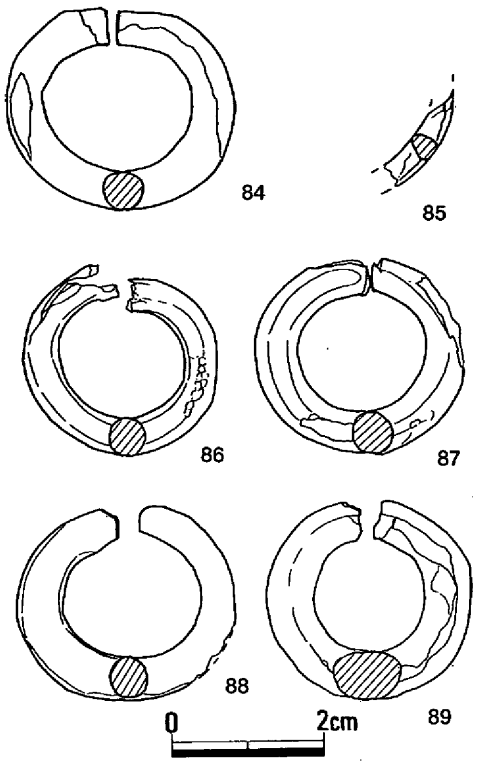
68～71は鏃身の形態が腸抉柳葉形をなす。鏃身は大きさに小（68・69）と大（70・71）がある。茎部長の全体に占める割合は鏃身部の大きに反比例する。いずれも関部には棘状突起は無い。

73～81は尖根鏃である。 74は鏃身が大形の腸抉柳葉形をとり、茎部長は7.6cmで、その中央部分にはハの字状に開いた棘状の長い突起が付く。他に例をみない形態である。それ以外の75～78は鏃身が柳葉形である。75は完品で鏃身長2.7cm、幅は1.2cm、厚さは0.4cmの片丸造りである。茎部長は8.4cmである。この75の他に77～80も関部に棘状の突起が付く。

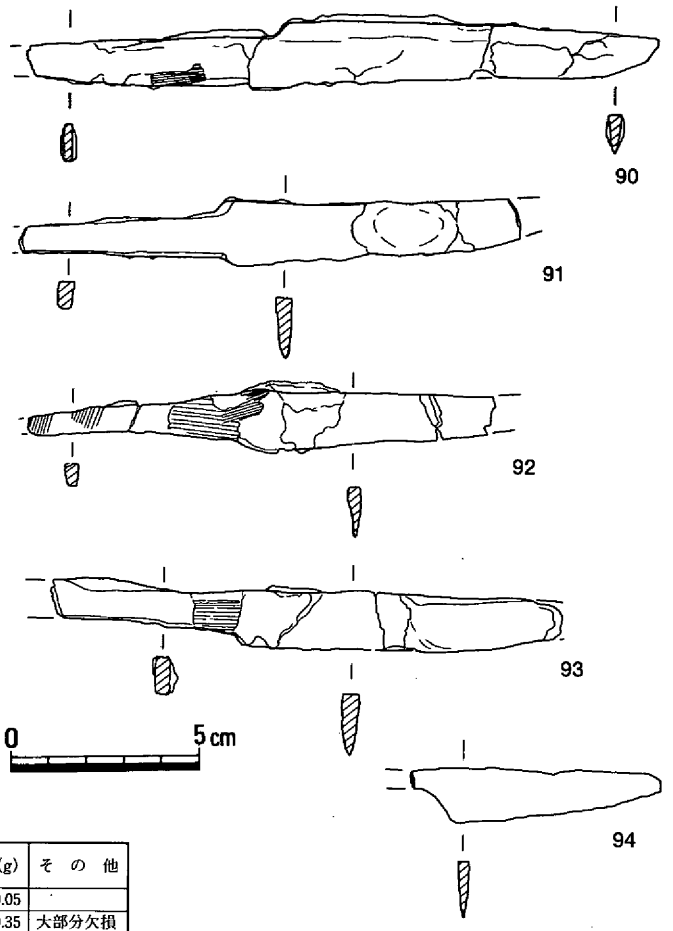
直刀・鍔（82·83）　82は平造りの直刀で中央部分で半折しているが推定全長87cm、刃幅3.5cm、茎部長は12.5cmを測る。関は刃部側にあり茎部との角度は鈍角をなす。茎部中央には１ヶ所に長径５mm、短径３mmの楕円形の目釘穴がある。83は鍔で全体の3/4を欠くが、外径で約7.8cmのほぼ円形を呈す。対して内孔はやや隅丸方形に近い形を取る。

刀子（第101図84～88）　５点出土している。このうち84～86は両関のものであり、87・88は刃部側に関がある。84はほぼ完形で全長16.8cm、刀身長10.2cm、茎長5.6cmである。その他は切先や茎部を欠損する。88は茎部のほとんどを欠くが刃部の幅が1.4cmに対し茎部幅0.5cmと包丁形である。84・86・87は茎部に柄の木質をとどめる。

耳環（第100図89～94）　91・94は金環であるがそれ以外は全て銀環であることから、まず91・94を組とするのが一般的といえるがこの２つはやや大きさに差がある。そこで出土位置から見た91・92と93・94といった組合わせも考慮しておきたい。いずれの個体も中実のものであり銅芯に金・銀箔を巻いている。金環は一部を欠くものの遺存状況は良好であるが、対する銀環は銀箔の大半が剥離し銅芯も錆化が著しい。



第100図　遺物実測(7)



第101図　遺物実測(8)

表14　畑ノ平１号墳耳環観察表

番号	形式	材　質	直　径（cm）			厚　さ（cm）			重量(g)	その他
			上	下	左右	上	下	左右		
84	中実	銅芯銀張り		2.58	2.94		0.55	0.5	10.05	
85	中実	銅芯銀張り							0.35	大部分欠損
86	中実	銅芯銀張り		2.3	2.52		0.5	0.5	6.98	
87	中実	銅芯銀張り		2.55	2.5		0.55	0.55	7.43	
88	中実	銅芯銀張り		2.55	2.83		0.65	0.9	6.93	
89	中実	銅芯銀張り		2.6	2.7		0.65	0.9	6.7	

小結

１号墳は墳丘と石室の大半が破壊されており、そこから得られる情報はやや乏しいものであるが石室基底部及び床面ではいくつかの知見を得ることができた。

横穴式石室は西に開口する無袖式であり、本古墳群中では５号墳についで２番目の大きさを持つものであった。石室内では土器類と伴に刀や鉄鏃など遺物が存在し、その位置関係から最低６回の遺物を伴う埋葬が行われたことが明らかとなった。これは出土遺物中の須恵器とりわけ蓋杯の型式からもある程度は見て取れる。蓋杯は法量・技法・形態からいずれも４類に分けることが可能であったが、１～３類と４類は新古の関係で捉えられよう。また蓋杯１～３類においても粗雑化された蓋２・３類や杯３類は新しい傾向にあるといえる。この蓋杯の各類別を石室内での出土位置と照らし合わせるなら、１類の蓋及び杯は石室内全体に散乱したようなあり方を示し、なかでもＥ群・Ｆ群に多いように初葬時の遺物が前側に掻き出された状況を示している。特徴的な半裁円錐台形といった形態を示す蓋２類と杯３類のセットはＡ群に多く、Ｃ群やＥ群といった左側壁沿いにみられる。一方、蓋杯でもっと新しいと思われる４類はＤ群に多くみられた。Ｄ群には蓋３類16・17と杯１類24もあり、これでセットをなしていた可能性がある。このＤ群も片づけられていることからこれより新しい追葬がある。そこでＡ群中の椀48が最も新しい特徴を備えていることから、１号墳では追葬の際に石室奥を利用する傾向があったものと考えられる。

古墳に伴わない遺構と遺物

調査の対象とはなっていないが古墳の北20ｍ辺りに竿墓があり西斜面を２段に加工していた。調査地内においても古墳とその周囲を削平して数基の土壙群が存在し、また横穴式石室内の覆土中からも陶磁器類を中心とした遺物が混入していた。いずれも古墳築造後の遺構と遺物である。この他には図示していないいくつかの集石がみられた。これには下部構造は無いことから古墳の石室石材が集められたものといえよう。

土壙の形態から大まかに２類に分けられる。

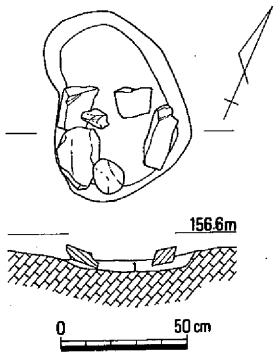
土壙１・２（第102・103図）

土壙１は長軸が1.2ｍ、短軸は0.55ｍの不整円形で、深さは検出面より0.1ｍ足らずである。土壙２は直径0.8ｍ程の円形で深さはを測る。いずれも土壙内に小石材がみられるがそれが組まれたような痕跡は無く墓壙とするならば上部構造の石積みと考えられよう。ともに遺物などは皆無であり時期は不明である。

土壙３（第104図）

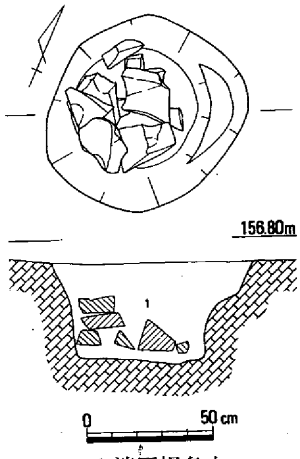
長さは約1.5ｍ、幅が1.1ｍの長方形で、深さは0.3ｍを測る。土壙内からは小石材と伴に五輪塔の火輪が２基出土した。時期を判定する上で土器類は無いものの、この五輪塔の火輪は軒反りが強いことから鎌倉時代にさかのぼる可能性がある。

この他にも古墳の周囲からは五輪塔の空風輪97や火輪99、水輪98・100が出土した。このうち97は特異な偏形のものである。99は軒



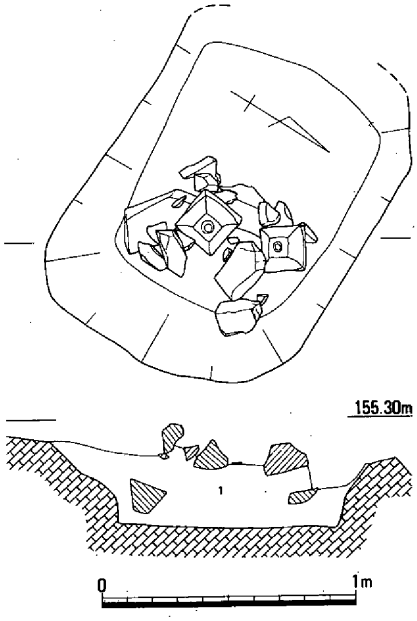
１淡灰褐色土

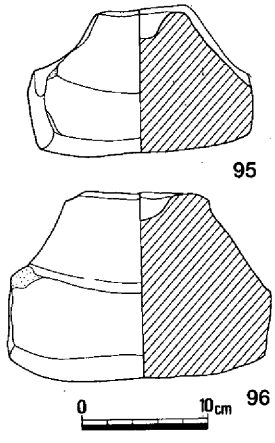
第102図　土　壙　１



１淡灰褐色土

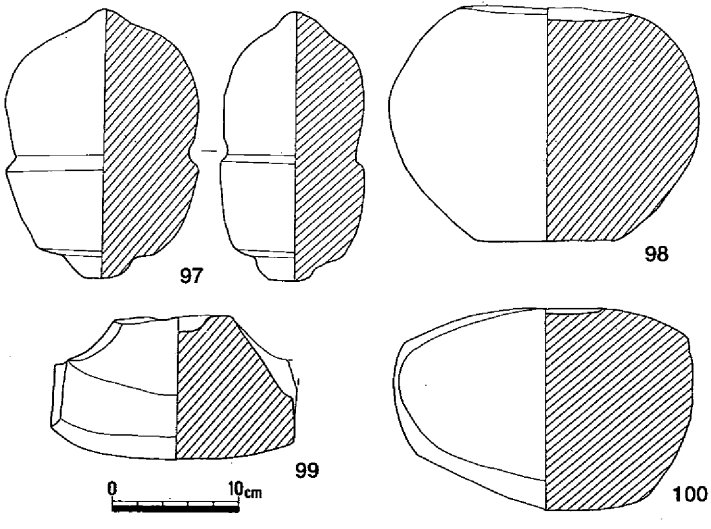
第103図　土　壙　２





１淡灰褐色土

第104図　土壙３・出土遺物



第105図　周 辺 遺 物

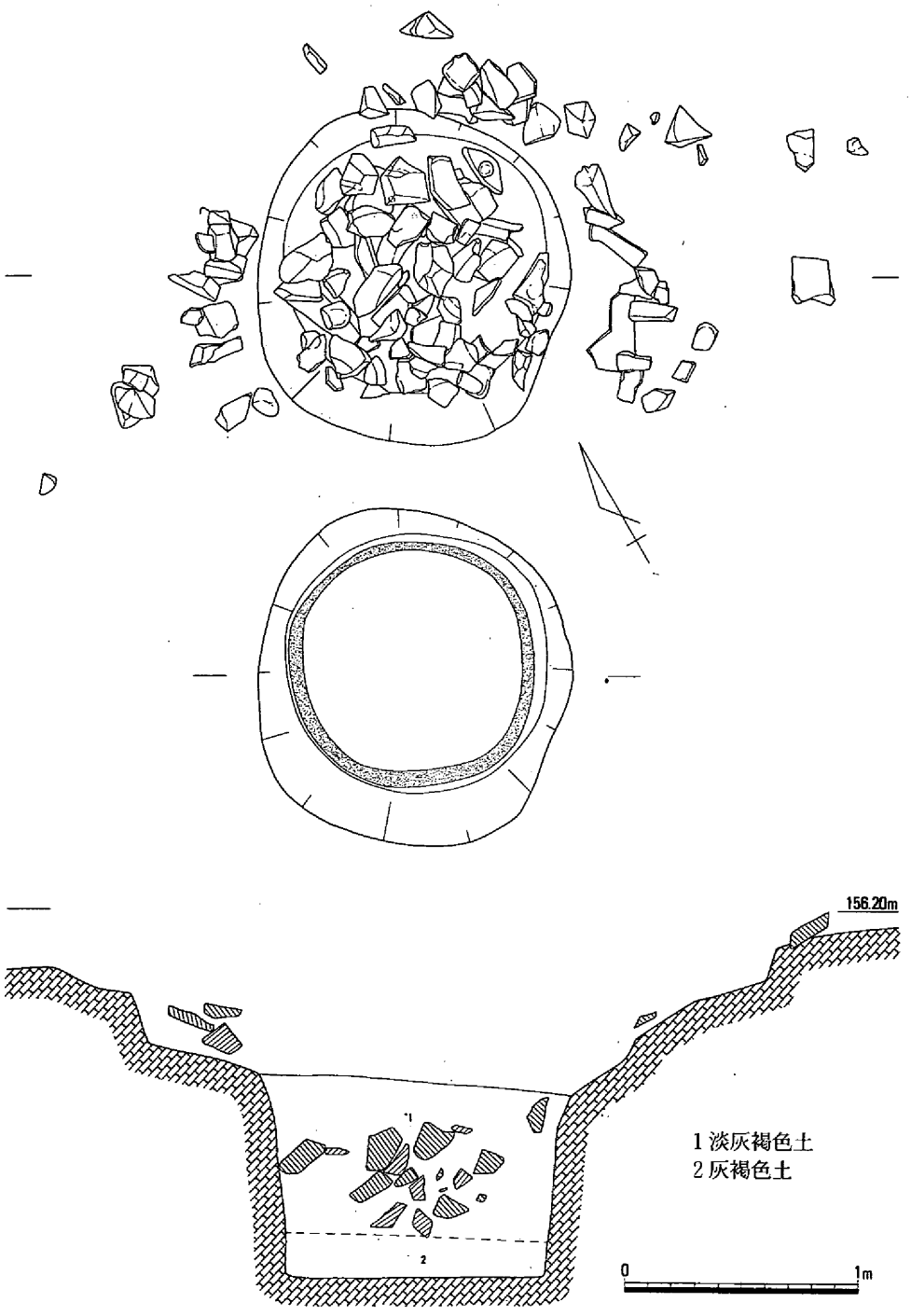
反りの特徴から鎌倉時代までさかのぼる可能性がある。

これらの石材は全て花崗岩である。

土壙４～６（第106～108図）

ほぼ円形を呈する土壙である。土壙４は直径は1.4ｍ、深さが1.2ｍを測る。土壙底に桶の痕跡が残っており座棺であったと思われる。土壙の周囲と土壙中に多数の礫を含むことから墓壙上部には石積みであったと思われる。

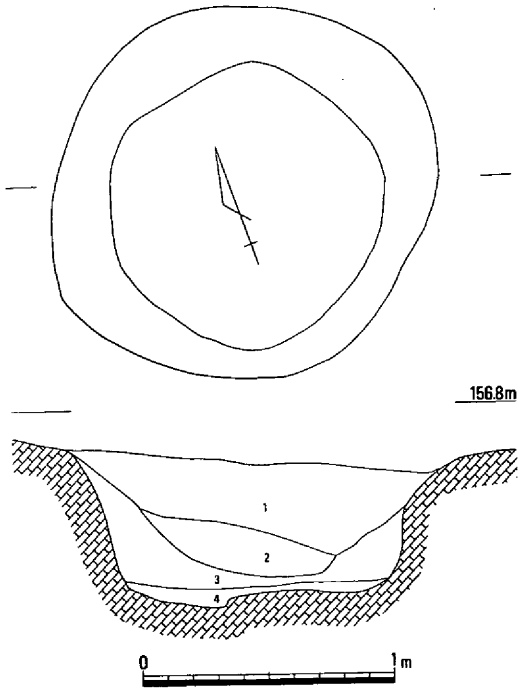
土壙５・６は棺痕跡や石積みなどは無かったものの座棺ではないかと思われる。３基とも遺物は存



第106図　土　壙　4

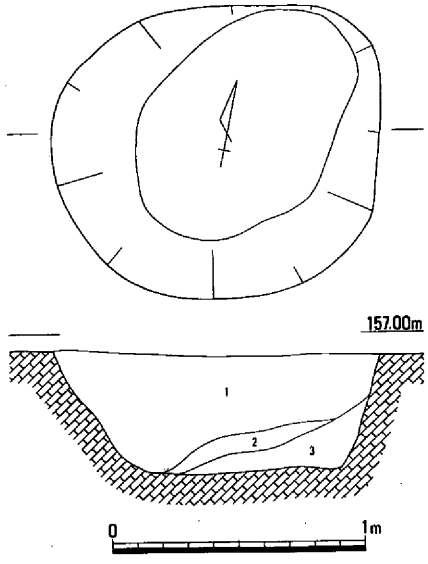
在しないが時期は江戸時代に求められよう。

横穴式石室の覆土からは近現代の開墾によって削平されたと思われる墓地遺跡の遺物など、古墳



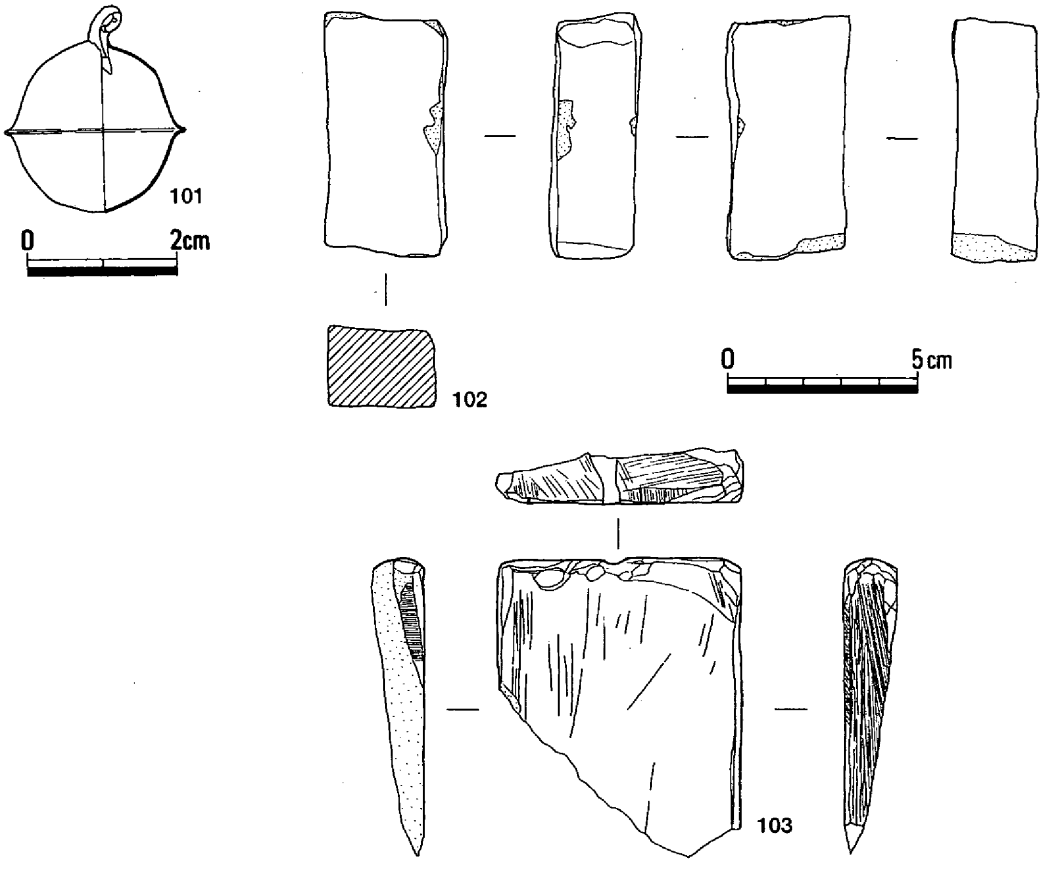
１淡灰褐色土　３淡灰黄褐色土
２淡黄灰褐色土　４灰褐色土

第107図　土　壙　5



１淡褐色土　２淡黒褐色土
３淡褐色土

第108図　土　壙　6



第109図　石室埋土内遺物(1)

に伴わない近世の陶磁器類を中心とした多くの遺物が出土している。(第109・110図)

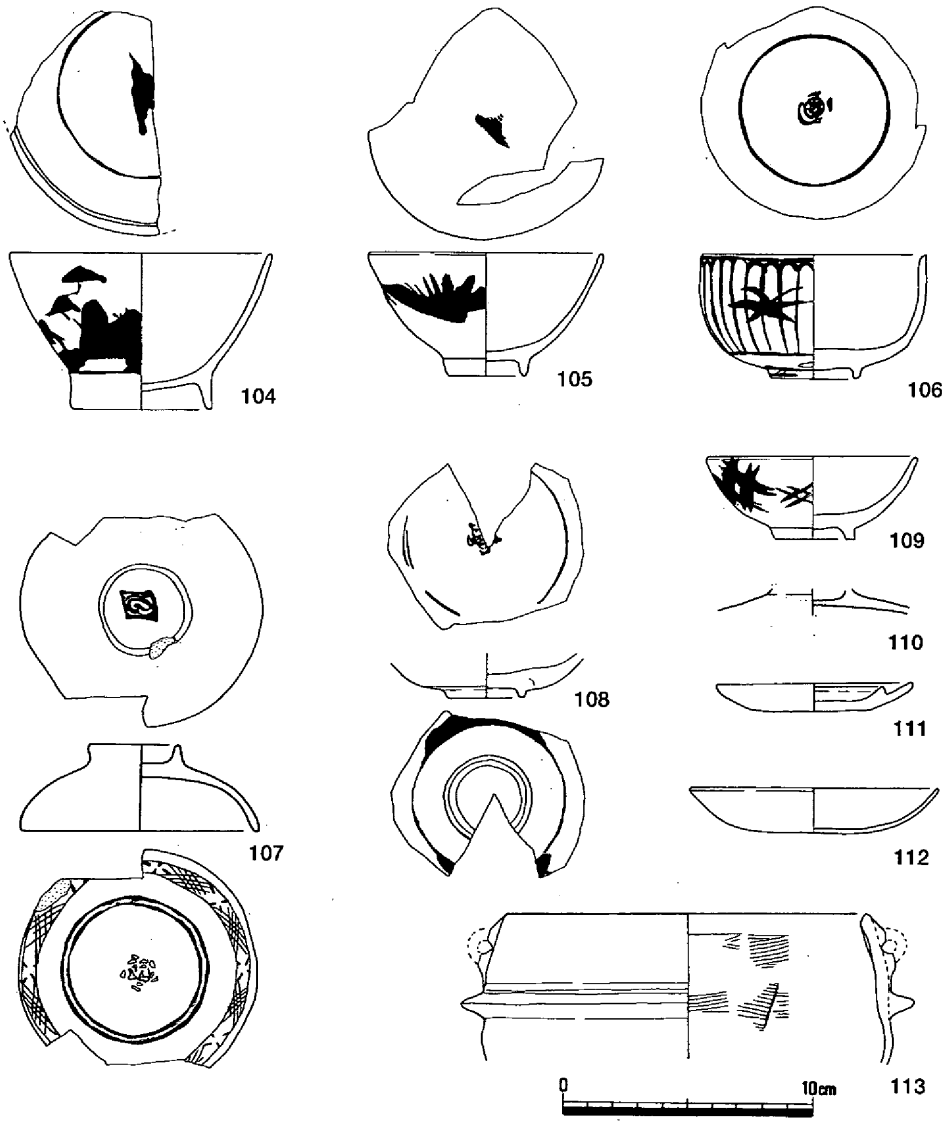
110は銅製の鈴で、上下を別に造り中央で合わせる。頂部には革製の紐が残る。

111と112は砥石で、112は提げ砥石で残存する全面を使用している。紐孔があるが、その箇所でおれた後の破面も利用している。

104～109は伊万里産の日常雑器類である。104は高高台の椀。107はくらわんか手椀の蓋である。いずれも18世紀後半の特徴を示す。

110は産地はわからないが灰釉陶器で、土瓶の蓋である。111・112は備前焼きの灯明皿であり、109は土師質の羽釜である。

以上、出土した遺物の示す時期は18世紀の後半であり、調査区外にあった竿墓の年号「文久」に近いものである。そこで調査された以外に本来もう少しの墓壙が存在しており、そのうちいくつかの墓壙が削平されたため、その副葬品が石室内に入り込んだとみられよう。それらは墳丘の盛土中に掘られていた可能性が強く、近代以降に墳丘が削平され、その結果として石室に近世墓の副葬品が入り込んだとみられる。



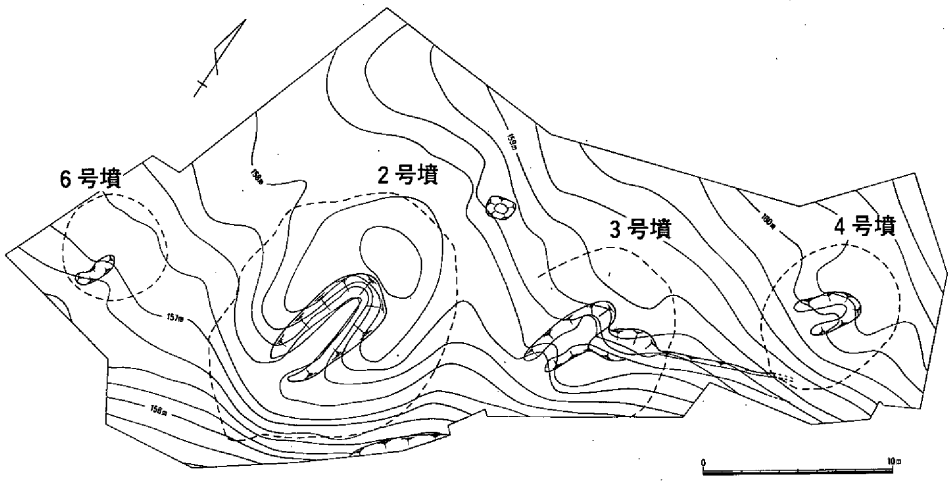
第110図　石室埋土内遺物(2)

（２）畑ノ平６号墳

調査前の状況（第111図）

Ｃ－２支群中で最も尾根の先端近くかつ尾根筋よりやや南斜面にあり、当古墳群中でも最も墳丘が大きくかつ明瞭であった２号墳の墳端から南西４ｍの所に位置する。尾根上は針葉樹とその隙間を埋めるように低灌木が茂り、また谷部では水田や畑の開墾によって尾根裾が削られており、６号墳の南においても崖となっていた。

墳丘は完全に削平を受けていたが、周堀と石室の落ち込みらしきものがかろうじて看取できたため調査区を拡張したところ石室石材が確認できたため６号墳として調査を行った。



第111図　Ｃ２支群調査前地形測量（S＝1：400）

墳丘（第112図）

墳丘盛土は削平によって全く認められなっかたものの、周堀はかろうじて底の部分を検出できた。周堀は現存幅0.6ｍ、深さ0.2ｍで、石室の開口部である谷側を除き、墳丘を丸みをもった「ハの字状」に半周する。

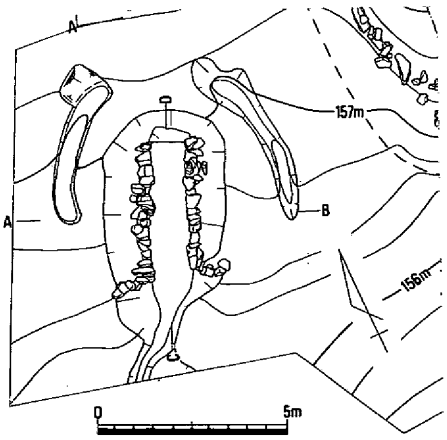
６号墳の墳形と規模については、周堀の内側の下場を測ると径５～６ｍの円墳となり、その中央に横穴式石室が存在した。

墓壙

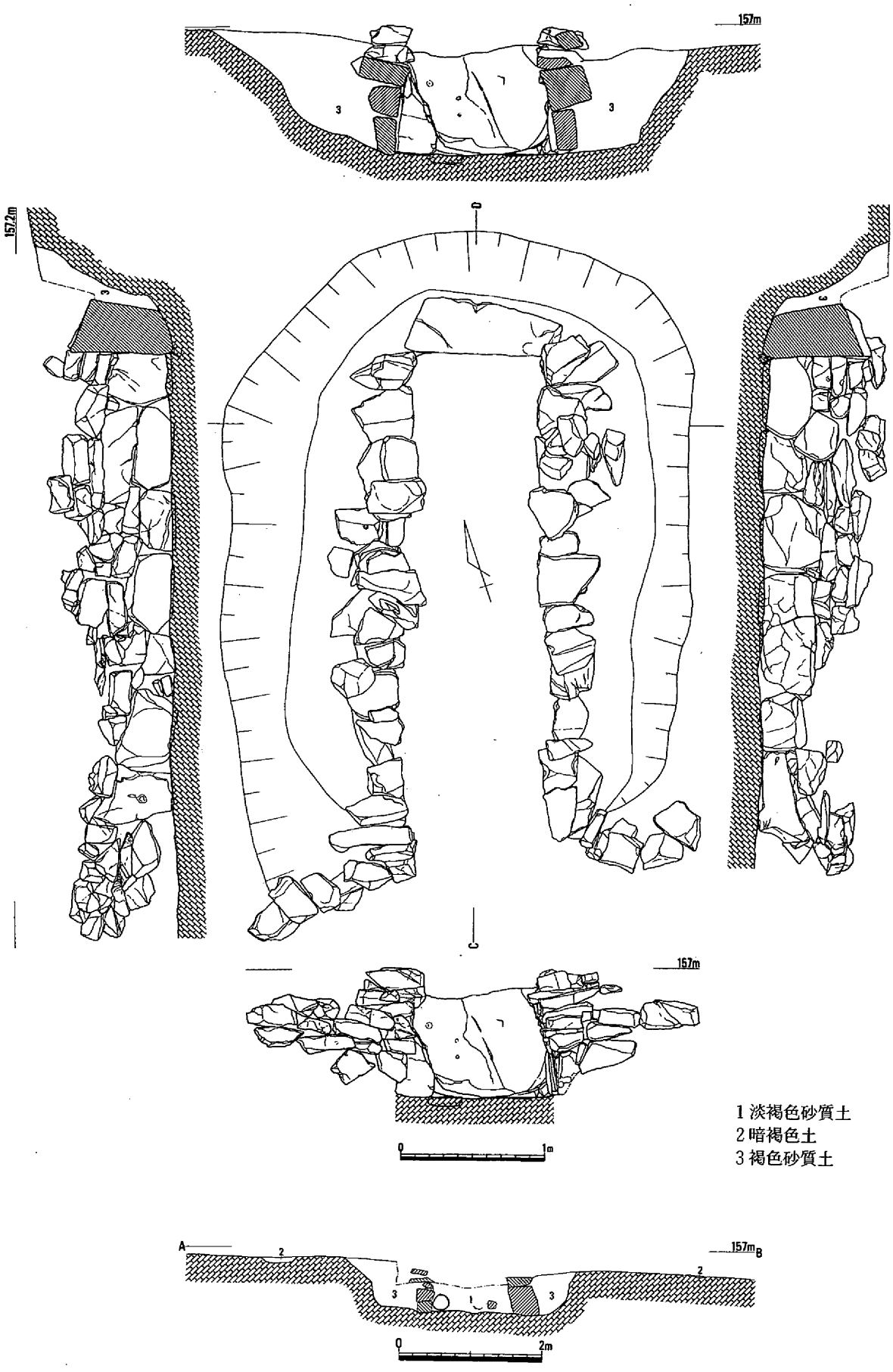
平面形は「コの字状」を呈する。掘り方の規模は上面で長さ５ｍ、幅3.2ｍ、底面では長さ４ｍ、幅2.4ｍを測る。掘り方の深さは奥壁側で約１ｍを測るが、谷側に向けての地山の傾斜と同様にその深さは減じてゆき、またその掘り込みの角度もゆるやかになり、石室開口部の外において墓道と連結している。

外護列石（第113図）

石室前庭部には石室側壁に対し「ハの字」に開くように



第112図　墳丘測量



第113図　石室実測・墳丘土層断面

外護列石が存在し、側壁の上部と同様小ぶりの石の小口部を外に向けていた。この外護列石は墳丘を取り巻くものではなく、石室掘り方が谷側に抜ける部分において「逆ハの字状」に傾斜する基盤層の上に、石室の側壁から連続して石垣状に垂直に積み上げられていた。

横穴式石室（第113図）

無袖式の横穴式石室で、石室主軸はN-20°-Eとほぼ南に開口する。平面形はほぼ長方形で長さ3.6m、幅1.1mを測る。石室現高は0.9 mである。すでに天井石は持ち去られており、石室内は流入土によって完全に埋まっていたが、その中に石室の側石がかなり混在していたことから本来の石室高はもう少し高かったようである。

奥壁は基底石１石のみが残る。高さ0.8mの横長長方形の石を立てて用いる。

側壁は多いところで４～５段の石積みが残る。基底石はやや大型の石を縦長に立てて使うが、それに比べ２段目以上にはかなり小振りな石を用い、その小口部分を横長にして壁面を構成する。左側壁では横目地が開口部方向に向かって斜めに上がっている。壁石の材質はすべて玄武岩の角礫である。

墓道（第113図）

石室の掘り方から連続しており、断面はU字形で、幅約50cm、深さ約30cmを測る。墓道は石室主軸より若干西に振れており谷から尾根の稜線上に沿って上がってきた後に石室開口部手前で平坦になり石室内には続かない。

石室床面の状況（第114図）

石室床面は基盤層に造られほぼ水平な面をなし、土器などの遺物と棺台が検出された。棺台は石室奥西側の壁に沿って設置されており、棺釘等は見つかっていないもののこの部分では高杯14以外は他に土器は見られないことから、最終埋葬の段階で木棺が置かれた場所と考えられ、また最終埋葬段階での副葬品配置の状況をほぼ正確に表していると考えられる。

石室内外からは土器・鉄滓・玉類・耳環・鏃が出土しているが、このうち供献土器は出土位置から次の５つの群としてとらえられる。奥壁付近（A群）では右隅に器種は不明であるが大形の土師器がみられる。木棺位置の西奥側（B群）では杯類と高杯や提瓶があり、木棺の西前側（C群）では、杯類と鏃がみられた。木棺の前面（D群）では大形の土師器が３点あり、甑21・鍋23は倒立状態で、鍋22は横転した状態で置かれていた。石室前庭部（E群）では須恵器甕片が１ヶ所にまとまって出土しており、ほぼ現位置を保っていると考えられる。

玉類・耳環はすべてふるい落としによって見つかったものであるが、奥側の棺台石付近で棺台上面よりやや上の位置であった。

鉄滓は石室入り口付近で数点が認められた。

出土遺物（第115～118図）

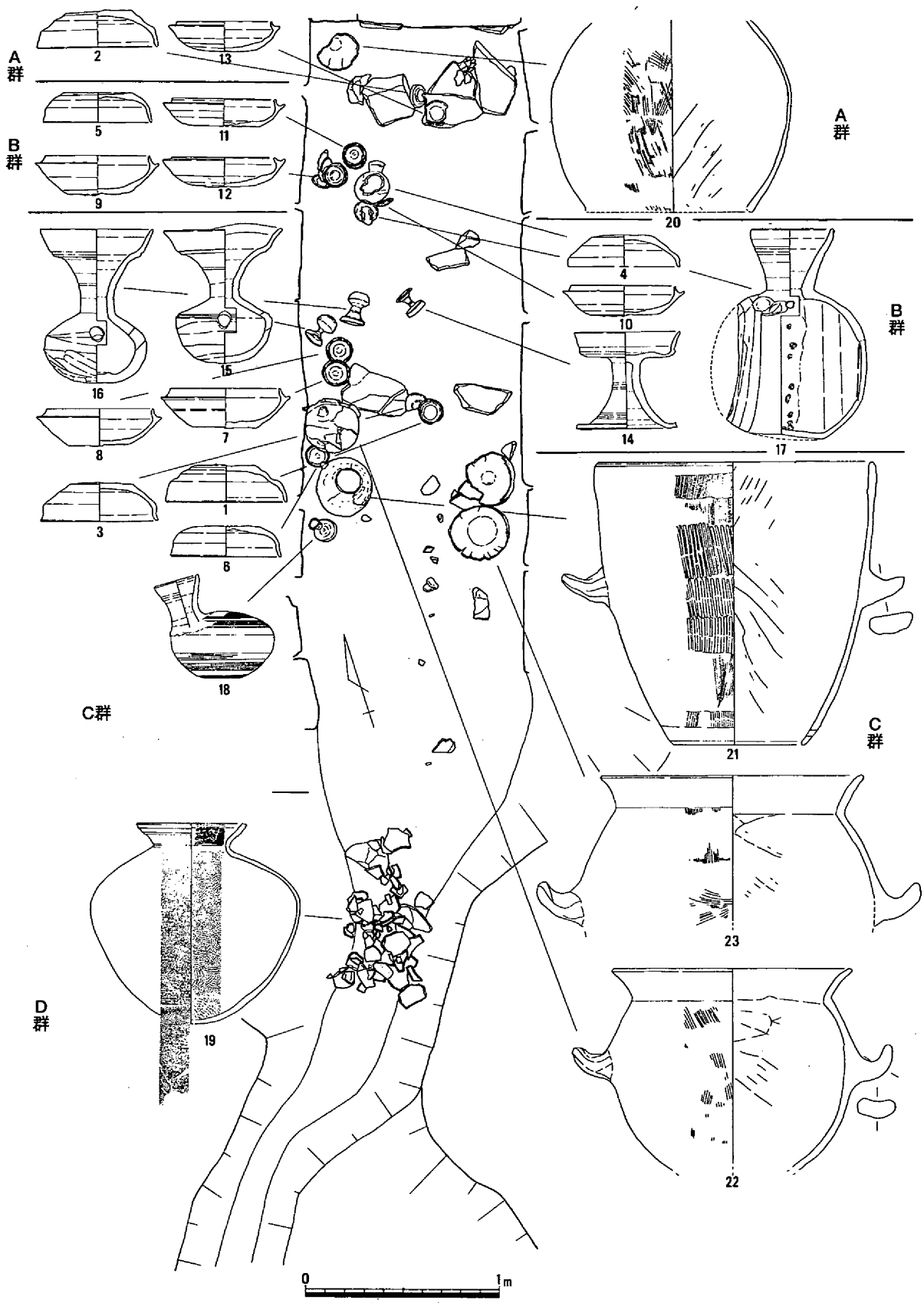
出土した遺物には須恵器、土師器、玉、耳環、鏃、鉄滓がある。

須恵器（１～20）

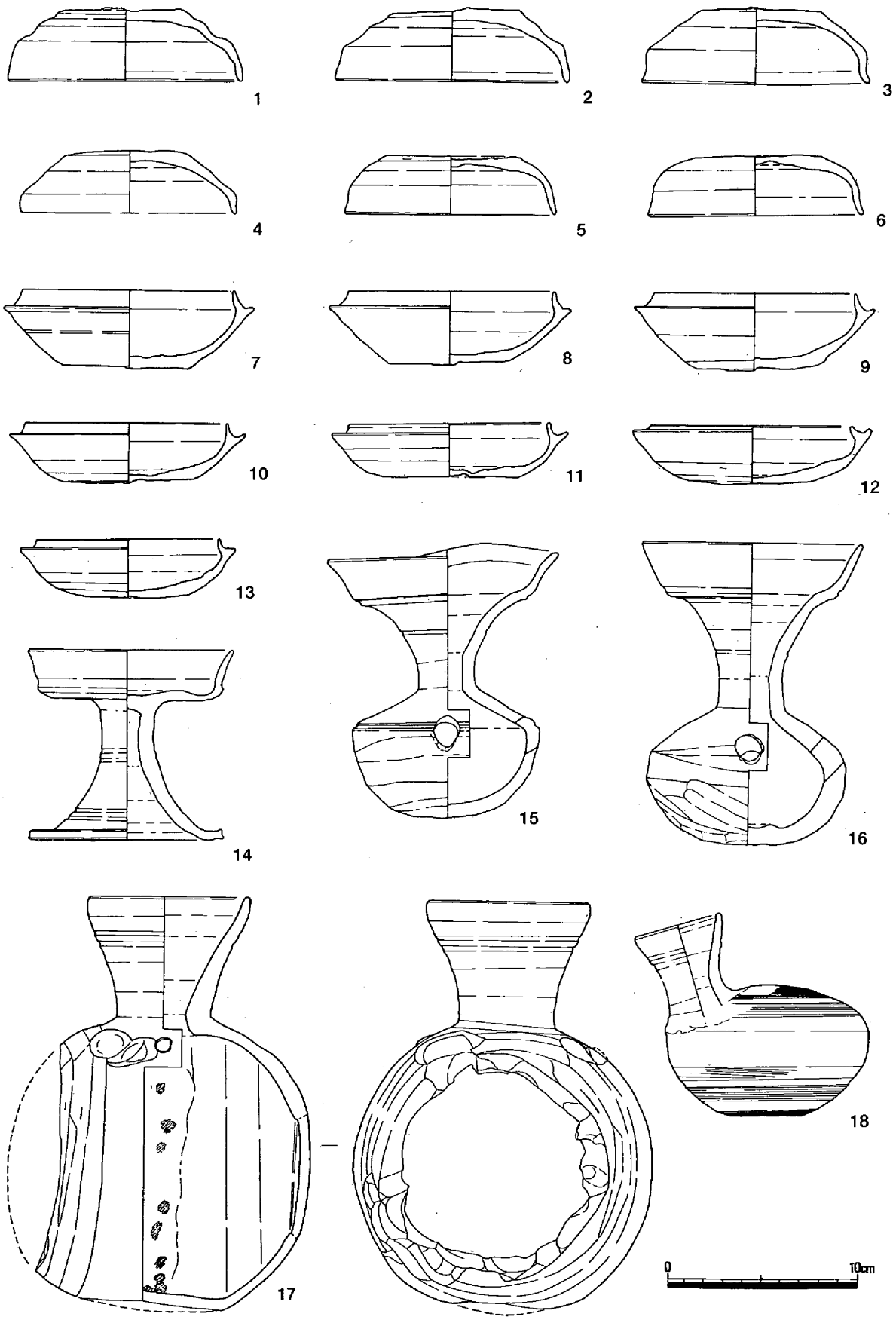
杯蓋（第115図１～13）

法量や形態から次の３群に分類できる。

１類（１～３・７～９）　蓋の口径は12cm程で、器高は約４cm。身は口径11cm前後で器高は約４cmを測る。両者ともヘラケズリは認められず、ヘラ起こしの後は顕著な調整は認められない。蓋は天井部が、杯は底部が平坦な面をなしている。

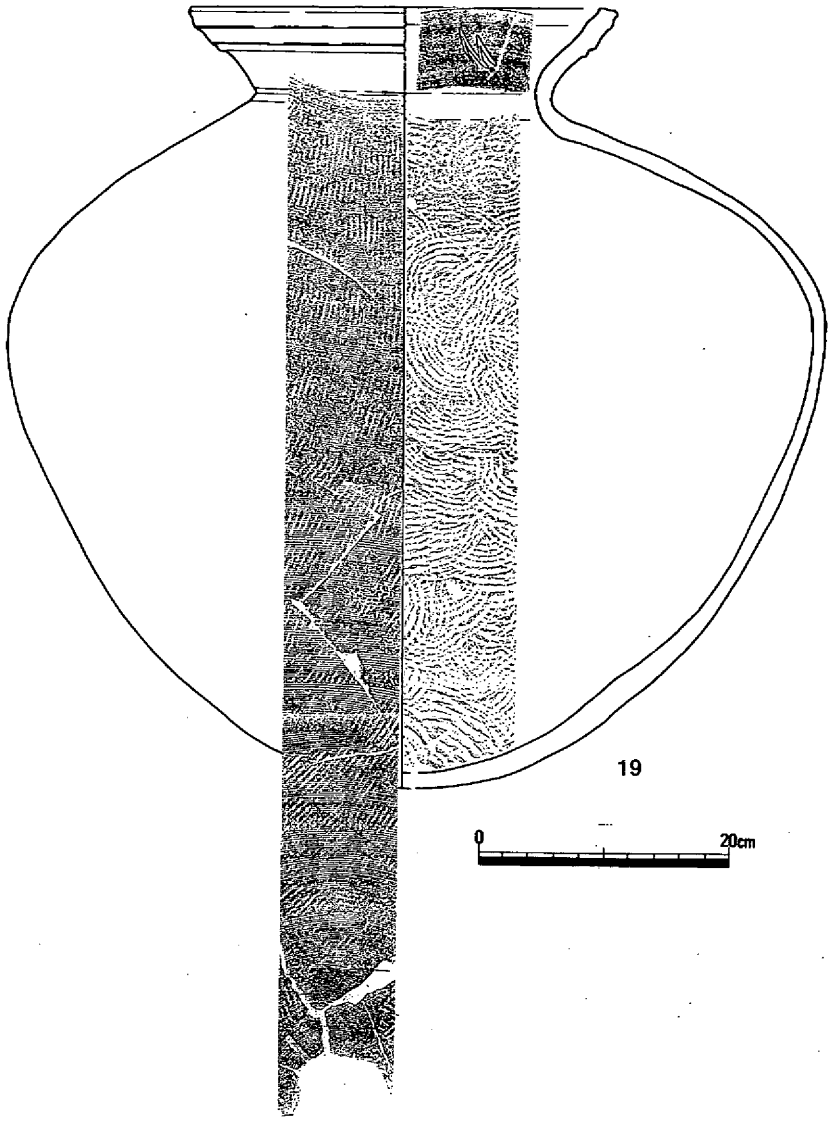


第114図　床面遺物出土状況



第115図　遺物実測(1)

２類（４～６・10～12）
　蓋は口径が11㎝前後、身は口径が10.5㎝程で、口縁部の立ち上がりは１類に比して小さい。ともに器高は約３㎝である。調整や形態的な特徴は１群と同様である。
３類（13）　口径が10㎝以下の杯身である。１・２類比べ立ち上がりは低く、底部が若干丸みを帯びる。
高杯（第115図14）　口径は10.3ｍ、器高10㎝を測る。口縁と杯底部の境に段を持つ。脚部は中央と裾に二条の凹線をもつ。
瓶（第115図15・16）　体部上方で肩が張る15と球形の体部を持つ16がある。ともに頸部と口縁部の境に沈線がめぐる。15の底部が回転ヘラケズリ



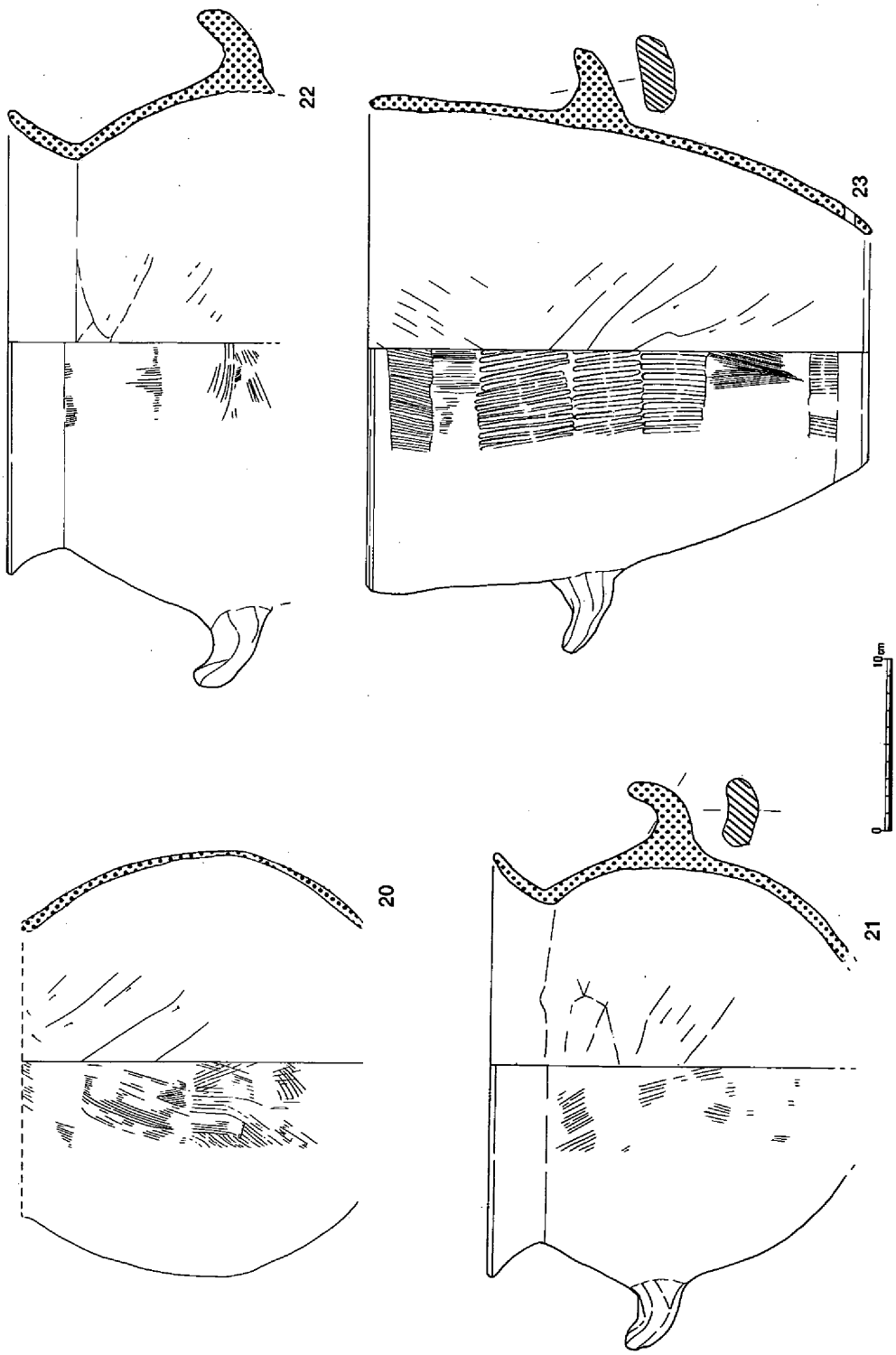
第116図　遺物実測(2)（S＝１：６）

表15　畑ノ平６号墳土器観察表

No	器種	口径	器高	手法の特徴	胎土	焼成	色調
1	杯蓋	12.3	3.9	外：ヘラ切り　内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.5～3㎜の白色粒多	不良	灰白色
2	杯蓋	12.2	3.9	外：ヘラ切り　内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.5～3㎜の白色粒多	不良	灰色
3	杯蓋	11.9	4.1	外：ヘラ切り　内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.2～3㎜の白色粒多	不良	褐灰色
4	杯蓋	11.2	3.3	外：ヘラ切り　内：ヨコナデ	0.5～2㎜の白色粒やや多	不良	鈍い黄橙色
5	杯蓋	11	3.1	外：ヘラ切り　内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.5～4㎜の白色粒やや多	良好	青灰色
6	杯蓋	11.2	3.2	外：ヘラ切り　内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.5～4㎜の白色粒多	不良	緑灰色
7	杯身	11.3	4.15	外：ヘラ切り　内：ヨコナデ、仕上げナデ	砂粒	良	灰白色
8	杯身	11	3.9	外：ヘラ切り　内：ヨコナデ、仕上げナデ	砂粒	良好	灰色
9	杯身	10.7	4.1	外：ヘラ切り　内：ヨコナデ、仕上げナデ	砂粒	やや不良	青灰色
10	杯身	10.7	3.2	外：ヘラ切り　内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.2～3㎜の白色粒多	良好	黒色
11	杯身	10.5	2.9	外：ヘラ切り　内：ヨコナデ	0.5～6㎜の白色粒多	良好	暗灰色
12	杯身	10.5	3.1	外：ヘラ切り　内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.5～7㎜の白色粒やや多	良好	明オリーブ灰色
13	杯身	9.7	3.2	外：ヘラ切り　内：ヨコナデ、不整方向ナデ	0.5～5㎜の白色粒多	やや不良	灰黄褐色
14	高杯	10.8	10.1	外：ヘラケズリ　内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.2～1.5㎜の白色粒少	良好	灰色
15	瓶	12	14.5	外：ヘラケズリ、穿孔　内：ヨコナデ	0.2～2㎜の白色粒やや多	良好	灰色
16	瓶	11.5	15.9	外：不整方向ヘラケズリ、穿孔、沈線、凹線　内：ヨコナデ	0.1～1㎜の白色粒僅少	良好	灰色
17	堤瓶	8.4	21.5	外：ヘラズリ　内：ヨコナデ、押さえ、接合痕、工具による当て具痕	0.8～5㎜の白色粒やや多	良好	灰白色
18	平瓶	4.6	10.7	外：ヘラケズリのちカキメ　内：ヨコナデ	0.2～2㎜の白色粒少	良好	緑灰色
19	甕	16.8	31.2	外：タタキ、カキメ　内：同心円文当て具痕		良	灰色
20	土師器			外：ハケメ　内：ヘラズリ	砂粒僅少	良好	鈍い橙色
21	土師甑	28.6	29.2	外：タタキの上へハケメ、表面剥離　内：ヘラケズリ、不定方向ケズリ、ハケメ	砂粒	やや良	橙色
22	土師鍋	24.9		外：ハケメ　内：ヨコナデ、ヘラケズリ	砂粒僅少	ほぼ良好	灰黄褐色
23	土師鍋	27.3		外：ハケメ　内：ヨコナデ、ヘラケズリ	砂粒僅少	ほぼ良好	鈍い黄橙色

で体部中央に一条の沈線がめぐるのに対し、16は体部に沈線が省略され、底部は不整方向のヘラケズリで仕上げる。

提瓶（第115図17）　俵状の体部の肩部分にボタン状の突起がつく。焼成時にすでに器表面が剥離していたような不自然な割れ面が見られる。



第117図　遺物実測(3)（S＝１：４）

平瓶（第115図18）　口径は4.6㎝、器高は10.3㎝、胴部最大径は10.5㎝でミニチュアと呼べるものである。体部天井はカキメ、底部は回転ヘラケズリ後カキメを施す。

甕（第116図19）口縁部は外面に２条の沈線がめぐらし、内面にヘラ記号を施す。

土師器（第117図20～23）

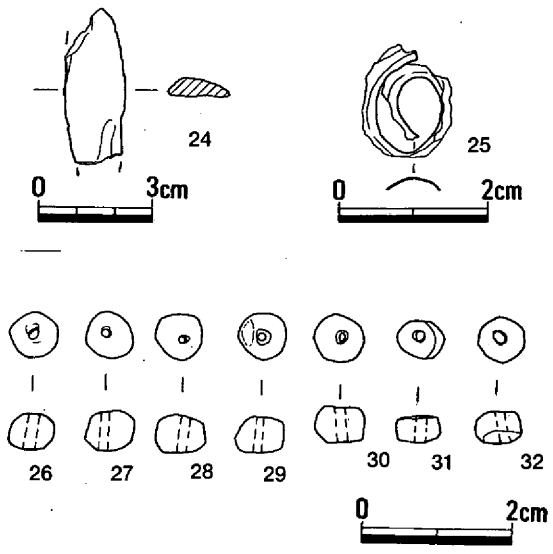
甑（20）　筒状の体部に把手が一対つく。外面の調整は表面のタテハケが剥離し、平行叩きが認められる。口縁部はまっすぐ上方に立ち上がって終わる。底部には一対の紐穴がある。21は外面がハケメ、内面は縦方向のヘラケズリがみられる。

鍋（21･22）　いずれも底部は欠損するが球形の体部にまっすぐ外上方に立ち上がる口縁部がつく。外面の調整はハケメ、内面はヘラケズリを施す。

甕（23）　外面はハケメ、内面はヘラケズリを施している、甕の体部片である。

その他の遺物（第118図）

25は鏃の刃先の部分である。24は外側を破損しているが銀製中空耳環である。細片となっており図示できていないが、もう１個体分同様のものが出土しており、本来は１対をなしていたであろう。26～32は土製の練り玉である。



第118図　遺物実測(4)

表16　畑ノ平６号墳玉類観察表

No	直径(㎝)	厚さ(㎝)	重量(g)	材質	その他
26	0.7	0.5	0.21	土製	
27	0.6	0.4	0.12	土製	
28	0.6	0.4	0.15	土製	
29	0.65	0.5	0.16	土製	
30	0.62	0.5	0.18	土製	
31	0.55	0.55	0.12	土製	
32	0.65	0.45	0.15	土製	一部欠

小結

出土した須恵器のうち、量的に多くかつ最も時間的な変化を反映しやすい蓋杯は１類から３類にわけられ、形式的には１類から３類への時間的な変化が考えられるが、これと出土位置を対照してみると、１類はＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ群の各群に見られるが特にＣ・Ｄ群に多い。１類は初葬時のものと考えられるが追葬の際に石室前面に片付けられている。また、蓋２が棺台石の間にあることから棺台は追葬の段階で設置されたことも考えられるかもしれない。２類は第２回埋葬に伴う遺物と思われ、蓋６以外はＢ群に集中する。３類は型式的に最も新しく最終埋葬時のもので棺台石上にあったか、あるいは棺内の頭位付近に置かれていた可能性がある。以上、少なくとも土器を伴う追葬は２回行われており、追葬の際は棺台部分を連続して使用するといった小型横穴式石室における空間利用法を示す事例といえる。

６号墳もＢ支群の７号墳と同様に、前庭部の須恵器甕や甑と鍋といった土師器煮沸具の副葬がみられた。これは、「コトドワタシ」・「ヨモツヘグイ」といった埋葬儀礼についてのみでなく被葬者集団の性格や出自について知る重要な材料と言えよう。

（３）畑ノ平２号墳

調査前の状況（第111図）

２号墳はＣ２支群の盟主墳的な存在といえ、今回調査した古墳のうちでも最も墳丘が大きく、周堀も明確であったため古墳群発見・調査の端緒となった古墳である。

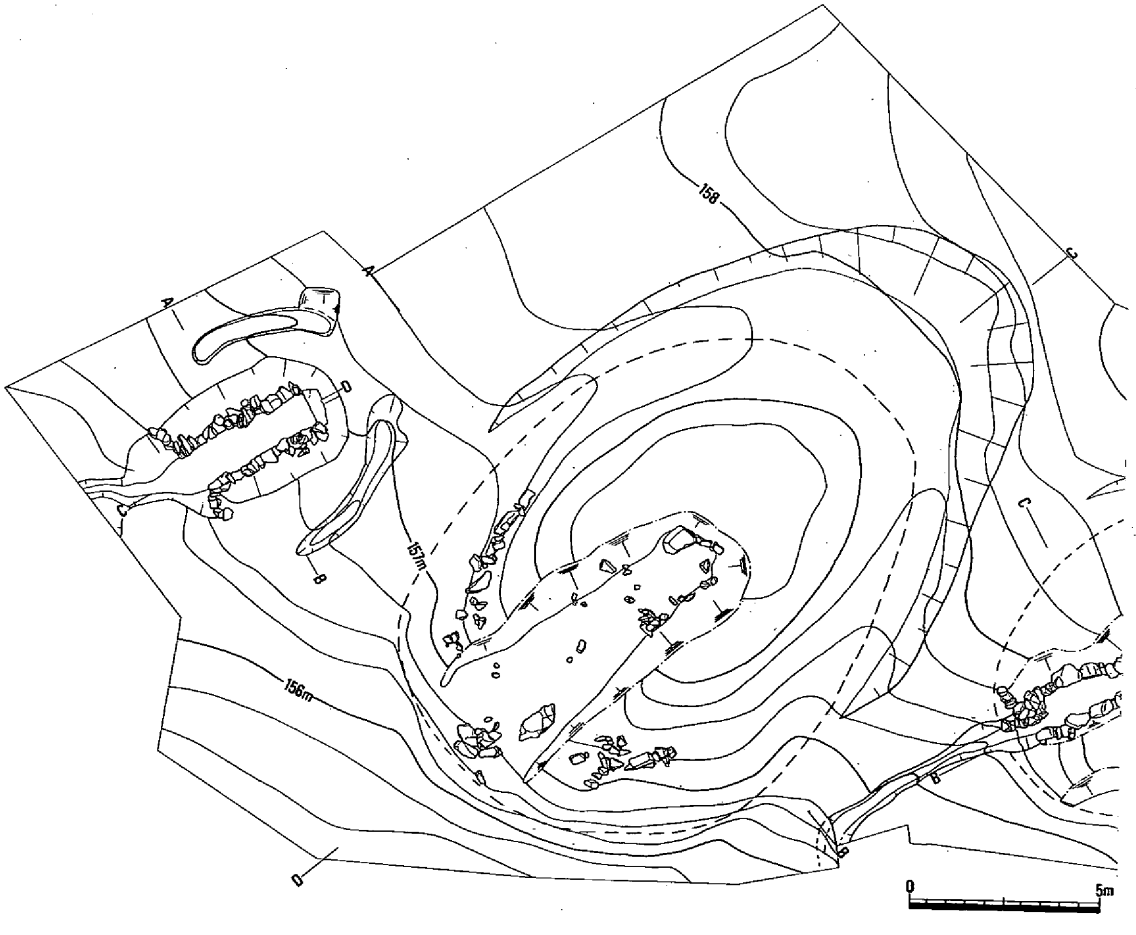
この２号墳は６号墳と３号墳の間にあり、両古墳とほぼ裾を接する位置にある。元の地権者の人達にお話を窺ったところ、かなり以前に石材の抜き取りを行っており、墳丘の中心部分はその際によると思われる、長さ７ｍ，幅３ｍ，深さ１ｍもの大きな窪みが存在していた。

墳丘と周堀（第119・120図）

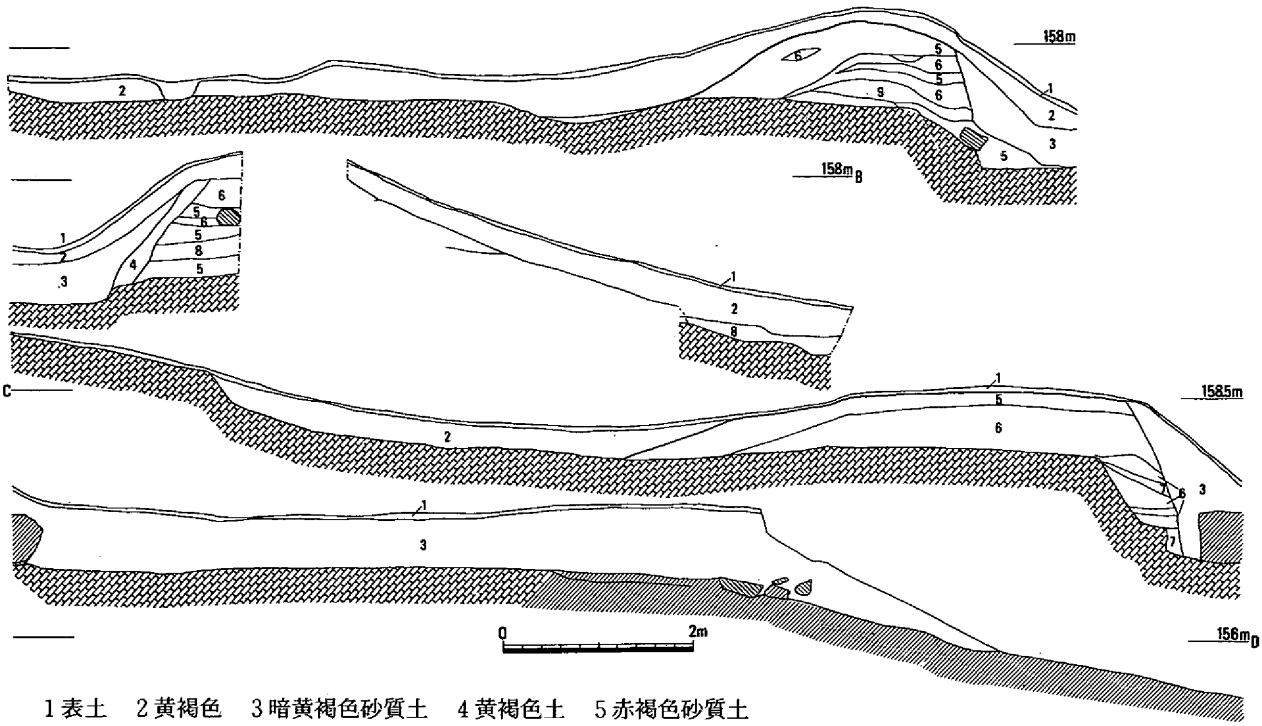
墳丘は、10.5m×14ｍと南北方向が長い楕円形状を呈する円墳で、墳丘の中心からやや南に寄った位置には横穴式石室を乱掘した際にできたと思われる大きな落ち込みがあった。また丘陵の頂部から谷斜面に傾斜が変換する所がほぼ墳丘の中心となっており、そのため谷側からは墳丘が大きく見え墳丘の現存高は南側の裾から1.3ｍを測るが、丘陵上側から測ると0.7ｍと低い。この墳丘を周堀が丘陵上部にのみ墳丘を半円形にとりまく。

周堀は断面逆台形状を呈しており、幅は最も広い丘陵上部ではうわばの幅が４ｍ、したばでは２ｍに近い。深さは墳丘外の肩から0.8ｍを測る。

石室の掘り方はトレンチ調査のみで全掘はしていないが、平面形は「コの字状」を呈しており、旧表土層から掘り込まれていた。石室奥壁側では深さ１ｍを掘り込むが、石室前面では地形の傾斜に即



第119図　墳丘測量



１表土　２黄褐色　３暗黄褐色砂質土　４黄褐色土　５赤褐色砂質土
６淡褐色砂質土　７黄褐色砂質土　８暗褐色砂質土（旧表土）　９赤褐色砂質土（粘土片を含む）

第120図　墳丘土層断面

して浅くなっていた。最大幅は墓壙上面で3.2ｍである。掘り方内の埋土は、基盤層と旧表土層を利用したと思われる、第６層と第７層を互層に積んでいる。

盛土はこの墓壙上が埋め立てられた後に積み上げられており、第５層と第６層が10～40㎝単位で水平に積み上げられていた。

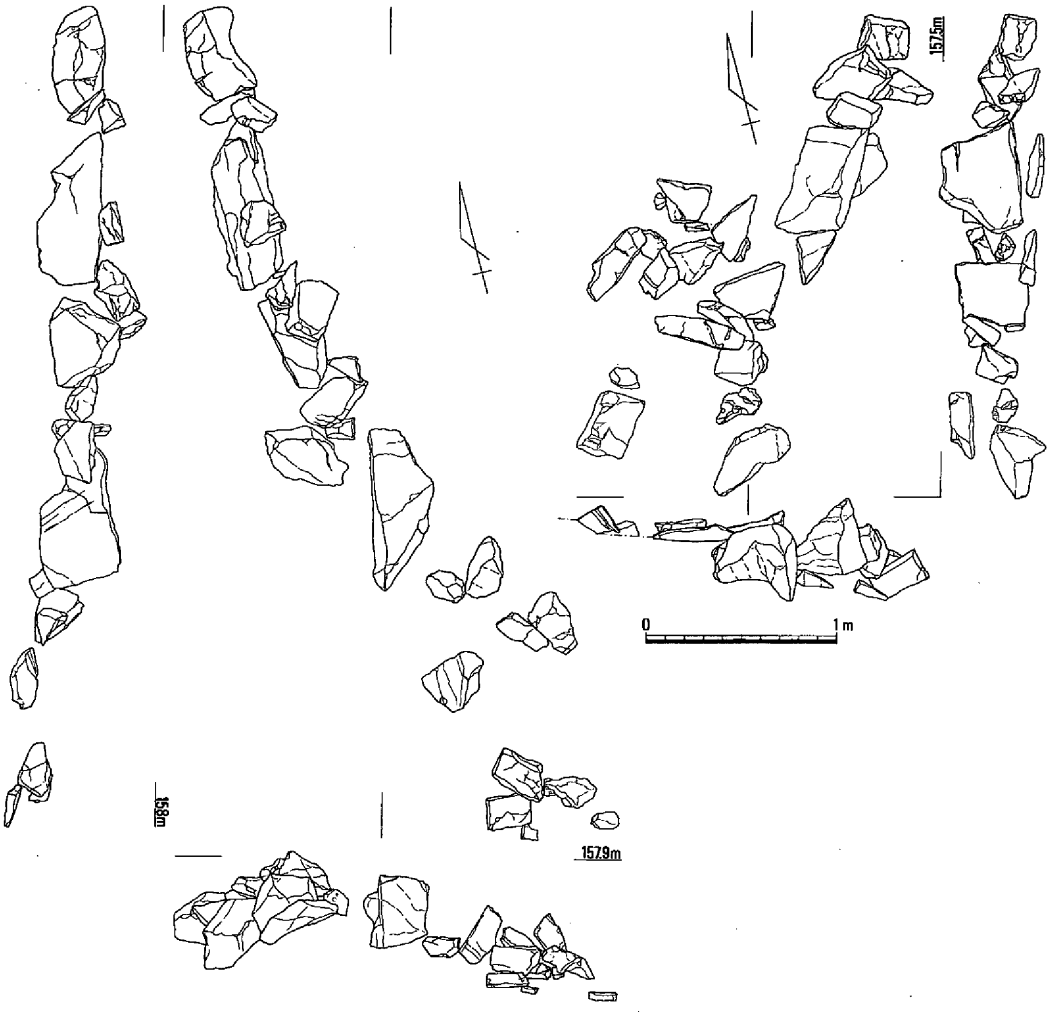
外護列石（第121図）

墳丘に向かって左側の残りが良かったものの、表土を除去した段階で既に石列は露出した状態で、旧表土上に据え置かれていた。石室開口部から、石室開口部と思われる所の両側は破壊されているものの、そこからほぼ墳丘を半周するところまで延びる。右側の石列は盛土中にあり、一部が露出している状態であった。このことから左側の列石も含めて本来は墳丘完成時には表面にはあらわれていなかったと思われる。

用いられた石材は石室石材と同様の玄武岩の角礫であり、石の大きさには大小があるが比較的大きな石材は横長方向にして立てて使う。左右の石列のうち左側の石列は墳丘の裾近くをめぐるが、右側では墳丘前面から高さ１ｍ上の墳丘中程位にある。こうした在り方は石室前側にのみ石垣状に積む６号墳の外護列石とは違うものである。

横穴式石室（第122図）

石室はほぼ全壊状態であり、乱掘後の土砂が流入していた。石室の存在を示すものとしては、わずかに開口部付近と奥壁付近と思われる箇所において、ほぼ現位置を保っていると考えられる状況で検出できた側壁の基底石のみである。この内奥壁部の石材は長さ80㎝、幅70㎝の横長に用いる。やや石室内側に傾いている。石室開口部分のものは長さ１ｍ、幅0.6ｍの横長である。そのほかにある床面上の石材は側壁材が倒壊したものと考えられる。これらの石材の大きさは当古墳群中最大のものであ



第121図　墳丘外護列石（S＝1：40）

り、石室規模もそれに応じて最大級ではなかったかと思われる。現位置を保つ二つの基底石から推定できる石室規模は、長さ７ｍ、幅1.1ｍ程であろう。石室床面から墳丘頂までは1.7ｍである。石室の主軸はＮ－６°－Ｅ位であろうか、ほぼ南に開口したと思われる。

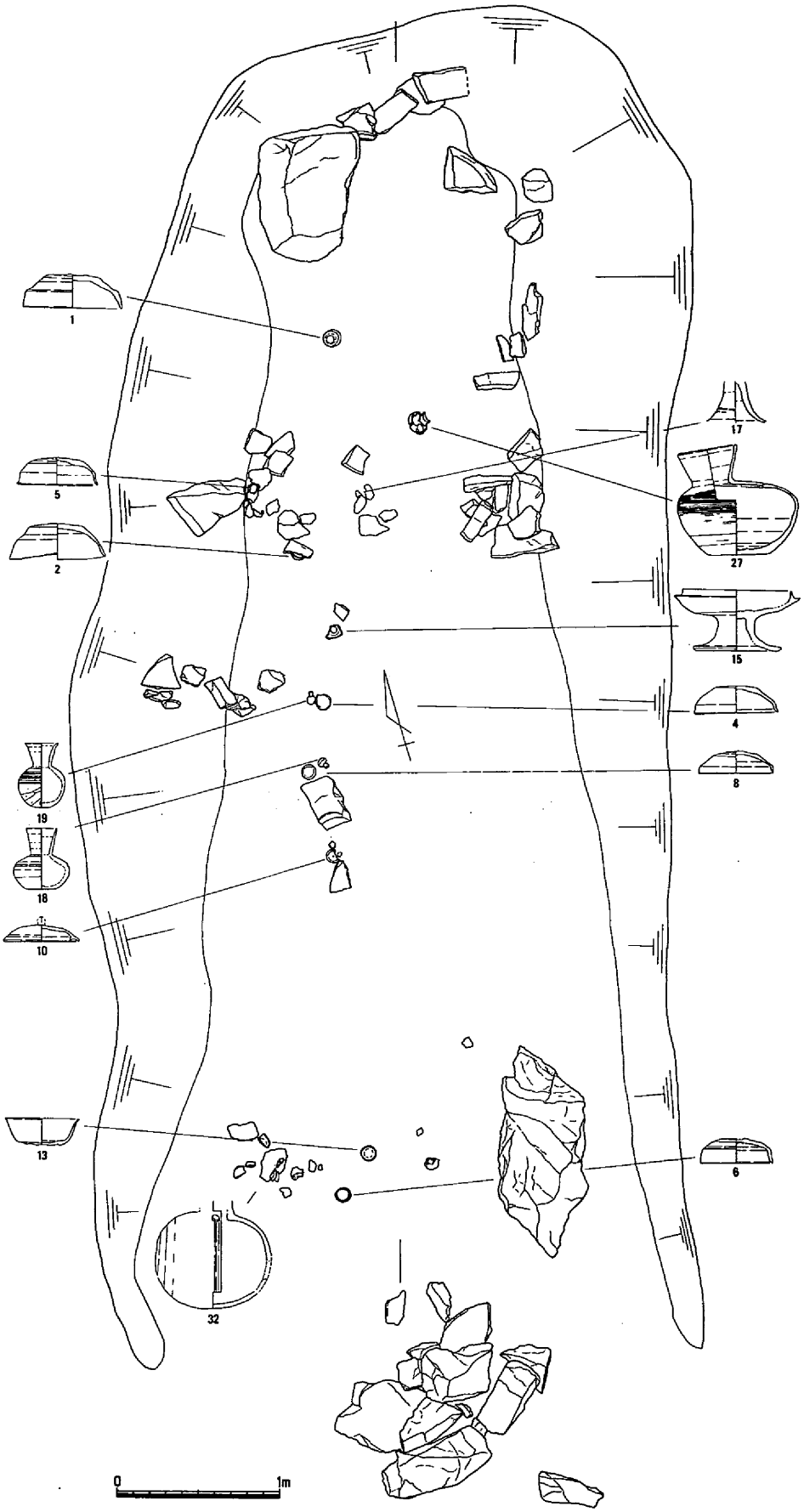
床面の状況（第122図）

石室床面は１面で概ね墓壙底の基盤層上を利用するが、奥から３ｍあたりより石室開口部にかけては旧表土上にある。

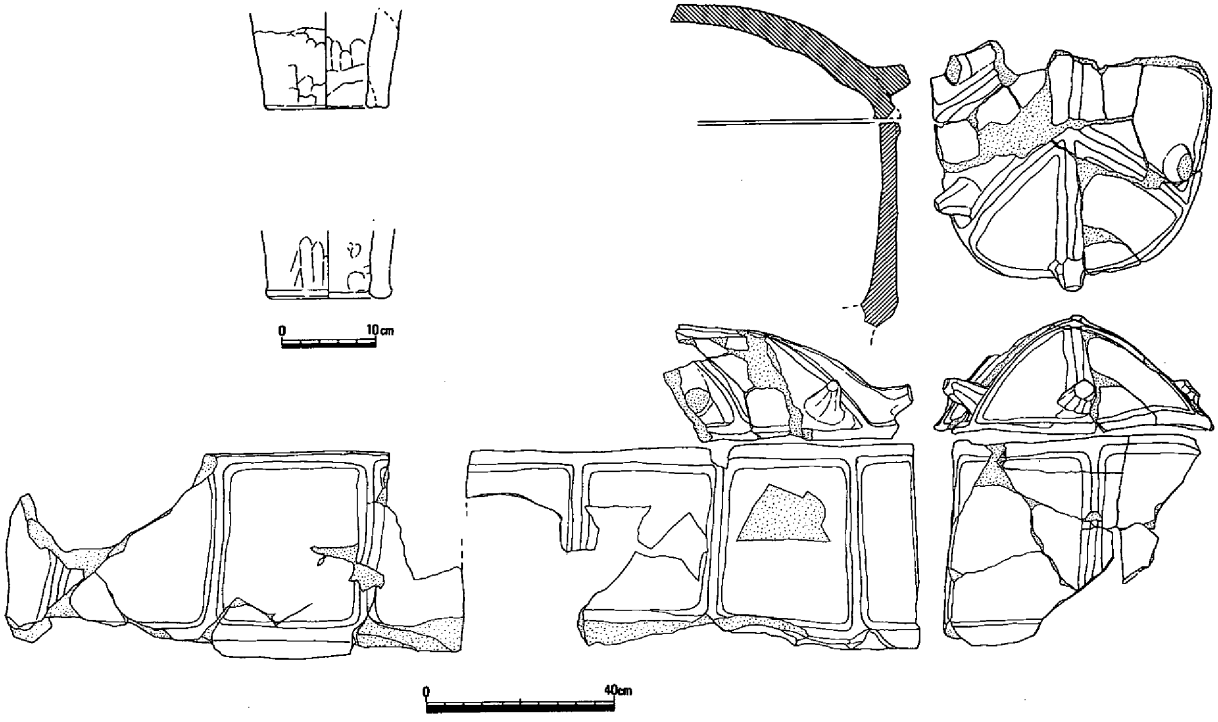
出土遺物のうち大部分は乱掘後の流入土および墳丘下の斜面にかき出された土の中に入っており、床面に残った遺物はごくわずかであり、しかもまばらな状況であった。床面上の土器は、現位置であるとすると、その位置から右側壁沿いに置かれていたようであり、陶棺は石室左壁沿いにあったことが想定できよう。

陶棺もかなりの破片が墳丘内・外に散乱していた。石室内のものは地元の方からの聞き取りの話そのままで、石材抜き取りの際に破壊した陶棺片を片づけたような形で出土している。

この他には、刀子片、金環が石室内埋土から出土している。



第122図　石室実測・床面遺物出土状況（S＝1：40）



第123図　陶棺実測（S＝1：15）

出土遺物（第123～126図）

出土した遺物には須恵器多数、陶棺、刀子片１、金環１がある。

陶棺（第123図）

陶棺は多数の破片となっていたが、土師質亀甲形陶棺が１個体分であったと思われる。推定で身部の長さ190m、幅が約52cm、身部高44cmとやや小形である。蓋部の突起は瘤状で斜め上方に真っ直ぐのびる。この突起と突帯は短辺部以外は交わらない。身部の突帯は短辺部２条、長辺部12条の計16条である。脚は２列で計12本であったと思われる。調整はヘラケズリと思われる。

須恵器（１～32）

墳丘外からかなり多くの破片が出土しているが、図示できたのは以下の32点である。

蓋杯（第124図１～13）

１から７は杯Ｈの蓋である。８・９は壷の蓋の可能性もある。10から13は杯Ｇである。法量・形態から次の４類に分かれる。

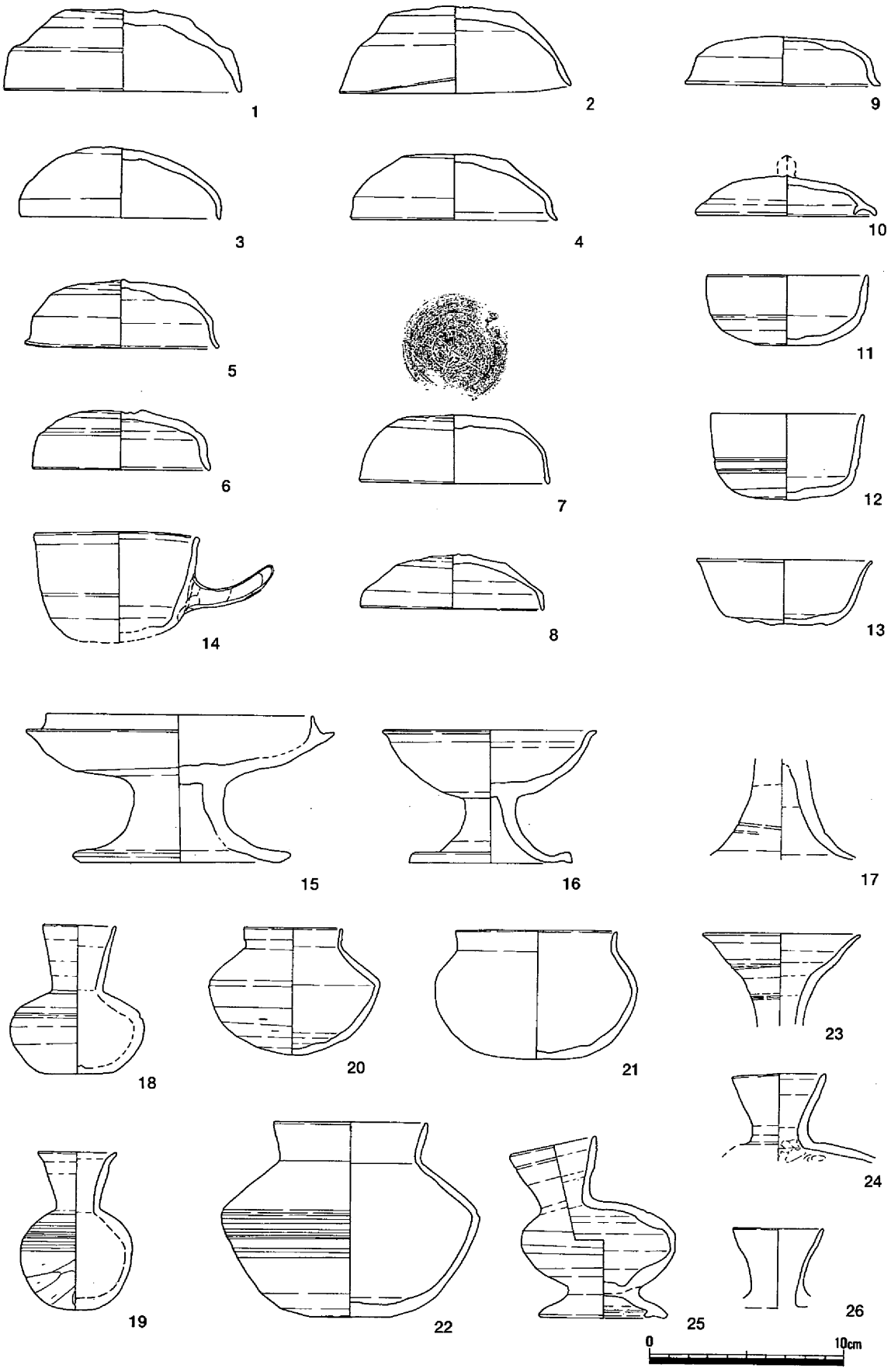
１類（１・２）　口径が12cm程で、器高は4.3cm以上である。天井部の調整はヘラ切り後未調整である。

２類（３・４）　口径がおおよそ10～10.5cm、器高3.6cm程であり、天井部の調整については１類と同様である。

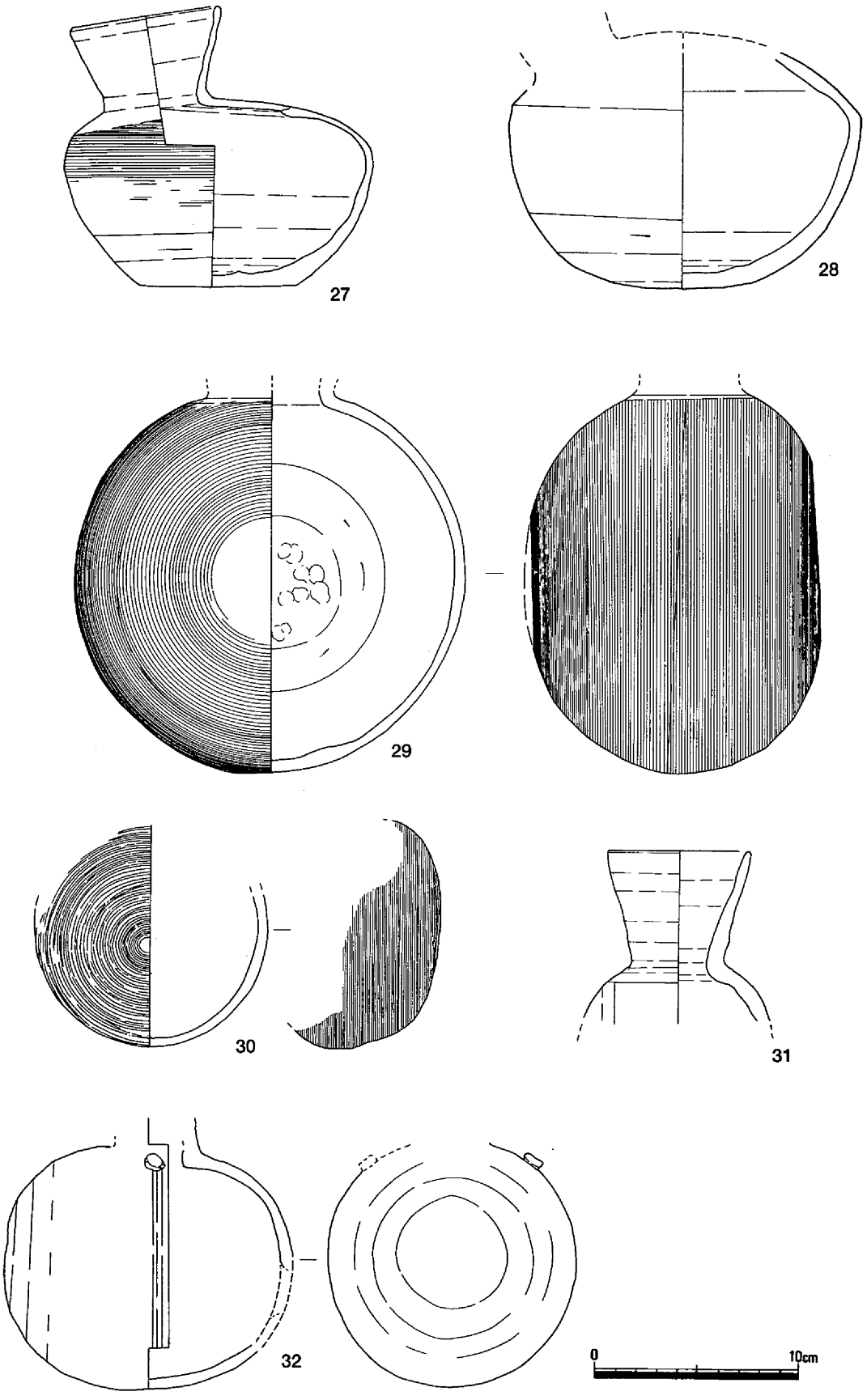
３類（５～７）　口径が９cm、器高は３cm程である。天井部の調整は１・２類と同様である。

４類（10～13）　杯Ｇと蓋である。11・12は体部と底部の境に１～２条の沈線がめぐり、底部はヘラ切り後ナデによって仕上げられる。

その他の器種（第124・125図14～32）

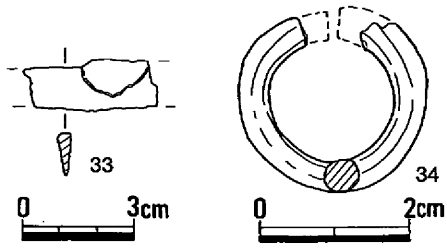


第124図　遺物実測(1)



第125図　遺物実測(2)

14は把手付きの須恵器椀である。形態的には土師器に近いもので、把手の断面形状は方形である。15～17は短脚の有蓋高杯と無蓋高杯である。18～22は壷類である。18・19はミニチュアの直口壷、20は短頸壷である。23は瓶の頸部から口縁部にかけての破片で、通常のものよりやや小形である。24～28は平瓶である。24～26はミニチュアといえ、なかでも25は高台のつくもので例は少ない。29～32は提瓶である。29・30はともに体部全てにカキメを施す。30は29のちょうど半分の小形品であり、32は樽状の体部で肩部にボタン状の飾りがつく。



第126図　遺物実測(3)

刀子（33）　茎部と切先を欠損するが、関部は背部の片側のみである。

耳環（34）　抉部を欠くほかは遺存状況は良好な銅芯金張りの金環である。直径は左右2.5cmで厚さ上下は0.4cm、左右が0.45cmで、重量は7.19ｇを測る。

小結

２号墳は本古墳群中で最大の墳丘規模を誇り、横穴式石室についてもほとんど破壊されていたものの使用されていた石材の大きさも最も大きく、石室の復元値も最大級であった。またＣ２支群のなかで唯一陶棺を内蔵しており、Ｂ支群の７号墳とともに陶棺被葬者の階層性を示す良好な資料である。

副葬品の多くが墳丘南裾から出土しており逸散したものも多いと思われるが、須恵器の蓋杯の法量と形態からは４類に分類でき、出土状況からも石室奥に１類、開口部付近に４類と、奥から数回追葬が行われていたことが明らかであり、またいずれも右に偏っていることから陶棺は左側壁沿いにあったことが想像できる。さらにはミニチュアの須恵器が18～20・23～26・30などと多くみられることも本墳の特徴をなしていると言えよう。

表17　畑ノ平２号墳土器観察表

No	器種	口径	器高	手法の特徴	胎土	焼成	色調
1	蓋	12	4.3	外：ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ、仕上げナデ	1mm以下の黒、白色粒少	不良	灰褐色
2	蓋	11.9	4.5	外：ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.5～1mmの白、黒色粒やや多	硬	灰白色
3	蓋	10.5	3.6	外：ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ	1mm以下の白色粒少	良	灰褐色
4	蓋	10.6	3.4	外：ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ	1mm以下の黒、白色粒多	不良	灰色
5	蓋	9.8	3.6	外：回転ヘラケズリ　内：ヨコナデ	0.5mm以下の白色粒少	硬	灰白色
6	蓋	9	3.1	外：ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ	0.5～2mm以下の白、黒色砂粒多	良	灰白色
7	蓋	9.8	3.6	外：ヘラケズリ　内：ヨコナデ	0.5mm以下の黒、白色粒少	良	灰白色
8	蓋	9.3	2.8		0.2～1mm以下の黒、白色粒少	良	灰色
9	蓋	10	3.5	外：ヘラケズリ　内：ヨコナデ	1mm程の黒色粒多	不良	緑灰色
10	杯G蓋	9.2		外・内：ヨコナデ	0.5～2mm以下の白、黒色砂粒多	良	明灰褐色
11	杯G	8.4	3.6	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.5mm以下の黒、白色粒やや多	良	明灰褐色
12	杯G	7.8	4.5	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.5～2mmの黒色粒多	硬	淡青灰色
13	杯G	9	3.4	外：ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ	0.2～1mm以下の白、黒色粒やや多	硬	灰白色
14	椀	7.9		外・内：ヨコナデ	0.2～1mmの白色砂粒多	不良	灰赤色
15	短脚高杯	13.7	7.7	外：回転ヘラケズリ（右回り）　内：ヨコナデ、仕上げナデ	0.5～1.5mm以下の白、黒色粒少	良	灰褐色
16	短脚高杯	11	6.8	外・内：ヨコナデ	0.5mm以下の砂粒少	不良	灰白色
17	短脚高杯			外・内：ヨコナデ			灰白色
18	壷	3.7	7.7	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.2～1mm白色粒多	良	オリーブ灰色
19	壷	4	8.1	外：上半カキメ、下半ヘラケズリ　内：ヨコナデ	0.5～1.5mmの白色粒極めて多	硬	明オリーブ灰色
20	短頸壷	5	6.6	外：回転ヘラケズリ（右回り）　内：ヨコナデ	0.5～5mmやや多	硬	灰色
21	短頸壷	8.6	6.7	外：底部不整方向ケズリ　内：ヨコナデ、仕上げナデ	1mm以下の白、黒色砂粒少	良	青灰色
22	短頸壷	8.1	10	外：体中央カキメ、底周辺ケズリ後ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.5mm以下の白、黒色粒やや多	良	灰白色
23	瓶	8.1		外・内：ヨコナデ	0.2～1mmの白色粒やや多	硬	灰色
24	平瓶	4.2		外・内：ヨコナデ	0.2～1mmの白、黒色粒多	硬	オリーブ黒色
25	平瓶	4.4	9.3	外・内：ヨコナデ	0.1～0.3mmの黒色粒多、白色粒僅少	硬	暗灰色
26	平瓶	4.6		外・内：ヨコナデ	0.2mmの黒色粒多、白色粒少	硬	灰色
27	平瓶	7.3	13.9	外：カキメ、回転ヘラケズリ（左回り）　内：ヨコナデ	0.5～1.5mmの白色粒少	硬	灰色
28	平瓶			外：底部周辺ケズリ後ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.5～2mmの白色砂粒多	良	灰白色
29	提瓶			外：ヘラ削り後カキメ　内：ヨコナデ	0.2～0.5mmの白、黒色粒僅少	硬	灰白色
30	提瓶			外：ヘラ削り後カキメ　内：ヨコナデ	0.5～1mmの白、黒色粒少	硬	灰色
31	提瓶	6.9		外・内：ヨコナデ	0.5～2mm白色粒多	硬	灰白色
32	横瓶			外：ヘラケズリ　内：ヨコナデ	0.5～4mm白色粒やや多	不良	灰色

（４）畑ノ平３号墳

調査前の状況（第111図）

３号墳はＣ２支群の中では２号墳と４号墳に挟まれており、この２古墳と裾を接するような位置にある。

古墳は、丘陵の南斜面に立地しており、ちょうど傾斜変換点に墳丘の中心がある。墳丘は直径が10ｍ前後の円形で、高さが１ｍ程と、比較的判別しやすい古墳であった。ただし墳丘の中央には小道が通っており、それより斜面下方では墳丘は不明瞭であった。また、墳丘中央部分には長さ５ｍ、幅２ｍ、深さ0.7ｍにわたる乱掘壙が認められた。

墳丘と周堀（第127・129図）

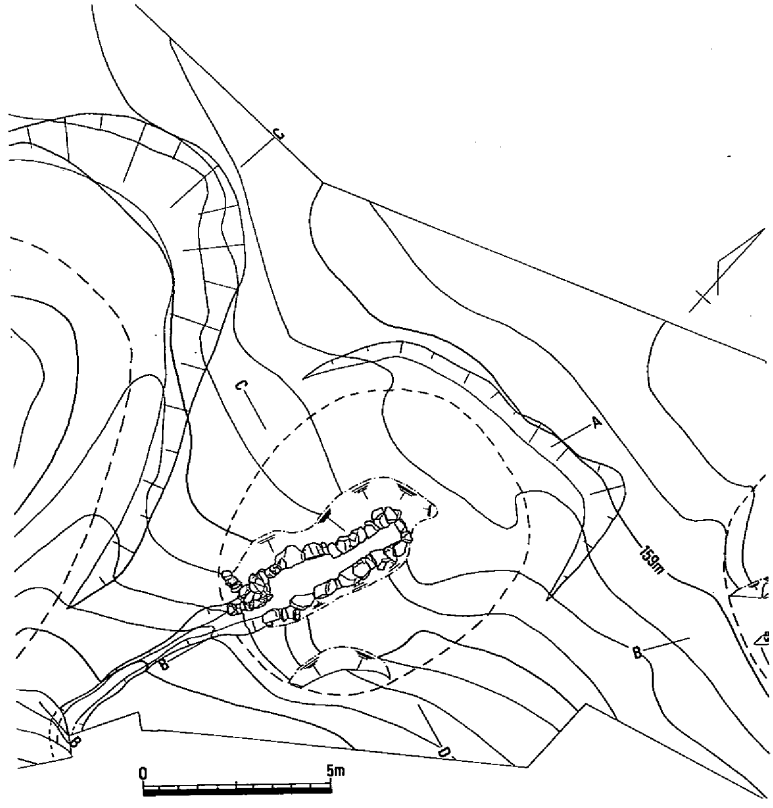
墳形は、古墳の裾といえる傾斜変換点がかなり曖昧であり、かつ墳丘がかなり削平を受けていることに加えて葺石や列石・埴輪といった明瞭な外表施設を持たないために、調査前の状況からは円墳と思われたがやや確実性に欠ける。

墳丘規模は長軸８ｍ、短軸７ｍの楕円形に近い形を呈しており、墳丘高は墳丘南の谷側から測ると1.5ｍであるが、斜面上部から測るとわずかに0.2ｍであった。この墳丘の中心部分には横穴式石室があった。

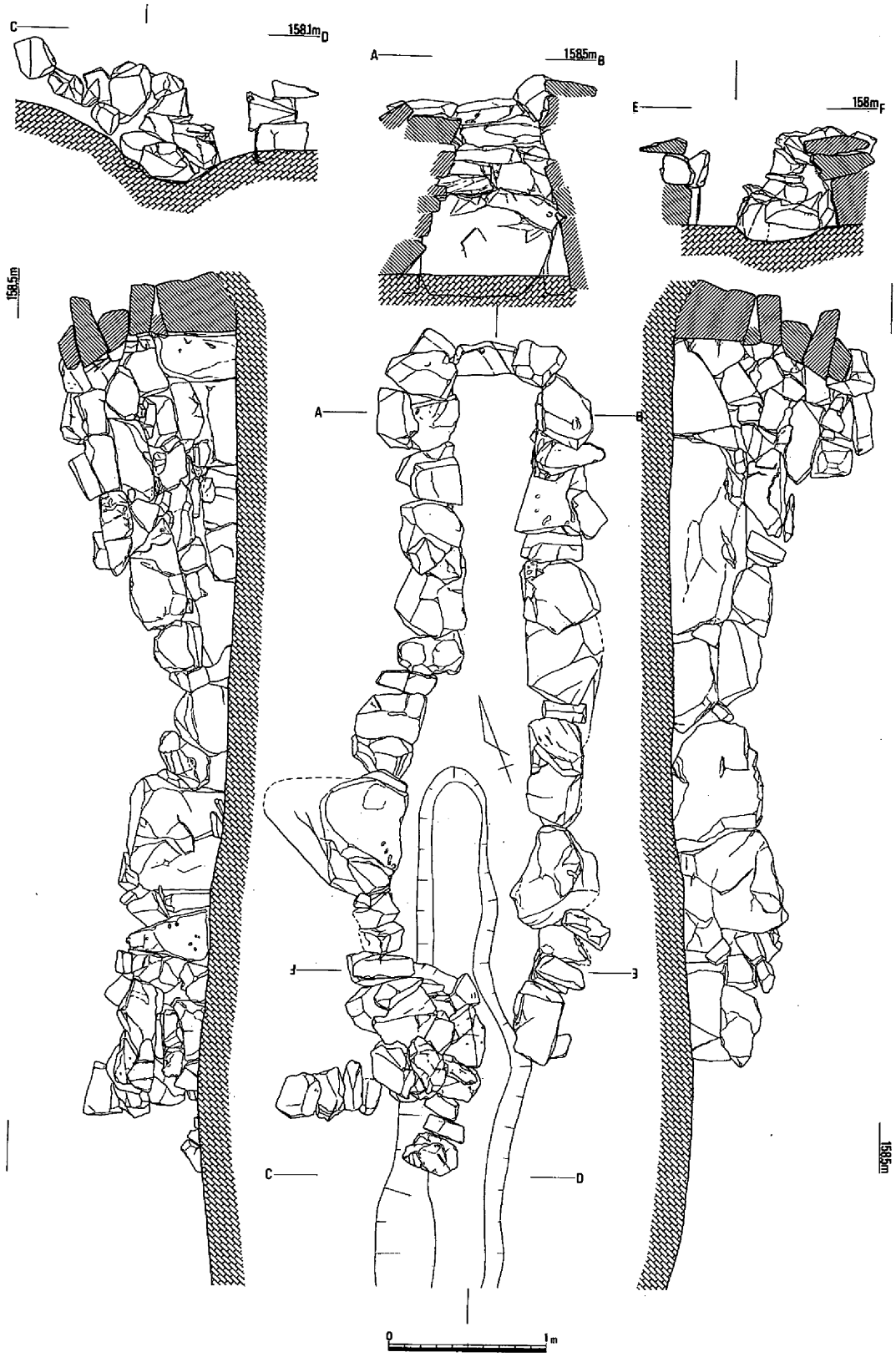
周堀は墳丘の背後に僅かに認められたが、平面形は「コの字状」で断面形は緩やかな皿状である。幅は約２ｍ、深さは墳丘外の肩から測って0.25ｍである。この周堀の形状が墳形を反映しているとすると、３号墳は方墳であった可能性が強い。

墓壙は、トレンチ調査のみで全掘していないが、基盤層から掘り込まれてており、丘陵斜面上が深く谷斜面に向かって抜け、平面形が「コの字状」を呈する。墓壙の規模は奥壁部では深さが1.1ｍ、長さは6.5ｍ、最大幅は上面で2.5ｍを測る。墳丘盛土はほとんど残っていないが墓壙埋土から連続しており、石室石材の積み上げと並行して行われたと考えられる。

墓道は、石室内まで続き奥壁から３ｍの所で終わっていた。墳丘外では、石室から出ると２号墳の周堀に沿って５ｍ程下ったのち左に方向を変えて谷に至ると思われる。墓道の断面形は逆台形状で、幅は平均で40㎝、深さは20㎝である。



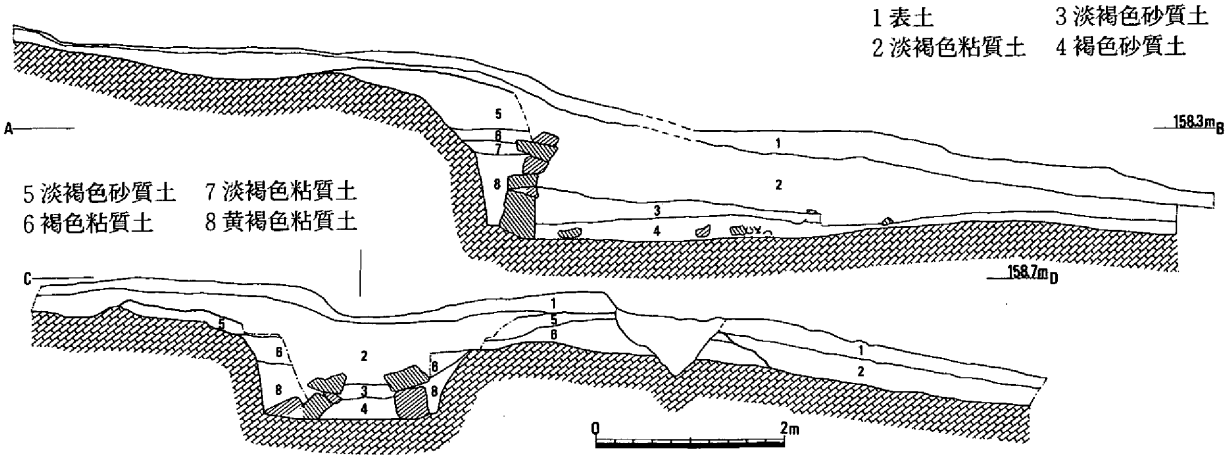
第127図　墳丘測量



第128図　石室実測（S=1：40）

横穴式石室（第128図）

石室は主軸がN-20.5°-Eとほぼ南北主軸で、南に開口する無袖の横穴式石室である。石室規模は



第129図　墳丘土層断面

長さが4.9ｍ、幅1.05ｍであり、平面形は細長い長方形を呈する。

壁面はかなりの土圧を受けており、特に左側壁が内側にせりだしていたものの、奥壁と両側壁の奥壁近くは遺存状況が良く、現存高は1.1ｍを測り、６段の石積みが残る。これに対して奥壁より２ｍの地点から石室開口部にかけては基底石しか残っていなかった。天井石は全くみられなかったが奥壁付近では現存部の上にすぐ天井石がのる可能性が強い。

奥壁部は基底部は高さ0.7ｍ、
幅0.8ｍの１石で占め、右側壁との隙間に柱状の石を埋めるような形である。また左側壁でも奥壁と接する基底石が立てて用いられており、こうした石の配し方は大原町川戸２号墳に類似する。２段目以上は基底石と比べ小形の石を横長に使かう。上に行くに従って奥壁幅は狭くなり５・６段目では１石で構成される。

側壁部では基底石はかなり大型の石を横長にし、それを立てて使う。最も大きい石で長さ130㎝、高さ50㎝もある。石の大きさは奥からしだいに小さくなるが、奥から３ｍ辺で再び大形の石材を使用しており、この部分がちょうど墓道の終点にあたることから石室の何らかの基準になっていると考えられる。おそらくこの辺りで天井石が終わっていたのではないだろうか。２段目以上は１段目よりかなり小形の石を横長に用い小口部を壁面に向けている。右側壁をみると横方向と縦方向が同時に目地が通る。石室石材は全て玄武岩の角礫である。

石室は土圧の影響を受けるものの奥壁や左側壁をみると石室築造時本来の持ち送りの状況を示していると思われる。奥壁では３段目まではほぼ真っ直ぐ立ち上がり、それより上はかなり内傾する。左側壁では80°を測る。

開口部の石室に向かって左側では、石室側壁とは直角方向に、かつ側壁から連続してかなり小ぶりの石材が小口面を外側に向けて１段分が積まれていた。遺存状況は悪いものの外護列石ではないかと考えられる。

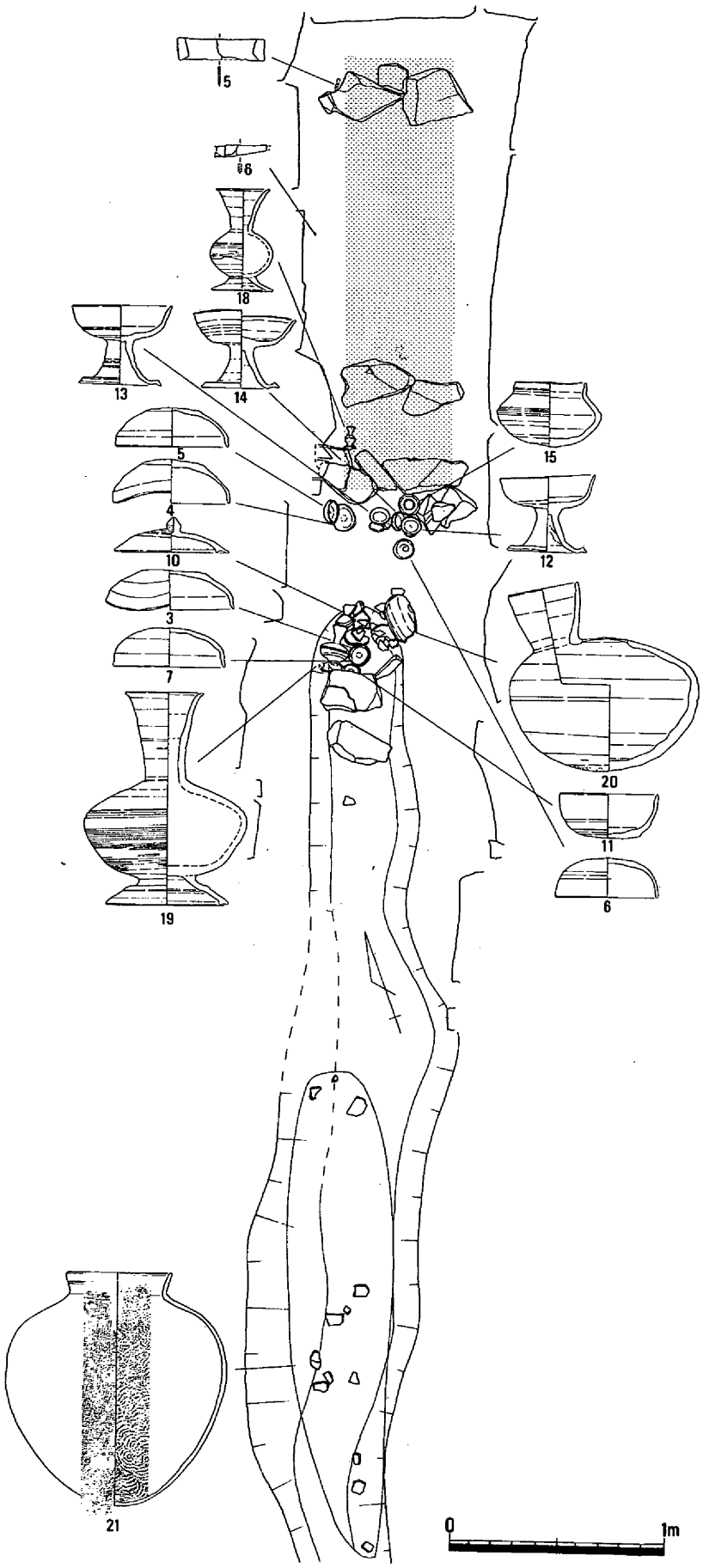
石室内の中央より開口部側では、側壁の転落と思われる石を除去した後に、開口部あたりの床面上において壁石より小形の角礫がみられた。それらは右壁面に接して隙間無く集積しており閉塞施設と考えられる。

床面の状況（第130図）

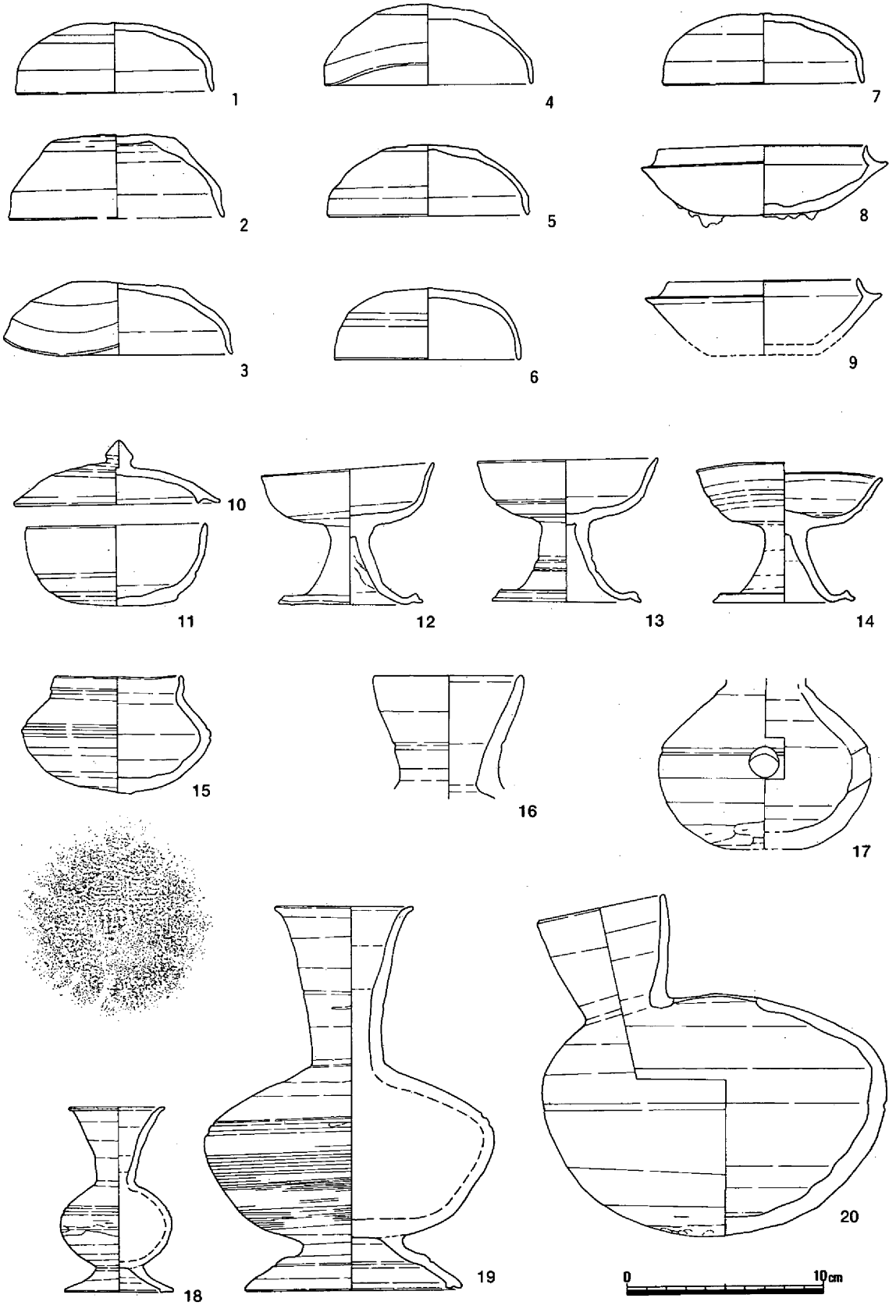
が、それより石室開口部にかけては徐々に床面は上昇してゆき、石室奥との高低差は10㎝程である。この石室奥から３ｍより手前の部分には床面中央に墓道が掘られていた。

石室奥壁を基準にして手前２ｍにかけては、遺物は鉄器２点とミニチュアの台付長頸壷１点のみである。またその部分には棺釘など棺の存在を直接示すものはないが、棺台が存在しており、被葬者を安置した空間である。そうすると２点の鉄器、手鎌と鏃はその位置から棺内に入れられた可能性もある。さらに、奥壁から測って２ｍから４ｍにかけても棺台の可能性のある石が存在する。またこの部分では奥壁から２ｍより３ｍの地点にかけて土器が集中してみられた。この土器群は少し位置が離れており、二つの群として捉えられよう。奥側には杯類３点、短頸壷１点、高杯３点があり（Ａ群）、手前側には杯類４点、台付長頸壷１点、平瓶１点（Ｂ群）がある。

墓道部では石室内からかき出されたと考えられる杯類、瓶類、などの破片とともに須恵器甕片が多くみられた。これらは、２号墳の周堀の内でも３号墳と接するところで出土した甕片と接合できたことから、本来は３号墳の前庭部



第130図　床面遺物出土状況



第131図　遺物実測(1)

ないしは墓道に置かれていたものと考えらる。

出土遺物（第131～133図）

出土した遺物としては、須恵器、鉄器（手鎌・瑕・鉄鏃・刀子）がある。

須恵器（１～21）

杯類（第131図１～11）　法量・形態と技法から次の３類に分類できる。

１類（１～４）　口径が10.7cm以上、器高は3.8cm以上である。天井部にヘラケズリを施すもの１・２と省略するものがある。

２類（５～７）　口径は10.5cm以下で、器高は3.7cm以下である。天井部のヘラケズリは省略され、ヘラ切り後未調整のものである。

３類（10・11）　杯Ｇのセットである。蓋10は内面に短いかえりがつく。杯11は底部と体部との境が段をなしている。

杯８・９は１類の蓋とセットと考えられる。

その他の器種（第131図12～21）

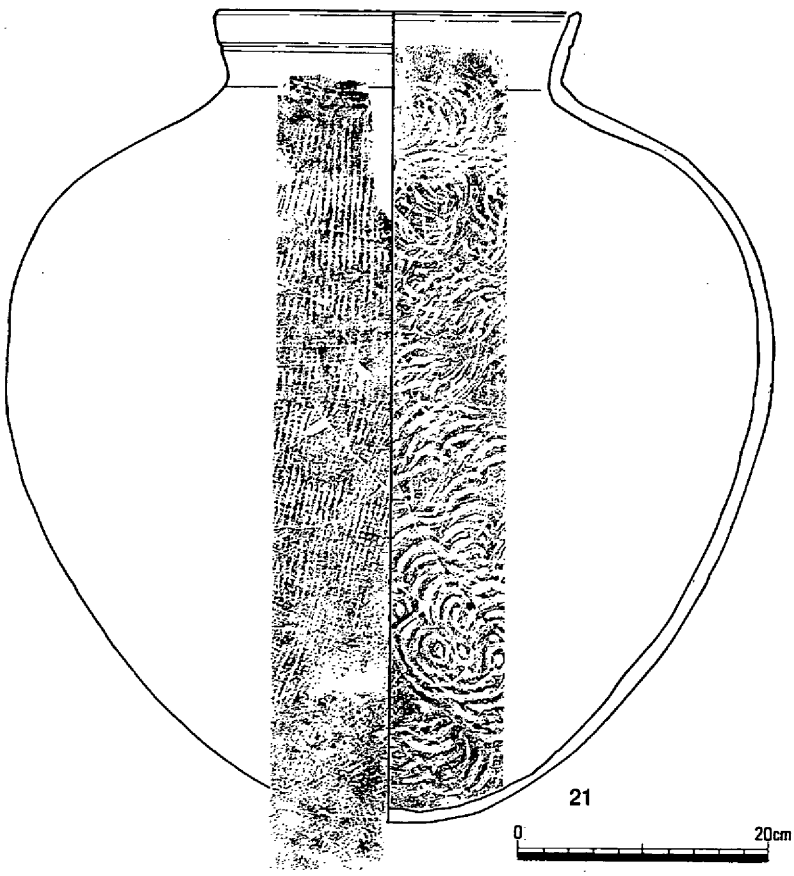
12～14はほぼ同大の小形高杯である。13には杯部と脚部に沈線がめぐる。いずれも脚端を下方に強く引っ張るようにナデている。短頸壷15の底部はヘラ切り後にタタキによって仕上げられている。16は提瓶ないしは平瓶の口縁部であろう。17は瑕の体部である。18・19は大小の長頸壷で18は19の高さのちょうど２分の１になっている。脚端部が内側に肥厚するところまで類似する。ほぼ同形で同工と思えるものである。平瓶20は底部周辺のみをヘラケズリするが、底部はヘラ切り後ナデて終わる。甕21（第132図）は、やや外傾する短い口縁部を持ち、中央に１条の沈線がめぐる。胎土は古墳群中の他の須恵器と比べ特徴的であり、灰白色で大きな砂粒を多く含む。

鉄器（第133図22～26）

棒状を呈する22は、両端が欠損するが鉄鏃の茎部であろう。長頸の柳葉形鏃と思われる。

23も尖根式の柳葉形鏃の鏃身部であろう。

24は鉈の刃部であるが茎部が欠ける。関部の形状も不明であるが一部に木質が残る。



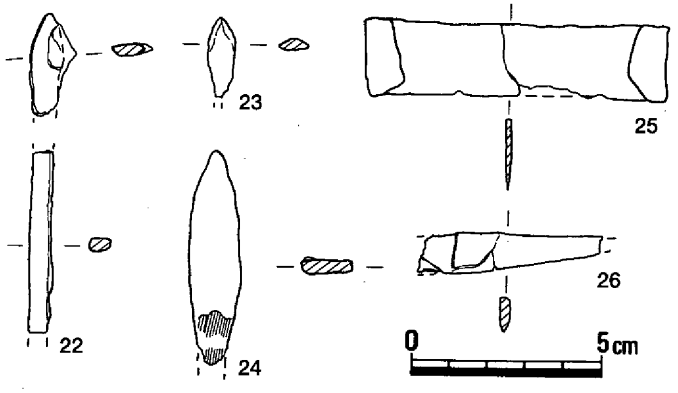
第132図　遺物実測(2)（S=1：6）

表18　畑ノ平３号墳土器観察表

No	器種	口径	器高	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	杯蓋	11.6	3.8	外：回転ヘラケズリ　内：仕上げナデ	0.5～2㎜の黒色粒多	良	淡灰褐色	
2	杯蓋	10.8	4.3	外：回転ヘラケズリ（右）　内：ヨコナデ	0.2～1㎜砂粒僅少	不良	灰白色	
3	杯蓋	11.2	3.8	外：ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ	1㎜程の黒・白粒少	硬	緑灰色	
4	杯蓋	10.7	4.1	外：ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ	0.5～2㎜の黒・白粒極めて多	硬	灰色	
5	杯蓋	10.4	3.6	外：ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ	0.5㎜以下の黒色斑多、白色粒少	硬	青灰色	
6	杯蓋	9.5	4.7	外：ヘラ切り後未調整　内：ヨコナデ	0.2㎜以下の黒・白粒多	不良	灰白色	
7	杯蓋	10.5	3.6	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.2㎜以下の白色粒少	良	灰褐色	
8	杯	12.5	3.6	内：仕上げナデ	0.5㎜以下の黒色極めて多	良	黄灰色	
9	杯	9.6		外・内：ヨコナデ	0.2㎜程の白色粒僅少	硬	灰色	
10	杯G蓋	10.4	3.3	外：回転ヘラケズリ　内：ヨコナデ	0.5㎜程の黒・白色粒極めて多	不良	灰白色	
11	杯G	9.2	4.1	外：ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.5㎜程の黒・白色粒極めて多	不良	灰白色	
12	高杯	8.8	7	外・内：ヨコナデ	0.5～3㎜の白色粒多	良	灰褐色	
13	高杯	8.9	7.4	外：ヨコナデ　内：仕上げナデ	0.2～2㎜程の黒・白色粒多	良	灰褐色	
14	高杯	8.8	7.3	外：ヨコナデ　内：仕上げナデ	0.5~3㎜の白色粒多	良	灰色	
15	短頸壷	5.9	6	外：底部格子叩き	0.5~2㎜の白・黒色粒多	良	灰白色	
19	瓶	7.5		外・内：ヨコナデ	0.5～3㎜の白色粒やや多	不良	灰色	
18	甕			外：回転ヘラケズリ（右）　内：ヨコナデ	0.5～1㎜の黒・白色粒少	良	灰色	
16	長頸壷	4.5	9.5	外・内：ヨコナデ	0.5～4㎜の黒色粒多、白色粒やや多	良	灰白色	
17	長頸壷	7	19.7	外：ヨコナデ、下半カキメ　内：ヨコナデ	0.5～3㎜の黒・白色粒やや多	良	暗青灰色	
20	平瓶	6.4	17.4	外：周辺ケズリ後ヘラ切り後ナデ　内：ヨコナデ	0.5～6㎜の黒・白色粒少	硬	灰色	
21	甕	19.4	42.4	外：タタキ　内：同心円当て具痕	0.5～4㎜の白色粒やや多	不良	にぶい黄色	

25は両側を折り返している。手鎌である。

26は刀子片でやはり切先と茎部が欠ける。25・26は石室奥側の右側壁沿いに置かれており棺内遺物の可能性がある。



第133図　遺物実測(3)

小結

畑ノ平３号墳は墳丘自体は削平によってかなり原形を損ねていたものの石室の遺存状態は良好であり奥壁部分では天井石は無いものの完存に近い状態であり「持ち送り」など石室構築の様子が窺うことができた。また石室奥壁幅を１として石室長が4.8ほどと細長い長方形の無袖式石室であった。

副葬品は主に須恵器であるが、蓋杯の型式は３類に分かれ土器を伴う追葬が１～２回は行われた可能性もある。配置状況からＡ・Ｂ両群があるが両者を比較するには全体の個体数が少なく困難を覚える。Ａ群はすべて完形で高杯などは正立していたのに対し、Ｂ群では大半が破片となっていたことから、Ｂ群は何らかの理由で破壊されたのではないだろうか。Ａ・Ｂ両土器群の前後には棺台として使用された可能性のある板石があり、奥壁に接して置かれた棺とあわせて縦並びに棺が置かれたと思われる。この追葬の棺を入れる際にＢ群の土器が破壊されたとみれよう。もしＡ・Ｂ両群が１回の埋葬によるものなら杯Ｈと杯Ｇの供伴する例として重要なものである。

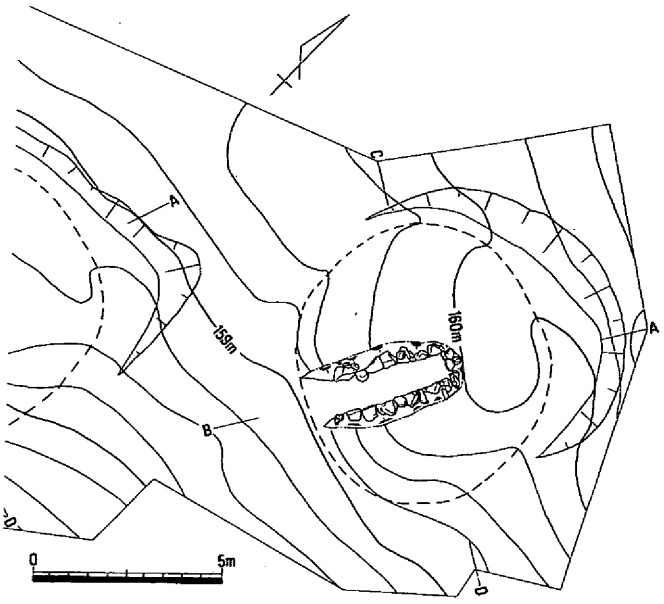
手鎌、刀子、甕といった農耕具類の副葬は岡山県下において例の少ないものであり、さらに須恵器の長頸壷18はミニチュアであるが、19を模倣して作られたとみられ、これらが副葬される経緯として３号墳の被葬者自身が須恵器生産に携わっていたとも考えられる。

（５）畑ノ平４号墳

調査前の状況（第111図）

４号墳は、５号墳の位置する山頂から南西にのびる舌状のなだらかな尾根上にあり、隣接する２・３・６号墳とともにＣ２支群をつくっている。

踏査時には、３・６号墳と同様に墳丘は著しく削平され、座布団状のわずかな高まりがあるのみで、その頂部には天井石を抜き取ったと思われる窪みがあった。また、周堀の痕跡と思われるわずかな窪みが高まりの北側に認められたが、谷に面した南側では墳丘の土砂の流出によって墳端と周堀は不明瞭であった。しかし調査の結果、頂部の窪みに沿って側壁と思われる石が左右に並ぶことわかり、４号墳として調査を行った。



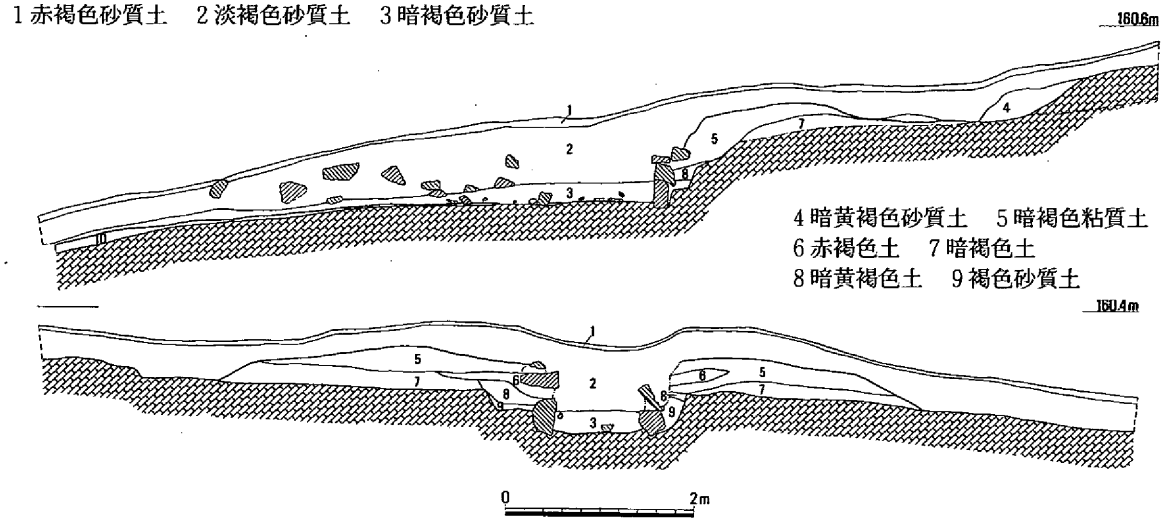
第134図　墳丘測量

墳丘と周堀（第134・135図）

４号墳は、横穴式石室を埋葬施設とした古墳である。墳丘は、盛土の流失と削平によって著しく損なわれている。特に、南東方向の谷に面した墳丘は流出が甚だしく、墳端ラインは不明瞭で周堀もはっきりしていなかった。一方、盛土の流出の少ない北側には幅約1.2ｍ、深さ約0.3ｍの周堀が検出できた。

以上の調査結果から、墳丘規模は長径約7.5ｍ、短径約５ｍに足りず、盛土は暗褐色の旧表土の上に約0.25ｍ残るのみで、墳丘築造時の高さは不明である。

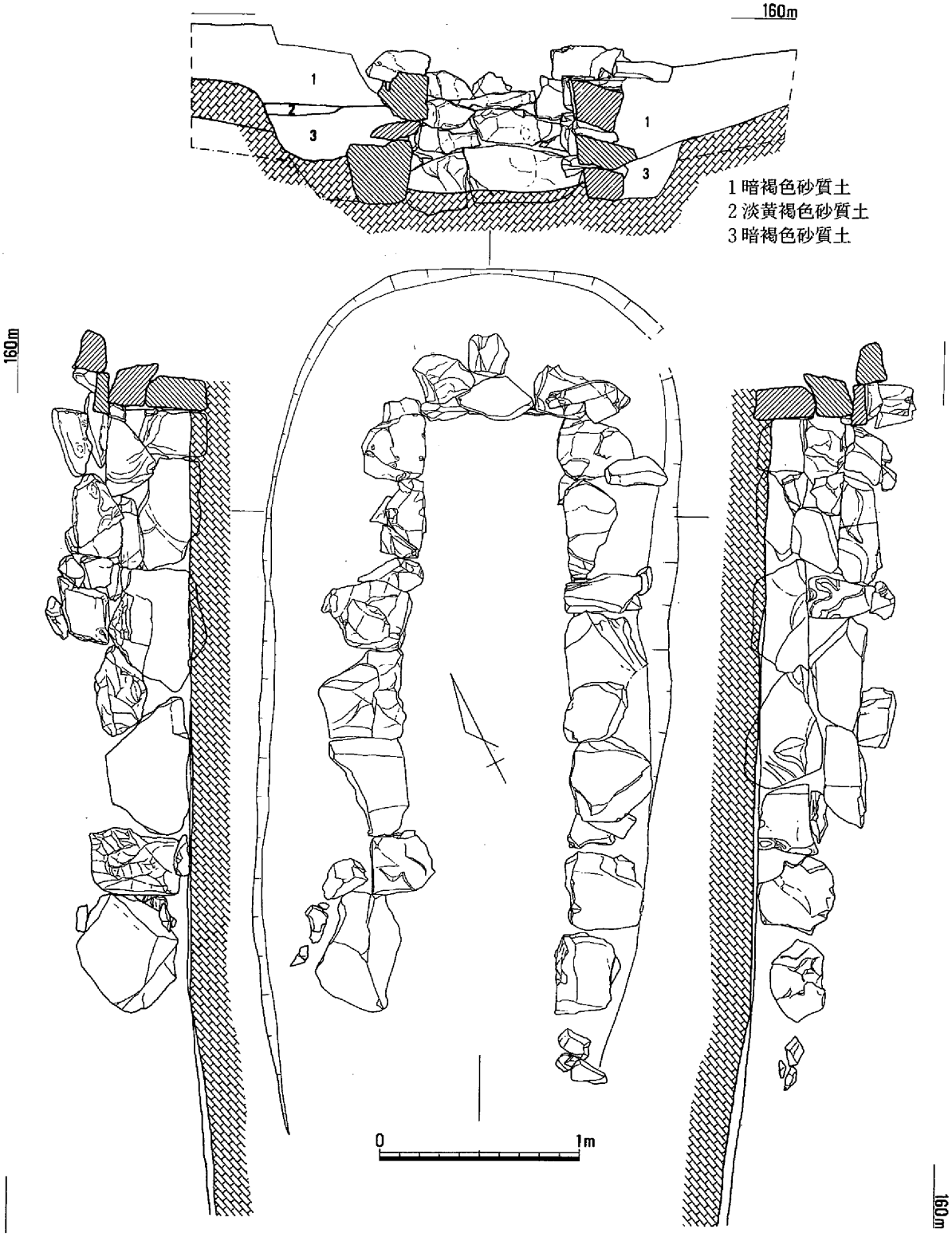
盛土は、石室に近い墳丘中心部ほど細かい層になっており、石室を崩れにくくしていた。



第135図　墳丘土層断面

横穴式石室（第137図）

石室内部は流出した土砂によって完全に埋まっていた。天井石や奥壁、側壁の一部が失われていたため、石室の本来の高さは不明である。現存での石室規模は、全長3.3ｍ、奥壁幅0.8ｍ、石室の最大幅が約0.9ｍの無袖の横穴式石室である。また、石室主軸は石室奥でＮ－30°－Ｅと南に開口している。

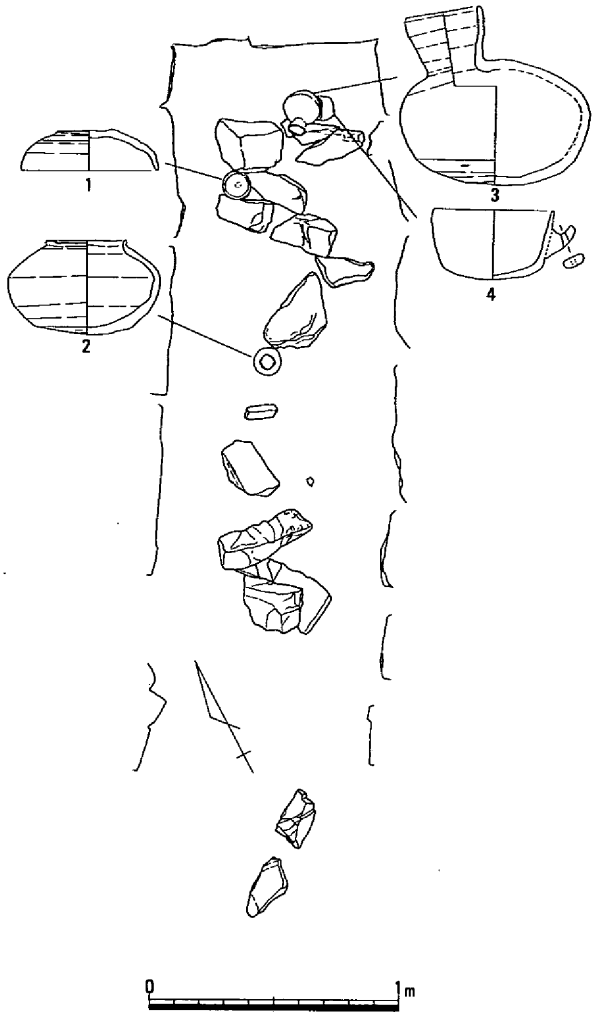


第136図　石室実測（S＝1：30）

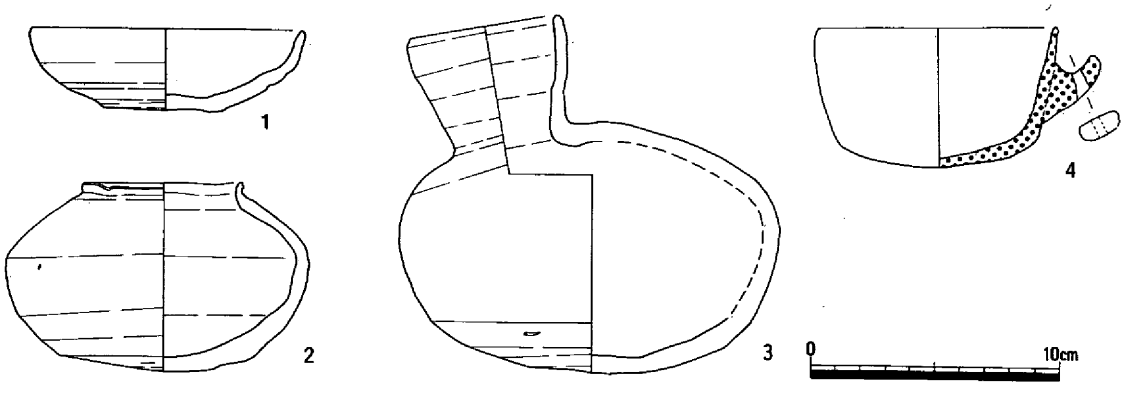
床面は奥壁から約3ｍ地点まではほぼ水平であるが、それより外側では徐々に傾斜している。２・３・６号墳と同様に墓道の存在も考えられたが平・断面ともに確認できなかった。奥壁は、４段が残存し、高さは約0.6ｍである。基底には２個の横長の石を立てて用いており、その上にはやや小ぶりの石を積み重ねている。側壁は、奥壁近くでは３～４段が残存するが、開口部に近づくにつれ遺存状況が極めて悪く、１段分しか残存していない。現存高は、最大で約0.7ｍである。奥壁・側壁ともに１段目では高さをそろえているようであるが、２段目以上では大きさにばらつきが見られ横目地は通っていない。

石材は、いずれも玄武岩の角礫が用いられている。

石室掘り方は、平面形が「コの字状」を呈しており、奥壁部では深さ約0.8ｍ、上面での最大幅は約2.5ｍを測る。埋土は２～３層であり、その上から盛土が行われることから、石室の構築と墳丘の盛土が並行して行われていることが確認できる。



第137図　床面遺物出土状況



第138図　遺物実測

表19　畑ノ平４号墳土器観察表

	器形	口径	器高	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	杯	10.2	3.3	外：周辺ケズリ（左）ヘラ切り後未調整　内：仕上げナデ	0.1～3㎜の白色粒多	硬	淡灰褐色	
2	短頸壺	6.9	7.6	外：ヨコナデ、周辺ケズリ、ヘラ切り未調整	0.5～1㎜の白色粒多	硬	灰白色	
3	平瓶	6.2	14.3	体部下1/5ケズリ後全体をヨコナデ	0.5～5㎜の白色粒極めて多	良	灰色	
4	土師椀	9.7	5.6	内外面：ナデ	1㎜以下の赤・黒・白粒多	不良	淡黄橙色	

遺物の出土状況（第136図）

石室内からは４点の土器（須恵器３点・土師器１点）と鉄滓１点が出土した。遺物は、石室の中央より奥壁にかけて見られた。遺物は全て原位置を保っていると考えられる。

また、遺物とともに石室内に配置された石材は、石室を構築している石材と同様に玄武岩の角礫であり、その配置からこれらの石材は棺台であると思われる。

棺痕跡は検出できなかったが、遺物の在り方、棺台と見られる石材の配置から木棺は縦が２ｍ強、横は、0.6～0.7ｍの大きさと考えられる。石室の規模などから埋葬は１回であろう。

出土遺物（第137図）

出土した遺物には、須恵器３点と土師器１点、鉄滓がある。

杯１は、外面はヘラケズリを行うが、天井部はヘラ切り後に明瞭な調整は見られない。内面はナデ調整を行っている。

短頸壷２は、外面はヘラケズリの後ヨコナデ調整を行っている。底部は１と同様にヘラ切り後は未調整である。口縁部は極めて短く上方にのび、端部は丸く終わる。

平瓶３は、扁球形の体部に対し斜め上方に真っ直ぐ立ち上がる口縁部をもつ。底部外面はヘラケズリを行った後にナデて仕上げる。

土師器椀４は、短く外反する把手の上下に貫通する孔がある。内外面ともにナデ調整を行っている。

土器以外の遺物としては、精錬滓とそれに付着した炉壁片がある。

小結

調査の結果、４号墳は墳丘が削平され、遺存状況は極めて悪かったが、横穴式石室を埋葬主体とする小規模の円墳であることがわかった。

また、石室は南西に開口し、その主軸から２号墳を中心として、３・６号墳と４基で支群をつくっていることが明らかとなった。

出土遺物については、少ないながらも原位置が保たれ、埋葬時の状況を判断する手がかりとなった。

第４節　ま　と　め

（１）古墳群の群構成と変遷

立地と群構成

はじめにも多少述べたが、この古墳群内ではその立地条件によってと埋葬施設の違いにから大きく３つの群に分けることができた。Ａ支群としたものは埋葬施設として竪穴式石室をもつ西大沢２号墳や畑ノ平11号墳と木棺直葬と推定できる西大沢１号墳である。これらは頂部が平坦な尾根を選びその稜線上に位置する。Ｂ・Ｃ支群は３ヶ所の尾根に分かれて存在する横穴式石室を主体とする古墳である。横穴式石室墳は墓壙を穿ち石室を造り、開口部を設けるという性質上当然のことながら尾根斜面に位置する。これら横穴式石室の開口方向には南開口と西開口がある。そこで畑ノ平２・３・４・５・６・10号墳についてみると同じ尾根上にありながらも５・10号墳とそれ以外の古墳とは若干位置が離れるばかりか異なった谷に石室が開口しており、それぞれを別の群に分けて考える必要がある。

これに加えて横穴式石室墳のうちの数基からは墓道が検出されており、この復元作業が群構成の分析に１つの手がかりを与えてくれている。

横穴式石室墳のうちで墓道が検出された古墳としては１・３・５・６・７・10号墳がある。墓道は浅い溝状の掘り込みであり、いずれも石室開口部からわずかの範囲でしか確認できなかったものの、３・７・10号墳のように一部には石室内に入り込んでいるものもあった。石室からみると開口部から延長方向に真っ直ぐに伸びて谷底へと続いていたと推測できる。こうした墓道は本来は集落より至る道として古墳築造や埋葬時または追善供養などに用いられた重要な意味を持つものであろう。

つまりこれらの古墳は谷部を走る墓道群によって有機的に結合していたと考えられるのである。のちの茂平城が築造された位置は、勝間田の平野部と勝北町の平野部の分岐点にあたり、そのどちらかから進入してきた墓道は東に折れ茂平城の北を通り、やがて２つの谷に分岐して進入する。それぞれ

表20　調査古墳一覧

	古墳名	墳形	墳丘規模	埋葬施設	袖部形式	規模（m）		石室主軸	出土遺物								
			(m)			全長	奥壁幅		馬具	刀	鉄鏃	農工具	耳環	玉類	釘	鉄滓	陶棺
A支群	西大沢１号墳		7.5×8	木棺直葬？													
	西大沢２号墳	円	11.5	竪穴式石室				N−70°−E									
	畑ノ平11号墳	円	13〜14.5	竪穴式石室				N−80°−E									
B支群	畑ノ平５号墳	円	11	横穴式石室	右袖	5.7	1.35	N−85°−E	●	●	●	●	●		●	●	
	畑ノ平10号墳	円	9.5×8.5	横穴式石室	無袖	5.7	0.85	N−72°−E			●	●	●			●	
	畑ノ平７号墳	方	10	横穴式石室	無袖	7	1.25	N−30°−E			●	●	●	●		●	●
	畑ノ平８号墳	方	7×5	横穴式石室	無袖	3.3	0.8	N−15°−E					●				
	畑ノ平９号墳	円	9	横穴式石室	無袖	5.5	1.1	N−18°−E					●		●		
C支群	畑ノ平１号墳	円	12	横穴式石室	無袖	6.2	1.4	N−85°−E		●	●	●	●				
	畑ノ平６号墳	円	5〜6	横穴式石室	無袖	3.6	1.1	N−20°−E				●	●	●		●	
	畑ノ平２号墳	円	10.5×14	横穴式石室	無袖	7〜	1〜					●	●				●
	畑ノ平３号墳	円	8×7	横穴式石室	無袖	4.9	1.05	N−20.5−E				●					
	畑ノ平４号墳	方	7.5×6.5	横穴式石室	無袖	3.3	0.8	N−30°−E								●	
	土壙墓			土壙		2.2	0.5	N−84°−E									

に道が分岐したのちに直進した幹道の先には１・５号墳が位置している。Ｂ支群とした古墳は５号墳に到る道から分かれる10・７・８・９号墳があり、Ｃ支群は６・２・３・４号墳が１号墳への幹道から分かれた枝道の先にあると思われる。さらにＢ・Ｃ２つの群は谷の東側にあるＢ１支群（畑ノ平５・10号墳）、Ｃ１支群（畑ノ平１号墳）と西側にあるＢ２支群（畑ノ平７・８・９号墳）、Ｃ２支群（畑ノ平６・２・３・４号墳）とに分けられる。

横穴式石室墳であるＢ・Ｃ支群とＡ支群の古墳とは極めて近接しており時間的にもそう隔たりがない可能性もある。そこで両者は密接に結びついていたとみることができよう。

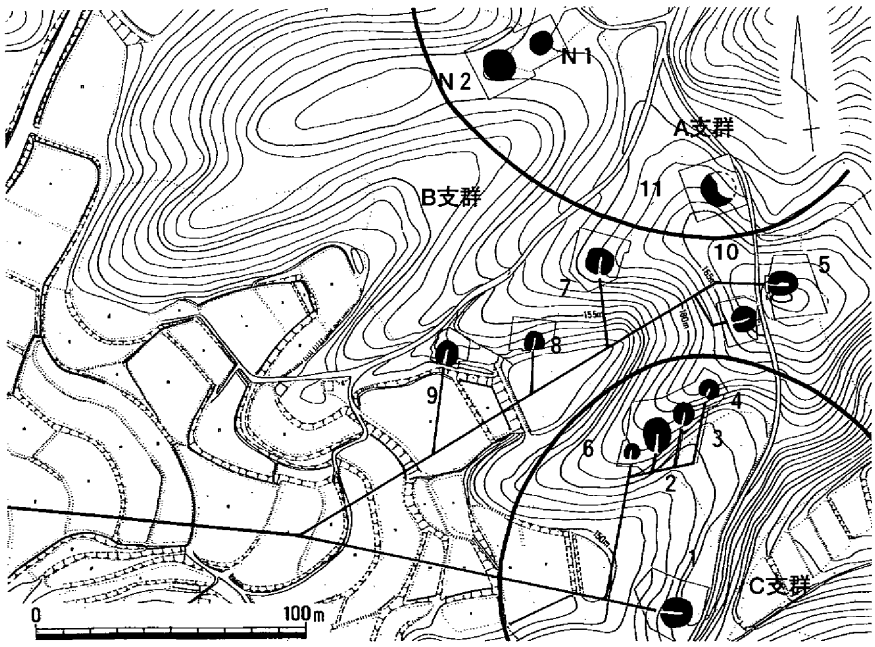
このようにして墓道の復元や立地条件によって５群にわけられた各古墳についての時間的な関係についてを明らかにするために須恵器の検討を行う。

（２）須恵器について

先ず、古墳の編年の前提作業として、須恵器の中で最も量的に多くかつ時間的な変化を反映しやすい蓋杯類を中心に検討を加える[1]。ただ５世紀から６世紀後半の美作地域の須恵器編年については既に小郷利幸が論じているため[2]、ここでは簡単に触れる程度とし、畑ノ平古墳群における横穴式石室導入期以降のものを主に扱うことにする。

はじめにＡ支群からいくつか須恵器が出土しており、西大沢１号墳のものは美作編年のⅡからⅢ期、陶邑編年[3]のＴＫ23型式からＴＫ47型式にかけての特徴を持つ。西大沢２号墳の杯は美作編年のⅡ期、陶邑のＴＫ47型式に相当する。また土壙墓の蓋杯に関しては形態的にはＴＫ10型式の特徴をもつが径は小さく、ヘラケズリも天井部と底部にわずかな範囲がみられる程度である。小郷は長畝山北５号墳の第２主体の須恵器について言及[4]し、ＴＫ23・47期に在地的要素が強いものが現れ、陶邑的なものと共存する場合があるとしている。土壙墓の須恵器は、須恵器生産の第２の画期のなかでこの周辺の地域に成立した窯と違った系譜をもつ、在地伝統的スタイルをとるものと理解できよう。

次に横穴式石室から出土した杯類には杯Ｈと杯Ｇがあり、それぞれ法量と形態や技法から次の11類



Ｎ１・２は西大沢古墳群
１～11畑ノ平古墳群

第139図　墓道復元図

に分けて考えることができる。

１類は蓋の口径が15cm程にあり、高さは4.4cmである。口縁部はやや内傾して真直ぐに立ち上がり、端部は丸く収める。杯身は口径13.5cm、高さ4.5cm以上である。蓋杯ともに丁寧なヘラケズリ（右回り）が行われている。５号墳の１類の蓋杯と、１号墳の１類の蓋がこれに相当する。

２類は蓋の口径が14cm台、高さ４cm台であり、杯身は口径が12.5～13cmの間にあり、高さは4.5～5cmである。５号墳の２類、１号墳の２類の蓋、１・２類の杯身がこれに相当する。１類と比べ法量とヘラケズリの範囲に縮小化がみられる。さらにこの類とほぼ同じ法量を示しながら天井部・底部の調整にヘラケズリが省略されナデもしくは顕著な調整を行わないものがある。１号墳の蓋２・３類、杯身３類と10号墳の１類の蓋杯がこれにあたる。

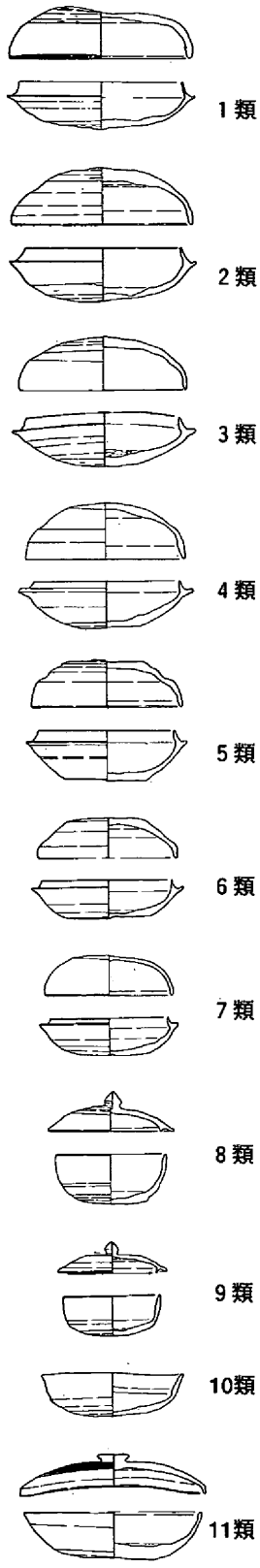
３類は蓋の口径が13cm台、器高が４～５cmの間にあり、杯身の口径は12cmあまり、器高が4.5cm程である。天井部及び底部は回転ヘラケズリがみられる。１号墳の蓋４類と杯身４類、５号墳の蓋２類（８～12）と杯身２類（15・16・17）と、10号墳の２類の蓋がこれにあたる。

４類は蓋の口径が12～13cm、器高４～4.6cm程で、杯身は口径11～12cm、器高３～４cmの間にある。天井部と底部の回転ヘラケズリが省略されるものが多い。５号墳の蓋３類と杯身４類が典型である。この類の中では１号墳の蓋４類のうちの21と杯身５類には回転ヘラケズリがみられる。

５類は口径12cm、器高４cm以上の蓋と、口径11cm程、器高４cm前後の身のセットであり、調整には回転ヘラケズリは認められない。７号墳の１類・３類、10号墳の３類、２号墳の１類、６号墳の１類、９号墳の１類が相当する。また10号墳の２類とした杯身４はしっかりした立ち上がりをもち、底部には回転ヘラケズリがみられる。また、２・６・７号墳のものは天井部や底部が半裁円錐台形状をしている。

６類は蓋の口径は11cm前後で、器高が３cm台であり、杯身の口径は10.5cm前後、器高が３cm台で収まる。７号墳の２類、４類、２号墳の２類、３号墳の１類、10号墳の４類の一部、６号墳２類、９号墳の２類と４類、５号墳の蓋４類がある。

７類は蓋の口径が10～10.5cm、器高は3.6cm前後であり、杯身の口径は10cm以下、器高が３～3.5cmのものである。調整には回転ヘラケズリはみられず、ヘラ切り後未調整かナデである。７号墳の杯身５類・６類、３号墳の２類、10号墳の４類の一部、６号墳の３類、９号墳の３類がこれに相当する。２号墳の３類はこの類よりさらに小さい。この類は圧倒的に蓋が多いが、蓋とした中には実際は杯として使われたものが多く含まれるとみられる。



第140図　蓋杯分類
（S＝1：8）

８類は天井の中央に宝珠つまみの付く蓋で、内面の返りは先端が口縁部下には出ない。杯底部の調整はヘラ切り後ナデである。３号墳の３類がこれに相当する。

９類は７類と比べさらに法量が縮小化し、口径が10cm以下となっている。蓋が天井部が平坦に近くなる。口縁端部は内湾気味におわる。２号墳の４類と９号墳の６類、10号墳の５類がこれにあたる。

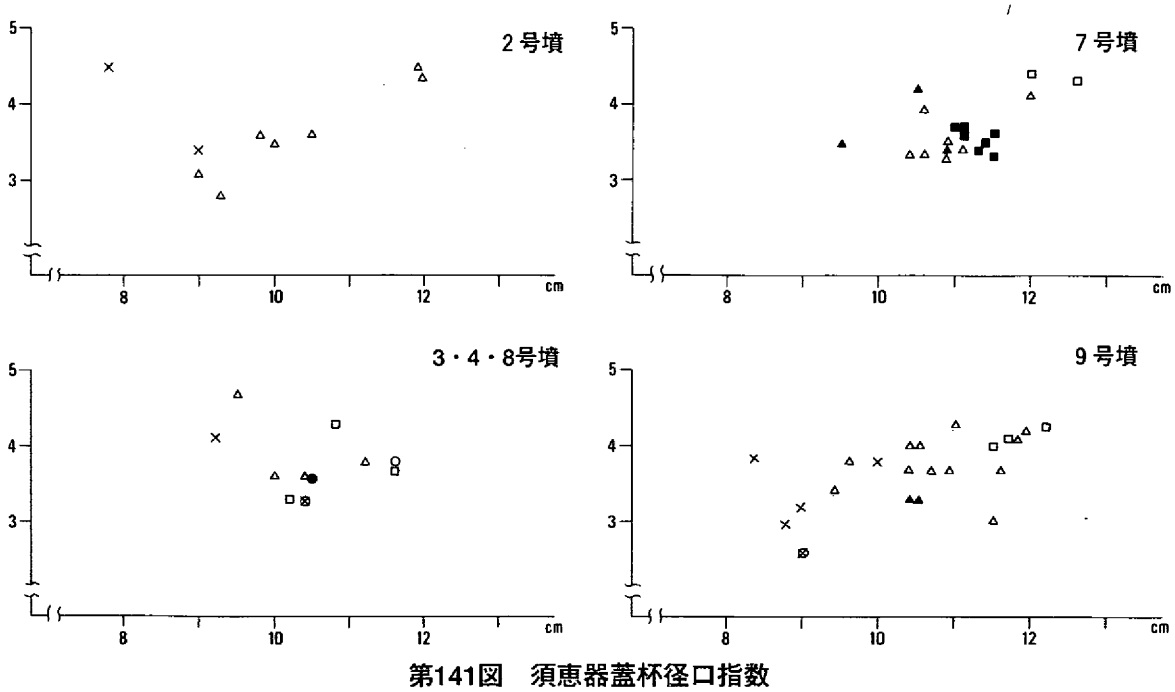
10類はつまみのつく蓋とセットで用いられたとみられる杯で、４号墳の１類と８号墳の１類、９号墳の５類がある。４号墳の杯は蓋と変わらない形態であるが、８号墳の杯は内面の底部と口縁部の境を強く湾曲するほどにナデ、口縁部はやや外反する形態をとる。

11類は杯Ｇで口縁部内面に返りのつかない蓋と身である。９号墳で７類とした27・28のみである。

さてこれらの各類別の変遷であるが、杯Ｈについては回転ヘラケズリの範囲の縮小や省略化への方向をたどるからみて１類から７類への変化は妥当なところであろう。問題となるのは杯Ｈと杯Ｇの関係である。

ところで今現在岡山県内での須恵器編年については陶邑編年に依拠している場合が多い。年代観についてもそれに従って記述しているようである。ただ、立ち上がりのある杯身（杯Ｈ）の消滅については大きく理解が異なっており、杯Ｈの最終段階と思われるものまでＴＫ209型式として、６世紀末から７世紀初頭と記述するようなものまで存在する。畿内においては陶邑においても飛鳥地域においても実際には杯Ｈと杯Ｇはかなりの期間供伴している。陶邑ではＴＫ46型式[5]まで、飛鳥ではⅡの新相の標識である水落遺跡[6]まで存続しており、岡山県においても杯Ｈと杯Ｇが急に切り替わるのでなければ杯Ｈと杯Ｇとの併存を考える必要があろう。むしろ横田美香のいうように杯Ｇの出現が遅れる[7]（少量生産や当然搬入も考えられる）という事実があり、またこの古墳群の７類における蓋と杯の構成比は生産の状況をも反映しているなら杯Ｈの生産量の減少傾向も考える必要がある。つまり蓋を伴わない椀Ｃのような（形態的には杯Ｈ蓋と同じ）杯が６期（７類）以降の杯類の主体となって一定の時間幅をもち、生産が行れたと見られるのである。

蓋杯類のその他の特徴として、１・５号墳において胎土・色調・技法や形態に特徴的な群が複数見



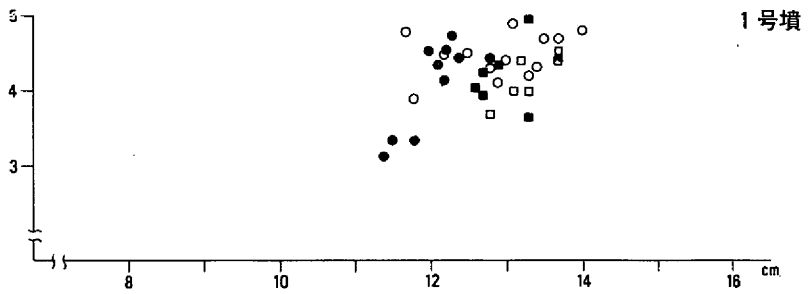
第141図　須恵器蓋杯径口指数

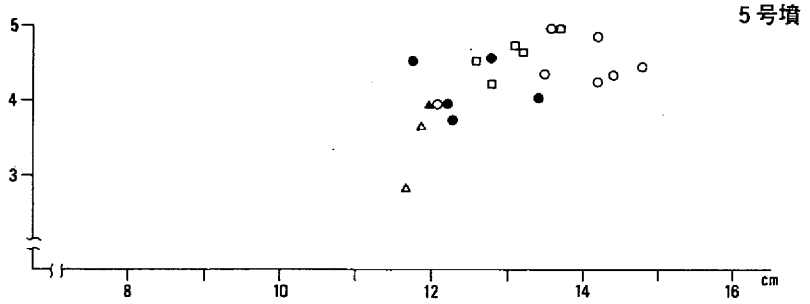
られた。複数の生産地を想定できるものであり、また集落において実際使用されたと思われる残滓のつくものもあった。また、４期以降には焼け歪みのある個体が目立つ。

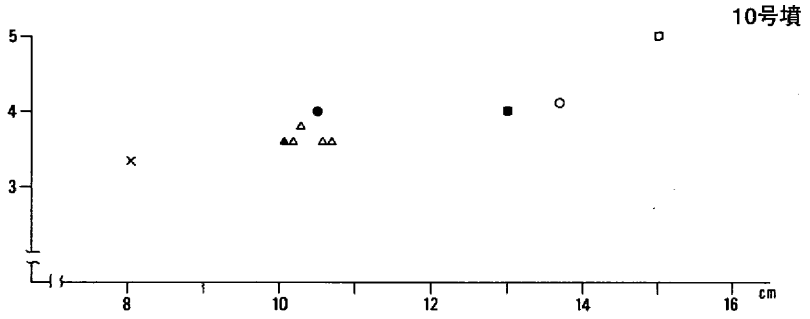
こうした観点から11類に分けたものをその他の器種についても検討を加えて８期に編年する。３・４類は新旧に分かれる可能性が大であるがここでは３期としてまとめている。この編年表は畑ノ平古墳群出土須恵器でも普遍的に存在するものを取り上げ、例外的なもの、個体数の少ないものは省いている。この表に見られない器種である、長脚有蓋高杯・台付壷・装飾須恵器などは吉備全体を通しても限定的の生産され特定首長への配布という形を取ったと思われる。

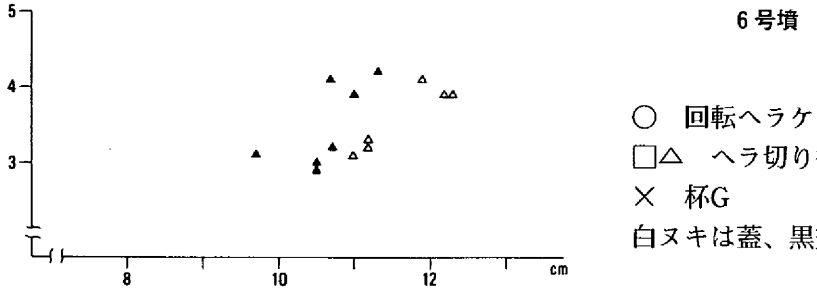
その他に器種については詳細は省くが特徴的な器種の変化についてはおよそ次の通りである。

高杯は３期には３方透かしから２方透かしへと変化し、杯部の装飾も波状文から刺突文になり、それ以降は文様の消失と沈線が段に変わり全体に小型化してゆく過程が追える。脚端の変化も一つの指









○　回転ヘラケズリ
□△　ヘラ切り後末調整、ナデなど
×　杯G
白ヌキは蓋、黒塗りは身

標となるが、端部が外傾する面をもつものから、上下に拡張するものになり、５期以降には特徴的なのは端部を下方に強く引っ張るもので、この古墳群に近在する窯の特色といえ、言い換えるとこの期にこの辺りの窯の小地域色が具現化するといえる。

平瓶は広口壺の体部をもつものが多く、８世紀代の定式化する以前のものは片口の壺と呼びうるものである。体部の回転ヘラケズリは省略化に向かい、ヘラ切り後未調整へと変化する。この古墳群で一般的にみられるものは壺の体部に提瓶の口縁部をつけたものであり、最も古く位置づけられるのは７号墳の32である。この個体の体部には３方に焼成時に付いた他器種の12cm程の円形の影が残る。同様な痕跡は数個体に認められる。その他に、杯Ｈの破片の付着する個体もいくつか見られ、その状況から先の影も杯Ｈの蓋であろう。こうして杯類と平瓶の併行関係が明らかにできた。このような例は他の古墳にもあり、岡山県下のある窯の窯詰めの特徴ではないかと思われる。

第142図　平瓶に付いた杯

広口壺は体部に関しては平瓶と同様の変化をたどるが、口縁端部に独自の変化が追える。１期のものは外面に折り曲げた帯状の突帯がみられ、それが端部を外面に肥厚させるようになり、やがて６期には内上方につまみ上げるようになる。この６期には壺類をはじめとして杯類以外の各器種の調整に回転ヘラケズリが省略されるようになる。

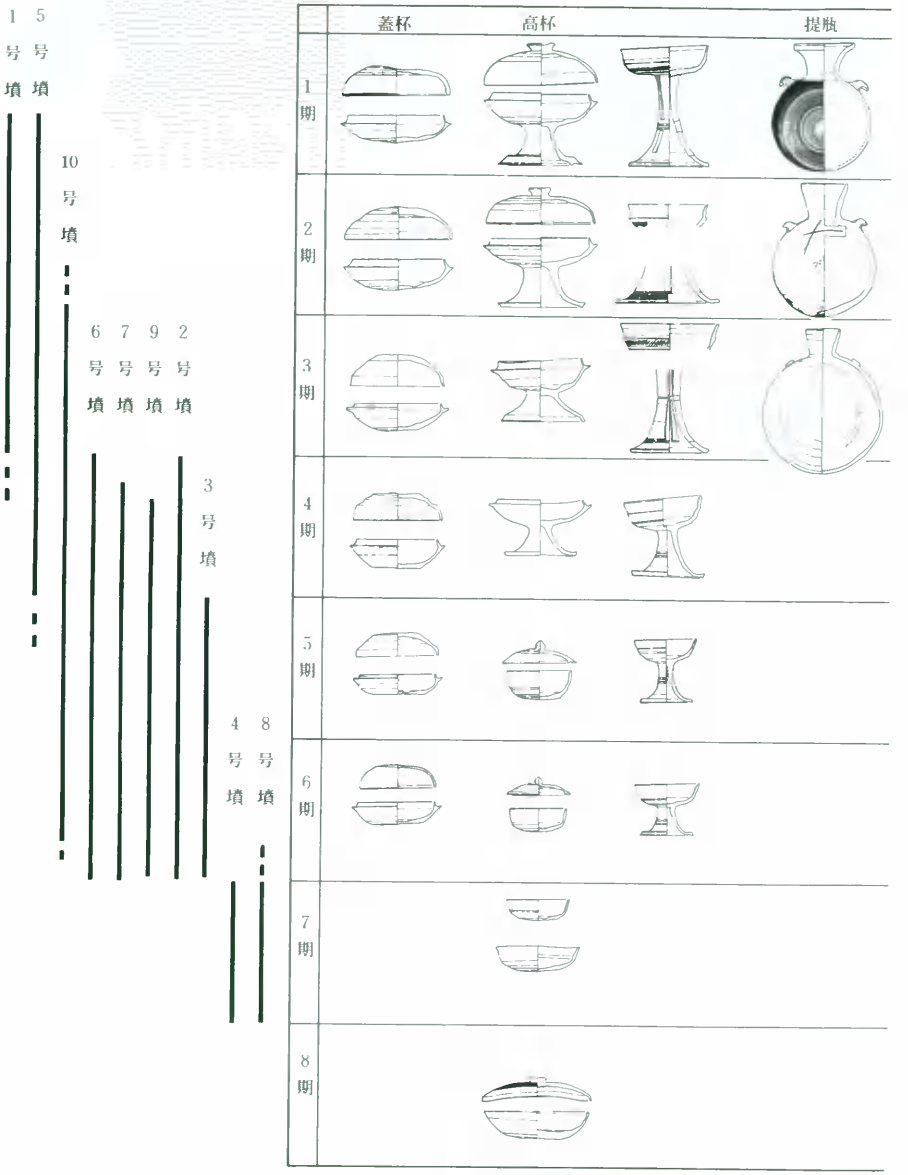
以上の各類を畿内の編年と対比させるなら、１・２期の土器はともに陶邑編年のＴＫ43型式の範疇にあり、なかでも１期は飛鳥寺下層の土器に近いと思われる。３期としてまとめた蓋杯３・４類は陶邑ＴＫ209形式に当たり、飛鳥Ⅰでは小墾田宮ＳＤ50[1]や豊浦寺下層[2]の土器にそれぞれ相当する。５期は陶邑ＴＫ217形式の古段階に、飛鳥Ⅰの中の川原寺下層ＳＤ02[3]から山田寺下層ＳＤ619[4]の土器と類似する。６期はＴＫ217型式の新段階に、飛鳥Ⅰの山田寺整地層から飛鳥池灰褐色層[5]に相当する。７期は飛鳥Ⅱの古相である坂田寺ＳＧ100[6]の時期にあたる。８期は飛鳥Ⅲにほぼ相当すると考えられる。

（３）古墳群の変遷と年代

以上の編年が直ちに古墳の年代及び群中の先後関係を示すものではない。１回の埋葬行為は複数の土器を石室内に持ち込んだと思われ、当然時間的な幅を持つと予想しなければならい。つまり良好な床面の状況があり埋葬時の一括性が明らかであればその中で新しい様相を示す土器をもって年代を決定しなければならない。その点で、10号墳では石室奥壁沿いにありＡ群とした須恵器と鉄鏃数点は出土状況からみて原位置を保っており、初葬時のものと考えてよい。杯類は先の分類の３類から４類を

含むが、最も新しい様相の４類を古墳築造の時期と見なすべきであろう。

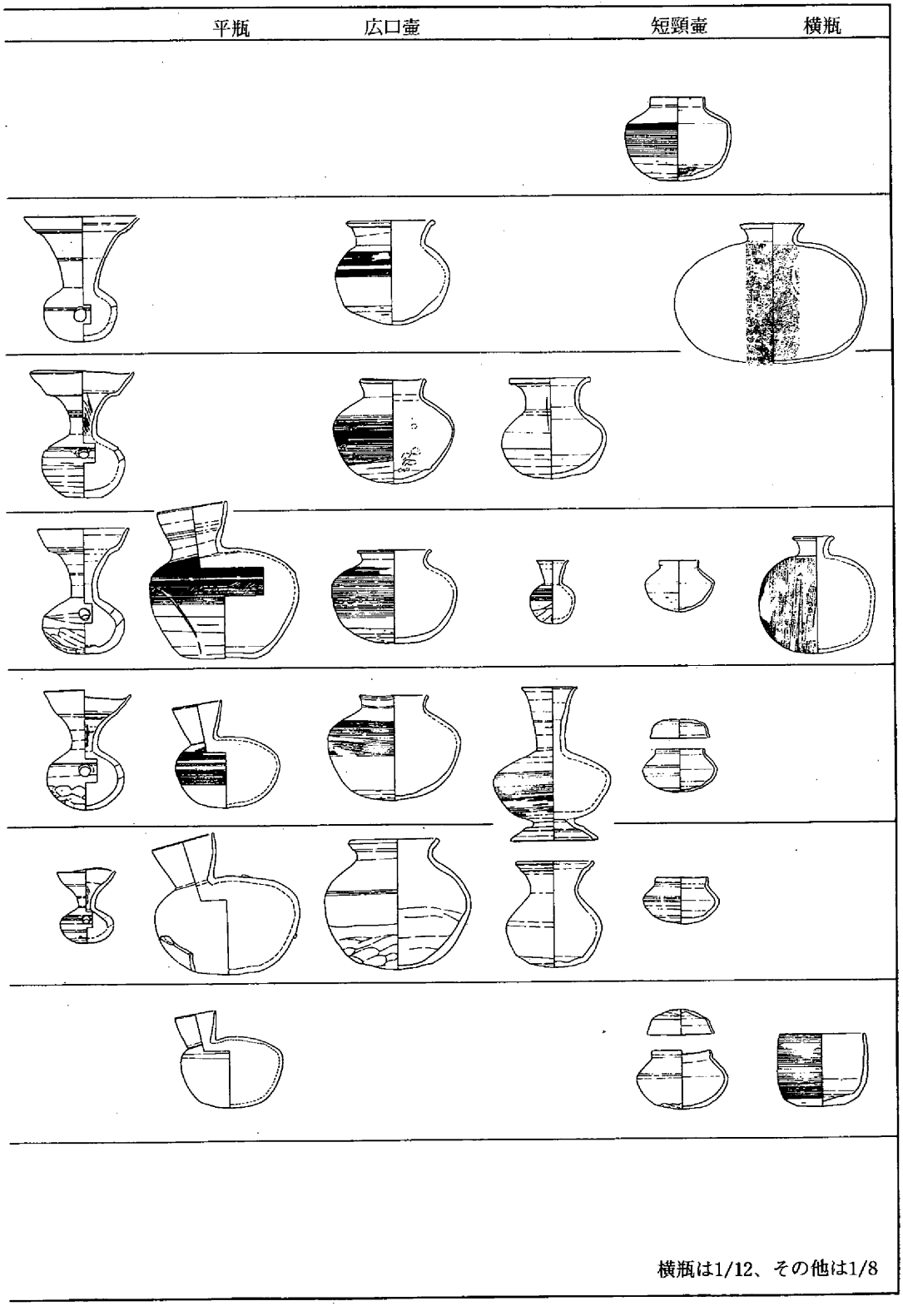
まずＡ支群については埋葬施設と須恵器からして横穴式石室導入以前の古墳であることは間違いない。須恵器の特徴から西大沢１号墳が２号墳にわずかに先行する。そこで11号墳の位置づけであるが埋葬施設について注目すると箱式石棺に近い規模の竪穴式石室であった。美作地域の埋葬施設の変遷



第143図　須恵器編年案図

をまとめた安川豊史[04]によると竪穴式石室はＴＫ208期に出現するとされている。つまり11号墳が最も古くついで西大沢１号墳から２号墳へと尾根の高所から順次築造されていったとみられる。

これら３基は６世紀の初頭まで続くが横穴式石室墳との間には時間の空白がある。それを埋める６世紀中葉の時期のものとしては７号墳付近の土壙墓がある。



このＡ支群とＢ・Ｃ支群が同じ墓域にあるとみるか、また同じ氏族のもであるといえるかについては疑問を差し挟む余地はあるが、この土壙墓を介在として一つの丘陵において５世紀から７世紀にかけて連綿と古墳（墓）が造り続けられているのもまた事実である。そして６世紀前半の時期には何らかの理由で古墳の築造が停止しているのである。

横穴式石室墳の中では先の須恵器の編年から１・５号墳が最も古く１期に位置づけられた。ついで３期には10号墳が築かれる。１・５号墳の追葬のピークは３期にあり、４期にはいる土器は少ない。これとは対照的に２・６・７・９号墳が４期に新たに築造を始め、この古墳群のピークとなる。これは横穴式石室導入を第１の画期とすると、第２の画期といえる。従来より一般的に群集墳の爆発的増大といわれたのはこの期以降の現象の可能性がある。これら４基の古墳に先行する10号墳や、やや後発の３号墳を含めて６期までの追葬がある。しかしこれらの古墳も７期には追葬が終了し、代わって単葬墓の可能性のある４・８号墳の築造が行われている（第３の画期）。

次にこれらの土器の実年代についてであるが、岡山県下での窯跡の詳細な調査は未だに乏しく、また実年代を論じる上で必要な編年についても十分に検討されている段階では無い。そこで陶邑などの他地域の編年との比較を行う必要がある。またこの古墳群の主体をなすと思われる７世紀という時期は具体的な歴史史料も多く、それに対する研究に対してや遺物・遺構の実年代論についても避けて通れないだろう。そうした点においても飛鳥地域における土器編年が参考になる。

飛鳥地域の須恵器編年としては西弘海が飛鳥Ⅰを小墾田宮推定地下層ＳＤ02の土器を当て７世紀の第１四半期に、飛鳥Ⅱを坂田寺下層ＳＧ100に代表させ７世紀の第２四半期とした。また飛鳥寺下層の土器を用いて田辺昭三はＴＫ43型式は588年より遡ると指摘した。その後飛鳥Ⅰは川原寺ＳＤ50から山田寺ＳＤ617・同整地層、飛鳥池への変遷が明らかとなり、特に山田寺整地層の土器は寺の造営が始まる641年の直前の様相を示している。また、飛鳥Ⅱは新相として天智天皇の造った水時計遺構と考えられる水落遺跡も実年代の明らかな資料である。この他に豊浦寺下層遺構であるＳＢ450は周囲に石敷を伴う掘立柱建物であり、推古天皇の豊浦宮（690～697年）の一部と考えられるものである。地山直上から出土した杯はこの建物の時期を示すと見られ、底部をヘラ切り後ナデによって仕上げるものである。今回の蓋杯分類の４類に極めて近く、３期はその中心が６世紀に入ることが明らかとなった。そうなると１・２期の年代は６世紀中葉辺りに遡って考える必要がでてくる。また、この直後の様相を示す川原寺下層ＳＤ02の時期に近い２・６・７号墳などは７世紀の第１四半期に築造され始め、７世紀の第２四半期まで活発な追葬が行れていることになる。また、４・８号墳の築造された７期は７世紀の第３四半期を下るであろう。

石室について

どの古墳も石室はかなり破壊されており、壁面や石室構築法に関する情報は乏しいが、床面を中心にして２、３の問題を考えてみたい。

まず石室の主軸に関してであるが、石室の開口方向に西と南の２方向があり、群構成細分の指標であった。これらの中で東西主軸で西に開口するのは横穴式石室墳中で最も古いＣ支群の１号墳とＢ支群の５号墳とその次の段階に築造されるＢ支群の10号墳である。石室主軸は立地する地形に左右されるものであるにしても、この３基が築造されて以降の各古墳の横穴式石室が南に開口することを意識した立地であるのに対し、古墳群形成段階であり墓域内での選地の優先権が与えられるべき１・５・10号墳が石室を西に開口させるような場所を選択していることは大変興味深いことといえる。石室の

主軸がこの古墳群中において重要視されていることは7号墳や10号墳において石室主軸を途中で屈曲させていることでも明らかであろう。このことから無袖式石室内においても、墓道が入り込む石室前半部を道としての機能空間として、また石室奥側は埋葬空間として、機能分化が図られていたとみれよう。さらに、7号墳では陶棺と石室の関係から陶棺が先に置かれのちに石室の構築が始まったと思われ、頭位の決定が先ず行われたととれる。石室幅が最大でも1.6mしかない各石室の規模からして石室主軸に直交する埋葬は考えられず石室主軸と埋葬頭位は同義と考えて良い。つまり畑ノ平古墳群では4期の段階において北頭位の埋葬への変換が行われたとみることができよう。この古墳群の第二の画期においてこうした変化が起こった背景としては宗教、具体的には仏教の影響も考えられようし、政治的な規制といったことも考慮すべきであろう。

今回の調査では横穴式石室墳に先行する3基の古墳と土壙墓が1基あり、そのうち畑ノ平11号墳と西大沢2号墳の石室や土壙墓の主軸は東西方向であった。この点について行田裕美は津山市小原遺跡の報文中において、小原1～3号墳と周辺の6世紀初頭前後の古墳の埋葬主体の主軸について基本的に東西主軸であり、出土遺物のあり方からすべて頭位は東であると結論づけている[15]。こうした傾向は勝央町内やそれより東部においても認められる。たとえば美作町大年2号墳[16]は径12mの円墳で時期は6世紀後半に位置づけられる。埋葬施設は木棺直葬であり、墓壙内ではほぼ中央から玉類と刀子が出土している。玉は位置から手玉と思われ、刀子は切先を西に向けていた。また土器類は蓋杯の1セットであり、位置から枕の可能性があり東頭位と思える。

こうした事実は美作地域でも吉井川流域の地域色を示しているといえる。さらにそれは横穴式石室の導入期においても引き続きみられるようである。佐良山古墳群中の中宮1号墳[17]や椨山古墳群中の石ノ才2号墳[18]などの古墳群形成の核となる古墳に東西主軸で西に開口する石室があることから明らかであろう（表21）。この時期の備前や備中域での在り方は、山手村持坂40号墳[19]のように西開口のものもあるが多くは南指向であるか、東西南北の軸に斜行する形をとり、方位よりも地形に即したものと言えよう。

また美作においても先の2基の古墳の直後に位置づけられるカキ谷B－1号墳[20]やコウデン2号墳[21]のように3期にはその傾向はなくなってゆき、4期には南指向へと変わるのである。5期ないし6期には終末型ではないが塚の前古墳[22]や荒神西古墳[23]のようにかなり正確に北を指向するものも存在する。なお津山市寺田古墳[24]は3期の古墳であるが陶棺が石室主軸とは斜行し東西主軸である。おそらく石室構築後に入れられた陶棺において東頭位を意識させたのであろう。

さらにこうした事象は美作でも旭川流域の支流である目木川流域の古墳群である木谷6・8号墳[25]についても当てはまる。立地の偶然性とばかりは言い難く、美作地域の横穴式石室導入期において埋葬頭位に表されるような連合体が形成された可能性もある。

石室形態については5号墳が片袖式石室である以外はすべて無袖式石室である。美作地域における首長墳の横穴式石室は一貫して片袖式石室であり、5号墳は石室規模が小さいものの導入期のものであり、大形石室の見られない勝田郡域では首長墓かそれに準ずる古墳であろう。

岡山県下の有袖式石室は導入期のものから終末型以前については、玄室指数[26]（玄室幅÷玄室長）によって編年が可能である。指数が50以上は1期以前、40台ならば1・2期、30台の石室は3期に当てはまる。また、美作地域における石室床面の平面形体についてみると、1基以前には袖部が明確で矩形を呈するが、1・2期には胴張り状になり（畑ノ平5号墳・土居天王山古墳[27]）、3期には玄門部に向かってハの字状に開く（二宮大成古墳[28]・川戸2号墳[29]・万燈山古墳[30]）特徴がみられる。畑ノ平

５号墳と石室規模と玄室指数がほぼ近い木谷８号墳の石室と比較するなら、木谷８号墳の方が羨道の幅が広く、羨道長も長いものとなっているのである。これは須恵器の型式差と矛盾しない。しかしこの編年に適合しない例もある。高野山根２号墳[91]は大谷晃二らによってＴＫ10型式新相からＴＫ43型式古相に併行する時期とされており、同時期の石室と比べ玄室が長大でかつ羨道長が短い特徴を持っている。そこでこの石室を含めて２～３の例を基にして玄室長が長く羨道長が短いものを美作地域の特色とするが[92]、同様な例は県南の山陽町斎富２号墳[93]第４主体部にもみられる。この石室は全長が7.8ｍ、玄室長5.0ｍ、同最大幅1.95ｍ、羨道長2.8ｍ、同幅1.15～0.8ｍであり、出土した須恵器から初葬は１期に遡るものであった。つまり、美作の中で羨道部の短いとされるもののうちのいくつかは地域色ではなく横穴式石室導入期の一般的特徴と理解できよう。むしろ時期的に古く位置づけられながらも長大な玄室に対して相対的に短い羨道部がつくものについては石室導入の異なった経路の存在を窺わせるのである。

つまり、先の木谷８号墳は羨道長が玄室長を１としたとき0.9と羨道が玄室長とほぼ等しくなっている。この他に有袖式では穴塚古墳[94]（２期）、井上大塚古墳[95]、川戸２号墳[96]や無袖式ではクズレ塚古墳[97]など２期の段階で石室の長大化が始まっているといえるのである。

石室規模については、村上幸雄[98]が糠山古墳群で宇垣匡雅[99]が大原町周辺の古墳を対象に石室全長と

表21　岡山県北部主要古墳一覧

地域	古墳名	墳形	墳丘規模	須恵器類別	袖形	石室規模 全長	石室規模 玄室長	石室規模 奥壁幅	石室主軸 石室主軸	出土遺物 馬具	刀	鉄鏃	農工具	耳環	玉類	釘	鉄滓	陶棺
美作	カキ谷Ｂ１	円	11.5~12	３～７	片	8.8		1.8	S−10° −E			●	鎌	●		●		●
	中宮１号墳	円	23	～1	片	7.8	4.2	2.6	N−89° −E	●	●	●	斧	●	●			
	石ノ才２号墳	円	11	２～４	無	5.6		1.3	N−72° −E		●	●			●			
	芦ヶ谷古墳	円	17	２～５	片	8.9	5.4	1.8	N−17° −E	●		●				●	●	
	コウデン２号	円	16	６・７	無	8.3		1.6	N−24° −E	●	●	●		●			●	●
	荒神西古墳	円	11	８・９	無	7.8		1.3	N−１° −E			●		●	●			
	クズレ塚古墳	円	12~13.5	２～５	無	9		1.1	N−82° −E			●		●				●
	緑山Ａ−１号墳	円	8	3	無	5.4		1	N−62° −E								●	
	寺田古墳	円	10	３～５	片	6～	3.5	0.8	N−65° −E		●		●	●	●	●		●
	二宮大成古墳	円	16−14	４～７	片	9	4.8	1.1	N−48° −E	●	●	●	●	●		●	●	
	川戸２号墳	円	14.5×17	３～４	片	12	4.3	1.6		●	●	●		●	●		●	
	一貫西１号墳	円	7	４～６	無	4.5		1	N−10° −E									●
	塚の前古墳	円	13	６～７	無	7		1.7	N−２° −E			●		●				
	大開５号墳	円	5.5	４？	無	3		0.9	N−18° −E									
	木谷６号墳	円		２～６	片	7.7~		2.1	N−87° −E		●	●	●	●	●	●		
	木谷８号墳	円	10~11	２～５	片	7.5	3.9	1.7	N−86° −E			●	●	●	●			
	木谷11号墳	円	10？	３～７	無			1.4	N−57° −E	●	●	●	●	●	●			
	中原25号墳	円	12.5~13.5	２～５	無	7.8		1.5	N−70° −E		●	●	斧	●				
備中北部	門前中屋古墳				片	5.4			N−50° −E			●		●	●			
	横見２号墳			２～５	片	5	4.5	1	N−50° −E									
	道上古墳	円	8.5	２～４	片	5.5	3.2	1.5	N−49° −E	●	●	●	●	●	●			
	横田東１号墳	円	15~16	１～	片	5.3	2.5	1.7	N−43° −E	●	●	●	斧	●	●			
	山根屋１号墳	円	10	２～	片	4.8	2.6	1.2	N−36° −E		●		●	●	●			
	赤茂１号墳	円	16	１～７	片				東西	●		●	●	●	●	●		
	土井２号墳			３～７	片	9.8	5	1.8	N−53° −E	●	●	●	●	●	●	●		●

石室幅によって分類している。また宇垣は県下全域を対象として12ｍ前後が首長墓の規格であり、１ｍ前後の石室幅が最も多く７世紀前半に集中的に築かれる古墳が多いことを指摘している。畑ノ平古墳群では稼山分類のＢタイプに２・９・10号墳が、Ｃタイプに３・４・６・８号墳があたる。１・５号墳は石室幅においてはＡタイプの要件を満たすものの全長が短い。稼山の分類は３期以降を主体とした古墳群の分類であって、畑ノ平１・５号墳のような石室長大化の前段階の古墳には合致しない。分類を正確なものにするなら時間的変化を考慮する必要がある。美作では１期には既に無袖式石室が出現し、代わって３期には有袖式石室はみられないのである。その点においても３期以前と以降とで分けて考える必要があるし、本来的には３期以前でも１期以前と２期・３期で分ける必要があろう。問題点の指摘に留めるが、玄室幅で平均1.5ｍ辺りを目安に、それ以上の規模の有袖式石室においては床面積５㎡以上で馬具が副葬品目に入り、６～９㎡で鉄地金銅張の馬具が伴うと言えそうである。

表22　岡山県古墳玄室指数

	古墳名	
玄室指数	北部	南部
50～	中宮１号墳	緑山６号墳
		持坂20号墳
40～50	畑ノ平５号墳	緑山７号墳
	道上古墳	こうもり塚古墳
	木谷８号墳	緑山８号古墳
30～40		
	川戸２号墳	江崎古墳
	万燈塚古墳	
	土井２号墳	
20～30		二子14号墳
10～20		

（４）　副葬品からみた被葬者の性格

副葬品について古墳群の変遷の中で考えるなら、やはり１・５・10号墳とそれ以降で画期があり副葬品の減少傾向が指摘できる。特に鉄鏃の量的な副葬は３期までに終了する。また、装身具のうち玉類がないことは３期以前のこの地域の横穴式石室墳においては例外的な存在といえる。こうした点は次稿に譲り本古墳群において普遍的に存在する鉄滓、土師器炊飯具、ミニチュアの須恵器について触れてみたい。

鉄滓の出土した古墳は横穴式石室墳10基中５基にのぼり、その中で４・７号墳には炉壁片も含まれていた。これについては詳しい分析報告が後掲されているので参考にしていただくとして、考古学的知見から少し述べたい。まず、各古墳毎に副葬量にかなりの差がみられる。７号墳の前庭部においては須恵器甕の中に総重量2.7kgの鉄滓が入れられていた。７号墳の前庭部はかなり流失した状況を呈しており、実際はかなりの量が墓前祭祀に用いられていたであろう。この在り方は、７号墳の被葬者の職能を示していると考えられるのである。そもそも横穴式石室導入期以前の鍛冶滓を中心とした供献は古墳の周堀においてみられるのであり、棺内や石室内に入れられるものではなかった。対して、６号墳においては前庭部に須恵器甕が置かれていたもののその周囲からは鉄滓は出土せず、石室内に数点みられるのみであった。６号墳において本来前庭部にあった鉄滓が流失してしまい、攪乱によってその一部が石室内に入り込んだというようなことが考えられるだろうか。つまり石室内への少量供献と前庭部における多量供献の２通りがあったのである。前者は被葬者と関わりのあった集団からの供献、いわば「香典」のような性質のものではなかろうか。後者の類例には大年１号墳[40]周堀の須恵器大甕と７kgに及ぶ鉄滓がある。報告者の指摘通り１号墳の年代が６世紀中葉なのに対し甕の年代は７

世紀中葉に下るものであり、１号墳に伴うとは考えられない。時期的には近接する４号墳に伴う可能性が高いほか未知の削平された古墳の存在も考えられよう。いずれにせよ鉄滓を入れたその大甕が古墳の前庭部に据え置かれていたのではないだろうか。このような例は被葬者の職能を示すとしてよいのではないか。

次に、畑ノ平１・６・７・９号墳からは土師器の煮沸形態である甑・甕・鍋などが出土しており、なかでも６・７号墳では甑と甕ないし鍋のセットで副葬され、９号墳では大型甕とミニチュア甕が出土している。その出土位置は、６・７・９においては石室開口部辺りに倒立した状態で置かれていたほか、６号墳の甕20は石室奥隅にあった。

美作地域では、土師器の甕・甑などの煮沸形態が出土した古墳は12例あるのに対し、備前・備中城では今のところこのような例は知られておらずこの地域の１つの特色をなす可能性がある。そこで美作地域での土師器祭祀の例について検討を行う。

甑と甕がセットで副葬された例としては本古墳群の２例以外にクズレ塚古墳と簗瀬３号墳[61]がある。クズレ塚古墳では２セット分が陶棺と側壁の間にあり、甑は倒立状態で置かれていたことは畑ノ平６・７号墳と共通する。簗瀬３号墳では甕と甑を破砕し土器床として使っていた。甑の倒置という行為は４基すべてに共通する行為である。飲食儀礼「ヨモツヘグイ」[62]の終わった後に再びの使用を拒絶する意味があったのだろう。

次に甕のみを出土した古墳には、10基が知られる。

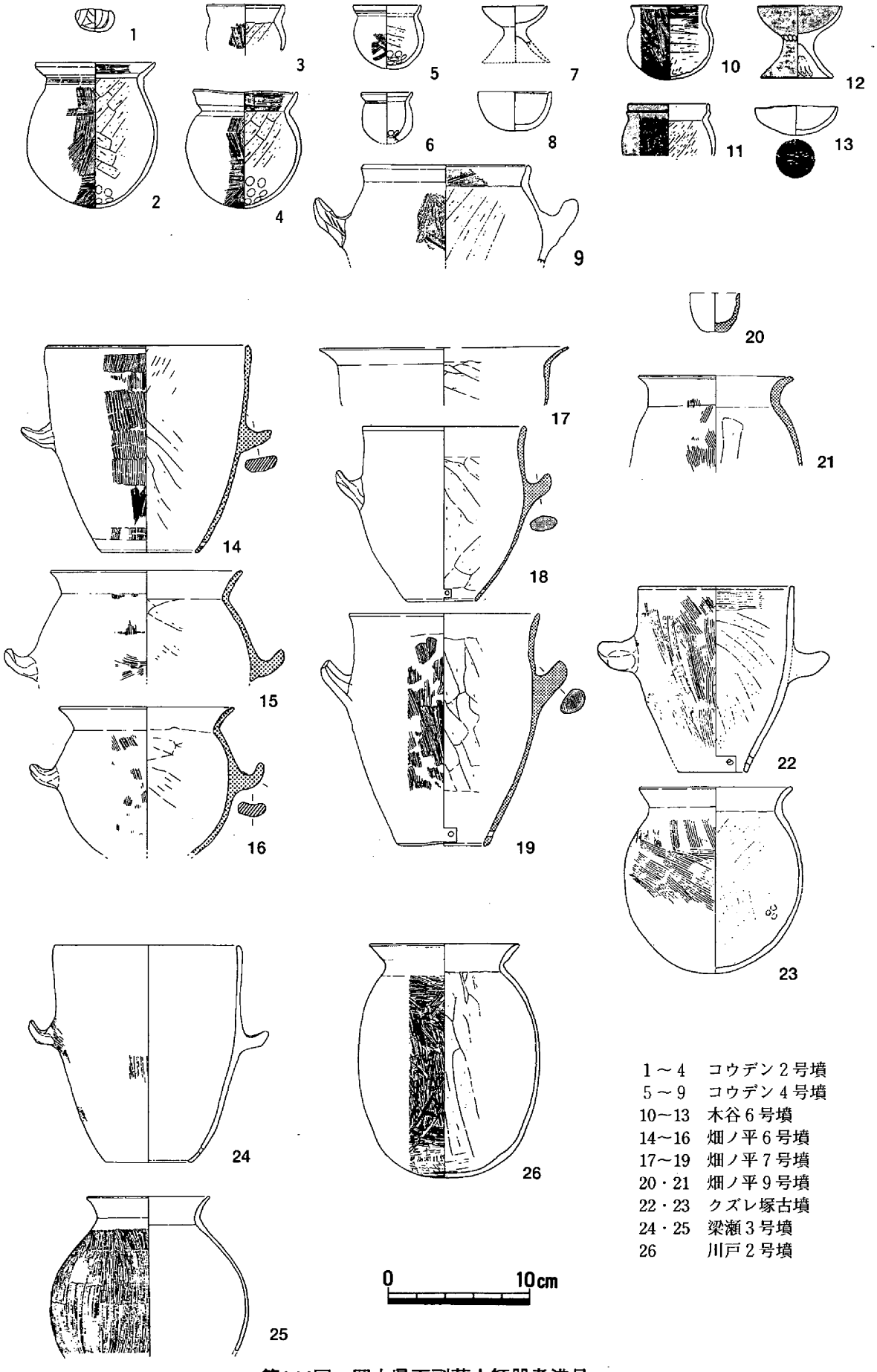
中宮１号墳の甕は袖部よりやや奥側にあったが、その他の土師器では、高杯が袖部コーナーに、壷は袖部の４つ重ね土器の最上部に置かれていた。

糠山古墳群[63]では石ノ才２号墳・芦ヶ谷古墳からコウデン４号墳（５～６期）にかけての時期の６基が知られる。このうちコウデン２号墳では煤のついた個体、赤色顔料を塗布するもの、手ずくね土器に鉄滓の入ったものなど、14個体があり、口径14cmの小形品も１点あった。さらに同４号墳においてもミニチュア品が２点出土している。また甕に塗布された顔料は煤のついた個体にも見られることから、石室内での祭祀に際して施されたとみられる。これらの出土位置は石室開口部付近（石ノ才２号墳・芦ヶ谷古墳）と石室奥隅（落山２号墳）や奥隅から奥壁沿い中央にかけて（コウデン２号墳）がある。

木谷６号墳では口径10cmほどのミニチュアの甕が５個体あり、同じく土師器の杯や高杯と伴に石室奥壁沿いに片付けられた状態で出土した。そのうち大阪府一須賀Ｂ２号墳[64]に類例のある口縁部が有段の甕と高杯には赤色顔料が塗布されていた。この木谷古墳群では、６号墳以外には土師器供献は見られない。

川戸２号墳においても石室奥コーナー部において甕が倒置されていた。この他に一貫西１号墳[65]や柳谷古墳[66]において土師器甕が出土している。

以上、土師器煮沸形態の副葬の事例をみてきたが、実用品の甕や甑の副葬とミニチュア品を伴う副葬の例があり、時期的にはミニチュアの供献がわずかに先行するようである。なおミニチュア品では、木谷６号墳（２期）やコウデン４号墳（５期）のように甕・高杯・椀の３点セットを用いるような共通の祭祀が一定の時間幅を持って行われていた可能性もある。またそれらの中には赤色顔料を塗布するものがあるなど、他の土器と比べ儀礼色が強く、特別なものとして扱われていたのである。このような土師器煮沸形態の古墳への副葬は今のところ美作地域においても横穴式石室が導入され始めた時



1～4　コウデン２号墳
5～9　コウデン４号墳
10～13　木谷６号墳
14～16　畑ノ平６号墳
17～19　畑ノ平７号墳
20・21　畑ノ平９号墳
22・23　クズレ塚古墳
24・25　梁瀬３号墳
26　川戸２号墳

第144図　岡山県下副葬土師器煮沸具

点から６期の古墳までの間であり、７期以降と横穴式石室以前の墓制には今のところ見られない。また、ミニチュア・実用品ともにカマドが欠落する点は重要であろう。

ミニチュア炊飯具はカマド・甑・甕の３点を基本とし滋賀県・奈良県・大阪府の特定の古墳群において副葬され、渡来人との関わりが指摘される代表的な遺物である[47]。また土師器甕の出土した古墳を分析した日野宏[48]は鉄滓の供献と土師器甕に関連性を認め、鍛冶集団の埋葬儀礼と結びつくとした。

今のところ美作において土師器甕の祭祀と鍛冶集団の存在を裏付けるような鍛冶滓や鍛冶具が供伴する事例はない。また、現在のところこの地に渡来人の存在を確実に証明するようなものはその他の遺物においてもみられない。また、ミニチュアカマドの欠落は吉備全体を見ても古墳時代の可動式のカマドが少ないことに由来するのかもしれない。そうした点においては美作地域の土師器炊飯具を使った祭りは、畿内からの影響の元に成立したとしても在地的に変容したものであった。

ミニチュアの須恵器は各古墳の概説で触れたが、３期以降の須恵器が一般的に小型化する時期であるとはいえ明らかに実用性を消失したものが多数存在するのである。その中には畑ノ平３号墳の長頸壺18と19のように実用品とそれを忠実に模倣したといった生産と供献の直結を窺わせる資料がある。また蓋杯の焼け歪みが多いことも窯が近在にあり、古墳の被葬者が須恵器生産に携わっていたことの傍証ではないだろうか。６号墳の土師器甑21にタタキ技法がみられることもこれと関連して考えられよう。

ミニチュア須恵器は土師器のミニチュア炊飯具と同じく中国の明器のような意味を持ち須恵器工人に関連した古墳の祭祀に取り入れられたのではないだろうか。

つまり畑ノ平古墳群では１つの古墳群中に製鉄や窯業に関わりのある遺物が指摘できるのであり、被葬者の職能を示すものと考えられる。これがどのような意味を持つかという解釈については、その形成主体を１、２の村落内の有力家父長層と見るか、１、２の家族帯[49]によるものとみるのかに関わってくるであろう。仮にＢ・Ｃ支群を１つの家族帯とみるならば７世紀前半において特殊技術を保有する集団の形成は図られつつも、その内部は窯業や鉄生産が未分化の段階として規定できるのではないだろうか。

（５）おわりに

今回調査を行った西大沢・畑ノ平古墳群について、１つの古墳群としての在り方を横の比較で行うなら、Ｂ・Ｃ２群の築造の契機となった５号墳は１号墳と比べ石室形態以外にも立地の点で優位性が認められ、副葬品においても５号墳は馬具を持ち、刀、鉄鏃があるのに対し、馬具の欠落する１号墳、鉄鏃のみの10号墳があり、その下にそれ以外の古墳という典型的な群集墳の階層構造を示しているようにみえる。しかし、西大沢・畑ノ平古墳群では実際それら古墳相互の関係は時間的な変遷で捉えられるのであって、５世紀後半に１系列の古墳群を形成していた家族帯が６世紀中葉ころに一旦古墳の築造を中止するものの、６世紀の第３四半期ごろには、再び優劣関係をもった２つの横穴式石室墳の築造が行われている（１・５号墳）。それが７世紀初めには２系列がそれぞれ２から３基単位へと古墳築造階層の広がりをみせる。また、副葬品目の減少という群小墳に質的な変化（第２の画期）と各古墳間の均質化が行われるものの、それぞれの系列の有力墳においては陶棺が用いられていることも明らかとなった（２・７号墳）。そして７世紀の中葉には単葬墓の可能性のある極めて小型の石室を各々１基造りこの古墳群は終焉を迎えている。ただ、７世紀中葉以降においても造墓作業は続いてお

り、畑ノ平古墳群から谷を隔てた東の丘陵上において2基の小型の横穴式石室が調査されている。こうした現象はより広い地域において適応する可能性があろう。

最後に横穴式石室を主体とする古墳群の変遷についてについてごく簡単ではあるが触れておわりとする。1期以前の横穴式石室を主体とする古墳群は中宮1号墳・木谷古墳群・岡山市西山古墳群[52]・総社市緑山古墳群[53]があるが、それらは3期までにほぼ造墓活動を中止する場合が多い。対してそれ以降の1～3期に小地域単位において形成される古墳群は、本古墳群の他に哲西町岩倉古墳群[54]や横田東古墳群[55]、前池内古墳群[56]などがあり、いずれも4期以降に小型石室を中心とした古墳の急増をみせる。また、これら古墳群の築造時期は、吉備においてもコウモリ塚古墳[57]という盟主的な前方後円墳を頂点とし、その他に二万大塚・牛窓二塚古墳や美作では高野山根2号墳など前方後円墳である中・小規模の首長墓が出現するといった重層的な階層構造の明確化があり、その中において旧来の中小豪族層に新興勢力を加え序列化したものと理解できるのである。

また、小型の石室墳の出現が吉備における前方後円墳の築造停止（江崎古墳）[58]の直後にみられることは家父長層の台頭と伴に畿内政権による地方の直接経営が一段と強化されたことを示すのではなかろうか。

註

（1）同じ視点で分析を行ったものに、高畑知功「須恵器編年への一試案」『考古学と関連科学』1988がある。
（2）小郷利幸『門の山古墳群』1992
（3）田辺昭三『陶邑古窯址群』1966・『須恵器大成』1981
（4）註2と同じ
（5）平安高校にて実見。萩本勝・山本正和（㈶京都市埋蔵文化財研究所）の両氏にご教示頂いた。
（6）奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮発掘調査部編「飛鳥浄御原推定地の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』12　1982
（7）横田美香「須恵器の年代」『定北古墳』1995
（8）西弘海「土器」『飛鳥藤原宮発掘調査報告』Ⅰ　1976
（9）奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮発掘調査部編「豊浦寺第3次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』16　1986　飛鳥地域の須恵器の実見に際して、西口壽生氏に色々と便宜をはかっていただき、また多くのご教示を得た。
（10）奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮発掘調査部編「川原寺西南部の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』10　1980
（11）奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮発掘調査部編「山田寺第7次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』20　1990
（12）奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮発掘調査部編「飛鳥池遺跡の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』22　1992
（13）奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮発掘調査部編「坂田寺の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』3　1973
（14）安川豊史「古墳時代における美作の特質」『吉備の考古学的研究』上　1992
（15）行田裕美『小原遺跡』津山市埋蔵文化財38　1991
（16）尾上元規ほか『大年古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106　1995

(17) 近藤義郎「中宮第１号墳発掘調査報告」『佐良山古墳群の研究第１冊』　1952
(18) 村上幸雄「石ノ才２号墳」『稼山遺跡群』Ⅱ　1980
(19) 松本和男「持坂20号墳」『岡山県埋蔵文化財報告』1980
(20) 平井泰男『カキ谷Ｂ－１号墳』　1987
(21) 村上幸雄「コウデン２号墳」『稼山遺跡群』Ⅱ　1980
(22) 平井勝『塚の前古墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告44　1981
(23) 村上幸雄「荒神西古墳」『稼山遺跡群』Ⅱ　1980
(24) 中山俊紀『寺田古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告22　1986
(25) 福田正継「木谷古墳群」『中国横断自動車道建設に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告93　1995
(26) このような方法で編年を行ったものとして、白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一試考－河内高安千塚及び平尾山千塚を中心として－」『古代学研究』第42・43合併号　1966　がある。
(27) 内山敏行・大谷晃二・田中弘志「佐良山古墳群高野山根２号墳について」『古代吉備』第13集　1991　第15図を参考。
(28) 栗野克己ほか「二宮大成遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』３　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告６　1973
(29) 宇垣匡雅『川戸古墳群』1995
(30) 渡辺健治・今井堯『万燈山古墳』1973
(31) 註（27）文献と同じ。
(32) 註（27）文献と同じ。
(33) 福田正継「斎富古墳群」『松尾古墳群　斎富古墳群　馬屋遺跡ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告99　1995
(34) 伊藤晃・中力昭「穴塚古墳」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』５　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告８　1975
(35) 註（25）文献に同じ
(36) 註（25）文献に同じ
(37) 小郷利幸『崩レ塚古墳群・クズレ塚古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告31　1990
(38) 村上幸雄「結語」『稼山遺跡群』Ⅱ　1980
(39) 宇垣匡雅「考察」『川戸古墳群』1995
(40) 註（16）に同じ
(41) 行田裕美『梁瀬古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告13　1983
(42) 小林行雄「黄泉戸喫」『古墳文化論考』1976
(43) 註（38）に同じ
(44) 大阪府教育委員会編『一須賀古墳群資料目録』Ⅰ　1992
(45) 行田裕美『一貫西遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告33　1990
(46) 行田裕美『柳谷古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告24　1988
(47) 水野正好「滋賀郡居住の漢人系帰化氏族とその墓制」『考古学からみた古代日本と朝鮮』1978　関川尚功「古墳時代の渡来人－大和・河内地域を中心として」『橿原考古学研究所論集』第９集　1988や土生田純之「畿内型石室の成立と伝播」『ヤマト王権と交流の諸相　古代王権と交流５』　1994などがある。
(48) 日野宏「鍛冶集団の埋葬儀礼にあらわれた土師器甕について」『天理参考館報』第６号　1992
(49) 近藤義郎『前方後円墳の時代』1983
(50) 福田正継「国道バイパス建設に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』23　1993
(51) 近藤義郎ほか『岡山県総社市緑山古墳』1986
(52) 伊藤晃ほか「岩倉古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』８　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告14　1976

(53) 岡田博ほか「横田東古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』13　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告23　1978
(54) 中野雅美「前池内遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』8　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89　1994
(55) 葛原克人『備中こうもり塚古墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告35　1979
(56) 新納泉「江崎古墳」『岡山県史』考古資料　1986

付載1　畑ノ平古墳群出土鉄滓の金属学的調査

大澤正己

概要

6世紀末から7世紀中頃にかけての畑ノ平古墳群（3・5・6・7・10号墳）出土鉄滓を調査して次の事が明らかになった。

＜1＞　畑ノ平5号墳は、B支群中で最も古く、追葬をみると6世紀末から7世紀中頃の幅をもつが、出土鉄滓は鍛錬鍛冶滓である。

＜2＞　畑ノ平7号墳出土鉄滓は砂鉄製錬滓、残りの畑ノ平3・6・10号墳出土鉄滓は鉱石製錬滓であった。

＜3＞　A支群の西大沢1・2号墳と畑ノ平11号墳は5世紀末～6世紀に比定されるが、ここからは鉄滓の出土はなかった。当古墳群における鉄生産との拘わりは、6世紀末の鍛冶作業に始まって、7世紀初以降に製錬という図式が描かれる。

＜4＞　畑ノ平6・7号墳は土師器の煮沸具を共伴し、渡来系被葬者の可能性が指摘されている[1]。鉄生産活動が、渡来系集団と結びつくのか否かの検討も今後に残された研究課題となろう。

1.いきさつ

新勝央中核工業団地の建設に伴う発掘調査で鉄滓供献古墳が数基検出された。所在地は、岡山県勝田郡勝央町植月中である。ここでは時期や立地などから3支群に大別される。

A支群：埋葬施設は竪穴式石室や木棺直葬、5世紀末～6世紀初、出土鉄滓なし。

B・C支群：横穴式石室墳で、6世紀第4四半期からの築造開始。両支群は谷筋に古墳へ向かって走っていたと考えられる墓道によって分けられる。

出土鉄滓は、畑ノ平3号墳1点、4号墳2点、5号墳1点、6号墳5点、7号墳29点、10号墳4点、の合計42点となる。これらのうち、炉壁のガラス質滓は避けて、各古墳1点ずつを選び出して供試材とした。

平成5年12月8日に発掘調査中の現地へ赴き出土鉄滓の一部を水洗し、製錬滓の存在の確認と分析調査の必要性を述べた事で今回の金属学的調査への運びとなった。

2.調査方法

2－1.供試材

Table.1に示す。畑ノ平4号墳からは2点の出土であるが、ガラス質滓なので、これは中止して、各出土古墳からは抽出した。

Table. 1　供試材の履歴と調査項目

符号	試料	出土位置	推定年代	計測値		調査項目		
				大きさ（mm）	重量（g）	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	化学組織
66	製錬滓	畑ノ平3号墳 石室内	7世紀初	30×20×10	9.9	○	○	
80	鍛冶滓	畑ノ平5号墳 石室内	6世紀末～7世紀中	25×15×10	8.7	○	○	
181	製錬滓	畑ノ平6号墳 石室内No.32	7世紀初～中	35×35×20	46.6	○		
184	〃	〃 石室内	〃	30×22×17	15.6	○		
216	〃	畑ノ平7号墳 墓道No.32	〃	95×60×45	611.2	○	○	○
225	〃	畑ノ平10号墳 石室埋土	〃	55×45×18	80.0	○		○

2－2. 調査項目

（1）　肉眼観察

（2）　顕微鏡組織

鉄滓は水道水で充分に洗浄乾燥後、中核部をベークライト樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の＃150、＃240、＃320、＃600、＃1,000と順を追って研磨し、最後は被研面をダイヤモンドの3μと1μで仕上げて光学顕微鏡で観察を行った。

（3）　ビッカース断面硬度

鉄滓の鉱物組成の同定を目的として、ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester)を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136度の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡試料を併用した。

（4）　化学組成

鉄滓の分析は次の方法をとっている。

全鉄分（Total Fe)、金属鉄（Metallic Fe)、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C)、硫黄（S)、：燃焼容量法、燃焼赤外線吸収法。

二酸化珪素（SiO_2)、酸化アルミニウム（Al_2O_3)、酸化カルシウム（CaO)、酸化マグネシウム（MgO)、酸化カリウム（K_2O)、酸化ナトリウム（Na_2O)、酸化マンガン（MnO)、二酸化チタン（TiO_2)、酸化クロム（Cr_2O_3)、五酸化燐（P_2O_5)、バナジウム（V)、銅（Cu)，：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法、誘導結合プラズマ発光分光分析。

3. 調査結果と考察

（1）　66：鉄滓（鉱石製錬滓）

① **肉眼観察**：外皮の半分は流動状肌で赤褐色を呈す。残り半分は凹凸面をもち、これに石英粒を付着させ、気泡を発する。平面は紡錘状で完形品。9.9gのミニ鉄滓であった。

② **顕微鏡組織**：Photo. 1の①～③に示す。鉱物組成は、淡灰色長柱状のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）と黒褐色ガラス質スラグから構成される。磁鉄鉱石を始発原料とした製錬滓の晶癖である。

③ **ビッカース断面硬度**：Photo. 1の③にファイヤライトの硬度測定の圧痕を示す。硬度値は649Hvであった。ファイヤライトの文献硬度値は600から700Hvであって[2]、該値はこの範囲内に収まっている。

（2）　80：鉄滓（鍛錬鍛冶滓）

① **肉眼観察**：表裏ともに黒褐色を呈した多孔質の不定形鍛冶滓である。小型完形品で8.7gを計る。

② **顕微鏡組織**：Photo. 1の④～⑥に示す。鉱物組成は白色粒状結晶のヴスタイト（Wüstite:FeO）が大量の晶出し、これに淡灰色盤状結晶のファイヤライトと、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。鉄素材の折り返し曲げ鍛接に高温加熱で排出された鍛錬鍛冶滓に分類される。

③ **ビッカース断面硬度**：Photo. 1の⑥に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は508Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値は450～500であって[3]、これの上限を僅かに越えるものの、当結晶はヴスタイトに同定される。

（3）　181：鉄滓（鉱石製錬滓）

① **肉眼観察**：表皮は黒色で飴状滑らか肌の流動滓の小破片である。小じわが僅かに発生し、急冷を受けた痕跡を残し、炉外流出滓ともとれる。破面は茶褐色で気泡は少なく緻密質であった。

② **顕微鏡組織**：Photo. 1の⑦に示す。鉱物組成は淡灰色長柱状結晶のファイヤライトと、微小白色ヴスタイトの樹状晶が暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。鉱石製錬滓の晶癖である。

（4）184：鉄滓（鉱石製錬滓）

① **肉眼観察**：表裏ともに木炭痕を有し、気泡を多発させた炉内滓の破片である。

② **顕微鏡組織**：Photo. 2の①～③に示す。鉱物組成は、淡灰色盤状結晶のファイヤライトと、白色粒状ヴスタイトを少量晶出させた鉱石製錬滓の晶癖であった。

（5）　216：鉄滓（砂鉄製錬滓）

① **肉眼観察**：黒灰色で不定形の炉底塊。表皮は流動状滑らか肌に木炭痕を残し、気泡を露出させる。緻密質。

② **顕微鏡組織**：Photo. 2の④～⑥に示す。鉱物組成は、淡茶褐色多角形結晶のウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO \cdot TiO_2$）と淡灰色盤状結晶のファイヤライト、金属鉄粒、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。砂鉄を原料とした製錬滓に分類される。

③ **ビッカース断面硬度**：Photo. 2の⑥に淡茶褐色多角形結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は、701Hvであった。結晶形態の似たマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）の文献硬度値は、500～600Hvである。ウルボスピネルはチタン（Ti）分と固溶して硬化傾向にあるので、当結晶はウルボスピネルと同定される。

④ **化学組成**：Table. 2に示す。全鉄分（Total Fe）は39.41%に対して、金属鉄（Metallic Fe）が1.09%、酸化第1鉄（FeO）47.21%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）2.32%の割合である。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は36.93%を含み、このうちに鉄と滓の分離を促進する塩基性成分（$CaO+MgO$）は6.26%と高めであった。砂鉄特有元素の二酸化チタン（TiO_2）は8.52%、バナジウム（V）0.16%と高値であって砂鉄製錬滓に分類される。酸化マンガン（MnO）0.98%も砂鉄系を裏付ける値であった。銅（Cu）の0.010%も地域差によって認められる数値であった。

（6）　255：鉄滓（鉱石製錬滓）

① **肉眼観察**：表皮は濃緑色地に赤錆を発し、深く木炭痕を残し、裏面は扁平で焼石英粒を付着した炉底塊である。

② **顕微鏡組織**：Photo. 2の⑦に示す。鉱石組成は淡灰色盤状結晶のファイヤライト、微小白色、ウスタイト、基地の暗黒色ガラス質スラグなどから構成される。鉱石製錬滓に分類される。

③ **化学組成**：Table. 2に示す。全鉄分（Total　Fe）は46.34%に対して、金属鉄（Metallic　Fe）が0.81%、酸化第1鉄（FeO）53.27%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）5.90%の割合で鉄分の残留は多い。ガラス質成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）は36.04%を含み、このうちの塩基性成分（CaO＋MgO）は6.27%と高めであって、二酸化チタン（TiO_2）は0.29%、バナジウム（V）0.01%の砂鉄特有成分が低めは磁鉄鉱系の製錬滓に分類される。銅（Cu）は0.006%、五酸化燐（P_2O_5）0.36%などの随伴微量元素は少ない。ただし、硫黄（S）のみは0.08%あったが、これが直接金属鉄に悪影響を及ぼす訳ではない。

4. まとめ

畑ノ平古墳群出土鉄滓は、7世紀初めには鉱石製錬（66）を、7世紀初〜中頃には砂鉄製錬（216）の操業を傍証する試料として認定される。また、1980年に調査された勝央中核工業団地の第Ⅱ調査区10号墳羨道出土鉄滓は、6世紀末〜7世紀前半に比定される砂鉄製錬滓であった[4]。これらの状況から推定して勝央町内では、遅くとも7世紀初めには製鉄の操業は行われていた事は間違いなかろう。

一方、この勝田郡に近接した津山市所在の大開古墳群2・3号墳からは6世紀前半の鉱石製錬滓、同1号墳は6世紀中葉の砂鉄製錬滓の検出があった[5]。中国山地では6世紀代に既に鉄製産の開始の可能性が濃厚であって、今回調査の畑ノ平古墳群供献鉄滓が、それら周辺部の製鉄操業とどのような係わりがあったのか注目される。

西日本一帯の古墳供献鉄滓は、1983年には約150例前後を捉えていたが、現在では倍数近くの検出となった。この古墳供献鉄滓から6世紀後半代を製錬の盛行期であろうと報告したが[6]、これも新たに塗り替えられて6世紀初めに変更できそうな状況となった。また、製鉄の開始時期についても4世紀代を無視できぬ試料が集まりつつある事を指摘して筆を擱く[7]。

註

① 岡山県古代吉備文化財センター　弘田和司氏のご教示

② 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968

③ 同掲書②

④ 大澤正己「岡山県下の古代製鉄研究」『稼山遺跡群』Ⅱ（久米町開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告＜2＞）　久米町開発事業に伴う文化財調査委員会　1980

⑤ 大澤正己「大開古墳群・大開遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『大開古墳群・大開遺跡』（津山市埋蔵文化財発掘調査報告　第51集）津山市教育委員会　1994

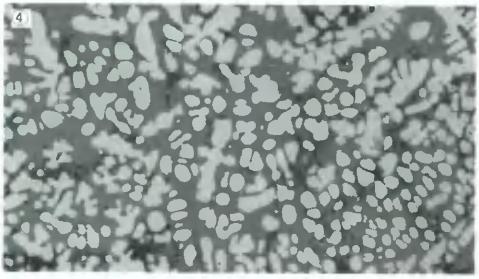
⑥ 大澤正己「古墳出土鉄滓からみた古代製鉄」『日本製鉄史論集』（たたら研究会創立二十五周年記念論文集）たたら研究会編　1983

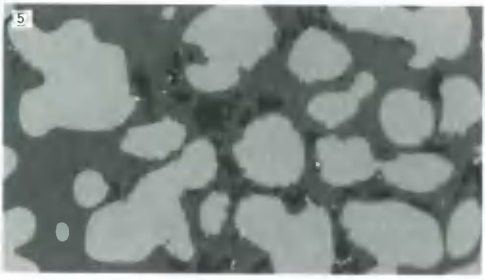
⑦ 大澤正己「初期鉄生産関連遺物分析データ提示」『平成6年度たたら研究会大会研究発表資料』たたら研究会　九州大学文学部考古学研究室　1994.11.26

（1）　66
畑ノ平3号墳石室内
鉱石製錬滓
①×100、②×400
ファイヤライト
③×200硬度圧痕
ファイヤライト：649Hv荷量200 g
外観写真×1.2

（2）　80
畑ノ平5号墳石室内
鍛錬鍛冶滓
④×100、⑤×400
ヴスタイト＋ファイヤライト
⑥×200硬度圧痕
ヴスタイト：508Hv荷量100 g

外観
写真
×1.2





（3）　181
畑ノ平6号墳石室内
鉱石製錬滓
⑦×100
ファイヤライト＋微小
ヴスタイト

外観写真1/1.1

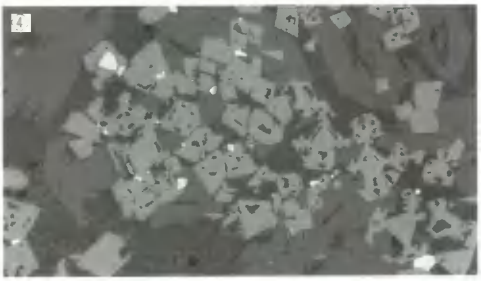
Photo. 1　鉄滓の顕微鏡組織

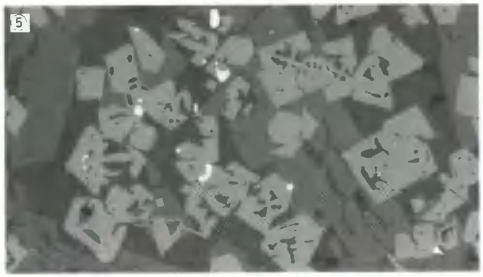
（4）　184
畑ノ平6号墳石室内
鉱石製錬滓
①②×100、③×400
ファイヤライト＋微小
ヴスタイト

外観写真
1/1

（5）　216
畑ノ平7号墳石室内
鉱石製錬滓
④⑤×100
ウルボスピネル＋ファイヤライト
⑥×200　硬度圧痕
ウルボスピネル：70Hv荷重
200g

外観写真
1/2.2





（6）　255
畑ノ平10号墳石室埋土
鉱石製錬滓
⑦×100
ファイヤライト＋微小
ヴスタイト
外観写真1/1.2

Photo. 2　鉄滓の顕微鏡組織

Tabie. 1 鉄滓の化学組成

試料番号	遺跡名	出土位置	種別	推定年代	全鉄分 (TotalFe)	金属鉄 (MetaliicFe)	酸化第1鉄 (Feo)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	酸化珪素 (SiO_2)	酸化アルミニウム (Al_2O_3)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K_2O)	酸化ナトリウム (Na_2O)
216	畑ノ平古墳群	7号墳墓道	砂鉄製錬滓	7C初～中	39.41	1.09	47.21	2.32	23.29	6.09	4.49	1.79	1.06	0.228
255		10号墳石室埋土	鉱石製錬滓		46.34	0.81	53.27	5.90	23.76	5.02	5.28	0.99	0.890	0.100
2B－7	勝央中核工業団地	第Ⅱ調査区10号墳羨道部	砂鉄製錬滓	6C末～7C前半	34.39	Trace	31.87	23.81	16.00	5.22	3.86	0.85		－

試料番号	遺跡名	出土位置	種別	推定年代	酸化マンガン (MuO)	酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造滓成分	造滓成分 TotalFe	TiO_2 TotalFe	計
216	畑ノ平古墳群	7号墳墓道	砂鉄製錬滓	7C初～中	0.98	8.52	0.03	0.04	0.44	0.05	0.16	0.010	36.928	0.937	0.216	
255		10号墳石室埋土	鉱石製錬滓		0.38	0.29	0.00	0.08	0.36	0.14	0.01	0.006	36.040	0.778	0.006	
2B－7	勝央中核工業団地	第Ⅱ調査区10号墳羨道部	砂鉄製錬滓	6C末～7C前半	0.11	14.38	Trace	0.08	2.08	0.19	0.02	Trace	25.930	0.754	0.418	

付戴２　新勝央中核工業団地内遺跡出土須恵器の胎土分析
—西大沢・畑ノ平古墳群出土須恵器を中心に—

岡山理科大学自然科学研究所
白　石　　純

１．はじめに

この胎土分析では、蛍光X線分析法により新勝央中核工業団地内の西大沢・畑ノ平古墳群出土の須恵器を分析し、以下のことがらについて検討した。

（１）西大沢・畑ノ平古墳群出土須恵器の中で、器種により胎土に違いがあるかどうか。また、時期や立地などから3支群（A支群・B支群・C支群）に分類されている[1]古墳の間で各支群ごとの須恵器の胎土に差がみられるかどうか。

（２）西大沢・畑ノ平古墳群および周辺の古墳と津山市一宮窯跡[2]・岡山県南部の須恵器窯跡（金光町上竹西の坊遺跡１号窯跡、倉敷市寒田５号窯跡・二子御堂奥窯跡、山手村末の奥・道金山窯跡、長船町佐府池上池窯跡・奥池中池窯跡、邑久町さざらし中池窯跡、牛窓町寒風窯跡）との比較をおこなった。

２．分析方法および結果

分析は、波長分散型蛍光X線分析装置を用い、測定方法・条件・分析試料の作製などは、現在までおこなっている方法である[3]。

分析資料は、第１表の杯・高杯・椀・壷・甕・提瓶・横瓶・平瓶の50点の須恵器である。このうち、西大沢・畑ノ平古墳群（９基）と参考資料として虫尾遺跡、川戸１号墳、木谷８号墳、中原48号墳、勝央中１号墳、大年１号墳の各古墳の須恵器を分析した。

分析の結果、西大沢・畑ノ平古墳群の中で、器種により胎土に差がみられるかどうかでは、第１図K_2O-CaO、第２図Sr-Rbの散布図から３支群とも分布領域がほぼ重なり識別できなかった。

次に、西大沢・畑ノ平古墳群と生産地である津山市一宮窯跡および岡山県南部の窪跡の比較では第３・４図から西大沢・畑ノ平古墳群のほとんどの須恵器が、一宮・岡山県南部の窯跡の領域に入った。ただ、中には、13（杯）、33・36（横瓶）などのようにこれらの領域に入らず、陶邑領域に分布した。

また、これ以外に今回この周辺地域の古墳などから出土した資料として虫尾遺跡、川戸１号墳、木谷８号墳、中原48号墳、勝央中１号墳、大年１号墳の８点を加えて比較した。この結果、第３図から虫尾遺跡（44、45）と中原48号墳（48）の３点の甕が西大沢・畑ノ平古墳群の領域に入らずプロットされた。また、虫尾遺跡の44、45は一宮・岡山県南部の領域からはずれてプロットした。

第５図CaO-MgO、第６図Sr-Rbの散布図からCaO（カルシウム）・Sr（ストロンチウム）の量により西大沢・畑ノ平古墳群のなかで大きく二つのグループに区分されるようである。一つは、２・３・６・25（畑ノ平１号）、11・14・19・32・39（畑ノ平３号）、15・27・28・29・42（畑ノ平７号）、16（畑ノ平２号）、17・20（畑ノ平５号）、37（畑ノ平９号）、40（畑ノ平６号）のグループ（Ⅰグループ）である。もう一つは、１・４・５・18・22（畑ノ平１号）、７・８・９・10・21・36（畑ノ平５号）、

12・13・35（畑ノ平6号）、23・31（畑ノ平9号）、26・30（畑ノ平8号）、33（畑ノ平2号）、24・34・41（畑ノ平7号）、38（西大沢1号）のグループ（Ⅱグループ）である。そこで、分析値からこれら二つのグループに別れた理由であるが、古墳・器種別などにより別れるかどうか検討したが区別できなかった。ただ、高杯が20と21、22、23、24、31の二つに別れた。また、杯ではⅠグループがⅡグループに比べてやや焼成に悪いものがみられる傾向があった。

3．まとめ

このように一群集墳について胎土分析を実施したが、この分析でわかったことをまとめると、

（1）西大沢・畑ノ平古墳群内で大型品（壺・甕・横瓶など）と小型品（杯・高杯など）などで器種により胎土に差がみられるかどうかの検討では、差がみられなかった。また、時期・立地などから3支群に分類されている同古墳群が出土須恵器の胎土分析で、どのような差異となるかでも、各支群とも顕著な差異は認められず、分析値からは分類できなかった。

（2）西大沢・畑ノ平古墳群と津山市一宮窯跡・岡山県南部の窯跡との比較では、ほとんどの須恵器が一宮窯跡および岡山県南部の領域に入り、識別できなかった。ただ、プロットされた散布図を見ると一宮窯跡を中心とする領域に主に分布していることがわかる。このことは、これら古墳群出土須恵器が美作周辺で生産された可能性を示唆する結果となった。

また、杯（13）、横瓶（33・36）のように陶邑領域に入るものも見られた。今回のこのような分析結果から、西大沢・畑ノ平古墳群に使用された須恵器は美作を中心とした県内地域と陶邑地域の両者の供給ルートが推測される。しかし、比較資料が岡山県内と陶邑に限られていることなどから、今後山陰[4]などの他地域の窯跡資料と比較する必要がある。

また、西大沢・畑ノ平古墳群のなかで、CaO・Srの分析値から二つのグループに別れたが、この二つに別れたことが、考古学的考察から時期・立地的に各古墳ごとにまとまるようなことが言えるのであれば、分類されたことに意味があり、須恵器の供給ルートの解明に繋がることも十分に考えられる。しかし、今回の分析ではそのような結果とならなかった。ただ、この二つに別れた資料のうち、杯類を観察するとⅠグループにやや焼成の悪いものが多くみられる傾向がある[5]。このことは、同じ古墳出土の須恵器でも、窯の異なるものが含まれていることが推測される。またSr-Rb散布図からⅠグループが一宮を中心とする岡山県内領域に、Ⅱグループが陶邑領域に区分できなくもないが、このⅠとⅡに区別した境界付近で岡山県内と陶邑領域が重複する部分にあたるため、これ以上の検討は、胎土分析の限界であり不可能である。

この分析をおこなうにあたり、亀田修一先生および岡山県古代吉備文化財センターの職員の方々にお世話になった。記して感謝いたします。

註

（1）資料提供者の分類による。

（2）白石純「蛍光X線による須恵器の胎土分析－備前・備中・美作の須恵器窪跡資料について－」『鎌木義昌先生古稀記念論集　考古学と関連科学』1988.12.

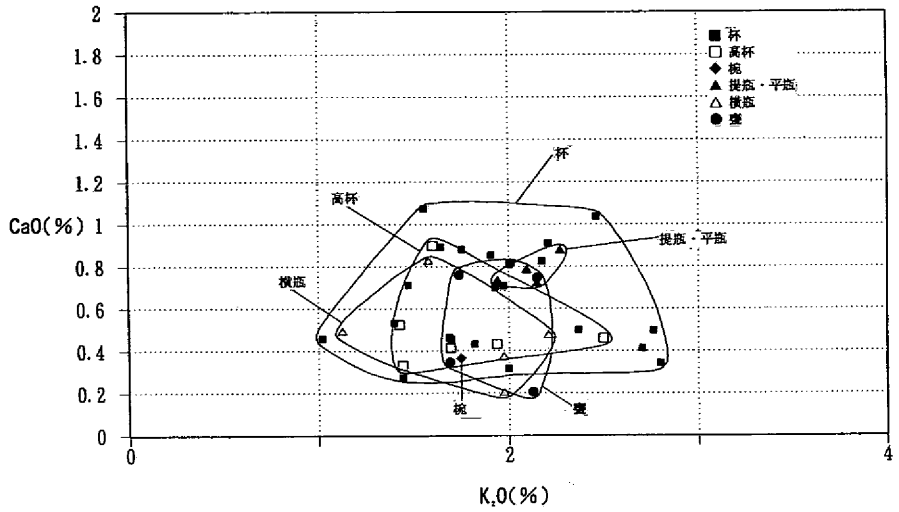
（3）註（2）

（4）近年、山陰（鳥取周辺）での窯跡の調査が進んでおり、今後この地域との胎土の比較が必要である。この点に関しては亀田修一先生から御教示いただいた。

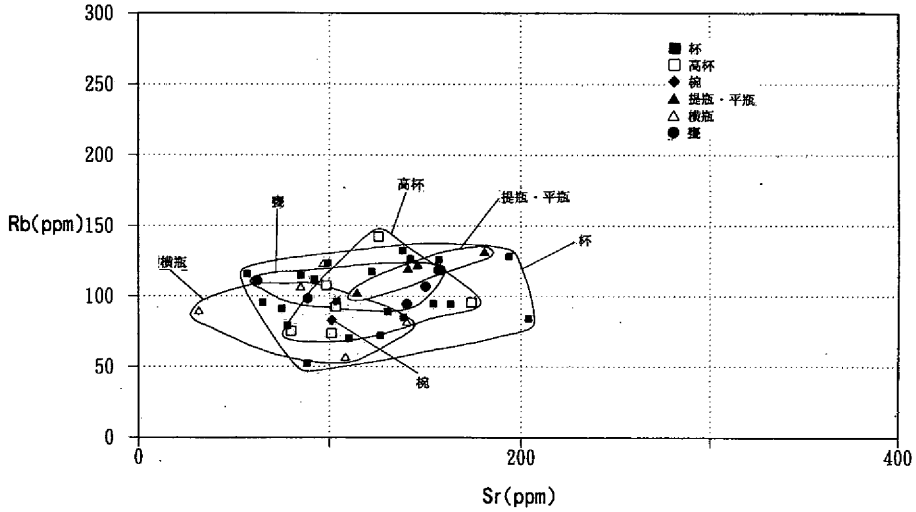
（5）須恵器の観察は、実際に実見したわけではなく資料提供者の土器観察表から検討した。

第１表　新勝央中核工業団地内遺跡出土須恵器の胎土分析資料一覧表（％）ただし、Sr・Rbはppm

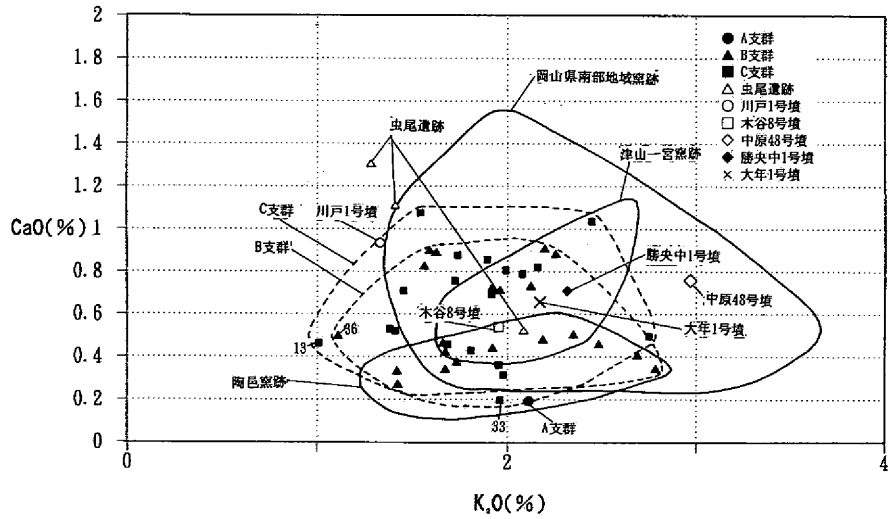
資料番号	出土遺跡	器種	胎土	焼成	色調	K_2O	Fe_2O_2	SiO_2	TiO	Al_2O_3	CaO	MgO	Sr	Rb
1	畑の平１号墳	杯身	白・黒色粒多い（0.5～１㎜）	硬質	灰色	1.68	6.36	69.38	1.12	20.45	0.45	1.36	78	78
2	〃	杯蓋	白色粒多い（0.5㎜以下）・黒色粒少し	不良	橙色	1.46	6.54	66.62	1.10	23.93	0.70	0.67	127	71
3	〃	〃	白・黒白粒少し（0.5㎜以下）	良	灰色	1.92	5.72	71.21	0.97	19.24	0.69	1.40	104	95
4	〃	〃	白色粒多い（0.5～0.7㎜）	硬質	灰色	1.98	3.92	71.72	1.04	20.94	0.30	1.03	56	115
5	〃	杯身	白色粒多い（0.5～１㎜）・黒色粒少し	硬質	灰色	2.75	5.53	69.95	0.92	21.19	0.49	1.49	138	132
6	〃	杯蓋	白色粒多い（0.5～３㎜）	良	暗青灰	2.44	6.67	68.44	0.73	19.56	1.03	0.76	155	94
7	畑の平５号墳	〃	白・黒色粒多い（0.5～４㎜）	硬質	灰白色	1.67	4.56	69.89	1.14	24.36	0.45	0.80	92	111
8	〃	〃	白色粒多い（0.5～４㎜）	硬質	灰白色	1.43	3.71	75.11	1.06	20.08	0.26	1.23	65	94
9	〃	〃	白色粒多い（0.5～６㎜）	良	灰色	2.69	7.71	62.55	0.98	24.74	0.46	1.60	85	114
10	〃	〃	白色粒極めて多い（0.5～５㎜）・黒色粒多い	硬質	灰白色	2.35	4.28	73.48	0.86	18.77	0.49	1.54	122	117
11	畑の平３号墳	杯身	黒色粒多い（0.5㎜以下）白色粒少し	良	灰色	1.90	5.79	69.51	1.02	20.90	0.85	1.05	139	84
12	畑の平６号墳	〃	白色粒多い（0.2～３㎜）	良	黒色	1.81	7.65	67.78	1.14	21.95	0.42	1.16	75	90
13	〃	杯蓋	白色粒多い（0.5～３㎜）	不良	灰白色	1.01	4.99	72.85	1.17	19.39	0.45	1.43	89	51
14	畑の平３号墳	〃	白色粒多い（２㎜前後）	硬質	淡灰褐	2.15	4.92	65.89	1.05	24.64	0.81	1.30	157	125
15	畑の平７号墳	〃	白・黒色粒やや含む（0.5㎜以下）	やや不良	灰白色	1.63	6.65	62.31	1.14	26.02	0.88	1.53	164	93
16	畑の平２号墳	〃	黒色粒多い（0.5㎜以下）・白色粒少し	硬質	灰白色	1.74	6.13	67.35	1.00	22.52	0.87	1.21	131	88
17	畑の平５号墳	杯身	白色粒多い（0.5～２㎜）	硬質	青灰色	1.96	4.41	68.89	0.95	22.47	0.70	2.60	142	126
18	畑の平１号墳	〃	白色粒多い（0.2～１㎜）	不良	灰白色	1.39	5.15	72.13	1.19	20.68	0.50	1.51	110	69
19	畑の平３号墳	〃	白色粒少し（１～２㎜）・黒色粒極めて多い（１㎜）	不良	灰白色	1.55	5.26	68.72	1.12	22.72	1.07	1.45	205	83
20	畑の平５号墳	高杯蓋	白色粒多い（0.2～３㎜）	良	青白色	1.60	6.18	65.76	1.04	23.13	0.89	1.35	174	94
21	〃	〃	黒色粒極めて多い（0.5～２㎜）・白色粒少し	硬質	灰色	1.93	3.61	73.32	0.99	19.71	0.42	0.90	99	106
22	畑の平１号墳	長脚高杯	白色粒多い（0.5～0.2㎜）	やや不良	灰白色	1.41	5.07	71.23	1.16	21.40	0.52	1.35	101	72
23	畑の平９号墳	高杯	白色粒少し（0.5㎜以下）	不良	暗灰色	1.43	3.23	72.26	0.84	19.19	0.32	0.62	80	75
24	畑の平７号墳	〃	白色粒少し（0.5～１㎜）・黒色粒僅少	良	青白色	1.68	3.46	75.09	1.15	18.52	0.41	1.97	104	92
25	畑の平１号墳	提瓶	白色粒僅少（0.2～１㎜）	硬質	灰色	2.08	5.53	65.07	0.94	25.36	0.78	1.23	141	119
26	畑の平８号墳	椀	白色粒僅少（0.5～１㎜）	不良	灰白色	1.74	3.66	74.20	1.32	18.83	0.36	1.27	102	82
27	畑の平７号墳	平瓶	白色粒少し（0.5～２㎜）	硬質	灰白色	2.26	4.15	67.07	1.02	23.73	0.88	1.37	182	131
28	〃	杯身	白色粒多い（0.5～２㎜）	硬質	灰色	2.20	4.43	66.30	0.89	23.70	0.90	1.44	194	127
29	〃	平瓶	黒色粒多い（0.5～１㎜）	硬質	灰色	1.93	5.41	69.38	0.96	21.11	0.71	1.42	115	102
30	畑の平８号墳	杯身	白色粒僅少（0.5～１㎜）	硬質	青灰色	2.79	5.22	61.70	1.09	27.69	0.34	1.72	99	122
31	畑の平９号墳	高杯	白・黒色粒多い（0.5㎜以下）	硬質	灰色	2.48	3.90	69.24	1.03	24.25	0.45	1.21	126	142
32	畑の平３号墳	平瓶	白色粒僅少（0.5～６㎜）	良	灰色	2.14	4.90	68.73	1.01	21.82	0.72	1.35	147	122
33	畑の平２号墳	横瓶	白色粒少し（0.5～４㎜）	良	灰色	1.96	6.31	68.03	1.19	22.26	0.19	0.82	31	88
34	畑の平７号墳	〃	白色粒多い（0.5～３㎜）	やや不良	灰白色	2.19	4.44	64.85	1.01	26.21	0.46	1.39	97	122
35	畑の平６号墳	〃	白色粒極めて多い（0.8～５㎜）	良	灰白色	1.96	5.17	70.54	1.78	21.19	0.35	1.46	85	105
36	畑の平５号墳	〃	黒色粒僅少（0.5㎜以下）	やや不良	灰色	1.11	4.92	71.72	1.32	20.59	0.49	1.26	109	55
37	畑の平９号墳	〃	白色粒僅少（0.5㎜以下）	やや不良	灰色	1.57	6.66	67.49	1.05	21.87	0.82	0.75	140	81
38	西大沢１号墳	甕	黒色粒多い（0.5～１㎜）、白色粒少し	良	灰色	2.11	6.04	69.45	0.85	21.41	0.19	1.00	62	109
39	畑の平３号墳	〃	白色粒多い（0.5～１㎜）、黒色粒少し	やや不良	灰白色	2.00	6.14	64.68	1.01	24.71	0.80	1.45	150	105
40	畑の平６号墳	〃	白・黒色粒少し（0.5㎜以下）	良	灰白色	1.73	3.09	70.59	1.12	22.27	0.75	1.10	141	93
41	畑の平７号墳	甕	白色粒多い（0.5～１㎜）	硬質	灰白色	1.68	3.77	73.33	1.09	19.24	0.33	1.38	89	96
42	〃	〃	白・黒色粒少し（0.5㎜以下）	硬質	灰色	2.13	5.06	67.16	1.04	24.15	0.72	1.25	157	117
43	虫尾遺跡	甕	白・黒色粒多い（0.5～１㎜）	硬質	灰色	2.09	4.46	72.39	1.03	20.38	0.52	1.37	113	116
44	〃	〃	白・黒色粒少し（0.5㎜以下）	硬質	灰色	1.41	6.27	67.28	0.97	22.31	1.11	1.81	111	73
45	〃	〃	白色粒少し（0.5㎜以下）	硬質	灰色	1.28	7.67	64.70	0.97	22.12	1.30	2.45	103	68
46	川戸１号墳	高杯	白色粒少し（0.5㎜以下）	硬質	灰色	1.33	7.62	66.22	0.96	21.84	0.93	2.01	100	70
47	木谷８号墳	甕	白色粒僅少（0.5㎜以下）	硬質	灰色	1.96	3.39	61.06	1.05	30.26	0.53	1.55	127	140
48	中原48号墳	甕	白色粒少し（0.5～１㎜以下）	硬質	灰色	2.97	4.60	66.03	0.96	22.88	0.75	1.57	209	135
49	勝央中１号墳	壺	黒色粒多い（0.5㎜以下）、白色粒少し	良	灰白色	2.32	4.29	68.78	0.90	22.32	0.70	1.80	127	123
50	大年１号墳	甕	白・黒色粒多い（0.5～１㎜）	硬質	灰色	2.17	4.35	70.54	0.93	22.02	0.65	1.69	140	129



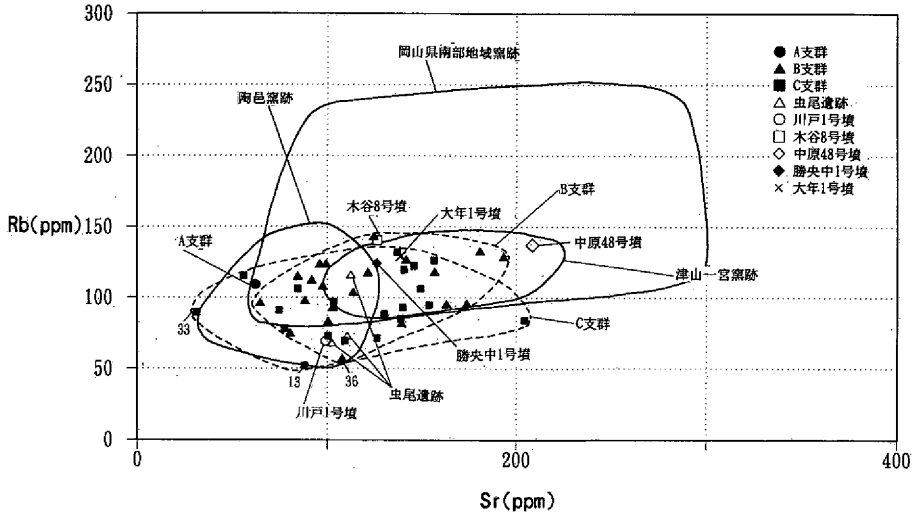
第1図　K_2O—CaO散布図
西大沢・畑ノ平古墳群内での器種別による比較



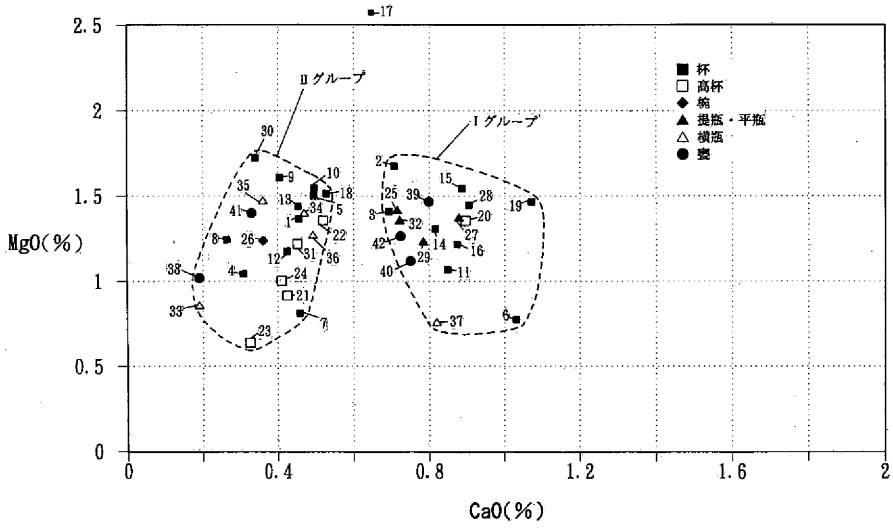
第2図　Sr—Rb散布図
西大沢・畑ノ平古墳群内での器種別による比較



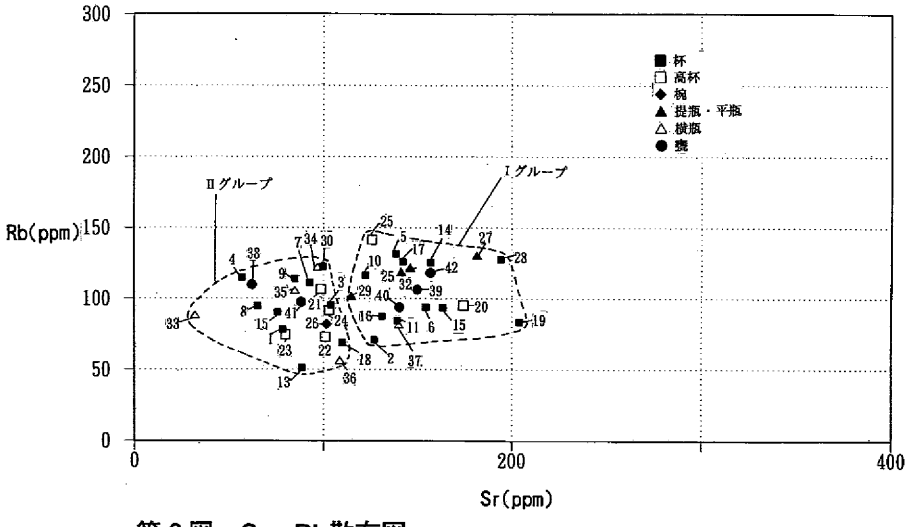
第3図　K_2O—CaO散布図
各支群別および各窯跡群との比較



第４図　Sr－Rb散布図
各支群別および各窯跡群との比較



第５図　CaO－MgO散布図
西大沢・畑ノ平古墳群内のCaO量でのグループ分け



第６図　Sr－Rb散布図
西大沢・畑ノ平古墳群内のCaO量でのグループ分け

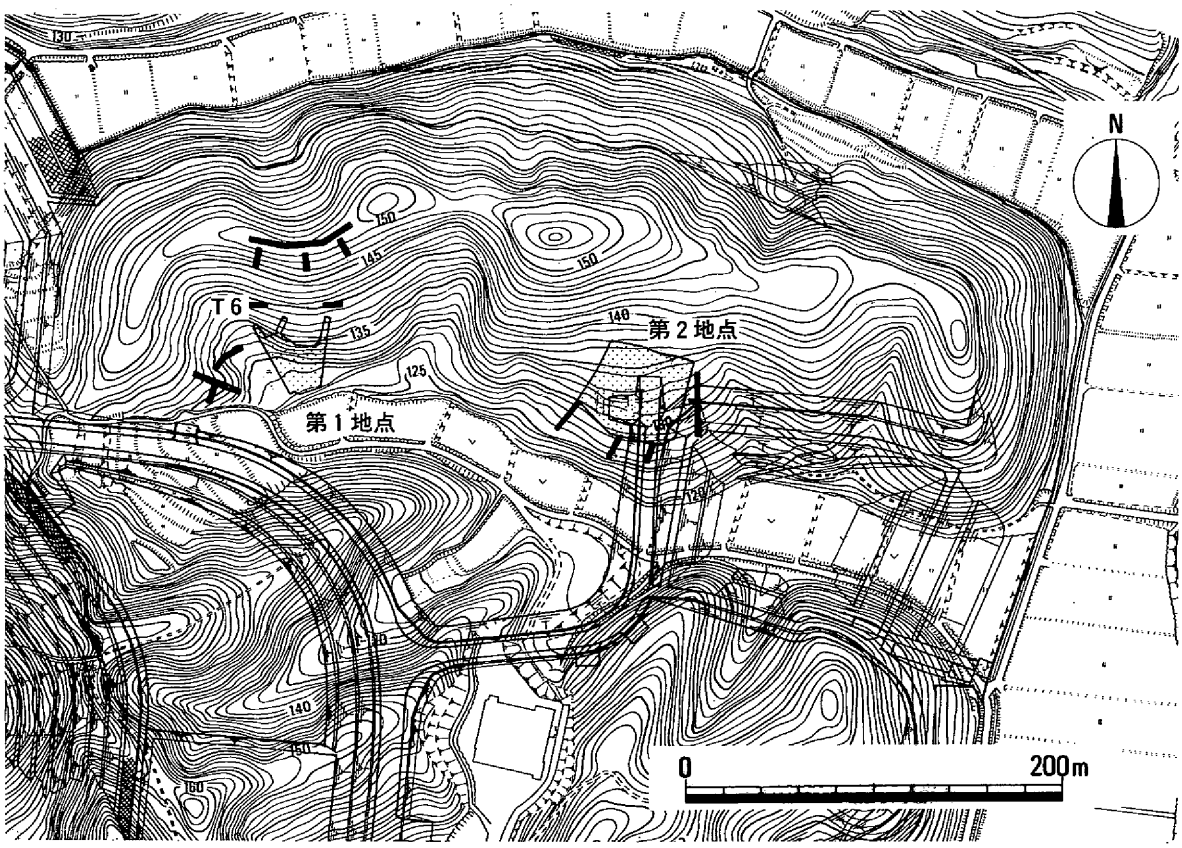
第4章　虫　尾　遺　跡

第1節　第　1　地　点

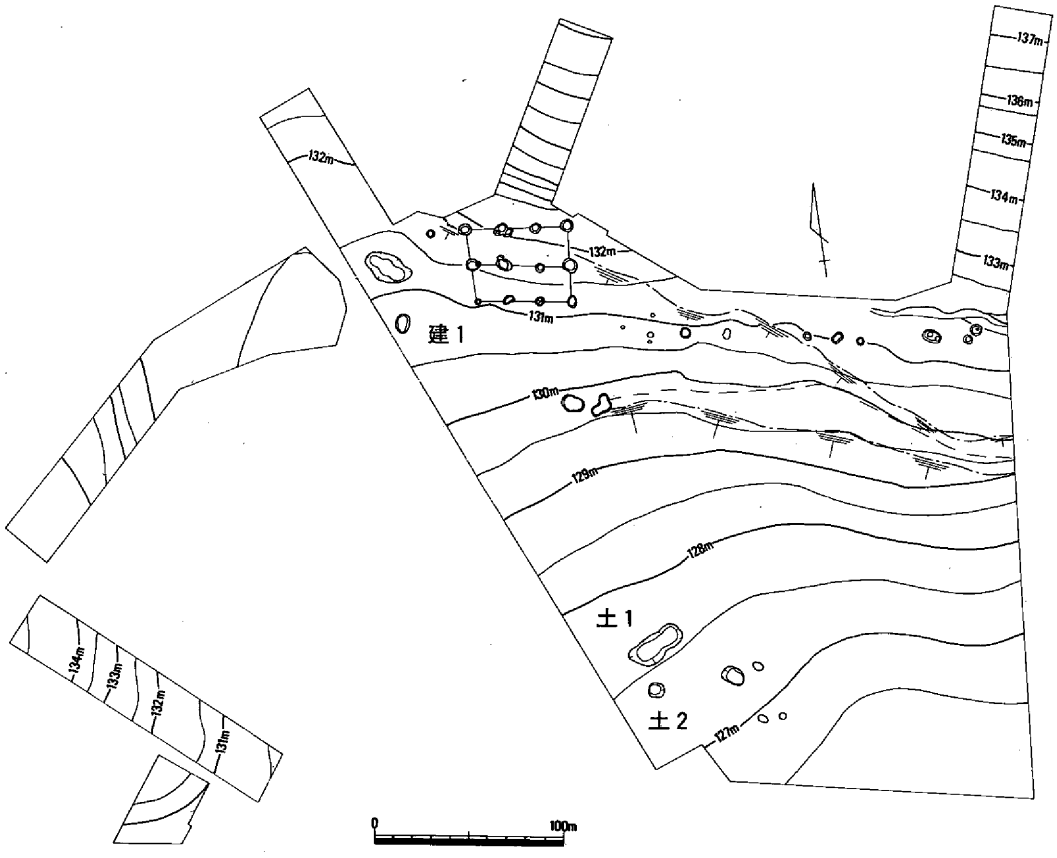
（1）調査前の状況・概要（第145・146図）

現在県道の勝央・勝北線が走る主要な谷部から西へはいるいくつかの支谷があり、またそれに区切られた東西に細長い尾根がある。虫尾遺跡第一地点はそのうちの一つ、谷の最奥部でかつ尾根の南斜面部に位置する。調査地の西側はさらに北西方向に浅い谷が入っており、谷部にはかなり分厚く黒ボク層が堆積していたがその周囲はかなり急な斜面であり表土直下はすぐ基盤層であった。そのため一般的な集落などは考えにくく窯跡などの存在が予測された。トレンチを入れたところ遺構の存在を確認できたため本調査に入った。さらに尾根の頂部とそこから谷底にかけての間にテラス状の比較的平坦なところが２ヶ所認められており遺構の存在も想定できることから、トレンチ調査を行ったがそこでは遺構は確認できなかった。

調査前の状況は谷筋は水田化されており、また調査の契機となった遺物採集地点についても調査前



第145図　虫尾遺跡調査範囲（1：4,000）



第146図　虫尾遺跡第1地点遺構配置（S=1：200）

は雑木林であったが、戦後の食糧増産の際に畑として開墾されていたらしく、調査区のある南斜面は旧地形を大きく改変して、3段の平坦な面に造成していた。

（2）建物・土壙（第147・150図）

建物1（第147図）

黒ボク層を除去した後に検出した掘立柱建物である。斜面部に位置するために、下方である南側の桁行きの柱は、柱の大きさはやや小さく、桁行きの長さも5.1mと北辺の桁行き5.5mより狭くなっている。梁行きは東辺で4.1m、西辺が3.9mと全体に歪な台形状を示す。また柱穴底のレベルについても差はあるが、この部分の柱を高くし床面を水平にしていたと考えられ、この柱列を含めると2×3間となり総柱建物の可能性もある。

柱穴中から須恵器甕の細片が数点出土しており、それ自体から時期を決めることは困難であるが包含層中の遺物の様相から平安時代前半に求められよう。

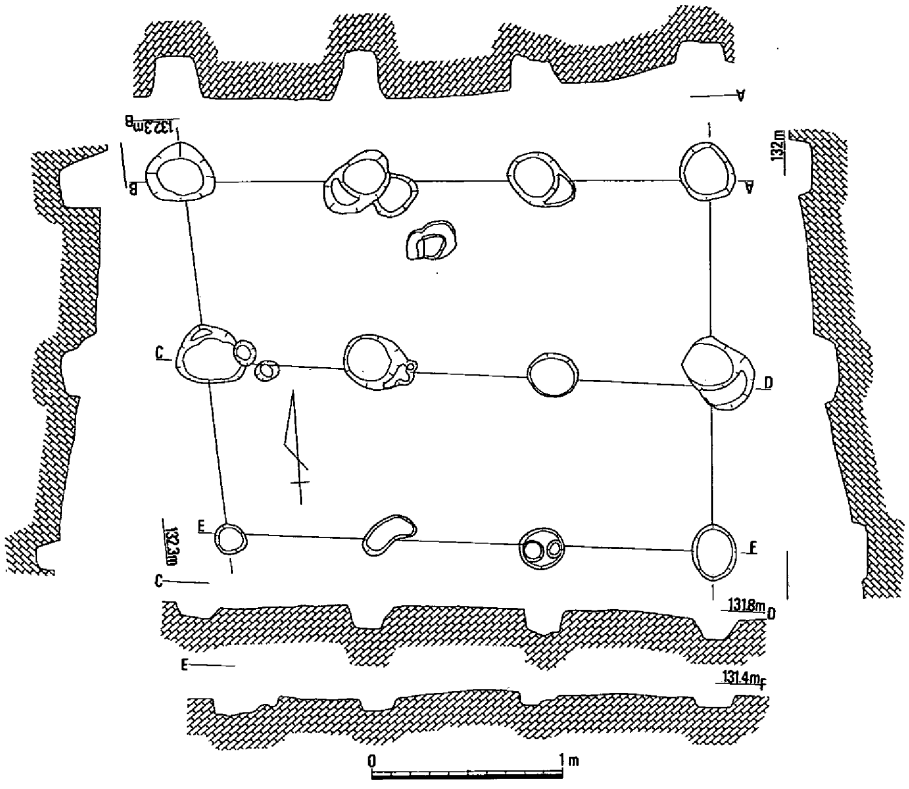
土壙1（第149図）

長さが0.8m、幅は0.75mの長方形を呈し、深さは0.25mを測る。この土壙の中央、埋土の最上面に拳大の角礫とともにいくつかの遺物が出土している。

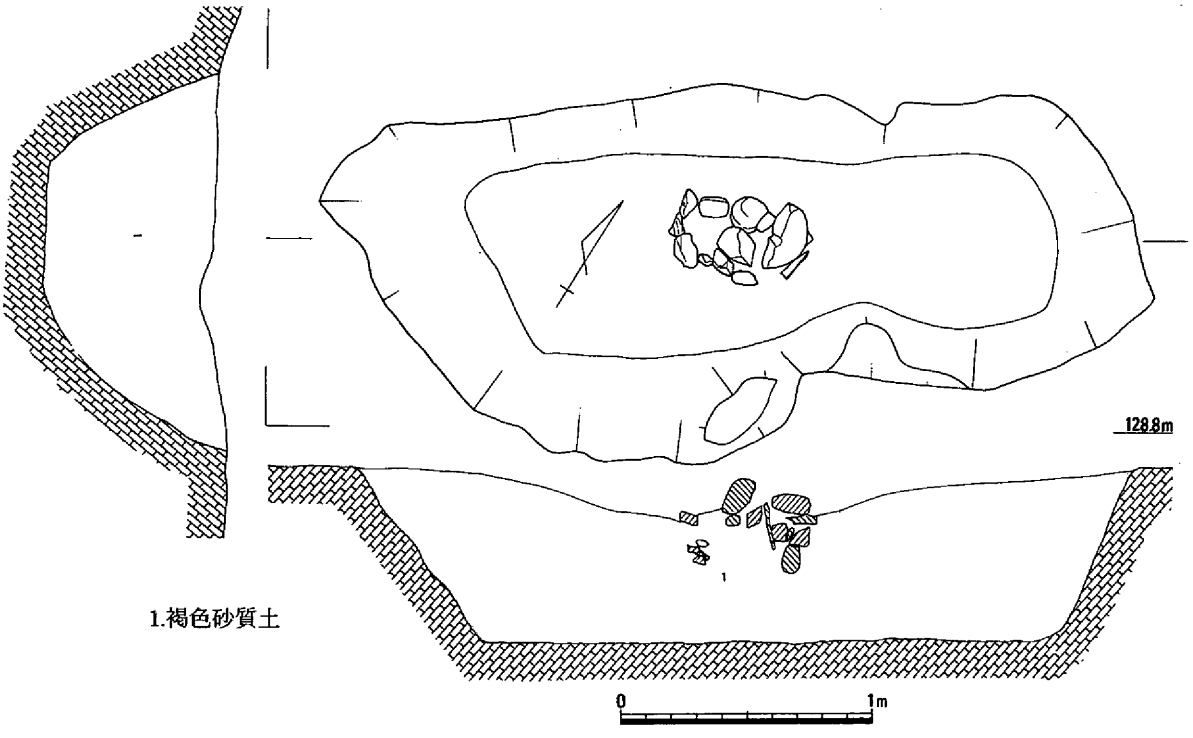
出土した遺物には須恵器1～3と石臼4がある。

1は杯の底部片で焼成は悪く灰白色を呈す。2は杯ないしは壷の底部片である。底端部から外側に「ハの字状」に広がる高台がつく。3は甕の胴部片であり、外面に格子タタキが、内面には同心円文

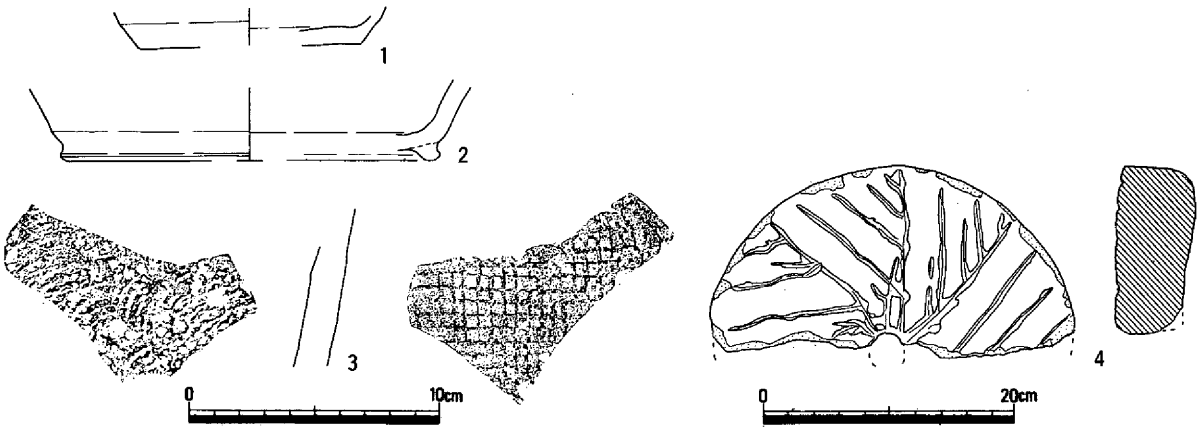
の当て具痕がみられる。２・３ともに焼成は良好であり灰色を呈す。胎土は0.5～２㎜の白色粒を極めて多く含んでいる。



第147図　建物１実測（S=1：40）



第148図　土　壙　1



第149図　土壙１遺物実測（S=1：6．石臼）

４は凝灰岩製の石臼の下臼である。約半分が欠けているが、副溝に区切られた目は８分割で反時計方向にまわると思われる。

この土壙の時期は遺物から９世紀前半と考えられる。

土壙２（第150図）

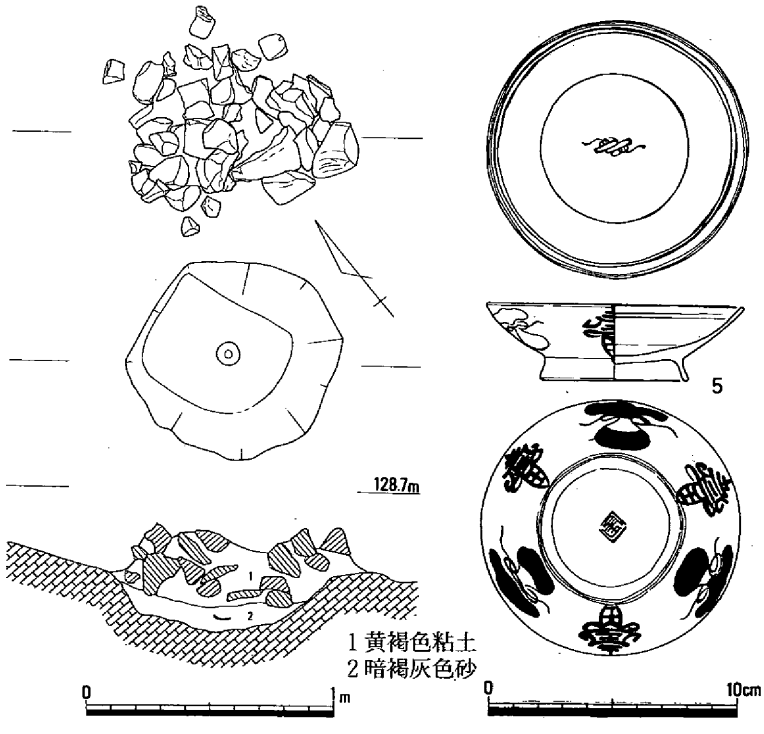
直径0.9ｍの範囲に拳大から人頭大の亜角礫が集中しており、その下からは基盤層を掘り込んだ土壙が検出できた。現地表面からは0.6ｍほど下がったところである。

土壙の規模は上面では長さ3.1ｍ、幅は最大で1.5ｍ、深さ0.6ｍの不整形な形を取るが、底面では0.55×0.4ｍのほぼ長方形をなす。遺物は土壙底のほぼ中央に椀が１点のみ出土している。

５は肥前産磁器の皿である。外面には寿福を合字したものと紐の付いた袋を３方に染め付けている。高台内の銘は変形字を二重方形枠内に納めるもので18世紀後半から幕末にかけて用いられたと考えられるものである。

遺構の性格については、集石の在り方からして墓の可能性が考えられる。

この土壙に類する例として岡山市津寺遺跡西川調査区で検出された土壙墓３基は正方形に近いプランであり、その中に板を組み合わせただけの簡単な木棺と全身を完全に折り畳んだ屈葬の人骨があった。それには



第150図　土壙２・遺物実測

漆椀１点以外に遺物は見つかっていないが、層位などから江戸時代と考えられている。さらには山梨県二本柳遺跡においても12枚の板材を組み合わせる正方形に近い木櫃状の木棺があり、その中に６道銭と人骨、中央には稲穂を入れたかわらけが見つかっている。この土壙２においてもおそらく正方形に近い木櫃状の中に磁器皿を中心に配し人骨が納められていたとみられる。

これら以外にも遺物を伴わない土壙が数基と柱穴群がある。

（３）出土遺物（第151～153図）

遺構の希薄な状況に比べ土器類、瓦、鉄製品など各種の遺物が包含層中より見つかっておりいる。

土器類

コンテナにして６箱ほどの須恵器、土師器、および黒色土器が出土している。

須恵器（第151図６～42）

杯蓋（６～15）　つまみの付くもの（６～８）と天井が平坦でおそらくつまみの付かない（９・12～14）がある。６は丸い天井の中央部に擬宝珠様のつまみがつき、そこから口縁端にかけて緩やかに下がり、端部近くでわずかに折り返す。15は口縁端を強く外下方にナデ、蓋受けの折り返しはない。つまみの有無はわからないが形態的には６に近い。それ以外は口縁部にわずかでも段をなすという共通の特徴がみられる。

杯身（16～24）　杯部の浅い杯Ａ類と深いＢ類がある。全容のわかる資料は少なく、底部片を主に図示しているが、かなり底部端に近い位置で「ハの字状」に開き、外側端で接地する高台をもつが多い。

杯身Ａ20は口縁部が緩やかに外反し、底部は平らで底端よりやや内側から垂直に立つ高台が付く。

杯身Ｂ22・23は比較的長く、やや外反気味の口縁部で、端部は丸く終わる。底部は平坦で「ハの字」に開く高台が付く。

壷類（25～30）　小型の瓶類の口縁部30と底部の25がある。29は広口壷の頸部片で、26・27は高台の付く壷の底部である。

甕（31）　肩部から口縁部にかけての破片である。口縁端部は平坦な面をなす。

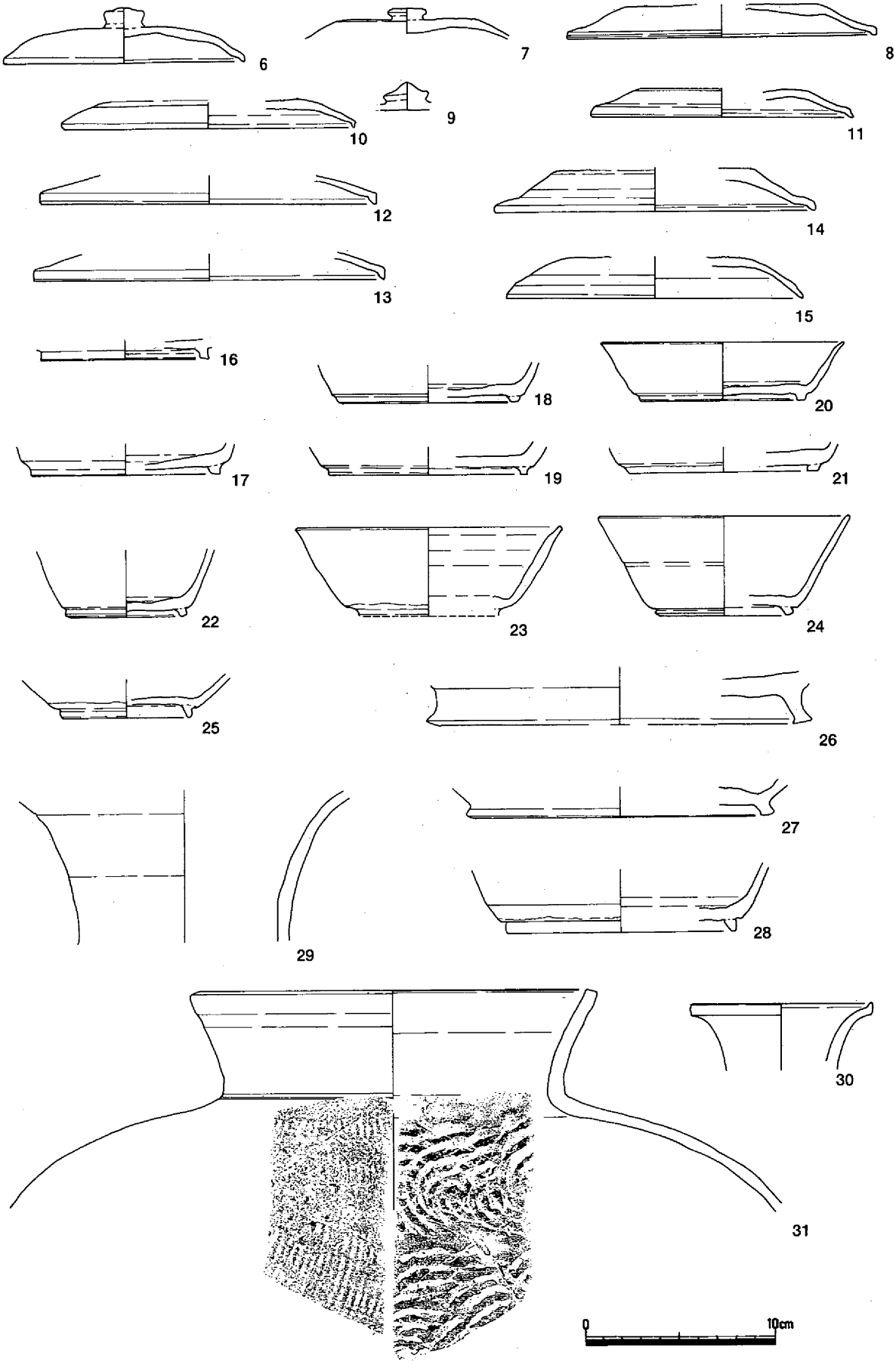
以上の須恵器類と比べ焼成の悪く、灰白色を呈す一群がある。回転台土師器とは区別して一応須恵器としておく。

32～37は高台の付かない杯である。遺存状況が総じて悪いが35は底部外面をヘラ切り後にナデて終わる。38は盤で底部は丁寧なナデが施される。39～42は皿で、41は底部外面をヘラ切り後にナデて、内面は不整方向に仕上げのナデがみられる。

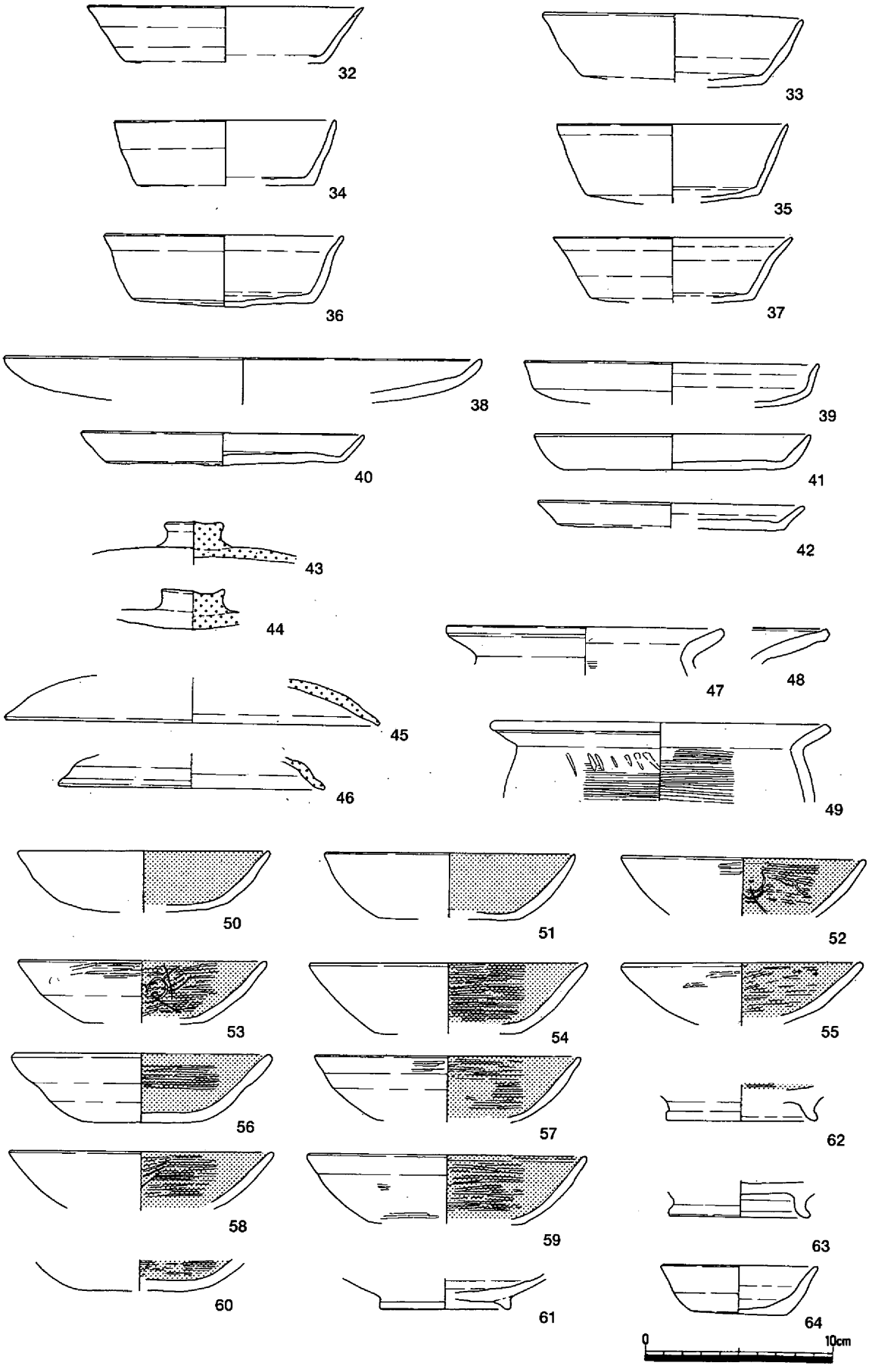
土師器（第152図43～49）　43・44は中央が凹んだ扁平なつまみ、45・46は口縁部の破片であり２個体以上分の蓋の破片である。色調は橙色を呈し、胎土は精良で１㎜以下の長石・石英と赤色班粒を少し含むものである。外面はケズリ後ナデで端部近くを外下方にかなり強くナデている。端部は蓋受けの折り返しがない須恵器の蓋15と類似することから、この地域の特色を示す形態であろう。口縁端部は丸く終わる。43～46は須恵器を模倣した土師器で、外面の一部に赤色顔料らしきものが見られる。

47～49は甕の口縁部である。49は外面の頸部下において、ハケメの下にわずかにタタキが観察できる。

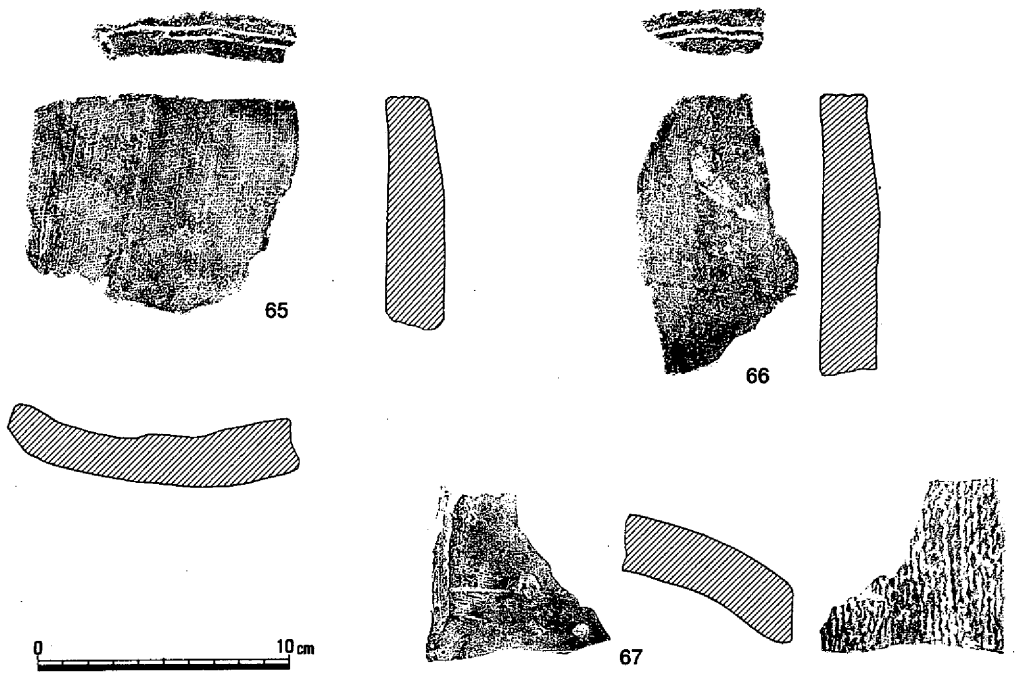
黒色土器（50～62）　黒色土器Ａ類、いわゆる内黒の椀である。50～60は高台の付かない椀Ａで、62・63は外側に強く踏ん張る高台が付く椀Ｂである。いずれの個体も概ね内面に横方向のヘラミガキとその上に暗文風のミガキを施すがみられる。この中で、50は内面のヘラミガキは不明瞭であるが、

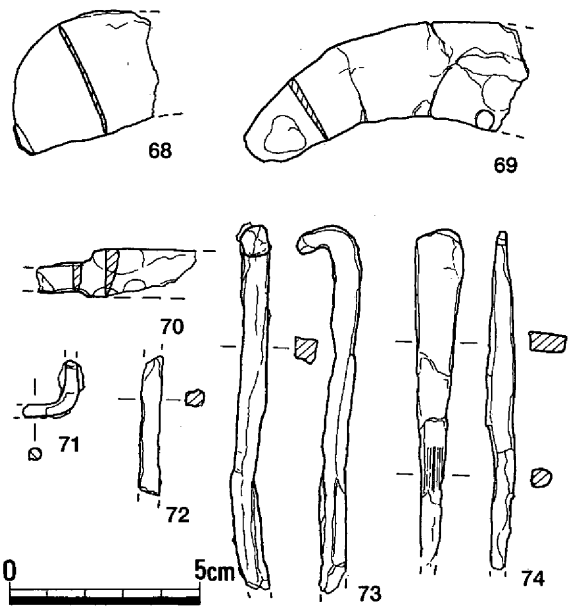


第151図　包含層遺物(1)



第152図　包含層遺物(2)





第153図　包含層遺物(3)

外面の中央から下底端部にかけてヘラケズリを行っている。51は内面に横方向と暗文風のミガキを施し、外面にはやはりケズリが認められる。

美作地域では美作国府においてⅡ－C期の遺構であるＳＤ５０３内で黒色土器のⅢＢがある。これらのものも須恵器と照らし合わせて9世紀の初めから中葉であり、橋本編年のⅠ期に入る資料と思われる。

勝間田焼（63・64）　63は輪高台をもつ椀の破片で、64は小杯である。63は勝間田焼編年のⅠ－1期である。

瓦（第153図65～67）

いずれも平瓦片である。67・68は一部に端面が残る破片でその端部に2条の沈線がめぐる。外面はケズリの後ナデ、内面には布目痕と桶の模骨痕が残る。66と67は同一個体であろう。67は側面の残破片で、外面には目の細い縄目タタキが、内面には布目痕が残る。

鉄器類（第153図68～74）

68・69は鎌である。68は厚さ1.5㎜程の極めて薄い鉄板であるが、端に折り返しがみられる。69は切先部分で茎部を欠損する。70は切先と茎部を欠くが刀子片であり、関は両関である。71はL字に折れ曲がった金具片、72は棒状を呈するが両端を欠く不明品である。73は釘で、頭部は体部からそのまま折り曲げて造る。74は鑿で切先は山形をなし両刃である。無関で、茎部には柄の木質が残る。

第２節　第　２　地　点

（１）調査の概要（第145・154図）

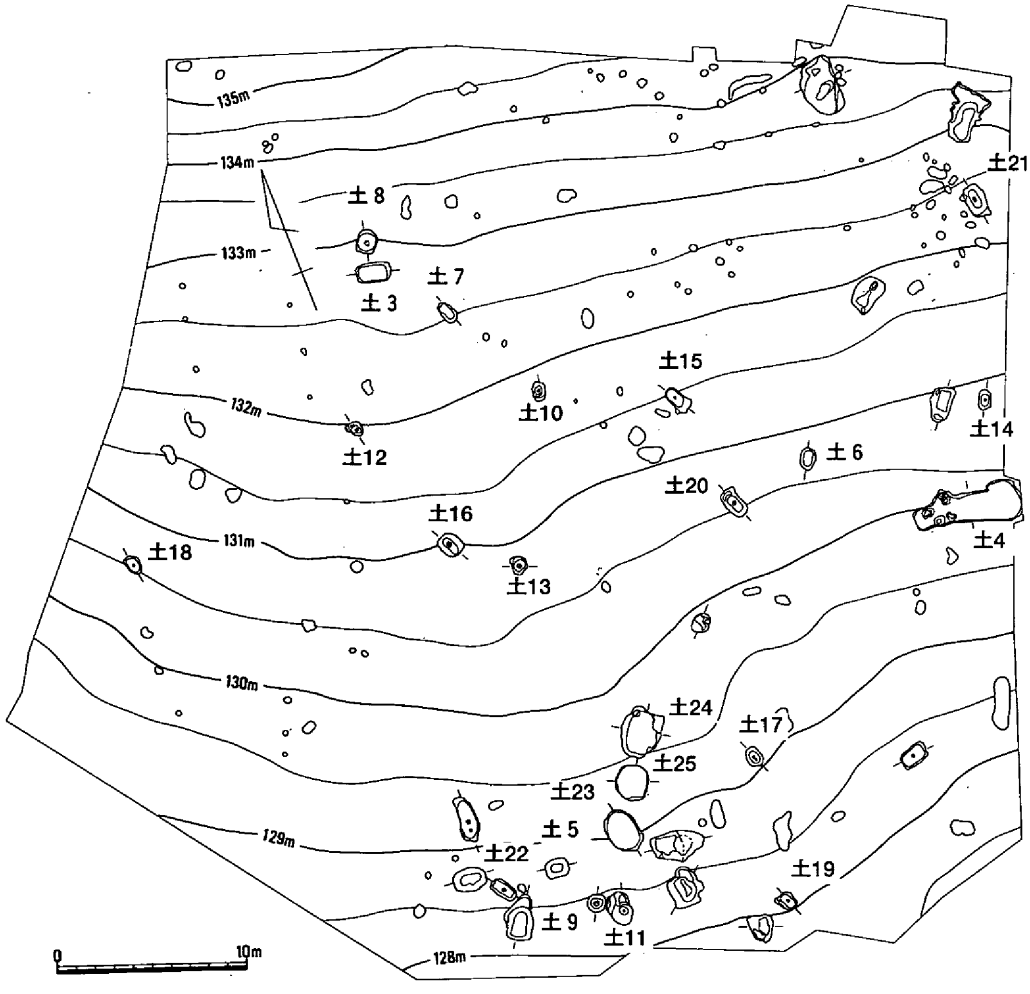
先の第１地点から東に約150ｍ程離れた所に位置する。第１地点と同じ丘陵上であり、尾根筋から南に60ｍ下がった所から、傾斜が南に緩やかに下がる広い舌状の斜面部分がある。表層滑りを起こしたような地形上の特色をなしている。

この場所は立地上の好条件とともに踏査時に遺物を採集していることから、先ずトレンチ調査を行い、その結果遺構を確認したために範囲を確定して引き続き本調査に入った。

調査前の状況は大半が檜の植林地となっており、一部に丘陵の先端部分が畑地として段状に造成された後に竹林となっていたが、聞き取りによるとそれよりかなり以前の段階には桃畑として開墾されていたらしい。

調査区内ではわずかに黒ボク層が残る箇所もみられたが概ね表土直下30㎝で基盤層となっており、遺構の検出はそこから始めている。

検出できた遺構は土壙及び柱穴であるが、柱穴のほとんどはわずかに底を残すのみであったため建



第154図　虫尾遺跡第２地点遺構配置（S＝1：200）

物としてはまとまっていない。

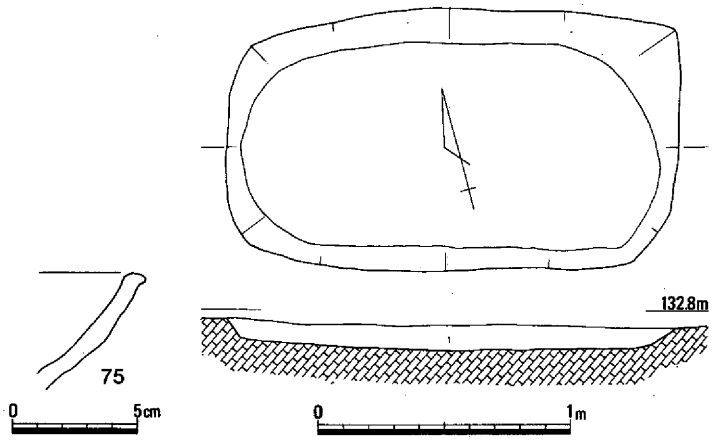
（２）土壙（第155～178図）

土壙には中世に属するものと縄文時代に属すると考えられるものがあり、後者には形態などの特徴から３類に分けられる。

土壙３（第155図）

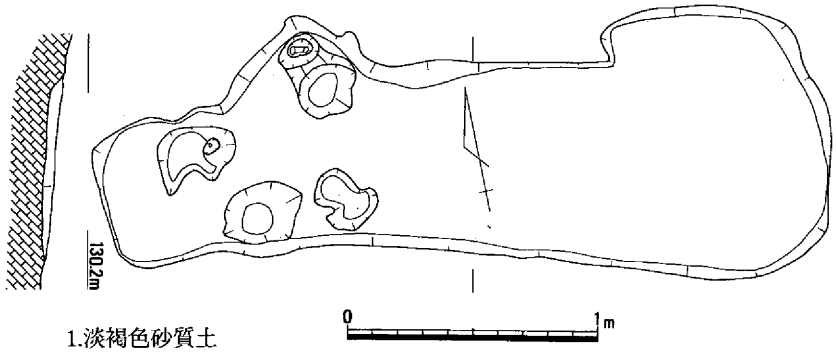
長軸で1.8ｍ、短軸が１ｍ、深さは0.1ｍの長方形を呈する土壙である。

遺物は１点のみで、内湾して立ち上がり口縁端部は肥厚する。勝間田焼の鉢と思われる。胎土は精良でやや微細な白色粒少し含む。暗青灰色を呈し、焼成は堅緻である。勝間田焼でも最古の部類に入ると思われ、平安時代後半に位置づけられる。



1.褐色砂質土

第155図　土壙３・出土遺物



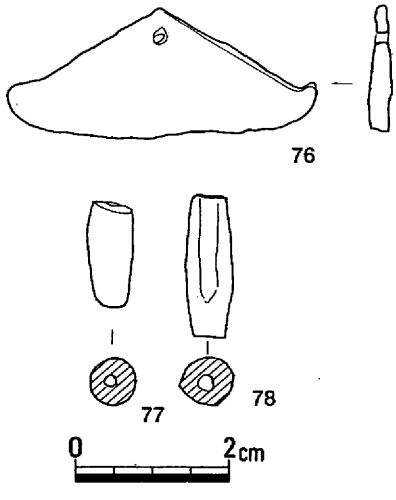
1.淡褐色砂質土

第156図　土　壙　４

土壙４（第156・157図）

長さは2.9ｍ、幅が1.05ｍのかなり不定型でかつ深さは検出面から10㎝未満と浅い土壙である。土壙底にはさらに柱穴状の落ち込みがみられた。

遺物は土器の細片が少量あるが時期を決めうるほどのものではない。76は火打ち金である。山形を呈し、厚さは６㎜を測る。右側端は上方に反る。頂部下に紐孔がある。77・78は小型の糸巻き状の土錘である。



第157図　土壙４遺物

土壙５～７（第158～160図）

土壙５は長さが1.5ｍ、幅は0.95ｍの長方形のプランを呈し、深さは検出面からで0.6ｍを測り、壁面はほぼ真っ直ぐに立ち上がる。埋土は褐色砂質土の１層で埋まっている。土壙底は平坦であり杭の痕跡などは見つかっていない。遺物は土壙底近くで１点出土している。

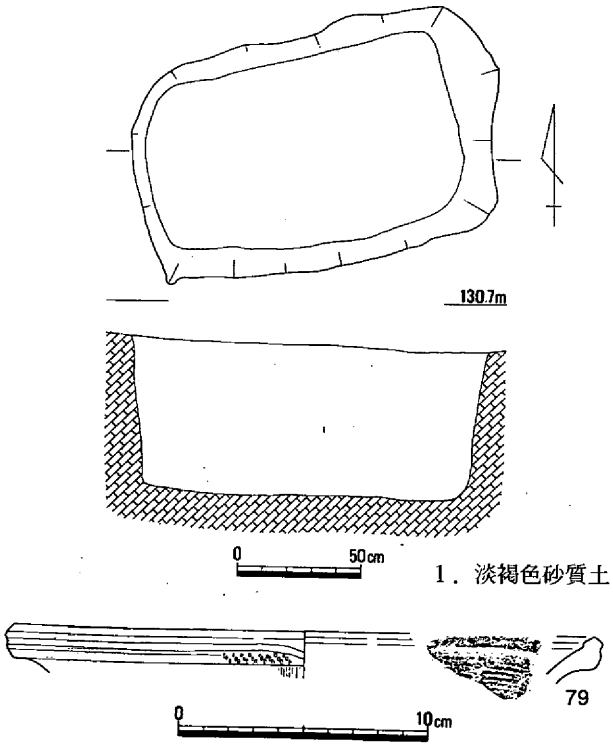
79は縄文土器片である。口縁端部を肥厚させてその外面には縄文を施文している。内面には端部近くに１条の沈線がめぐり、それより下には平滑なミガキが認められる。いわゆる縁帯文土器であり、縄文後期中葉の津雲Ａ式に相当すると思われる。

土壙６は長さは1.1ｍ、幅が0.7ｍ、深さは0.6ｍを測る。土壙７は長さは1.2ｍ、幅が0.65ｍ、深さは0.6ｍである。ともに土壙３と同じく長方形のプランであり、かつほぼ真っ直ぐに掘られており、しかも底面は平坦に近く、かつ土壙底に杭の痕跡はない。

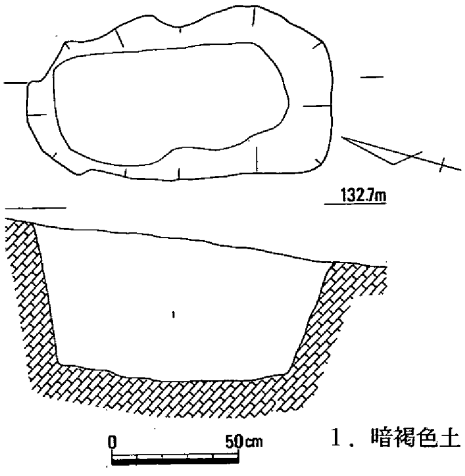
土壙５～７は縄文時代の落とし穴遺構の可能性がある。

土壙８～13（第161～166図）

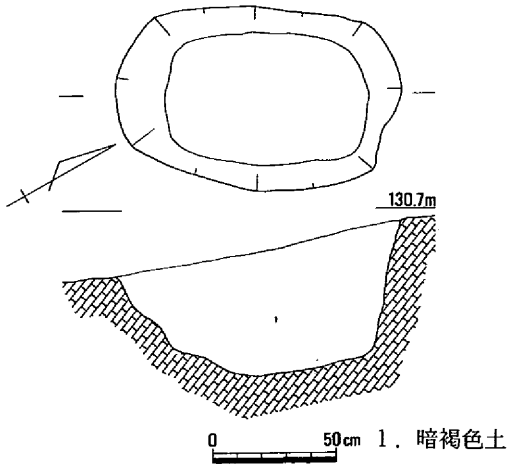
平面形が円形ないしは隅丸方形を呈し、かつすべての土壙底において杭の痕跡が認められる土壙群である。土壙の規模は長さが1.25～１ｍ、幅は1.25～0.65ｍで、深さは0.5～0.85ｍを測り、掘り込み角度はかなり急で壁面はほぼ真っ直ぐに近く立ち上がる。土壙底についてみると土壙８は比較的底部が平坦な面となっているが、それを除くといずれも底部は皿状に凹む。また杭の痕跡については、中央に１つのみある（土壙９～11）もの、２つあるもの（土壙８・12）と、３つある土壙13がある。大きさ、深さもまちまちであり、



第158図　土壙５・遺物



第159図　土　壙　６

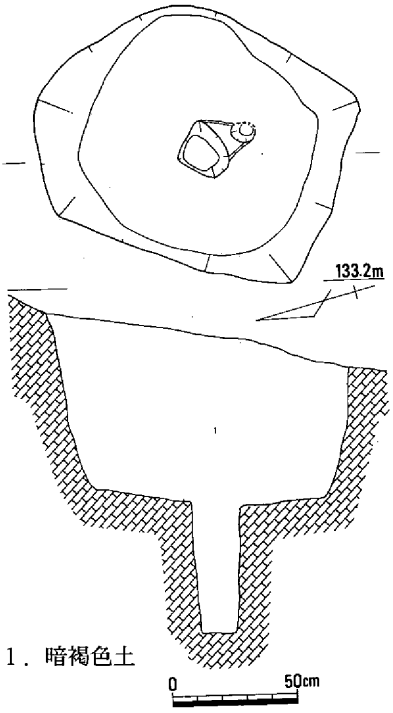


第160図　土　壙　７

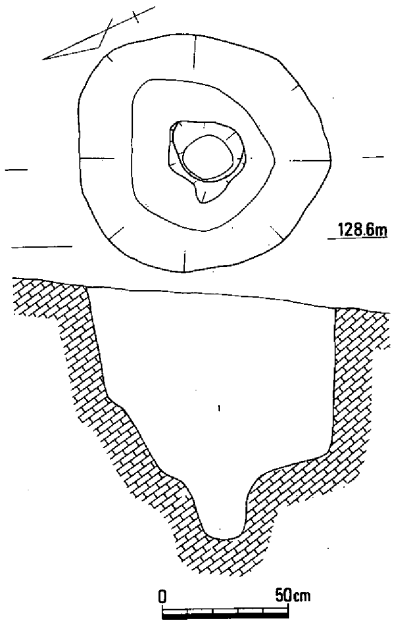
土壙８では直径が20㎝、深さは50㎝あまりあるが、その他は深さが30㎝未満で、直径10㎝程度のものである。なお、土壙11については２つ以上の土壙が重なっていたようである。土壙の埋土はいずれも暗褐色砂質土（黒ボコ）で埋まっている。

土壙14～20（第167～172図）

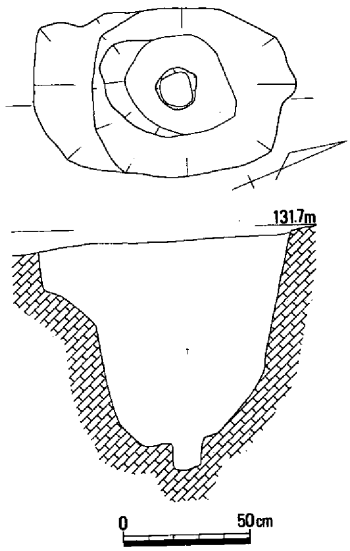
隅丸長方形の平面形を呈する一群である。土壙の大きさは土壙14・17～19が長さが１～1.3ｍ、幅



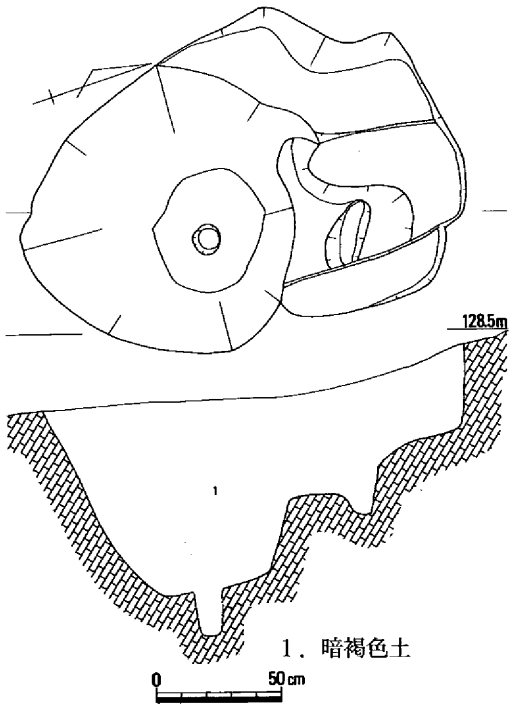
第161図　土　壙　8



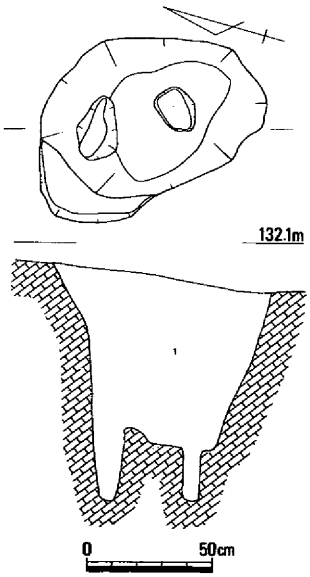
第162図　土　壙　9



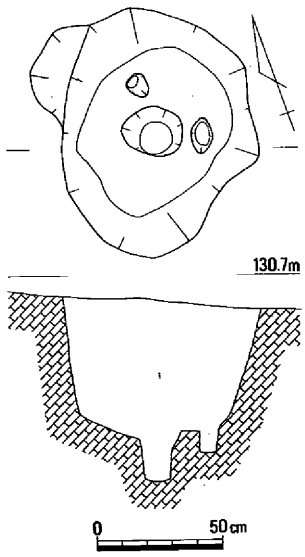
第163図　土　壙　10



第164図　土　壙　11



第165図　土　壙　12

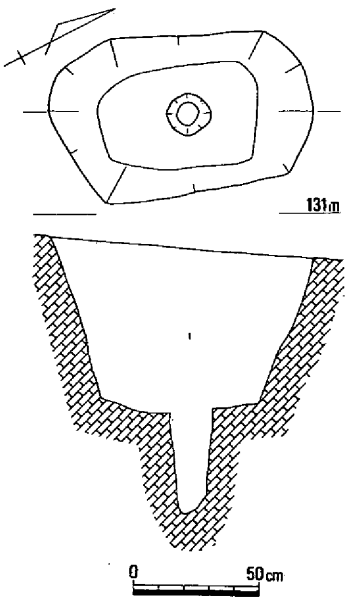


第166図　土　壙　13

は0.6～１ｍで、深さが0.3～0.7ｍとやや小さく、土壙15・16・20～22が長さは1.4～1.6ｍ、幅が0.7～１ｍで、深さは0.6～１ｍとやや大きいものである。その他の特徴は先の土壙群と共通であり、垂直に近い角度で掘り込まれ、また土壙底に杭の痕跡がみられる。

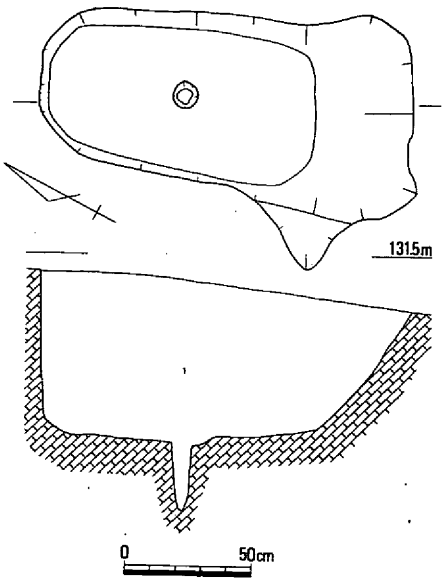
杭の痕跡は土壙底の中心に一つあるものが大半であるが、中には土壙17・21のように２つあるものもあり、さらに土壙21ではその杭と杭の間に小礫を挟み込んでいた。また杭痕跡の大きさに関しては土壙16や22のように直径が20㎝あまり、深さが40～50㎝のものもあるが、多くは直径が10～15㎝で、深さが40㎝以下のものである。

以上の土壙６～22については時期を特定するものは何もないが、各地域で見つかっている同様な形状の遺構と同じく縄文時代の落とし穴土壙と考えて良いと思われる。



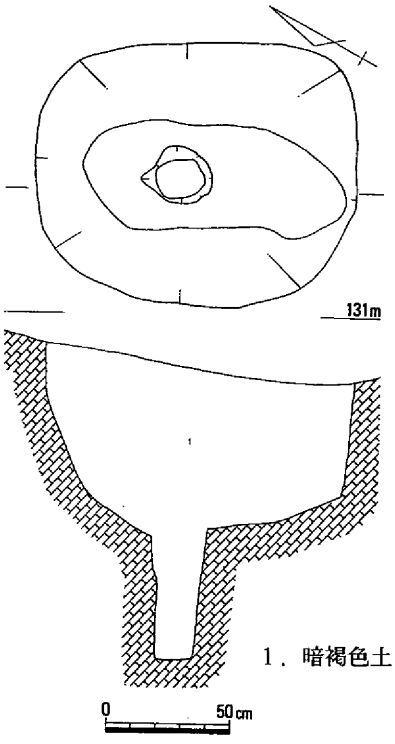
１．暗褐色土

第167図　土　壙　14



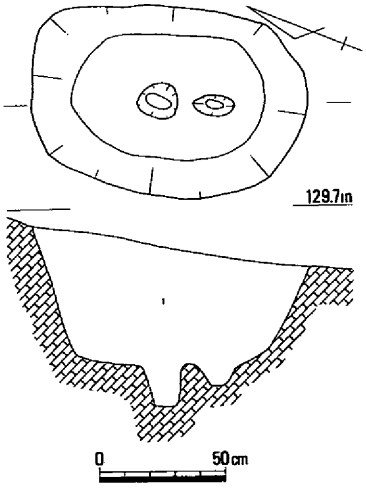
１．暗褐色土

第168図　土　壙　15



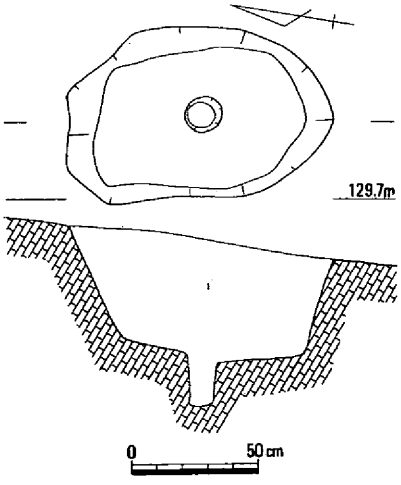
１．暗褐色土

第169図　土　壙　16



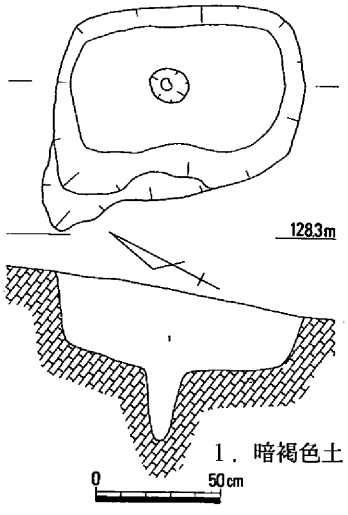
１．暗褐色土

第170図　土　壙　17



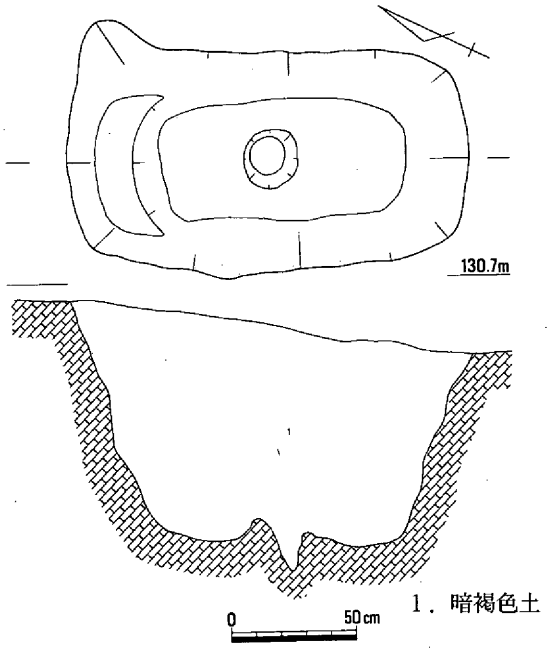
１．暗褐色土

第171図　土　壙　18

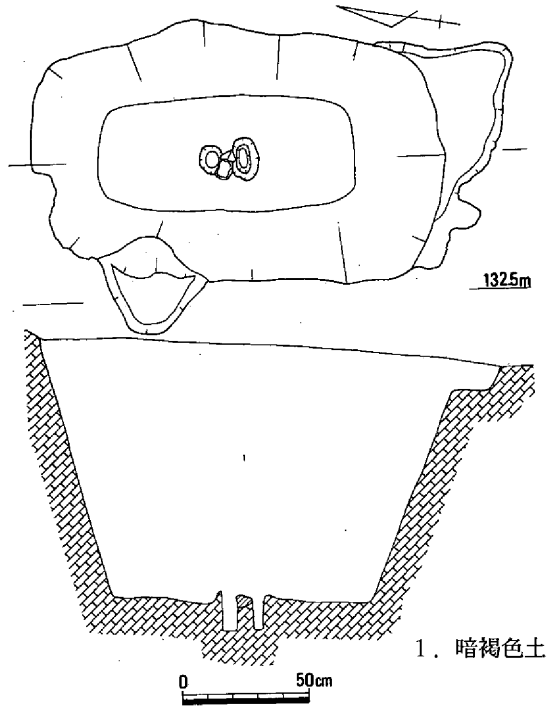


１．暗褐色土

第172図　土　壙　19



第173図　土　壙　20



第174図　土　壙　21

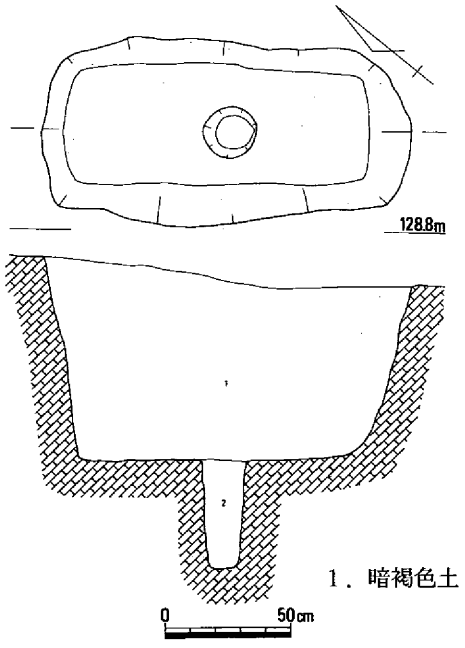
土壙23～25（第176～178図）

平面形が円形から長円形を呈し、深さは比較的浅い。

土壙23は長さが1.8ｍ、幅が1.2ｍ、深さ0.5ｍである。土壙24は長さが2ｍ、幅は1.5ｍ、深さ0.5ｍ、土壙25は長さが1.5ｍ、幅は1.4ｍ、深さが0.4ｍのほぼ円形に近い土壙である。どの土壙からも遺物は出土していない。

これらが縄文時代の遺構であるとすると、類例が、中国横断道建設に伴って調査された川上村中山西遺跡[1]において見つかっている。それによると土壙の埋土中から縄文早期の押型文土器が出土しており住居として理解されている。そのそばには落とし穴状の土壙が多く検出できており、当遺跡のあり方との類似性が注目できる。

ところで、現在までに岡山県内での縄文早期の住居跡の例としては津山市の太田茶屋遺跡において一軒が確認されている。その住居は径８ｍの円形の竪穴住居で壁体の周りに杭の痕跡がめぐるものであり、中山西遺跡のものとは異なる形態をとる。しかし中山西遺跡の例を住居と理解するならば、この土壙についてもキャンプサイトとしてみることも可能ではなかろか。



第175図　土　壙　22

（３）柱穴・表土中の遺物（第179・180図）

柱穴の底にあったものは大半が勝間田焼の椀と皿であり、地鎮などに用いられたと考えられる。80

は深い椀形で、口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸く終わる。底部は欠損するが高台が付くと思われる。

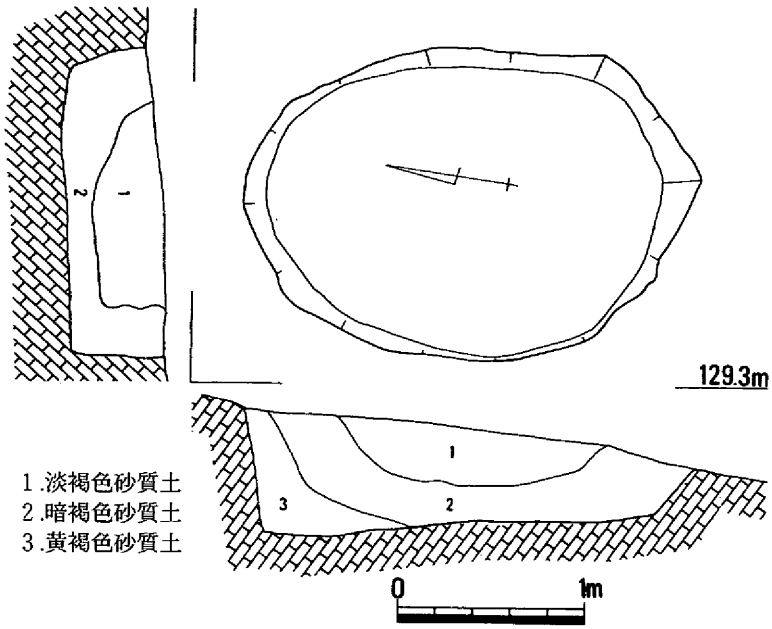
81・84・85は平高台であり、底部は回転糸切りである。このうちで84はほぼ完形であり、底部から大きく内湾しながら立ち上がり、口縁端部はやや肥厚して丸く終わる。

89は同じく勝間田焼のⅢである。底部は回転糸切りである。

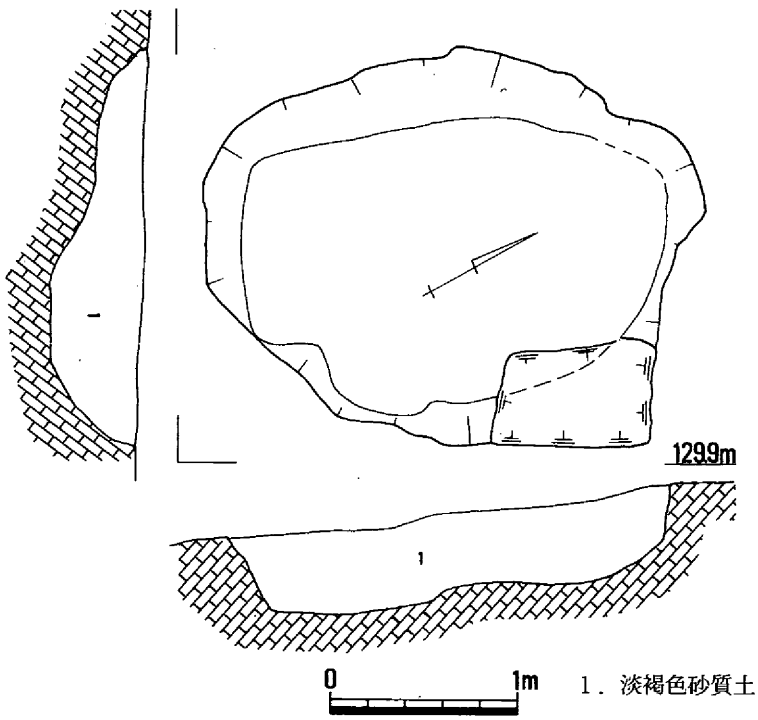
これらの時期については80が最も古く、勝間田焼の編年[2]ではⅠ－１期に相当し11世紀に入る可能性がある。87もほぼ同時期であろう。82・84・86・89などがⅡ－２期に相当しおよそ12世紀の後半、88はⅢ－２期に相当し13世紀に入るであろう。

91は外面に楕円の押形文を付しており縄文早期、黄島式の土器片である。

83は柱穴底から出土した径が10cm、厚みが８cm程の石である。石材は花崗岩であり、表面はかなり風化しているものの、表裏ともに比較的平滑であるのに対し側面はかなりあれて打撃を受けたような感じであることから叩き石ではないかと思われる。積極的に時期を決める根拠はないものの縄文時代の遺物とみて良いのではないだろうか。



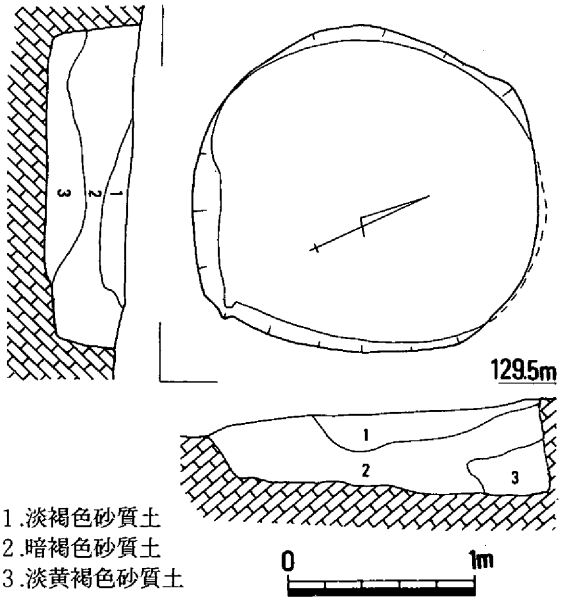
第176図　土　壙　23



第177図　土　壙　24

第３節　調査のまとめ

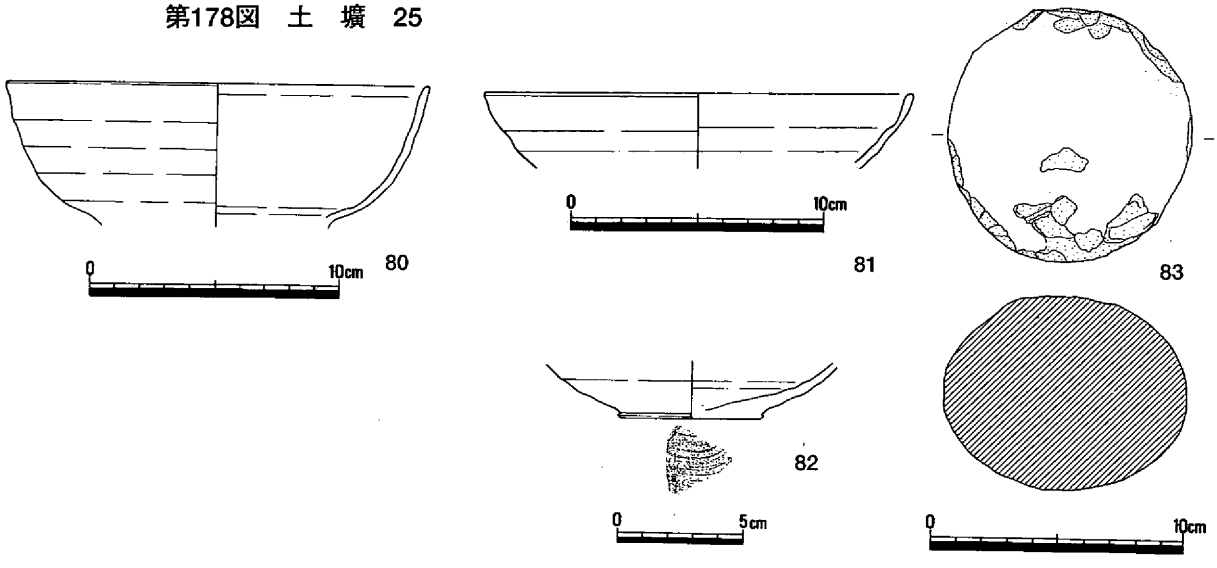
今回虫尾遺跡として二つの地点について調査を行ったが、実際にはそれぞれ時期・性格ともに異な



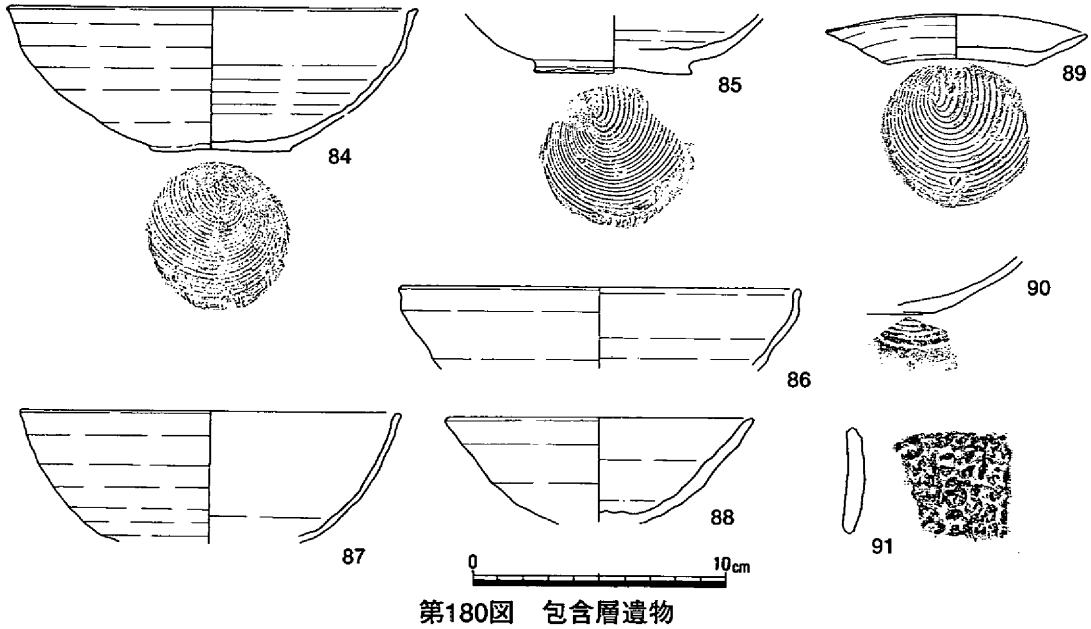
第178図　土　壙　25

るものであった。

第一地点は畑地のための開墾による地形の改変や自然による土砂の流失が著しく遺構の遺存状況はかなり悪いものであった。ただし、トレンチ調査の結果でも、Ｔ－６からは遺構は存在しなかったものの須恵器片が数点出土しており、山頂やその下のテラス部にも建物などの遺構が存在していた可能性が強いと思われる。これは調査区内のテラス部においても同様で、建物１の東側に柱穴群がみられるようにこの部分は削平前には数棟の建物が存在していたようである。



第179図　柱 穴 遺 物



第180図　包含層遺物

出土遺物は遺構には伴わないものの須恵器や土師器の他に瓦、鉄製の鎌などの農耕具や釘、土錘といったものもみられ、一定期間の生活の場であったことが窺われる。

この遺跡を特色づけるものとして、わずかとはいえ瓦を出土しており瓦葺きの建物の存在も窺いしれる。その他には黒色土器と須恵器を模倣した土師器の存在があろう。この黒色土器は岡山県下でも最古の部類に入るものでその入手経路はかなり限定されるものではなかろうか。また、須恵器模倣の土師器の杯蓋についても、胎土は精良であり一部に赤色顔料らしき付着がみられることから通常の集落において一般的に使われていたとは考えにくいものである。

出土遺物の年代[3]は平安時代後半の勝間田焼を少量含むものの主体になる時期は平安時代の初め、９世紀の前半にある。当該時期の遺跡は美作地域全体を通しても決して多くなく、またそれらは国府や郡衙推定地、寺院であり一般的な集落については充分に検討できるだけの材料はない。

虫尾遺跡周辺域における奈良・平安時代の遺跡では、南1.2㎞の地点に位置する平遺跡とその南に谷を隔て位置する勝間田遺跡がある。

勝間田遺跡[4]では掘立柱建物や礎石建物、築地などが規則性をもって検出され白鳳期の瓦や緑釉陶器、硯類などが出土しており奈良時代全般の遺跡である。平遺跡[5]では建物の柱穴は小さく、建物配置にも規則性はないものの「郡」などの刻印のある須恵器や墨書土器、緑釉陶器や硯が出土しており奈良時代末から平安時代全般にかけての遺跡である。この両遺跡は郡衙遺跡と推定でき、直ちに虫尾遺跡との関連づけることはできない。また、時期は11世紀に下るものの勝央町と美作町の境をなす間山において瓦経[6]が発見されておりこの周辺地域に山岳寺院の存在が窺える。可耕地の乏しいこの谷奥において居住していたとみるならば子院や僧坊といった寺院関連の施設をこの地に想定してもよいであろう。

第二地点は縄文時代を中心として平安時代後半から鎌倉時代にかけての遺構が存在していた。

縄文時代早期と中期の遺物片が出土しており、多くの落とし穴状土壙があったことから狩猟場と考えられる。尾高御建山遺跡での分類[7]によると、底面ピットをもつＡタイプは土壙６・14・20など径20㎝で比較的深いピット、直接杭を打ち込んだＢタイプには大半の土壙がこれに相当すると思われ、土壙18・19のように杭痕の周囲が盛り上がったものもみられる。底面ピットをもたないＣタイプは土壙３～５に相当する。

柱穴群は建物としてのまとまりはみられず、遺存状況も悪いものであったが土壙底には地鎮に用いられたものか勝間田焼の椀皿類が出土しており柱穴群は全て11世紀から13世紀にかけての時期に属していると考えられよう。九世紀前半を中心とする第一地点とは時間的な隔たりがあるものの居住域の変更が行われたとみられる。

註

（１）　下澤公明「中山西遺跡の調査」『中国横断自動車道建設に伴う発掘調査』２　岡山埋蔵文化財発掘調査報告93　1995

（２）　勝間田焼の編年と年代観については平岡正宏「美作の古代末から中世の土器ー勝間田焼椀を中心としてー」『中世土器の基礎研究』Ⅸ　1993を参照した。

（３）　出土土器類については総社市教育委員会武田恭彰氏よりご教示を頂いた。

（４）　井上弘「勝間田遺跡緊急発掘調査概要」『岡山県埋蔵文化財報告』４　1974

（５）　田仲満雄,井上弘「平遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』８　1975

（６）　石田茂作「瓦経」『仏教考古学論攷３　経典編』1977

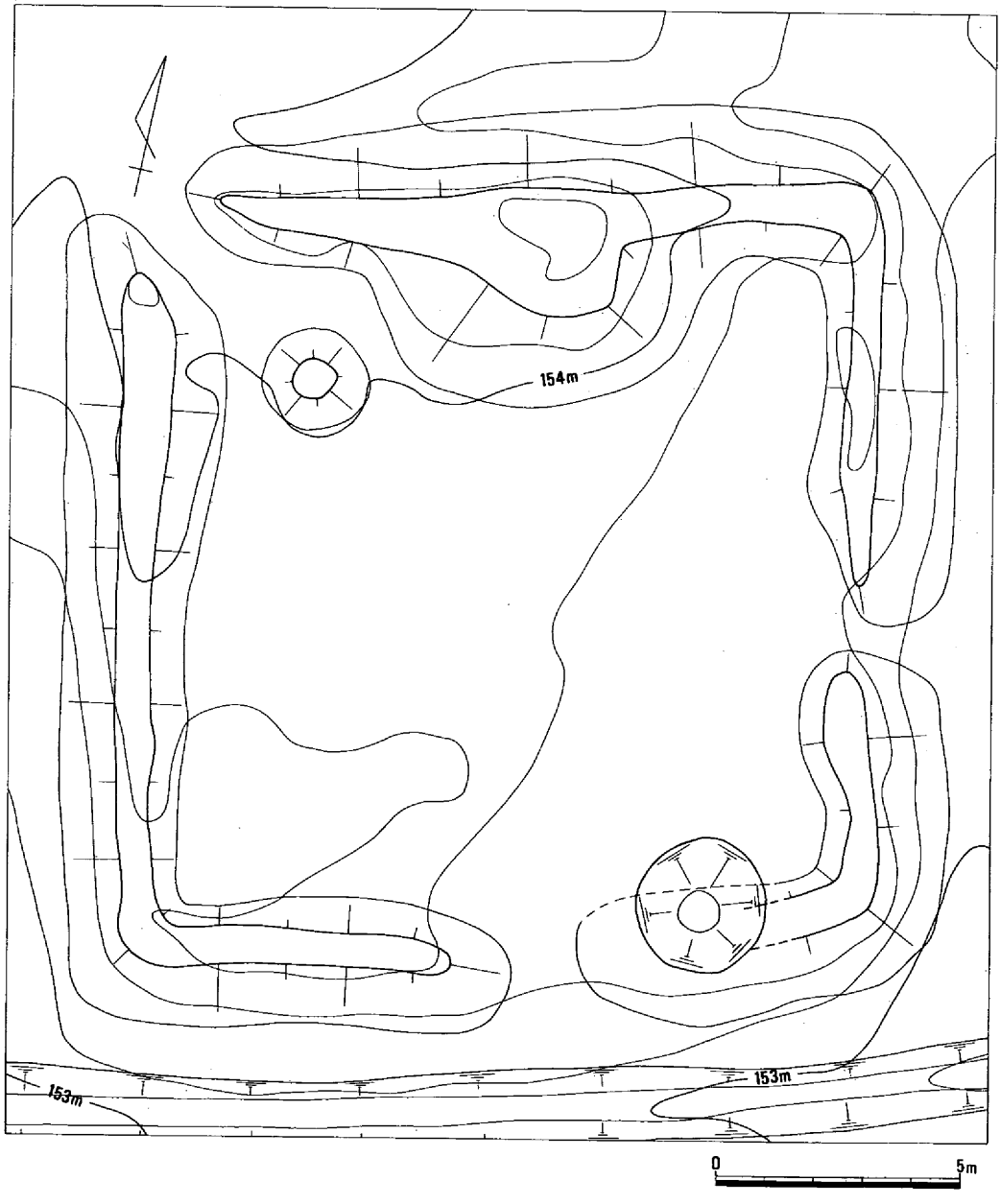
（７）　仲田信一「尾高御建山遺跡・尾高古墳群」『鳥取県教育文化財団調査報告書』34　1994

第5章　黒土中世墓

（1）調査前の状況・概要（第181・182図）

黒土中世墓は遺跡台帳にはその存在は記されていない遺跡であったが地元では土塁と五輪塔の存在が以前から知られていたようであり、今回の発掘中の聞き取りによってその存在が明らかとなり新たに調査対象となった遺跡である。

遺跡の位置は、茂平城から北西に約200m離れ南に緩やかに下ってゆく尾根上の頂部（標高154m）の地点にある。遺跡が立地するには好条件の場所であり集落などの存在も想定できたがこの中世墓地



第181図　調査前地形測量（S=1：150）

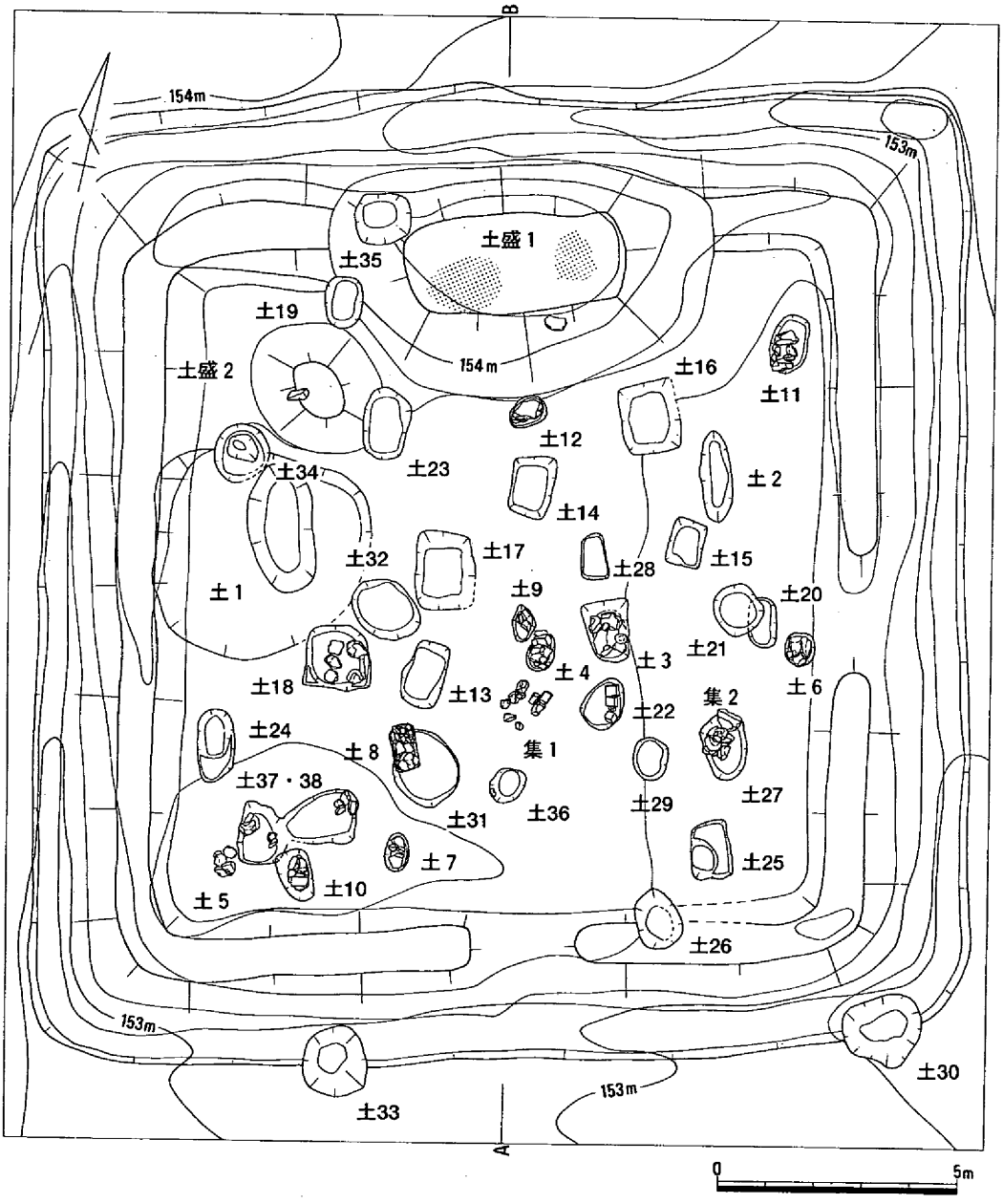
以外には明確な遺構は存在しなかった。

（２）土塁と土盛（第183～185図）

土塁（第183図）

土塁は旧表土層を利用したと思われる黒褐色土層を旧表土層上からわずかに盛り上げたただけのものであり、貼石などの取り立てて顕著な施設は存在していない。土塁の断面は台形状を呈し、規模は高さが外側の溝底から測り0.7ｍで、幅は上辺では0.7ｍ、底辺では2.5ｍである。

この土塁で囲まれた南北の辺が18ｍ、東西の辺が16ｍの方形の区画があった。この区画内には土盛や土壙・集石遺構などがあり、これらの遺構の状況や出土遺物などから墓地遺跡であることが判明した。またこの土塁の南辺と東辺の中央辺りでは土塁が２～2.5ｍにわたって途切れており、内外を結



第182図　遺構配置（S=1：150）

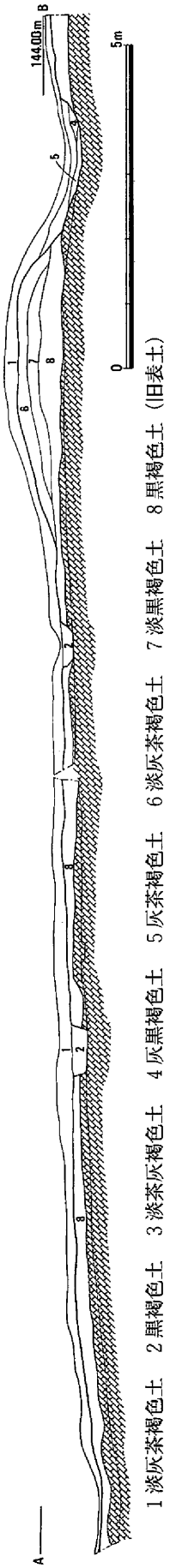
ぶ通路であった可能性が高い。さらに土塁の外側には浅い素掘りの溝が巡っていた。断面逆台形で幅は0.6m、深さは外側から測り0.2mである。

土盛（第184・185図）

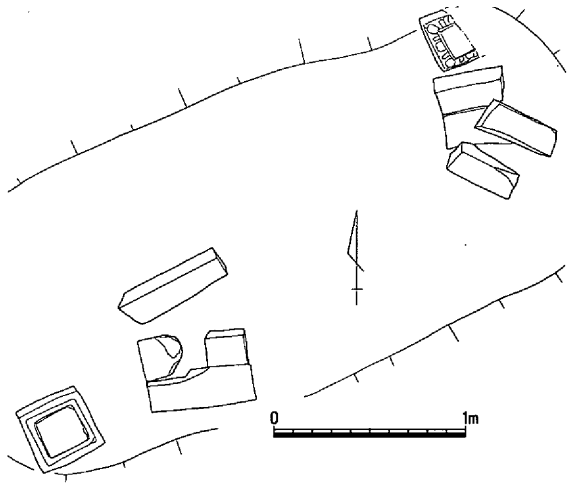
土塁の北辺部の中央から南側に突出するようにして土盛1が存在した。南北の幅が5m、東西の長さが8mの長方形で高さは0.5mと周囲の土塁部よりも高い。この土盛りの南北断面からは土塁の断面が観察されなかったことから土塁部とは先後関係ではなく同時に造られたと考えられる。

この土盛上には現地表面上に2基の宝篋印塔の笠部を重ねさらにその上に五輪塔の火輪1つを組み合わせて安置されていた（第187図）。この近くには相輪や塔身が見つからなかったことから宝篋印塔が倒壊した後かなりの時間をおいて組み直されたものであろう。こうした組合わせは通常存在しないものであるが、この盛土上において表土を除去すると2基分の宝篋印塔の基礎の部分が少し位置を離れた2ヶ所から出土しており、さらにそのそばには2基の宝篋印塔の基壇として使用されたと思われる長さ40～55cm、幅15cmの角柱状の石材が検出されている。この石材の大小と塔の基礎の大小が一致することからこの出土状況はほぼ現位置を保っているとみることができよう。2基の宝篋印塔は本来この土盛り部上に存在していたと考えられる。この土盛1の下層には埋葬施設などは存在しなかった。

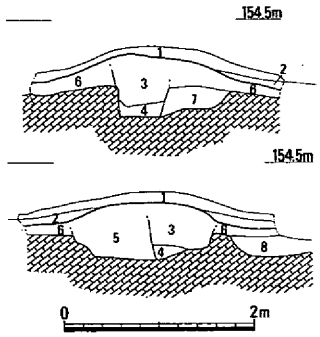
土盛2は土盛1の裾から南西に0.4m離れており完全に土塁内に存在する。規模は直径が2.5m、高さが0.2mの隅丸方形に近い平面形をしている。断面観察では旧表土層からの落ち込みがみられたが平面的には明確な土壙としては検出できず、また出土遺物も皆無であった。土盛1は土盛



第183図　土層断面



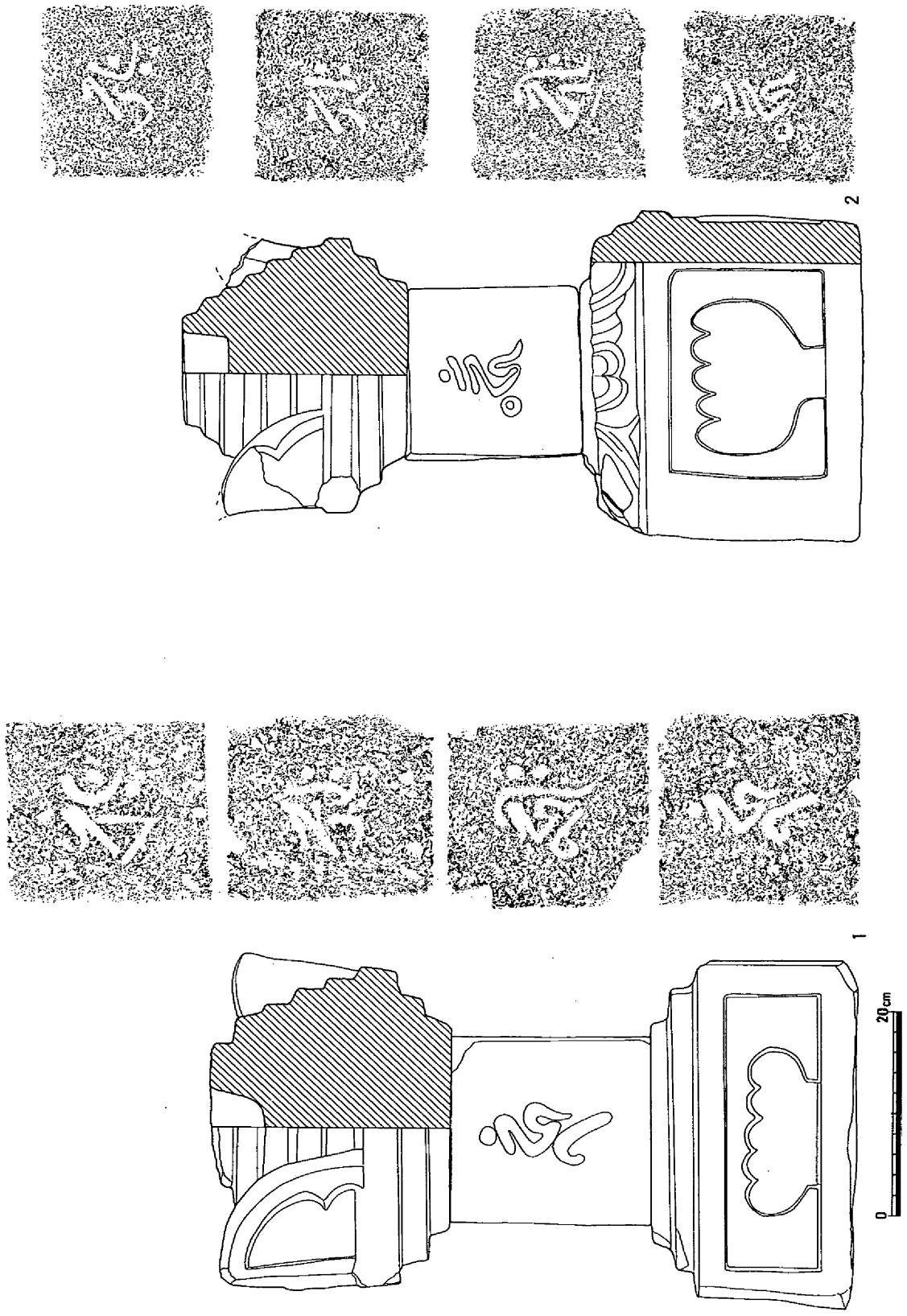
第184図　土盛1石材出土状況（S=1：40）



1．黒茶褐色土
2．灰茶褐色土
3．黒褐色土
4．灰褐色土
5．淡黒褐色土
6．茶褐色土
7．灰茶褐色土
8．淡黄灰色土

第185図　土盛2土層断面

２と近接する箇所がやや凹みなっており土盛２を造る際に削られた可能性がある。また土壙１がこの盛土２の下にもぐり込んでいることから、土盛２はこの遺構群の中でも最も新しい時期のものと考えられよう。



第186図　宝篋印塔実測

第187図　土盛１五輪塔

宝筐印塔（第186図）

土盛１から出土した以外に塔身が土壙22から出土しており相輪以外の２基分の部材がそろっている。石の材質から判断して各々１と２の組合わせとなる。

１は泥岩製で風化によって表面が剥離しつつある。基礎部は上部を２段に造り側面には蓮華の格座間がある。蓮華の花弁は中央がやや幅広であるが上にはのびない。塔身部では東西南北の各面に金剛界の四仏種子が刻まれている。笠部は軒上が５段、軒下に２段であるが頂部が剥離しており本来は６段の可能性もある。隅飾りは軒とは別になり二弧で輪郭を巻いている。やや外傾するもののほぼ真っ直ぐに立ち上がっている。

２は花崗岩製と思われる。基礎には１と同様に蓮華の格座間がみられ、上面には肉彫りの反花座がみられる。塔身も１と同じく四面に金剛界の四仏種子を刻む。笠部は軒上が６段、軒下は２段であり、隅飾りは先端を欠くがやや外反気味となり二弧で輪郭を巻いている。

（３）土壙（第188～231図）

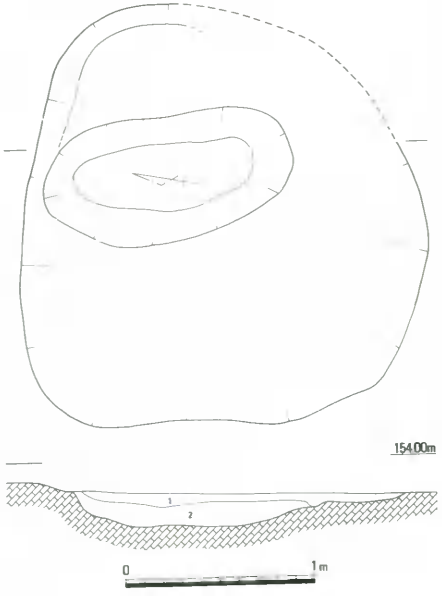
土壙はその形状などから大きく、浅い舟形状で骨片や炭化物があるもの、集石のみられるやや浅いもの、長方形ないし隅丸長方形で掘り込みの深いもの、平面形や断面形が不整形であるものに分けられる。

焼き場（土壙１・２）

土壙１（第188図）

平面形は直径4.5ｍ弱の不整円形をなし、深さは最大で0.35ｍほどの浅い皿状の土壙である。土壙の大部分は極めて浅いものの中央のやや東北に寄ったところが、長さが2.6ｍ、幅は1.3ｍにわたって１段深くなっていた。

埋土中には炭化物・焼石とともに骨片も含まれており、さらにこの遺跡の土壙としては珍し



１．黒茶褐色土　２．黒褐色土

第188図　土　壙　１

く多くの遺物を含んでいたがその中にも二次焼成を受けたものが存在することからこの土壙は火葬場として使われたのではないかと考えられる。そう考えて良いならば１段深い掘り込み部分は木棺を入れた箇所ではないかと推定できよう。

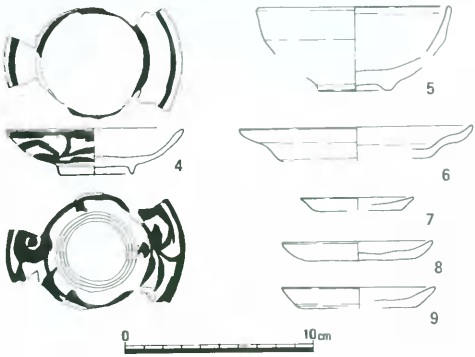
土壙内から出土した遺物には土器類の他に釘や銭貨がある。

土器類（第189図４～９）

陶磁器４～６と土師器の皿類７～９がある。４は中国産の染付け皿である。５は２次焼成を受けていた肥前産の灰釉椀で、その時期が16世紀末から17世紀初頭に求められるものである。

釘（第190図10～18）

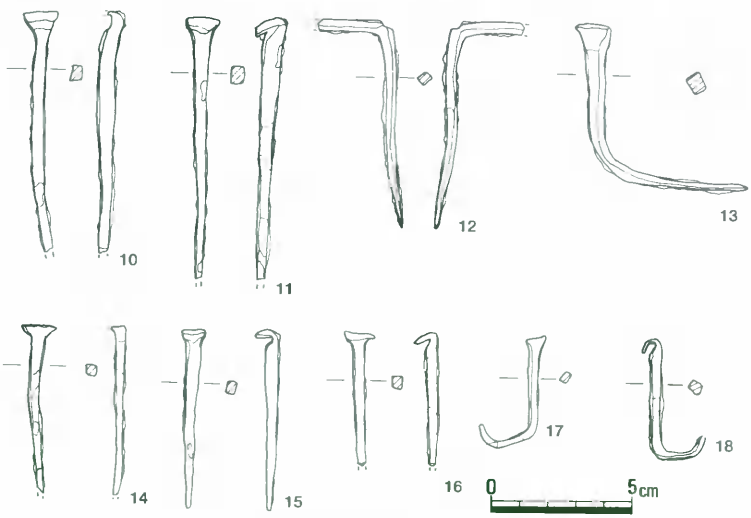
８本あるがいずれも断面が長方形をなし、頭部は薄く延ばした後に直角に折り曲げて造る。長さに10cm近くのもの（10～13）と６cm近くのもの（14～18）がある。12･13・17・18は直角に折れ曲がっていた。木質は遺存しないが棺釘と思われる。



第189図　土壙１土器

表23　黒土中世墓土壙１土器観察表

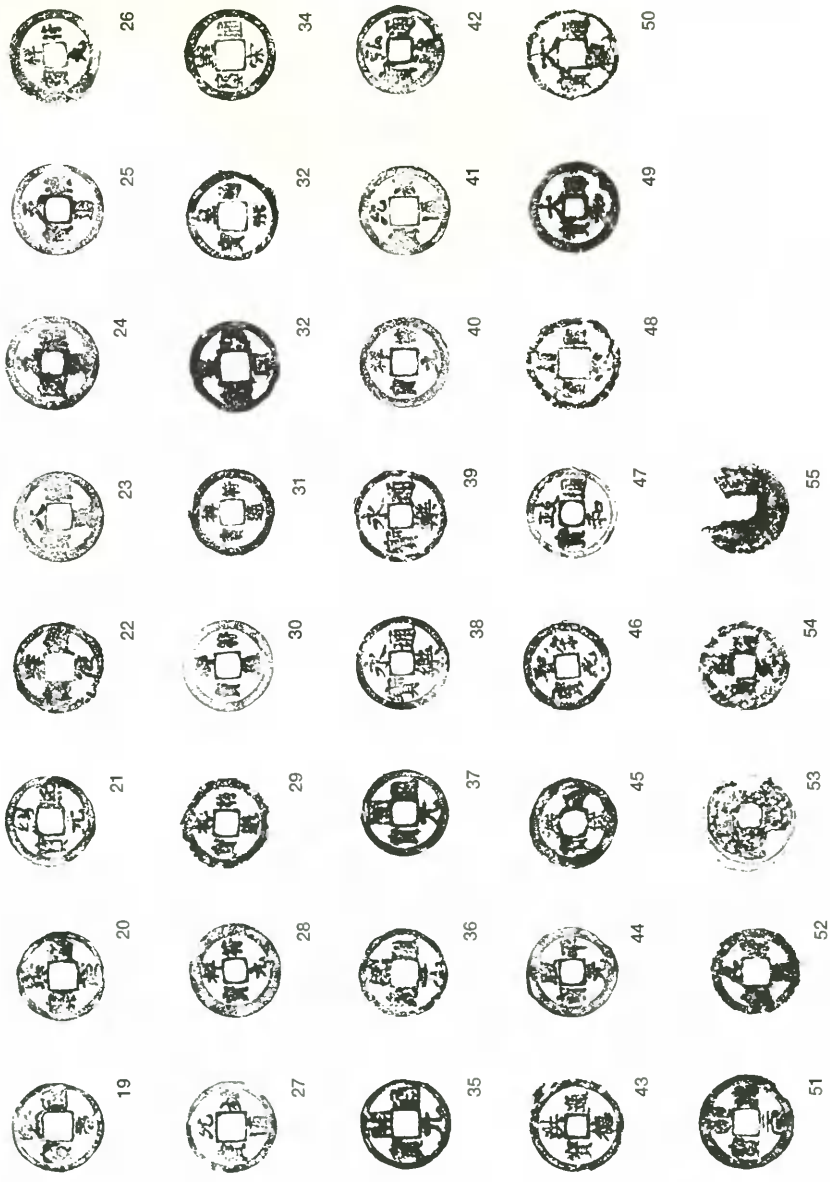
No	器形	口径	器高	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	染付皿	9.41	2.5	中国福建省系	精良	硬	にぶい黄橙色	2次焼成
5	肥前椀	10.4		唐津灰釉	砂粒僅少	良	灰色	1580～1610
6	陶器皿	12.4				硬	灰オリーブ色	
7	土師皿	6.1	0.7	外・内：ナデ	1mm以下の赤色斑、白色粒多	不良	灰白色	
8	土師皿	8	1	外・内：ナデ　底：板目圧痕	1mm以下の赤色斑、白色粒少	良	浅黄橙色	
9	土師皿	8.02		外・内：ナデ	1mm以下の赤色斑、白色粒多	良	浅黄橙色	



第190図　出　土　釘

銭貨（第191図19～55）

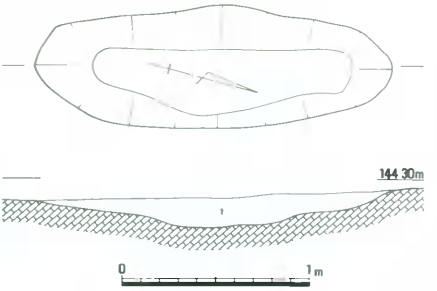
全部で39枚が出土しているが、数枚が錆着したり鋳上がりの悪いものもあり銭種の判別できたものは32枚である。そのうち北宋銭が30枚と大半を占め、明の永楽通宝が２枚あるものの、寛永通宝は含まれないようである。



第191図　土壙１出土銭（S=2/3）

土壙２（第192図）

長軸が1.9ｍ、短軸で0.7ｍ、深さは0.15ｍを測る長円形の土壙である。土壙１と同様で土壙の長軸はほぼ南北方向を示し、また埋土中には骨片や炭化物・焼石があった。ただし土壙１にみられたような周縁を取り巻く極めて浅い部分はここでは明確ではなく、また出土遺物も皆無であった。性格としては土壙１と同じく焼き場であると思われる。



１．暗茶褐色土（骨片・炭化物・焼礫含む）

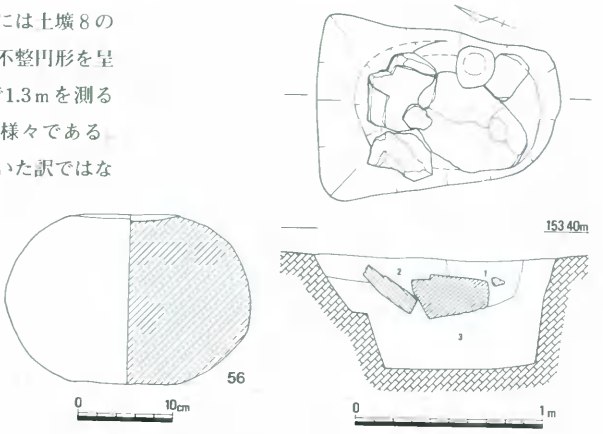
第192図　土　壙　2

集石・集石土壙（土壙３～12　第193～202図、集石１・２　第203・204図）

土壙内に拳大から人頭大以上の角礫を多く含むものである。土壙の平面プランには土壙８のように長方形を意図したものから不整円形を呈するものがあり、大きさも長軸で1.3ｍを測るものから0.6～0.7ｍ程のものなど様々である。角礫については土壙内に組まれていた訳ではなく墓壙の上部構造として積み上げられていたと思われる。これらの土壙を墓壙とするならば棺を埋納したのではなく土壙１・２といった焼き場を利用する火葬墓と考えられる。

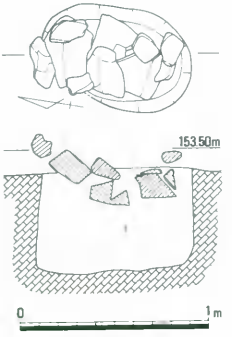
ほとんどの土壙からは土器類や鉄器類といった遺物は出土していないが、例外的に土壙３の石材中から五輪塔の水輪を検出している。ただこれについてもやはり他の礫と同様に石積みに利用されたと考えたほうが良いであろう。

集石１・２も集石自体に遺構としてのまとまりはみられず、集石土壙が削平されたものと考えることができよう。



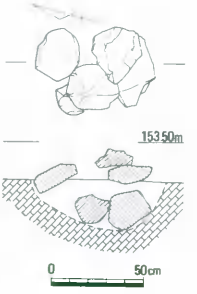
１．黒褐色土　２．淡灰褐色土　３．淡灰茶色土

第193図　土壙３・遺物

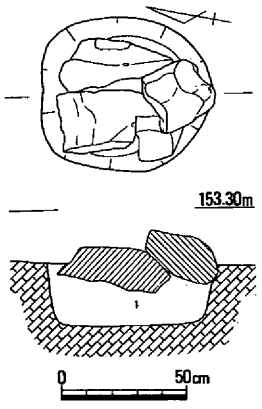


１．淡黄褐色土

第194図　土　壙　4

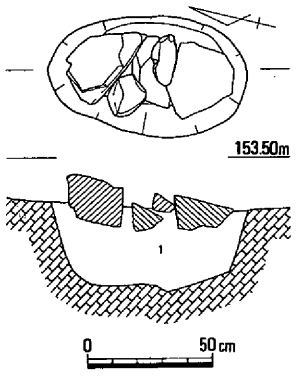


第195図　土　壙　5



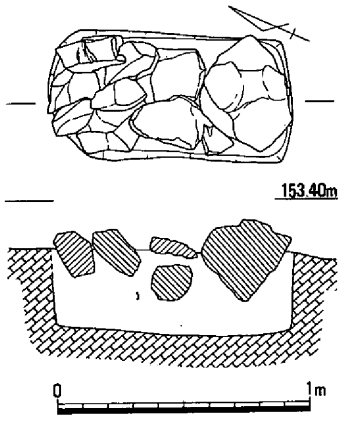
1．淡灰褐色土

第196図　土壙６



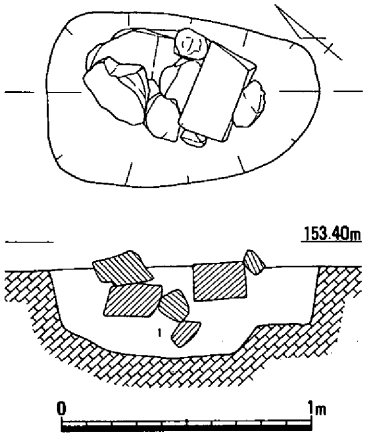
1．淡茶褐色土

第197図　土壙7



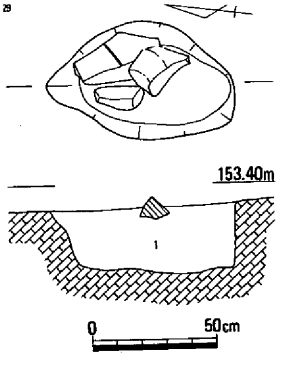
1．淡茶褐色土

第198図　土壙8



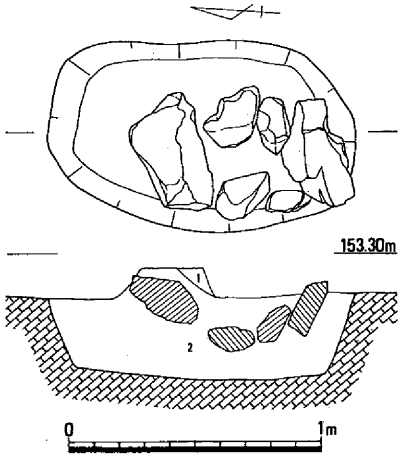
1．淡灰褐色土

第199図　土壙9



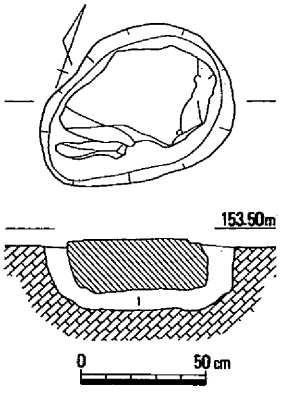
1．淡灰褐色土

第200図　土壙10



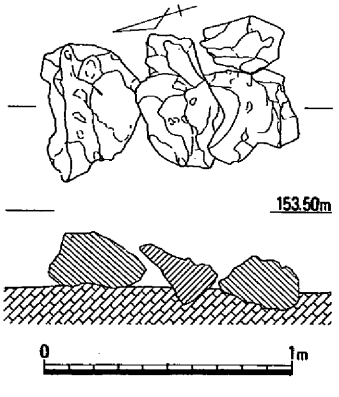
1．黒褐色土　2．淡茶褐色土

第201図　土壙11



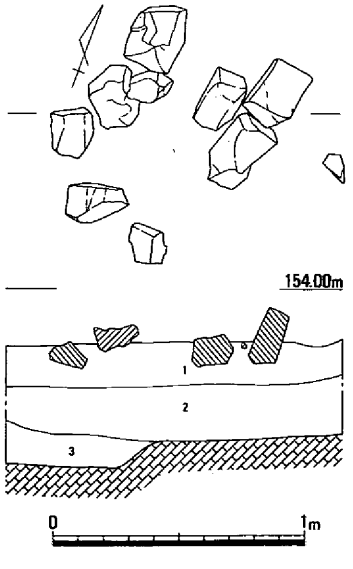
1．淡灰褐色土

第202図　土壙12



1．淡灰褐色土

第203図　集石１



1．淡灰褐色土

第204図　集石２

長方形土壙（土壙13～23）

平面形が長方形を呈する土壙17に代表されるが、その他に円形や隅丸方形のものも含んでいる。いずれも長軸はほぼ南北方向にそろい、かつ底面は平らであり、ほかの群の土壙と比較して深い掘り込みとなっていた土壙群である。

土壙13（第205図）

平面形が長方形を呈する土壙であり、大きさは長辺が1.65ｍ、短辺は1.2ｍ、深さは0.7ｍを測る。

出土遺物には土器類、鉄器類があり、棺痕跡などは認められなものの墓壙であると思われる。

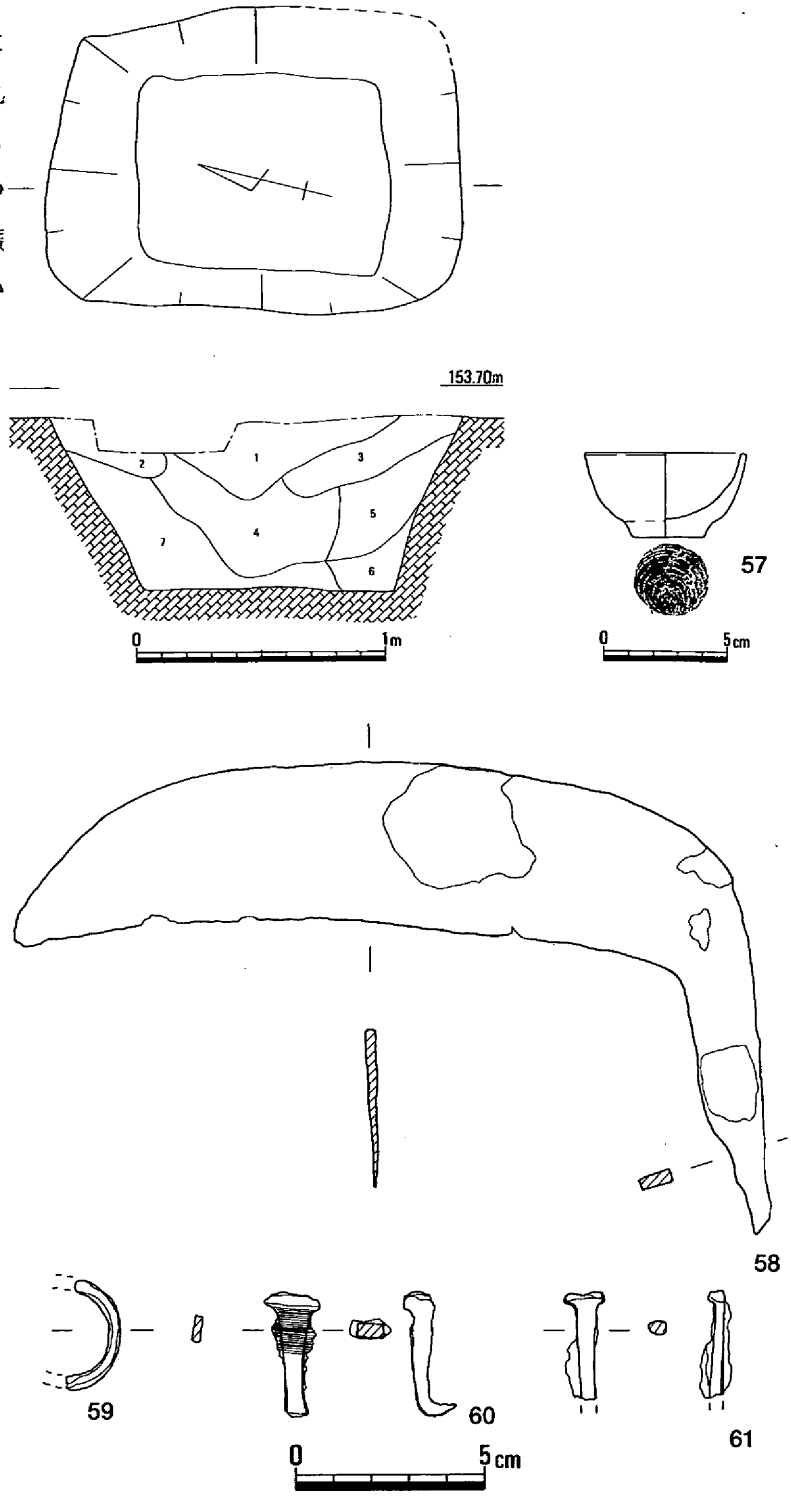
埋土には数種類のブロック状の土が入っていた。

出土遺物のうち57は唐津産の灰釉の小杯で、糸切り底である。時期は16世紀末から17世紀初頭と考えられる。

58は鉄製の鎌であり、ほぼ完形である。刃部長は17㎝、幅は4.3㎝である。関は刃側の片関で２段になっており、鈍角をなしている。

59は半分が欠損するが幅７㎜、厚さ２㎜の環状を呈し58に伴うと思われる責金具片であろう。

60～62はともに先端を欠くが棺釘であろう。60には木質が残る。



第205図　土壙13・遺物

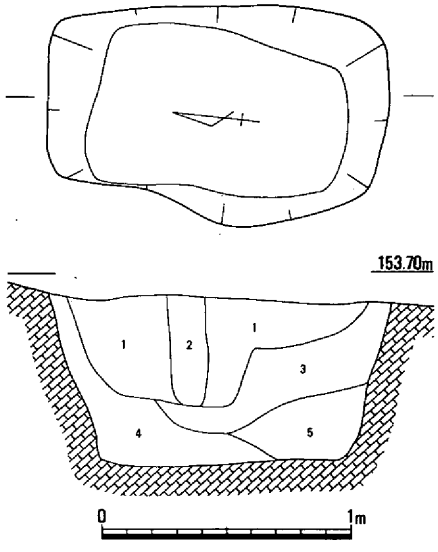
表24　黒土中世墓土壙13土器観察表

No	器形	口径	器高	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
57	小杯	6.5	3.45	唐津灰釉　糸切り底	0.5㎜以下の砂粒少	硬	オリーブ灰色	1580～1610

そのほかに土壙13と近い長方形プランを取るものとして土壙14～17があるがいずれも出土遺物は皆無であった。

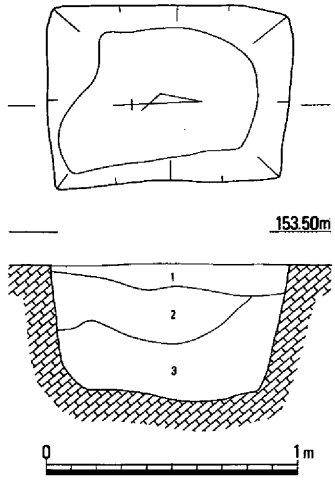
土壙18（第210図）

正方形に近いプランであり、埋土の上面に人頭大の角礫がいくつか入っていた。出土遺物としては先端の尖る金具片63・64がある。64はかなり錆膨れが顕著であるが63によると厚さ３㎜と薄い。とも



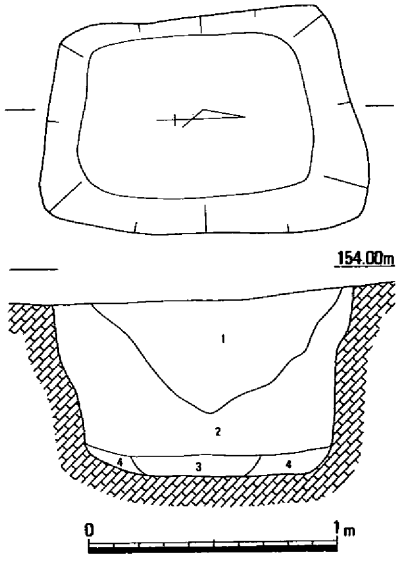
１．淡灰褐色土　２．淡茶褐色土
３．灰褐色土　４．淡茶黄色土

第206図　土壙14



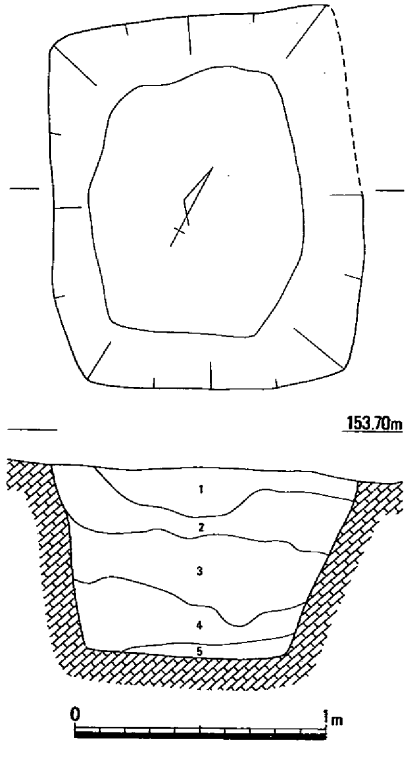
１．暗褐色土　２．淡褐色土
３．淡灰褐色土

第207図　土壙15



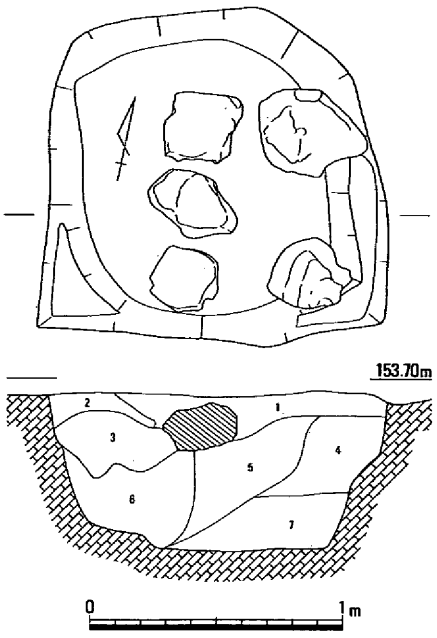
１．黒褐色土　２．黄褐色土
３．黒褐色土　４．黄褐色土

第208図　土壙16



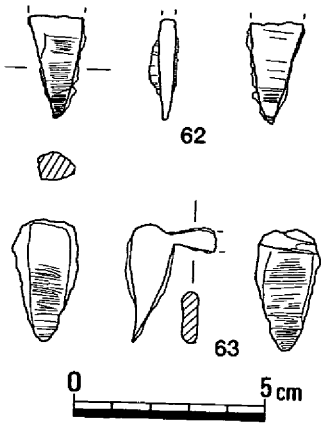
１．黒褐色土　２．黄褐色土　３．暗褐色土
４．淡褐色土　５．淡黄褐色土

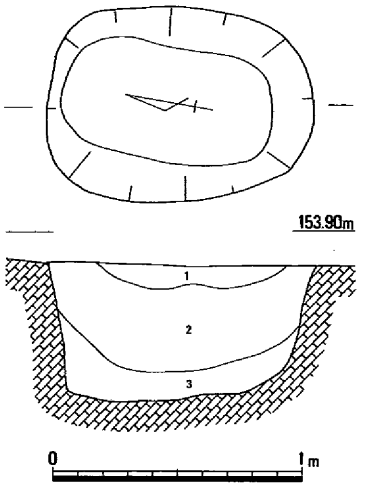
第209図　土壙17



1.暗褐色土　2.明黄褐色土　3.褐色土
4.淡褐色土　5.暗褐色土　6.淡黄褐色土
7.褐色土

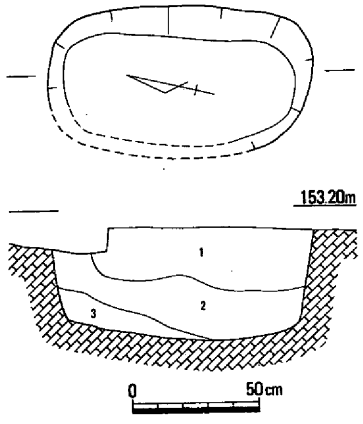
第210図　土壙18・遺物





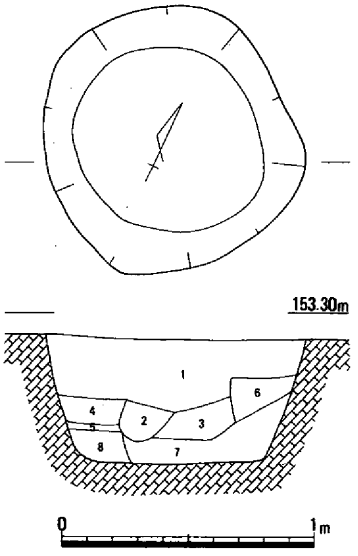
1.黒褐色土　2.淡黄褐色土
3.淡灰褐色土１～３骨片含む

第211図　土壙19・遺物



1.淡黄褐色土　2.暗灰褐色土
3.淡灰褐色土

第212図　土壙20



1.黒褐色土　2.暗褐色土　3.淡褐色土　4.淡黄褐色土
5.褐色土　6.黄褐色土　7.淡灰褐色土

第213図　土壙21

表25　黒土中世墓土壙19土器観察表

No	器形	口径	器高	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
64	土師皿			底部糸切り	0.5㎜以下の砂粒少	良	浅黄橙色	

に頭部を欠損するが、両面に木質を残し棺金具と思われる。

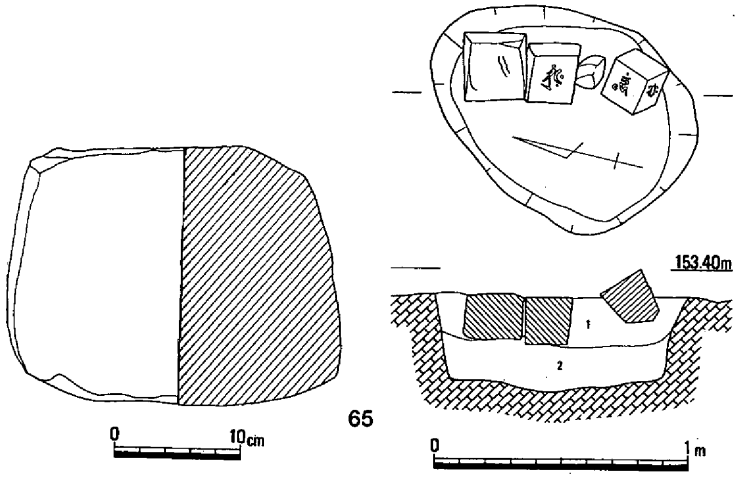
土壙19（第211図）・20（第212図）は隅丸長方形を呈し、土壙19では土師器の皿片が出土している。

土壙21（第213図）は円形を呈する。これらの土壙群は平面形態と規模に多少の差異はあるもののいずれも深い掘り込みをなし、また壁面は真っ直ぐ立ち上がるという特徴がある。

土壙22（第214図）

土壙22は長軸1.1m、短軸0.8mの卵形の平面形をなし深さは0.4mである。埋土は2層に分かれその上層から加工された方形状の石材と宝筐印塔の塔身2基分が検出された。この塔身は土盛1に存在していたものと組となるようである。台形状の石材については土盛1や土壙3から五輪塔の火輪と水輪が出土していることから、やはり五輪塔の地輪ではないかと考えられる。これらが一つの組になるわけではなく、空風輪は存在しないもののこの墓地群中に五輪塔が少なくとも1基は存在していた可能性が強い。

土壙22はこの類の土壙群の中では平面形も不整形なものであり墓壙である可能性が最も低いと思われる。また宝筐印塔の部材の中でも塔身のみを選択的に持ち込んだ理由については、宝筐印塔や五輪塔が倒壊した後に塔身のみを供養のために埋納した、あるいはこの土壙についても墓とみるならばそれらの石材を墓標として利用していたことも考えられよう。



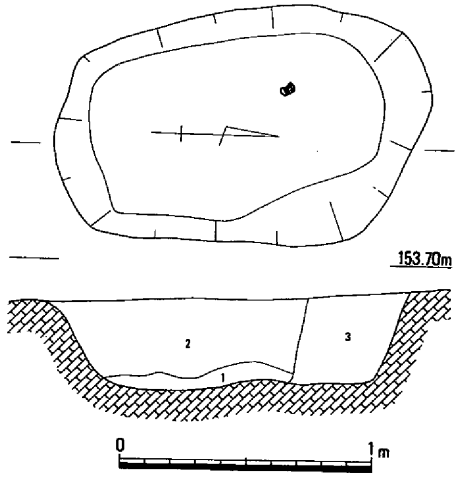
1．暗褐色土　2．暗黄灰褐色土

第214図　土壙22・遺物

土壙23（第215・216図）

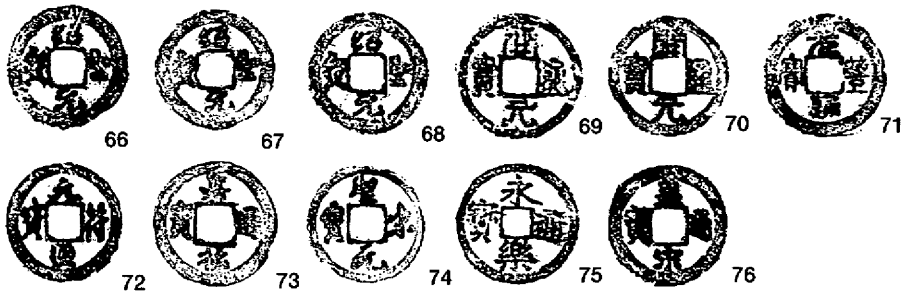
長さは1.5m、最大幅が0.95m、深さは0.35mのやや歪な長方形の土壙である。

土壙内からは19枚の銭貨が出土しているが2～4枚の単位で錆着しており銭種の判別ができるものは11枚である。その内訳は紹聖元宝などの北宋銭が10枚、明の永楽通宝が1枚あるが土壙1と同様に寛永通宝は含まれていないようである。土器類や鉄器類は出土していない。

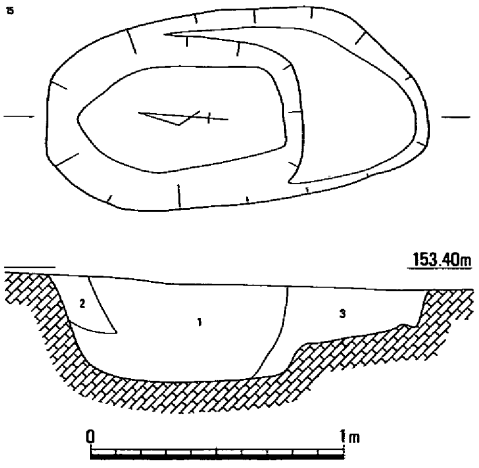


1．淡黄灰褐色土　2．淡灰褐色土
3．淡灰黄褐色土

第215図　土壙23

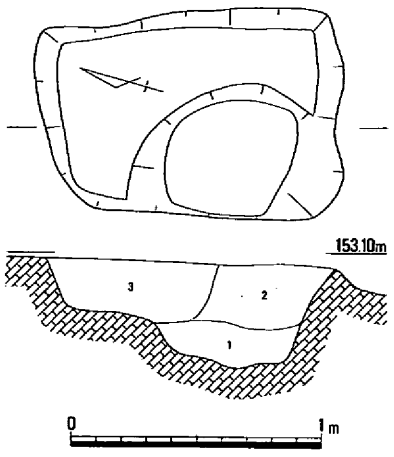


第216図　土壙23出土銭（s＝2/3）



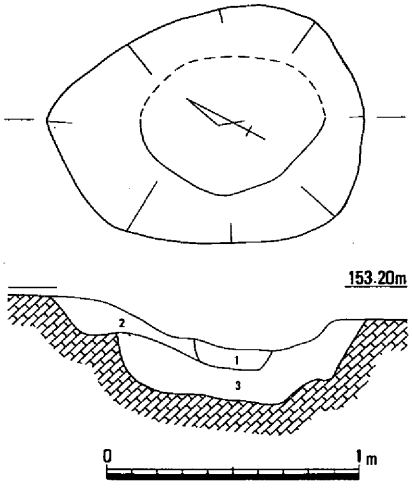
１．黒褐色土　２．淡灰黄褐色土
３．淡褐色土　４．褐色土

第217図　土壙24



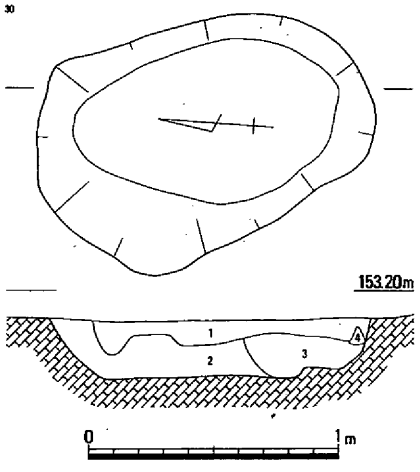
１．淡黄灰褐色土　２．淡灰褐色土
３．暗灰褐色土

第218図　土壙25



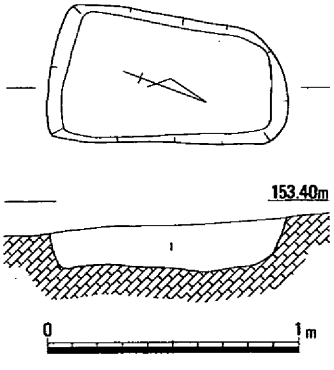
１．黒褐色土　２．暗灰褐色土
３．淡灰褐色土

第219図　土壙26



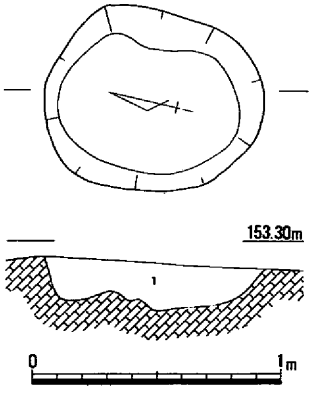
１．淡灰黄褐色土　２．淡灰黄褐色土
３．淡灰褐色土

第220図　土壙27



１．淡褐色土

第221図　土壙28



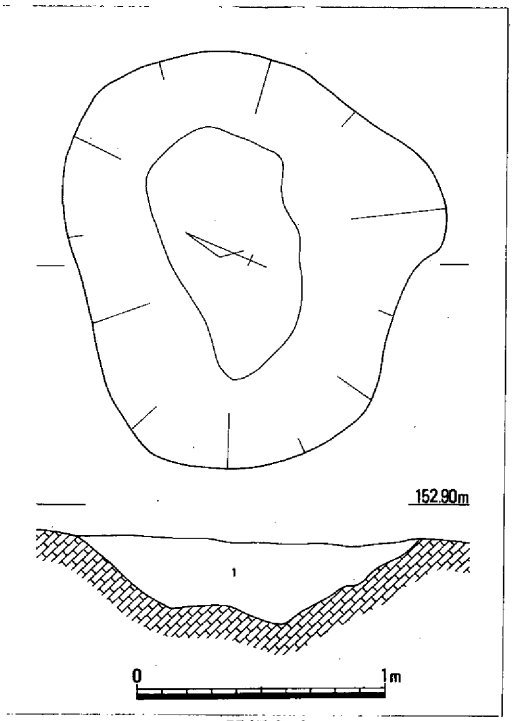
１．淡灰褐色土

第222図　土壙29

その他の土壙（土壙24～土壙39　第216～231図）

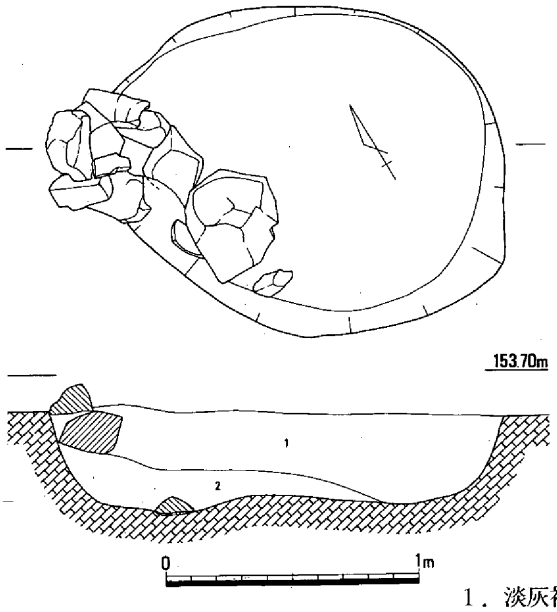
上記いずれの土壙群にも属さないもので大きさ形状ともまちまちであり、またいずれの土壙からも遺物は出土していないため時期についても不明なものである。

ただ、これらの土壙は旧表土（黒ボコ）上では明瞭ではなく基盤層上において検出されたものであり先に述べた土壙群と比べた際にその深さが相対的に浅くなっているが本来の深さをとどめていない可能性もある。これらの中でも土壙28は先の長方形土壙に含めて良いかもしれないし、土壙24・25なども複数の土壙が重なっているようであり本来は長方形土壙と同様に扱うべきかもしれない。さらには土壙31・37・38などは少量とはいえ角礫を含むものであった。



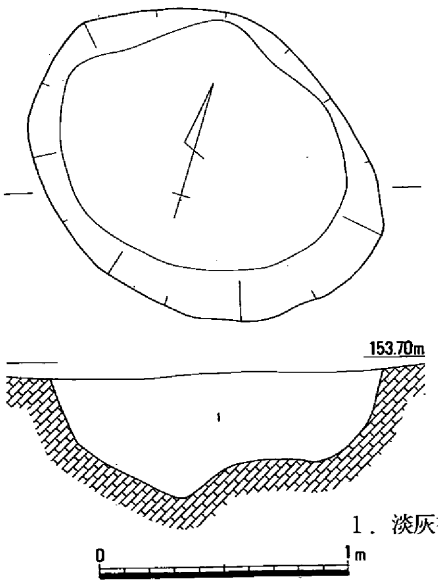
1．黒褐色土

第223図　土壙30



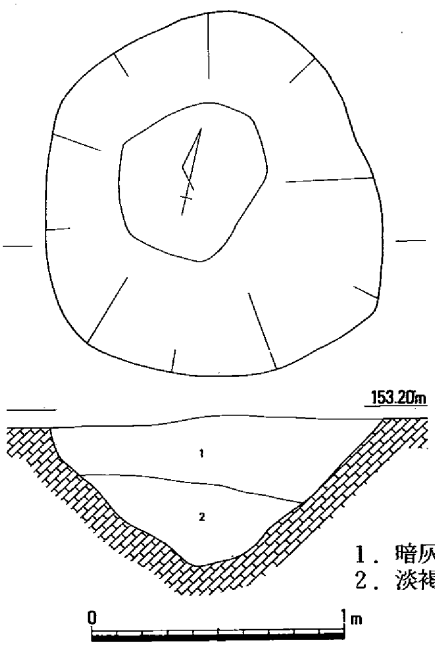
1．淡灰褐色土
2．淡褐色土

第224図　土壙31



1．淡灰褐色土

第225図　土壙32

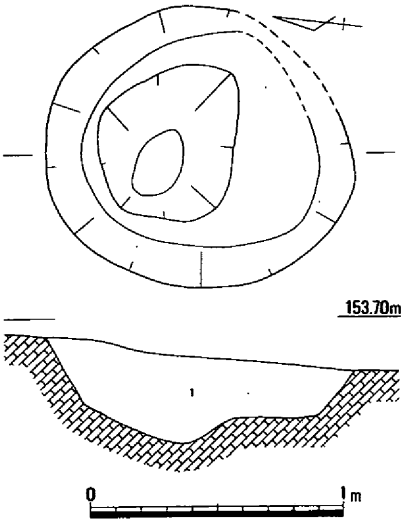


1．暗灰褐色土
2．淡褐色土

第226図　土壙33

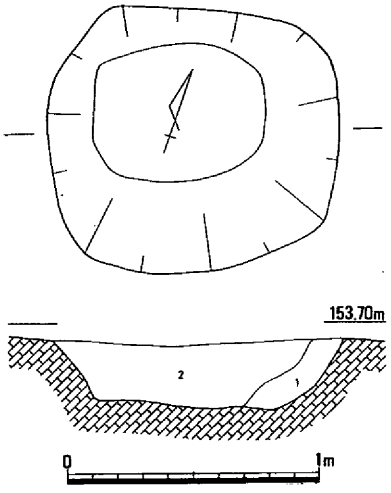
土壙39は直径１ｍあまりの不整円形で、深さが検出面からでも0.75ｍとここに挙げた土壙の中でも最も深いものであるが、底部にかけてやや先細りとなる。土壙底には小さな杭の痕跡が認められている。またこの調査区内では縄文土器片も出土しているということからしてもこの土壙は縄文時代の落とし穴遺構の可能性があろう。

この他には土壙26・30・33・35などが土塁の下層より検出されており、明らかに土塁に先行するものである。



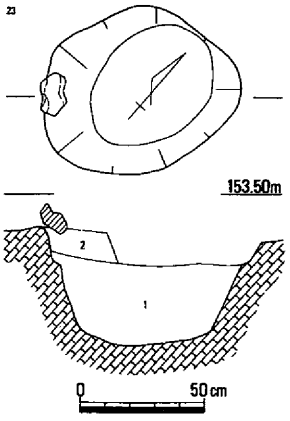
1.灰褐色土

第227図　土壙34



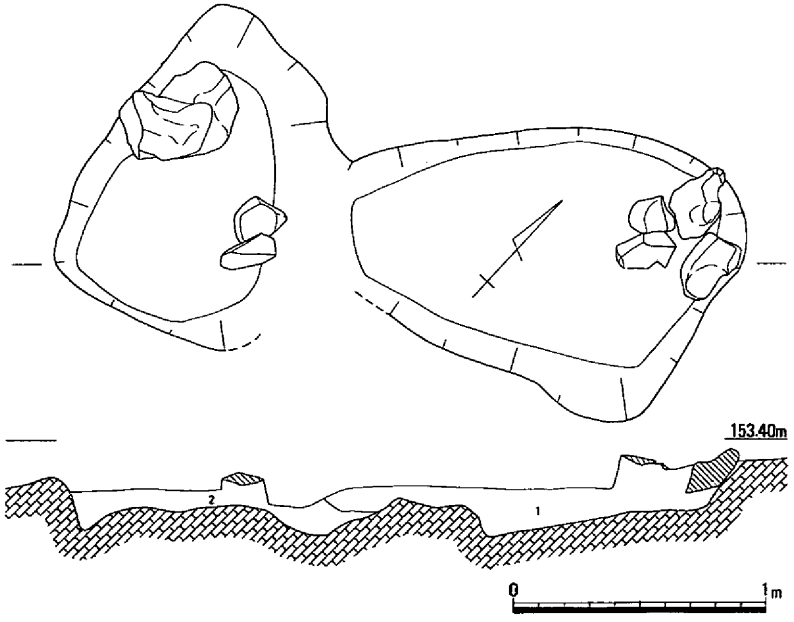
1.淡茶褐色土　2.暗茶褐色土

第228図　土壙35



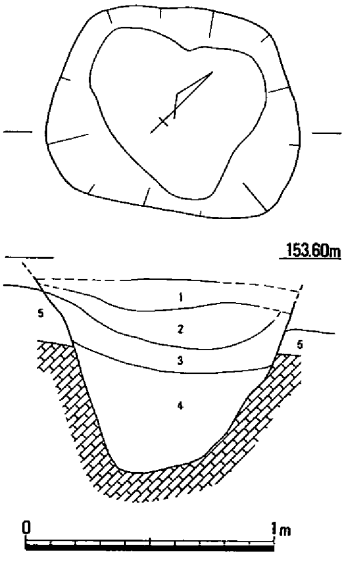
1.暗灰褐色土　2.黒褐色土

第229図　土壙36



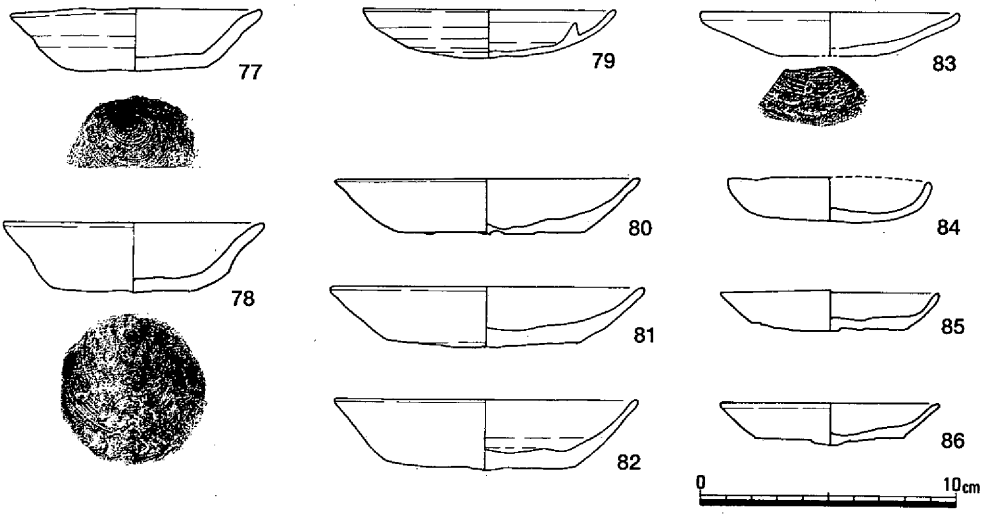
1.淡茶褐色土　2.淡褐色土

第230図　土壙37・38



1.黄色土
2.淡黒褐色土
3.淡灰黄褐色土
4.淡黒褐色土
5.黒褐色土

第231図　土壙39



第232図　包含層出土土器

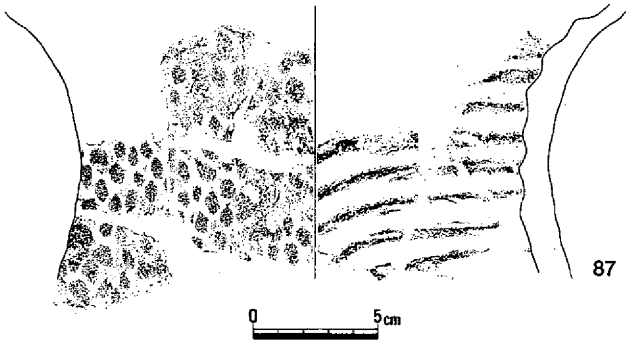
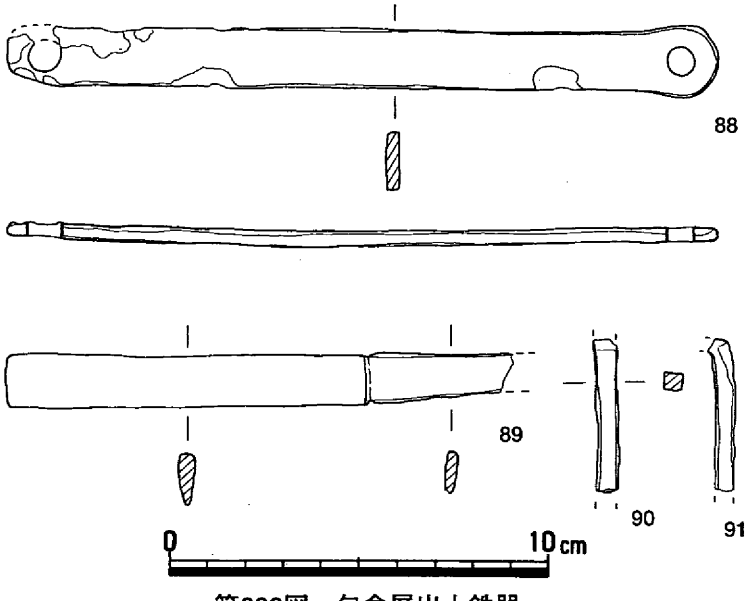


表26　黒土中世墓表土層土器観察表

No	器形	口径	器高	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
77	備前杯	10	2.5	外・内：ナデ　底：糸切り	0.5㎜以下の白粒僅少	硬	赤橙色	
78	土師皿	12	2.8	外・内：ナデ　底：糸切り	0.5㎜以下の白粒僅少	良	にぶい橙色	
79	灯明皿	10	1.95	外：ヘラケズリ　内：ナデ	0.5㎜以下の白粒僅少	硬	赤褐色	備前
80	土師皿	12	2.2	外：ヘラ切り　内：ナデ	0.5㎜以下の白粒僅少	良	浅黄橙色	
81	土師皿	12.4	2.4	外・内・底：ナデ	1㎜以下の白色粒・雲母多	良	浅黄橙色	
82	土師皿	12	2.8	外・内・底：ナデ	1㎜以下の白色粒・雲母多	良	浅黄橙色	
83	土師皿	12.4		外・内：ナデ　底：糸切り	0.5㎜以下の白粒僅少	硬	にぶい黄橙色	
84	土師皿	8	1.85	外・内：ナデ	0.5㎜以下の白粒僅少	良	にぶい橙色	
85	土師皿	8.7	1.62	外・内：ナデ	0.5㎜以下の白粒僅少	良	橙色	
86	土師皿	8.55	1.62	外・内：ナデ	0.5㎜以下の白粒僅少	良	浅黄橙色	
87	縄文土器			楕円押型文	0.5～7㎜の石英・長石多	良	明黄褐色	



第233図　包含層出土鉄器

包含層の遺物（第232・233図88～97）

表土層中からも土器類77～87、鉄器類88～91、銭貨92～97などが出土している。

77は備前焼の杯、79は備前焼の灯明皿である。80～86は土師器の杯であり、80～82は径が12㎝程のもので同様の法量のものが他に数点ある。84～86は径8.5㎝程の小皿である。78は土師質に近いが、釉が一部にかか

第234図　包含層出土銭（S＝2/3）

り底部に糸切りが認められる。

87は縄文早期である黄島式の鉢である。外面には粗大な楕円形の押型文が斜めに付され、内面には斜行凹線がみられる。土壙39が落とし穴状遺構と考えられることからこの丘陵においても縄文人の狩猟活動が行われていたと考えることができよう。

88は厚さ3.5㎝、幅1.6㎝、長さ19㎝で両端が円環状をなす細長い板状の鉄器である。刃は付かず用途は不明である。

89は刀子である。刃部は鉄製で切先は欠損する。関部は両関である。柄部は銅製で、刃部と同様に下端が刃状に尖る。

90・91は釘であるがいずれも頭部と先端を欠く。

表土層中からも６枚の北宋銭が出土している。いずれかの土壙中に副葬されたものであろう。

（４）ま　と　め

黒土中世墓は土塁によって方形に区画された墓地遺跡である。こうした例は管見にふれる限り岡山県下はおろか全国的にみてもで他に例をみないものである。土塁内の遺構には火葬場と思われる土壙が２ヶ所にあり、また集石土壙群は骨壷や副葬品を伴わないものの火葬土壙１・２をを使用した火葬墓である可能性が高い。

一方で長方形の土壙群はわずかながらも鎌や土器類などの副葬品と思われる遺物や棺金具などが見つかっており、土壙の規模も多の類の土壙に比べ大きく深いもので、どのような形態かは不明であるが棺を使用した土葬墓と考えられる。

この墓壙と考えられる二種の土壙群については、土塁内の位置関係から集石土壙が主に中央より南にあり、長方形土壙は北半分に主体があるといえる。それぞれの出現と消長に関してはともに出土遺物が皆無または僅少であるものの、長方形土壙では土壙17出土の肥前産椀[1]があり16世紀末から17世紀初頭に求められる。集石土壙には遺物は皆無であったが火葬場遺構と考えられる土壙１においては16世紀末から17世紀初頭の肥前産陶器椀が出土しており、ともに年代の一点をそこに押さえることができる。この両者は時間を隔てることなく短期間に連続して造られた、あるいは併存して造られた可能性もある。

岡山県下の中近世墓に関しては根木修[2]によって分析がなされているが近年かなりの発掘例が増加しており、また２つの土壙群の前後関係を明らかにするためにもいくつかの例に触れることにする。岡山市津寺遺跡[3]では土筆調査区及び丸田調査区において鎌倉時代13世紀後半である中世墓群が調査されている。土筆山調査区では20基程が土壙墓として扱われているが土壙の形状などから墓と思われるものが他にも存在し、それらを加え30基あまりが数えられよう。埋葬法には長方形の土壙に木棺を入れるものがあり、棺は釘で結合されていた。もう１つには円形や不整長円形の土壙内に直葬するも

あった。いずれも屈葬された土葬墓である。副葬品からも前者の優位性が明らかであり、階層性を示すものであろう[4]。ただ黒土中世墓の長方形土壙と比べこの前者の長方形土壙は長さに対して幅は狭く、むしろ丸田調査区において検出された鍛冶職人の墓と想定される土壙墓が、その規模を同じくする。その他に火葬墓とされるものは時期が不明で、調査担当者はその場で荼毘に付されたと考えているが焼き場遺構の可能性もある。これらとほぼ同時期の土葬墓の例として百間川原尾島遺跡の土壙墓群が挙げられる。これらは屋敷墓と呼ばれるものであり丘陵上の墓地については明らかではないがこの地域では鎌倉時代においては土葬墓が一般的であったとみてよいであろう。一方、室町時代については賀陽町大村中・近世墓群[6]において、方形ないし長方形の区画の集積群があり、その中に亀山焼や備前焼の骨臓器が60個体以上検出されている。それ以降は近接して方形や円形の掘り方をもつ近世墓群がみられた。つまり大まかではあるが室町から江戸初期の間で再び火葬から土葬への変化が行われたとみれよう。

以上から黒土中世墓においても集石土壙から長方形土壙への時間的変化を考えるのは妥当なところであろう。16世紀末から17世紀初頭の中に両者の変換点があるとみてよく、さらに土壙１や土壙23表土中から出土した銭貨に寛永通宝を含まないことからも造墓活動は寛永年間をそう下らずに終了している可能性が高い。

次に長方形土壙において使用された棺の形態であるが、津寺遺跡の野上田調査区[7]で見つかった土壙墓３基の内の２基は、木棺の各面がを１枚の板材で構成し、底板が長さが60cm、幅45cmほどのものと、それよりやや大きく底板は見つかってないが横方向に桟木を渡しているものがある。これに類するものは山梨県中巨摩郡若草町二本柳遺跡[8]で見つかっており、12

表27　黒土中世墓銭貨一覧表

No	種　　別	出土遺構	径	重量	備　　考
19	熙寧元宝	土壙6	2.45	2.8	
20	熙寧元宝	土壙6	1.41	2.7	
21	熙寧元宝	土壙6	2.45	2.9	
22	熙寧元宝	土壙6	2.46	2.4	
23	天禧通宝	土壙6	2.47	2.6	
24	天禧通宝	土壙6	2.51	3.3	
25	天禧通宝	土壙6	2.49	2.5	
26	祥符元宝	土壙6	2.45	3.5	
27	祥符元宝	土壙6	2.46	2.8	
28	祥符元宝	土壙6	2.54	2.8	
29	祥符通宝	土壙6	2.47	2.5	
30	祥符通宝	土壙6	2.45	2.9	
31	祥符通宝	土壙6	2.29	2.1	
32	皇宋通宝	土壙6	2.45	2	
33	皇宋通宝	土壙6	2.43	2.2	
34	皇宋通宝	土壙6	2.48	2.8	
35	開元通宝	土壙6	2.43	2.4	
36	開元通宝	土壙6	2.37	1.7	
37	開元通宝	土壙6	2.32	2.8	
38	永楽通宝	土壙6	2.5	3.1	
39	永楽通宝	土壙6	2.53	2.9	
40	元祐通宝	土壙6	2.44	2.4	
41	元祐通宝	土壙6	2.45	4.2	
42	弘治通宝	土壙6	2.43	3.2	
43	洪徳通宝	土壙6	2.49	2.9	
44	感平元宝	土壙6	2.44	3.2	
45	洪武通宝	土壙6	2.4	2.3	
46	聖宋通宝	土壙6	2.33	2.9	
47	政和通宝	土壙6	2.43	2.3	
48	紹聖元宝	土壙6	2.33	2.4	
49	大和通宝	土壙6	2.41	2.8	
50	大観通宝	土壙6	2.41	2.7	
51	明道元宝	土壙6	2.51	2.8	
52	銭？	土壙6	2.35	2.4	
53	銭？	土壙6	2.36	7.2	3枚錆着
54	口元通宝	土壙6	2.4	1.7	
55	銭？	土壙6	2.45	1.9	
66	紹聖元宝	土壙32	2.43	3.2	
67	紹聖元宝	土壙32	2.39	6.4	2枚錆着
68	紹聖元宝	土壙32	2.02	8	3枚錆着
69	開元通宝	土壙32	2.49	2.5	
70	開元通宝	土壙32	2.4	2.3	
71	元豊通宝	土壙32	2.47	3.3	
72	元符通宝	土壙32	2.38	3.3	
73	嘉祐通宝	土壙32	2.48	3	
74	聖宋通宝	土壙32	2.4	14	4枚錆着
75	永楽通宝	土壙32	2.42	17	4枚錆着
76	皇宋通宝	土壙32	2.15	〃	76の裏面
92	皇宋通宝？	表土中	2.45	3.1	
93	祥符通宝	表土中	2.59	5.7	
94	聖宋元宝	表土中	2.3	2.2	
95	熙寧元宝	表土中	2.48	2.7	
96	皇宋通宝	表土中	2.46	1.9	
97	景徳元宝？	表土中	2.45	2	

枚の板組みの木棺で底面にはやはり桟木がある。いずれも鉄釘はなく、黒土中世墓の長方形土壙もこうした棺形態をとると思われ、座棺の成立まで続いたと思われる。

宝筐印塔の１と２は使用する石材種が違うことから制作地を異にすると思われる。制作地の違いが塔の形態の変化に多少の差異を生んでいるかもしれないが、両者を比較するなら基礎部において顕著に現れるように縦横の比率においては２のほうがより縦長である。かつ蓮華の格座間は花弁の形態はほぼ類似するがやはり２が縦長となっている。笠部の隅飾りに関しては２の方がより湾曲気味に外反するなど全体に２が１に対して新しい傾向を持つていると考えられよう。さて、１・２の時間的な位置づけであるが蓮華の格座間の形からは室町でもや新しく、江戸期より古い。１は戦期に、２は安土・桃山期に相当できよう[9]。

土墨・土盛と宝筐印塔や土壙群の時間的関係であるが、先ず土墨と土盛は土層断面から同時に構築されたと思われる。土墨と土壙の関係は土の外に長方形や集石土壙が広がらないことから両者は当然密接に結びついておりまた時間的に連続していると考えることができる。宝筐印塔は形態的な特徴から土壙群に先行する可能性もあるが、１が２より古いという点から１が集石土壙と、２が長方形土壙と対応関係にある考えておきたい。この宝筐印塔は墓壙は伴わないもので参り墓や供養塔といった性格を持つものであろう。

被葬者集団の具体的な名前は浮かび上がってこないが、この土墨に区画された１つの単位は惣といった地縁的関係、あるいは特定の一族などといった血縁関係による紐帯であろう。副葬品はかなり貧弱であるが近世以前において宝筐印塔の使用が特定の階層に限定されるものならばこの近在に居住す国人層が想定できよう。そこで黒土中世墓は茂平城の西北方向にあり、ちょうど祖霊神を祭る位置にあることは全くの偶然ではなく両者が地理的にも時間的にも密接なつながりをもっていたとするならば茂平城に居住した小領主や国人層を墓地への被葬者として捉えることができるのである。

註

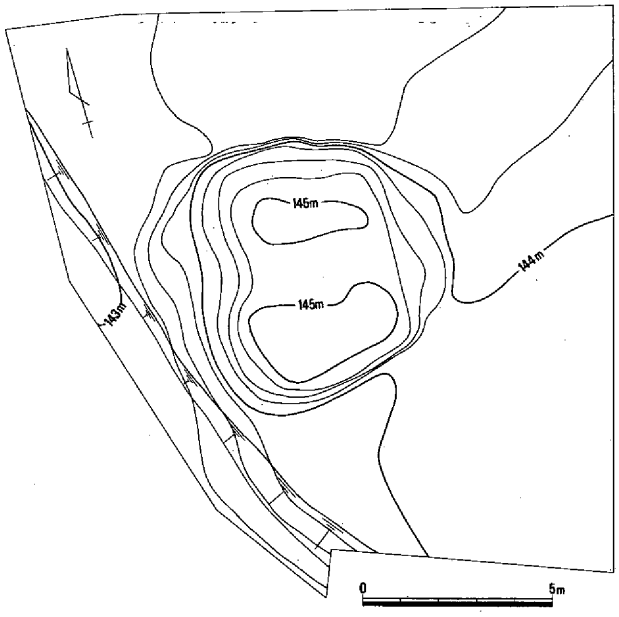
（１）陶磁器類については九州陶磁文化館の大橋康二氏にご教示を得た。
（２）根木修・出宮徳尚「中近世」『岡山県の考古学』1987
（３）正岡睦夫ほか「土筆山調査区」『三手・津寺遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90　1994
（４）註（３）文献において松本和男が分析を行っている。
（５）岡山県古代吉備文化財センター編『百間川の遺跡群』　1989
（６）柴田英樹「大村中・近世墓ほか」『岡山県埋蔵文化財報告』24　1994
（７）光永真一「野上田調査区」『津寺遺跡』２　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98　1995
（８）石井進・荻原三雄編『中世社会と墳墓』1993
（９）岡山市教育委員会・岡山市石造美術調査委員会編『岡山市の石造美術』1976を参考

第6章　茂　平　古　墓

調査前の状況（第235図）

茂平古墓は、茂平城の西200ｍに位置する。茂平城を含む尾根が西へ向かって伸びているが、その先端に近いところに立地している。尾根は畑地化されているため、古墓は北・東・南を畑に囲まれており、西側は現在も使用されている小道が走っている。小道の幅は２ｍほどでさらに西は竹藪となり、谷部へ下っている。

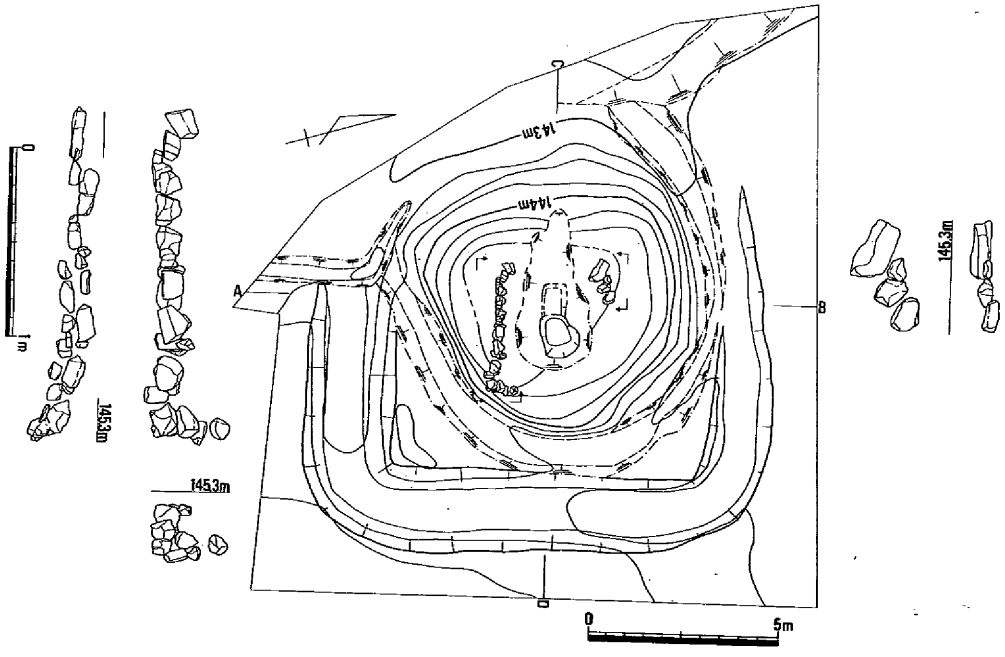
墳丘は高さ１ｍ、一辺５～６ｍの方形を呈するが、畑の開墾による改変が著しいと予測された。墳丘中央部は東から西の小道へ向かってかき出されたように凹んでおり、なおかつ盛土上に石材も見られたため、小規模な横穴式石室を想定して調査を開始した。



第235図　調査前地形測量

墳丘（第236図）

表土除去後に最初に石列を検出した。石列は、盛土最上部の黄褐色土に埋め込まれる状態で検出された。墳丘地形測量図にあるように南列と南東隅、北列の一部が残存していた。このことから、石列は一辺２ｍ程度の正方

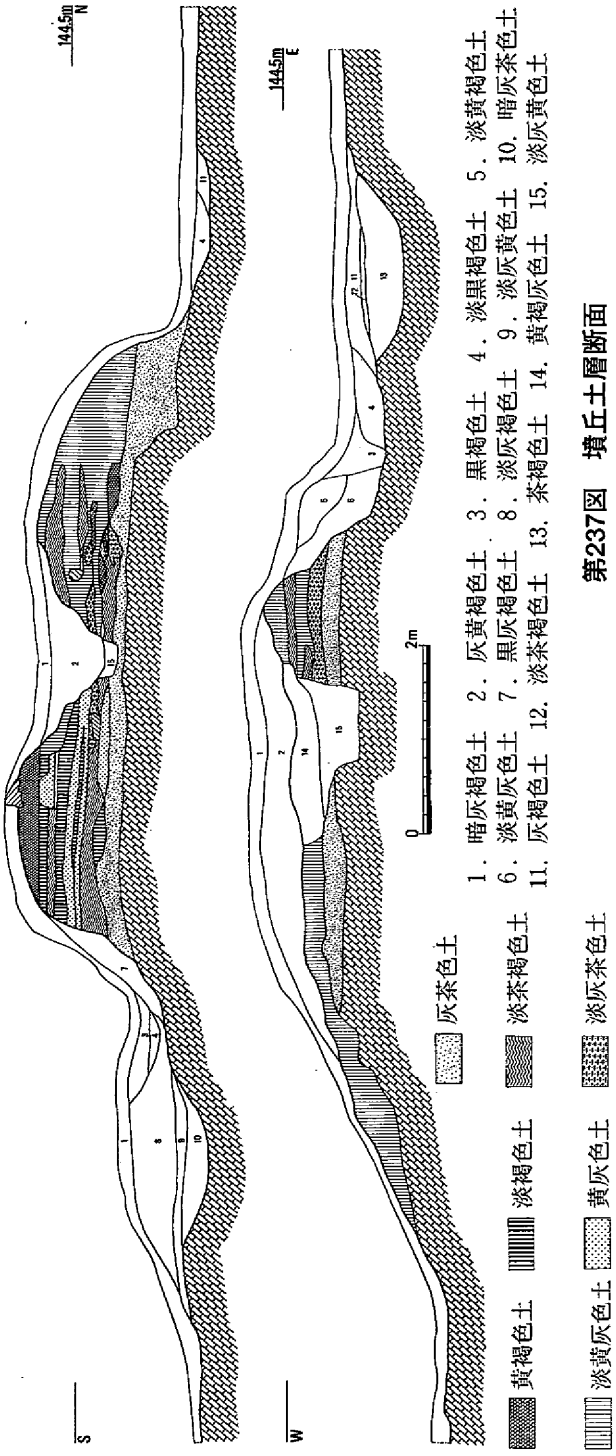


第236図　墳丘地形測量

形の囲みをなすものと考えられる。

石列と墳丘の関係についてであるが、石列南西隅が下方へずり落ちるように構築されていること、あるいは石列に伴う土が基盤層そのものの土質を呈するのに対して盛土が火山灰質で異なることから、石列の構築時期は盛土がある程度崩れた後であると考えられる。

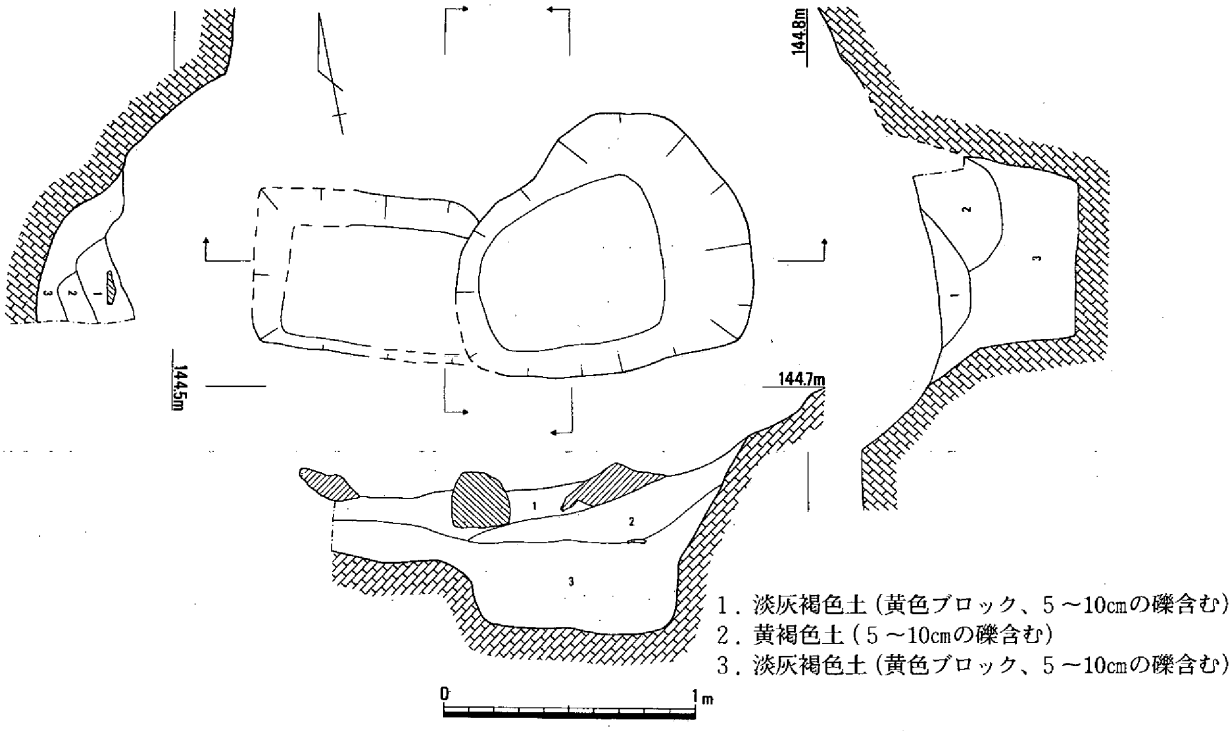
墳丘は畑に伴う溝と小道によってその範囲を狭められていた。盛土自身は黄灰色土、灰茶色土など火山灰風化土の互層からなる（第237図参照）。基盤層は黄褐色土で、表土は黒ぼくに近い土壌であった。最下層の盛土がやや厚いが、これは基盤層の凹凸を平らにし、その後の盛土行程を円滑に進めるためと推測される。



第237図　墳丘土層断面

墳丘の外を巡る形で周溝を検出した。周溝は西を小道によって切られてはいるが、検出面で一辺南北約12ｍ、東西は不明の方形であると考えられる。幅は検出面で２ｍ、底面で１ｍで、断面形は逆台形を呈する。底面の海抜高は南東隅が143.34ｍで最も高く、小道による南西側の切断面が143.1ｍ、北西側が143.04ｍと低くなっている。埋土は粘質が強い暗灰茶色・茶褐色土で、埋土中にわずかに遺物が見られた（第239図１・２）。周溝と盛土の関係は、耕作による墳丘改変のため明確にできなかった。周溝の形状から、墳丘は周溝底部から測定すると南北3.7ｍ、東西は不明であるがおそらく南北と同じくらいの正方形であったと推測される。

墳丘中央部では、撹乱土を除去した後に２基の土壙を検出した（第238図）。西側の小さい方の土壙の形状はトレンチで破壊されているが方形と推測される。規模は検出面で0.9×0.6ｍで深さ0.3ｍ、底面は海抜高が144ｍで盛土中にとどまる。東側で大きい方の土壙の形状も方形で、規模は検出面で1.1×0.9ｍ、深さは0.6ｍ、底面は海抜高が143.7ｍで基盤層まで掘り込まれる。両土壙の埋土は黄色土ブロック・礫を含むもろい土で、切り合い関係はわからなかった。また埋土には備前焼の甕の破片（第239図５・６の一部）を伴っていた。これら土壙の上に石列・石列に伴う黄褐色土が乗っていることから、土壙の方



第238図　墳頂部土壙実測

が石列より古いと判断される。

遺物（第239図）

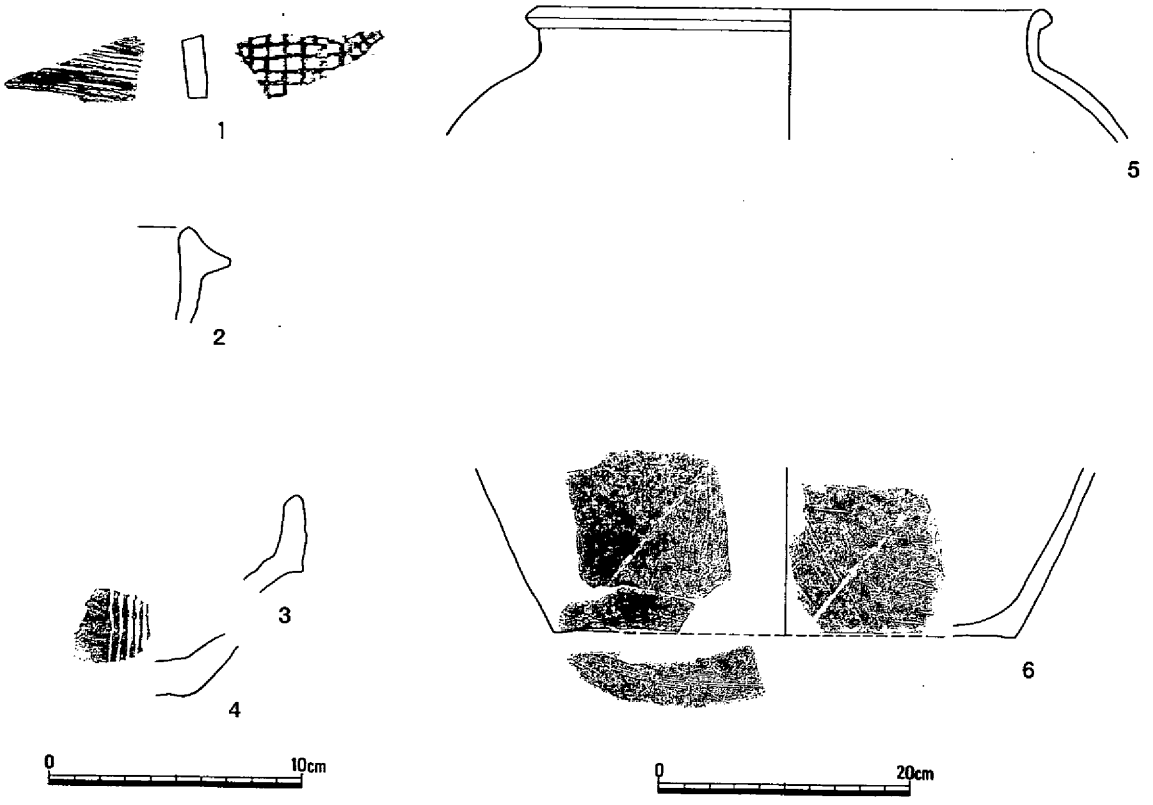
茂平古墓の出土遺物の量は少なかった。周溝内からは1と2が出土したが、いずれも流れ込みと考えられる。1は勝間田焼の甕片で、時期は中世であるが、具体的には明確にできない。3・4は表土中のものである。備前焼の擂鉢で、茂平城から出土したものに近い。時期は、室町時代後半に比定される。5・6は中央撹乱土中と主体部埋土中を中心として出土したもので、同一個体と考えられる。時期は、口縁が玉縁ではあるがまだ垂れていない形状であることと色調が灰色に近いことから、備前焼編年[1]のⅣ期～Ⅴ期初めに相当し、鎌倉時代末から室町時代と考えられる。

まとめ

茂平古墓は当初考えられた横穴式石室墳ではなく、中世の墳墓であることがわかった。しかも、第1段階の盛土の後に第2段階として頂部に盛土が追加され石列が作られていることも判明した。中心となる主体部は撹乱のため不明であるが、備前焼の埋甕が1基存在していたことは確かだろう。2基の土壙は埋葬主体である可能性が高いものであるが、残存状況からは断定できなかった。本来の埋葬が埋甕であって、土壙はそれを破壊して掘り込まれているとも推測できよう。また遺物の絶対量が少なく、中心以外で埋葬施設は検出できなかったので、埋葬は少数であったと考えられる。

茂平古墓の築造時期は、中央付近から出土した備前焼の甕の時期から鎌倉時代末から室町時代ごろと考えられる。これは、茂平城や黒土中世墓の存続時期に比べてやや前にさかのぼることになる。ただ、石列が作られた時期については茂平城と関係のある可能性もある。

茂平古墳のような中近世墳墓で周溝・盛土を持つ例として、茂平古墓の北側300mにある本報告書内の黒土中世墓(P181参照)がある。周溝を外側に巡らせ、17.5×18mの方形土塁を持ち、中央北端に



第239図　遺物実測（S＝1：6、甕）

表28　茂平古墳土器観察表

NO	器　形	口　径	器　高	手　法　の　特　徴	胎　土	焼　成	色　調	備　考
1	勝間田焼			外：格子タタキ　内：カキメ	1㎜以下の砂粒	良	灰白色	
2	瓦質羽釜	18.3		外：内：ナデ	1㎜以下の白色粒多	良	黒色	
3	備前すり鉢	27.2		外：内：ナデ　〃	砂粒僅少	良	灰赤色	
4	備前すり鉢			外：内：ナデ	1㎜以下の白色粒多	良	暗灰黄色	
5	備前甕	40		外：内：ナデ	0.5～3㎜の砂粒多	良	オリーブ黒色	
6	備前甕			外：内：ナデ内：カキメ　底：カキメ	0.5～3㎜の砂粒多	良	オリーブ黒色	

宝筐印塔を据える８×５ｍの土盛を持つ。土塁内は墓域として機能し、火葬墓・土葬墓が設けられる。また、最近発掘された例として、岡山城二の丸調査時に検出された中世墳墓(2)がある。外側に周溝を持ち南北５ｍ、東西はそれ以上の方形の盛土の周囲は角礫で囲み、盛土上には円礫が敷かれ、埋甕などの埋葬施設もこしらえてあった。盛土の下には火葬の跡があり、越州窯系の青白磁や土師器の皿が置かれていた。鳥取県東伯郡大栄町妻波古墓(3)は方形の盛土を持つ４期にわたって造営が続いた中世墳墓である。そのうちの３期では上下２段に築造された墳丘の下段に100余基の五輪塔を並べていたと考えられている。

妻波古墓では個人墓から集団のための参り墓への移行が同一地点で確認されたが、茂平古墓と黒土中世墓地の間にも、個人墓あるいは少数の人のための墓から集団墓への移行が行われたともいえるだろう。

註

(1)伊藤　晃「窯業」　近藤義郎編『岡山県の考古学』　1987年　吉川弘文館

(2)中国電力内山下変電所建設に伴う岡山城二の丸の発掘調査は、中国電力内山下変電所建設事業埋蔵文化財調査委員会が1994年８月１日から９月30日に行った。報告書近刊。

(3)植野浩三ほか『妻波古墓』　1985年　鳥取県東伯郡大栄町教育委員会

第７章　茂　　平　　城

第１節　調 査 の 概 要

（１）調査前の状況

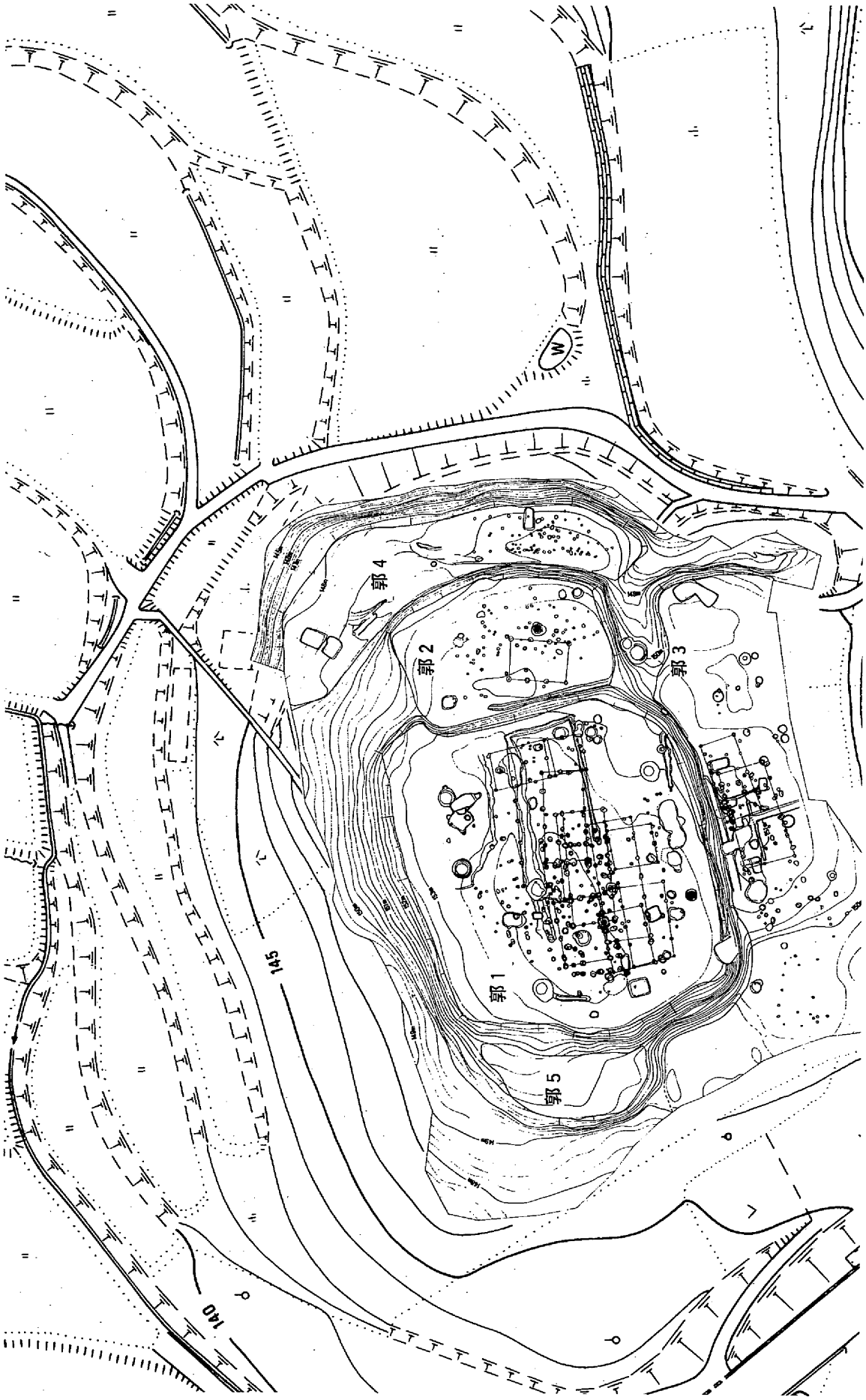
茂平城は狭隈な谷間がやや開けたところに、東から西へ延びる尾根の先端部を利用して構築されている。標高は最高所で154ｍ、周囲の水田との比高差は15ｍ程度である。視界は周囲の山並みに遮られ、見渡せる範囲は狭い。以前から地元の人に城として意識されていたことは確かで、茂平城のある田畑の小字名は「城山」となっている。

茂平城の調査前の様子は、最上部に位置し最も面積の広い郭１の周囲に平坦面が取り巻く平山城のようであった。郭１とその東１段下に位置する郭２、さらに東の郭４は畑として利用され、郭１の南１段下の郭３は畑及び人家として利用されていた。郭１西１段下の郭５は荒れ地であるが、最近まで使用されたらしい芋穴（袋状の貯蔵穴、深さ約２ｍ）が１基あった。郭１北側は植林され、山林になっていた。防風林としての役割も担っていたのであろう。その他は荒れ地であるが、地権者の話によると郭３西側は水田として耕作されていたそうである。なお、郭１の北東隅に盛土をした突出部があり、この上に花崗岩製らしい祠が据えられていた。祠の下も念のため調査したが、遺構は存在しなかった。また、郭３と４の東側で現在は農道となっている所へ堀切を想定した。堀切の城側は農道によって改変されている部分もあったがほぼ築城当時のままであると思われた。堀切の城と反対側は、山側に平坦面が造成され、堀切側へはコンクリートの擁壁が作られていたため元の姿はわからなかった。城への登り道は、郭３の南東から郭２と３の間を通り郭１へ至る道と、郭１北側をつづら折れに登る道の２本がある。また、郭１北側の水田との境に石組みの井戸があった。

（２）調査の概要

調査はまず茂平城周辺に17本のトレンチを設定し、遺跡範囲を確認する事から始めた。城の北側では郭１の北斜面とさらに北側の水田にトレンチを設けたが、遺構は見られなかった。城の西側では、郭１の北西と郭５の西の畑に設定した。その結果、郭１北西は自然地形であることがわかり、郭５西の畑も遺構は検出されなかった。城の東側については、郭４の斜面とその下の水田にトレンチを設定した。郭４斜面は基盤層がすぐ検出され、その下の水田は耕作土直下で基盤層が水平に確認された。城の南側では、郭３にトレンチを設定し、遺構を検出したため全面調査の対象となった。

また南東隅で堀切確認のために城側と対岸部に設定したものでは、いずれも地山の下がりを確認した。以上は平成４年度に行われたが、平成５年度に郭３南側の宅地にもトレンチを入れ、遺構が存在しないことを確認した。全面調査では、近くには未買収地もあり環境整備には留意した。梅雨時期には降雨による土砂流出が懸念されたため、郭３・５表土除去時には郭１北側へ排土を移動し盛り上げて固める作業も行った。

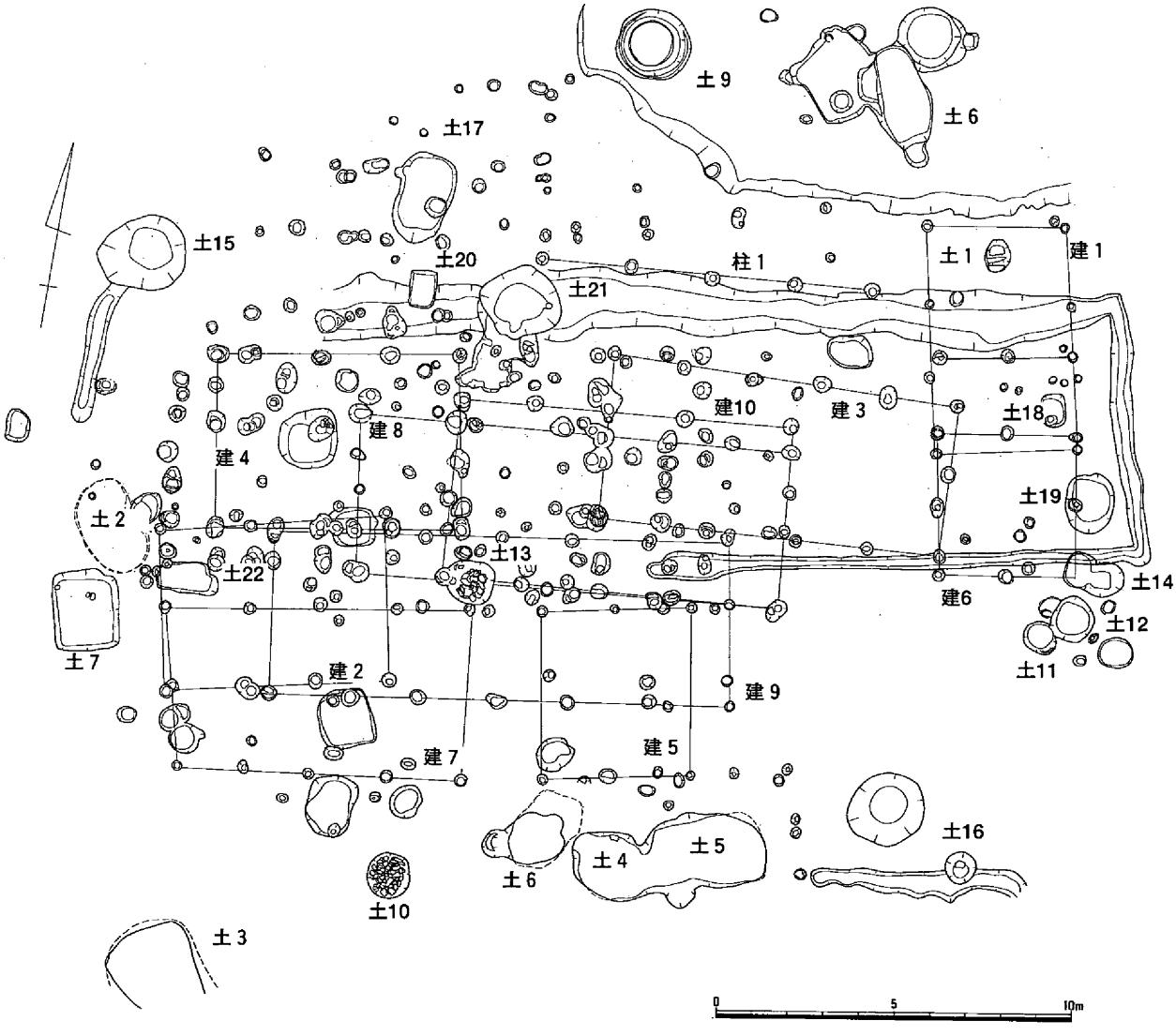


第240図　茂平城全体図（S=1：500）

第2節　郭　　1

郭1は遺構の残存状況が最も良好であった。地山である岩盤の上に15～90cmの深さの柱穴が多く検出され、遺構検出は簡単であったが建物の配置の判断にかなりの時間を要した。調査時には最低限の建物の構成として方形を想定したため、それぞれについて軒や張り出しを持つ可能性は考慮できなかった。以下、まず建物・土壙の配置について概略を述べ、次に各個の遺構へ移ることとしたい。

建物は、南北柱穴列が磁北の方向より少し西へ傾くA群（建物1、2、4、5、6、7、9）と磁北に添うB群（建物3、8、10）の2群に分かれる。A群では、建物1・4・5・7の柱穴列の方向が類似することから同時代に存在すると考えられよう。建物6・9はそれらより柱穴列の方向がやや東へ傾き、別の時期になる可能性が高い。建物2はそれらに比べてさらに柱穴列が西方向へ傾く傾向にある。よって、A群は2～3時期の建物群になると考えられる。B群はいずれも重複するが、8と10は柱穴列の方向がほぼ同じで、近接した時期の立て替えの可能性がある。なお柱穴列1は建物3と関連していると考えられる。このことから、建物は合計6～7時期を想定できる。切り合いのある柱



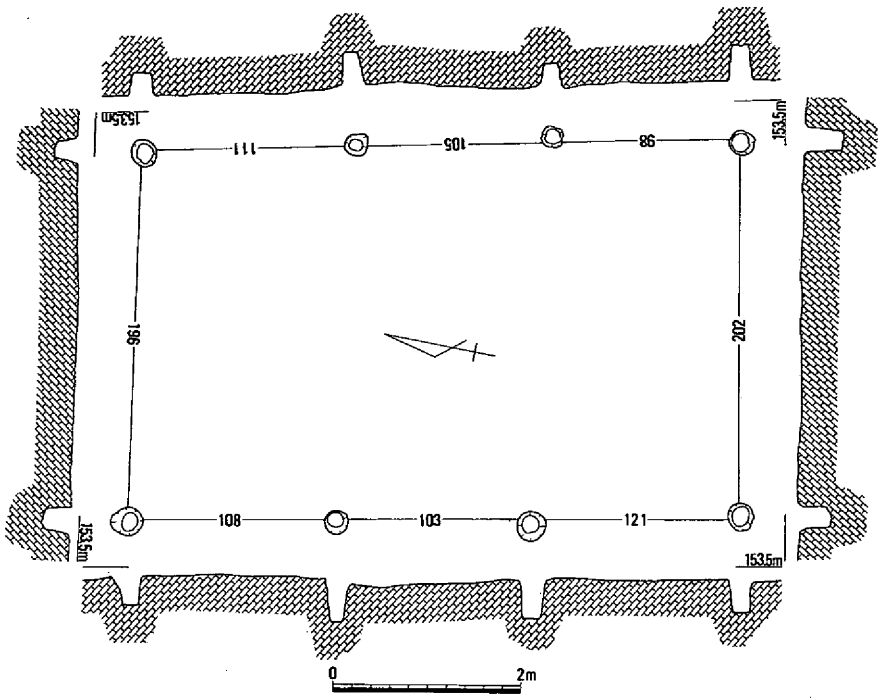
第241図　郭1遺構配置（S=1：200）

穴は建物10と８で確認され、10が古く８が新しいことがわかった。その他の建物では切り合い関係がなく、柱穴から遺物の出土もないことから前後関係を確かめるのは困難である。

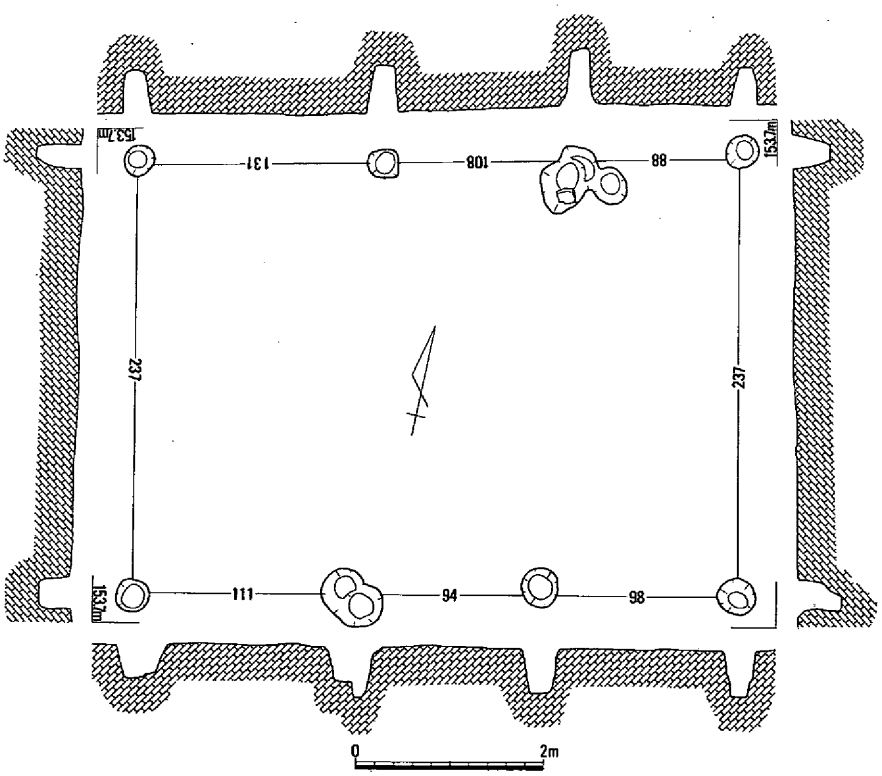
土壙については１～６が袋状土壙、10～14が墓壙、他は用途不明である。配置を見ると袋状土壙は郭１の中央部になく、墓壙は中央部のほか東端に位置する。

溝については東西・南北に流れるものを３条検出している。中でも中央を流れる「コ」の字状の溝が建物４の柱穴列と流路方向が同じであるが、この溝は建物４の東約18ｍで曲がるため、建物４の雨落ち溝とは思えない。

なお、北西と南東隅には遺構は見られない。いずれも建物の通路あるいは共有空間であった可能性が考えられる。



第242図　建　物　1



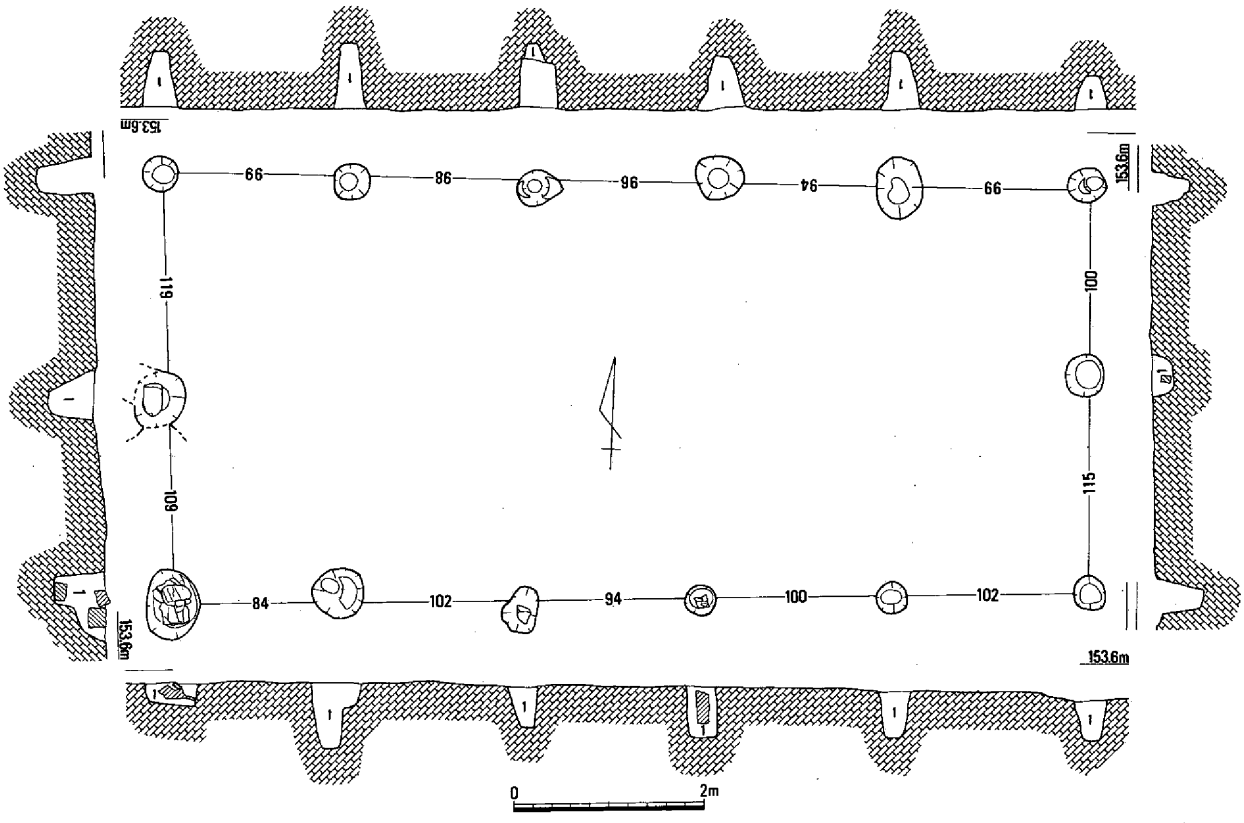
第243図　建　物　2

（１）建物

建物１（第242図）

建物１は郭１の東端に位置する３×１間の掘立柱建物で、南北に長軸をとる。

柱穴の深さは検出面から30～40㎝、掘り方は円形を呈し、



1．灰褐色土

第244図　建　物　3

直径は30cm前後である。柱穴の底面の高さは海抜152.9～153.1mで一定である。検出時には建物と認識できず、後に存在を確認したものである。柱穴内には遺物は見られなかった。

第241図で示す通り、建物内の北側に土壙1の入り口がある。建物1の柱穴はいずれも土壙1とは干渉していない。このため、両者は時期的に同時に存在したとしても矛盾はないと考えられる。

建物2（第243図）

建物2は郭1の西に位置し、建物4・7・8と重複する。規模は3×1間である。柱穴の掘り方は本来は直径35cmほどの円形であると考えられるが、大きくなっているものもある。柱穴の深さは検出面から30～50cmで底面は海抜152.9～153.1mの範囲に収まる。

この建物も検出時には建物と認識できず、柱穴を掘り下げた後に確認したものである。遺物は見られなかった。

建物3（第244図）

建物3は郭1の中央やや東側に位置し、長軸を東西方向に取る5×2間の掘立柱建物である。建物1・6・8・10と重複する。建物9とも同時には存在できないと考えられる。

各柱穴の掘り方の形状は検出面で円形から楕円形を呈し、直径30～70cm、深さは検出面から40～70cmである。柱穴底面は海抜152.8～153.2mを測る。柱穴内の土層は単純な堆積を示すものが多い。

この建物でも柱穴内に礫を含むものがある。底面付近に位置するものもあったが、埋土中に浮いた状態のものが多く礎石とは考えにくい。

建物４（第245図）

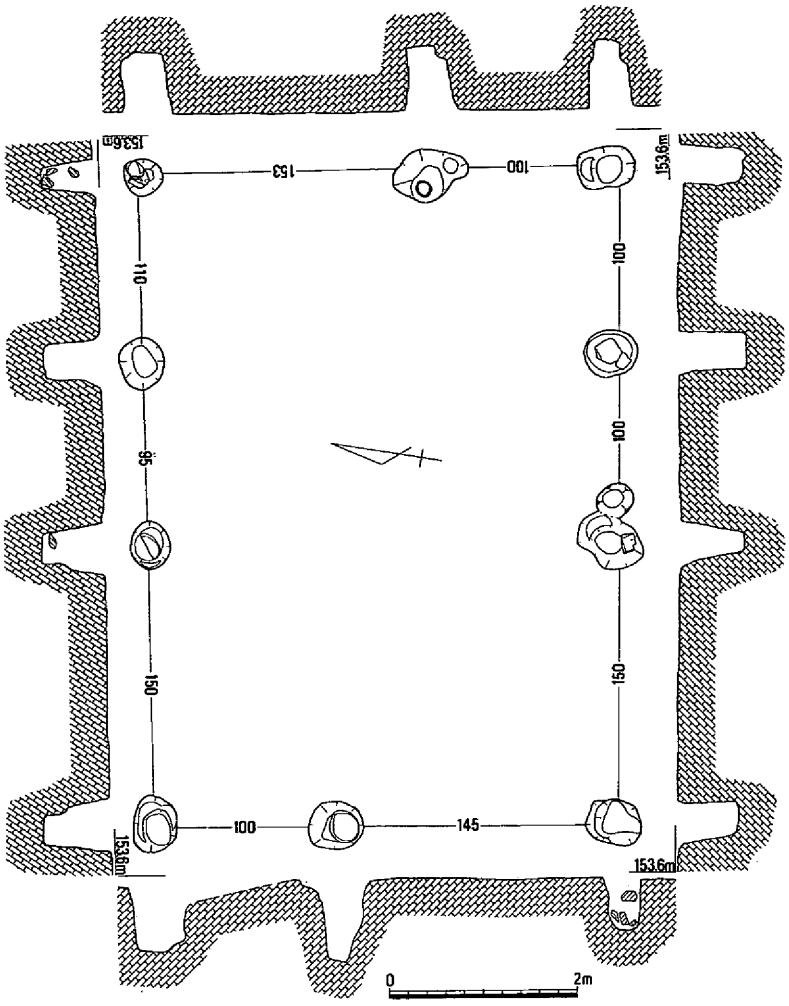
建物４は郭１の西側に位置する３×２間の掘立柱建物である。建物２・８・10と重複する。柱穴の掘り方は検出面で径が40～60cmの円または楕円形である。柱穴の深さは検出面から60～80cmで、底面海抜高は152.7～153mである。北西隅から東へ１つ目の柱穴内の礫は、礎石であると考えられる。

柱穴の配置と柱間の尺度については特徴的といえる。建物の東西南北の各柱列のいずれにも約１mと1.5mの２通りの尺度が用いられている。

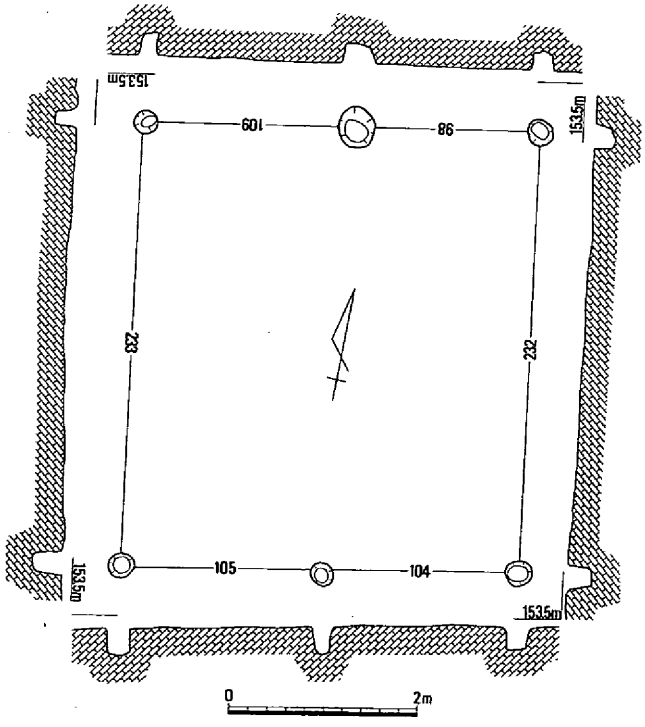
建物５（第246図）

建物５は郭１の中央南側で建物７の東に連なる掘立柱建物である。規模は２×１間で、１間の長さは南北のほうが東西に対して倍以上になる。建物９と重複し、建物８・10とは同時に存在できないと考えられる。柱穴の掘り方は、検出面で円形を呈し直径25～40cmである。深さは検出面から20～30cmで底面の海抜高は153.1m前後を示す。

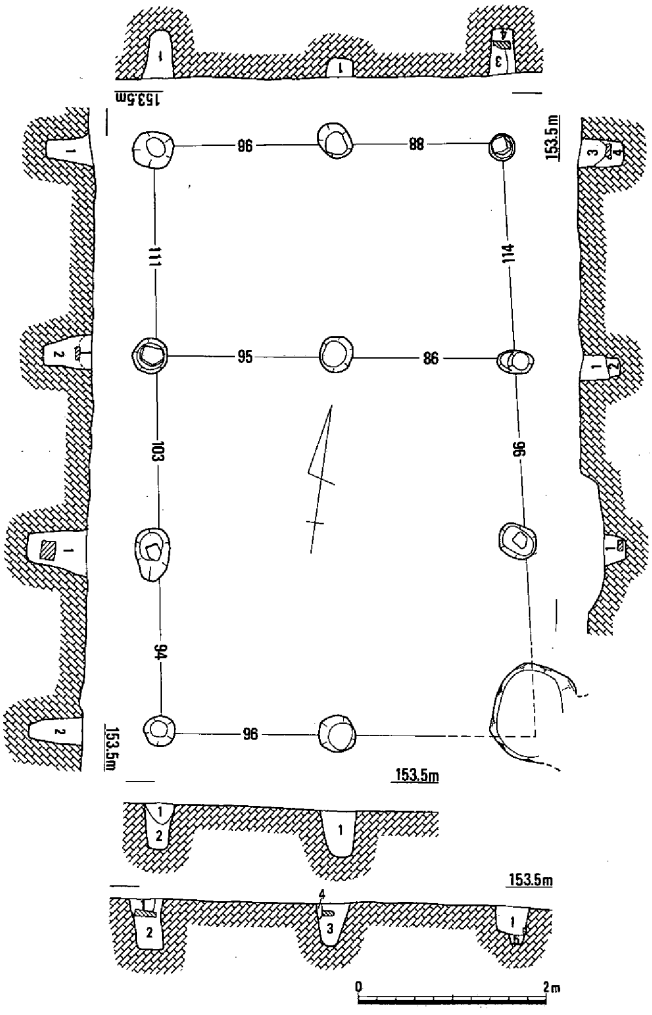
検出面からの掘り方は他の建物と比べて浅いが、柱穴底面の海抜高から見るとそれほど変わらない。



第245図　建　物　4



第246図　建　物　5



第247図　建　物　6

1．灰黄褐色砂質土
2．黄褐色砂質土
3．灰黄白色砂質土
4．淡黒褐色土

建物6（第247図）

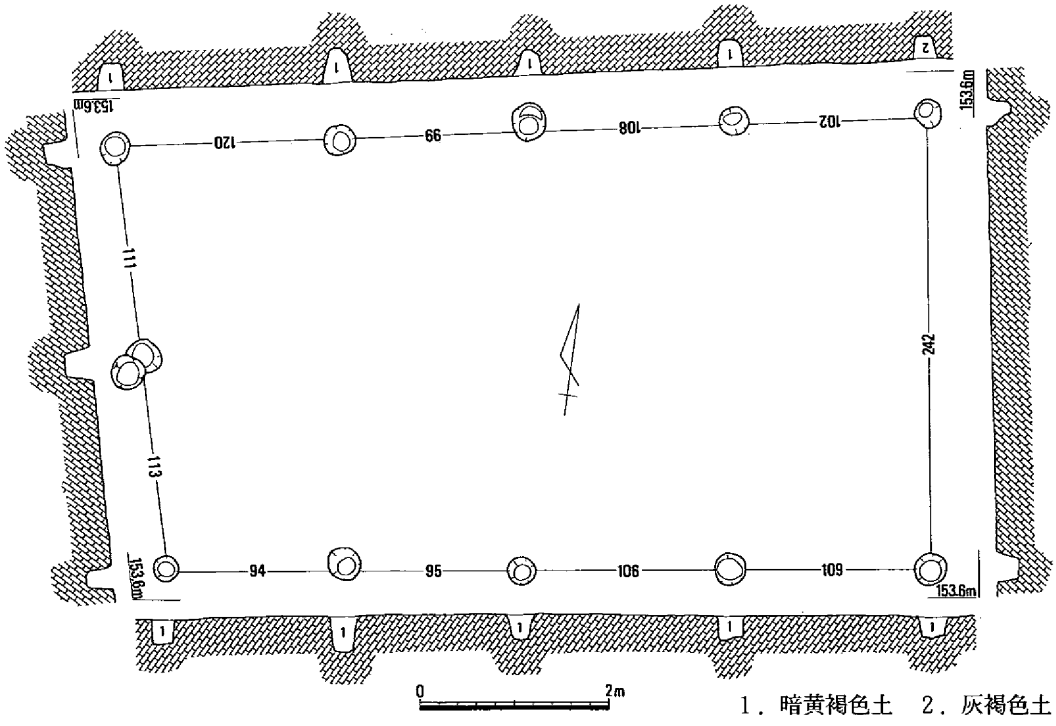
建物6は郭1の東端に位置する3×2間の掘立柱建物である。長軸方向は南北で、北側が建物1と重複する。南東隅の柱穴は土壙14によって切られる。

柱穴の構成は基本的に総柱と考えてよいだろう。北から3間目が空いている。これは茂平城の他の建物には見られない柱の配置である。

柱穴掘り方は検出面で円形～楕円形の形状で、径は30～50cmである。柱穴の深さは検出面から20～60cmで、柱穴底の海抜高は152.7～153.1mである。

埋土は上層と下層に分かれるものがあるが、いずれも上層の方が灰色がかった黄色である。

柱穴のうち4つには礎石を有し、検



1．暗黄褐色土　2．灰褐色土

第248図　建　物7

出面から15～30cmの深さで検出された。そのうち２つの柱穴で柱の抜き取り痕が確認でき、いずれも礎石まで達している。

建物７（第248図）

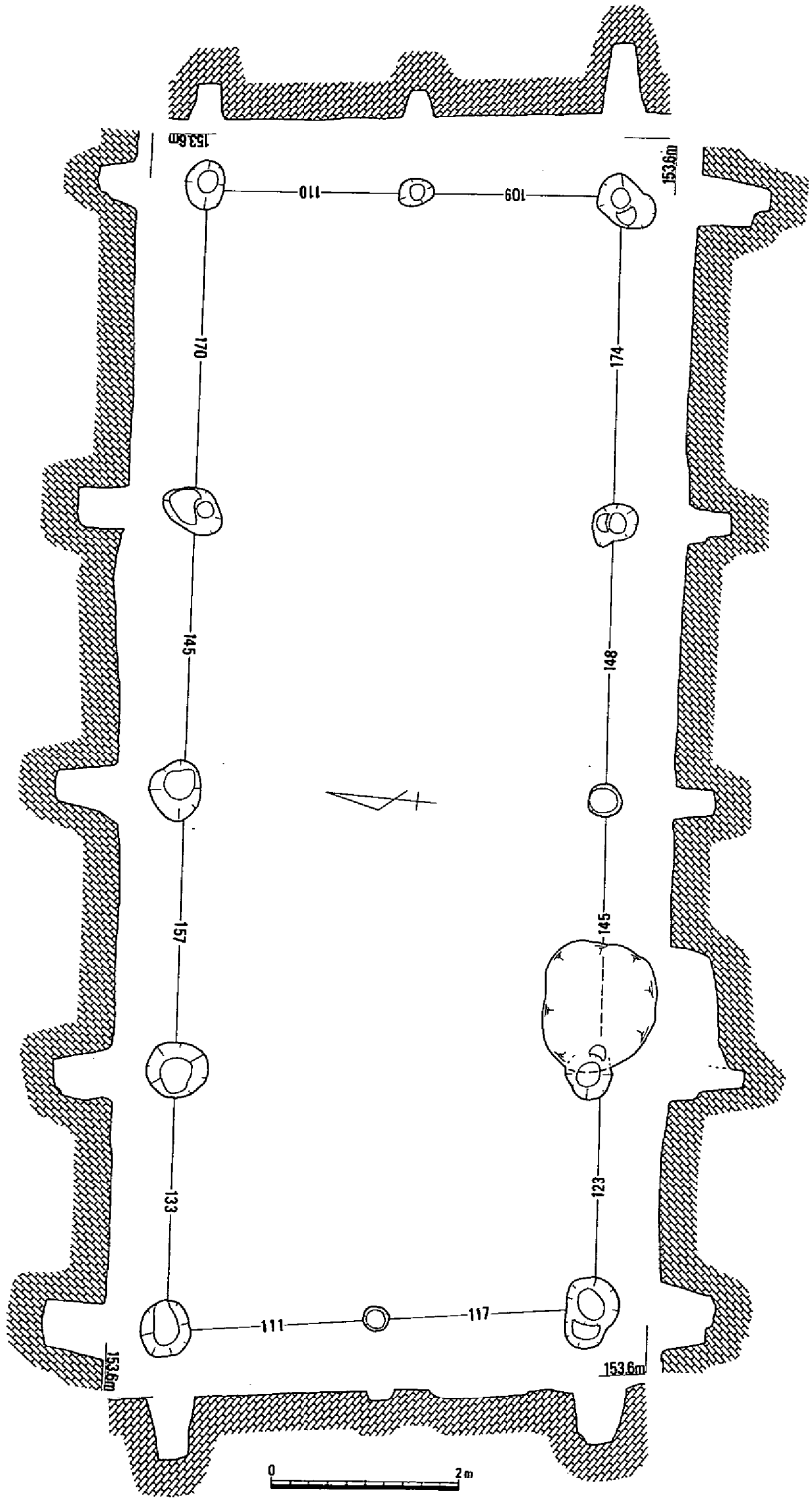
建物７は郭１の南西に位置する４×２間の掘立柱建物である。長軸方向は東西で、建物２・９と重複する。西柱穴列が南北列に対して直角にならないこと、あるいは東側は１間で西側のみ２間となるといった変則的な構成を取る。

柱穴掘り方は検出面で円形で、直径は30～40cmである。柱穴の深さは検出面から20～40cmで、柱穴底の海抜高は153.1～153.3ｍである。

建物８（第249図）

建物８は郭１の中央に位置する４×２間の掘立柱建物である。長軸方向は東西で、建物２・３・４・９・10と重複する。柱穴配置は長方形である。柱穴掘り方は検出面で円～楕円形、径は30～75cmである。柱穴の深さは検出面から15～70cm、柱穴底の海抜高は152.6～153.4ｍでばらつきが大きい。

柱穴には抜き取り痕かと思われる段状の掘り方を呈するものが目に付く。また、東西の柱間が南北に対して比較的大きめであることもこの建物の特徴といえよう。



第249図　建　物　８

建物９（第250図）

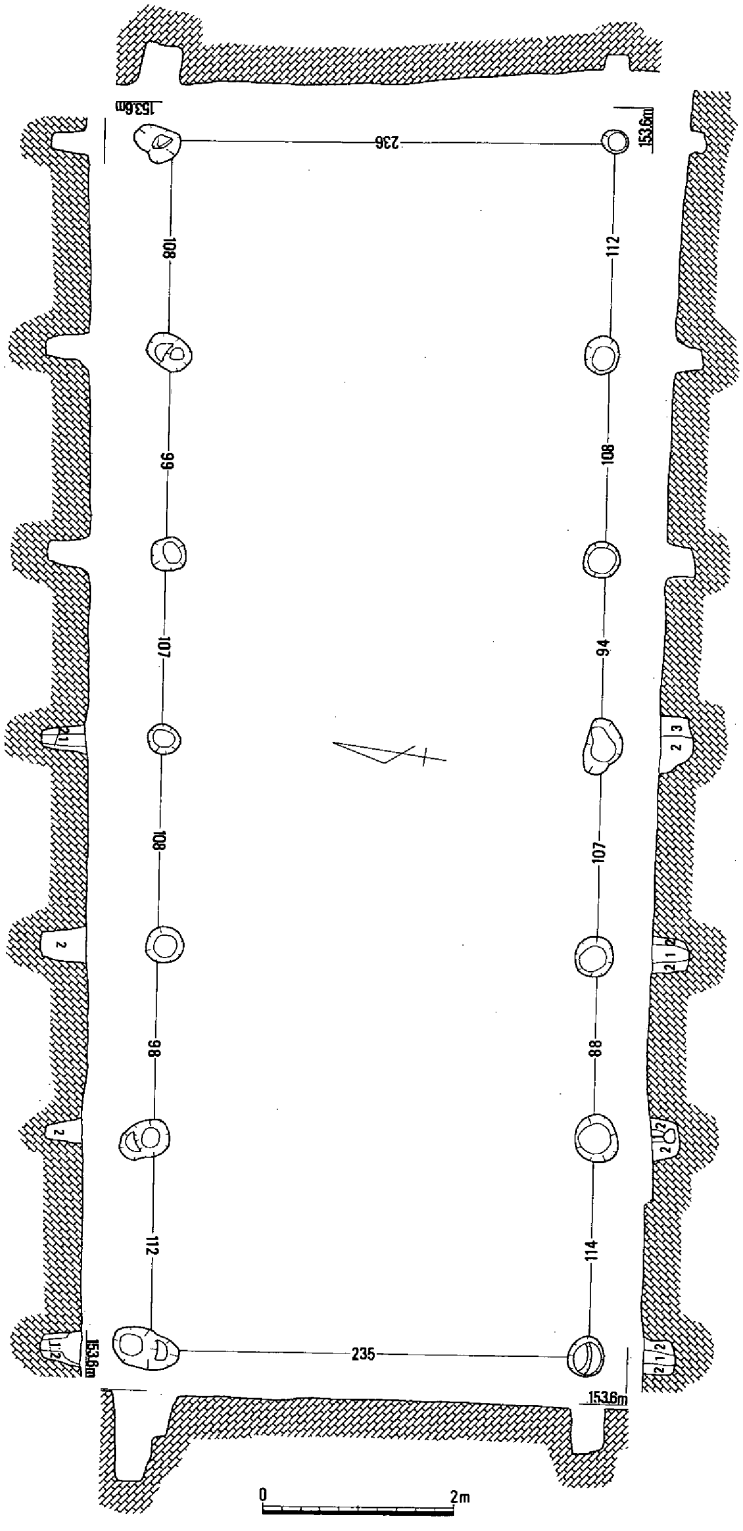
建物９は郭１の中央から南西に位置する６×１間の掘立柱建物である。長軸方向は東西で、建物２・５・７・８・10と重複する。この建物も南北の１間の長さが東西の倍以上を呈する。柱穴掘り方は検出面で円～楕円形で、直径は30～60cmである。柱穴の深さは検出面から20～40cmで、柱穴底の海抜高は153.0～153.1ｍと一定である。柱穴の土層は一部実測できていないが、これは建物が検出時よりも東側へ広がっていたことによる。柱穴には径10～20cmの抜き取り痕が存在するものもある。これは実際の柱の幅とそれほど違わないものと思われる。

建物10（第251図）

建物10は郭１の中央に位置する４×１間の掘立柱建物である。長軸方向は東西で、建物３・４・８・９と重複し、土壙13に南西隅の柱穴を切られる。柱穴の掘り方は検出面で円形を呈し、直径は40～55cmである。柱穴の深さは検出面から60～90cmで、柱穴底の海抜高はほぼ152.7ｍである。また南列東２つ目の柱穴から石臼（第252図）が出土している。石臼は切線主溝形の擂目を持つ。回転方向は反時計回りが想定される。

なお石臼の名称は次の本によった(第252図左参照)。

三輪茂雄『増補　石臼の謎』1994年　クオリ



１．暗褐色土　２．淡灰黄褐色土　３．暗黄褐色土

第250図　建　物　９

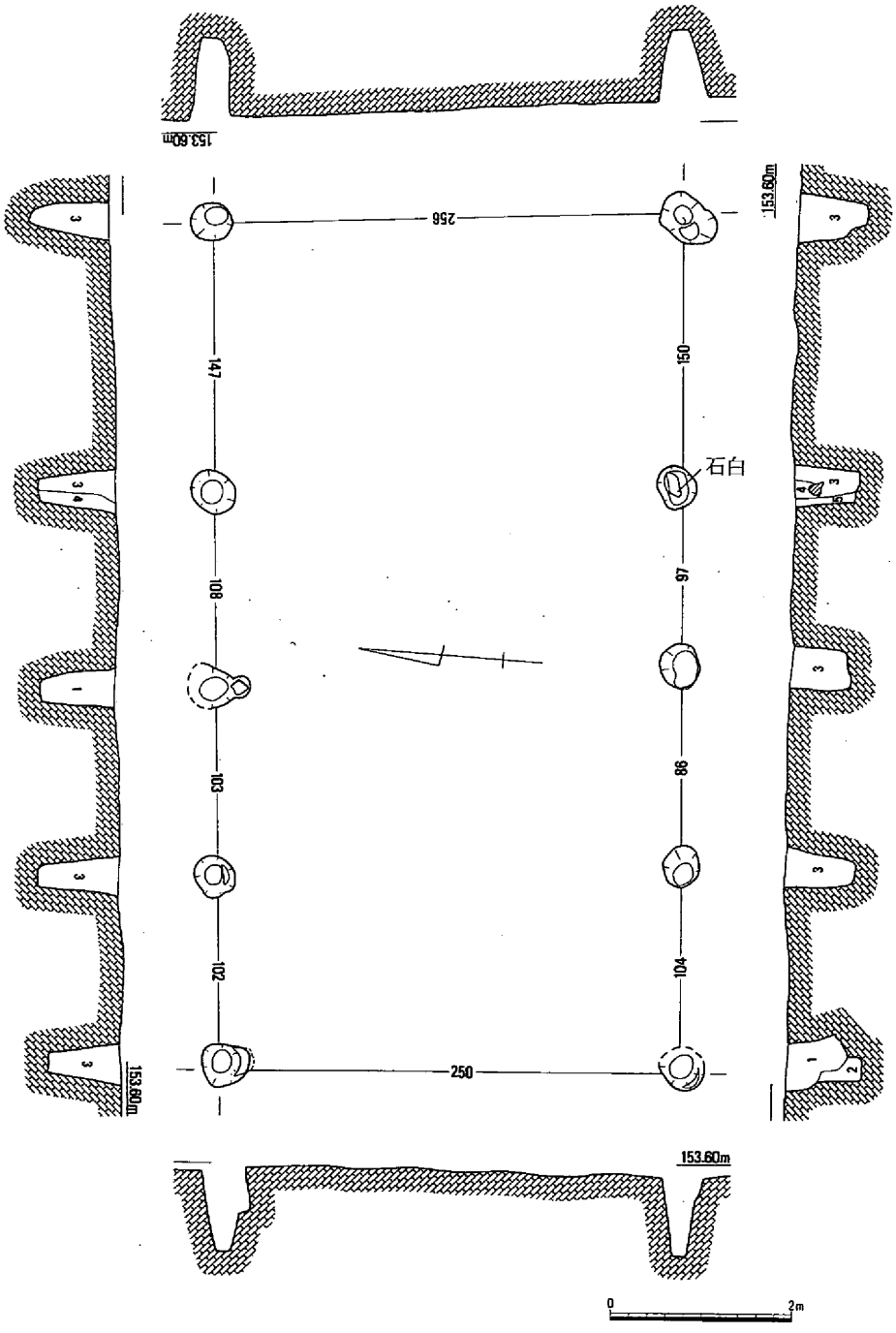
柱穴列１（第253図）

柱穴列１は郭１の中央北側、建物１の西、建物４の北に位置する４間の柱穴列である。

柱穴掘り方は検出面で円形で、径は35～40cmである。柱穴の深さは検出面から55～70cmで、柱穴底の海抜高は152.7～152.9ｍである。

溝

東西・南北に流れる溝を３条検出している。その中で中央部にあり「コ」の字状に流れる溝は、検出面の幅が北側で最大180cm、南側で最小35cmあり、深さは北側で検出面から10cm程度、南側では３cm程度で、残存状況はよくない。

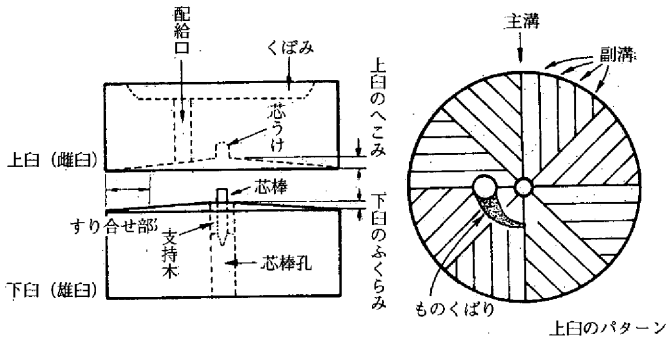


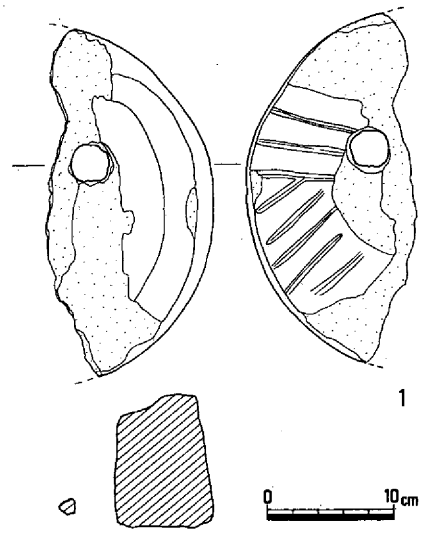
１．暗灰褐色土　２．淡黄褐色土　３．淡灰黄褐色土　４．淡灰茶褐色土　５．淡灰褐色土

第251図　建　物　10

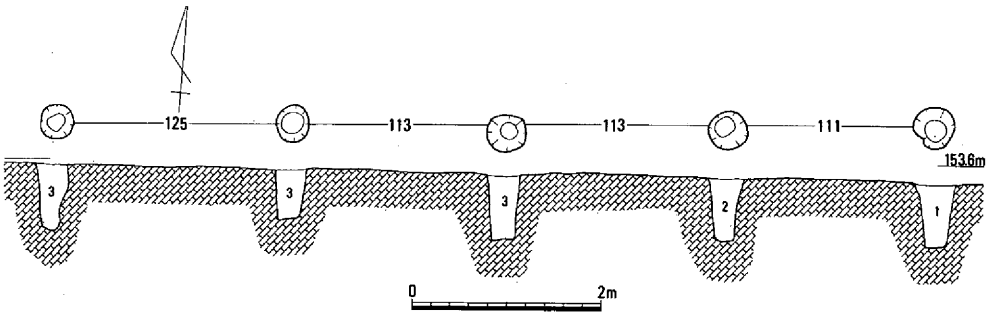
柱穴など出土の遺物（第253図）

2は郭1の柱穴から出土したもので、肥前陶器であるが京焼き風で高台にも施釉する呉器手である。3は郭1の柱穴から出土した。上半部に釉がかかる陶器で、釉は灰オリーブ色を呈する。4は郭1の北側から出土した。肩部に櫛描波状文が入る。

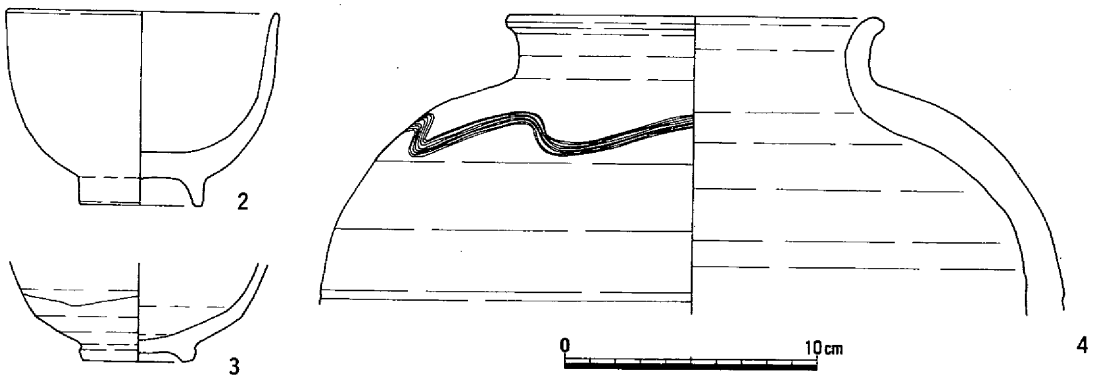




第252図　建物10柱穴内石臼・石臼名称



1．淡黄褐色土　2．暗黄褐色土　3．灰黄褐色土



第253図　柱列1・柱穴・表土遺物

表29　郭1表土・柱穴土器観察表

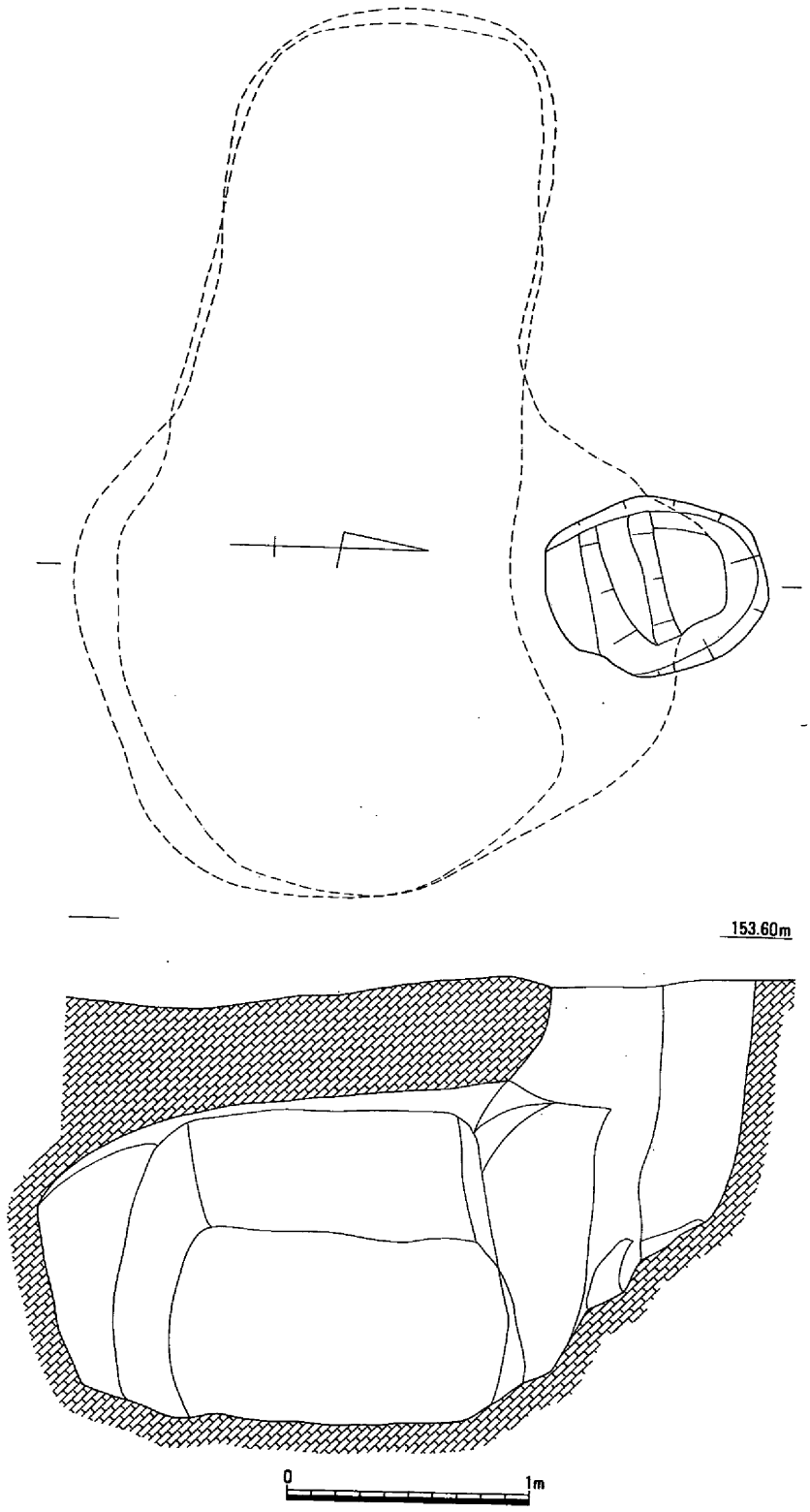
番号	器種	年代	口径	器高	胎土	焼成	色調	備考
2	肥前椀	17C後半	10.6	7.6	1㎜以下の砂粒	良	浅黄色	
3	肥前椀				1㎜以下の砂粒	良	にぶい黄橙	
4	備前壺		14.2		1㎜以下の砂粒	良	暗灰黄色	

（２）貯蔵穴

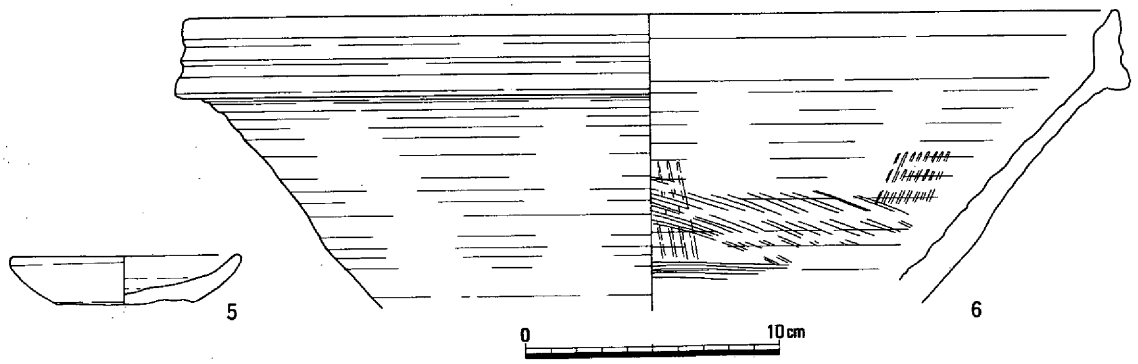
土壙１（第254・255図）

郭１の東端、建物１内の北側に位置する最も残りのよい袋状土壙である。検出面から入り口を少し掘り下げたところで角礫の集積を検出した。それを除去したところ、埋土は入り口から奥へ向かって入り込んでおり、中には空間が残されていた。埋土の色調は灰白色土である。全体の約1/3が土で埋まり、奥には水がたまっていた。

土壙は全て岩盤をくり抜いて作られている。入り口は90×73㎝の楕円形で、検出面から約１ｍほどは垂直に落ち込むが、途中から階段状の削り出しが４段こしらえてある。削り出しの傾斜は階段にしてはきついもので、使用による磨滅のためかとも思われる。削り出し部分に杭などを突き立てた痕跡は見られなかった。土壙は主軸を南北に向けると考えられる。内の形状は円形の部屋の東側に方形の張り出しを設けた形で、側壁は緩く湾曲して立ち上がり、天井は入り口から西の部屋方向へ下がる。土壙内は最大で幅3.58ｍ、奥行き



第254図　土　壙　１



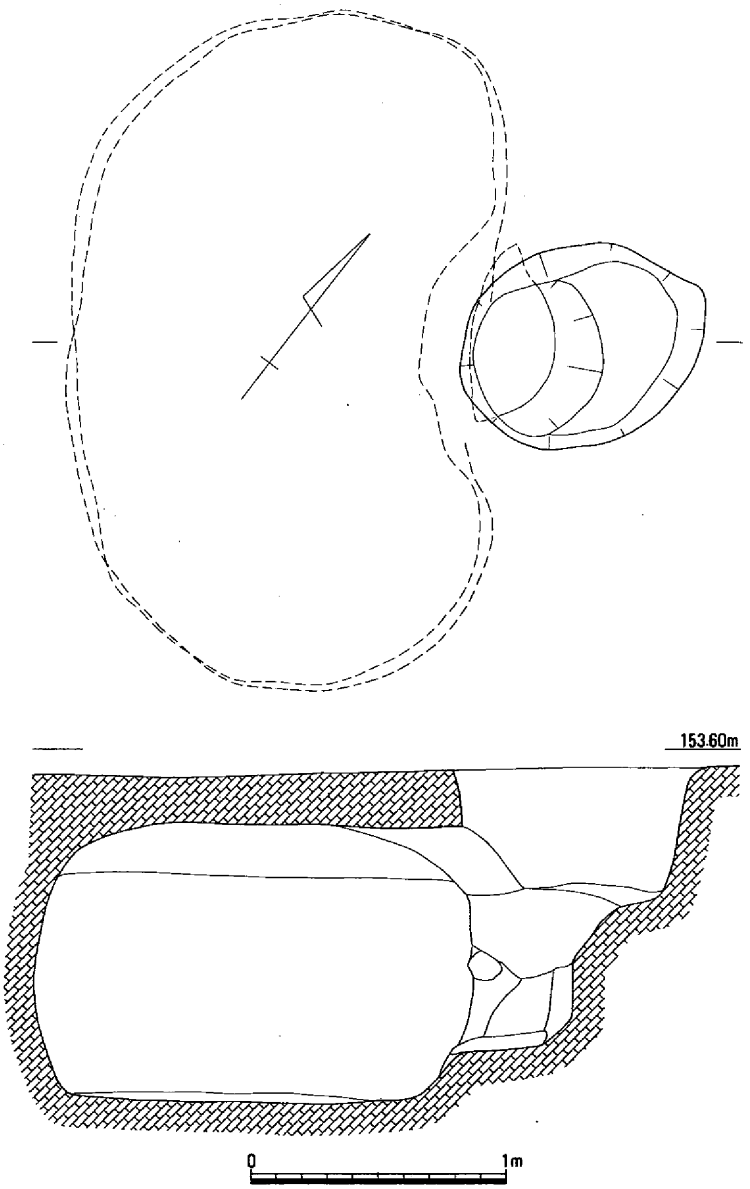
第255図　土壙1遺物

表30　郭1土壙1土器観察表

番号	器　種	年　代	口　径	器　高	胎　土	焼成	色　調	備　考
5	瀬戸美濃系皿	16C後半	8.9		1㎜程の砂粒	良	灰白色	
6	備前すり鉢		37.7		1～5㎜の砂粒	良	赤灰色	

1.70m、高さ1.35mを測る。底面の海抜高は152.2mである。

出土遺物は備前焼擂鉢片6と完形の瀬戸・美濃系陶器皿5がある。5は内面に煤の痕跡が残っており、灯明皿として用いられたものと考えている。底面と内面一部に釉が見られない。底面はヘラ切りである。6は縦方向と斜め方向の擂り目が内面下半にのみ入る。5の時期は16世紀末を示し、6も同時期と考えられるものである。

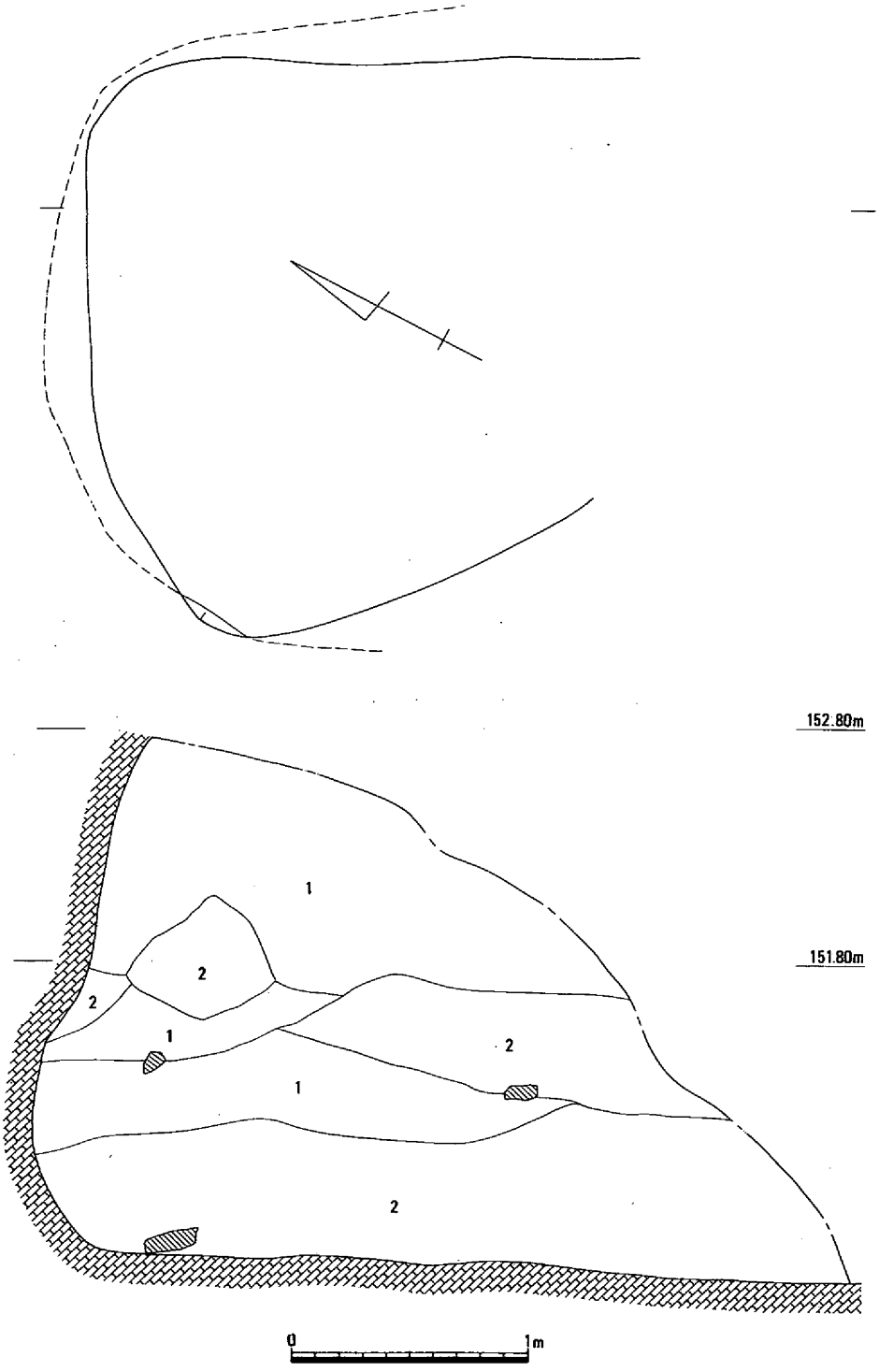


第256図　土　壙　2

土壙２（第256図）

郭１の西端、建物群の西に隣接する残りのよい袋状土壙である。入り口付近には、やはり礫を集積して閉塞した状況が観察できた。埋土は土壙１と同様に入り口から奥へ向かって堆積し、全体の約1/3が土で埋まり、奥には水がたまっていた。埋土の色調は茶褐色土である。

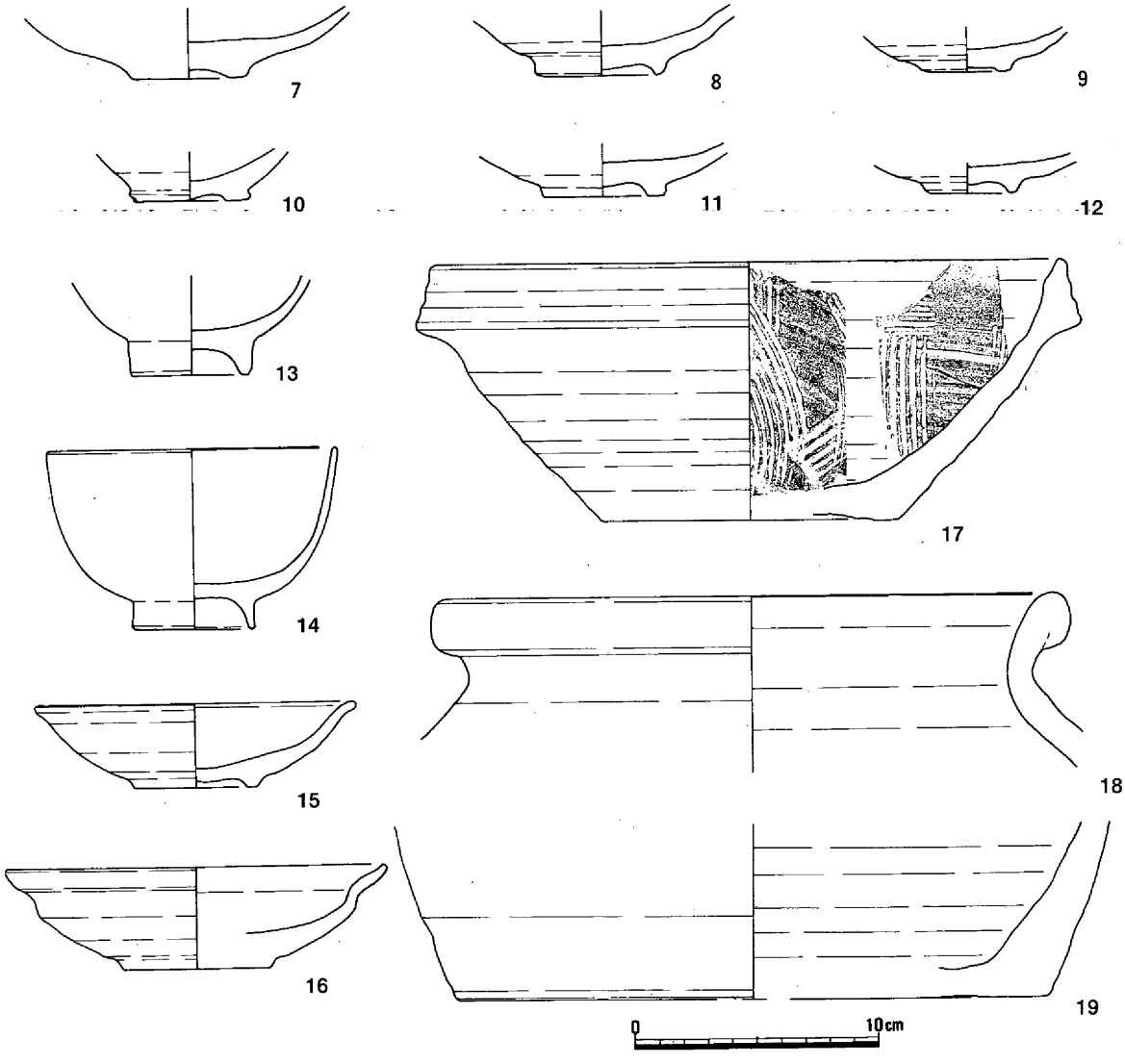
入り口は検出面で１×0.8ｍの楕円形を呈し、検出面から0.5ｍ降りたところで１段、もう0.5ｍ降り



１．灰褐色土　２．黄褐色土

第257図　土　壙　3

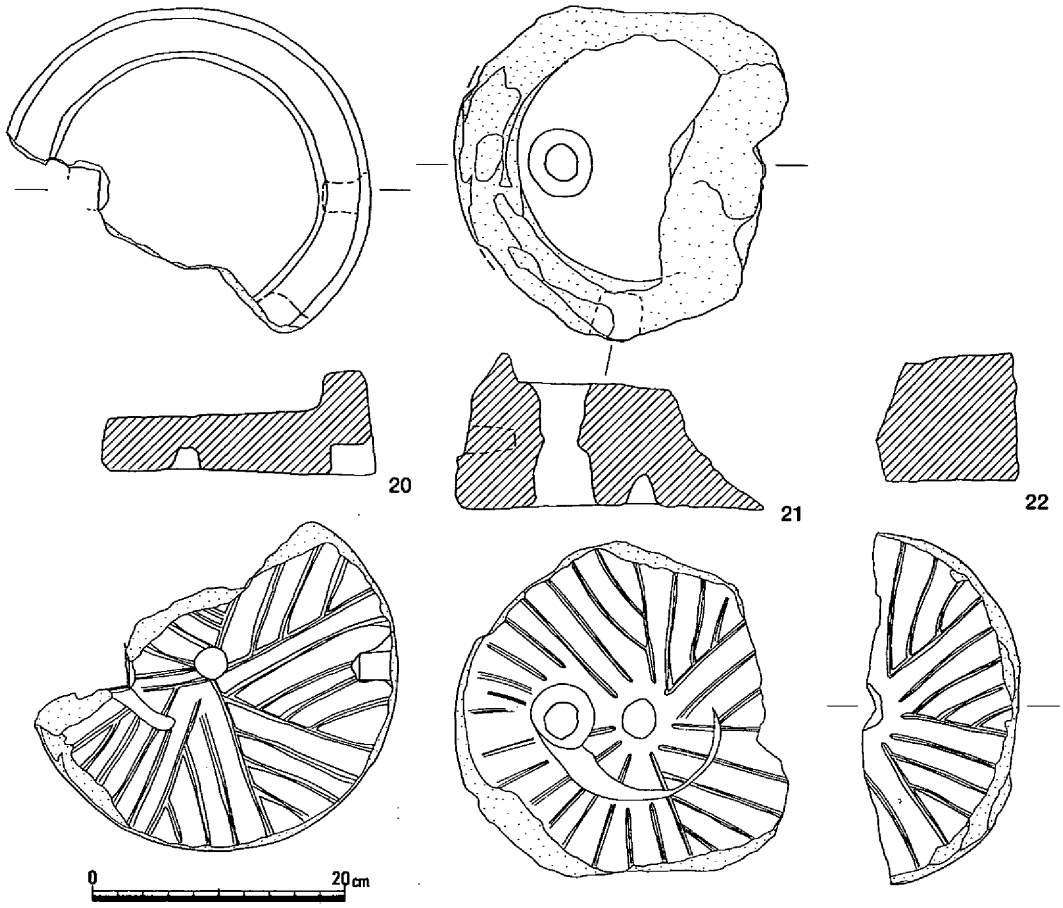
たところでもう1段の計2段の階段を掘りこみ、中へと続いている。土壙は主軸を北東ー南西方向に向ける。平面形は大豆の種子を側面から見た形で、側壁は湾曲気味に真っ直ぐ立ち上がり、天井は緩やかにドーム状をなす。土壙内の底面の最大幅は2.70m、奥行き1.70mで、高さは1.10mを測る。底面の海抜高は152.2mである。遺物は無文灰色の平瓦1点のみが見られた。



第258図　土壙3遺物(1)

表31　郭1土壙3土器観察表

番号	器種	年代	口径	器高	胎土	焼成	色調	備考
7	肥前鉄絵Ⅲ				1mm以下の砂粒	良	にぶい黄橙色	砂目
8	肥前椀				1mm前後の砂粒	良	にぶい赤褐色	砂目
9	肥前椀				1mm以下の砂粒	良	浅黄色	胎土目
10	肥前灰釉椀				1mm前後の砂粒	良	にぶい橙色	砂目
11	肥前椀				1mm以下の砂粒	良	にぶい黄橙色	砂目
12	肥前椀				1mm以下の砂粒	良	にぶい赤褐色	砂目
13	肥前椀				1mm以下の砂粒	良	淡黄色	
14	肥前椀		11.8	7.5	1mm以下の砂粒	良	にぶい橙色	
15	鉄絵Ⅲ		13	3.5	1mm以下の砂粒	良	赤灰色	胎土目
16	鉄絵Ⅲ		15.5	4.2	1mm以下の砂粒	良	にぶい黄色	砂目
17	備前すり鉢		25.6	10.7	1mm前後の砂粒	良	黄灰色	
18	備前甕				1mm前後の砂粒	良	赤褐色	
19	備前甕		25.1		1mm前後の砂粒	良	灰褐色	



第259図　土壙３遺物(2)

土壙３（第257～259図）

郭１の南西隅に位置する土壙である。土壙１・２と同じく、基盤層を掘りこんで作られている。南側は現在の斜面によって切断されている。掘り方は、平面は方形を呈し、北側面が北側へえぐりこまれる。検出面からの深さは最大2.2ｍである。底面は北から南に緩やかに下るもので、最大幅は2.7ｍ、長さは3.2ｍ以上を測り、海抜高150.6ｍから150.5ｍを示す。掘り方の深さと底面の大きさから、当土壙は茂平城最大の土壙と考えられるものである。この土壙はもともとは土壙１・２のような袋状土壙であったが、使用中に何らかの理由で天井が崩落したためごみ穴として再利用したと考えられる。

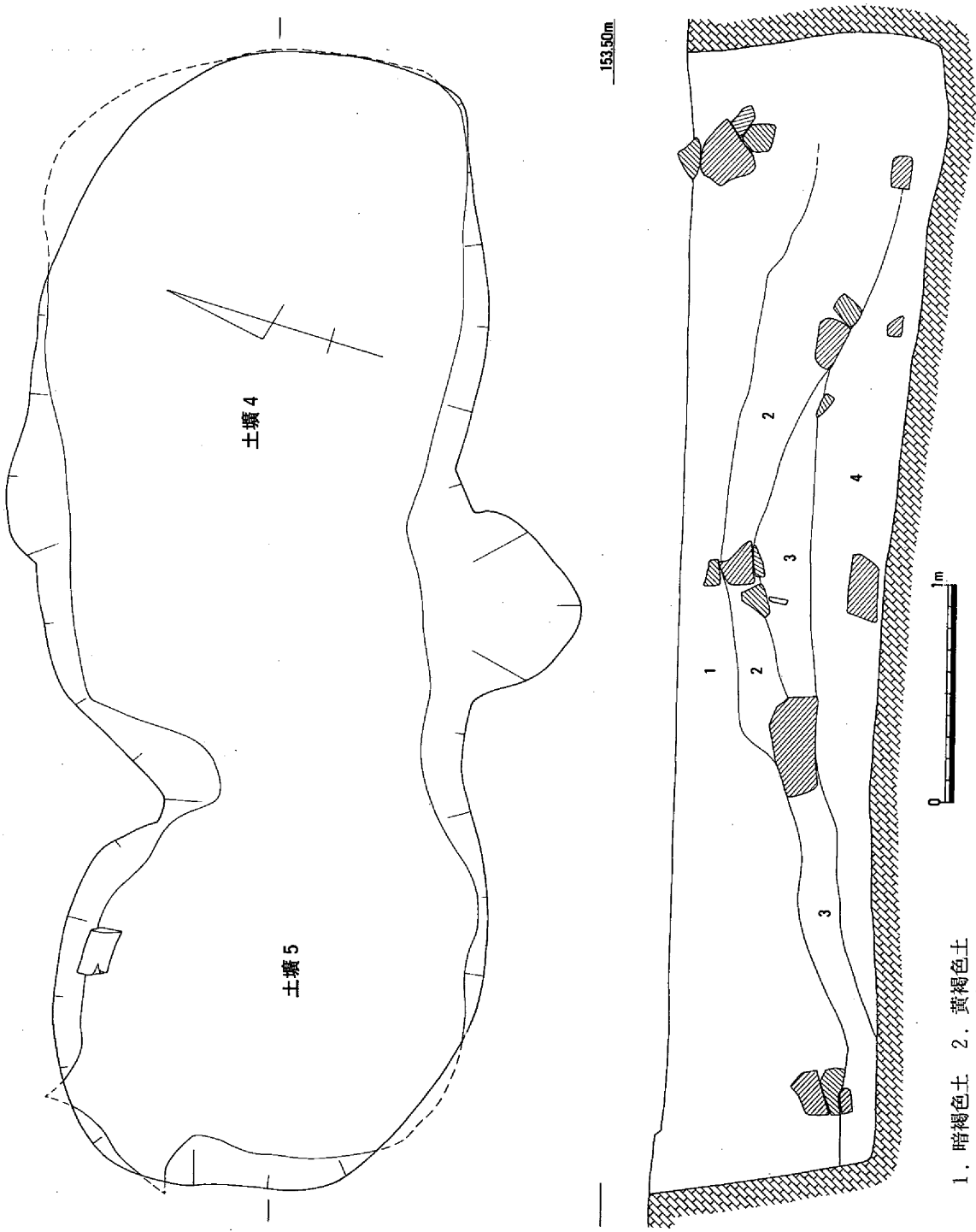
埋土中には陶磁器片・石臼を含む。陶器は肥前の皿・椀で、胎土目積のものと砂目積のものがある。７は小片から復元した。口縁部の拡張がやや緩くなっている。12の内面には３ヶ所の胎土目がある。16・17はいずれも京焼き風呉器手の椀と考えられ、高台底面を除いて釉がかかる。18は内面に胎土目が見られ、高台底面を除いて釉がかかる。10・14・15・19は内面に砂目積が残る。12・18のような胎土目積は1580～1600年の間に制作されたと考えられているものである。19は口縁部を折り返した溝縁皿、ないしはそれに近いものと考えられ、これらは寛永14年(1637)までに作られたと見られる（大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』　1984年　九州陶磁文化館を参考）。備前焼は７の擂鉢が17世紀初頭、８・９の甕が16世紀末に相当すると考えられる。

石臼は20・21が上臼で、いずれも回転方向は反時計周りと推測される。20の供給口は四角形を呈し、21の「ものくばり」はほぼ半周に及ぶ。

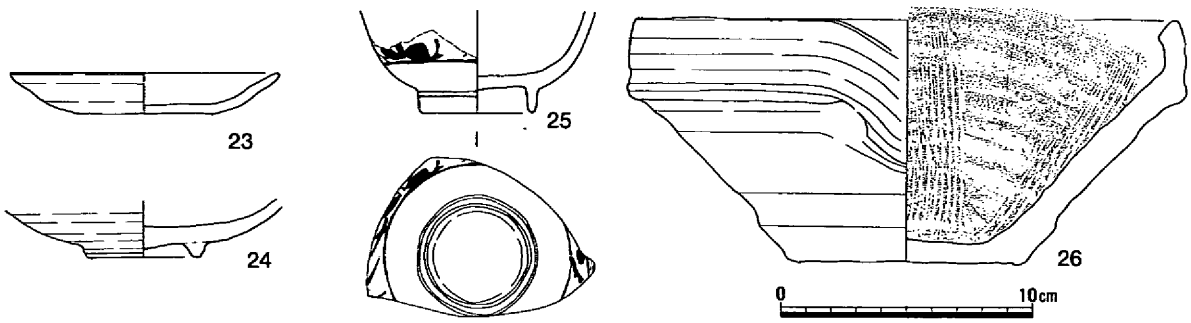
土壙4・5（第260～262図）

土壙4・5は、郭1の南端、建物群の南に隣接する土壙である。形状から、本来は袋状土壙であったものと考えられる。土層の堆積は中央から両端へ移る様子で、土壙4と5の埋没は同時であったと考えられる。土壙5東側に位置する土壙6との間に基盤層くり抜きの通路が存在する。検出面からの深さ1.2m、土壙内の空間は最大幅5.14m、奥行き1.96m(土壙4)、1.80m(土壙5)を測る。底面の海抜高は152.0～152.3mである。

遺物には肥前陶器・備前焼などがある。23は土師器の皿で、全面にナデを施す。口径は10.4cm、器



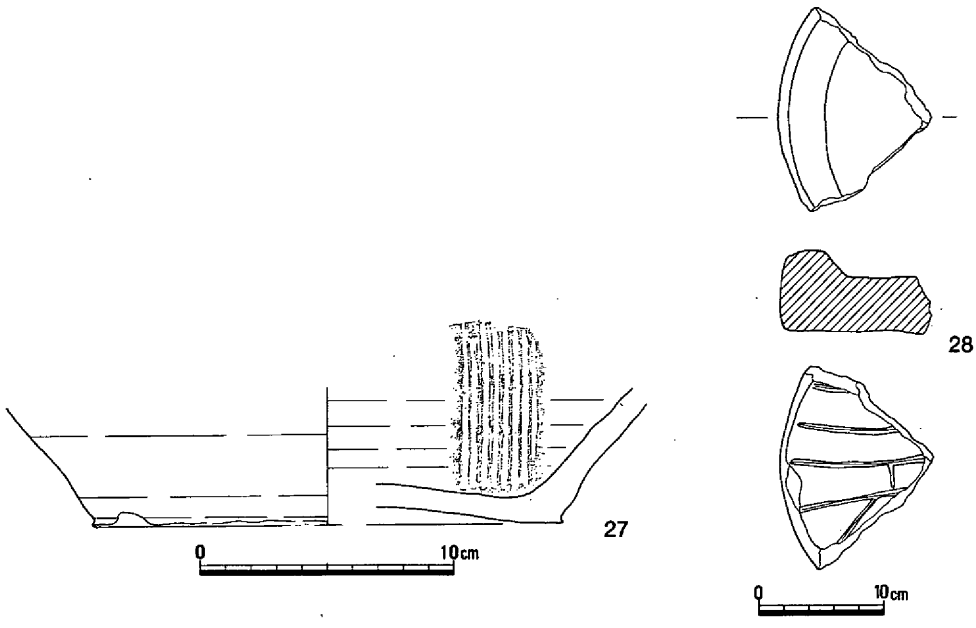
第260図　土壙4・5



第261図　土壙４遺物

表32　郭１土壙４土器観察表

番号	器　種	年　代	口　径	器　高	胎　土	焼成	色　調	備　考
23	土師器皿		10.4	5.5	1mm前後の砂粒	良	にぶい黄橙色	
24	肥前皿	1610～30			1mm以下の砂粒	良	灰白色	砂目
25	肥前染付椀	1650～70			1mm以下の砂粒	良	淡黄色	
26	備前すり鉢		21.4	9.6	1mm以下の砂粒	良	にぶい赤橙色	



第262図　土壙５遺物

表33　郭１土壙５土器観察表

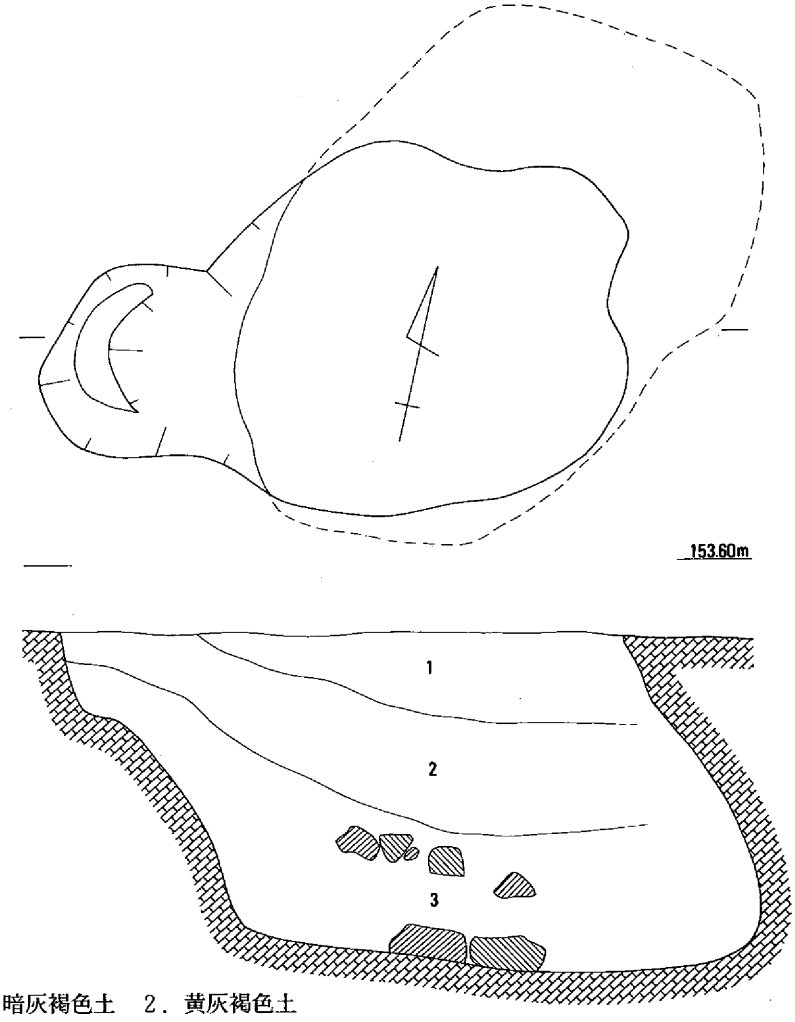
番号	器　種	年　代	口　径	器　高	胎　土	焼成	色　調	備　考
27	備前すり鉢				3mm以下の砂粒	良	赤色	

高は1.6cmを測る。24の内面には砂目積が見られる。釉は内外面にかかる。25は窓絵の染付椀である。26の擂鉢は擂り目が縦方向のみで、８条の擂り目を持つと考えられる。時期は16～17世紀と見られる。27の擂り目の数は不明だが、26とさほど変わらないものと思われる。28の石臼は上臼で、反時計周りに回転すると思われる。25の染付椀は最も新しい年代を表すもので、遺構の下限を示すものであろう。これら遺物から、土壙４・５の最終埋没時期は17世紀後半と考えられる。

土壙6（第263・264図）

土壙6は、郭1の南端、建物群の南に隣接し、土壙4・5と接続する袋状土壙である。埋土は下層のみ粘質土、ほかは砂質土が入り口から奥へ向かって堆積していた。最下層に集中する礫は天井が崩落したのちに放りこまれたものか、あるいはもともと入り口を閉鎖していたものが埋土と共に流れこんできたのかどうかはわからなかった。よって、この土壙については土壙4・5と同じくゴミ穴として利用されたかどうかは不明である。掘り方は北東側面側へえぐりこまれ、底面は不整な楕円形を呈する。入り口は削平されているが、他の袋状土壙にもある階段が1段確認できる。検出面からの深さ最大1.3m、土壙内の空間は最大幅1.60m、奥行き2.50mを測る。底面の海抜高は最も深い部分で152mほどである。

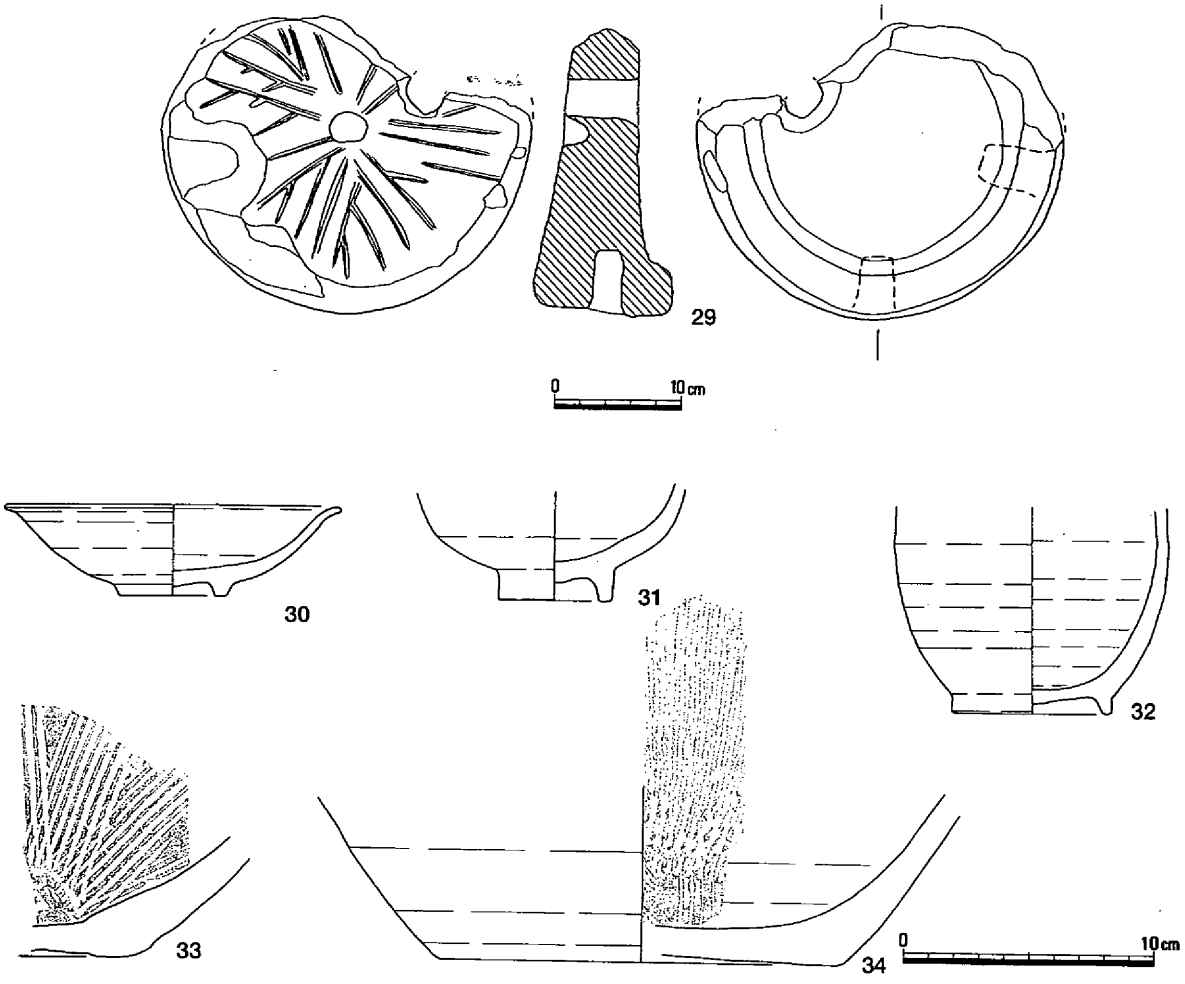
遺物は陶磁器・石臼がある。29は上臼で回転方向が反時計回りであると想定される。柄の差し込み穴が側面に2つ残っている。30は内面に胎土目を持つ。釉は高台底面を除く全面に施される。32の内面には煤が付着していた。高台部分を除く外面に釉がかかる。33・34は擂り目が明瞭なもので17～18世紀に当たる。遺物からこの土壙はほぼ18世紀までに埋没したと考えられる。



1．暗灰褐色土　2．黄灰褐色土
3．灰白色粘質土

0　1m

第263図　土　壙　6



第264図　土壙６遺物

表34　郭１土壙６土器観察表

番号	器　種	年　代	口　径	器　高	胎　土	焼成	色　調	備　考
30	肥前皿		13	3.7	1㎜以下の砂粒	良	灰色	
31	肥前椀				1㎜前後の砂粒	良	灰色	
32	肥前椀				1㎜前後の砂粒	良	灰黄褐色	
33	備前すり鉢				2㎜以下の砂粒	良	オリーブ灰色	
34	備前すり鉢				2.5㎜以下の砂粒	良	赤色	

先の貯蔵穴とは明らかに異なる形態であるが時期的にみて茂平城と関わりがあると思われる土壙群に、土壙７～９がある。

土壙７（第265図）

郭１の西端、建物群の西に隣接し土壙２の南にある方形の土壙である。掘り方は検出面で2.24×1.85ｍ、底面で1.94×1.59ｍの方形で、主軸の方向が建物群、特に建物２と同じである。また、掘り方の検出面からの深さは0.55ｍ、底面の標高は153ｍである。埋土は第３層のような地山ブロックを含むものである。

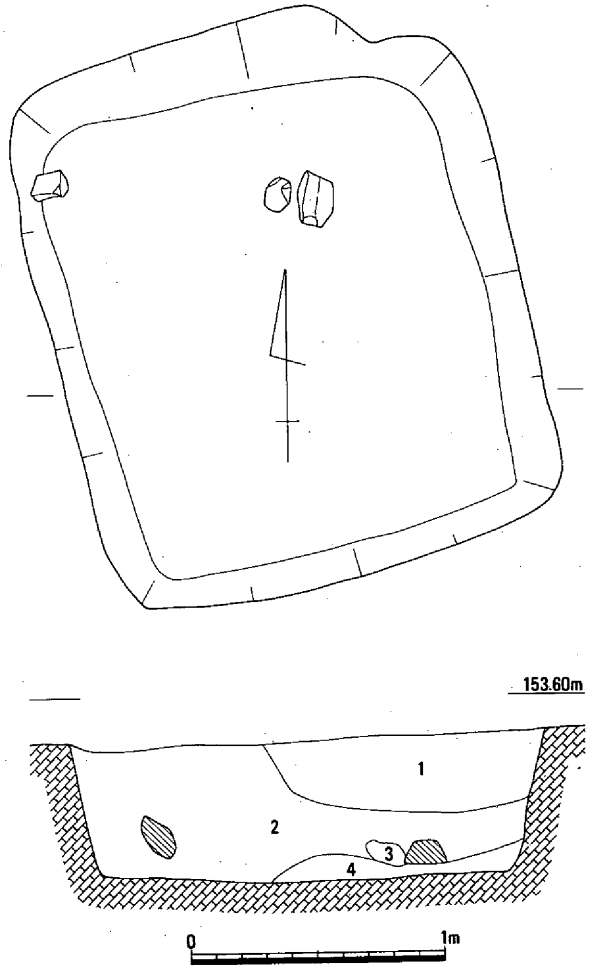
遺物は、土師器の羽釜が１点出土した。遺構の時期は出土した羽釜により16世紀代と考えられる。

土壙8（第266図）

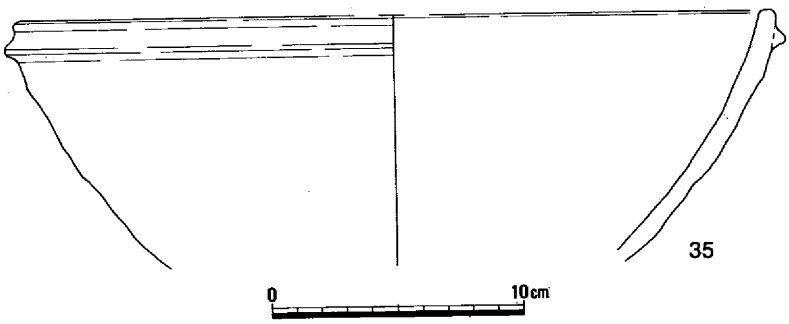
土壙8は郭1の北東に位置する。土壙8・9は他の土壙より1段下がったところに掘られており、建物群と周辺の土壙とは異なった配置であると考えられる。土壙8は方形・楕円形・円形の3つの土壙が結合した形で、同じ色調の土で埋まっていた。検出面で方形部分が1.72×1.56m、楕円形2.64×1.22m、円形が東西1.67×南北1.37mを測る。底面の海抜高は方形部分が153m、楕円部で152.55m、円形部が152.1mである。遺物は出土していないため、時期は不明である。

土壙9（第267図）

郭1の北東、土壙8の西隣に位置する土壙である。土壙8と同じく、郭1北東部の1段低い部分にある。掘り方は検出面で直径2mの円形で、底面をさらにもう1段掘り下げてある。1・2層を除去した状態で、3層の灰白色粘土が直径0.9mの円形に、その外側に4層が輪になって検出された。底面は直径1.16mの円形で、掘り方の深さは1mを測り、底面の海抜高は151.7mである。やはり遺物は出土していないため、遺構の時期は不明である。



1．淡黄褐色土　2．暗褐色土　3．明黄褐色土　4．暗灰褐色土



第265図　土壙7・遺物

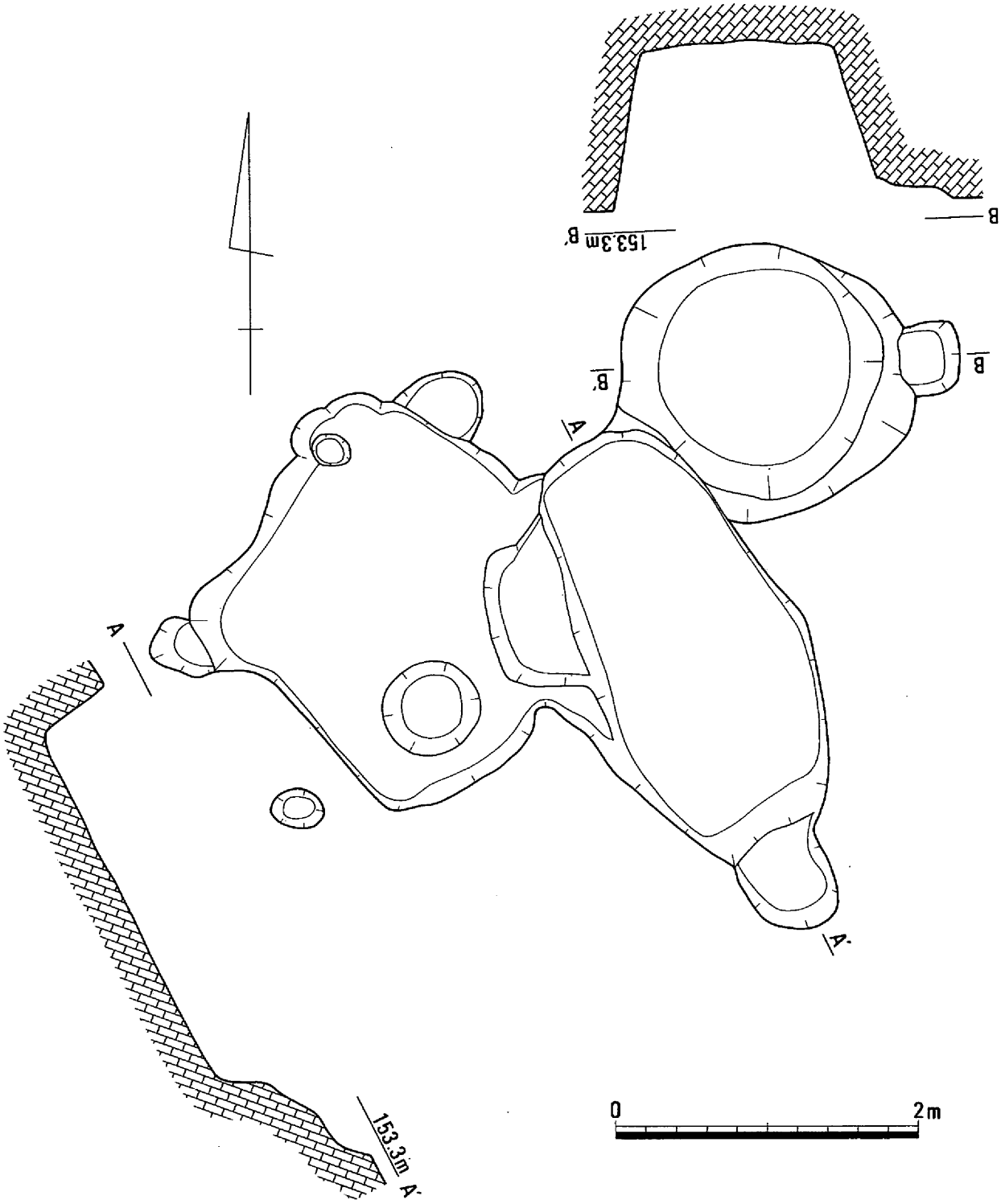
表35　郭1土壙7土器観察表

番号	器種	年代	口径	器高	胎土	焼成	色調	備考
35	土師器鉢		29.4		1㎜前後の砂粒	やや不良	黒褐色	

（３）墓　　壙

土壙10（第268図）

土壙10は郭１の南端に位置する配石墓壙である。掘り方は検出面で直径1.24ｍの円形で深さは0.6ｍ、底面は海抜高152.75ｍである。10～30㎝大の礫が約50個、中央やや北側に空間をもって落ち込んでい

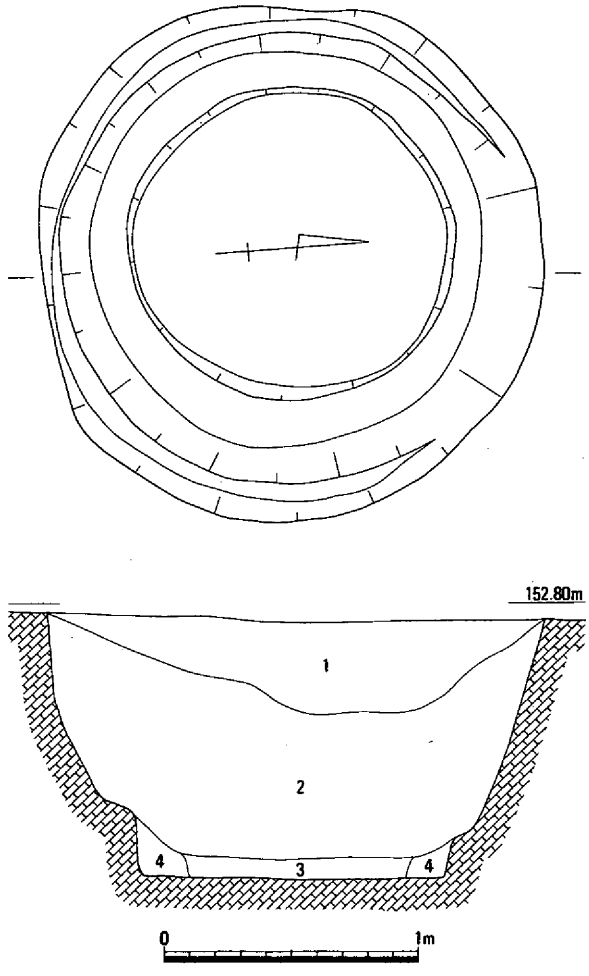


第266図　土　壙　8

る。本来の上部構造のまま落ち込んだ可能性も考えられよう。礫に混じって遺物が出土している。36は内面に暗緑灰色の染付のある陶器である。37は上部が注口となるもので、あまり例がない。38は網目文の染付である。40・41はいずれも擦り目が縦・斜め方向に入る。42・43は五輪塔の空風輪である。このほかに1600～30年代の肥前系陶器椀片も見られた。遺物から、遺構の時期は17世紀代であると考えられる。

土壙11・12（第269図）

郭1の東端に位置する土壙墓で、円形の掘り方を持つ。土壙11は直径1m程度、土壙12は1.25m程度の円形の掘り方を示す。深さは土壙11の方がやや浅く海抜高152.6m、土壙12は152.5mである。土壙12では桶の痕跡かと考えられる土層を検出した。遺物は、土壙12から44・45など小片が出土した。44の備前焼壺片は肩に櫛描文がある。45の土師器皿も破片である。



1．暗褐色土　2．淡黄褐色土
3．灰白色粘土　4．淡黄色粘質土

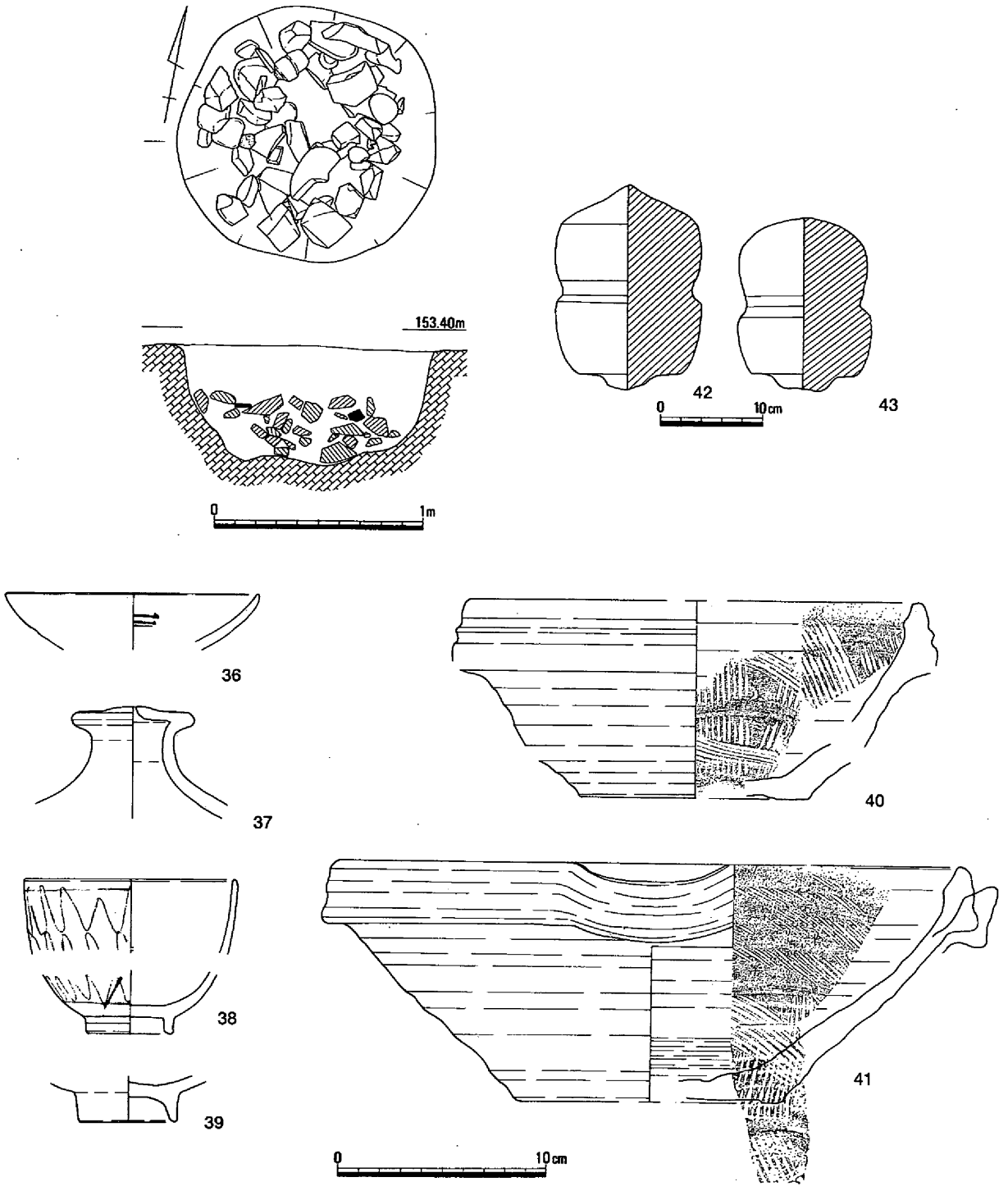
第267図　土　壙　9

土壙13（第270図）

郭1中央付近に位置する配石土壙である。建物8、10と切り合い関係にあり、土層断面の2層が建物10、3層が建物8の柱穴埋土と考えられる。よって、建物10→建物8→土壙13の順で存在したと想定できよう。土壙の掘り方は検出面では1.2×1.4mの楕円形で深さは0.5m、底面の海抜高は152.9mである。

土壙14（第271図）

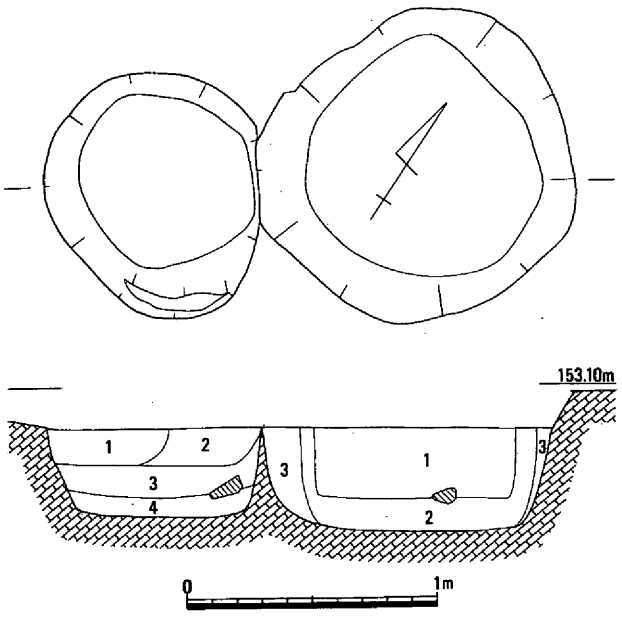
土壙11・12と同じく郭1の東端に位置する土壙墓で、2基の土壙墓が切りあった状態が確認できた。いずれの土壙墓も検出面では楕円形の掘り方を持つが、東側の方は底面が方形を呈する。東側が検出面から0.9×1.1m、西側は0.8×1.1m、深さはいずれも0.54mを測り、底面の海抜高は152.5mである。出土遺物は無い。



第268図　土壙10・遺物

表36　郭１土壙10土器観察表

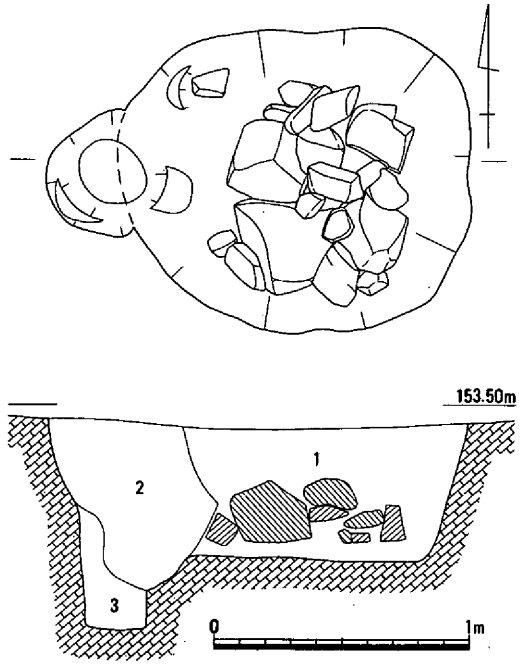
番号	器　種	年　代	口　径	器　高	胎　土	焼成	色　調	備　考
36	染付皿		12		1㎜以下の砂粒	良	灰白色	
37	肥前瓶	17C			1㎜以下の砂粒	良	黒褐色	
38	肥前染付椀	1650～70	10		1㎜以下の砂粒	良	灰白色	
39	肥前椀				3㎜以下の砂粒	良	浅黄橙色	
40	備前すり鉢		20.8	9.5	2.5㎜以下の砂粒	良	明赤褐色	
41	備前すり鉢		30.3	11.5	2㎜以下の砂粒	良	にぶい橙色	



1.淡褐色土　2.暗褐色土　3.灰褐色土　4.暗灰褐色土　土壙11

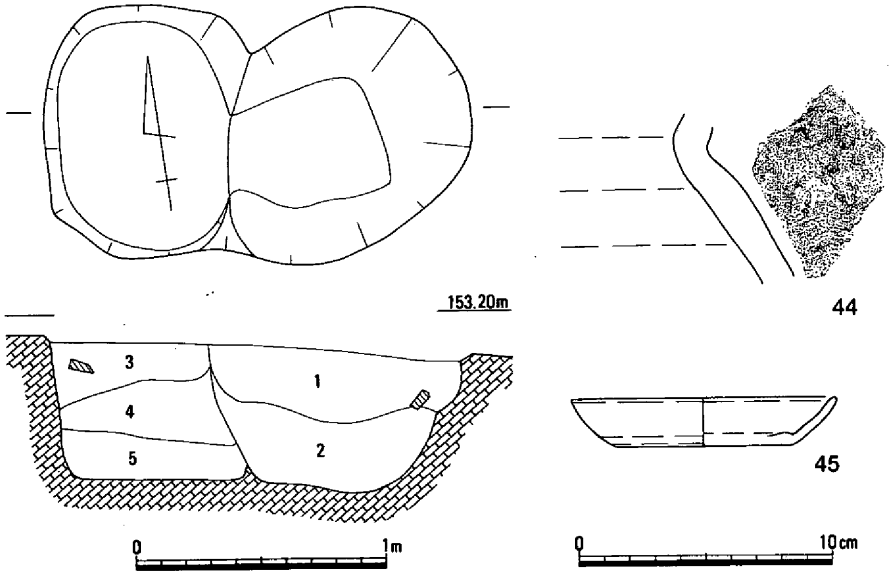
1.淡黄褐色土　2.暗灰褐色土　(桶痕)　3.灰褐色土　土壙12

第269図　土壙11・12



1．淡褐色土　2．暗褐色土
3．褐色土

第270図　土壙13



1．淡黄褐色土　2．灰褐色土
3．暗褐色土　4．淡褐色土　5．暗灰褐色土

第271図　土壙14・遺物

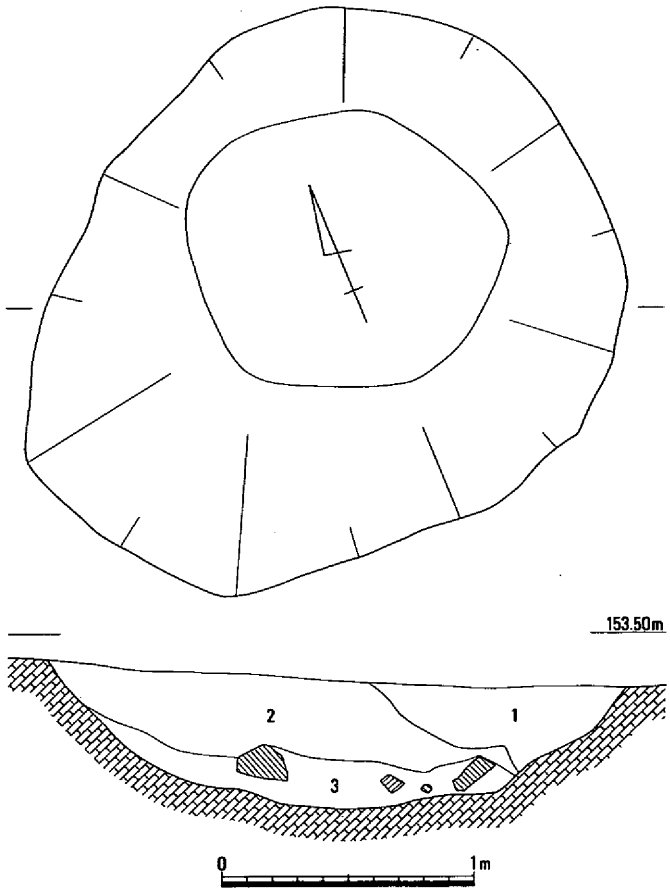
表37　郭1土壙14土器観察表

番号	器　種	年　代	口　径	器　高	胎　土	焼成	色　調	備　考
44	備前壺				1㎜前後の砂粒	良	灰オリーブ色	
45	土師皿		10.4	1.9	1㎜以下の砂粒	良	にぶい黄橙色	

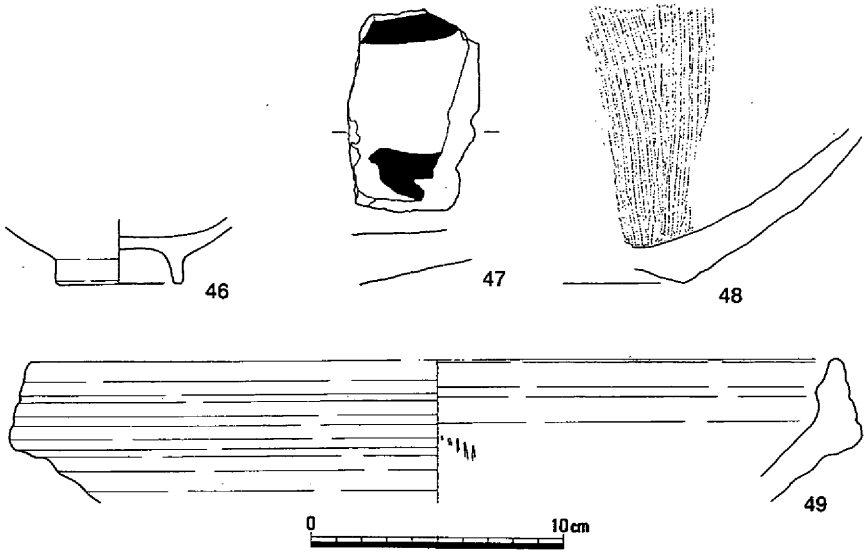
（４）その他の土壙

土壙15（第272図）

土壙15は郭１の北西端に位置する土壙である。掘り方の平面形は2.1×2.5ｍの楕円形で、埋土は皿状の堆積を示し、検出面からの深さ0.5m、底面は海抜高152.8ｍを測る。遺物はいずれも破片である。46は17世紀後半に比定された椀である。47は茂平城の遺物としては最も古い部類に属する。48は縦の擦り目の間隔が詰んでいるもので、49の口縁は端部の拡張がやや甘い。遺物から、この土壙の時期は17世紀以降と考えられる。耕作に伴う土壙の可能性もある。



1．暗褐色土　2．黄褐色土
3．灰褐色粘質土



第272図　土壙15・遺物

表38　郭１土壙15土器観察表

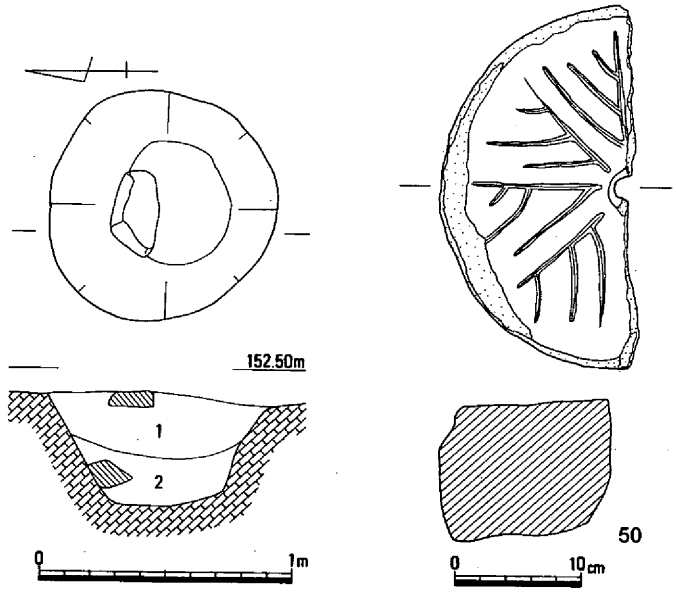
番号	器種	年代	口径	器高	胎土	焼成	色調	備考
46	肥前椀				1mm前後の砂粒	良	にぶい黄色	
47	肥前鉄絵皿	1590～1610			1mm前後の砂粒	良	にぶい黄橙色	
48	備前すり鉢				1mm前後の砂粒	良	褐灰色	
49	備前すり鉢		31.6		1mm前後の砂粒	良	にぶい赤褐色	

土壙16（第273図）

土壙16は郭1の南東端に位置する。周囲に遺構は少ない。検出面で直径0.9mの円形で、深さは0.3m、底面の海抜高が151.95mを示す。遺物としては、底面付近で石臼が検出されたのみである。下臼で、組み合う上臼はおそらく反時計回りに回転したものと思われる。

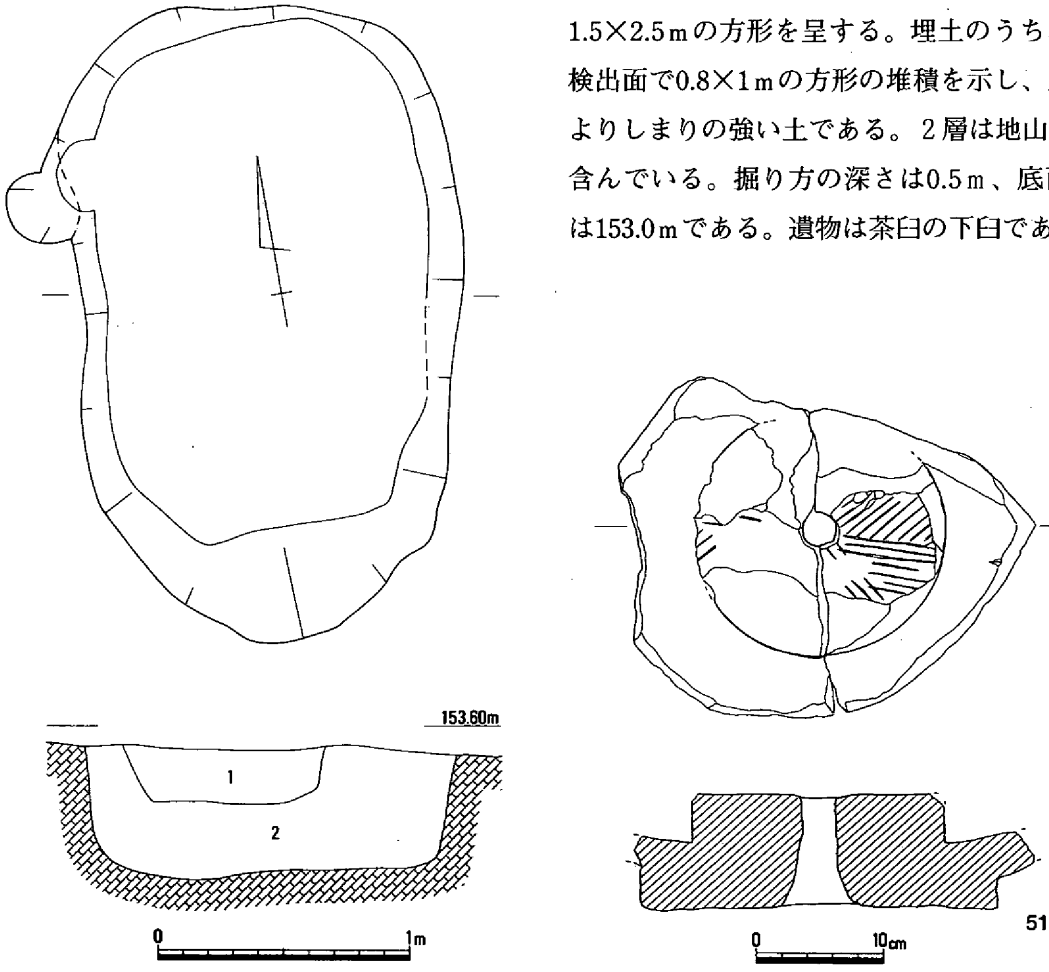
土壙17（第274図）

郭1の北側に位置する土壙である。掘り方は検出面ではやや不整形ながら1.5×2.5mの方形を呈する。埋土のうち、第1層は検出面で0.8×1mの方形の堆積を示し、土質も2層よりしまりの強い土である。2層は地山ブロックを含んでいる。掘り方の深さは0.5m、底面の海抜高は153.0mである。遺物は茶臼の下臼である。



1．淡褐色土　2．淡灰褐色土

第273図　土壙16・遺物



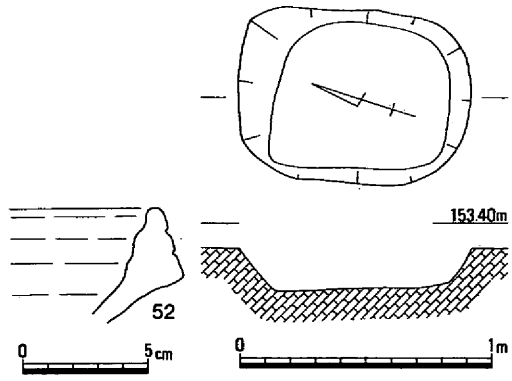
1．明白灰色砂質土　2．黄褐色土

第274図　土壙17・遺物

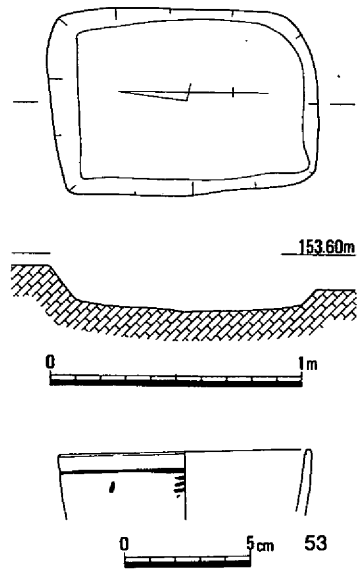
土壙18・19・20（第275・276・277図）

土壙18は建物１と６の重複した所、土壙19は建物６を切り、20は郭１北の土壙17の南にある。いずれも検出面からは10～20㎝の深さで断面は逆台形を呈する。底面の海抜高は153.4～153.0ｍを示す。

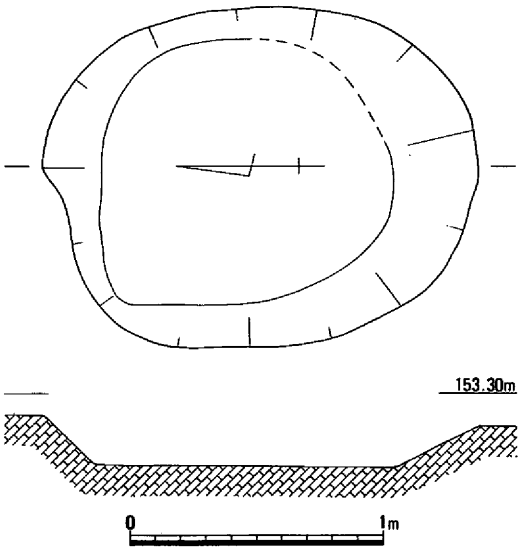
遺物は小片で各１点ずつ検出された。いずれも流れ込みであろう。52は口縁端部の拡張が著しくない。53は外面に「寿」の文字のある肥前染付椀で1640～60年代に比定される。54内面は口縁端部付近まで斜めの擂り目がはいる。これらの土壙は、やはり耕作に伴うものと考えられる。

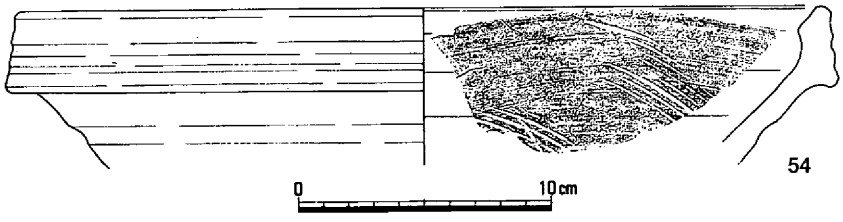


第275図　土壙18・遺物



第276図　土壙19・遺物





第277図　土壙20・遺物

表39　郭１土壙18土器観察表

番号	器　種	年　代	口　径	器　高	胎　土	焼成	色　調	備　考
52	備前すり鉢				2㎜以下の砂粒	良	灰褐色	

表40　郭１土壙19土器観察表

番号	器　種	年　代	口　径	器　高	胎　土	焼成	色　調	備　考
53	備前染付椀	1640～60	10		1㎜以下の砂粒	良	明オリーブ灰色	

表41　郭１土壙20土器観察表

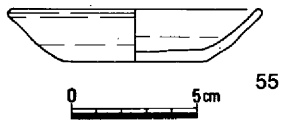
番号	器　種	年　代	口　径	器　高	胎　土	焼成	色　調	備　考
54	備前すり鉢				1㎜前後の砂粒	良	にぶい橙色	

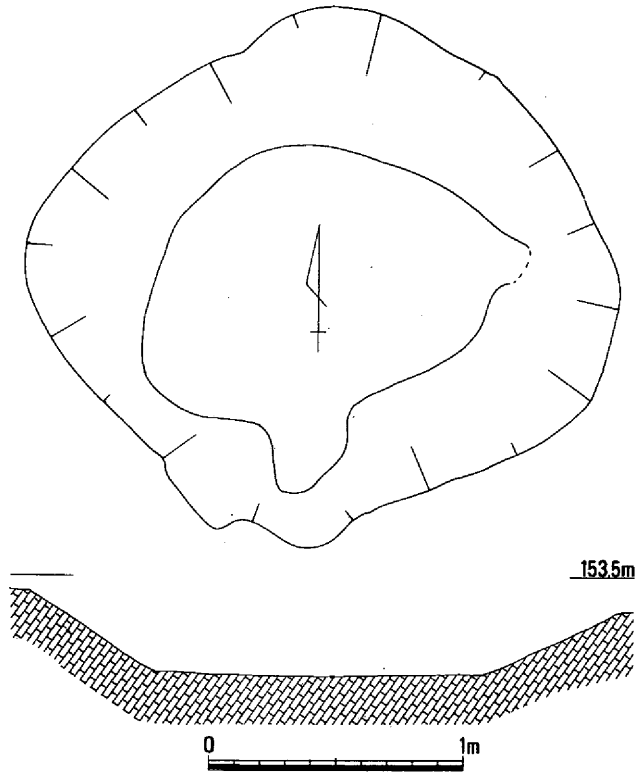
土壙21（第278図）

土壙21は郭１の中央やや北側、土壙17の南西に位置する。検出面の平面形は2.3×2.1ｍの菱形をなし、断面は深さ0.2mの逆台形を呈する。底面の標高は153.1ｍを測る。郭１全体図で表しているとおり、南西側へ溝状の浅い掘り方がある。底面は、溝状の掘り方も含めて南西から北東に低くなっている。

遺物は土師器の皿片が出土した。全面にナデを施すものである。

耕作に伴うものであると考えたい。





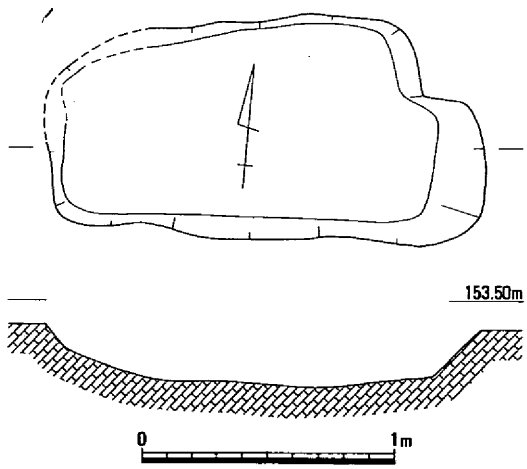
第278図　土壙21・遺物

表42　郭１土壙21土器観察表

番号	器　種	年　代	口　径	器　高	胎　土	焼成	色　調	備　考
55	土師器皿		9.8	2.1	1mm前後の砂粒	良	にぶい橙色	

その他の土壙（第279図他）

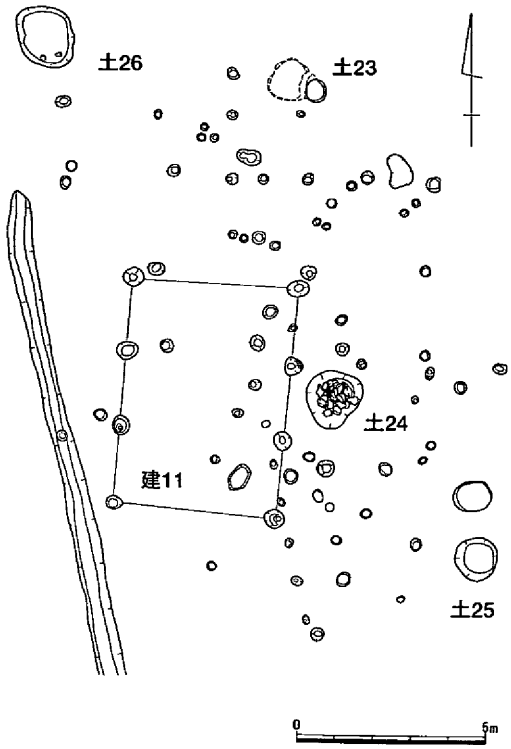
土壙22は郭１の西側、土壙２・７の東にある。検出面での規模は0.9×1.7ｍの長方形で、深さは0.2m程度を測る。底面はやや不整な平面をなし、断面形は椀型を呈する。そのほかにも、郭１上には多くの土壙がある。取り上げてないもので10基以上を数え、その中でも特に建物２・７の周辺で方形の掘り方を持ったもの２基、墓壙の可能性があるもの２基がある。



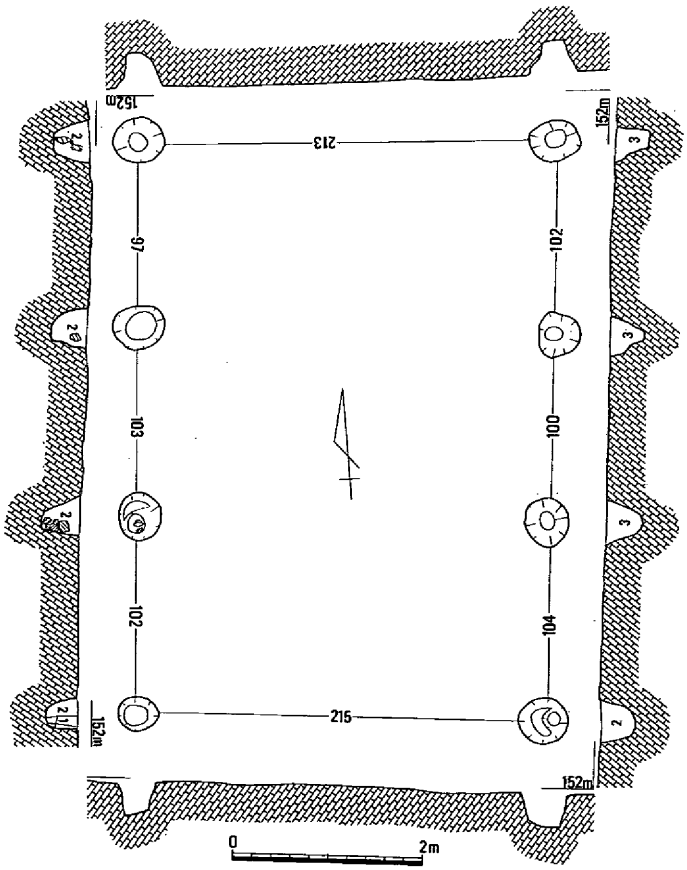
第279図　土壙22

第３節　郭　　2

郭２は郭１東の１段下側に位置する。南北約21ｍ、東西約13ｍの方形の区画をなす平坦面である。郭１とは１ｍの標高差がある。東側は緩やかに下って郭４との間の段にいたる。北側の境は不明瞭で、徐々に傾斜がついて郭１北側の斜面に続く。西側は斜面であるが、建物11の西にある溝は近世以降の畑作に伴うものであることから、西斜面においても改変がなされていると考えられる。南側は現在の道が通っている。道と郭２の間の斜面に土壙32・33（郭３）が存在するが、これは郭２と関係が薄いと考えられることから、南端は築城当時と比べてさほど変化していないと判断できる。



第280図　郭２遺構配置（S＝1：200）



１．灰褐色土　２．黒白色土　３．淡灰褐色土

第281図　建　物11

（１）建物

建物11（第281図）

建物11は、郭２で検出できた唯一の建物である。３×１間の方形の掘立柱建物で、棟方向はほぼ南北を指向する。検出面での柱穴掘り方は円形で、直径は30～50㎝、深さは30～40㎝を測る。柱穴底の海抜高は150.6ｍである。柱の抜き取り跡があるものでは、その直径は検出面で12㎝程度であった。

（２）土　　壙

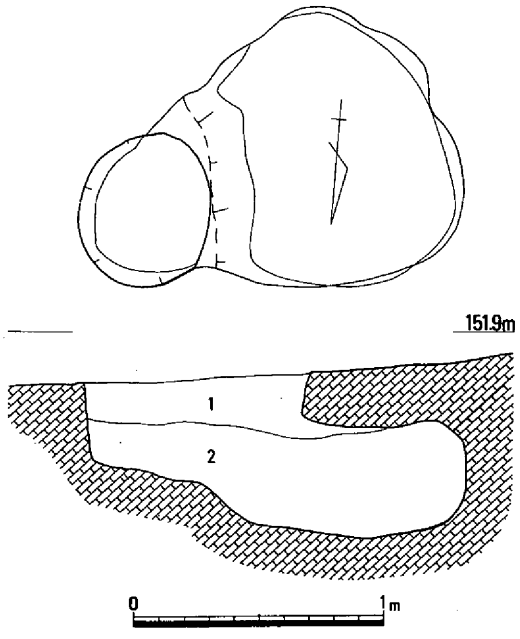
土壙23（第282図）

土壙23は郭２の北側、建物11から５ｍの所にある袋状土壙である。本体に対して東側に開口する。入り口は直径60㎝程度の円形で、入り口から深さ30㎝までは真っ直ぐ掘り下げられているが、そこから奥へ向かってはさらに１段下がる形状である。内部は最大で幅1.1ｍ、奥行き0.8ｍ、高さ0.4ｍを測り、人間が這って入るだけの空間もない。

この袋状土壙は郭１・３にあるものに比べて著しく小規模で、貯蔵穴として用いられたかどうかは疑問である。

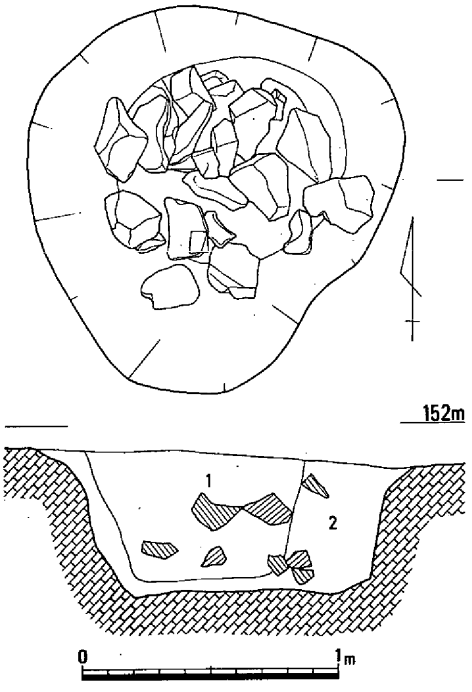
土壙24（第283図）

土壙24は建物11のすぐ東隣にある配石墓壙である。20㎝程度の礫が20個ほど落ちこんでいた。掘り方は検出面で直径1.5ｍの不整な円形で、深さは最大0.55mを測る。底面の標高は151.4ｍである。土層のうち１層は流入土、２層は木棺痕跡を反映したものと考えられる。



１．淡灰褐色土　２．灰白色土

第282図　土　壙　23

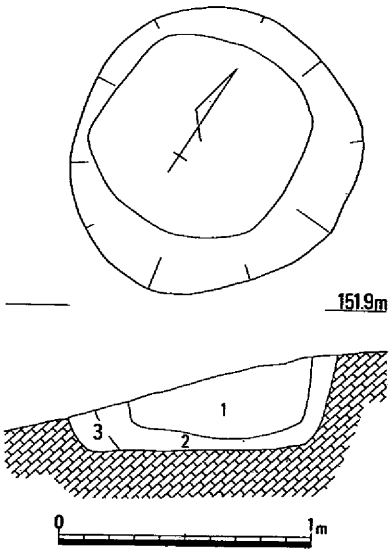


１．灰褐色土　２．暗灰褐色土

第283図　土　壙　24

土壙25（第284図）

土壙25は郭２の東端にある墓壙である。検出面では掘り方は直径1.2ｍの円形であるが、底面の形状から棺は方形であると思われる。土層のうち、２層は木棺の痕跡と考えられる。これらから、棺の規模は一片70㎝であると判断できる。底面は検出面から最大30㎝の深さで、海抜高は151.3ｍである。



1．淡灰褐色土　2．淡灰白色土
3．淡灰褐色土

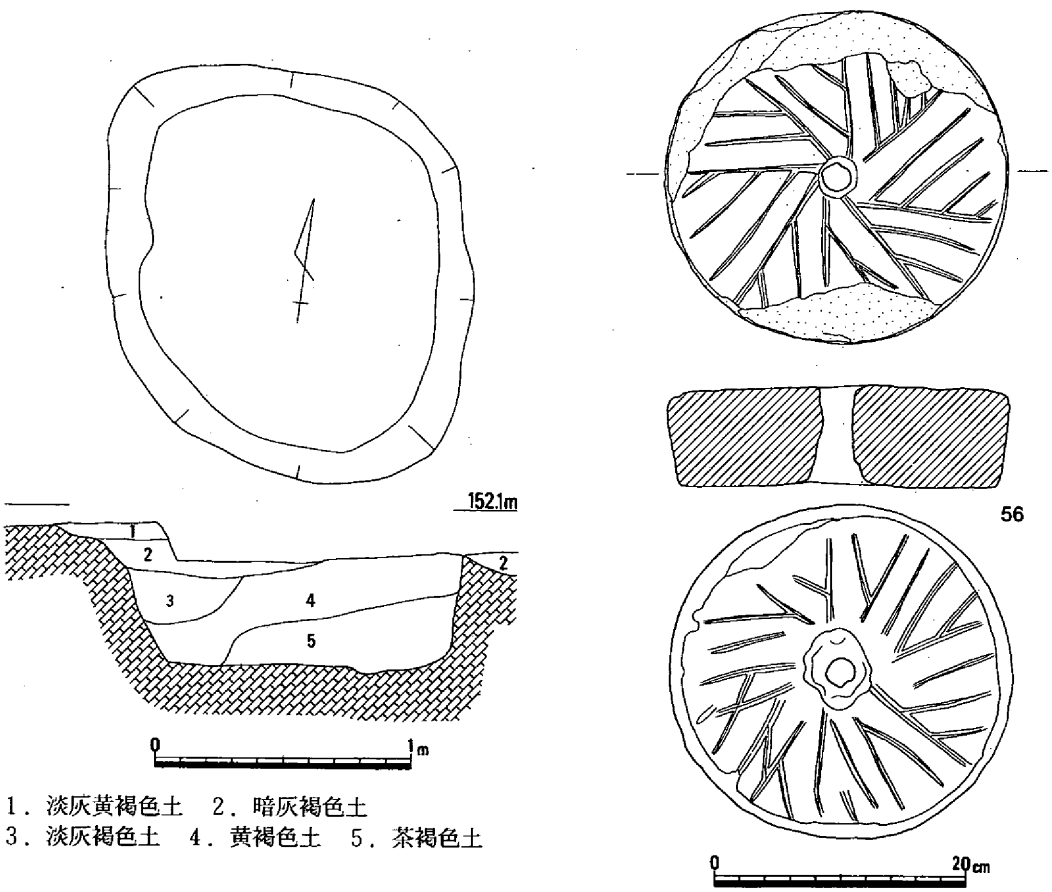
第284図　土壙25

土壙26（第285図）

土壙26は郭２の北西端に位置する。検出面で1.9×1.5ｍの楕円形の掘り方をもつ。深さは0.4ｍを測り、底面の海抜高は151.5ｍである。土層のうち1層は盛土、２層は旧表土と考えられ、土壙26構築後に盛土がなされたことがわかっている。

郭２の遺物

郭２の遺物は土壙23と柱穴、表土・流土中から出土している。図示した石臼は土壙23から出土した。下臼であるが両面に溝を彫りこんでいるものである。いずれも回転方向は反時計回りと思われる。図では下側の方が磨滅が激しくそのために上側に擂り目を移したものであろうが、その際に下側心棒穴の付近を削りなおして安定がよくなるようにしてある可能性がある。その他の遺物は小片で、図化できなかった。



1．淡灰黄褐色土　2．暗灰褐色土
3．淡灰褐色土　4．黄褐色土　5．茶褐色土

第285図　土壙26・遺物

第４節　郭　３

郭３は郭１の南にある平坦面である。南北約13ｍ、東西約52ｍの長方形をなす。郭１との比高差は２ｍで、郭面は北から南へ緩やかに傾斜していて、調査区北端での検出面は海抜高151ｍを測る。全体で東側と西側の３分の１が削平されていて、遺構は中央部北側に集中していた。西側には柱穴の残りが見られるほか柱穴列３が存在することから、２棟の建物を想定できる。同様に、柱穴列２から東側にも１棟の建物を想定した。

（１）建物

建物12（第287図）

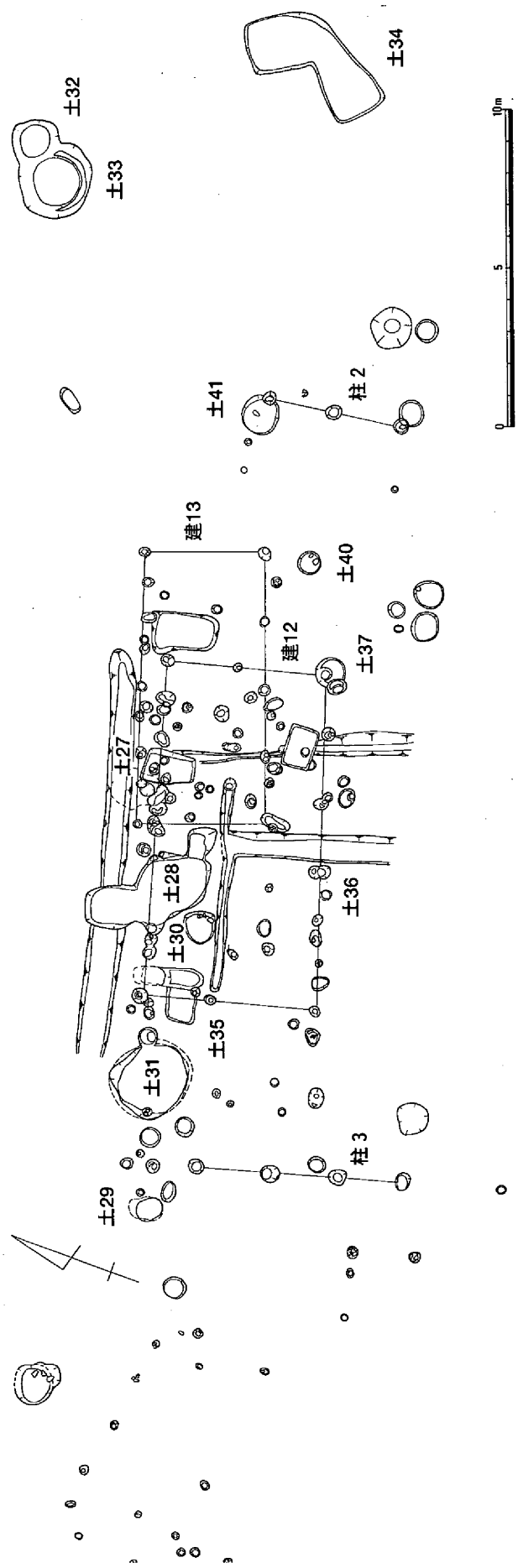
郭３の中央北斜面よりに所在する５×２間の掘立柱建物である。棟方向が北斜面に沿っている。柱穴の掘り方は検出面で20～40㎝の円～楕円形で、深さは50～80㎝、底面の海抜高は150.3～150.5ｍである。

建物13（第288図）

郭３の中央、建物12より北東によったところに位置し、建物12と重複する。４×１間の掘立柱建物で、棟方向が建物12と同じく、北斜面に沿っている。検出面での柱穴の掘り方は20～30㎝の円～楕円形で、深さは20～50㎝、底面の海抜高は150.5～150.7ｍである。

柱穴列２・３（第290・291図）

柱穴列２は郭３東側に位置する。２間分のみを確認したが、削平された東側へ広がる建物の一部である可能性がある。北・南端の柱穴は礎石を伴い、中間の柱穴には直径10㎝の柱の抜き取り痕が観察できた。柱穴の直径40㎝、深さ20㎝、底

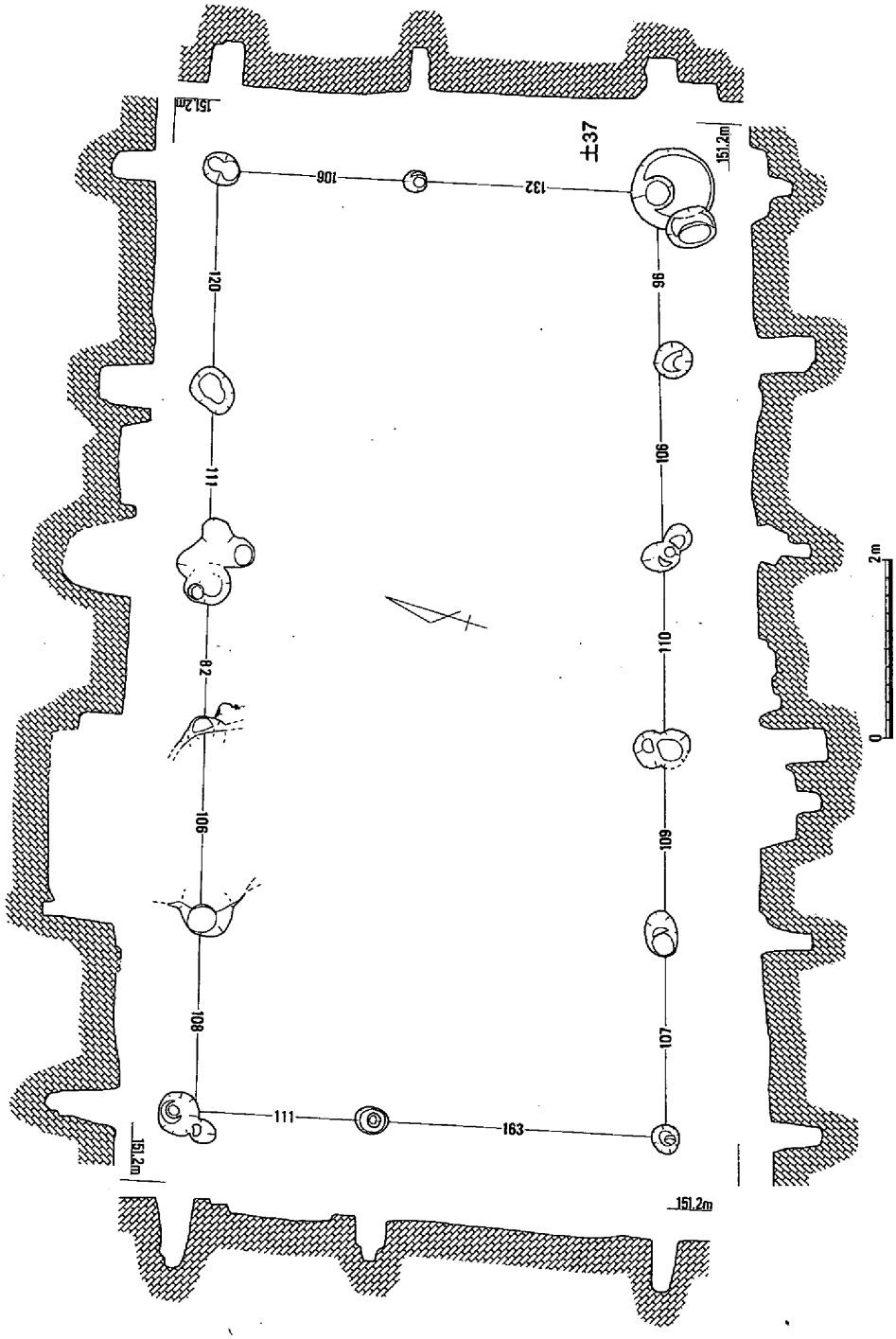


第286図　郭３遺構配置（S=1：200）

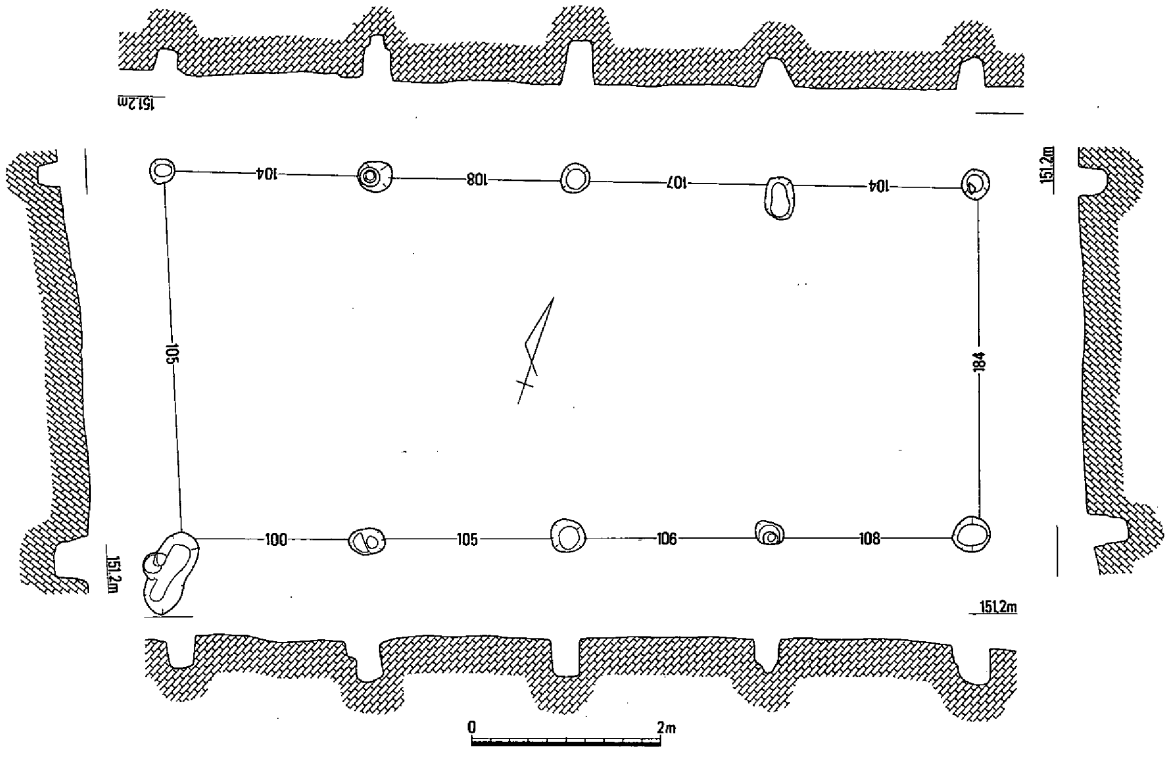
部海抜高150.5ｍを測る。

柱穴列３は郭３西側に位置し、４間分を確認した。この柱穴列の西側が大幅に削平されていることから、西側へ展開して建物となると考えられる。柱の抜き取り跡が残っているものの直径は10㎝程度である。柱穴は検出面での掘り方が40㎝、深さは40～50㎝、底面の海抜高は150.1～150.4ｍである。

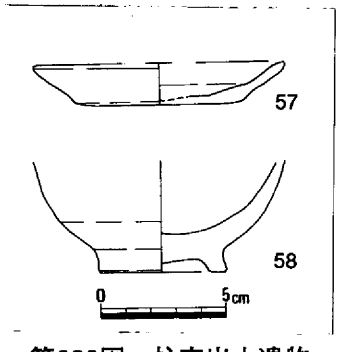
第289図は柱穴出土の土器である。58は陶器椀で、高台内面に釉がかからない。



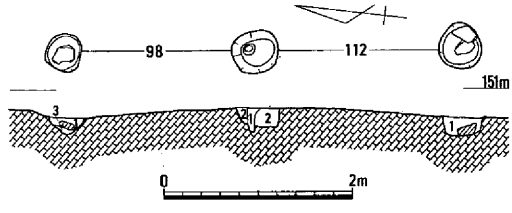
第287図　建物12



第288図　建　物　13

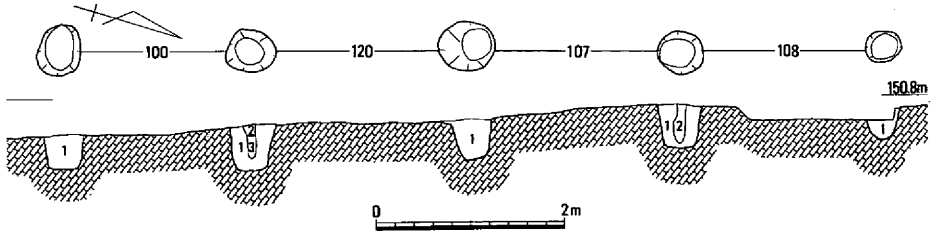


第289図　柱穴出土遺物



1．暗灰褐色土　2．淡灰黄褐色土　3．灰色土

第290図　柱穴列2



第291図　柱 穴 列 3

1．淡灰黄褐色土　2．茶褐色土　3．淡灰色土

表43　郭3柱穴土器観察表

番号	器　種	年　代	口　径	器　高	胎　土	焼成	色　調	備　考
57	土師器皿				1㎜前後の砂粒	良	橙色	
58	肥前椀				1㎜以下の砂粒	良	灰白色	

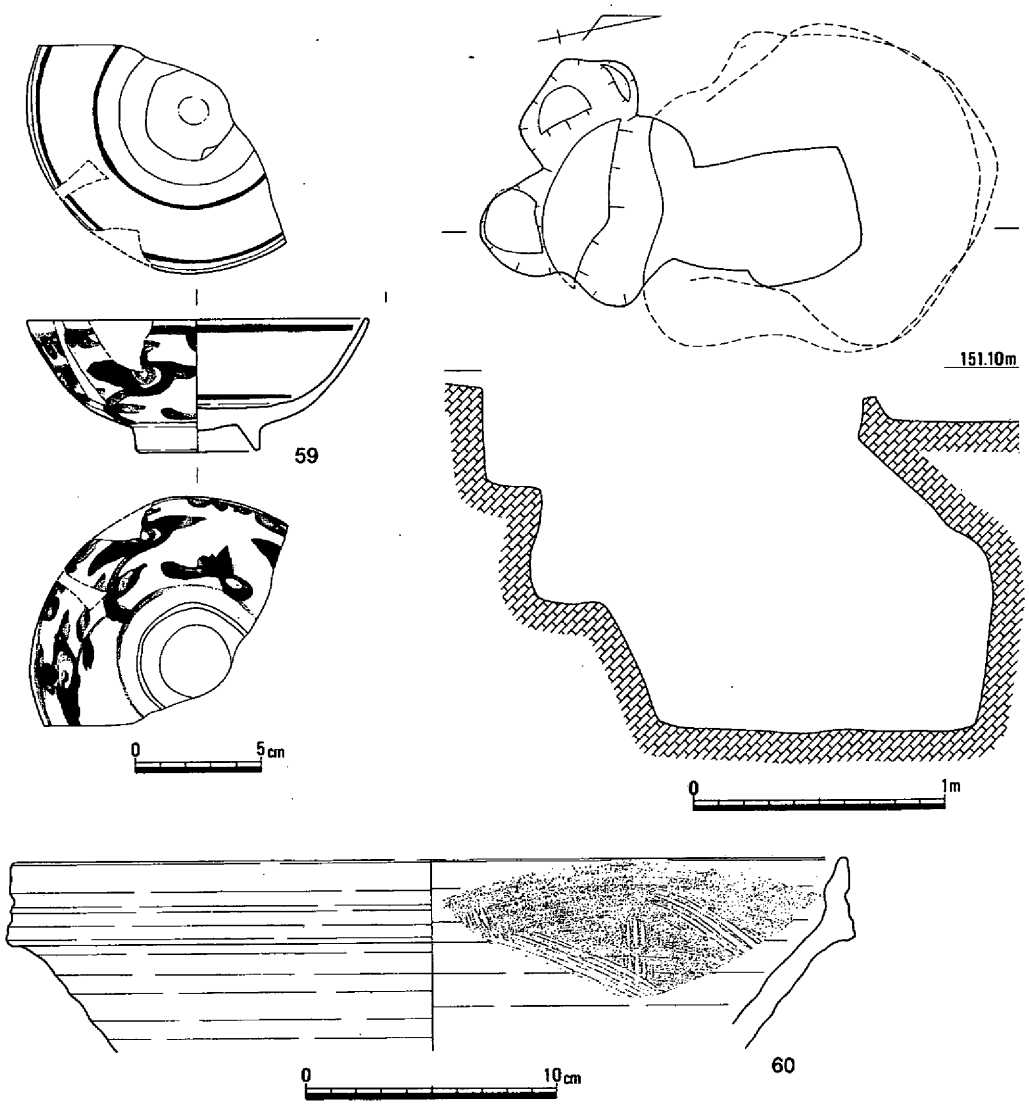
（２）土　　壙

土壙27（第292図）

郭３中央北端、土壙28の東に位置する袋状土壙である。入り口の本来の形状は不明である。底面は不整な楕円形で、内面規模は幅1.2ｍ、奥行き1.25ｍ、高さは推定1.1ｍを測る。底面の海抜高は150.65ｍである。遺物のうち図示し得たのは２点である。59は染付椀で内面底部には釉をかけない部分が輪状をなす。60は口縁端部の拡張が大きい。擂鉢は16世紀末～17世紀初めに相当するが、染付からこの土壙は17世紀前半に埋まったと考えられる。

土壙28（第293・294図）

郭３中央の北側に位置する袋状土壙である。一部に現代の攪乱が入っている。北側の天井は崩落し

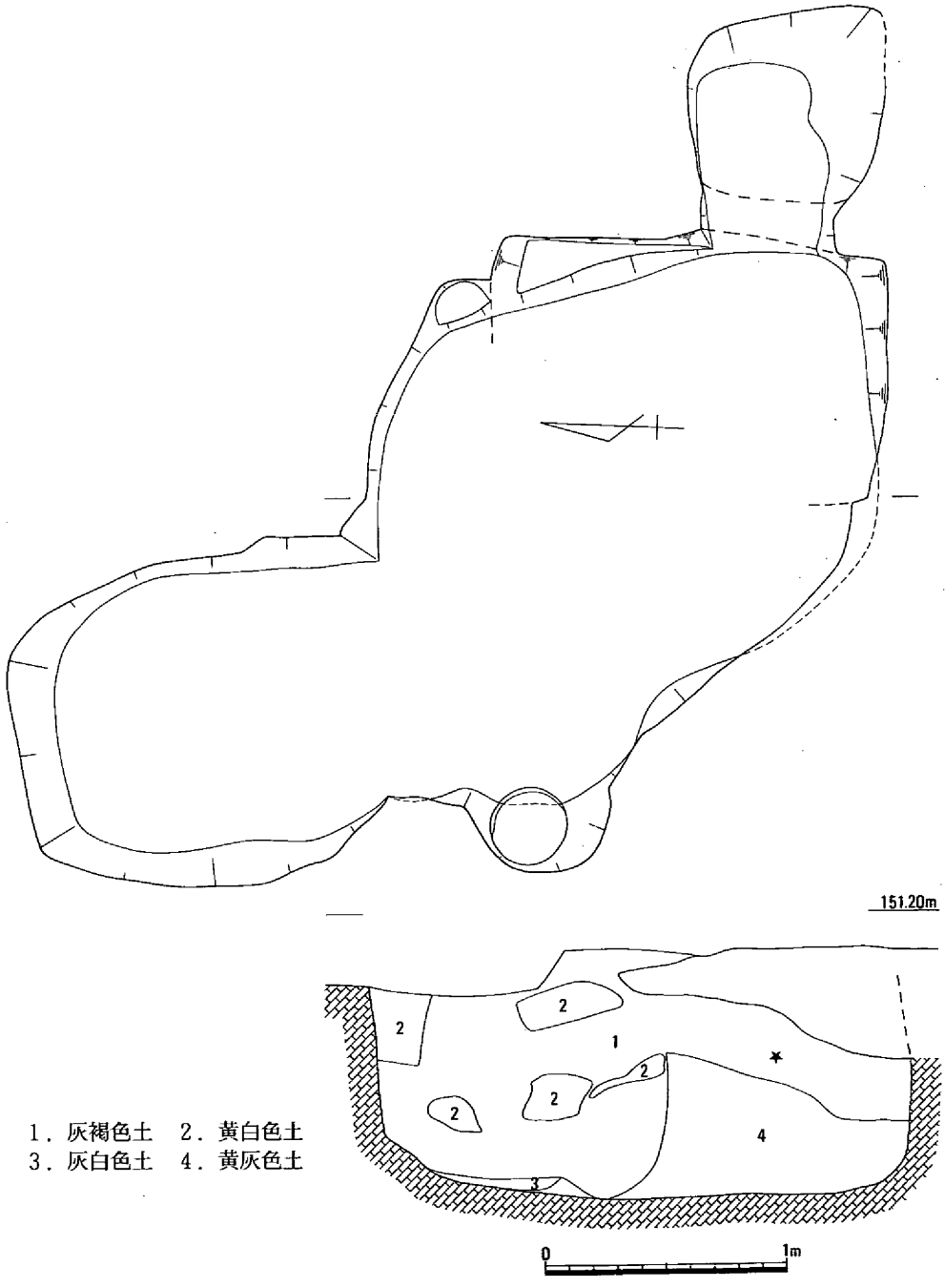


第292図　土壙27・遺物

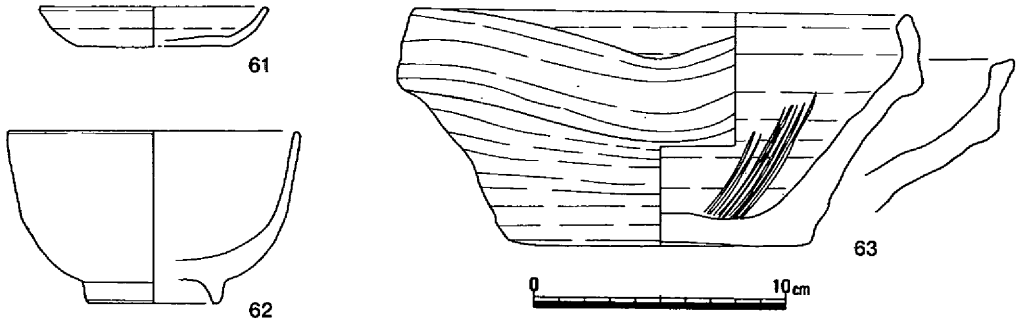
表44　郭３土壙27土器観察表

番号	器　種	年　代	口　径	器　高	胎　土	焼成	色　調	備　考
59	染付椀		13.5	5.25	1㎜以下の砂粒	良	にぶい橙色	
60	備前すり鉢		33		1㎜前後の砂粒	良	灰赤色	

ていたが、南側は残っている部分もあった。入り口は１辺80cmの方形を呈し、検出面から70cmを真っ直ぐ掘り、そこから底部へはさらに20cm下がる。入り口付近がもっとも低く、そこと比べて北の拡張部分の北端は40cm高い。埋土中には基盤層のブロック状のものも見られ（土層の第２層）、この土壙は天井の崩落により放棄されたことがうかがえる。掘り方の規模は、手前の部屋で幅2.1ｍ、奥行き２ｍ、北側の部屋で奥行き1.1ｍで、高さは推定0.8mを測る。遺物は、土層中★印の位置から63が出土した。61は土師質皿、62は1600～30年代の肥前陶器椀である。63は完形で、内面擂り目は縦方向のみで７本１単位のものが８条ある。内面は使用により磨耗が激しい。遺物からこの土壙は17世紀前半に使用不能になったと考えられる。



第293図　土　壙　28



第294図　土壙28遺物

表45　郭３土壙28土器観察表

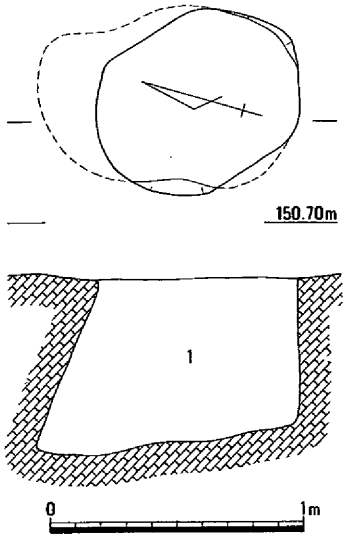
番号	器　種	年　代	口　径	器　高	胎　土	焼成	色　調	備　考
61	土師器皿		9	1.5	1㎜前後の砂粒	良	にぶい黄橙色	
62	肥前椀		11.4	6.9	2㎜以下の砂粒	良	にぶい赤褐色	
63	備前すり鉢		19.4	9.4	1～6㎜の砂粒	良	にぶい赤褐色	

土壙29・30（第295・296図）

土壙29は郭３の北東、土壙31の西に位置する。掘り方は検出面で85×65㎝の楕円形で、深さは65㎝である。底面は北側へ抉りこまれていて、奥行きが1.05ｍの楕円形となる。底面の海抜高は最深部で149.8ｍを測る。土壙30は土壙28と31の間に位置する袋状土壙である。内部は北へ延び、底面の掘り方は幅0.6ｍ、奥行き１ｍを測る。底面の海抜高は150.25ｍを示す。両方とも袋状土壙を掘る過程で、何らかの理由で中止されたものと考えられる。

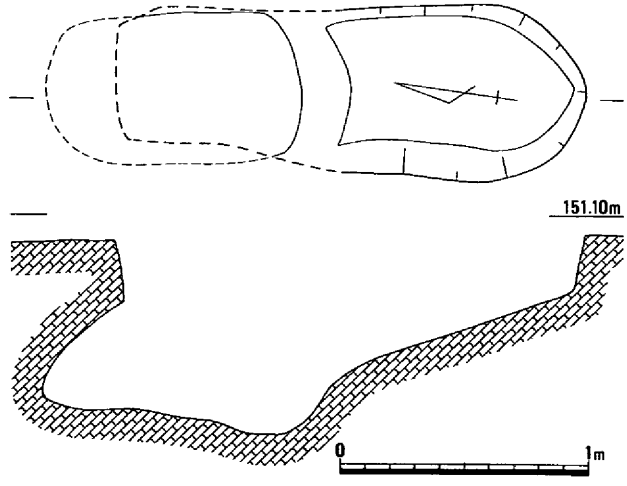
土壙31（第297図）

郭３の北西、建物12の西隣に位置する土壙である。検出面では直径2.2ｍほどの不整な円形を呈し、底面は直径2.1ｍの円形で、検出面に対して南西に抉りこんでいる。検出面からの深さは１ｍ、底面は海抜高149.8ｍを示す。遺物は備前焼の擂鉢口縁で、端部の拡張が著しい16世紀末～17世紀初めのものである。土壙の検出面が整っていない形を示すことから、この土壙は袋状土壙の天井が崩れたものである可能性が高い。

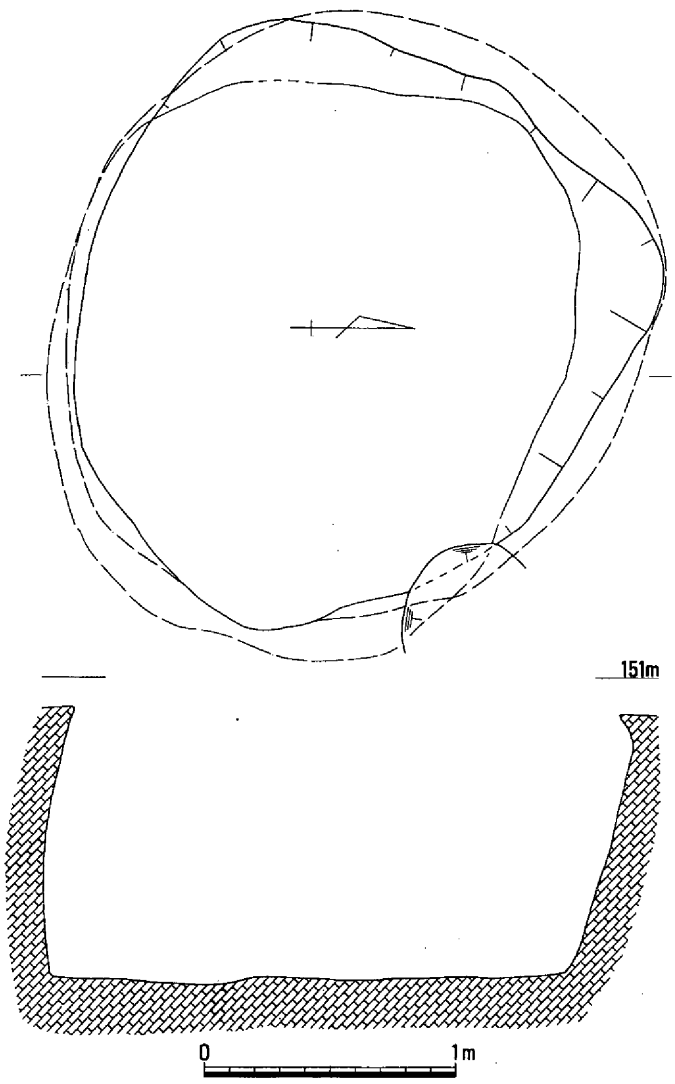


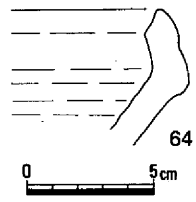
１．淡灰褐色土

第295図　土壙29



第296図　土壙30





第297図　土壙31・遺物

（２）その他の土壙

土壙32（第298図）

郭２と３の間の斜面に所在する配石墓壙である。検出面で直径1.5ｍの円形、底面は直径１ｍの円形、底面の海抜高は149.5ｍを測る。10～20㎝の礫が30個程度存在した。

土壙33（第298図）

土壙32に隣接する土壙である。墓壙にしては大きすぎることもあって、墓壙かどうかは断定は避けたい。検出面で2.3ｍの円形で、底面は1.5ｍの円形である。底面の海抜高は149.4ｍである。土壙33は土壙32と郭２・３間の古道の埋土を切って構築されていて、古道・土壙32より新しい。

表46　郭３土壙31土器観察表

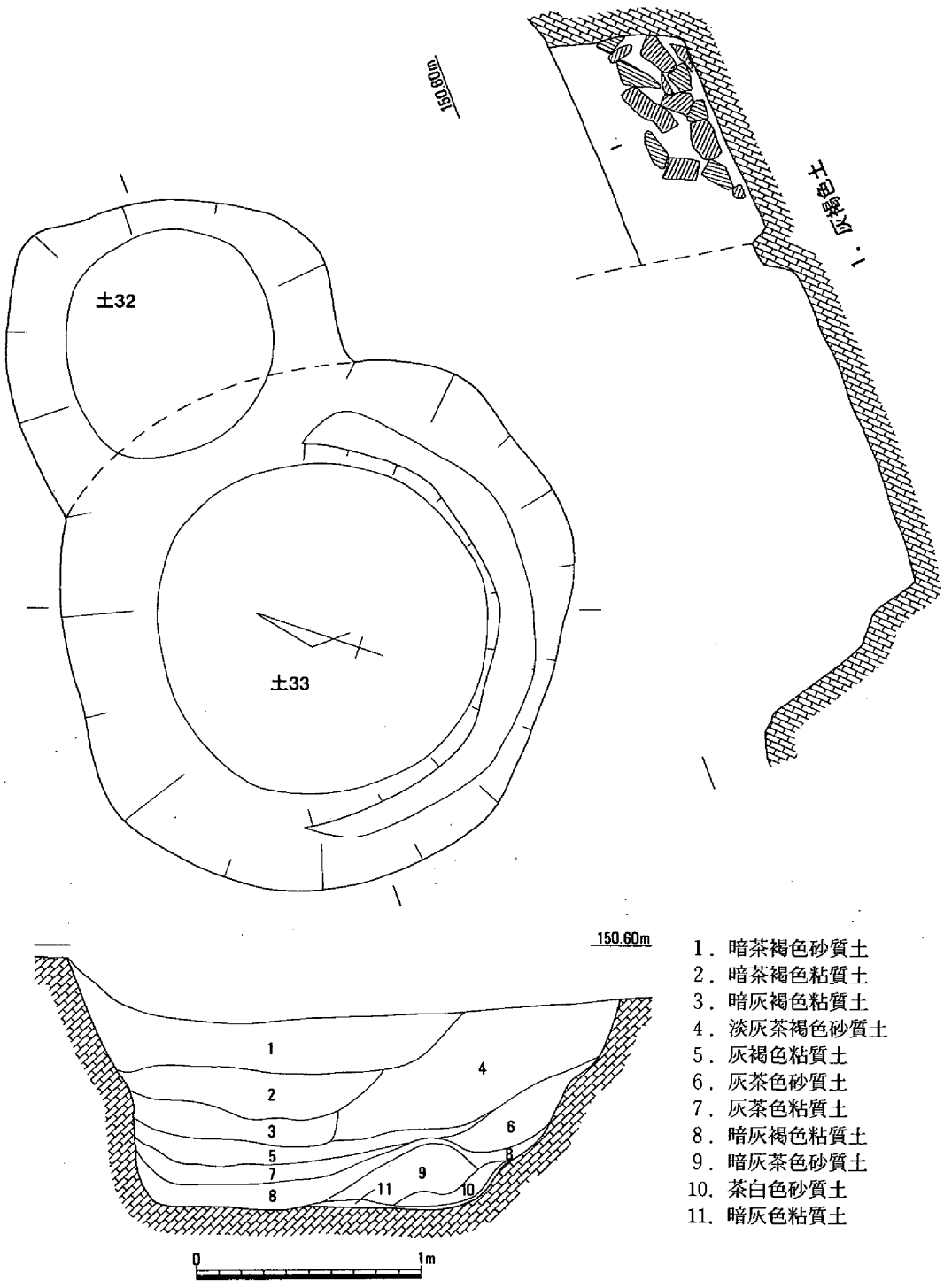
番号	器　種	年　代	口　径	器　高	胎　土	焼成	色　調	備　考
64	備前すり鉢		31.8		2㎜以下の砂粒	良	灰赤色	

土壙34（第299図）

郭３の東端で検出された土壙である。深さは最も深い所で検出面から30㎝、底部の海抜高は150.4ｍを測る。出土した遺物はいずれも擂鉢で、口縁端部の拡張が著しく斜め方向の擂り目がないもの(65・67)もある。遺物の時期としては16世紀後半に当たるものである。

土壙35・36・37（第300～302図）

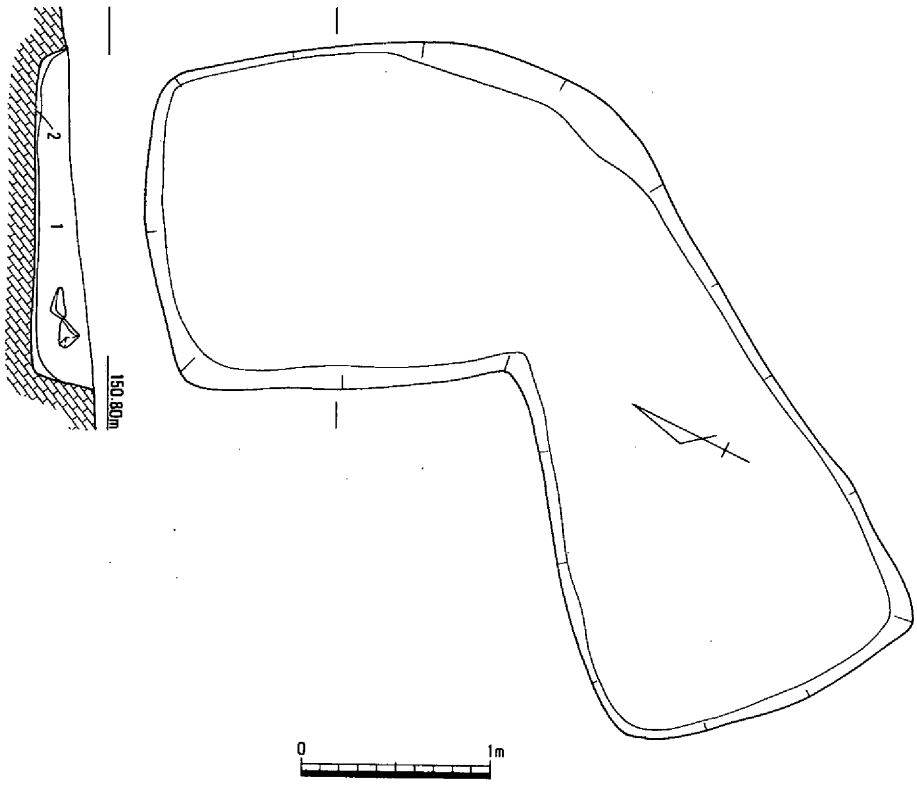
土壙35は土壙30の西にあり、30に切られることから土壙30より古い。掘り方は検出面で1.2×0.9ｍの方形で、深さは検出面から0.2ｍである。土壙36は建物12の南柱穴列西から３つ目の柱穴と切り合うが新旧は不明である。掘り方は検出面で直径1.35ｍの円形、深さは検出面から0.4mである。土壙37は建物12南東隅の柱穴を切り、建物12より新しいことがわかる。掘り方は検出面で直径0.9ｍの円形、深さは検出面から0.2mである。土壙35出土の上臼70は供給口が四角で「ものくばり」がない。土壙36出土の69・70は口縁が厚ぼったい作りで、16～17世紀であろう。



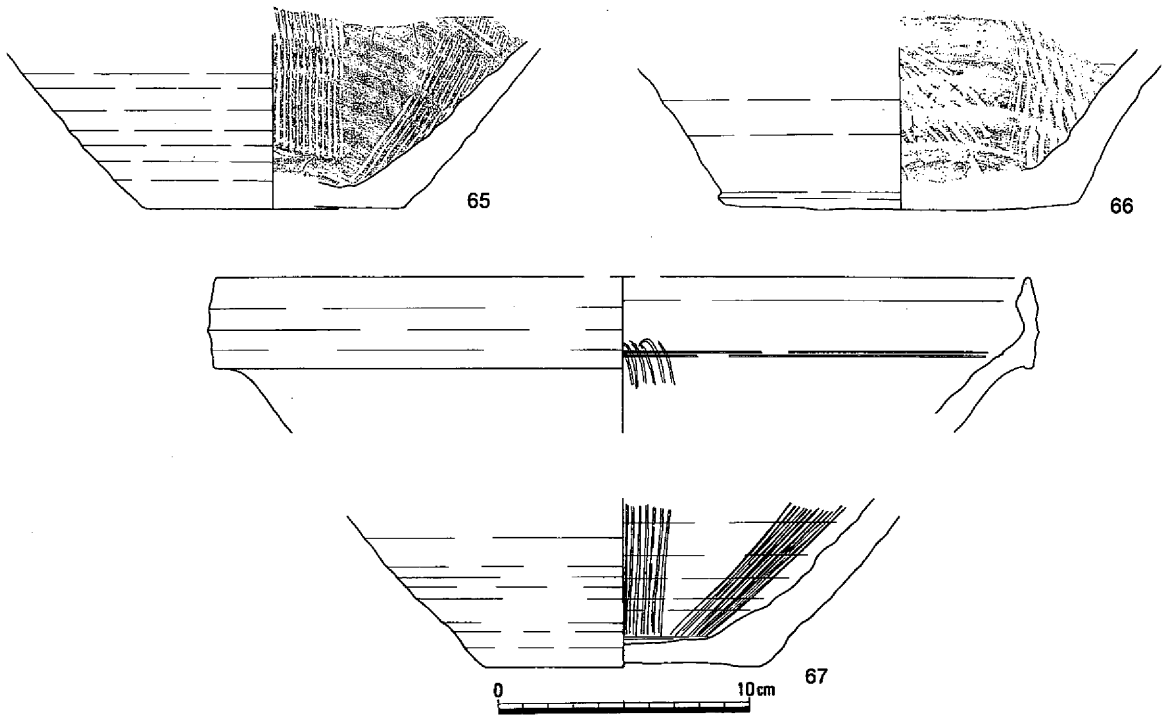
第298図　土壙32・33

土壙38～42（第303～307図）

いずれも郭３東側に位置する。土壙38・42は柱穴列２の東、土壙39・41は柱穴列２の柱穴にいずれも切られ、土壙40は建物13の南にある。掘り方は、検出面でみると土壙38・40は直径0.7ｍの円形、土壙39は0.85×0.75ｍの楕円形、土壙41は直径1.2ｍ、土壙42は1.3ｍの円形を呈する。深さは検出面から土壙38・39が15㎝、土壙41が20㎝、土壙43が37㎝を測る。これらの円形・楕円形の土壙は墓壙の可能性は低いものと考えられるが、用途については不明である。土壙37出土の２点はいずれも陶器である。71の釉は内面と外面上から2/3に施される。



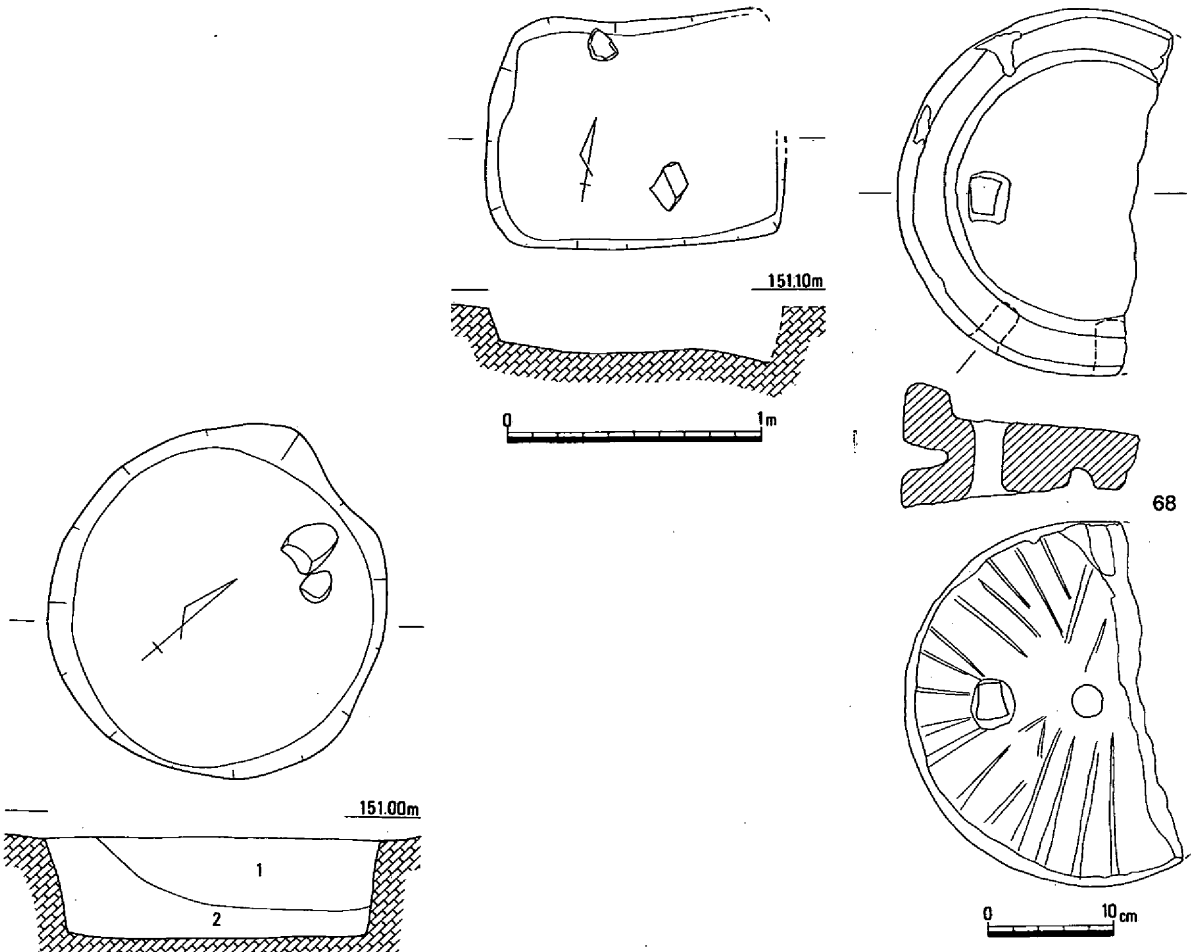
1．黄褐色土　2．淡灰色粘質土



第299図　土壙34・遺物

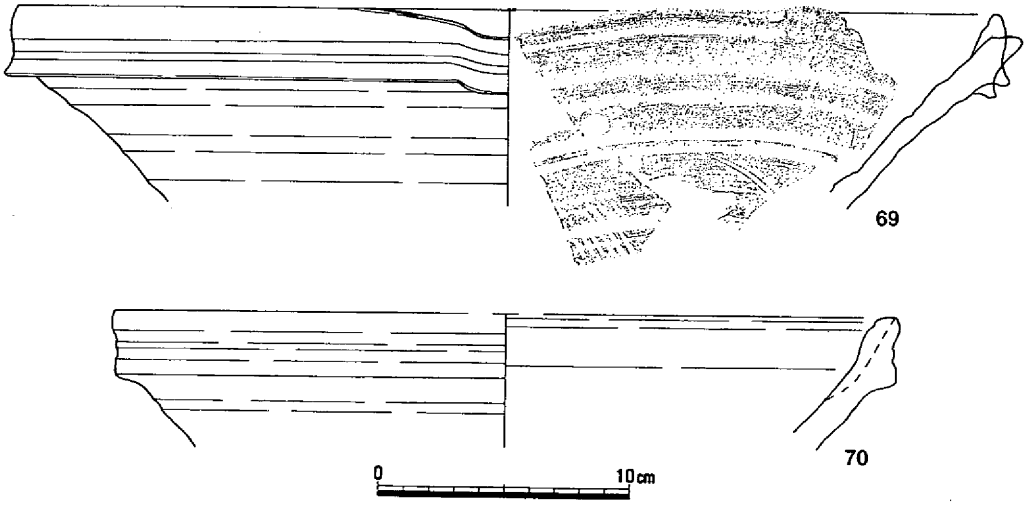
表47　郭3土壙34土器観察表

番号	器　種	年　代	口　径	器　高	胎　土	焼成	色　調	備　考
65	備前すり鉢				2㎜以下の砂粒	良	にぶい赤褐色	
66	備前すり鉢				2㎜前後の砂粒	良	にぶい橙色	
67	備前すり鉢		32.5	15.4	0.5〜2㎜の砂粒	良	赤灰色	



1．淡黄褐色土　2．黄褐色土

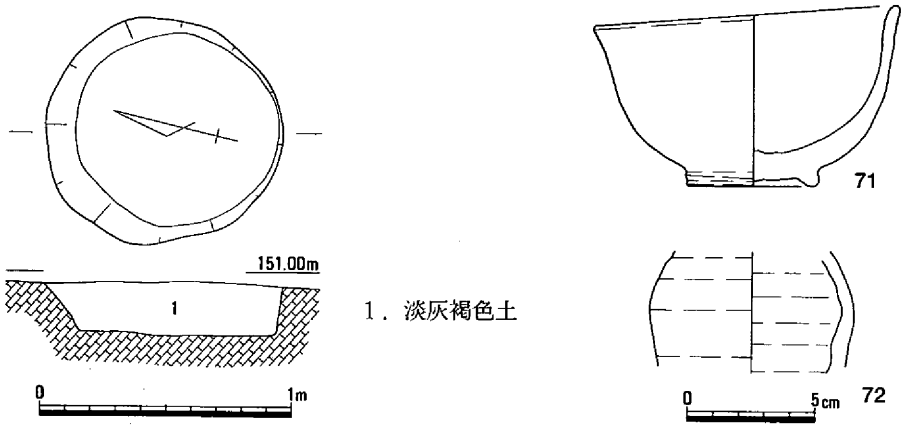
第300図　土壙35・石臼



第301図　土壙36・遺物

表48　郭３土壙36土器観察表

番号	器　種	年　代	口　径	器　高	胎　土	焼成	色　調	備　考
69	備前すり鉢		38.6		1mm前後の砂粒	良	にぶい赤橙色	
70	備前すり鉢		31		1mm以下の砂粒	良	にぶい黄橙色	

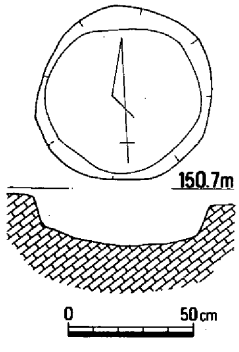


1．淡灰褐色土

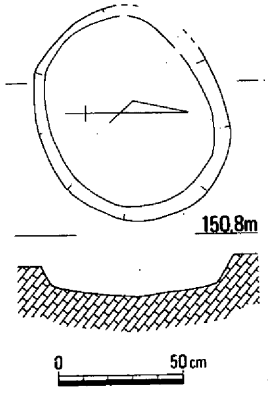
第302図　土壙37・遺物

表49　郭3土壙37土器観察表

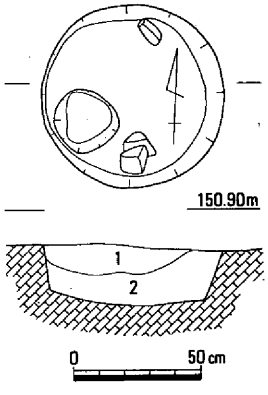
番号	器　種	年　代	口　径	器　高	胎　土	焼成	色　調	備　考
71	陶器椀		11.8	6.8	1mm以下の砂粒	良	にぶい黄褐色	
72	陶器？				1mm前後の砂粒	良	灰色	



第303図　土壙38

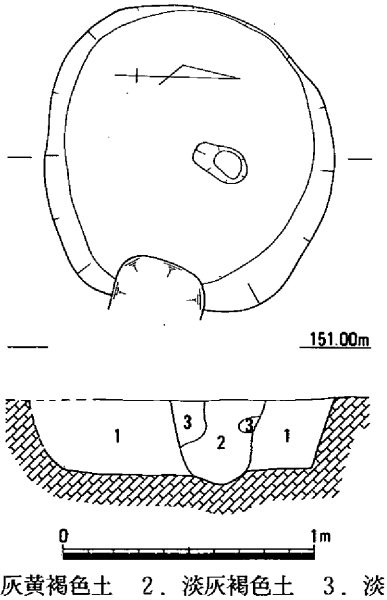


第304図　土壙39



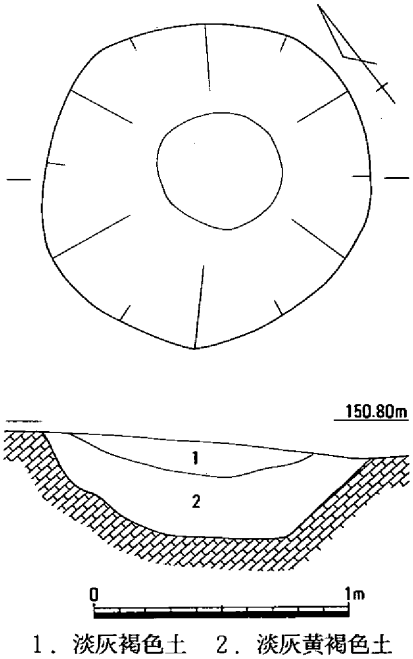
1．淡黄褐色土　2．淡灰褐色土

第305図　土壙40



1．淡灰黄褐色土　2．淡灰褐色土　3．淡白黄色土

第306図　土壙41



1．淡灰褐色土　2．淡灰黄褐色土

第307図　土壙42

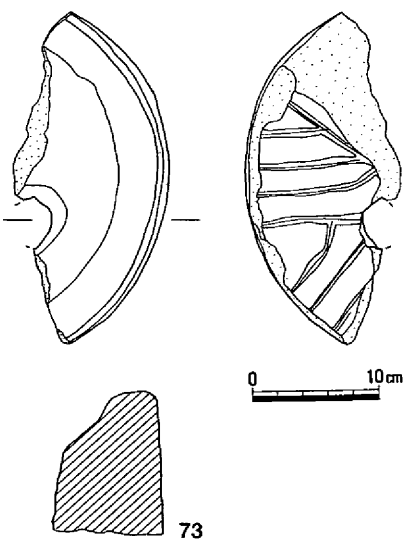
第５節　郭４～６ほか

（１）郭４・６（第308図）

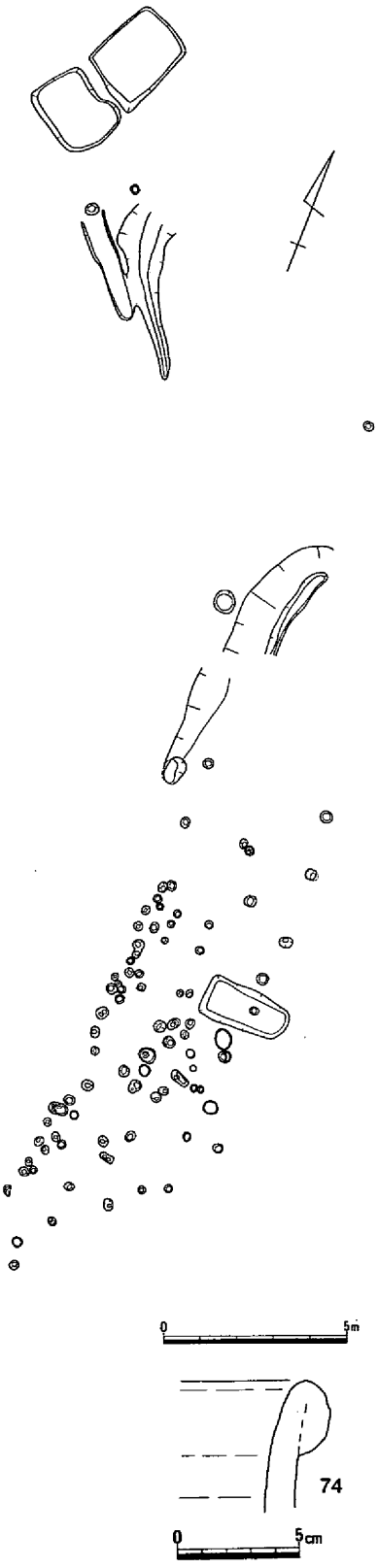
郭４は郭２の東１段下に位置する南北約40ｍ、東西６ｍの弓状の平坦面である。郭２との比高差は1.75～１ｍで、北ではその差は少なくなる。下の水田との比高差は3.5ｍである。郭２との境の斜面南端に幅約５ｍの範囲で石垣を確認したが、後世の改変と考えたため調査しなかった。遺構検出面は海抜高149.4～149.0ｍである。調査区南側に柱穴群と土壙を、北側には溝と土壙を検出した。南側の柱穴群は検出面で円・方形を呈し、直径が15～30㎝、深さは10～20㎝のものが多い。北側の溝などは耕作に伴うものと考えている。遺物のうち図示したのは74のみである。また、郭４北側に平坦面を想定し、郭６としたが人工的な加工はなかった。遺物としては石臼73（第309図）を表採した。

（２）郭　　５

郭５は郭１の西側にある南北18ｍ、東西７ｍの方形の平坦面である。郭１との比高差は1.75ｍある。南側は郭３と同様耕作のため削られたのであろう。遺構は見られない。



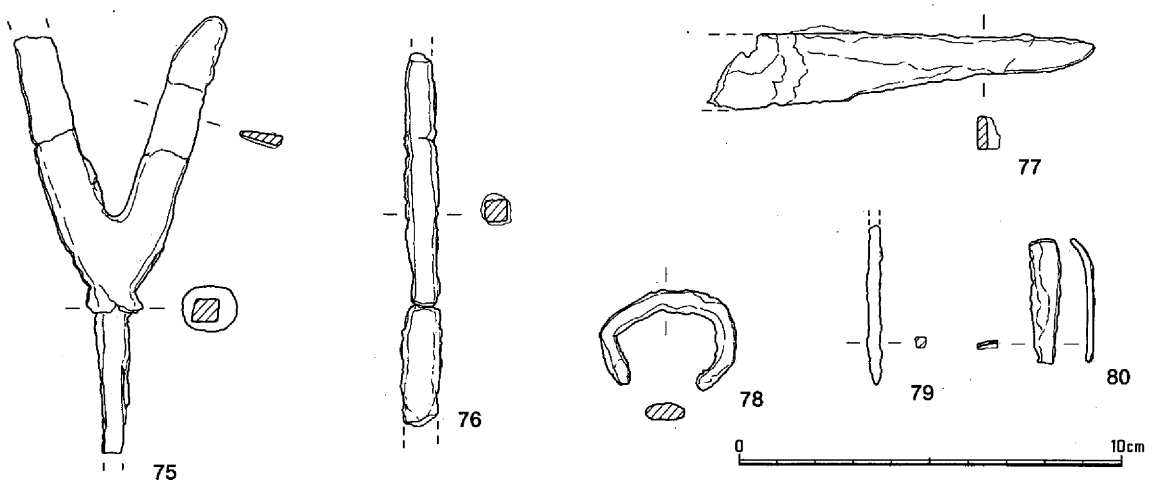
第309図　郭６表採石臼



第308図　郭４遺構配置(S＝1：200)・遺物

表50　郭４表土中土器観察表

番号	器　種	年　代	口　径	器　高	胎　土	焼成	色　調	備　考
74	備前甕				1㎜前後の砂粒	良	暗赤褐色	



第310図　表土中他の鉄器

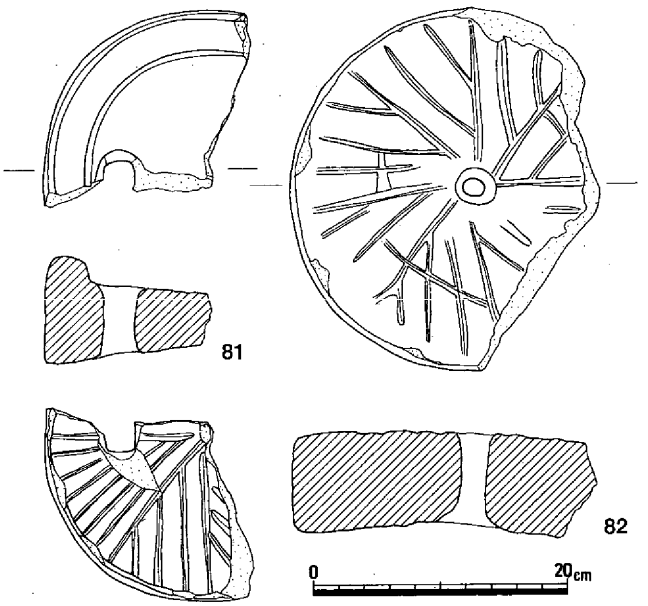
（３）表土層中の遺物他

（第310・311図）

茂平城で出土した鉄器を集めた。75は郭４の北側表土中から出土した雁股の鉄鏃で、長さ11.6cm、最大幅5.6cm以上を測る。郭１の土壙７からは76、80が出土した。76は釘で、残存長10.9cm、幅0.6cmである。80は用途不明の破片で、長さは3.3cmを測る。77は郭４流土中の刀子で、先端刃部は失われている。残存長10.2cm、最大幅1.9cmを測る。78は責金具で、郭１の北西出土、幅3.6cm、長さ2.6cmである。79は針で、郭１北東隅表土中出土、残存長は4.3cmを測る。

また、郭２・３間古道中でも若干の遺物が認められた（81・82）。

最後ではあるが、城の北側にある井戸について若干述べることとする。井戸は検出面で石組み内面が南北0.8ｍ、東西0.6ｍの楕円形で深さは1.6ｍを測る。石組みで、20～60cm大の角礫を乱積みする。掘り方は検出面で１辺1.7ｍの方形である。地山は北へ向かって下がるが、その上に造成土がなされて井戸の周囲には平坦面が作られている。井戸の掘り方はそこから掘られる。



第311図　郭２・３間古道出土石臼

表51　茂平城石臼観察表

No	地　区	出土遺構		副　溝	径	厚さ	備　　考
1	郭１	建物10	上臼		30	10.5	
20	郭１	土壙３	上臼	７分割	29	8	挽き溝２ヶ所
21	郭１	土壙３	上臼	８分割	29	12.5	挽き溝１ヶ所
22	郭１	土壙３	下臼	８分割	28	10	
28	郭１	土壙５	下臼		23	6	
29	郭１	土壙６	上臼	８分割	29	11	挽き溝２ヶ所
50	郭１	土壙16	下臼		34	9	
51	郭１	土壙17	上臼		26.5	6.5	
56	郭２	土壙23	下臼	８分割	27.5	8	両面副溝
68	郭３	土壙35	上臼		29	10	
73	郭６	表土	上臼		31	11.5	
81	郭２・３	表土	上臼		25.5	8.5	
82	郭２・３	表土	下臼	７分割	29	7.5	

第６節　ま　と　め

遺構について

郭１には10棟の建物が存在し、貯蔵穴６基などの土壙が付随する。建物からの遺物は見られなかったが、16世紀後半から17世紀代にわたり存続していたと考えられる。墓壙は建物との切り合いやその配置から、建物群より遅れて出現すると考えられる。また、郭２では建物１棟と貯蔵穴１基が、南の郭３では確実な建物２棟と想定３棟、貯蔵穴５基が存在した。郭４については柱穴は多いものの建物は想定できなかった。全体的に遺構の大多数は茂平城の南側に位置し、郭１の北東、北西を含めて北側には稀薄であった。

郭以外の城の施設については、堀切と道、井戸がある。堀切は郭３・４の東を通ると考えられ、トレンチ調査を実施したが城側・反対側いずれも最近の改変が著しいため確証は得られなかった。

城への登り道については、郭３の南東から郭２と３の間を通り郭１へ至る道は調査でも古道と確認できたが、郭１北側を登る道については不明である。両方とも当時のままであると考えてよいだろう。

井戸は城の北側、水田との境に位置した。石組みの井戸で、現在でも湧水がある。

また、郭１から郭４にかけての北東部では盛土を想定してトレンチを設定したがいずれも地山であると判断した。郭１東・南・西と郭２東、郭４東、郭５西の斜面はいずれも地山削り出しによるものである。

遺物について

遺物はごみ穴として転用された貯蔵穴を中心に、整理箱で９箱分の遺物が出土した。内容は16世紀後半～17世紀後半の陶磁器、備前焼の摺鉢・甕など、土師器の皿や羽釜、五輪塔の空風輪、石臼といったものである。陶磁器では磁器は少なく、椀・皿などの肥前系陶器が目に付く。備前焼では擂鉢が圧倒的に多いが、完形品は１点（郭３土壙28）のみで、いずれも酷使により内面の磨耗が著しい。陶磁器に高級品が少ないこと、また石臼と擂鉢の多さは一般的な「山城」のイメージとかけ離れており、むしろ平時の生活のにおいが濃いことを象徴している。

袋状土壙について

袋状土壙は郭１・３を中心に12基確認できた。これらの性格を考えるために、類似する遺構を挙げてみることにする。

まず貯蔵穴と考えられるもので弥生時代の袋状土壙がある。奥坂遺跡[1]の例では、袋状土壙の掘り方は検出面から下に向かうにつれて外側へ抉りこまれるもので、茂平城のものと比べると、壁面を広げるよりも深く掘り下げることを目的としているように見受けられる。

つぎに類似する遺構として横穴墓がある。古墳時代後期の横穴墓は丘陵の斜面部を利用して構築され、構造は前庭部と比較的狭く短い羨道、玄室が丘陵の奥へ向かって掘りこまれるものである。茂平城のものと異なり、入り口は斜面に設けられ、水平である。

中近世に属するものとなると類例は少ない。苫田郡加茂町にあった百々（どうどう）地下式横穴[2]は、直径1.2ｍの入り口から垂直に2.5ｍ落ちる竪穴部があり、そこから高さ0.7ｍ、底部幅0.6ｍを測る門部を通って室内へと入るようになっている。室内は幅3.2ｍ、奥行き1.6ｍ、高さ1.6ｍの直方体をなしている。遺物は16世紀末の備前焼擂鉢と時期不明の白磁片などがあり、調査者は中世墓と考えている[2]。

これらのうち最も近いものは、入り口が平坦面に設けられることと、入り口からまっすぐ下った後横に部屋を構築することから、百々地下式横穴であると考えられる。ただしその用途については人骨が確認できないこと、また中近世墓に伴うことの多い遺物が少ないことから、墳墓とする積極的証拠に欠ける。よって、現状では貯蔵穴と考えるのが妥当ではないかと判断した。

歴史書と茂平城の性格について

茂平城が文献上に登場するのは、実は昭和になってのことである。『勝央中核工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(3)内の遺跡地図で初めて記載された。『勝央町史』(4)では「構の一部が残存し、北方に抜け穴、西方に的場跡がある」と記載があるが年代、城主は不詳である。また、北東約200mの山裾に城主の墓があるという言い伝えを載せている。

16世紀末の作州は、尼子氏を滅ぼしてなお東へ向かう毛利氏と、東から迫る織田氏の間の緩衝地帯となっていた。双方の息のかかった浦上・宇喜多など中小の武将が管家一族など地元の勢力と結合して群雄割拠を続けていた。そのなかでも、美作東部で勢力を誇ったのが美作町の三星城にいた後藤氏である。後藤氏は、1553年頃は尼子氏に帰属していたが、1566年の尼子氏の滅亡によって東作の支配権を得ることになった。しかしそれは長く続かず、1579年宇喜多直家の部将花房助兵衛・延原弾正らの攻撃によって三星城が落城し、後藤氏は滅亡する。

勝央町にある構・山城もこのような状況と無縁ではなかったと考えられる。例えば、岡の岡城は宇喜多直家の部将岡家利が陣を置いたとされる。しかし一方、植月にある宮山城・鬼ヶ池城・構城のように在地土豪植月氏の居城と伝えられるものも見受けられるのである。植月氏居城の3城は、いずれも美作台地上に位置する土塁を巡らせた城館であり、時期は中世前半であるが形態は茂平城に近い。

このように見ていくと、茂平城は中世末期美作東部の混乱した政治状況の中、在地勢力の築いた平山城で、居館的な様相が多いものであるといえよう。

註

(1) 高畑知功・福田正継「奥坂遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』53　岡山県教育委員会　1983年

(2) 平井　勝「百々（どうどう）地下式横穴の発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告』10　岡山県教育委員会　1980年

(3) 山磨康平・下澤公明『勝央中核工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』勝央町教育委員会　1976年

(4) 「城跡、構跡」『勝央町史』勝央町　1984年

報告書抄録

ふりがな	にしおおさわこふんぐん　はたけのひらこふんぐん　くろつちちゅうせいぼ　むしおいせき　もびらこぼ　もびらじょう
書名	西大沢古墳群　畑ノ平古墳群　黒土中世墓　虫尾遺跡　茂平古墓　茂平城
副書名	新勝央中核工業団地建設に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	111
編著者名	弘田和司　植月康雅　氏平昭則
編集機関	岡山県古代吉備文化センター
所在地	〒701－01　岡山県岡山市西花尻1325－3　TEL086－293－3211
発刊機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700　岡山県岡山市内山下2－4－6　TEL086－224－2111
発行年月日	西暦1996年3月31日

所収遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
西大沢古墳群	勝田郡勝央町植月中		134° 3′ 32″	35° 3′ 15″	1993.11.29～1994.3.31	625㎡	新勝央中核工業団地建設に伴う発掘調査
畑ノ平古墳群	勝田郡勝央町植月中		134° 6′ 37″	35° 3′ 13″	1993.2.1～3.31 1993.7.19～8.11 1993.9.15～1994.3.31	2,980㎡	
虫尾遺跡	勝田郡勝央町平		134° 6′ 48″	35° 3′ 10″	1992.4.1～5.31 1992.6.17～6.24 1992.8.12～9.14	3,680㎡	
黒土中世墓	勝田郡勝央町植月中		134° 6′ 23″	35° 3′ 16″	1992.11.1～1993.1.31	1,000㎡	
茂平古墓	勝田郡勝央町植月中		134° 6′ 25″	35° 3′ 9″	1992.9.1～10.31	200㎡	
茂平城	勝田郡勝央町植月中		134° 6′ 28″	35° 3′ 8″	1992.4.1～1993.2.28	3,800㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西大沢古墳群	墳墓	古墳時代	古墳2基	須恵器	
畑ノ平古墳群	墳墓	古墳時代	古墳11基 土壙墓1	陶棺・馬具 刀・鉄鏃 玉類	
虫尾遺跡	集落	縄文時代 平安時代	落とし穴 建物1 土壙7	勝間田焼 縄文土器	
黒土中世墓	墓地	室町時代 ～ 江戸時代	土塁 土盛2 土壙39	渡来銭 宝筐印塔 陶磁器類	
茂平古墓	墳墓	中世	石列	勝間田焼	
茂平城	居館	戦国時代 ～ 江戸時代	郭面6 建物13 土壙42	備前焼	

1．西大沢古墳群
調査前
（北東から）

2．西大沢古墳群
全景
（南西から）

3．西大沢 2 号墳
石室
（北から）

図版 2

1．畑ノ平11号墳
調査前
（西から）

2．畑ノ平11号墳
全景（南から）

3．畑ノ平11号墳石室（北から）

4．周堀遺物出土状況（西から）

1．畑ノ平５号墳
調査前
（南から）

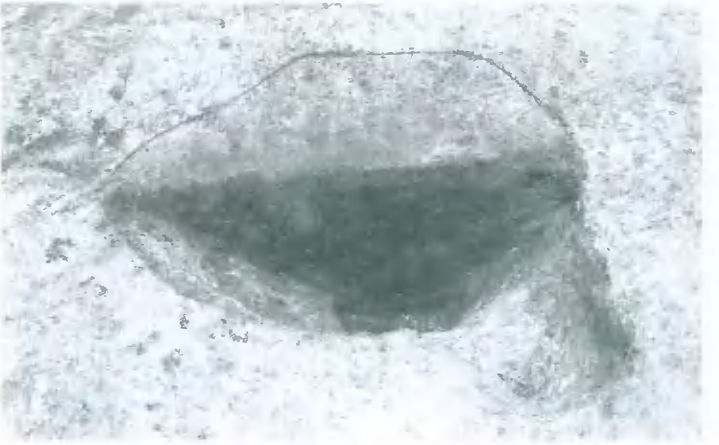
2．畑ノ平５号墳
石室
（北西から）

3．畑ノ平５号墳
遺物出土状況
（南から）

図版 4

4．畑ノ平５号墳
棺台
（北から）

5．畑ノ平５号墳
墳丘
（西から）



6．畑ノ平５号墳
周辺土壙
（南から）

1．畑ノ平10号墳
墳丘
（西から）

2．畑ノ平10号墳
奥壁付近
（西から）

3．畑ノ平10号墳
石室
（西から）

図版 6

1．畑ノ平７号墳
墳丘
（南から）

2．畑ノ平７号墳
陶棺
（南から）

3．畑ノ平７号墳陶棺内
遺物出土状況（南から）

4．畑ノ平７号墳陶棺内
遺物出土状況（北から）

1．畑ノ平７号墳
遺物出土状況
（南から）

2．畑ノ平７号墳
遺物出土状況
（北から）

3．土壙墓
（西から）

図版 8

1．畑ノ平８号墳
調査前
（北西から）

2．畑ノ平８号墳
墳丘
（東から）

3．畑ノ平８号墳
石室
（南から）

1．畑ノ平９号墳墳丘
（南から）

2．畑ノ平９号墳
奥壁遺物出土
状況

3．畑ノ平９号墳
遺物出土状況

1．畑ノ平１号墳遺物出土状況（北から）

2．畑ノ平１号墳墳丘（東から）

1．畑ノ平６号墳
墳丘
（南から）

2．畑ノ平６号墳
遺物出土状況
（東から）

3．畑ノ平６号墳
石室
（南から）

図版12

1．畑ノ平２号墳
調査前
（南から）

2．畑ノ平２号墳
墳丘
（東から）

3．畑ノ平２号墳外護列石（西から）

4．畑ノ平２号墳外護列石（東から）

1．C支群航空写真

2．畑ノ平３号墳
墳丘
（南から）

3．畑ノ平３号墳
遺物出土状況
（南から）

1．畑ノ平４号墳
墳丘
（南から）

2．畑ノ平４号墳
石室
（南から）

3．畑ノ平４号墳遺物
出土状況（南から）

1

2

3

4

1．西大沢古墳群出土土器

1

8

2

4

2．畑ノ平11号墳出土土器

3

5

7

12

15

10

14

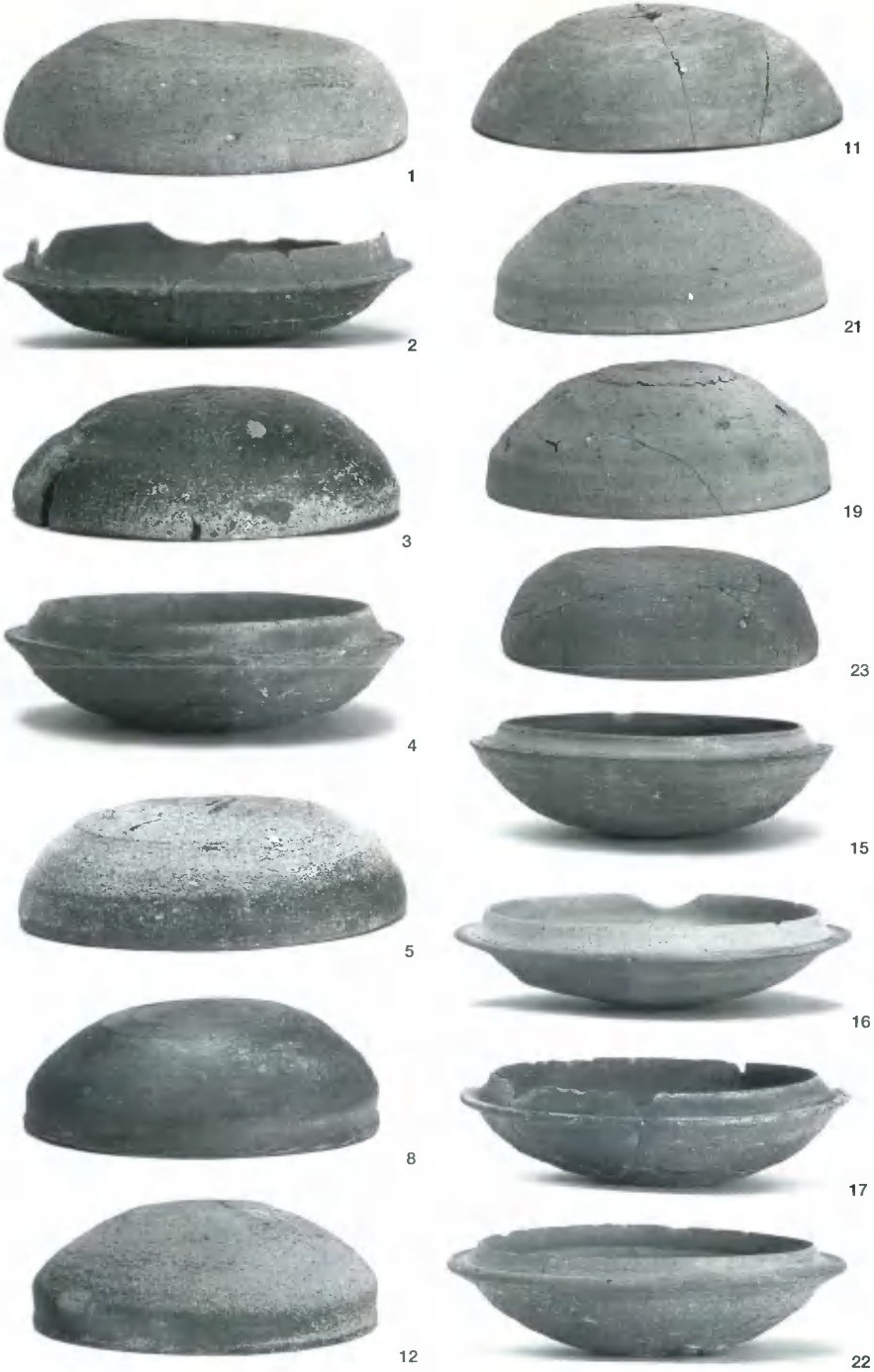
16

1．畑ノ平11号墳出土土器

1

2

2．土壙墓出土土器



1．畑ノ平５号墳出土土器

24

25

26

28

39

42

27

29

34

36

46

47

1．畑ノ平５号墳出土土器

48

53

54

57

56

59

63

61

64

1．畑ノ平５号墳出土土器

67

68

70

1．畑ノ平５号墳出土土器

58

60

72

73

74

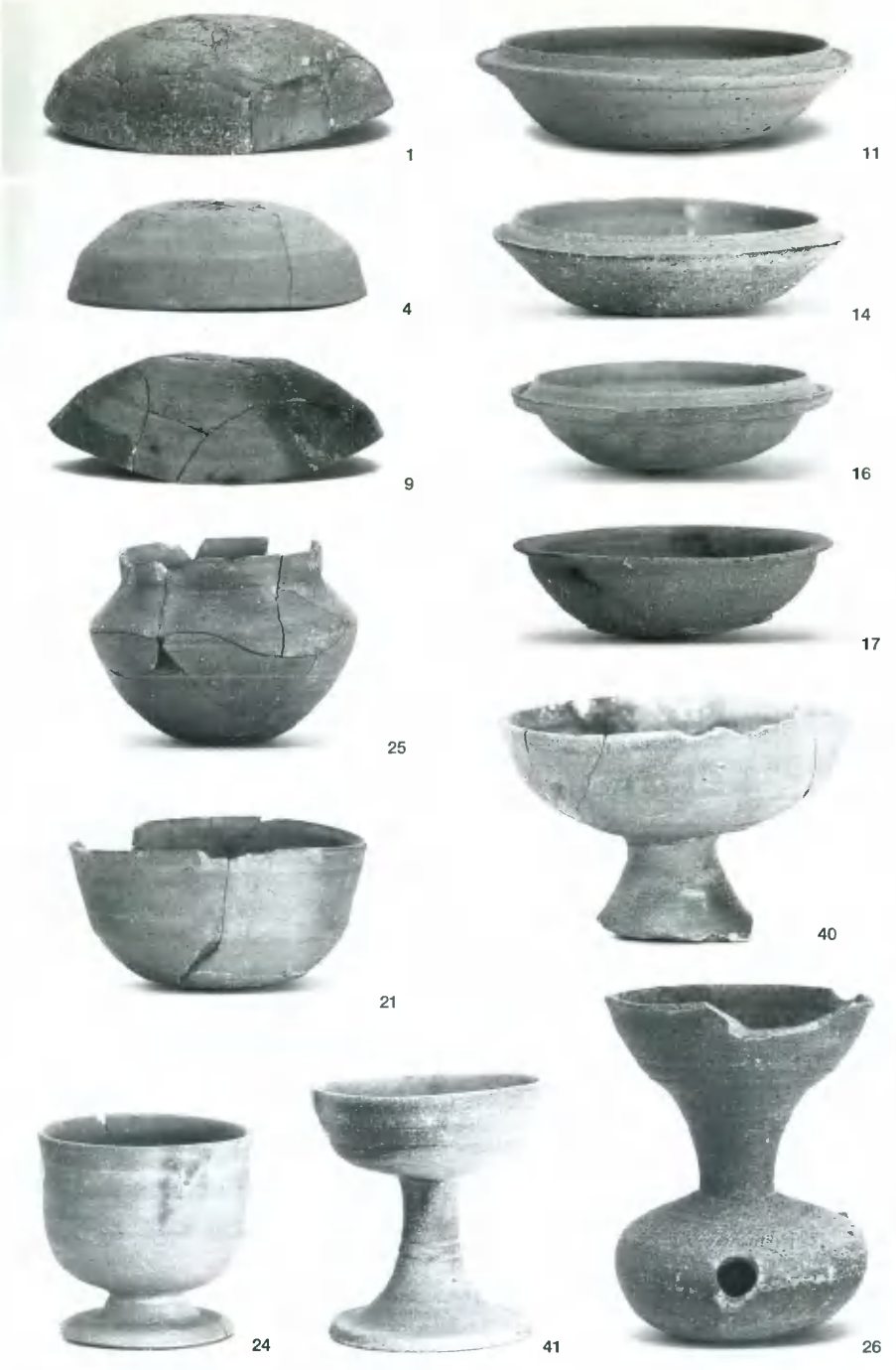
76

75

77

1．畑ノ平５号墳出土土器

1．畑ノ平10号墳出土土器



1．畑ノ平７号墳出土土器

30

43

32

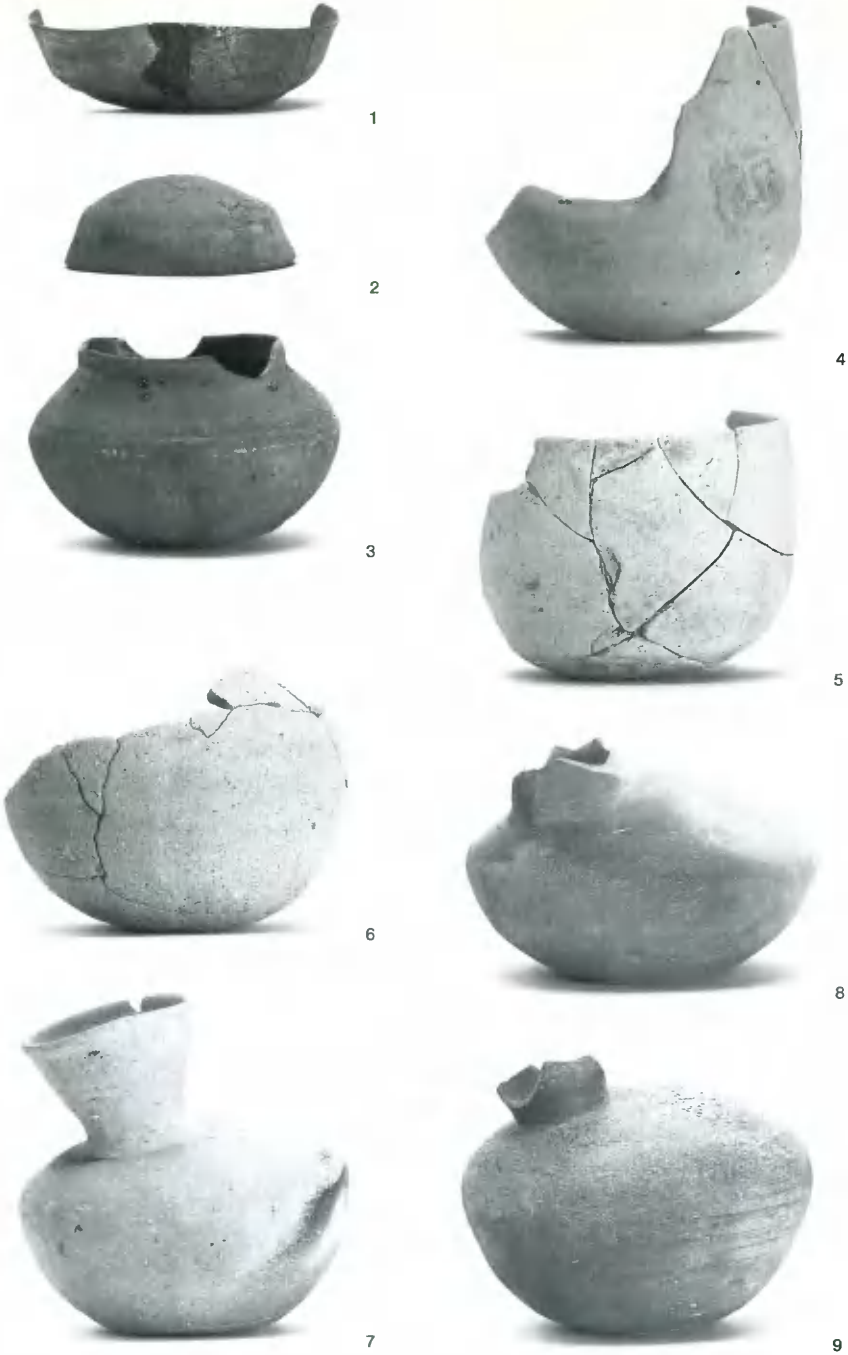
45

34

47

48

1．畑ノ平７号墳出土土器



1．畑ノ平８号墳出土土器

1．畑ノ平９号墳出土土器

49

48

50

55

53

62

61

63

1．畑ノ平９号墳出土土器

3

23

4

24

25

26

15

31

21

36

38

46

44

1．畑ノ平１号墳出土土器

53

47

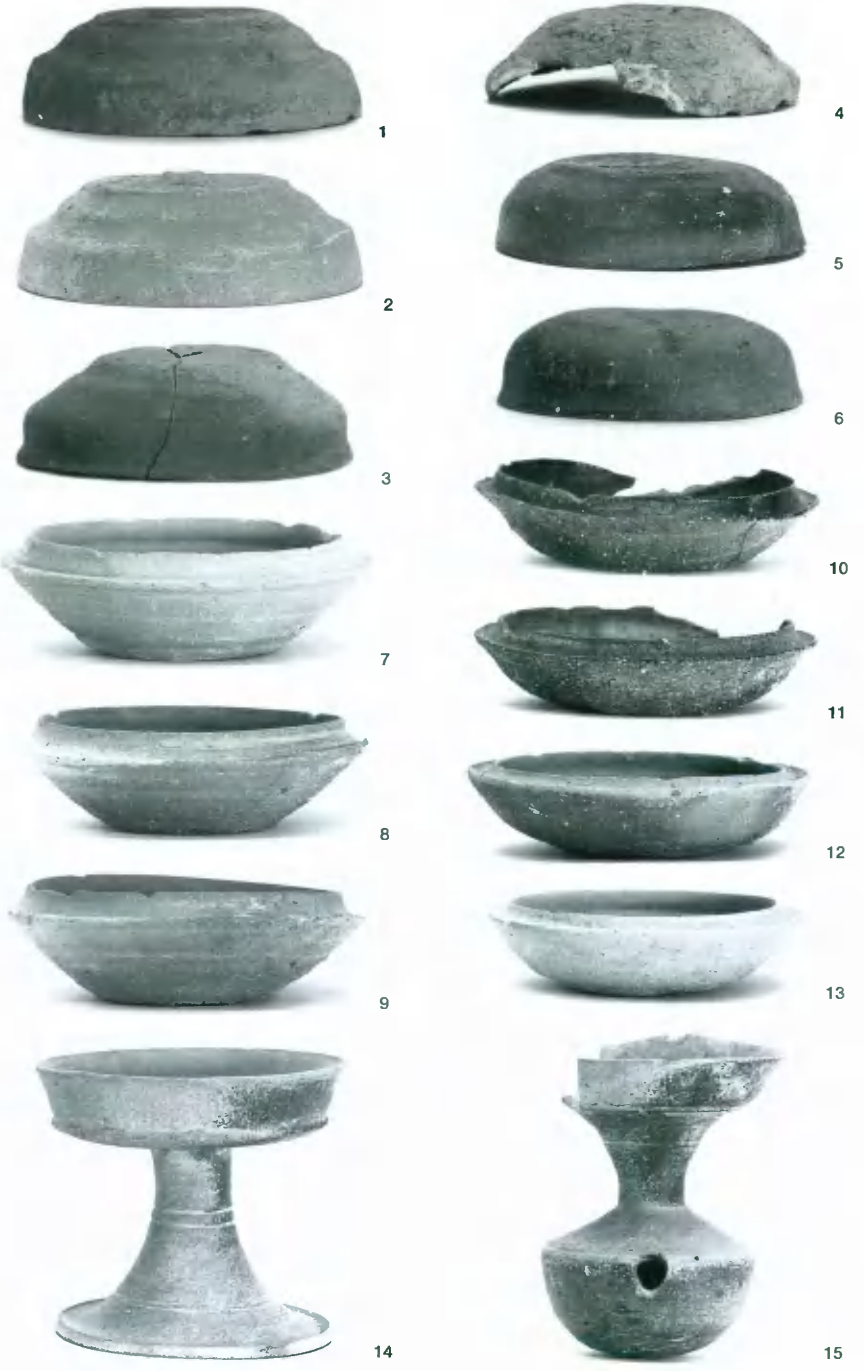
51

48

55

49

1．畑ノ平１号墳出土土器



1．畑ノ平6号墳出土土器

17

19

18

21

20

23

22

1．畑ノ平６号墳出土土器

1

3

10

13

11

15

21

14

18

19

25

16

27

1．畑ノ平２号墳出土土器

1．畑ノ平３号墳出土土器

1．畑ノ平３号墳出土土器

2．畑ノ平４号墳出土土器

1．畑ノ平７号墳陶棺

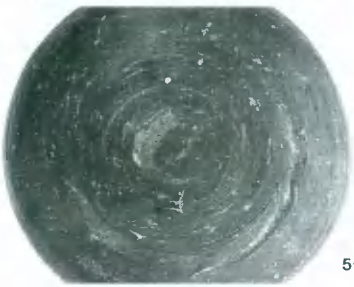
2．畑ノ平２号墳陶棺

1−33

1−33

1−29

1−29


5−6

5−29

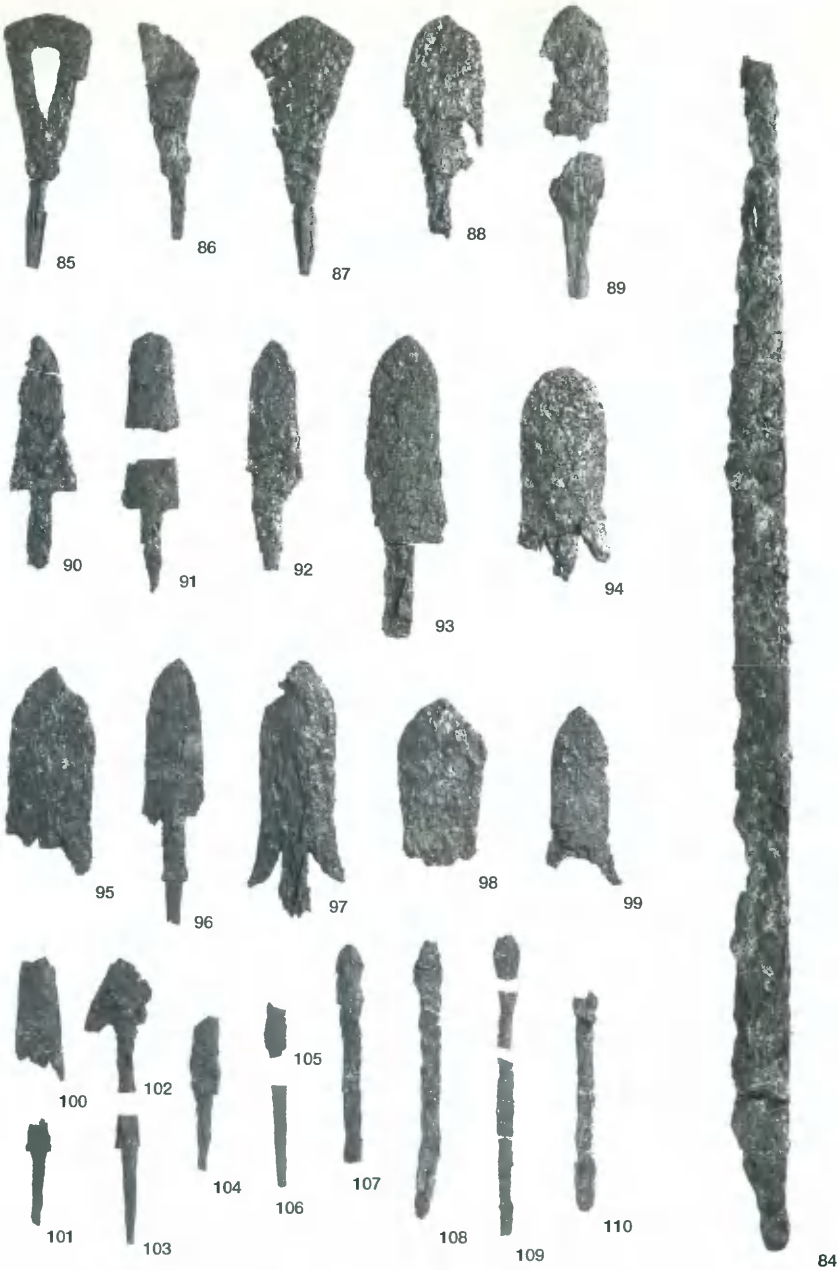
5−20

5−21

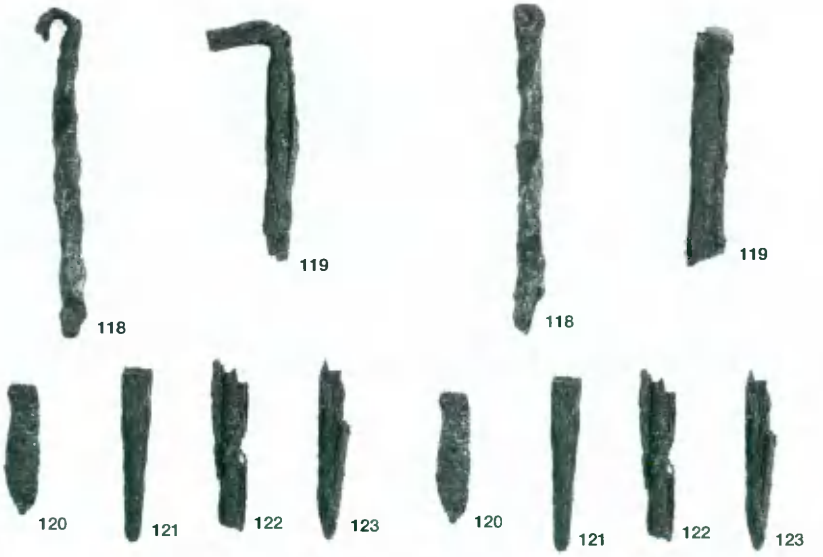
5−1

5−10

1．須恵器蓋杯細部



1．畑ノ平５号墳出土鉄鏃・刀

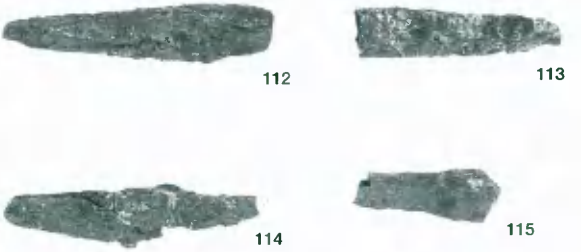


1．畑ノ平５号墳出土釘

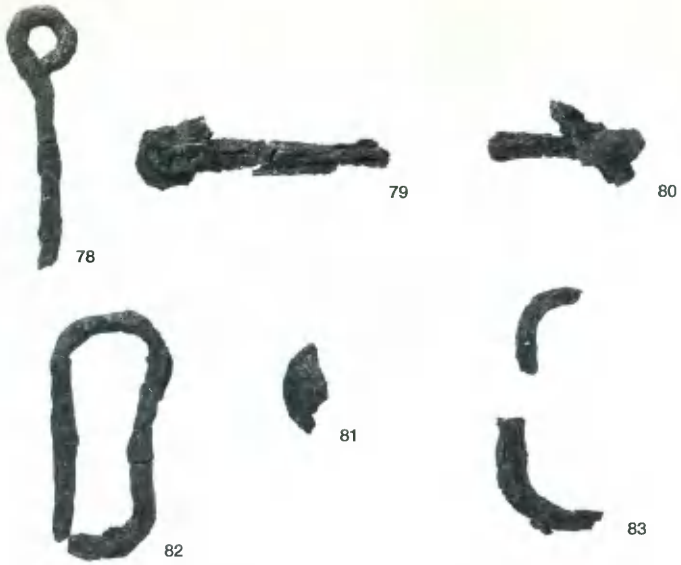
2．畑ノ平５号墳出土刀柄

3．畑ノ平５号墳出土鎌

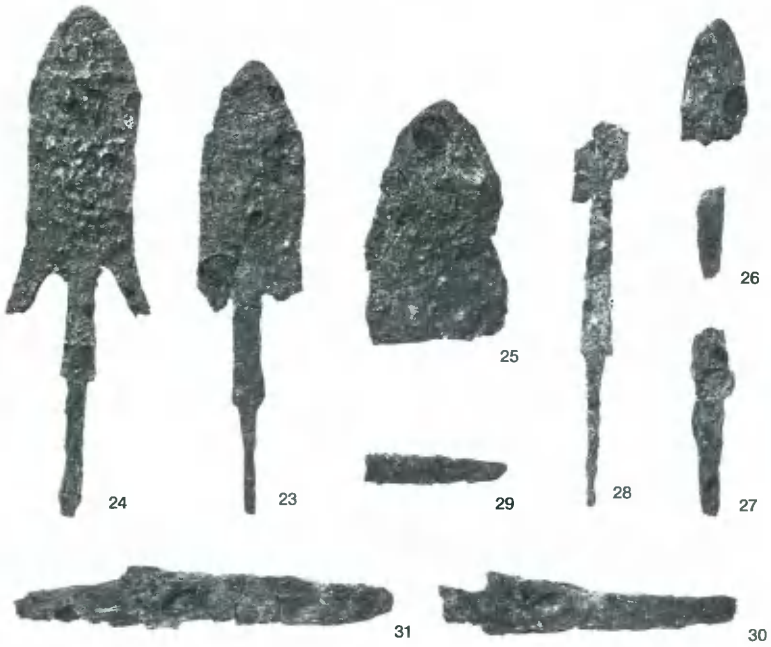
4.畑ノ平５号墳出土耳環



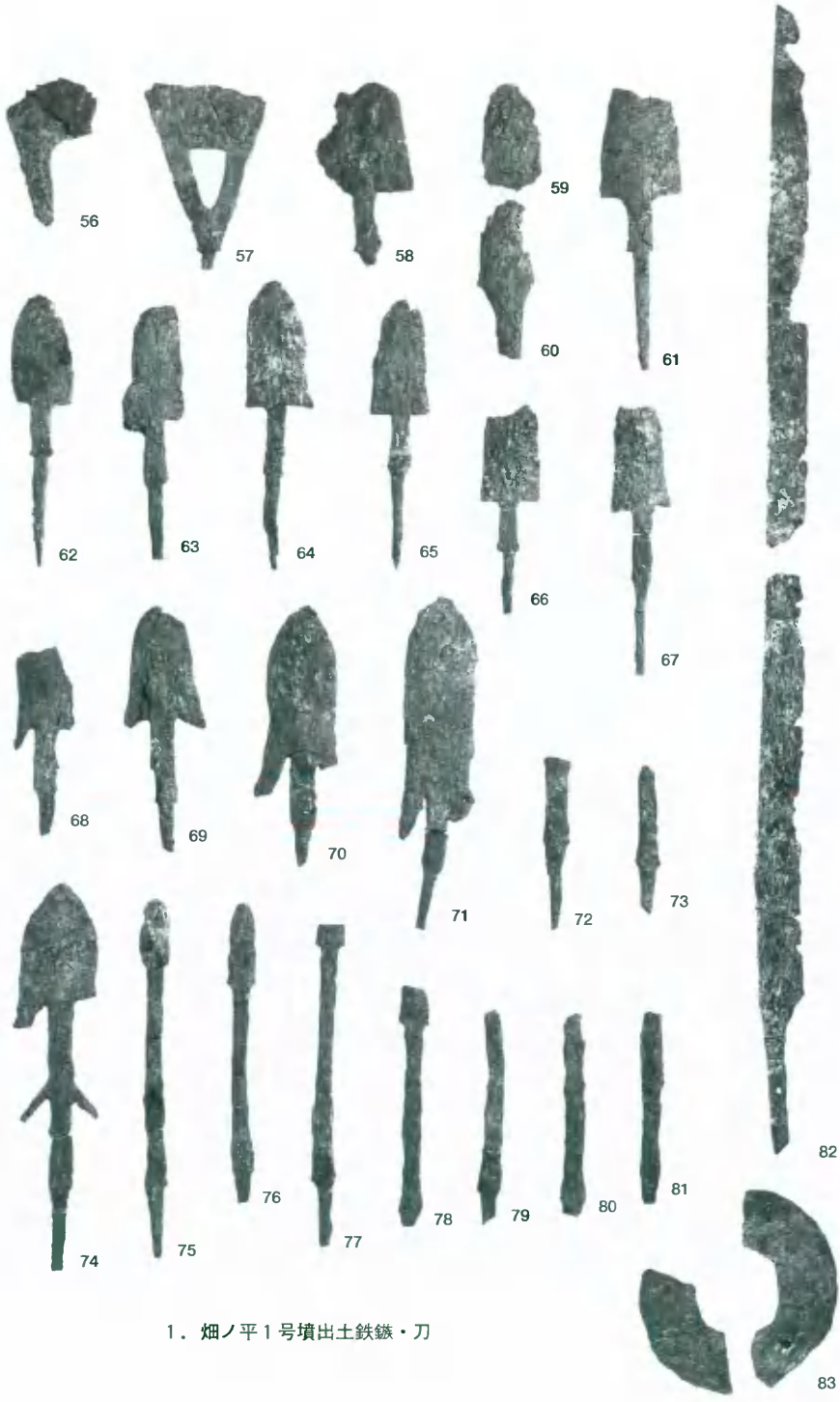
5．畑ノ平５号墳出土刀子



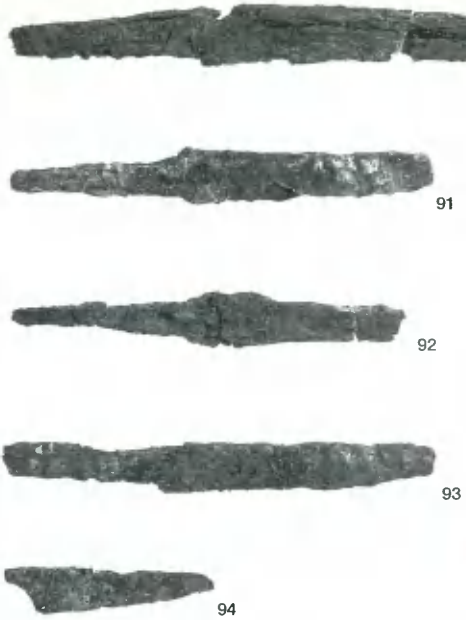
1．畑ノ平５号墳出土馬具



2．畑ノ平10号墳出土鉄器

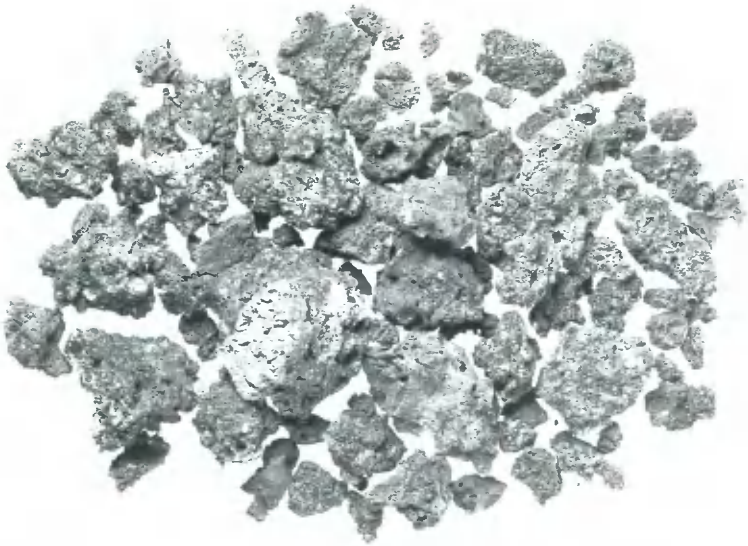


1．畑ノ平１号墳出土鉄鏃・刀



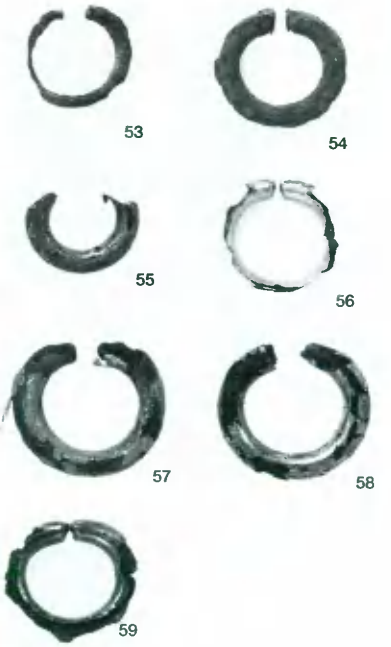
1．畑ノ平１号墳出土刀子

2．畑ノ平１号墳出土耳環

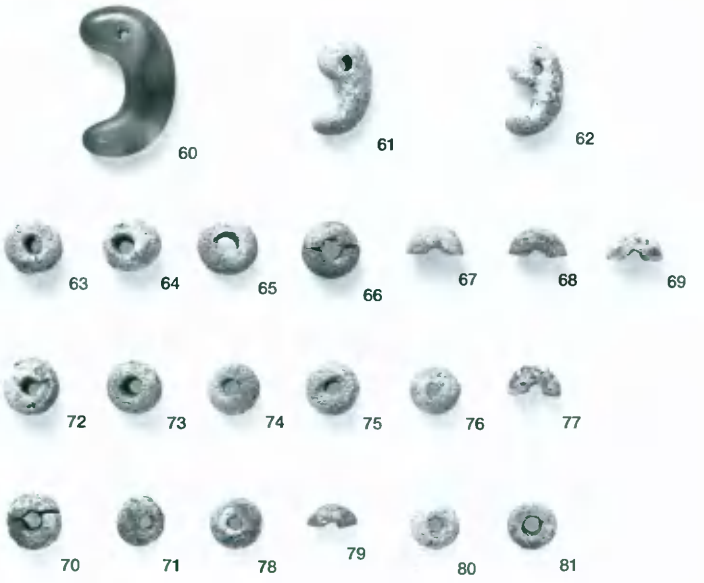


3．畑ノ平７号墳出土鉄滓

1．畑ノ平７号墳出土鉇・鉄鏃・刀子



2．畑ノ平７号墳出土耳環



3．畑ノ平７号墳出土玉

1．畑ノ平９号墳出土釘

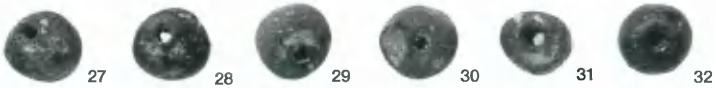
2．畑ノ平９号墳出土耳環

3．畑ノ平10号墳出土耳環

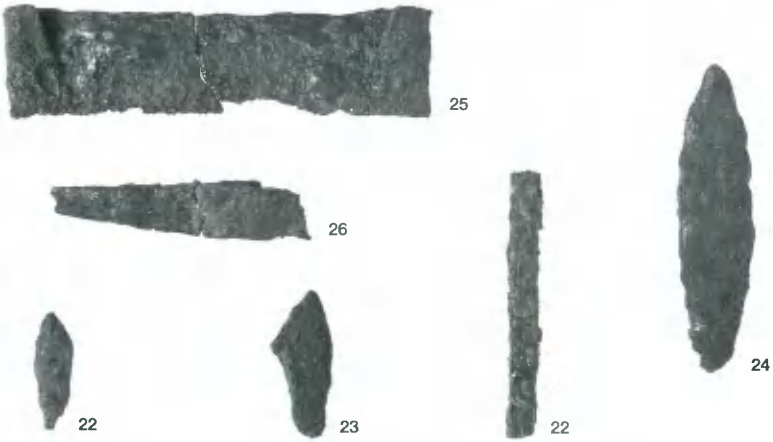
4．畑ノ平６号墳出土鈴・耳環

5．畑ノ平８号墳出土耳環

6．畑ノ平２号墳出土耳環



7．畑ノ平６号墳出土玉



8．畑ノ平３号墳出土鉄器

1．虫尾遺跡第１地点全景（南から）

1．虫尾遺跡第２地点遠景（南から）

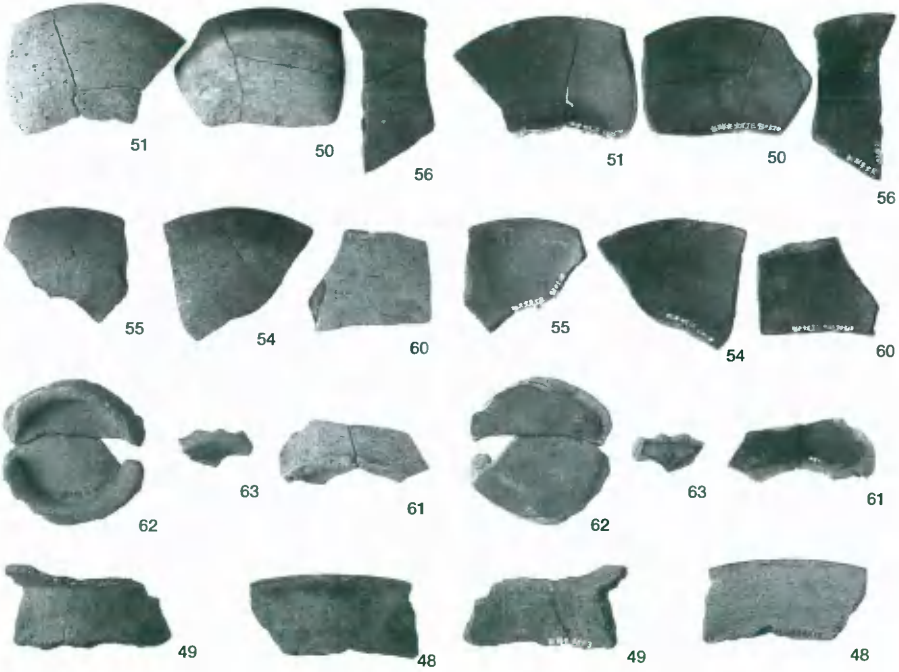
1．虫尾遺跡第１地点
土壙１・２
（西から）

2．虫尾遺跡第１地点建物（西から）

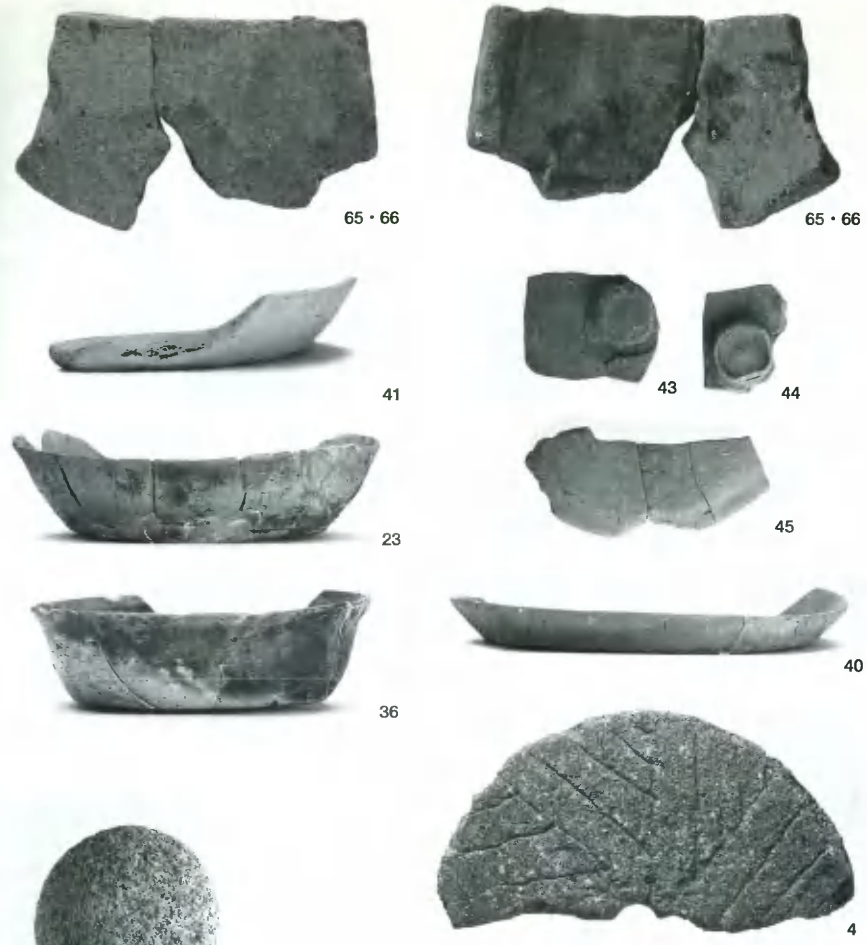
3．虫尾遺跡第２地点土壙20（南から）

1．虫尾遺跡第１地点出土遺物

2．虫尾遺跡第１地点土壙１遺物



3．虫尾遺跡第１地点出土土師器・黒色土器（外・内面）



1．虫尾遺跡第1地点出土遺物

2．虫尾遺跡第2地点出土遺物

1．茂平古墓列石（東から）

2．茂平古墓墳丘（東から）

1．茂平古墓出土土器外・内面

2．茂平古墓出土備前焼甕

1．黒土中世墓土塁（南から）

2．黒土中世墓土壙群全景（南から）

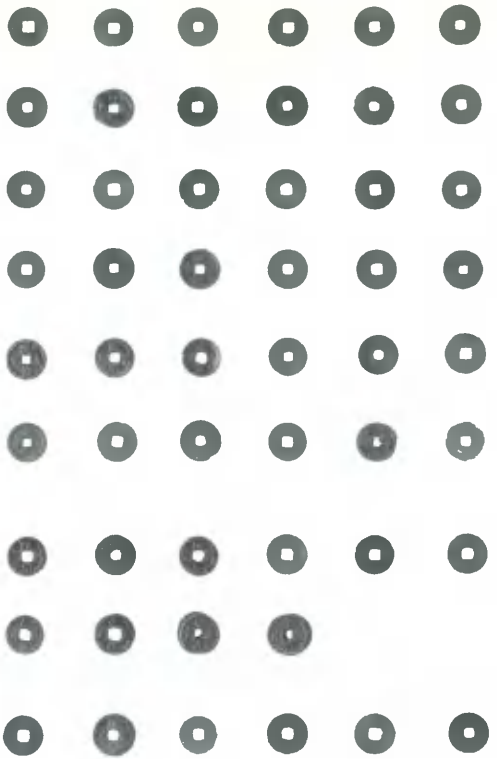
1．黒土中世墓
土盛１

2．黒土中世墓
土壙22

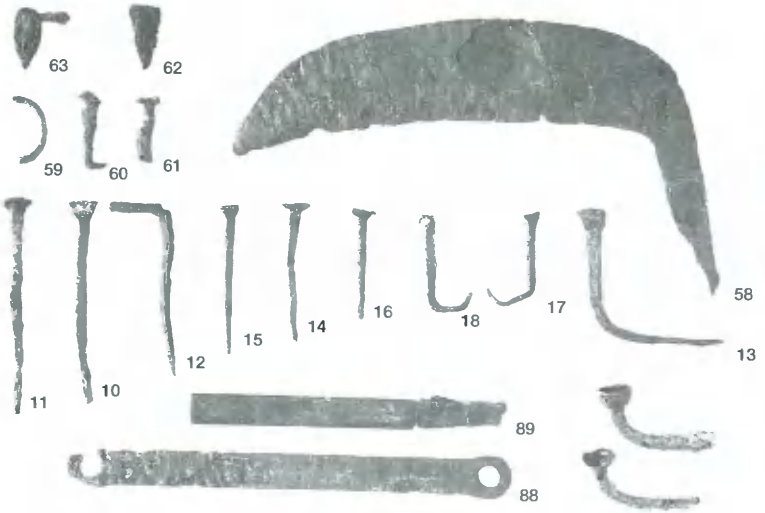
3．黒土中世墓
土壙31

1．黒土中世墓出土土器

2．黒土中世墓出土宝篋印塔



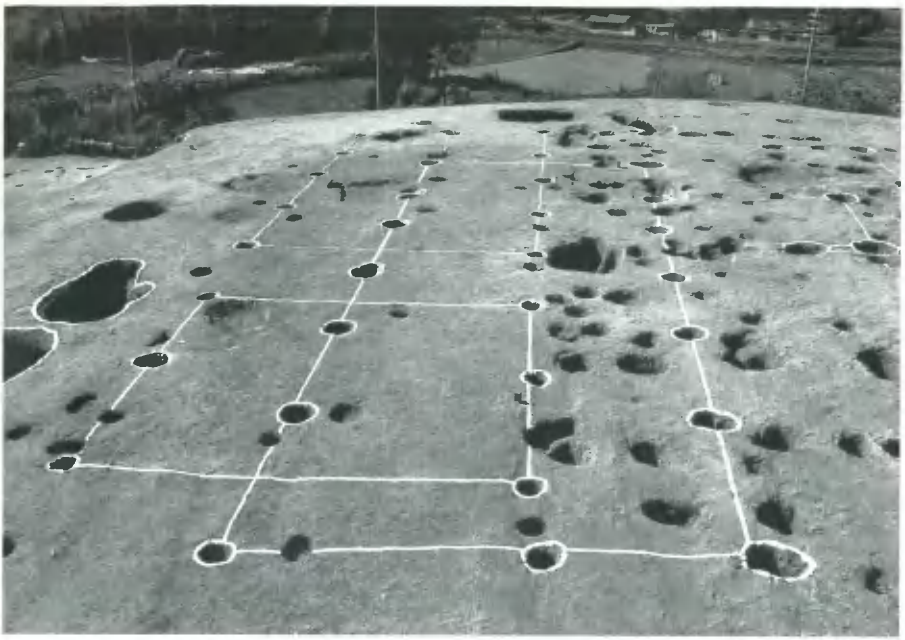
1．黒土中世墓出土銭貨



2．黒土中世墓出土鉄器

1．茂平城遠景（南西から）

2．郭1建物6・10（西から）

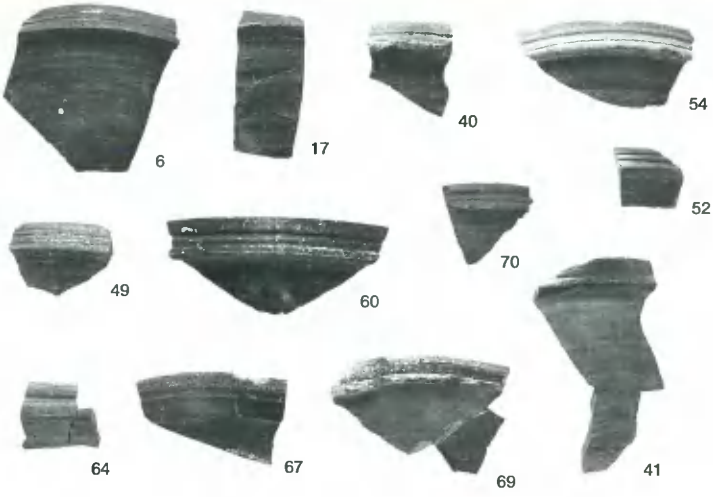


1．郭1建物5・7・9（東から）

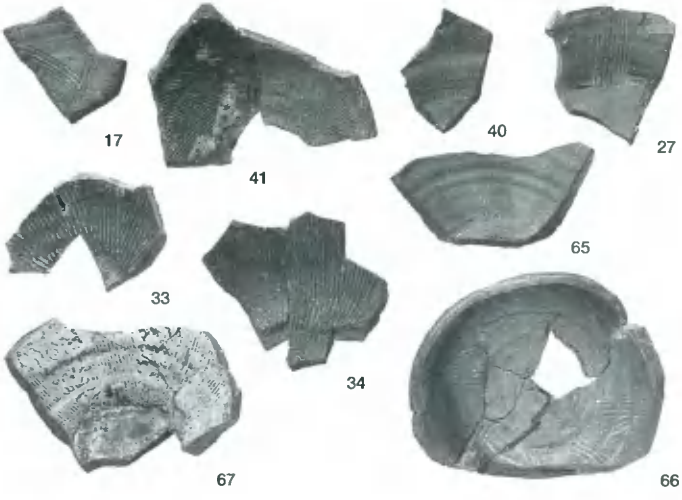
2．郭1土壙4・5・6（北から）

1．郭２全景（西から）

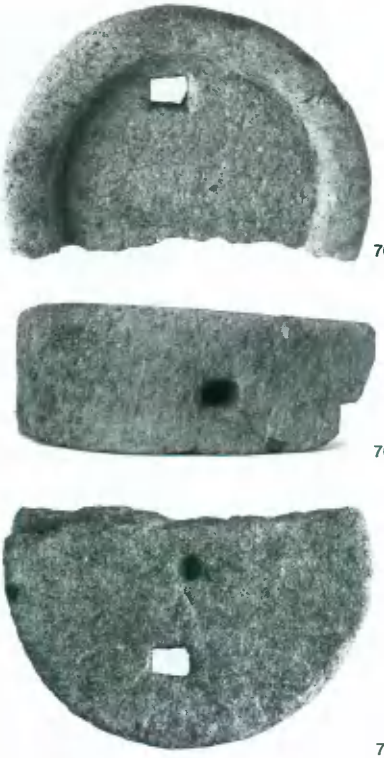
2．郭３中心部分（北から）



1．茂平城出土備前焼鉢外面

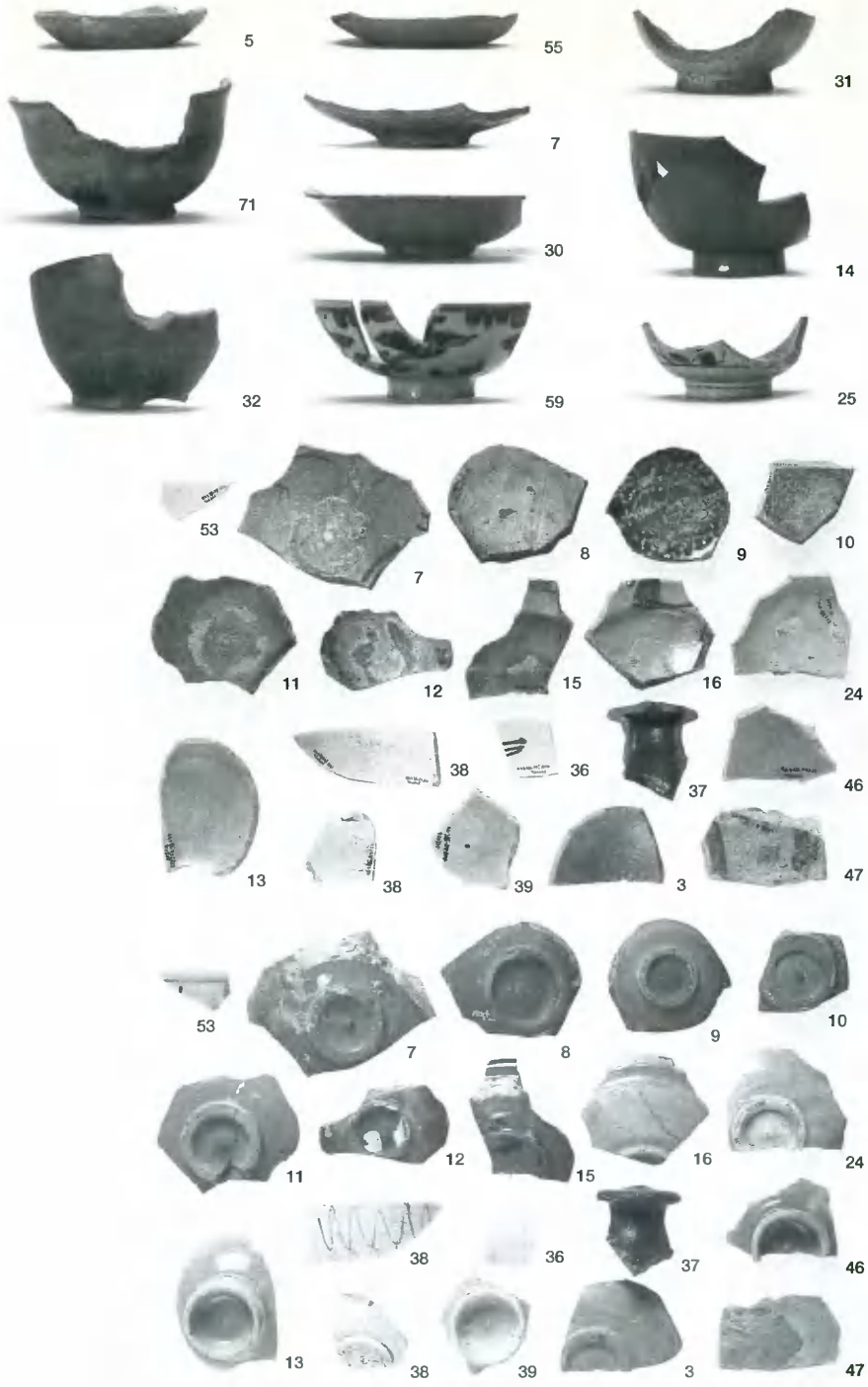


2．茂平城出土備前焼鉢内面



1．茂平城出土石臼

2．茂平城出土鉄器


5
55
31
71
7
30
14
32
59
25
53
7
8
9
10
11
12
15
16
24
38
36
37
46
13
38
39
3
47
53
7
8
9
10
11
12
15
16
24
38
36
37
46
13
38
39
3
47

1．茂平城出土陶磁器類

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告111

西大沢古墳群
畑ノ平古墳群
虫尾遺跡
黒土中世墓
茂平古墓
茂平城

新勝央中核工業団地
建設に伴う発掘調査

1996年3月20日　印刷
1996年3月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3
発　行　岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6
印　刷　西尾総合印刷株式会社